

栃木県埋蔵文化財調査報告第 378 集

岩舟台遺跡

—快適で安全な道づくり事業費（補助）一般国道 294 号湯津上南工区に伴う発掘調査—

2016. 3

栃木県教育委員会
公益財団法人とちぎ未来づくり財団

いわ ふね だい い せき
岩 舟 台 遺 跡

—快適で安全な道づくり事業費（補助）一般国道 294 号湯津上南工区に伴う発掘調査—

2016. 3

栃 木 県 教 育 委 員 会
公益財団法人とちぎ未来づくり財団



遺跡遠景 那珂川・八溝山地を臨む（南西上空）



遺跡遠景 遺跡東側段丘崖を臨む（北東上空）



出土遺物 集合写真（加曾利E式前半）



出土遺物 集合写真

序

岩舟台遺跡は、栃木県の北部、大田原市に位置しています。市の中央を南北に流れる那珂川流域には、数多くの集落跡や古墳群が営まれてきました。岩舟台遺跡は、その中流域にあつて、縄文時代の拠点集落跡、古墳群として、古くから知られています。

この度、一般国道294号湯津上南工区の改良工事に先立ち、路線内に所在する遺跡の取扱いについて、関係機関と協議の上、記録保存を目的とした発掘調査を行いました。

発掘調査では、縄文時代の住居跡や袋状土坑などの遺構、古墳、土器、石器、鉄製品などの多くの遺物が確認されました。これらは、縄文時代の拠点集落と考えられてきた岩舟台遺跡の性格を考える上でも、上・下侍塚古墳や那須国造碑を有する本遺跡周辺の様相の一端を明らかにする上でも、貴重な成果といえるでしょう。

本報告書は、岩舟台遺跡の発掘調査成果をまとめたものです。本書が県民の皆様にとって郷土の歴史を理解する一助になるとともに、各方面において広く御活用いただければ幸いです。

最後になりましたが、発掘調査から報告書作成に至るまで、多大なる御協力をいただきました栃木県県土整備部、大田原市教育委員会をはじめとする関係機関、並びに関係各位に対しまして、厚くお礼申し上げます。

平成28年3月

栃木県教育委員会

教育長 古澤 利通

例 言

- 1 本書は、栃木県大田原市湯津上地内に所在する岩舟台遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査は、平成26年度栃木県県土整備部道路整備課事業のうち、快適で安全な道づくり事業費（補助）一般国道294号湯津上南工区に伴う発掘調査に伴う記録調査である。
- 3 調査は、栃木県より公益財団法人とちぎ未来づくり財団へ業務委託され、公益財団法人とちぎ未来づくり財団埋蔵文化財センターが、栃木県教育委員会事務局文化財課の指導のもと、実施したものである。
- 4 本遺跡の現地調査及び整理報告作業期間は以下の通りである。

平成26年度 発掘調査（発掘）

期 間 平成26（2014）年8月1日～平成26（2014）年11月30日

担当者 調査部調査課課長 芹澤清八

調査部整理課係長 篠原浩恵

調査部調査課嘱託調査員 齊藤達也

平成27年度 発掘調査（整理・報告）

期 間 平成27年（2015）年6月1日～平成27（2015）年3月30日

担当者 調査部調査課副主幹 篠原浩恵

- 5 本書の執筆・報告書作成は篠原浩恵が行った。
- 6 岩舟台遺跡の調査にあたり、以下の事業を委託した。
基準点測量及び基準杭設定・航空写真撮影：中央航業株式会社 火山灰同定・土器内土壌分析：株式会社火山灰考古学研究所 遺構堆積土壌分析・岩石肉眼鑑定：バリノ・ソーウェイ株式会社 3D遺構実測図・出土遺物実測用写真撮影及び展開図・実測図作成：株式会社シン技術コンサル 石器実測：株式会社アルカ 縄文土器集合写真・展開写真・単体写真、石器写真：小川忠博
委託した出土遺物の詳細は以下のとおりである。

縄文土器展開図・実測図・・・第18図-1・2、第28図-1、第33図-1・3・5・6、第38図-1、第61図-13、第74図-1・2、第110図-1・2

石器実測・・・第23図-35、第73図-30・31、第60図-12、第194図-1～7

展開写真・単体写真・石器写真・・・巻頭図版二・図版一七～二二・二八

- 7 発掘調査における遺構の写真撮影は担当者が行った。なお、遺構によっては3D遺構図作成に伴う遺構写真を図版とした。
- 8 金属製品の保存処理・X線撮影は埋蔵文化財センター調査部資料普及課副主幹塚哲久が行った。
- 9 発掘調査・報告書作成にあたっては、次の方々から御指導・御協力を賜った。
栃木県県土整備部 栃木県教育委員会事務局文化財課 大田原市教育委員会 大田原市立湯津上小学校 大田原市生活環境課 栃木県立なす風土記の丘資料館小川館・同ボランティア「なす香」 大田原市立郷土資料館・なす風土記の丘資料館湯津上館 松守会（大田原市湯津上地区）
- 10 発掘調査の参加者は、次の通りである。
青木勝一・阿久津妙子・天羽國廣・宇塚悦美・宇塚ヒサ・小川征男・加藤清・小林正三・佐藤強・佐藤吉男・塩沢寿男・鈴木博・住谷昭・高久昌彌・長谷川将夫・吉葉博・池沢健・北條光子・松本一夫・川原稔由・黒川周平・島田功一・長島詮・西村順夫・小森英二

11 整理・報告書作成作業の参加者は次の通りである。

和田恵美・松本美紗子・尾花洋子・大宮真理子・熊谷早苗・沖田有孝・赤羽根潤子

図版のデータ化 沖田有孝・松本美紗子

12 本遺跡の調査概要は、埋蔵文化財センター年報・栃木県埋蔵文化財保護行政年報で報告されているが、本書をもって正式報告とする。

13 本遺跡の出土遺物・図面写真等資料等については、栃木県が保有し、栃木県埋蔵文化財センターに保管、公益財団法人とちぎ未来づくり財団埋蔵文化財センターが管理している。

凡 例

1 遺跡

(1) 遺跡の略号は OO-IW (OOTawarashi-IWahunedai) である。

2 遺構

(1) 遺構の略号は、奈良国立文化財研究所が用いる SA (塀・欄別)・SB (建物)・SC (回廊)・SD (溝)・SE (井戸)・SF (道路)・SI (住居)・SK (土坑)・SZ (古墳) に準拠する。また、自然地形については事実記載の便宜上「S」を伏して記述した

(2) 遺構図の縮尺は原則として 1/80 を用いる。これ以外の縮尺を用いる場合は挿図中にスケールを示す。

(3) セクション図の「L.H.」は線上が標高を示す。

(4) 方位は国土方眼座標に拠っている。

(5) 土層堆積図の番号は堆積の順序を示すものではない。

(6) 袋状土坑の点線の示すものは以下のとおりである。

----- 現状の挟り込み部 ----- 現状の最大径（開口部と一致する場合は実線）

3 遺物

(1) 実測図の縮尺は原則として 1/4 を用い、これ以外の縮尺を用いる場合は挿図中にスケールを示す。

(2) 挿図中の遺物番号は、遺構毎の出土番号及び遺物観察表並びに写真図版に対応する。

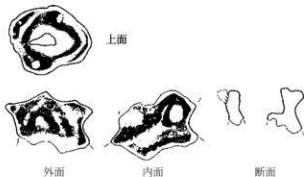
(3) 遺構間で遺物が接合した場合は、時期が新しい遺構もしくは近接する遺構に記載した。

(4) 縄文土器の断面図に網掛けしたものは、胎土中に繊維を含む。

(5) 縄文土器実測図のスクリーントーンは以下を示す。



(6) 縄文土器実測図・拓影図で内外面を示したものは、左側に外面、右側に内面を表示した。



- (7) 石器・礫の左右面は任意であり、観察表中の表面は左面、裏面は右面を指すが、使用状況を示すものではない。
- (8) 図版・観察表及び本文の番号は一致する。
- (9) 事実記載及び観察表中の（ ）付き数値は残存値、[] 付き数値は推定値を示したものである。
- 00 遺構・遺物の縮尺は不統一である。

目次

序	
例言	i
凡例	ii
目次	iv
第1章 調査にいたる経緯と経過	1
第1節 調査の経緯	1
第2節 調査の経過	2
第3節 調査の方法	4
第2章 遺跡の環境	6
第1節 地理的環境	6
第2節 歴史的環境	9
第3節 これまでの調査	15
第3章 確認された遺構と遺物	17
第1節 調査の概要	17
1. 基本土層	17
2. 調査の概要	20
第2節 住居跡	25
1. 調査の概要	25
2. 住居跡	26
第3節 袋状土坑	44
1. 調査の概要	44
2. 袋状土坑	44
第4節 土坑	105
1. 調査の概要	105
2. 土坑	105
第5節 ビット	139
1. 調査の概要	139
2. ビット	140
第6節 埋設土器	151
1. 調査の概要	151
2. 埋設土器	151

第7節	溝状遺構	153
1.	調査の概要	153
2.	溝状遺構	155
第8節	古墳	161
1.	調査の概要	161
2.	古墳	162
第9節	性格不明遺構・自然地形	194
1.	調査の概要	194
2.	性格不明遺構	195
第10節	遺構外出土遺物	196
1.	調査の概要	196
2.	縄文時代	196
(1)	縄文土器	196
(2)	土製品	212
(3)	石器・礫	213
3.	古墳時代以降	220
第4章	湯津上小学校校地内確認調査	259
第1節	調査の概要	259
第2節	トレンチ	260
第5章	まとめ	262
第1節	調査の概要	262
1.	調査の概要	262
第2節	縄文時代	262
(1)	遺物	262
(2)	遺構	279
(3)	まとめ	281
第3節	古墳時代	283
1.	まとめ	283
附章	自然科学分析	287
	平成26年度 岩舟台遺跡発掘調査に係る自然科学分析業務	287
	岩舟台遺跡の自然科学分析	310
	栃木県大田原市岩舟台遺跡出土石器・礫の岩石肉眼鑑定	327

挿図目次

第1図	岩舟台遺跡位置図	1	第50図	第55・260・295号土坑実測図	67
第2図	岩舟台遺跡周辺地形図・調査区位置図	3	第51図	第55号土坑出土遺物実測図	67
第3図	栃木県地形区分図	7	第52図	第63・294号土坑実測図	68
第4図	周辺地形区分図	8	第53図	第63号土坑出土遺物実測図	69
第5図	周辺の遺跡分布図(旧石器時代～弥生時代)	10	第54図	第71号土坑実測図	69
第6図	周辺の遺跡分布図(古墳時代～古代)	11	第55図	第71号土坑出土遺物実測図	70
第7図	岩舟台遺跡調査区位置図	15	第56図	第73号土坑実測図	71
第8図	岩舟台遺跡基本土層	17	第57図	第73号土坑出土遺物実測図(1)	73
第9図	B区基本土層	18	第58図	第73号土坑出土遺物実測図(2)	74
第10図	C区基本土層	19	第59図	第74・75号土坑実測図	75
第11図	岩舟台遺跡グリッド配置図・A区全体図	22	第60図	第74号土坑出土遺物実測図	76
第12図	B区・C区全体図	23	第61図	第75号土坑出土遺物実測図(1)	78
第13図	第57号住居跡実測図	27	第62図	第75号土坑出土遺物実測図(2)	79
第14図	第85号住居跡周辺実測図	29	第63図	第75号土坑出土遺物実測図(3)	80
第15図	第85号住居跡出土遺物実測図	30	第64図	第80号土坑実測図	81
第16図	第111・154号住居跡・第232号ピット実測図	31	第65図	第80号土坑出土遺物実測図	82
第17図	第111号住居跡石囲炉実測図・第111・154号住居跡遺物出土状況図	32	第66図	第82号土坑出土遺物実測図	83
第18図	第111号住居跡出土遺物実測図(1)	34	第67図	第82号土坑実測図	83
第19図	第111号住居跡出土遺物実測図(2)	35	第68図	第99号土坑実測図	84
第20図	第111号住居跡出土遺物実測図(3)	36	第69図	第99号土坑出土遺物実測図	84
第21図	第154号住居跡出土遺物実測図(1)	38	第70図	第103・106・156・157・227・286号土坑実測図	86
第22図	第154号住居跡出土遺物実測図(2)	39	第71図	第103号土坑出土遺物実測図	87
第23図	第154号住居跡出土遺物実測図(3)	40	第72図	第105号土坑出土遺物実測図	87
第24図	第180号遺構周辺実測図	41	第73図	第105号土坑実測図	87
第25図	第281号遺構出土遺物実測図	43	第74図	第106号土坑出土遺物実測図(1)	89
第26図	第281号遺構周辺実測図	43	第75図	第106号土坑出土遺物実測図(2)	90
第27図	第4号土坑実測図	45	第76図	第108号土坑実測図	91
第28図	第4号土坑出土遺物実測図(1)	47	第77図	第108号土坑出土遺物実測図	91
第29図	第4号土坑出土遺物実測図(2)	48	第78図	第121号土坑実測図	92
第30図	第4号土坑出土遺物実測図(3)	49	第79図	第121号土坑出土遺物実測図	92
第31図	第5・6・7号土坑実測図	51	第80図	第123号土坑出土遺物実測図	93
第32図	第5号土坑出土遺物実測図	52	第81図	第123・19・23・101・102号土坑・第89号ピット実測図	93
第33図	第6号土坑出土遺物実測図	53	第82図	第124号土坑・第145号ピット実測図	94
第34図	第8号土坑実測図	55	第83図	第124号土坑出土遺物実測図	95
第35図	第8号土坑出土遺物実測図(1)	56	第84図	第125号土坑実測図	96
第36図	第8号土坑出土遺物実測図(2)	57	第85図	第148・149号土坑実測図	96
第37図	第16号土坑実測図	58	第86図	第148号土坑出土遺物実測図	97
第38図	第16号土坑出土遺物実測図(1)	59	第87図	第151・166号土坑実測図	98
第39図	第16号土坑出土遺物実測図(2)	60	第88図	第151号土坑出土遺物実測図	98
第40図	第17号土坑出土遺物実測図	60	第89図	第153・252号土坑実測図	99
第41図	第17号土坑実測図	61	第90図	第153号土坑出土遺物実測図	100
第42図	第20号土坑実測図	61	第91図	第156号土坑出土遺物実測図	101
第43図	第20号土坑出土遺物実測図	62	第92図	第166号土坑出土遺物実測図	101
第44図	第45号土坑・第255・256号ピット実測図	63	第93図	第178号土坑実測図	101
第45図	第45号土坑出土遺物実測図	64	第94図	第178号土坑出土遺物実測図	102
第46図	第50・274・297号土坑実測図	65	第95図	第181号土坑実測図	102
第47図	第50号土坑出土遺物実測図	65	第96図	第181号土坑出土遺物実測図	103
第48図	第53号土坑実測図	66	第97図	第294号土坑出土遺物実測図	104
第49図	第53号土坑出土遺物実測図	66	第98図	第18号土坑実測図	106
			第99図	第18・19・23・36号土坑出土遺物実測図	107
			第100図	第32・33号土坑実測図	108

第101図	第36号土坑実測図	109	第147図	第247・248・249号ピット実測図	147
第102図	第47号土坑実測図	109	第148図	第253・254号ピット実測図	148
第103図	第47・51・52号土坑出土遺物実測図	111	第149図	第258・261号ピット実測図	149
第104図	第51・272号土坑実測図	112	第150図	第163号埋設土器出土遺物実測図	151
第105図	第52号土坑実測図	112	第151図	第179号埋設土器実測図	152
第106図	第61・275号土坑実測図	113	第152図	第179号埋設土器出土遺物実測図	153
第107図	第61・270・271号土坑実測図	113	第153図	第1号溝状遺構実測図	154
第108図	第87・173号土坑・第169・170・171・172号ピット実測図	114	第154図	第1号溝状遺構出土遺物実測図	155
第109図	第96号土坑実測図	115	第155図	第37号溝状遺構実測図	156
第110図	第62・87・96・100・110号土坑出土遺物実測図	115	第156図	第37号溝状遺構出土遺物実測図	157
第111図	第100号土坑実測図	116	第157図	第49号溝状遺構・第273号土坑実測図	158
第112図	第110号土坑実測図	117	第158図	第49号溝状遺構出土遺物実測図	159
第113図	第112・238・290号土坑・第164・236・289・291号ピット・第163号埋設土器実測図	118	第159図	第64号溝状遺構実測図	159
第114図	第128・129号土坑実測図	119	第160図	第83号溝状遺構実測図	160
第115図	第112・128号土坑出土遺物実測図	119	第161図	第83号溝状遺構出土遺物実測図	161
第116図	第131号土坑実測図	120	第162図	第3号古墳・第183号土坑実測図	163
第117図	第133号土坑実測図	120	第163図	第3号古墳出土遺物実測図(1)	164
第118図	第135号土坑実測図	121	第164図	第3号古墳出土遺物実測図(2)	165
第119図	第137号土坑実測図	121	第165図	第26号古墳実測図	168
第120図	第133・135・139号土坑出土遺物実測図	122	第166図	第26号古墳埋葬施設S-81実測図	170
第121図	第152号土坑実測図	124	第167図	第26号古墳出土遺物実測図(1)	172
第122図	第140・152・159号土坑出土遺物実測図	125	第168図	第26号古墳出土遺物実測図(2)	173
第123図	第157号土坑実測図	126	第169図	第30号古墳実測図	175
第124図	第160号土坑実測図	126	第170図	第30号古墳出土遺物実測図	177
第125図	第160号土坑出土遺物実測図	127	第171図	第31号古墳実測図	179
第126図	第161号土坑実測図	128	第172図	第31号古墳埋葬施設S-35実測図	180
第127図	第162号土坑実測図	129	第173図	第31号古墳埋葬施設S-35棺体想定図・遺物出土状況図	183
第128図	第161・162・173号土坑出土遺物実測図	130	第174図	第31号古墳埋葬施設S-95実測図	185
第129図	第183号土坑出土遺物実測図	131	第175図	第31号古墳出土遺物実測図(1)	187
第130図	第185号土坑実測図	131	第176図	第31号古墳出土遺物実測図(2)	188
第131図	第186・187号土坑・第194・195号ピット実測図	132	第177図	第41号古墳実測図	190
第132図	第213号土坑実測図	132	第178図	第41号古墳出土遺物実測図(1)	192
第133図	第214・225・230号土坑実測図	133	第179図	第41号古墳出土遺物実測図(2)	193
第134図	第237・288号土坑実測図	134	第180図	第184号土坑出土遺物実測図	194
第135図	第238号土坑出土遺物実測図	134	第181図	第184号土坑実測図	194
第136図	第250・251号土坑実測図	134	第182図	第136号性格不明遺構周辺実測図	195
第137図	第259号土坑実測図	135	第183図	第136号性格不明遺構出土遺物実測図	195
第138図	第285号土坑実測図	136	第184図	遺構外出土遺物実測図(1)	198
第139図	第287号土坑実測図	137	第185図	遺構外出土遺物実測図(2)	199
第140図	第287号土坑出土遺物実測図	137	第186図	遺構外出土遺物実測図(3)	202
第141図	第292号土坑実測図	138	第187図	遺構外出土遺物実測図(4)	203
第142図	第296号土坑実測図	139	第188図	遺構外出土遺物実測図(5)	204
第143図	第14・29号ピット実測図	140	第189図	遺構外出土遺物実測図(6)	205
第144図	第79・164・170号ピット出土遺物実測図	142	第190図	遺構外出土遺物実測図(7)	208
第145図	第196号ピット実測図	145	第191図	遺構外出土遺物実測図(8)	209
第146図	第215・219・220・221号ピット実測図	146	第192図	遺構外出土遺物実測図(9)	212
			第193図	遺構外出土遺物実測図(10)	213
			第194図	遺構外出土遺物実測図(11)	214
			第195図	遺構外出土遺物実測図(12)	215
			第196図	遺構外出土遺物実測図(13)	216
			第197図	遺構外出土遺物実測図(14)	217
			第198図	遺構外出土遺物実測図(15)	218
			第199図	遺構外出土遺物実測図(16)	219
			第200図	遺構外出土遺物実測図(17)	221

第201図	遺構外出土遺物実測図(18)	223
第202図	海津小学校校内トレンチ配置図	259
第203図	第1号トレンチ・第2号トレンチ実測図・ 第2号トレンチ出土遺物実測図	260

第204図	岩舟台遺跡推定遺跡範囲図	283
第205図	S-81土層・埋葬部構成図	284
第206図	S-35土層構成図	285

表目次

表1	周辺遺跡一覧表(旧石器時代～弥生時代)	12
表2	周辺遺跡一覧表(古墳時代～古代)	13
表3	岩舟台遺跡遺構一覧表	21
表4	遺構外出土土製門盤観察表	212
表5	遺構外出土剥片石器観察表	224
表6	遺構外出土剥片計測表	224
表7	遺構外出土打製石斧観察表	225
表8	遺構外出土石皿観察表	225
表9	遺構外出土礫石器観察表	227
表10	遺構外出土石鏃観察表	229
表11	遺構外出土砥石観察表	229
表12	遺構外出土石棒観察表	229
表13	遺構外出土その他の小礫観察表	230
表14	遺構外出土礫観察表	230
表15	遺構外出土土師器・粗製土器観察表	231
表16	遺構外出土埴輪観察表	231
表17	遺構外出土遺物出土敷一覧表	232
表18	第85号住居跡石器・礫観察表	232
表19	第111号住居跡石器・礫観察表	233
表20	第111号住居跡石圍が石器・礫観察表	233
表21	第154号住居跡石器・礫観察表	234
表22	第180号遺構石器・礫観察表	235
表23	第4号土坑石器・礫観察表	235
表24	第5号土坑石器・礫観察表	237
表25	第6号土坑石器・礫観察表	237
表26	第7号土坑石器・礫観察表	237
表27	第8号土坑石器・礫観察表	238
表28	第16号土坑石器・礫観察表	239
表29	第17号土坑石器・礫観察表	239
表30	第20号土坑石器・礫観察表	240
表31	第45号土坑石器・礫観察表	240
表32	第50号土坑石器・礫観察表	240
表33	第53号土坑石器・礫観察表	240
表34	第55号土坑石器・礫観察表	240
表35	第63号土坑石器・礫観察表	241
表36	第71号土坑石器・礫観察表	241
表37	第73号土坑石器・礫観察表	241
表38	第74号土坑石器・礫観察表	242
表39	第75号土坑石器・礫観察表	243
表40	第80号土坑石器・礫観察表	244
表41	第82号土坑石器・礫観察表	244
表42	第99号土坑石器・礫観察表	244
表43	第105号土坑石器・礫観察表	244
表44	第106号土坑石器・礫観察表	244
表45	第108号土坑石器・礫観察表	245
表46	第121号土坑石器・礫観察表	245
表47	第123号土坑石器・礫観察表	245
表48	第124号土坑石器・礫観察表	245
表49	第148号土坑石器・礫観察表	246

表50	第151号土坑石器・礫観察表	246
表51	第153号土坑石器・礫観察表	246
表52	第178号土坑石器・礫観察表	247
表53	第181号土坑石器・礫観察表	247
表54	第286号土坑石器・礫観察表	247
表55	第294号土坑石器・礫観察表	247
表56	第18号土坑石器・礫観察表	247
表57	第19号土坑石器・礫観察表	247
表58	第23号土坑石器・礫観察表	247
表59	第32号土坑石器・礫観察表	248
表60	第33号土坑石器・礫観察表	248
表61	第36号土坑石器・礫観察表	248
表62	第47号土坑石器・礫観察表	248
表63	第51号土坑石器・礫観察表	248
表64	第52号土坑石器・礫観察表	248
表65	第87号土坑石器・礫観察表	248
表66	第100号土坑石器・礫観察表	249
表67	第110号土坑石器・礫観察表	249
表68	第112号土坑石器・礫観察表	249
表69	第128号土坑石器・礫観察表	249
表70	第133号土坑石器・礫観察表	249
表71	第135号土坑石器・礫観察表	250
表72	第138号土坑石器・礫観察表	250
表73	第140号土坑石器・礫観察表	250
表74	第152号土坑石器・礫観察表	250
表75	第159号土坑石器・礫観察表	250
表76	第160号土坑石器・礫観察表	251
表77	第161号土坑石器・礫観察表	251
表78	第162号土坑石器・礫観察表	251
表79	第173号土坑石器・礫観察表	251
表80	第183号土坑石器・礫観察表	251
表81	第185号土坑石器・礫観察表	251
表82	第78号ビット石器・礫観察表	251
表83	第79号ビット石器・礫観察表	251
表84	第89号ビット石器・礫観察表	252
表85	第94号ビット石器・礫観察表	252
表86	第164号ビット石器・礫観察表	252
表87	第170号ビット石器・礫観察表	252
表88	第172号ビット石器・礫観察表	252
表89	第163号埋設土器石器・礫観察表	252
表90	第1号溝状遺構石器・礫観察表	253
表91	第37号溝状遺構石器・礫観察表	253
表92	第49号溝状遺構石器・礫観察表	253
表93	第64号溝状遺構石器・礫観察表	253
表94	第83号溝状遺構石器・礫観察表	253
表95	第3号古墳石器・礫観察表	254
表96	第26号古墳石器・礫観察表	255
表97	第30号古墳石器・礫観察表	256
表98	第31号古墳石器・礫観察表	256

表 99	第 41 号古墳石器・礫観察表 ……………257	表 103	第 31 号古墳埋葬施設 S-35 鉄鏡計測表 ……258
表 100	第 184 号土坑石器・礫観察表 ……………257	表 104	湯津上小学校校内トレンチ石器・礫観察表 ……258
表 101	第 30 号古墳出土遺物観察表 ……………257	表 105	岩舟台遺跡土坑一覽表 ……………280
表 102	第 30 号古墳埋葬施設 S-21 鉄鏡計測表 ……257		

図版目次

巻頭図版一	遺跡遠景 遺跡遠景 那珂川・八溝山地を臨む (南西上空)		
巻頭図版二	遺物(縄文時代) 出土遺物 集合写真(加曽利 E 式前半) 出土遺物 集合写真	図版六	SK-20 全景(南東から) SK-50 全景(南東から) 遺構 SK-71 全景(西から) SK-71 遺物出土状況(南東から) SK-73・185 全景(東から) SK-73 遺物出土状況(西から) SK-74・75 全景(東から) SK-74・75 遺物出土状況(北西から) SK-74 遺物出土状況(南から) SK-75 土層断面(南東から)
図版一	遺構 遺跡遠景 湯津上小学校・遺跡推定範囲を 臨む(南東上空) 調査区全景(北上空から)	図版七	遺構 SK-80 遺物出土状況(東から) SK-82 全景・S-179 確認状況(西から) SK-99・133 全景(東から) SK-105 土層断面(西から) SK-103・106・156・227・286・SD-64 全景(北西から) SK-106 遺物出土状況(南東から) SK-121 挟り込み部(東から) SK-151 全景(南西から)
図版二	遺構 A 区完掘(西上空から) B 区全景(西上空から) C 区全景(西上空から)	図版八	遺構 SK-153 全景(北西から) SK-151 土層断面(西から) SK-153 土層断面(北から) SK-181・183・SZ-03 近景(西から) SK-181 遺物出土状況(北から) SK-63・294 遺物出土状況(南西から) SK-294 遺物出土状況(西から) SK-63 遺物出土状況(東から)
図版三	遺構 A 区完掘(北から) B 区完掘(北から) C 区完掘(南から) SI-57 全景(南東から) SI-85 全景(南東から) SI-85 遺物出土状況(北西から) SI-111・154 土層断面(西から) SI-111 遺物出土状況(西から)	図版九	遺構 SK-18 遺物出土状況(東から) SK-18 遺物出土状況(北西から) SK-19・102 遺物出土状況(北東から) SK-36 土層断面(南から) SK-47 遺物出土状況(北東から) SK-52 全景(南から) SK-87 遺物出土状況(南東から) SK-135 全景(西から)
図版四	遺構 SI-111 石囲埴間遺物出土状況(東から) SI-111 石囲埴(西から) SI-111 石囲埴半載状況(北から) SI-111 石囲埴完掘(北西から) SK-04 全景(東から) SK-04 土層断面(西から) SK-04 遺物出土状況(北西から) SK-05 全景(南から)	図版一〇	遺構 SK-131 全景(東から) SK-131 土層断面(北西から) SK-160 全景(北から) SK-161 全景(南東から) SK-161 土層断面(南から) SK-162 全景(東から) SD-49 全景(西から) SD-49 土層断面(西から)
図版五	遺構 SK-06 全景(北から) SK-06 遺物出土状況(北から) SK-05・06 重複部遺物出土状況(北西から) SK-06 遺物出土状況(北から) SK-06・07 全景(東から) SK-08 全景(南東から) SK-08 遺物出土状況(東から) SK-08 遺物出土状況(南から)		
	遺構 SK-08 遺物出土状況(北東から) SK-17 全景(南から) SK-17 遺物出土状況(南西から) SK-16 全景(西から) SK-16 遺物出土状況(東から) SK-16 遺物出土状況(南西から)		

図版一四	遺構 SD-01 全景 (北西から) SD-64 全景 (西から) SD-83 遺物出土状況 (西から) SD-83 周辺埴輪片出土状況 (北西から) S-163 遺物出土状況 (西から) S-179 遺物出土状況 (南東から) S-179 遺物出土状況 (北西から) 調査区内にて	図版一七	遺物 SI-111 1	SI-111 12
図版一二	遺構 SZ-03 近景 (西から) SZ-03 遺物出土状況 (南東から) SZ-03 抉り込み部 (南西から) SZ-26 全景 (北西から) SZ-26 推定形状 (北西から) SZ-26 周溝北辺 (西から) SZ-26 周溝南辺 (西から) SZ-26 内 S-81 全景 (北東から)	図版一八	遺物 SK-06 1	SK-06 5
図版一三	遺構 SZ-26 内 S-81 土層断面 (東から) SZ-26 内 S-81 土層断面 (南東から) SZ-30 近景 (北西から) SZ-30 推定形状 (北西から) SZ-30 内 S-21 近景 (北西から) SZ-30 内 S-21 遺物出土状況 (南東から) SZ-31・SK-32・33 土層断面 (北から) SZ-31 土層断面 (東から)	図版一九	遺物 SK-74 10	S-179 1
図版一四	遺構 SZ-31 内 S-35 全景 (西から) SZ-31 内 S-35 東壁土層断面 (西から) SZ-31 内 S-35 東壁土層断面 (西から) SZ-31 内 S-35 西壁土層断面 (東から) SZ-31 内 S-35 棺体確認状況 (西から) SZ-31 内 S-35 棺体土層断面 (東から) SZ-31 内 S-35 棺体土層断面 (南から) SZ-31 内 S-35 鉄刀・鉄鏝出土状況 (西から)	図版二〇	遺物 SK-106 1	SK-106 2
図版一五	遺構 SZ-31 内 S-35 鉄刀・鉄鏝出土状況 (南から) SZ-31 内 S-35 鉄刀・鉄鏝出土状況 (南東から) SZ-31 内 S-35 鉄刀出土状況 (南東から) SZ-31 内 S-35 鉄鏝出土状況 (南西から) SZ-31 内 S-95 全景 (東から) SZ-31 内 S-95 土層断面 (東から) SZ-31 内 S-35・95 全景 (北西から) SZ-41 近景 (北西から)	図版二一	遺物 SI-111 2 SK-06 3 SK-08 14 SK-08 3 SK-08 1 SK-16 6 SK-47 19 SK-73 25	SI-111 3 SK-04 1 SK-08 13 SK-08 2 SK-16 1 SK-16 28 SK-63 5
図版一六	遺構 SZ-41 周溝北辺 (西から) SZ-41 周溝南辺 (西から) SK-184 土層断面 (東から) 濁津上小第1号トレンチ (西から) 濁津上小第2号トレンチ (南から) 濁津上小第2号トレンチ内 SK-1・2 (西から) 岩舟沢近景段丘崖部 (東から) 岩舟沢千勝神社付近 (南東から)	図版二二	遺物 SK-74 4 SK-75 20 SK-75 13 SK-87 1 SK-133 1 SK-181 2 SK-160 1 遺構外第5群7	SK-75 3 SK-75 19 SK-160 2 SK-87 2 SK-181 1 SK-181 3 S-163 1
		図版二三	遺物 第18号土坑出土遺物1~5 第73号土坑出土遺物26~29 遺構外出土縄文土器 第24群1 不明土製品 遺構外1~3 土製円盤 SK-71 6~8 SK-106 22 SK-152 3 遺構外1~22	
		図版二四	遺物 腕輪・環状土製品 SK-73 29 遺構外1~3 打製石斧 SI-111 41 SK-133 2 SD-49 2 遺構外1~4	SK-123 2 SK-110 1 SK-294 3 SZ-41 24
		図版二五	遺物 石皿 SI-85 11 遺構外3 遺構外5 遺構外15 遺構外4 遺構外8	SI-161 11 遺構外9 遺構外7 遺構外10 遺構外6 遺構外11
		図版二六	遺物 石皿	

	遺構外 12	遺構外 14
	遺構外 14 側面	遺構外 2
	遺構外 1	遺構外 13
	礫石器	
図版二七	遺構外 1 ~ 17	
	遺物	
	石鏟	
	遺構外 1 ~ 10	
	石棒	
	遺構外 1	遺構外 72
	遺構外 591	
図版二八	遺構外出土剥片	
	遺物	
	剥片石器・遺構外出土剥片	
	SK-73 30	遺構外 1
	SK-123 3	遺構外 2
	SK-73 31	SK-74 12
	遺構外 3	遺構外 4

	SI-154 35	遺構外 6
	遺構外 5	遺構外 7
図版二九	遺物	
	SZ-31 埋葬施設 S-35 出土鉄刀・木質部・	
	鉄鏝	
	S-35 9	S-35 13
	S-35 16	S-35 15
	S-35 17	S-35 10
	S-35 11	S-35 12
図版三〇	遺物	
	第 26 号古墳出土 鉄製品付着礫	
	遺構外出土 埴輪片	
	遺構外出土 石製紡錘車	
	遺構外出土 轆	
	遺構外出土 椀形鉄滓	
	現地調査参加者	
	整理・報告書作成作業参加者	

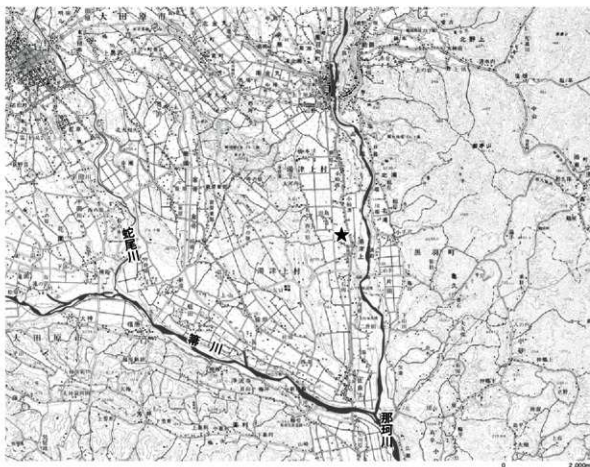
第1章 調査にいたる経緯と経過

第1節 調査の経緯

岩舟台遺跡の発掘調査は、栃木県県土整備部の行う「快適で安全な道づくり事業費（補助）一般国道294号湯津上南工区」に伴い実施した。一般国道294号は千葉県柏市から茨城県、栃木県を通り、福島県会津若松市に至り、茨城県域を中心に4車線化が図られ、整備が進んでいる。栃木県域にあっては、県東部を縦断する幹線道路であるが、敷設当初の面影を残す対面2車線の道路が主である。特に、遺跡付近にあっては、旧街道の町並みや那珂川の河岸段丘東端部という地理的制約などから、歩道等の付設のない道路の路肩を歩行者が通行する現状にあった。その安全性については、大田原市立湯津上小学校への通学路としての利用もあり、かねてより危惧されていたが、今回の道路改築事業はこれを払拭すべく計画されたものである。

道路改築事業の実施にあたっては、まず、県土整備部道路整備課（以下、道路整備課）から栃木県教育委員会事務局文化財課（以下、文化財課）宛てに、事業地内における埋蔵文化財包蔵地の所在について照会がなされた。その結果、路線内に岩舟台遺跡の一部が所在することが明らかとなり、道路整備課と文化財課と協議のうえ、道路計画と遺跡の現状を勘案し、発掘調査を行うことで調整が進められた。

現地調査については、平成26年4月1日付け道整号外「平成26年度埋蔵文化財の発掘調査について（依頼）」にて、県土整備部長から教育委員会教育長宛て、他事業地内に所在する埋蔵文化財包蔵地と併せ、発



第1図 岩舟台遺跡位置図

掘調査の依頼がなされた。これを受け、平成26年5月1日付け文財号外「平成26年度県土整備部事業に伴う埋蔵文化財発掘調査（岩舟台遺跡）の費用見積について（依頼）」にて、文化財課長から公益財団とちぎ未来づくり財団理事長宛て、発掘調査の費用見積もりの依頼がなされ、同日付けとち埋文第40号「平成26年度県土整備部事業に伴う埋蔵文化財発掘調査（岩舟台遺跡）の費用見積について（回答）」にて費用見積もりの回答を行った。次いで、平成26年5月1日付け文財号外「平成26年度県土整備部事業に伴う埋蔵文化財発掘調査（岩舟台遺跡）の委託契約の締結について（依頼）」にて、文化財課長から公益財団とちぎ未来づくり財団理事長宛て、委託契約締結の依頼がなされ、同日付けとち埋文第41号「平成26年度県土整備部事業に伴う埋蔵文化財発掘調査（岩舟台遺跡）の委託契約の締結について」にて、これを受諾、平成26年5月1日付け「埋蔵文化財発掘調査業務委託契約書」にて、栃木県知事と公益財団とちぎ未来づくり財団理事長との間で委託契約が取り交わされ、委託業務の契約が締結された。

整理作業・報告書作成作業については、平成27年6月1日付け道整号外「平成26年度埋蔵文化財の発掘調査について（依頼）」にて、県土整備部長から教育委員会教育長宛て、他事業地内に所在する埋蔵文化財包蔵地と併せ、発掘調査の依頼がなされた。これを受け、平成26年5月1日付け文財号外「平成26年度県土整備部事業に伴う埋蔵文化財発掘調査（岩舟台遺跡）の費用見積について（依頼）」にて、文化財課長から公益財団とちぎ未来づくり財団理事長宛て、発掘調査の費用見積もりが依頼がなされ、同日付けとち埋文第40号「平成26年度県土整備部事業に伴う埋蔵文化財発掘調査（岩舟台遺跡）の費用見積について（回答）」にて費用見積もりの回答を行った。次いで、平成26年5月1日付け文財号外「平成26年度県土整備部事業に伴う埋蔵文化財発掘調査（岩舟台遺跡）の委託契約の締結について（依頼）」にて、文化財課長から公益財団とちぎ未来づくり財団理事長宛て、委託契約締結の依頼がなされ、同日付けとち埋文第41号「平成26年度県土整備部事業に伴う埋蔵文化財発掘調査（岩舟台遺跡）の委託契約の締結について」にて、これを受諾、平成26年5月1日付け「埋蔵文化財発掘調査業務委託契約書」にて、栃木県知事と公益財団とちぎ未来づくり財団理事長との間で委託契約が取り交わされ、委託業務の契約が締結された。

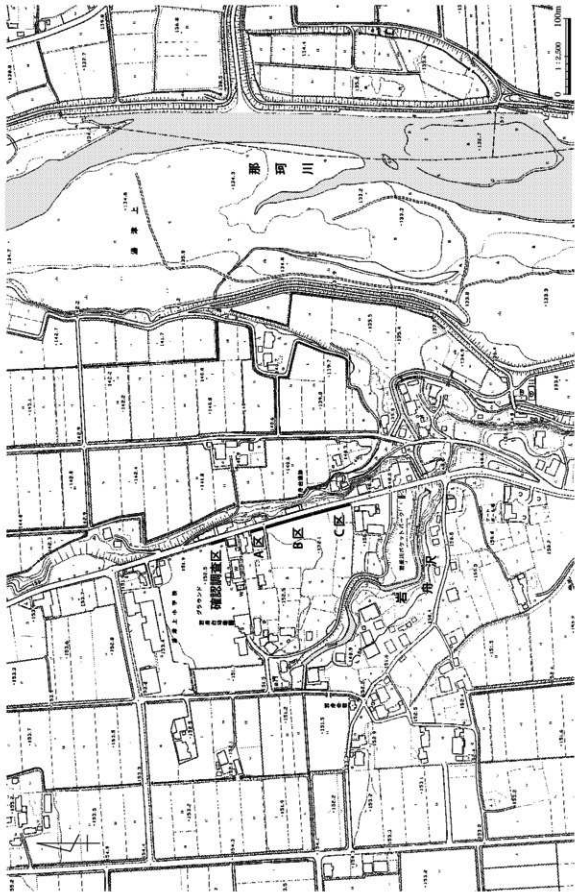
以上の契約を執行し、平成28年3月28日に本書が上梓され、岩舟台遺跡発掘調査（快適で安全な道づくり事業費（補助）一般国道294号湯津上南工区に伴う発掘調査）は終了した。なお、現地調査中の平成26年10月8日には、大田原市なでしこ幼稚園（年長組園児・教諭87名）の見学会を実施した他、近隣・遠方を問わず数多くの見学者が来訪した。また、平成26年12月8日～平成27年1月18日には栃木県立なす風土記の丘資料館小川館において、巡回展「栃木の遺跡」における速報展として出土遺物のパネル展示、平成27年2月15日に遺跡発表会、同6月14日には栃木県埋蔵文化財センターにて遺跡発表会を行った。

第2節 調査の経過

岩舟台遺跡発掘調査は、平成26年度に現地調査を行い、平成27年度に整理作業・報告書作成作業を行った。以下に調査の概略を記す。

平成26年度 現地調査

調査範囲	1, 2, 3 0㎡
調査費用	23, 164, 000円（うち消費税及び地方消費税の額1, 715, 851円）
契約期間	平成26年5月1日～平成27年3月30日の間の4ヶ月間
調査期間	平成26年8月1日～平成26年11月30日
調査の経過	平成26年6月17日 大田原土木事務所、県文化財課との現地確認



第2図 岩舟台遺跡周辺地形図・調査区位置図

平成26年8月1日～8月26日	大田原土木事務所、県文化財課との諸打ち合わせ
平成26年8月27日～9月1日	調査区内雑草除去作業
平成26年9月3日～9月4日	重機による表土除去作業
平成26年9月8日～11月28日	発掘作業員による実質的調査 遺構精査・諸記録（三次元写真図化を含む）
平成26年11月20日	空中写真撮影
平成26年11月21日	大田原市立湯津上小学校内調査区トレンチ調査
平成26年11月28日	機材・現地事務所撤収
平成26年12月2日～12月3日	調査区埋め戻し
平成26年12月9日	大田原土木事務所、県文化財課立ち会いのもと、現地引き渡し

平成27年度 整理作業・報告書作成

調査費用	29,310,000円（うち消費税及び地方消費税の額2,171,111円）
契約期間	平成27年6月1日～平成28年3月30日
調査の経過	平成27年6月1日～平成28年3月30日 栃木県埋蔵文化財センターにて実施 平成28年3月28日 栃木県埋蔵文化財調査報告第378集 『岩舟台遺跡・快適で安全な道づくり事業費（補助）一般国道294号 湯津上南工区に伴う発掘調査-』刊行

第3節 調査の方法

【現地調査】

発掘調査区内には屋敷地、生活道路、社用地、屋敷地跡、小学校用地が所在しており、工事を管轄する大田原土木事務所、県文化財課と協議の結果、これを除いた約704m²を対象とすることとなった。また、小学校用地（大田原市立湯津上小学校）内の調査範囲については、遺構・遺物の所在を明らかにすることを目的にトレンチ調査を実施することとなった。

現地事務所、掘削土置き場は、調査区内における確保が困難であることから、調査区西側に隣接する個人所有の旧梨栽培地を借地し、これらに充当した。

調査着手以前に列出した調査区内の雑草の処理方法については、岩舟台遺跡の所在する大田原市域が平成23年3月11日の東日本大震災による福島第一原子力発電所の事故により放射線量の増加がみられるため、大田原市、県文化財課と協議を行い、大田原市生活環境課の指導を仰ぐこととなった。大田原市生活環境課と諸打ち合わせ後、同課の現地確認、放射線量測定により、放射線量が規定値内であることを確認、焼却処分を行った。

遺構・遺物の調査は、以下の手順・手法で行った。

- 1 重機による表土除去後、遺構確認作業及び国家座標に基づくグリッド杭建植。

グリッドは10m四方とし、端数にあたる地区にはm単位で杭を建植。

- 2 遺構・遺物については、以下を基本に行った。

- ① 遺構の中央に土層観察用のベルト（セクションベルト）を設定、これを残し、覆土の除去。

この間に出土した遺物のについては、原位置での記録を試みたが、礫を含む遺物の出土数が極めて多いため、底面に近いレベルから出土するものを優先して原位置で記録した。

- ② 覆土除去後土層堆積状況を記録（セクション図作成）・写真撮影。
 - ③ セクションベルト除去後、出土遺物の位置・出土高さを記録（遺物出土状況図作成）。写真撮影後、遺物取り上げ。
 - ④ 遺構全体の平面図作成、レベルング（遺構内の高さを記録）及び写真撮影。
 - ⑤ 平面図・遺物出土状況図は平板測量を用いて行った。ただし、作業工程、作図担当職員・作業員の不足から、専門業者への委託による3次元計測図化による作図を中心に記録した。
 - ⑥ 調査区端部の壁面の土層観察については、観察・分層線明示後、3D実測図による作図を行った。
 - ⑦ 諸作図については、1/20の縮尺を基本に行った。
- 3 湯津上小学校内のトレンチ調査については、以下の手順で行った。
- ① 調査にあたっては、大田原市立湯津上小学校のご理解、ご協力のもと、学校運営、及び、児童の安全に特段の配慮をもって行った。
 - ② トレンチの設定については、調査区の幅が狭く、また、樹木、記念碑等の建設により、トレンチの数、位置、大きさへの制約があり、2カ所とした。
 - ③ トレンチの位置については任意、標高については事前に測量を行った。
 - ④ トレンチの掘削は重機を用い、作業員による精査作業を行った。
 - ⑤ 平面図・断面図の作成、レベルング及び写真撮影。
 - ⑥ 平面図については、任意の点から遣り方測量を用いて行った。平面図・断面図の作成については1/20の縮尺を基本に行った。
 - ⑦ 埋め戻しは重機を用い、陥没等が生じないよう、複数回に分けるとともに、転圧をかけつつ行い、段差等がないよう、手作業で地ならし等を行った。
 - ⑧ 使用重機の搬入・搬出に際しては、小学校用地内の現状復帰作業を行った。

【整理作業】

整理作業は栃木県埋蔵文化財センターで行った。

現地作成の実測図及び三次元計測図化による実測図は、事実確認後、第二原図を作成、センターにおいてコンピュータートレースで図版化し、報告書印刷時に修正・補正を行った。

出土遺物は、洗浄・注記作業後接合作業を行い、欠失部分についてはクレイテックスを充填し、復元及び補強した。器面の脆弱な土器については、可能な限り洗浄し、器表面・断面にバラロイドを塗布し補強した。バラロイドは、器面の劣化の度合いによって10～30%の濃度調整を行った。復元・補強の後、遺物実測図作成を行ったが、脆弱な土器については、器面の剥落、土器自体の破壊等、記録保存への懸念から、写真撮影による実測図の作成を委託した。図化した実測図は浄書（トレース）し、報告書印刷時にデジタルデータとして図版化した。

上記の作業に併行して、遺構・遺物の事実記載等の原稿執筆、遺物観察表等の表作成・執筆を行うとともに、遺物の写真撮影を行った。

【報告書作成作業】

報告書刊行に必要な実調査以外の原稿執筆・図版作成を行い、遺構・遺物図版、原稿等と併せ割付し、印刷・校正後、刊行となった。

本報告書に係る遺物、遺構・遺物実測図・写真、空中写真等の成果品、各種台帳の整理を行い、収蔵庫・記録保管室に収納し、岩舟台遺跡発掘調査の全ての作業を完了した。

第2章 遺跡の環境

第1節 地理的環境

【位置】

岩舟台遺跡は栃木県大田原市湯津上地内に所在する。

栃木県は関東平野の最北にあり、東は茨城県、西は群馬県、南は埼玉県、北は福島県に隣接する内陸県である。大田原市は栃木県北東部にあり、東境は茨城県と接する。県庁所在地である宇都宮市からは北東方向約33kmに位置する。平成17(2005)年に隣接する大田原市・黒羽町・湯津上村が合併し、人口7万5千を超える市となった。本遺跡は大田原市の南西部、旧湯津上村に所在する。本遺跡東側を南流する県内屈指の河川である那珂川は旧黒羽町との境となり、本遺跡南方向約5.0kmを西流し那珂川に合流する箒川は隣接する那須郡那珂川町との境となる。現在の遺跡周辺は、田・畑・特産の梨を中心とする果樹園が広がる田園地帯である。また、旧湯津上村市街地の南辺にあたり、大田原市立湯津上小学校のおかれる住宅地ともなっている。旧湯津上村と旧黒羽町を縦断する国道294号は那珂川に沿って南北に延びる関東地方と東北地方を結ぶ幹線道路であり、その交通量は少なくない。

本遺跡の原況は畑・果樹の休耕地を中心とする。

【地形】

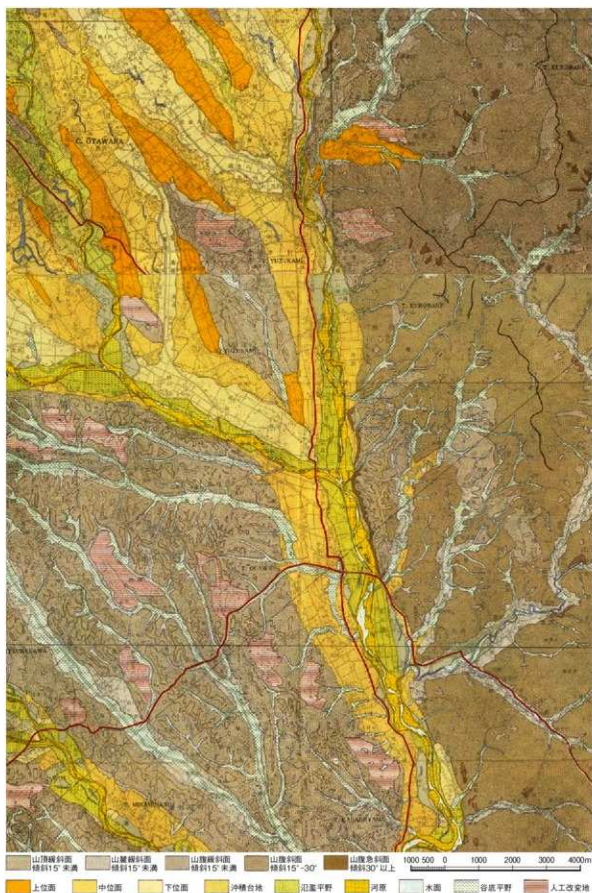
栃木県は関東平野の北端に位置する。県土を大別すると、東・西・北を囲う山塊である東部山地・西部山地と、中央部に開けた南北に長い中央部平地とからなる。東部山地はいわゆる八溝山地であり、福島県・茨城県との県境に沿って北から八溝山塊・鷲子山塊・鶏足山塊と南北に連なる。西部山地は下野山地と足尾山地からなり、福島県・群馬県との県境に沿って北から那須岳・高原山・帝釈山・男体山・足尾山と連なる。中央部平地は北から高久丘陵、那須野が原、喜連川丘陵、鬼怒川流域の中南部の台地・低地からなり、南半は関東平野の北限となる。本遺跡は中央部平地北半の那須野が原に所在する。那須野が原は那珂川と箒川に挟まれた紡錘形の複合扇状地であり、本遺跡は扇端部の湯津上台地上に位置する。

中央部平地は洪積台地とそれを開析する河川が形成する沖積台地とからなる。河川の南流に伴い、台地は概ね平坦で南北に延び、且つ、南に向かって緩やかに傾斜する。台地の縁辺部は崖線を形成するものの、台地と低地との高低差は少なく、斜面は緩やかである。本遺跡周辺の地形もこれに類するものであるが、遺跡東側を南流する那珂川によって形成された低地と河岸段丘とが那珂川に沿って南北に延び、比高10m前後の急勾配の段丘崖を形成する。今回の調査は段丘崖に沿って南北に走る国道294号の台地側の拡幅工事に起因するものであり、調査区は段丘崖端部に極めて近い位置にある。また、扇状地特有の湧水や小河川が段丘崖を割って那珂川に合流するが、本遺跡の南を区画する岩舟沢もこのような小河川であり、遺跡の西側から南側を曲流しつつ谷を深く刻み、段丘崖下を南流する滑川に合流し那珂川に注ぐ。本遺跡は、大河那珂川と小河川岩舟沢の形成する舌状台地上の南・東側に開けた緩斜面に立地するものと判断でき、今回の調査区は遺跡の東端部に相当するものと考えられる。

本調査区の表土除去前の標高は約152.1m、調査区西側の低地面の標高は約140.6m、比高約11.5mである。那珂川河原の標高は134.5m前後である。

【地質】

中央部平地は、主として台地と低地から構成される。台地は河成段丘面（古期のものから宝積寺段丘礫層・宝木段丘礫層・田原段丘礫層）と火山灰層の堆積（いわゆる関東ローム層で古期のものから宝積寺ローム・



第4図 周辺地形区分図

第2節 歴史的環境

岩舟台遺跡³¹は、縄文時代の集落跡及び岩舟台古墳群として、大田原市指定文化財に認定されている。

本遺跡周辺は、縄文時代以来、遺跡の分布が密であるとともに、各時期の主要な遺跡が分布する。縄文時代中期～後期においては、直線距離にして5km内外の間隔で分布する拠点集落の一つとして本遺跡は考えられている。古墳時代前期においては本遺跡南方約1.5kmに大形の前方後方墳である上・下侍塚古墳が築造され、中期には当該時期の特徴とされる箱式石棺が本古墳群においても確認されている。また、古代においては本遺跡南方約700mに那須国造碑が祀られている。

本節では、本調査区から主体的に確認された、縄文時代、古墳時代を中心に、本遺跡周辺の歴史の変遷を概観する。

【旧石器時代】(第5図・表1)

旧石器時代の遺跡は少ないが、琵琶池遺跡で尖頭器1点、二ツ室古墳(21)周塚調査において挿器・石核等、片野富士山遺跡(9)で尖頭器・石核・ナイフ形石器など19点、品川台遺跡(18)で尖頭器・スクレイパー、三輪仲町遺跡(64)でナイフ形石器・スクレイパー及びブロック1カ所、三輪御城跡(62)で細石器及びユニット1カ所が確認されている。また、川木谷遺跡(51)において局部磨製石斧・尖頭器・挿器な旧石器時代終末～縄文時代草創期の多くの石器が表面採取されている。

【縄文時代】(第5図・表1)

縄文時代の遺跡は数多くが確認されている。那須野が原扇状地内の遺跡については扇状部から扇端部にかけて顕著に分布するが、扇端部に位置する本遺跡もその中の一つといえる。また、中木(中木2012)によれば、扇状地内の遺跡の多くは中・後期前半、那珂川東岸の地域は各期の遺跡が分布する傾向が指摘されている。

草創期の遺跡は、中木の指摘とおり、扇状地内における確まった資料は確認されていない。那珂川東岸地域の川木谷遺跡(51)からは旧石器時代終末～縄文時代草創期石器の出土が多く確認されている。

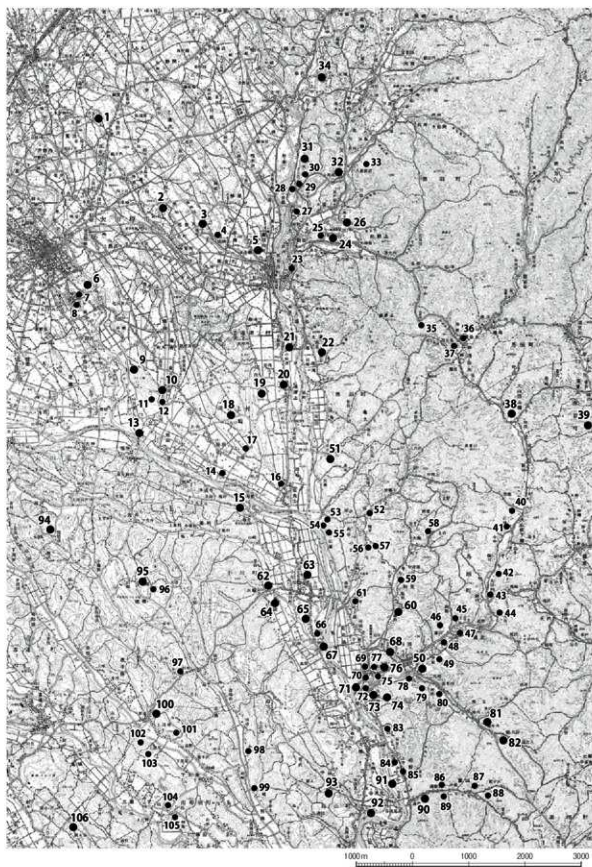
早期・前期の遺跡は巨視的にみれば、那須野が原における遺跡の確認は極めて少ない。また、那須野が原の南に位置する喜連川丘陵や八満山地中央部の前松葉川や武茂川上流域には遺跡の分布は薄く、八満山地南部の武茂川下流や富士山川流域に分布が集中する傾向にある。

早期の遺跡としては、川木谷遺跡(51)において資料の表面採集がなされている。また、野出平遺跡(60)・御守山遺跡(68)・上丸遺跡(90)からは常世式の土器片が確認されている。

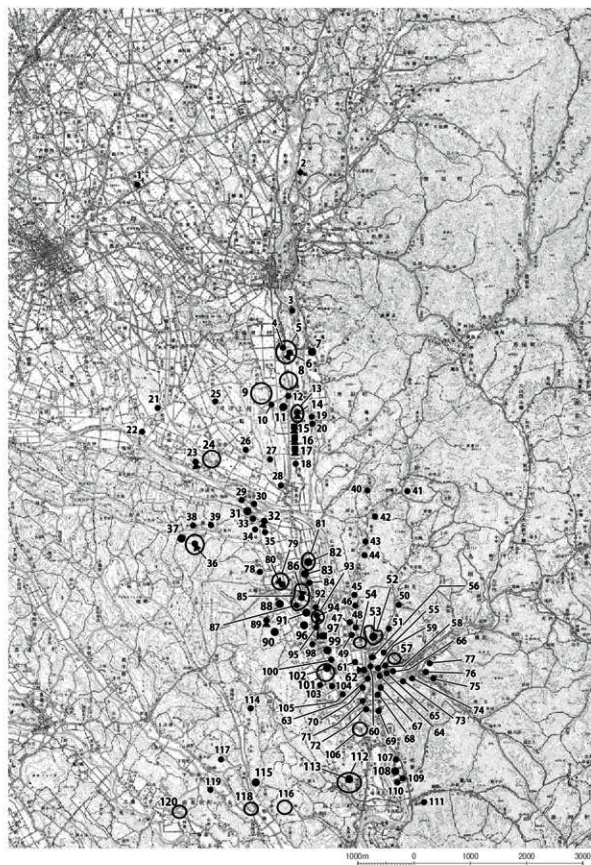
前期の遺跡としては、川木谷遺跡(51)・大内遺跡・富士山遺跡・和台A遺跡(74)などが確認されている。

中期・後期は遺跡の分布が急増し、扇状地内の縄文時代の遺跡の主体をなす。

中期の遺跡の分布は、那須野が原では扇端部である那珂川や帯川の台地に面する縁辺部や湯坂川、蛇尾川、巻川の流域、八満山地では武茂川、松葉川及びその支流に面する支谷、喜連川丘陵では江川、荒川、岩川及びその支流に面する支谷に集中する傾向にある。中期の拠点集落と考えられる長者が平遺跡(106)・頭無遺跡(2)・湯坂遺跡(3)・平林真子遺跡(6)・川西小学校遺跡(5)・片野富士山遺跡(9)・品川台遺跡(18)・岩船台遺跡(20)・不動院裏遺跡(32)・浅香内遺跡(26)・田作遺跡(38)・古館遺跡(50)・岡平遺跡(81)・桐ヶ久保遺跡(82)・滝田内遺跡(91)・浄法寺遺跡(15)・三輪仲町遺跡(64)・高畑遺跡(95)・新道平遺跡(100)・白山平遺跡(43)も同様である。扇端部等の遺跡の分布に比し、扇状部の上位段丘面である金丸原(宝積寺面に相当)、標高500m級の高倉山、御守山の山腹や喜連川丘陵の山地部には遺跡の分布は認められない。塚本(塚本1997)・中木(中木2012)によれば、湧水点や小河川に遠く水利に乏しいこと、生活に適さない急勾配地に起因するとの指摘がなされている。また、塚本(塚本1997)



第5図 周辺の遺跡分布図（旧石器時代～弥生時代）



第6図 周辺の遺跡分布図（古墳時代～古代）

は山地の遺跡の所在について確認の困難さから未確認の遺跡の可能性に言及している。

本遺跡周辺の拠点集落以外の遺跡は二つ室遺跡(21)・大林遺跡(19)が確認されている。

後期においては、中期に比べ遺構の分布は少ない。特に後期初期の遺跡は少なく、かつ、中期の遺跡と重複するものが多い。また、武茂川上流域における遺跡の確認がなくなる点留意される。中期から継続せず後期以降に展開する遺跡としては富池遺跡(1)・弾正遺跡(24)・館野御前遺跡(22)・羽黒山II遺跡(10)・東北地方の新地式が出土する深見内遺跡(71)・細見B遺跡(73)などが確認されている。

晩期においては、扇状部、八満山地、喜連川丘陵とも遺跡の分布は極めて少なく、大内遺跡・平林真子遺跡(6)・岩船台遺跡(20)・青柴田遺跡(39)などが確認されるのみである。

【弥生時代】(第5図・表1)

弥生時代の資料は極めて少ない。表面採集等で確認されている遺跡は、中期では、条痕文系の土器片が出土した古館遺跡(50)・滝田遺内跡(91)、磨消縄文の土器片の出土した三枚畑C遺跡(76)、条痕文系や磨消縄文の土器片が出土した八ヶ平遺跡などがある。後期では、岡林遺跡(13)・宮内遺跡(63)・吉田富士山遺跡(67)などがある。また、中期以降の遺跡として新宿遺跡(65)・萱野遺跡(34)・蔵王前遺跡(31)

表1 周辺遺跡一覧表(旧石器時代～弥生時代)

遺跡名	時期	遺跡名	時期
1 富池遺跡	縄文前期(阿・加)	54 長峰C遺跡	縄文前期(信・国)中期(加)
2 藤原遺跡	縄文中期(阿・加)	55 長峰B遺跡	縄文前期(国)
3 高取遺跡	縄文・阿・加	56 長峰A遺跡	縄文中期(阿)
4 白岩遺跡	縄文中期(信・阿・加)	57 尾平平遺跡	縄文前期(国)
5 川内小学校遺跡	縄文中期(加)	58 赤土遺跡	縄文前(国)中期(阿)
6 平林真子遺跡	縄文中期(加)	59 中平遺跡	縄文中期(阿)
7 平林遺跡	縄文中期(阿・加)	60 野中平遺跡	縄文中期(信・国)
8 柳瀬川遺跡	縄文中期(阿)	61 木下遺跡	縄文中期(国)
9 百首宮上土遺跡	射石器 縄文前-後期(信・阿・加・大・紀・和)	62 三輪野原遺跡	射石器 縄文
10 笹田山B遺跡	縄文中期(国)	63 万内遺跡	弥生前期(十)
11 柳山遺跡	縄文中期(阿)	64 三輪野原遺跡	縄文前-後期(信・阿・加・和・紀)
12 柳山山頂遺跡	縄文中期(阿)	65 新宿遺跡	弥生中期以降
13 岡林遺跡	縄文中期(信)後期(国)	66 重宝八幡平遺跡	縄文前期(国)
14 真丈遺跡	縄文中期(国)	67 吉田富士山遺跡	弥生後期
15 淨法寺遺跡	縄文前-後期(信・阿・加・和・紀)	68 藤ノ下遺跡	縄文中期 前期(信・国)
16 粟刈付遺跡	縄文中期(阿)	69 長沖下遺跡	縄文前期(国)
17 宇城遺跡	縄文中期(国)	70 赤土遺跡	縄文後期(国)
18 品川付遺跡	縄文中期(阿・加)	71 深見内遺跡	縄文後期
19 大林遺跡	縄文中期	72 藤沢A遺跡	縄文後期(国)
20 岩船台遺跡	縄文前-後期(阿・加・和・紀)	73 藤沢B遺跡	縄文中期(加)後期(国)
21 二つ室遺跡	射石器形式 縄文中期(加)	74 柳山B遺跡	縄文前期(大?)中期(加)
22 館野御前遺跡	縄文中期(国)	75 三枚畑遺跡	縄文前期(国)
23 大宮遺跡	縄文中期(阿)	76 三枚畑C遺跡	縄文前期(国)中期(加)弥生中期
24 弾正遺跡	縄文後期(阿・加)	77 尾神平遺跡	縄文前期(国)
25 鉢木遺跡	縄文中期(加)後期(国)	78 柳ノ下遺跡	縄文中期(加)
26 長春谷遺跡	縄文中期(阿・加)	79 押付遺跡	縄文前期(国)
27 牛尻原遺跡	縄文中期(加)	80 押野遺跡	縄文中期(加)
28 広塚遺跡	縄文中期(加)	81 岡平遺跡	縄文中期(阿・加)後期(国)
29 長井田遺跡	縄文中期(阿・加)後期(国)	82 柳ノ久保遺跡	縄文前期(国)中期(加)後期(国)
30 柳木遺跡	縄文中期(加)	83 深見遺跡	縄文前(国)中期(阿)
31 三ヶ丘遺跡	縄文中期 弥生初期	84 シラネツケ土器遺跡	縄文中期(加)
32 千巻塚新地式	縄文中期(阿・加)後期(和・紀)	85 新家集落遺跡	縄文中期(加)
33 八巻集落	縄文中期(国)	86 上平遺跡	縄文中期(加)
34 笠野遺跡	縄文中期(信)中期(加)弥生中期以降	87 岩付神社遺跡	縄文前期(国)
35 柳谷谷遺跡	縄文中期(阿・加)	88 坪内遺跡	縄文前期(国)中期(加)
36 堀江小学校	縄文中期(加)	89 高井平遺跡	縄文前期(国)
37 豊が付遺跡	縄文中期(加)	90 上土遺跡	縄文中期 縄文前期(国)
38 田付遺跡	縄文中期(阿・加)	91 尾田内遺跡	縄文中期(阿・加)後期(国)
39 吉原山遺跡	縄文後期(大)	92 八ヶ平遺跡	弥生中期
40 谷千遺跡	縄文中期(国)中期(阿・加)	93 山ノ下遺跡	縄文中期(阿・加)
41 石神遺跡	縄文前期(国)中期(加)	94 経路新地式	射石器
42 大河内遺跡	縄文中期(阿)	95 高塚遺跡	縄文中期(阿・加)後期(国)
43 新橋遺跡	縄文前(国)	96 高塚遺跡	縄文中期(加)
44 大船遺跡	縄文中期(加)	97 赤中分ノ遺跡	縄文中期(加)
45 大加久遺跡	縄文中期(加)	98 大内遺跡	縄文中期(阿・加)
46 宮加留遺跡	縄文前期(国)	99 北ノ内遺跡	縄文前期(国)
47 太田A遺跡	縄文前期(国)	100 新道平遺跡	縄文中期(阿・加)後期(国)
48 井ノ木遺跡	縄文中期(加)	101 陣屋遺跡	縄文前期(国)
49 平沼田遺跡	縄文中期(加)	102 柳野遺跡	縄文中期(阿・加)後期(国)
50 古館遺跡	縄文中期(阿・加)後期(国)弥生中期	103 菅原谷遺跡	縄文前期(国)中期(加)
51 川木井遺跡	射石器 縄文前期(早)前期(子・信・和)	104 宮ノ木遺跡	縄文中期(加)
52 蔵原遺跡	縄文前期(国)	105 川田遺跡	縄文前(阿・加)中期(阿・加)
53 新地式	縄文中期(加)	106 菅野砂平遺跡	縄文中期

射石器：射石器形式 縄文 縄文前期 弥生 弥生前期

阿：弥生1式 子：弥生2式 花：花輪式 信：信濃式 和：和式 大：大木式 加：加賀式 紀：紀伊式 国：阿武台式 加：加賀郡式

和：和名古 紀：紀伊式 加：加賀郡式 二：二軒式 十：十王村式

遺跡周辺は大形の前方後円墳の築造はみられず、帆立貝式古墳あるいは円墳であり、蛭田富士山古墳群(24)・酢原古墳群(9)・谷田古墳群(101)が築造される。また、この時期の特徴として、埋葬施設に箱式石棺が採用される点、埴輪の導入のない点があげられる。本岩船台古墳群においても大正11年の調査時に箱式石棺が確認されている。また、蛭田富士山古墳(24)にみられるように群集墳においても採用され、古墳時代終末期まで構築される。集落遺跡は、前期よりも多くが確認される。蛭田富士山古墳群内遺跡・仲ノ内遺跡(82)・三輪仲町遺跡(88)・谷田遺跡(102)・谷田柿木林遺跡などが確認されており、那珂川東岸の武茂川、久那川流域への遺跡の分布が広がっている。

中期後半から後期になると遺跡数は増加し、本遺跡周辺においても大形ではないが前方後円墳が築造され、埴輪、横穴式石室の導入がみられるようになる。横穴式石室を有する前方後円墳としては、二ツ塚塚古墳(6)・梅曾大塚古墳(32)・首長原古墳(86)・川崎古墳(62)などがある。古墳の分布の主体は武茂川・久那川の downstream にあり、北向田古墳群(54)・三枚畑古墳群(57)が位置する。那須野が原には小船渡古墳群(5)・岩船台古墳群(8)・下塚塚1号墳(14)・蛭田富士山古墳群(24)、那珂川東岸には銭室塚古墳(7)、喜連川丘陵には戸田古墳群(120)が位置する。

終末期の横穴墓は、喜連川丘陵と八満山地の久那川流域に集中する。岩谷内横穴・小志島横穴(115)・山崎横穴群(118)・中山横穴群(112)、北向田・和見横穴群(52)が位置する。中山横穴群(112)中の中山横穴墓、和見横穴墓中の唐御所横穴墓(53)は家形の玄室を持つ本県では希有な例である。集落遺跡としては、藤柄遺跡(37)・浄法寺遺跡(31)・三輪仲町遺跡(88)・神田城南遺跡(96)・谷田柿木林遺跡などが確認される。遺跡数の増加と那珂川西岸への分布がみられ、古墳同様、武茂川・久那川流域に集中する。塚本(塚本1997)は、この分布の傾向について、「そのまま古墳時代後期の遺跡の分布の実態と考えるには問題がある」とし、「遺跡悉皆調査の精度、現状での遺跡の確認のしやすさの差が、遺跡の多寡となって表れている可能性」及び「土器の出土をもつて集落遺跡と認定したが、複数軒の住居が同時存在した拠点集落なのか、土器を使う特定の機能が行われた一時的な場所なのかを区別せずに集落遺跡として扱っている」点、問題提示する。

【古代】(第6図・表2)

本遺跡周辺は、古代下野国的那須郡にあたる。本遺跡南西約5.0kmの那珂川町小川梅曾地区には那須宮衙跡(34)や寺院跡である浄法寺遺跡(31)があり、那須郡の中心地とされる。また、梅曾地区南方には延喜式内社三和神社(121)が鎮座する。本遺跡南約700mには那須国造碑(12)があり、周辺は那須郡石上郷に比定される。那須国造碑の西に位置する小松原遺跡(11)を『和名類聚抄』に記載される磐上駅家とする見解もあり、本遺跡周辺が「陸奥」への交通の要衝であったことがうかがえる。

【註】

- 註1 本遺跡の呼称については、岩船台遺跡として報告を行うが、学史的に「舟」ではなく「船」とする「岩船台遺跡」と表記がなされてきた。このため、調査に関わる事項については「舟」を用い、参考文献のあるものについては出典に従って表記する。なお、大田原市指定文化財の認定に際しては「岩船台遺跡」として登録がなされている。

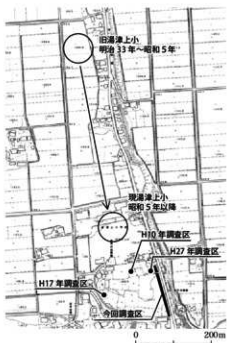
【参考文献】

- 塚原孝一 1994年『三輪仲町遺跡(本文編1)』栃木県埋蔵文化財報告第143集
 栃木県教育委員会・(財)栃木県文化振興事業団
 塚本節也 1997年『浄法寺遺跡』栃木県埋蔵文化財報告第196集 栃木県教育委員会・(財)栃木県文化振興事業団
 中木太他 2012年『片府田富士山遺跡』大田原市教育委員会

- 長谷川権 1989年『湯津上村西部(蒲川左岸)の遺跡』『那須文化研究』第3号 那須文化研究会
 1996年『湯津上村南部の遺跡』『那須文化研究』第10号 那須文化研究会
 2003年『湯津上村東部(那須川右岸)の遺跡』『那須文化研究』第17号 那須文化研究会
 湯津上村史編さん委員会 1979年『湯津上村史』 湯津上村

第3節 これまでの調査

岩舟台遺跡は古くから多くの遺物が採集され、栃木県北部をフィールドとした先人の渡辺龍瑞氏によって、「集落に好適な立地であり、縄文中期末から後期・晩期に至る大集落遺跡として、また、古墳もある重複遺跡」であり、「遺跡立地としても、遺物の点からみても、当地域の標準になる」遺跡と評され(渡辺1976)、昭和41年(1966年)湯津上村指定文化財に認定され、平成17年(2005年)大田原市との合併により大田原市指定文化財となり現在に至る。また、東京国立博物館に所蔵されている硬玉製玉斧は本遺跡付近から出土したとされる(渡辺1943)。³¹ 本遺跡の学史上の初出は、丸山瓦全氏が大正12年(1923年)発行の『考古学雑誌』第13巻第11号に記載した「下野国湯津上村発掘鹿角製鏝」とみられる。誌上において報告されたのは円墳1基についてである。当時の県道294号(現国道294号)が大正11年に改修された際に確認されたものであり、当時の湯津上小学校に出土遺物が保管されていた旨の記載があるが、発掘地の詳細は判然としな。因みに湯津



第7図 岩舟台遺跡調査区位置図

上小学校は昭和5年に現在地に移設されるが、明治33年～昭和5年までは現在地より北に位置していたものである。当時の公的施設として遺物の保管場所に選定されたものと考えられる。『考古学雑誌』の記載について、後年の検討を踏まえ概略するならば、円墳の径は二十尺(約6.1m)ほどであり、埋葬施設は箱式石棺である。箱式石棺は棺底に小砂利を敷き、その上を粘土で固められており、長谷川(長谷川1994)によれば、酢屋古墳群(第6図9)第5号墳の箱式石棺の構造と酷似する。箱式石棺の中からは瑪瑙製勾玉2点、短甲1点、袋状鉄斧2点、鉄鏝20点余、鹿角製鏝付刀1点(写真)、剣1点が出土する。鉄鏝は多くは匱に入った状態で残存する。鹿角製鏝付刀の鏝には直弧文が彫刻され朱彩が施されていたとみられる。また、布目の付着も観察されている。鉄斧は大小2点が出土し、柄の木質が残存する。これらの遺物は湯津上小学校に保管されていたが、昭和5年(1930年)の失火の際、消失した。現存するのは、なす風土記丘資料館湯津上館所蔵の鉄斧(大)であるが、木質部は失われている。なお、鹿角製鏝については、大正15年(1926年)発行『栃木縣史蹟名勝天然記念物調査報告』第1輯に写真入りで掲載されている。その後、表面採集や工事等に伴う掘削などによって得られた縄文土器・石器について、栃木県史(1976年)、湯津上村史(1979年)などに一部が紹介されている。また、近年では、瑛状耳飾り(長谷川1986)、擦切磨製石斧(上野1989)、土偶(上野・津布菜1990)、縄文土器・小型磨製石斧・石鏝・磨石・石鏝(長谷川2003)、硬玉製小玉(吉澤他2009)などの報告がなされている。

発掘調査については、今回の調査以前に、平成10年(1998年)・平成17年(2005年)に、何れも民間の宅地造成に伴う発掘調査が湯津上村教育委員会によって行われている。

平成10年の発掘調査は、約175㎡を調査し、縄文時代中期の竪穴住居跡2軒、袋状土坑5基、後期の大型石囲炉、埋葬1基、20基以上からなる土坑群、円墳1基が確認されている。土坑群は配石を伴い、墓壇とその所在の目印となる礫群と考察されている。大型の石囲炉は配石に近接して確認され、東西約1.3m・南北約1.2mである。炉周囲の礫は20～40cmほどの河原石を立て置き、炉床に隙間無く扁平の河原石を敷き詰める。円墳は径20m弱であり、墳丘は既に削平されたとみられる。埋葬施設の確認はないが、土壇或いは箱式石棺と推測されている。

平成17年の発掘調査は、約99.8㎡を調査し、縄文時代中期の竪穴住居跡1軒・土坑12基、掘立柱建物跡1棟、ピット21基が確認された。竪穴住居跡は石組炉を持ち、加曾利EⅢ～Ⅳ式の土器が出土する。土坑は後期初頭の土坑群との考察がなされている。掘立柱建物跡は古代の倉庫の可能性が指摘されている。

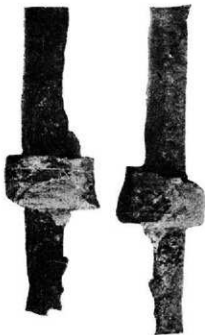
また、本調査終了直後の平成27年3月には、本調査区A区西側隣接地の宅地造成に伴う発掘調査が行われ、縄文時代の竪穴住居跡4軒・土坑39基・小穴約70基以上・古墳周溝2基分が確認されている。竪穴住居跡は後期初頭とみられる。土坑のうち15基は明瞭な袋状であり、「浄法寺タイプ」と呼称される中期中葉の土器群の出土する土坑も確認されている。また、石棒状の自然礫・人頭大の礫とともに石皿が出土し、墓壇と判断される土坑が確認されており、当該地区が食糧貯蔵から墓域へと推移したと報告されている。

【註】

註1 湯津上村誌(1979年)によれば、硬玉製玉斧(村誌では硬玉性の有孔玉斧)の出土地については正確な記録はなく、笠石神社(那須国造碑奉祀)付近、岩船台とも伝えられてきたが、「坊ノ内」付近において採集されたとする説が有力であるとの記載がある。

【参考文献】

- 上野修一 1989年 『湯津上村岩船台遺跡出土の擦切磨製石斧』
『Aesculus』No1 Aesculus 同人
- 海老原郁雄 2009年 『那須野が原 岩船台遺跡の縄文後期墓坑群』
『野州考古学論叢-中村紀男先生追悼論集-』
中村紀男先生追悼論集刊行会
- 齋藤史・高野浩之 2005年 『岩船台遺跡 第2次発掘調査報告書』
湯津上村教育委員会
- 栃木縣 1926年 『栃木縣史蹟名勝天然記念物調査報告』第1輯
- 栃木県史編さん 1976年 『栃木県史』資料編考古1 栃木県
栃木県教育委員会事務局文化財課
- 2000年 『栃木県埋蔵文化財保護行政年報22』『栃木県埋蔵文化財
調査報告第233集』 栃木県教育委員会
- 長谷川権 1986年 『展示資料紹介 珠状耳飾 岩船台遺跡出土』
『湯津上村立歴史資料館だより』第1号
湯津上村立歴史資料館
- 2003年 『湯津上村東部(那須川右岸)の遺跡』『那須文化
研究』第17号 那須文化研究会
- 丸山瓦全 1926年 『栃木県史蹟名勝天然記念物調査報告』第1輯
栃木県
- 丸山瓦全 1923年 『下野国湯津上村発掘鹿角製鈿』
『考古学雑誌』第13巻第11号 日本考古学会
- 渡辺龍雄 1979年 『湯津上村史』湯津上村史編さん委員会
- 吉澤明・渡辺邦夫・上野修一 2009年 『栃木県内遺跡採集の縄文時代の五類』『栃木県立博物館紀要-人文-』
第26号 栃木県立博物館



身刀付鉾製裂角鹿

鹿角製鈿付刀

『栃木縣史蹟名勝天然記念物調査報告』
第1輯より転載

第3章 確認された遺構と遺物

第1節 調査の概要

1. 基本土層 (第8～10図)

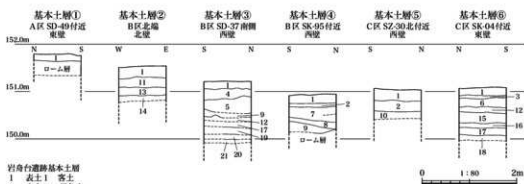
本遺跡は、那珂川西岸にあり、標高約150.0mの河岸段丘上に位置する。遺跡の南方約100mを東流する岩舟沢は小河川であるが、那珂川と合流し、本遺跡の載る扇状地を形成する。岩舟沢の現況は、護岸工事が行われ親水公園が設けられているため、現在の流路には多少の変更であろう。また、現在の那珂川の河岸段丘の東端部は、調査区東側にあるが、原始・古代においては、さらに東側であった可能性も考えられる。

調査対象区は第2図のとおり南北約250mに及ぶが、住宅、社屋、住宅による削平により、A・B・C区を総じた南北約140mの調査を行った。基本土層はA・B・C区内を対象に行った。また、以下に呼称する「調査区」はA・B・C区を示すものである。

調査区の原況は畑地や梨畑であったが、現地形は平坦であり可視的な起伏は確認されなかった。しかし、現表土を除去した結果、標高の北上や河岸段丘の河川への落ち込みに伴うとみられるローム面の緩やかな傾斜、及び、自然地形とみられる起伏や落ち込みが確認された。ローム面を指標とし、これより上位の地山層の堆積が一律であったと仮定した場合、推定される高低差は1.0～2.0mであり、畑作や梨栽培等への土地利用に際し、地表面は削平や削平に伴う整地によって、現在の平坦な地形が作出されたものと考えられる。

表土下の様相をみると、A区では、第8図のとおり、表土下約0.2mですでにローム面であり、これより上位の堆積層は削平によって失われたものと判断できる。

B区では、表土の厚さは平均して0.2mほどであるが、ローム上面までの深さには深浅が認められる。第9図のとおり、南端部からSD-83南側付近までは1.0m前後であるが、SD-83付近より以南は徐々に浅くなり、北端部のSZ-41北側周溝付近で約0.7m、北端部ではA区同様表土下約0.2mでローム面が露出する。



岩舟台遺跡基本土層

- 1 表土1 赤土
- 2 表土11 黒色土
- 3 表土5 ロームブロック
- 4 表土8 黒色土+暗褐色土
- 5 表土10 暗褐色土
- 6 SD-01 覆土
- 7 地山13-14
- 8 地山15
- 9 ローム漸移層
- 10 ローム漸移層、あるいはローム層、ローム11層の可能性あり。
- 11 ローム層 黄灰色土 ロームブロック(5.0m大)で構成される。
- 12 ローム層 黄灰色土
- 13 ローム層 やや黄灰色土 11層・14層の漸移層。
- 14 ローム層 黄灰色土 白灰色がかつたローム層。
- 15 ローム層 黄灰色土 12・16層の漸移層。
- 16 ローム層 黄灰色土 砂質ロームブロック(6.0m大)を含む。
- 17 ローム層 黄灰色土 砂質。
- 18 ローム層 黄灰色土 11層に似る。
- 19 ローム層 黄褐色土の砂質ロームと青灰色土の砂質のロームブロック(~1.5m)。
- 20 ローム層 黄褐色土の砂質のローム層。砂質の黄白色ロームブロック(~3.0m)。
- 21 ローム層 黄褐色土の砂質ローム層。青灰色の砂質ロームブロック(~3.0m)多量。

第8図 岩舟台遺跡基本土層

礫の大きさは1.0cm～8.0cm大に収まる。堆積レベルは、基本的には第9図17・21層に観察されるように、ローム層下に礫層が堆積するものと判断されるが、部分的にローム層を挟まず礫層が堆積する。B区S-84～P-171北側付近、C区SK-16-SK-20付近である。S-84は遺構確認面に礫層が露出する部分である。調査当初、S-35同様の古墳時代埋葬施設の可能性を考慮し、遺構確認面下約2.0mまでサブトレンチによる確認作業を行った。その結果、これより下位へ続く礫層であることを確認した。礫層部における縄文時代の遺構は少なく、また、S-35は礫層を避けて穿たれた可能性が考えられ、礫層は集落の展開、古墳の造営に少なからず制約をもたらしたものと想定し得る。

A・B・C区の原地形について、ローム面を指標に線上で推定するならば、C区南端からB区南端にかけて標高は徐々に低くなり、B区S-35-SD-83南側付近を最深部とし、A区に向けて高くなる。ローム上面の地山層の堆積が一律であったとすれば、B区南半部を凹地とする起伏が想定される。A区-B区の比高は約1.65m、B区-C区の比高は0.2m前後である。C区への古墳の造営はB区よりも高地となる起伏を利用した結果である可能性が考えられるが、縄文時代の袋状土坑のC区への密集を考慮するならば、ローム面までの地山層の堆積が浅かった可能性もあり、原地形の起伏については、あくまで推定の域をでない。

2. 調査の概要

本調査区は道路拡張部にあたるため、幅3.0m～4.0m・長さ約140mにわたる。このため、便宜的に、現道及び廃道により、北からA・B・C区を設定し調査を行った。

調査区の幅は平均3.5mであり、遺構の全形を確認し得た遺構は少ない。また、調査以前の梨栽培、畑耕作による開削等により、原地形は大きく失われているとともに、遺構面の削平が著しく、遺構の全容を調査し得た遺構も少ない。

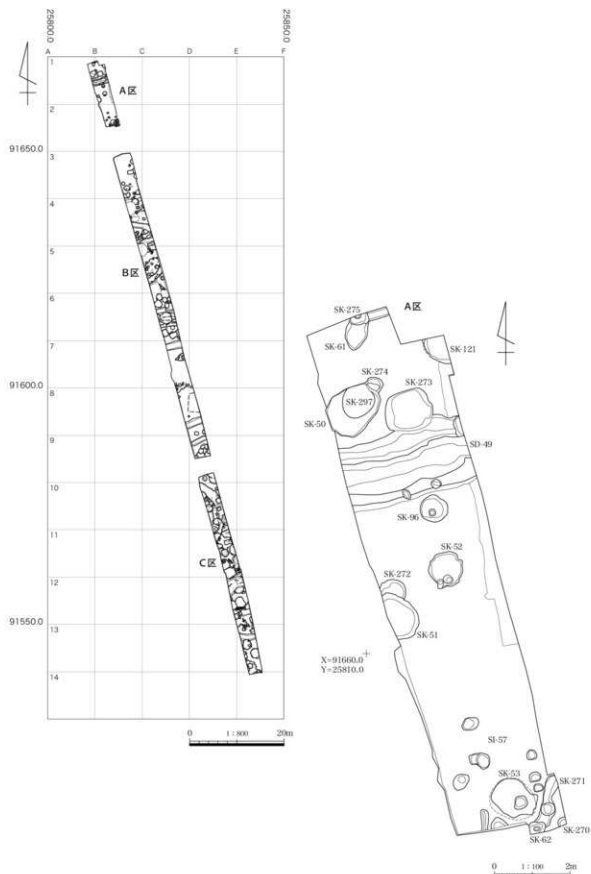
調査区は北方に向かい標高が高くなるが、北側に位置するA区については、調査前の土地利用時に地表面の水平さが意図されたらしく、最も削平が著しい。現地表下20.0cmが遺構確認面となるが、遺構の底面を辛うじて残す遺構が少なくない。B区はC-5・6グリッド以北は攪乱が著しく、遺構の存否が確認できなかった。また、B区C-5・6グリッド付近は攪乱により標高150.4m付近まで削平され、遺構の確認が困難であった。

このような状況下ではあるが、確認し得た遺構の総数は195基、その内訳は住居跡（可能性のあるものを含め）6軒、袋状土坑38基、土坑64基、小穴73基、埋設土器2基、古墳5基、溝状遺構5基、性格不明遺構1基である。

出土遺物は縄文土器、土製品、石器、石製品を主体に、土師器片、粗製土器片、石製紡錘車、鉄刀、鉄鏃、鉄製品片など、遺物収納箱（35×55×20cm）約150箱を数える。遺構に伴う出土遺物のほか、遺構確認面の精査に伴う遺物の出土も多く、後世の削平に伴う遺構偏属の遺物の散逸も一因と考えられる。これらは、遺物の出土がなく時期の判別ができない遺構も少なくないが、概ね縄文時代の集落跡を構成する遺構群及び古墳群と判断される。主体となるのは、縄文時代の土器・石器であり、用途不明の礫についても縄文時代に属する可能性が高い。古墳の周溝内における縄文土器片の出土も多いが、遺物出土状況を示すものとして、出土遺構において事実記載を行う。また、土器片・石器については、微細片に至るまで取り上げを行ったが、礫については、現地調査の過程で任意に取り上げを行ったものであり、全容を示すものではなく、かつ、遺構によって取り上げに粗密が生じていることを明記する。取り上げた礫については、全てを報文中に表で示したが、表中項目の「分類」については、第5章まとめて記した、各器種毎の分類記号に従って表記した。なお、石器・礫の一覧表は第10節遺構外出土遺物に一括して記載する。

表3 岩舟台遺跡遺構一覧表

遺構 No.	種別	区	グリッド	特記	遺構 No.	種別	区	グリッド	特記
S D 01	溝状遺構	C	E-12・13		S K 128	土坑	C	D-9	
S Z 03	古墳	C	E-13		S K 129	土坑	C	D-9	
S K 04	袋状土坑	C	E-13		S K 131	土坑	C	D-11	
S K 05	袋状土坑	C	D・E-11		S K 133	土坑	C	D-11	
S K 06	袋状土坑	C	D-11		S K 135	土坑	C	D-11	
S K 07	袋状土坑	C	D-11		S X 136	自然不明遺構	C	D-11	
S K 08	袋状土坑	C	D-11・12		S K 137	土坑	C	D-11	
P 14	ビット	C	D-10		S K 138	土坑	C	E-13	
S K 16	袋状土坑	C	D-11		S K 139	土坑	C	E-13	
S K 17	袋状土坑	C	D-10		S K 140	土坑	C	E-12	
S K 18	土坑	C	D-10		P 145	ビット	C	E-12	
S K 19	土坑	C	D-10		S K 148	袋状土坑	B	D-9	
S K 20	袋状土坑	C	D-10		S K 149	土坑	B	D-9	
S 21	埋葬施設	C	D-10・11	SZ-30土体部の可能性あり	S K 151	袋状土坑	B	C-6	
S K 23	土坑	C	D-10		S K 152	土坑	B	C-7	
P 24	ビット	C	D-11	S-281内	S K 153	袋状土坑	B	B-4	
S Z 26	古墳	C	D・E-12・E-13		S I 154	住居跡	B	C-5・6	
P 29	ビット	C	D-11		S K 156	袋状土坑	B	C-6	
S Z 30	古墳	C	D-10・11		S K 157	土坑	B	C-4	
S Z 31	古墳	B	D-9		S K 159	土坑	B	B-4	
S K 32	土坑	B	D-9		S K 160	土坑	B	D-8	
S K 33	土坑	B	D-9		S K 161	土坑	B	D-8	
S 35	埋葬施設	B	D-7・8	SZ-31土体部か	S K 162	土坑	B	D-8	
S K 36	土坑	C	C-6		S 163	埋設土器	B	C-5	
S D 37	溝状遺構	B	C-6		P 164	ビット	B	C-5	
S Z 41	古墳	B	B・C-4・C-5		S K 166	袋状土坑	B	C-6	
S K 45	袋状土坑	B	B-3		P 169	ビット	B	C-7	
S K 47	土坑	B	B-3		P 170	ビット	B	C-7	
S D 49	溝状遺構	A	A・B-1		P 171	ビット	B	C-7・8	
S K 50	袋状土坑	A	A・B-1		P 172	ビット	B	C-8	
S K 51	土坑	A	B-1		S K 173	土坑	B	C-7・8	
S K 53	袋状土坑	A	B-2		P 175	ビット	B	B-4	S-180内
S K 55	袋状土坑	B	B-3		P 176	ビット	B	B・C-4	S-180内
S K 52	土坑	A	B-1		P 177	ビット	B	B-4	S-180内
S I 57	住居跡	A	B-2		S K 178	袋状土坑	B	C-6	
S K 61	土坑	A	A-1		S 179	埋設土器	C	E-12	
S K 62	土坑	A	B-2		S 180	住居跡	B	B・C-4	
S K 63	袋状土坑	B	B-3		S K 181	袋状土坑	C	E-14	
S D 64	溝状遺構	B	C-6		S K 183	土坑	C	E-13	
S K 71	袋状土坑	C	E-13		S K 184	埋葬施設	C	E-13	
S K 73	袋状土坑	C	E-13		S K 185	土坑	C	E-13	
S K 74	袋状土坑	C	D-12		S K 186	土坑	C	E-12	
S K 75	袋状土坑	C	E-12		S K 187	土坑	C	E-12	
P 78	ビット	C	E-12		P 188	ビット	C	E-12	
P 79	ビット	C	E-12		P 190	ビット	C	E-13	
S K 80	袋状土坑	C	D・E-12		P 191	ビット	C	E-12・13	
S 81	埋葬施設	C	E-12	SZ-26土体部	P 192	ビット	C	E-13	
S K 82	袋状土坑	C	D・E-12		P 193	ビット	C	E-12・13	
S D 83	溝状遺構	B	C-7		P 194	ビット	C	E-12	
S 84	基本土層	B	D-8	埋設部	P 195	ビット	C	E-12	
S I 85	住居跡	C	E-13		P 196	ビット	C	E-12	
S K 87	土坑	B	C-7		P 197	ビット	C	E-11	S-281内
P 89	ビット	C	D-10		P 198	ビット	C	E-11	S-281内
P 94	ビット	C	E-13		P 199	ビット	C	E-11	S-281内
S 95	埋葬施設部か	B	D-9	SZ-31に関連か	P 200	ビット	C	E-11	S-281内
S K 96	土坑	A	B-1		P 201	ビット	C	E-11	S-281内
P 97	ビット	C	E-3		P 202	ビット	C	D-11	S-281内
S K 99	袋状土坑	C	D-10・11		P 203	ビット	C	D-11	S-281内
S K 100	土坑	C	D-9		P 204	ビット	C	D-11	S-281内
S K 101	土坑	C	D-10		P 205	ビット	C	D-11	S-281内
S K 102	土坑	C	D-10		P 206	ビット	C	D-11	S-281内
S K 103	袋状土坑	B	C-6		P 207	ビット	C	D-11	S-281内
S K 105	袋状土坑	B	C-6		P 208	ビット	C	D-11	S-281内
S K 106	袋状土坑	B	C-6		P 209	ビット	C	D-11	S-281内
S K 108	袋状土坑	B	C-4		P 210	ビット	C	D-11	S-281内
S K 110	土坑	B	C-4		P 211	ビット	C	D-11	S-281内
S I 111	住居跡	B	C-5		P 212	ビット	C	D-11	S-281内
S K 112	土坑	B	C-4・5		S K 213	土坑	C	D-10	
S K 121	袋状土坑	A	B-1		S K 214	土坑	B	D-9	
S K 123	袋状土坑	C	D-10		P 216	ビット	B	C-8・9	
S K 124	袋状土坑	C	D・E-12		P 219	ビット	B	C-8	
S K 125	袋状土坑	C	D・E-12		P 220	ビット	B	D-7	



第11図 岩舟台遺跡グリッド配置図・A区全体図

遺構 No	種別	区	グリッド	特記	遺構 No	種別	区	グリッド	特記
P 221	ピット	B	C-7		P 261	ピット	B	B-3	
S 222	自然の盛り込み	B	C・D-7		S K 270	土坑	A	B-2	
S K 225	土坑	B	C-6		S K 271	土坑	A	B-2	
S K 227	袋状土坑	B	C-6		S K 272	土坑	A	B-1	
S K 230	土坑	B	C-6		S K 273	土坑	A	B-1	
P 232	ピット	B	C-5	SI-154内	S K 274	土坑	A	B-1	
P 233	ピット	B	C-5		S K 275	土坑	A	A-1	
P 234	ピット	B	C-5		P 276	ピット	C	E-13	
P 235	ピット	B	C-5		P 277	ピット	C	E-12	
P 236	ピット	B	C-5		P 278	ピット	B	C-8	
S K 237	土坑	B	C-5		P 279	ピット	C	D-11	S-281内
S K 238	土坑	B	C-4-5		S 281	住居跡	C	D-11	
P 239	ピット	B	B-4	S-180内	P 282	ピット	C	D-11	
P 240	ピット	B	C-4	S-180内	P 283	ピット	C	D-11	
P 244	ピット	B	B-4	S-180内	P 284	ピット	C	D-11	
P 245	ピット	B	B-4	S-180内	S K 285	土坑	C	D-10	
P 247	ピット	B	B-4		S K 286	袋状土坑	B	B・C-6	
P 248	ピット	B	B-4		S K 287	土坑	B	D-6	
P 249	ピット	B	B-4		S K 288	土坑	B	C-5	
S K 250	土坑	B	B・C-4		P 289	ピット	B	C-5	
S K 251	土坑	B	B・C-4		S K 290	土坑	B	C-4	
S K 252	土坑	B	B-4		P 291	ピット	B	C-5	
P 253	ピット	B	B-3		S K 292	土坑	B	C-4	
P 254	ピット	B	B-3		P 293	ピット	B	C-5	
P 255	ピット	B	B-3		S K 294	袋状土坑	B	B-3	
P 256	ピット	B	B-3		S K 295	土坑	B	B-3	
P 258	ピット	B	B-3		S K 296	土坑	B	B-3	
S K 259	土坑	B	B-3		S K 297	土坑	A	A・B-1	
S K 260	土坑	B	B-3		S K 298	土坑	A	A・B-1	S-281内

第2節 住居跡

1. 調査の概要

調査区内からは、可能性のある遺構を含め、6軒を確認した。A区 SI-57、B区 SI-111・SI-154・S-180、C区 SI-85・S-281 である。形状や出土遺物から縄文時代の住居跡と判断されるが、前述のとおり、調査区の幅が狭小であることや上面の削平によって判然としない点が多い。

A区 SI-57は竪穴住居としての掘り込みの確認はなく、近接する8基の小ピットを確認した。現状でピットの配置は不規則であるが、同様の小ピットが調査区外に存在する可能性が強く住居跡の可能性を考慮した。

C区 SI-85は住居跡であるか判然としないが、掘り込みの内外に小穴が位置するため、住居跡の可能性を考慮した。円形状の住居と想定した場合、その直径の範囲から SZ-26(南)を挟んで SK-185 北側の遺構確認面部分が床面に相当するが、住居跡とする明確な痕跡はなく、遺構番号を付さなかった。

B区 SI-111・154は、遺構半部が調査区外にあることや、後世の削平、SZ-41との重複や攪乱による遺構の欠失により、不詳な点が極めて多い。既に、SZ-41築造時に遺構の殆どを失っている可能性も否定できないが、確認した覆土等が SI-111・154に帰属するものとして事実記載を行うこととする。地山面を床面とした場合、SI-111の床面は150.35～150.4 m、SI-154の床面は150.5 m前後と想定される。覆土に重複部を連想させる堆積が観察されること(SP-B)、SI-111・154の床面レベルに10cm以上の相違があることなどから、別遺構として記載する。しかし、SI-111 p 1、SI-154 p 1～p 7の底面レベルが近いこと、石囲いの位置などから、SI-111・154を同一遺構として径7 m程の住居跡との認識も可能である。住居跡の拡張や掘り直しなど考えられるが、SI 111 p 1・2、SI-154 p 3の堆積が覆土を掘り抜いているようにも観察されることから、遺構覆土上面の150.6 m以上を床面とする遺構であり、確認し得た覆土は住居構築時の床下埋土や床面の作り直しの際の埋め戻し土であるとも考え得る。

B区 S-180は、礫を伴う小穴である S-180と周囲に半円形状に位置する P-175～177・239・240・

244、SK-245を含めて本遺構とする。S-180の礫は調査区西壁に東側面のみを確認した。礫自体は調査区外にあるため、取り上げることはできず、その性格は不詳である。また、遺構上面は表土であり、遺構確認時における掘り込みの確認はなく、ピットの平面プランのみが確認された。纏まった遺物の出土はなく、住居と認定する要件は極めて少ない。S-180の礫出土状況や覆土堆積状況、SZ-41周溝内という位置の状況等から、掘り込みを持つ住居であったとしても、床面は削平された状況、あるいは、各ピットの深さを鑑みるに床面直下の状況を示すと考えられる。あくまでも、推定の域を出ないものの、可能性が示唆される点を明記する。報文については、住居ではない可能性を本項に記し、住居である可能性を考慮した場合について記載する。

また、S-180南側には、P-233など深さのあるピット、P-293などP-233等より浅めのピットが連続する。P-233等は、周囲にある攪乱部分にピットの重複があったとしても、確認し得る深さを持つ。このため、P-233周辺のピットは現状以外に存在しない可能性が高いと判断される。また、S-180周辺のピットのような規則性も欠落する。このため、S-180同様の住居跡の推定は困難と判断される。しかし、S-180より深い柱穴状のピットであり、S-180を含めた径7m大の大形住居跡を念頭に、本節に一文を付すとともに、S-180等と同図で報告する。SK-159についてはSI-180と重複するが関連は不明である。

C区S-281は、C区D・E-11グリッドSK-8北側に複数的小ピットが円形状に並ぶことから可能性を考慮した。しかし、円の南半部はSZ-26(北)との重複によりピットは失われており、かつ、遺構上位は削平により失われており、不詳な点が多い。

また、調査過程において、C区E-12グリッドに位置するSK-140を石囲炉、P-78・79・192～194・277を柱穴とする住居跡が想定されたが、SK-140に炉跡の痕跡がないことなどから、住居跡の確認には至らなかった。住居跡とはせず、土坑・ピットの項目で事実記載する。仮に、住居跡であった場合は、掘り込みを持たない住居跡とも考えられる。また、床面レベルは、ピットの遺構確認面及びSK-140覆土1層上面から150.7m前後で、石囲炉材と考え得るSK-140-4の礫の上端部にあたる。

C区D-10グリッドに位置するSK-101はピット状の覆土を持ち、連続するSK-19・23・102 P-14は半円状に並ぶ。底面レベルはSK-101が約150.5mとやや深いが、150.24m・150.33m・150.3m・150.35mと近似する値を示す。住居跡の可能性を考慮したが明確な根拠を確認し得なかった。また、SK-101北側のP-89の底面レベルが約150.57mである点も留意される。

SK-140については炉跡の可能性とP-78・79・277との関連が考慮されたが判じ得なかった。

SK-295は調査区壁際に確認し人頭大の礫が出土する。S-180同様の炉跡である可能性も考え得る。

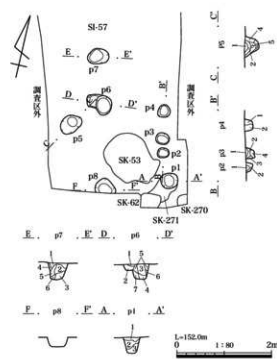
2. 住居跡

第57号住居跡(SI-57) (第13図 図版二)

位置 A区B-2グリッドに位置する。**重複関係** 近接する小ピットの配置内にSK-53がある。層序の重複はなく、新旧関係は不明である。p1とSK-271が重複するが新旧関係は不明である。**形状・規模・主軸** p1～p8の小ピットが近接する。p1はSK-271と重複する。帰属する可能性は考慮されるが詳細は不明である。(第107図SK-271セクション図参照) p6は2基が重複する。西側的小ピットが新しい。遺構確認面は表土直下であり、ピットを包括する掘り込みは確認されなかった。p3～p7に柱穴状の覆土が観察されるものの、小穴自体が浅く、p7最上層の1層が後世の堆積土と思われることから、仮に掘り込みに伴う小穴群であったとしても、掘り込みは既に削平された可能性が高いと判断される。**柱穴** p1～p8の各々の規模は、p1：遺構確認面の径約0.35m・底面の径0.22m前後・深さ約0.35m・底面レベ

ル約 151.17 m、p 2：遺構確認面の径約 0.2 m・底面の東西約 0.2 m・底面の南北約 0.15 m・深さ約 0.14 m・底面レベル約 151.22 m、p 3：遺構確認面の東西約 0.3 m・遺構確認面の南北約 0.24 m・底面の東西約 0.24 m・底面の南北約 0.16 m・深さ約 0.2 m・底面レベル約 151.22 m、p 4：遺構確認面の径 28 m前後・底面の径 0.2 m前後・深さ約 0.18 m・底面レベル約 151.25 m、p 5：遺構確認面の東西約 0.35 m・遺構確認面の南北約 0.48 m・底面の径約 0.22 m・深さ約 0.3 m・底面レベル約 151.15 m、p 6（西）：遺構確認面の東西約 0.24 m・遺構確認面の南北約 0.29 m・底面の東西約 0.15 m・底面の南北約 0.24 m・深さ約 0.12 m・底面レベル約 151.3 m、p 6（東）：遺構確認面の東西約 0.35 m・遺構確認面の南北約 0.42 m・底面の東西約 0.26 m・底面の南北約 0.33 m・深さ約 0.32 m・底面レベル約 151.14 m、p 7：遺構確認面の東西約 0.45 m・遺構確認面の南北約 0.32 m・底面の径約 0.28 m・深さ約 0.35 m・底面レベル約 151.12 mである。p 5・6・7の底面レベルはほぼ一致する。覆土 p 1は3層、p 2は2層を確認した。p 3は4層を確認した。1・2層は埋没土、3・4層は掘り方か。p 4は2層を確認した。1層は柱痕、2層は掘り方か。p 5は5層を確認した。1～3層は柱痕、4・5層は掘り方か。p 6は7層を確認した。1・2層は西側的小ピットの覆土である。3～7層は東側的小ピットの覆土である。3・4層は柱痕、5～7層は掘り方か。p 7は6層を確認した。2・3層は柱痕、4～6層は掘り方か。p 8は覆土を確認し得なかった。

遺物出土状況 確認されなかった。



SI-57	
p1	
1	暗茶褐色土 ローム粒子(～0.3cm)やや多量、炭化物粒子(～0.1cm)若干量、しまり強い。
2	暗茶褐色土 ローム粒子(～0.2cm)やや多量、ロームブロック(～1.0cm)若干量、しまり強い。
3	暗褐色土 ロームブロック主体、しまり強い。
p2	
1	暗茶褐色土 ローム粒子(～0.2cm)多量、しまりあり。
2	暗褐色土 ローム粒子(～0.1cm)・ロームブロック(～1.0cm)多量、しまりあり。
p3	
1	茶褐色土 ローム粒子(～0.3cm)やや多量、ロームブロック(～0.8cm)・炭化物粒子(～0.1cm)若干量、しまりあり。
2	暗茶褐色土 ローム粒子(～0.1cm)多量、ロームブロック(～1.0cm)少量、しまりあり。
3	暗褐色土 ロームブロック(～1.0cm)主体、しまりあり。
4	黄褐色土 ロームブロック(～1.2cm)主体、しまり強い。
p4	
1	暗茶褐色土 ローム粒子(～0.1cm)・ロームブロック(～1.0cm)多量、しまりあり。
2	黄褐色土 ローム粒子・ロームブロック(～1.0cm)主体、しまりあり。
p5	
1	暗茶褐色土 ローム粒子(～0.2cm)多量、しまりあり。
2	暗茶褐色土 ローム粒子(～0.2cm)やや多量、ロームブロック(～0.8cm)少量、1層より明色、しまりあり。
3	暗褐色土 ローム粒子(～0.3cm)やや多量、ロームブロック(～1.0cm)下層に集中して含む、しまりあり。
4	暗茶褐色土 ローム粒子(～0.1cm)多量、ロームブロック(～2.0cm)含む。
5	暗茶褐色土 ローム粒子(～0.1cm)多量、ロームブロック(～1.0cm)含む、しまりあり。
p6	
1	暗茶褐色土 ローム粒子(～0.1cm)・ロームブロック(～1.0cm)含む、しまりあり。
2	暗茶褐色土 ローム粒子(～0.1cm)多量、ロームブロック(～1.5cm)含む、しまりあり。
3	暗褐色土 ローム粒子(～0.2cm)やや多量、ロームブロック(～1.0cm)少量、炭化物粒子(～0.2cm)若干量、しまり強い。
4	暗褐色土 ローム粒子(～0.2cm)やや多量、ロームブロック(～1.2cm)含む、しまり強い。
5	暗茶褐色土 ローム粒子(～0.1cm)多量、ロームブロック(～0.8cm)少量、しまりあり。
6	暗茶褐色土 ローム粒子(～0.1)・ロームブロック(～1.0cm)主体、しまりあり。
7	暗褐色土 ローム粒子(～0.1cm)多量、6層より明色、しまりあり。
p7	
1	茶褐色土 ローム粒子(～0.1cm)多量、ロームブロック(～0.8cm)少量、炭化物微粒子若干量、しまりあり。
2	黒褐色土 ローム粒子(～0.2cm)・ロームブロック(～2.0cm)多量、しまりあり。
3	暗茶褐色土 ローム粒子・ロームブロック(～1.5cm)多量、しまりあり。
4	暗褐色土 ロームブロック(～1.2cm)主体、しまりあり。
5	黄褐色土 ロームブロック(～3.0cm)主体、硬くしまる。
6	黄褐色土 ローム粒子・ロームブロック主体、しまりあり。

第13図 第57号住居跡実測図

第85号住居跡 (SI-85) (第14・15図 表18 図版二・二五)

位置 C区E-13グリッドに位置する。**重複関係** 東側にSD-01、南半部にSZ-26(南)が重複する。本遺構が古い。床面にあるP-97は覆土の堆積状況から後出する遺構である可能性が考えられるが詳細は不明である。**形状・規模・軸** 後出する遺構の重複により、形状等は不明である。遺構確認面からの深さは約15cmである。直径5m前後と仮定した場合、SZ-26(南)を挟んだSK-185北側の部分(第14図※)が本遺構の床面である可能性が考えられるが、床面レベル150.75m前後で本遺構と0.1mほどの差異がある。

覆土 11層を確認した。5・6層、7・8層は似た特徴を持つ。3～6層はP-97に向かう堆積状況であり、5・7層が似た特徴を持つことを合わせ、P-97に伴う可能性も否めない。その際、7・8層はP-97を挟んだ同層層か。**床面** ローム層を床面とし、概ね平坦である。床面レベルは150.62m前後である。先述の第14図※とは床面レベルに差異がある。**柱穴** 遺構内にP-94・97・190～194、遺構外にP-78・79・279が近接して位置する。P-190・191に柱穴状の堆積が観察されるが、P-97に後出する遺構の可能性がありなど、詳細は不明である。**火処** 確認されなかった。

遺物出土状況 遺構内から2・4～21などが出土する。4・7・17・21は覆土上層、5・19・20は覆土下層、2は床面付近から出土する。8～16・18はP97、16はP-94の遺物の可能性がある。1は覆土中層、8・9・11～15・17は覆土下層、6は床面付近から出土する。

出土遺物 1は橋状把手。上半部は欠損、下半部は体部との接合部付近で欠損する。2・3は帯状区画か。後期初頭か。4～7は地縄文を施す体部小片である。5はO段多条(RL)の地縄文を挟んでループ文を重層させる。岡山式か。6は縦方向の磨り消しがみられるが、故意か偶然は判別できない。

図示し得なかったが、18は底部小片、18は地縄文に沈線の一部のみえる小片1片である。

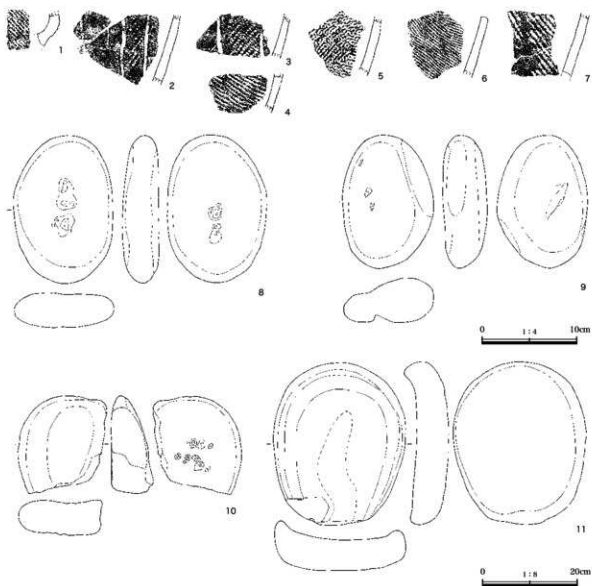
この他、図示し得なかった土器片は、沈線で区画された無文帯の見える小片2片、微隆起線を施す無文の小片1片、地条線1片、地縄文15片、磨滅片1片である。

取り上げを行った石器・礫は表18に記載する。

本遺構の時期は後期初頭か。

第111号住居跡 (SI-111) (第16～20図 表19・20 図版二・三・一七・二一・二四)

位置 B区C-5・6グリッドに位置する。調査区東端部に位置し、調査区外に延びる。**重複関係** 円墳の周溝であるSZ-41(南)と重複する。本遺構が古い。SI-154と重複する。本遺構が新しい。ただし、SI-154とは、本遺構p1とSI-154p3底面がほぼ同レベルであることなどから、第1項に記載にとおり、同一遺構の可能性がある。同一遺構であった場合、径約7.0mと推定される。また、後述する、p1・2の床面覆土を切るような堆積やSI-154との床面レベル差からは、SI-154からの住居の拡張や掘り直し等も考え得るが、判然としない。**形状・規模・軸** 上面の削平により掘り込みは浅い。部分的には床面を失っている可能性もある。遺構南辺は僅かな段差を立ち上がりとしたもので、極めて不明瞭である。また、攪乱によって遺構西側を、SZ-41によって北側を失っている。平面形は判然としないが、南辺の立ち上がり、SP-Bの立ち上がりと想定される分層線、p1・2の位置等から、径5.0m程度の円形状か。遺構確認面からの深さは0.04～0.2mが観察される。**覆土** 1～18層の18層分を確認した。18層は覆土の観察をし得なかった。1～3・5・6層は床面覆土か。5層は5.0cm大のロームブロックを層下部に多量に含むことから、下層或いは層自体が地山である可能性が残る。その際、4層は床面施設となる可能性を考え得る。7～12層はp1覆土、8～17層はp2覆土とみられる。p1は11層を柱痕、12層を構築土とする柱穴と判断される。11層上面まで掘り下げ、柱を抜き取った後、埋め戻したか。p1内からの木材等の出土は確認されない。p2

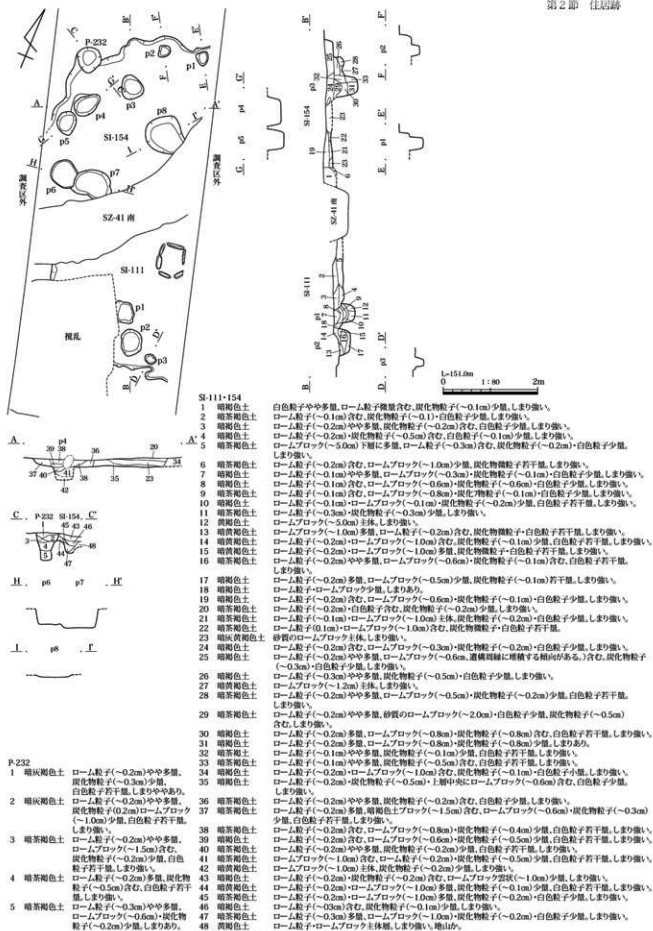


第15図 第85号住居跡出土遺物実測図

が柱穴である場合、柱除去後埋め戻したか。p 1 上層の7・8層、p 2 上層に14層が床面覆土を掘り込むように堆積する点、判然としない。床面レベルが調査時の認識よりも高い可能性や調査における堆積層の観察の不備である可能性も残るが、住居廃絶後床面に埋没土が堆積する過程（第一次埋土）で柱を除去した可能性も考慮の範疇としたい。

床面 住居の全容が明らかでなく、不詳な点が多い。床面はローム漸移層か。覆土に記載のとおり、5層は地山である可能性が残る。覆土の堆積状況や遺物の出土状況から、床面レベルは150.36～150.4 mと推定され、概ね、北側から南側への緩やかな傾斜が観察される。遺物の出土状況から、が跡周辺の床面レベルは若干低く、150.35 m前後のレベルである可能性が考えられる。

柱穴 床面にp 1～3を確認した。また、覆土4層が床面施設であった場合、掘り込みは浅く、柱穴となる可能性は低いと考えられる。覆土の堆積状況からp 1は柱穴と判断される。p 2・3は判然としない。p 1は不整な円形状で、開口部径約0.44 m・底径0.3 m、柱痕部径約0.24 mである。南壁床面からの深さ約0.35 m、底面レベル約150.0 mである。p 2はやや南北に長い楕円形状で、開口部の東西約0.45 m・南北約0.56 m、底部



第16図 第111・154号住居跡・第232号ヒット実測図

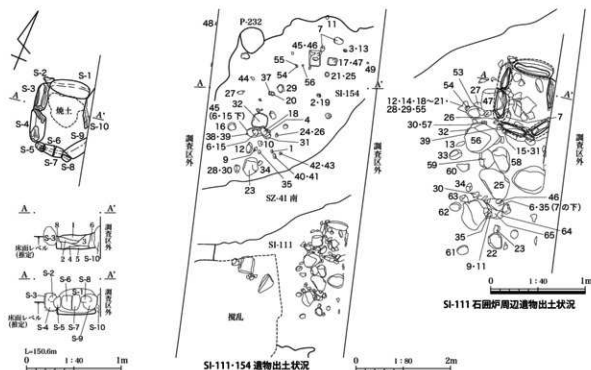
の東西約0.34 m、南北約0.39 mである。床面からの深さ約0.23 m、底面レベル約150.1 mである。p3はやや東西に長い円形状で、開口部の東西約0.25 m・南北約0.2 m、底部の東西約0.2 m・南北約0.14 m、底面レベル約150.19 mである。

火処 炉跡を確認した。住居跡中央部付近に位置すると推定される。S-1～10を方形に配した石囲炉である。S-10は調査区東端の壁面中であり、取り上げることは出来なかった。

規模（内側・外側）は、東西約0.4 m・0.6 m以上、南北約0.5 m・0.85 m、推定される床面（約150.35 m）からの深さ約0.14 mである。炉跡北半部の赤色化した被熱面が残る。顕著な硬化面は観察されない。南半部に被熱による色調の変化や硬化面は観察されない。底面のレベルは約150.21 mである。S-1～10の上端は、推定される床面より0.15～0.34 m上位にあたる150.42～150.5 m付近にある。

礫の大きさは、S-1:長軸約35.0cm・短軸約20.5cm・厚さ約13.1cm・重さ約12500 g、S-2:長軸約15.6cm・短軸約8.2cm・厚さ約5.0cm・重さ約806.16 g、S-3:長軸約34.5cm・短軸約19.5cm・厚さ約11.4cm・重さ約10.605 g、S-4:長軸約49.0cm・短軸約28.7cm・厚さ約17.4cm・重さ約29200 g、S-6・7:長軸約30.9cm・短軸約17.0cm・厚さ約11.2cm・重さ約7400 g、S-8:長軸約10.1cm・短軸約9.7cm・厚さ約3.5cm・重さ約472.18 g、S-9:長軸約31.5cm・短軸約25.0cm・厚さ約7.8cm・重さ約7650 g、S-10:長軸約46.3cm・短軸約21.4cm・厚さ約11.9cm・重さ約12570 gである。

礫の配置は、S-1・3・4・6・7・9・10を主体に火床を取り囲む。調査区外となるS-9・10間は未確認であるが、1300（表20）が配置されたか。片側端部が赤色化する。長円形の礫を立てて配置か。S-1は扁平な円形の礫を、S-9は円形の礫を立てて配置される。S-3・4、S-5～7は一個体の礫を分割して配する。



- SI-111炉
- 1 暗褐色土 ローム粒子(～0.2cm)やや多量、炭化物粒子(～0.1cm)少量、しまりあり。
 - 2 暗茶褐色土 ローム粒子(～0.2cm)多量、ロームブロック(～0.3cm)・焼土粒子(～0.1cm)少量、しまりあり。
 - 3 暗褐色土 ローム粒子(～0.2cm)・焼土粒子(～0.2cm)・白色粒子(～0.1cm)少量、しまりあり。
 - 4 暗茶褐色土 ローム粒子(～0.2cm)多量、焼土粒子(～0.2cm)・白色粒子少量、しまりあり。
 - 5 赤褐色土 被熱したロームブロック層、硬くしまる。
 - 6 暗茶褐色土 ロームブロック(～1.0cm)・ローム粒子(～0.2cm)やや多量、白色粒子少量、硬くしまる。

第17図 第111号住居跡石囲炉実測図・第111・154号住居跡遺物出土状況図

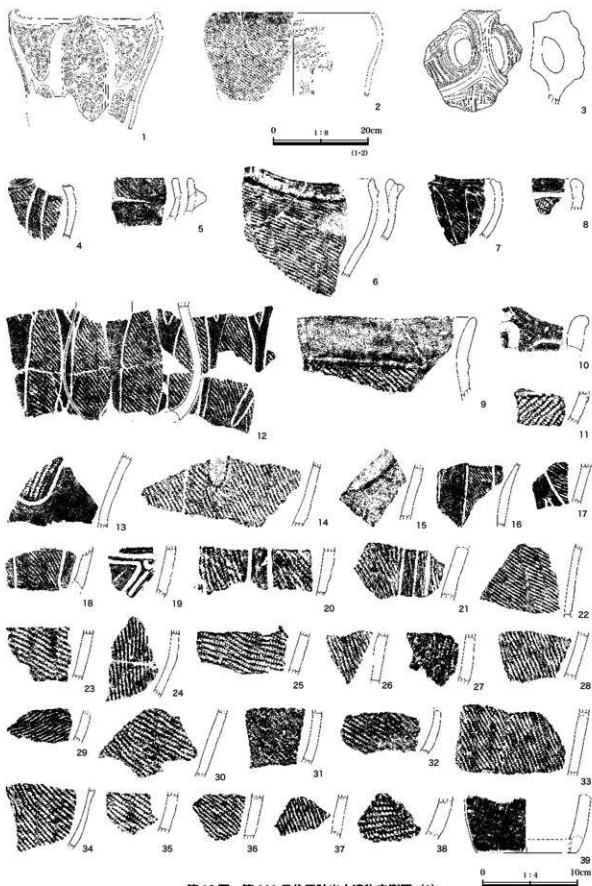
また、S-10にも破砕面がみられるが、調査区外のため詳細は不明である。何れも、破砕面への被熱の確認はなく、火熱による破砕ではなく、構築時の所産と判断される。S-2・8は方形の隅部の空間を補助する位置にある。S-4・5間には同様の礫の出土は確認されなかった。各々の礫の上端部・下端部のレベルは、S-1:150.50m・150.23m、S-2:150.43m・床面、S-3:150.45m・150.26m、S-4:150.45m・150.27m、S-5:150.41m・150.29m、S-6:150.43m・150.27m、S-7:150.43m・150.27m、S-8:150.41m・床面、S-9:150.43m・150.25m、S-10:150.46m・測定不可、である。概ね、礫上端は150.25m前後、礫下端は150.45m前後であるが、北側のS-1の上端・下端のレベルが他の礫よりも突出する。床面に北側から南側の傾斜が観察されることに起因する可能性、あるいは、S-1が北辺を一個体でまかなうことや、炉跡底面の被熱範囲が北半部に観察されることから、主体的な燃焼部は北半部にあり、主たる火壁がS-1である可能性が考慮される。

覆土は6層を確認した。1～4層は焼土粒子や炭化物粒子を含むが特出した堆積は観察されない。5層は焼土の堆積、底面の硬化から火床と判断される。6層は火床と礫の間に堆積する。炉壁とみられるが被熱の痕跡は観察されない。覆土の堆積状況からは、5層→6層→4～1層の堆積順が観察される。5層下の炉跡底面は赤色変化や硬化が観察されるが、使用の痕跡は薄い。

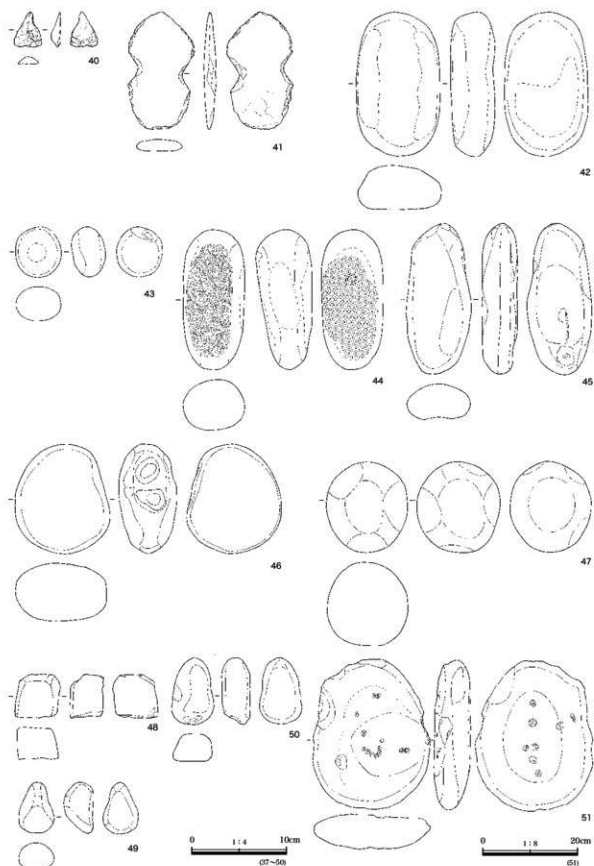
6層火床側やS-1～10火床側に被熱の痕跡がないこと、使用された礫に火熱の痕跡が薄いこと、S-3・4の接合面に被熱の痕跡がないこと、1～6層の堆積順などから、住居廃絶前に本来の炉跡を取り去り、石囲炉を設けた可能性が考えられる。本来の炉跡は炉跡底面が赤色変化する石囲が北半部と推定されることであるが、炉跡自体の使用痕跡の薄さから、5層・炉跡底面に残る炉としての痕跡が一回性のものであり、本来の炉跡は本火処ではない可能性が考え得る点、指摘しておきたい。また、炉跡内部の6層やS-1～10に被熱の痕跡のないことや、接合するS-3・4は使用された石材を破砕後に据え直されたとも判断できることから、燃焼終了後に礫を配した可能性も残しておきたい。

遺物出土状況 遺構内から261点が出土する。礫の出土が多い。炉跡からは5・8・13～15・18～21・26～33・39・47・53～57が出土する。何れもが炉跡覆土1層上位～1層上位から出土する。炉跡周辺からは7・10・12・20～23・25・34・35・46・58～65が出土する。何れも想定される床面付近に相当するレベル付近からの出土である。10・12・58～60・61は150.35m前後から出土する。7・10・12・20・22・23・25・34・35・62・64は150.4m前後から出土する。46・65は150.43m～150.45m付近から出土する。70は炉跡周辺としてもっとも高いレベルの150.47mから出土する。2・4・9・11は覆土中から出土する。19が確認面付近から出土する。

出土遺物 3は中空の把手。上把手周囲に沈線を巡らせ、これに沿って沈線が連続する。体部は隆帯とこれに沿う沈線の垂下がみられ、地文に沈線を充填する。1は2単位の波状口縁の波頂下には口縁部を横巡する微隆起線が双頭を突起を作出する。口縁部下から縦位の地縄文を施し、微隆起線が縄文部と無文部を区画し「H」字状のモチーフを描出する。加曽利EⅣ式か。2は無文の口縁部から区画なく地縄文を施す。6は口縁部下の微隆起線に突起が形成される。加曽利EⅣ式か。4・12は同一個体か。4は波状の口縁部下を微隆起線が巡る。波頂部下の剥落部は突起が形成されたか。口縁部下の微隆起線に接して、沈線で区画された無文帯で逆U字状のモチーフか。12の描くモチーフと上下で連結し、「W」状を描くか。加曽利EⅣ式か。同一個体とみられる小片が出土する。5は波状口縁部下を微隆起線が巡る。波頂下は舌状の突起が配される。称名寺式に並行する加曽利EⅤ式か。9は波状口縁か。微隆起線を一次区画線とする。称名寺式に並行する加曽利EⅤ式か。7は波状口縁部下を微隆起線が巡る。沈線で区画された無文帯でモチーフを描く。後期初頭か。8・10は口縁部文様帯か。加曽利EⅡ～Ⅲ式か。11は口縁部下の横位に巡る微隆起線か。称名寺



第18図 第111号住居跡出土遺物実測図(1)



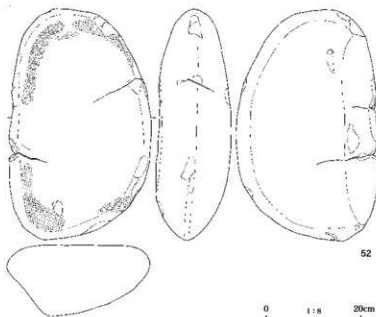
第19圖 第111号住居跡出土遺物実測圖(2)

式に並行する加曽利E式か。13は沈線で区画された縄文部と無文部でモチーフを描く。加曽利E式後半か。14は微隆起線せモチーフを描く。加曽利EIV式か。15は無文に微隆起線でモチーフを描く。加曽利EIV式か。16～18は帯状区画でモチーフを描くか。称名式か。19は一次区画線下の盲孔を起点に単沈線とこれに沿う沈線で縦位のモチーフを描くか。堀之内1式か。20は懸垂文状沈線が垂下する。沈線間は磨消が施される。中期後半以降か。21は3条一組の懸垂文状の沈線が垂下する。内面面にススが付着する。器内面は平滑であり硬質である。22～25はタテ方向の地縄文を施す体部小片である。何れも別個体とみられる。26はヨコ方向の地縄文を施す体部小片である。27も同様か。28～38は斜方向の地縄文を施す体部小片である。何れも別個体とみられる。34は内外面にススが付着する。39は櫛歯状工具で条線を施す。地文か。

この他、図示し得なかった土器片は以下のとおりである。凹縁で作出される口縁部文様帯とみられる小片2片。無文口縁部8片、このうち2片は後期初頭か。口縁部下を横巡する微隆起線6片、微隆起線に接する突起とみられる磨減小片1片、微隆起線で区画された縄文部と無文部でモチーフを描く体部小片7片。これらは加曽利EIV式か。無文に微隆起線でモチーフを描く小片6片。後期初頭か。沈線で縄文部と無文部を区画する小片1片。地縄文に磨消を施す数条に沈線が垂下する小片6片。帯状区画と判断される小片2片。粗い磨消部と無文に刺突を施す部分が区画なく区別される小片1片、後期初頭か。地縄文に単沈線で縦位とみられるモチーフを施す小片1片、堀之内1式か。地縄文に沈線のみえる小片8片。時期不明。無文に明瞭な地条線を施す小片5片。1片は曾利式系か。底部破片4片。後期以降か。条線を施す小片1片。縄文を施す小片8片。無文の小片11片。磨減片・微細片16片。

取り上げを行った石器・礫は表19・20に記載する。この他、小片が24片出土する。

本遺構の時期は、21に後出する様相がみられるが確認面付近からの出土であり、後期初頭と判断される。



第20図 第111号住居跡出土遺物実測図(3)

合、径約7.0mと推定される。また、SI-111との床面レベルの差、SI-111のp1・2の床面覆土を切るような堆積やSI-154とのレベル差からは、本遺構のSI-111側への住居の拡張や掘り直し等も考え得るが、判断としない。P.232と重複する。本遺構が古いが、同一遺構である可能性も残る。形状・規模・主軸 平面形は円形状で、径は5.0mほどと推定される。上面の削平により掘り込みは浅く、遺構確認面からの深さ

第154号住居跡 (SI-154)

(第16・17・21～23図 表21
図版二・二八)

位置 B区C-5・6グリッドに位置する。調査区東・西端部に接し、調査区外に延びる。重複関係 円墳の周溝であるSZ-41(南)と重複する。本遺構が古い。古墳墳丘の増築により、上面は削平された可能性が高い。SI-111と重複する。本遺構が古い。ただし、SI-111とは、本遺構p3とSI-111p1底面がほぼ同レベルであることなどから、第1項に記載にとおり、同一遺構の可能性もある。同一遺構であった場合

約0.2mである。床面レベルは150.5m前後である。**覆土** 19～48層の30層分を確認した。29～33層はp3覆土か。30・31層は柱痕、32・33は構築土か。24層はp3に関連する堆積土か。38～42層はp4覆土か。推定される床面レベルの150.5m付近を境にローム粒子の堆積量に違いがみられる。上位の38・39層には少なく、下位の40・41層には多く含まれる。46～48層はビット状の床面施設が疑われるが、床面には明瞭な痕跡は確認されなかった。**床面** 住居の全容が明らかでなく、不詳な点が多い。床面はローム漸移層か。地山を床面とすると床面レベルは150.5m前後であるが、p3・4の堆積土は覆土を掘り込むように堆積することから、層上位の150.6m以上に床面があった可能性も考え得る。**柱穴** 床面にp1～8を確認した。また、P-232が本住居跡に帰属する可能性も残る。p1～7は覆土の堆積状況や底面レベルから柱穴の可能性が考えられる。円形状の住居の周縁に沿って柱穴を穿ったか。各々の規模(径・推定床面レベル150.5mからの深さ・底面レベル)は、p1:0.25m前後・約0.28m・約150.5m、p2:約0.25m・約0.41m・約150.4m、p3:約0.5m・約0.5m・150.5m、p4:(東西約0.5m・南北約0.7m)・約0.28m・150.22m、p5:(東西約0.42m・南北約0.5m)・約0.34m・150.16m、p6:約0.6m・約0.31m・約150.19m、p7:(東西約0.8m・南北約0.6m)・約0.39m・約150.1m、p8:(東西0.8m以上・南北約0.8m)・約0.04m・約150.46mである。p1～p7の底面レベルは何れも150.1m前後である。P-232は東西約0.5m・南北約0.54m・深さ約0.61m・底面レベル約150.13mである。

火処 確認されなかった。SI-111と同一遺構である可能性も残る。覆土中から赤色変化やススの付着が確認される小礫・礫塊が出土する(第21表参照)。炉材や炉周辺で使用された礫である可能性が考えられる。住居廃絶時の廃棄、或いは後世の擾乱に伴う出土か。

遺物出土状況 遺構内から土器・石器など91点が出土する。何れも覆土中から出土する。礫の出土が多い。1～18は土器、19～34は石器・礫である。

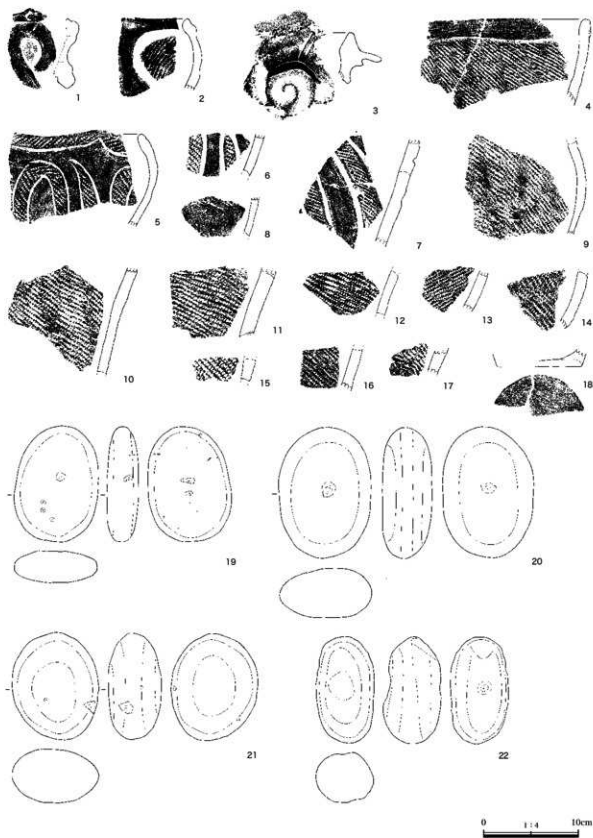
出土遺物 1は「8」字状の突起か。内面は剥落する。称名寺式か。2は波状口縁部下に沈線で区画された縄文部でモチーフを描く。加曾利EⅢ式に平行する時期か。3は舌状の突起下部に渦巻きの隆帯を配する。大木9a式に影響が強い。4は無文の口縁部は体部より器厚があり、体部は段差をもって区画される。口縁部下は沈線状にナデを施した後地縄文を縦位に施す。5は口縁端部に縄文を施す。窓枠状の区画になるか。体部は帯状区画で渦巻きのモチーフを描出するか。6は5とモチーフが似るが別個体とみられる。7は帯状区画とみられる小片。縄文部と無文部の割合は1:1か。5～7は称名寺式か。8は無文の体部小片。器面の状況等から後期以降と考えられる。9～12は縦位に地縄文を施す。9・10は間隔施文を意識か。9はRIとみられる。13・14は横位に地縄文を施す。15～17は斜位に地縄文を施す。18は底部破片。成形や器面の状況から後期か。

図示し得なかったが、9は無文の波状口縁部下に微隆起線が横巡する小片、38・39・45・46は微隆起線で縄文部と無文部を区画する破片、何れも称名寺式に平行する加曾利EⅡ式か。35は間隔施文を施す地縄文小片、加曾利EⅡ式前半か。42・43は沈線で縄文部と無文を区画する小片、加曾利EⅡ式後半～後期初頭か。17は条線を施す小片。49は地縄文に沈線の一部がみえる小片。40・41は地縄文小片である。

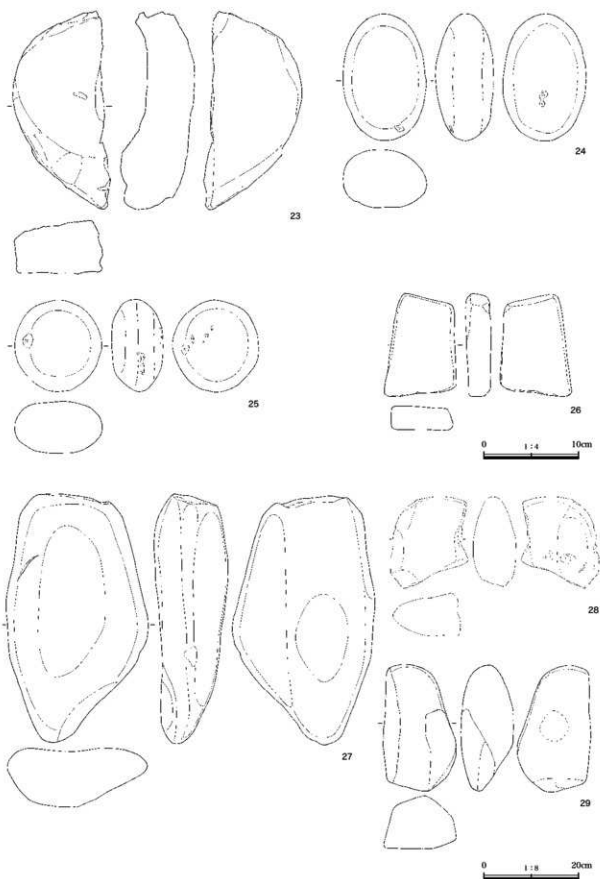
この他、図示し得なかった土器片は、地縄文片3片、磨滅した小片1片である。

取り上げを行った石器・礫は第21表に記載する。

本遺構の時期は後期初頭か。



第21図 第154号住居跡出土遺物実測図(1)



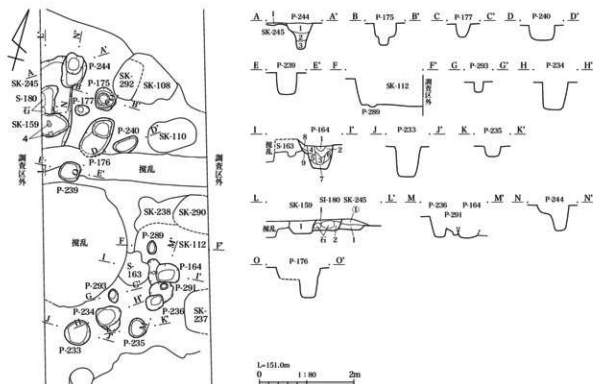
第22図 第154号住居跡出土遺物実測図(2)



第23図 第154号住居跡出土遺物実測図(3)

第180号遺構 (S-180) (第24図 表22)

位置 B区B・C・4グリッドに位置する。調査区西端に位置し、調査区外に延びる。礎を伴う小穴であるS-180と周囲に位置するP-175・177・239・240・244、SK-245を含めて本遺構とする。重複関係SZ-41周溝内に位置する。S-180とSK-156が重複する。S-180が古い。また、SK-245はS-180・P-244より古い。SK-156・245の本遺構への帰属は不明である。SK-156の事実記載については第3節に記載する。**形状・規模・主軸** 形状は上面の削平により平面形は不詳である。遺構確認時における掘り込みの確認、纏まった遺物の出土はない。削平による床面以上の施設の消失、本来掘り込みを有しない可能性が考えられる。底面レベルが150.5m前後のピットであるP-175・176・239・244の配置からは円形が想定される。これらのピットを結ぶ直径の推定は約3.0mであり、径4.0m程度の住居範囲が想定される。覆



S-180

- 1 暗褐色土 炭人物少量、ローム粒子(～0.1cm)・炭化物粒子(～0.1cm)微量。
2 暗褐色土 ローム粒子(～0.1cm)・ロームブロック(～1.0cm)少量、炭化物粒子微量。

SK-159

- 1 暗褐色土 ローム粒子(～cm)やや多量、ロームブロック(～0.5cm)・炭化物粒子(～0.1cm)・白色粒子少量。

SK-245

- 1 暗褐色土 ローム粒子(～0.2cm)・ロームブロック(～1.0cm)含む、炭化物粒子(～0.2cm)・白色粒子(～0.1cm)少量、しまりあり。
2 暗褐色土 ローム粒子(～0.2cm)やや多量、ロームブロック(～0.8cm)・炭化物粒子(～0.2cm)・白色粒子少量、しまり強い。

P-164

- 1 暗褐色土 ローム粒子(～0.1cm)・炭化物粒子(～0.4cm)・白色粒子含む、しまり強い。
2 暗褐色土 ローム粒子(～0.1cm)多量、ロームブロック(～1.0cm)含む、炭化物粒子(～0.2cm)少量、しまり強い。
3 暗褐色土 ローム粒子(～0.3cm)・白色粒子含む、炭化物粒子(～0.2cm)少量、しまり強い。
4 暗褐色土 ローム粒子(～0.1cm)・白色粒子含む、ロームブロック(～1.0cm)・炭化物粒子(～0.1cm)少量、しまり強い。
5 暗褐色土 ローム粒子(～0.2cm)やや多量、炭化物粒子(～0.2cm)・白色粒子少量、しまり強い。
6 暗褐色土 ローム粒子(～0.2cm)・ロームブロック(～1.2cm)多量、炭化物粒子(～0.1cm)・白色粒子少量、しまりあり。
7 暗褐色土 ローム粒子(～0.2cm)・ロームブロック(～0.6cm)多量、炭化物粒子(～0.2cm)少量、しまり強い。
8 暗褐色土 ローム粒子(～0.1cm)含む、炭化物粒子(～0.1cm)・白色粒子少量、しまり強い。
9 暗褐色土 ローム粒子(～0.2cm)やや多量、炭化物粒子(～0.1cm)・白色粒子少量、しまり強い。

P-244

- 1 暗褐色土 ローム粒子・ロームブロック(～3.0cm)多量、炭化物粒子(～0.1cm)・白色粒子少量、しまり強い。
2 暗褐色土 ローム粒子(～0.1cm)多量、ロームブロック(～1.0cm)含む、炭化物粒子(～0.2cm)・白色粒子少量、しまり強い。
3 暗褐色土 ローム粒子・ロームブロック(～0.8cm)含む、しまり強い。

第24図 第180号遺構周辺実測図

土 S-180の覆土2層、P-244の覆土3層、SK-245の覆土1層、掘り込みに帰属しない①層を確認した。S-180の2層はよく似るが、1層のロームブロックの堆積が2層より多い。2層の上面は礫の上端部にあたる。S-180をが跡とした場合のが穴内覆土との想定も可能か。①層については覆土に相当する掘り込みの確認はない。S-180が掘り込まれることや、1層下面がS-180の2層上面のレベルに近いことから、S-180を竪穴住居跡とした際の床面覆土の仮定が可能か。**床面** 遺構確認面より上位は表土であり、床面施設の消失、竪穴住居ではない可能性が考えられる。遺構確認面のレベルは150.95～151.0 m、①層を覆土と想定した場合の①層下面のレベルは151.0 m前後である。**柱穴** 柱穴と想定されるのはP-175～177・239・240・244である。P-175は壁面に段を持って立ち上がり。径(遺構確認面・底面 以下同様)は約0.5 m・0.17 m、深さ(遺構確認面 以下同様)約0.47 m、底面レベル約150.48 mである。P-176は柱穴相当部の南側に掘り込みを持つ。掘り込みを含めた遺構確認面の規模は東西約0.55 m・南北の推定約0.9 m、柱穴相当部の底径0.28 m前後である。深さは約0.63 m、底面のレベル約150.31 mである。P-177は東西約0.3 m・南北約0.2 m、深さ約0.29 m、底面のレベル約150.65 mである。P-239は径約0.42 m・約0.32 m、深さ約0.46 m、底面のレベル約150.48 mである。P-240の規模は東西約0.54 m・南北約0.46 m、底面の規模は東西約0.48 m・南北0.22 m、深さ約0.3 m、底面のレベル約150.59 mである。P-244はP-176同様に南側に浅い掘り込みを持つ。掘り込みを含めた遺構確認面の規模は東西約0.5 m・南北約0.75 mである。柱穴相当部の深さは約0.56 m、底面のレベル約150.4 mである。これらのピットのうち、底面レベルが150.5 mより深いP-175・176・240・244はS-180を囲んで半円を描く。

火処 火処と想定されるのはS-180であるが、掘り込み、礫の大部分が遺構内にあるため不詳である。が跡と仮定した場合、柱穴と想定できるP-175・176・244との距離が0.4～0.9 mと至近である。S-180を囲む位置にあるSK-245について不詳である。S-180の規模はSK-159との重複や調査区外に延びることから不詳である。表土下からの深さ約0.23 m、底面から礫上面までの高さは約0.2 m、底面のレベルは約150.9 mである。SK-245の規模は攪乱や調査区外に延びることから不明である。S-180が掘り込む①層が上面を覆う。S-180との関連があるとすれば、S-180の構築、或いは住居の構築との関連が考えられる。表土下からの深さ約0.1 m、底面のレベル約150.9 mである。

遺物出土状況 小片であり図示し得なかったが、出土遺物は以下のとおりである。

S-180 覆土中からLRの地縄文を斜位に施す小片が出土する。調査区西壁付近から石皿が出土する。P-176 覆土中から加曾利E式後半～後期前葉とみられる沈線間に磨消を施す懸垂文小片1片、地縄文小片1片が出土する。P-240 覆土上層、底面から10cmほど上位から礫が出土する。

本遺構の時期は判然としない。

第281号遺構 (S-281) (第25・26図)

位置 C区D・E-11 グリッドに位置する。**重複関係** 遺構上面は削平によって、南半部はSZ-26(北)との重複によって失われているか。**形状・規模・主軸** P-24・197～208・279・SK-298の配置から円形が想定される。柱穴と推定される各ピットを結ぶ直径は約6.0 mである。**覆土** P-204～207の堆積を確認した。P205は炭化物粒子を多量に含む。P-206・207は黒色土が堆積する。攪乱である可能性も否めない。

床面 表土下が遺構確認面であり、床面施設は失われているものと判断される。壁の有無についても不詳である。遺構確認面のレベルは150.55 m前後である。**柱穴** P-24・197～208・279・SK-298が想定される。P-197は風倒木との重複があるか。SK-298については、形状・位置から同様の性格であるのか疑問が残る。各々の遺構確認面からの径・深さ・レベル(約)はP-24:東西0.74 m・南北0.5 m・深さ0.29 m・

レベル 150.31 m、P-197：径 0.65 m・深さ 0.25 m・レベル 150.25 m、P-198：南北 0.65 m、P-199：東西 0.4 m・南北 0.64 m・深さ 0.25 m・レベル 150.29 m、P-200：東西 0.16 m・南北 0.26 m、P-201：東西 0.14 m・南北 0.16 m、P-202：東西 0.38 m・南北 0.34 m・深さ 0.2 m・レベル 150.36 m、P-203：東西 0.45 m・南北 0.29 m・深さ 0.12 m・レベル 150.44 m、P-204：径 0.22 m、P-205：東西 0.3 m・南北 0.19 m、P-206：東西 0.34 m・南北 0.25 m・深さ 0.2 m・レベル 150.41 m、P-207：東西 0.4 m・南北 0.48 m・深さ 0.29 m・レベル 150.31 m、P-208 は p 1～p 5 の掘り込みからなる。p 1 径 0.36 m・p 2 径 0.36 m・深さ 0.23 m・レベル 150.37 m・p 3 径 0.39 m・深さ 0.2 m・レベル 150.40 m・p 4 径 0.2 m 前後の不整形・p 5 径 0.2 m・深さ 0.23 m・レベル 150.37 m、P-279：径 0.3 m・深さ 0.28 m・レベル 150.32 m、SK-298：南北 0.7 m である。

火処 調査区内からは確認されなかった。

遺物出土状況 P-24 から 17 点が出土する。

出土遺物 図示した遺物は P-24 から出土する。

1 は口縁部直下から斜位の地縄文を施す。中期後半～後期前葉か。2 は口縁部下に 2 条の沈線が横巡する。沈線は先の細い工具で施されたとみられる。内外面にオコゲが付着する。後期初頭か。3 は無文の口縁部にやや弧状の背の低い隆帯を貼り付けキザミを施す。4 は地縄文に集合沈線で文様を描くか。堀之内 1 式か。

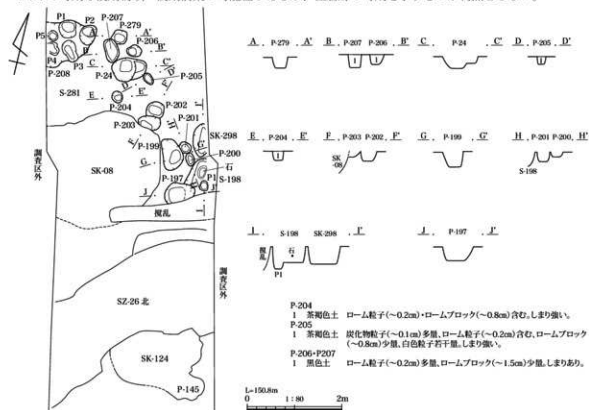
この他、図示し得なかった出土遺物は以下のとおりである。

帯状区画とみられる曲線のなモチーフを描く小片 1 片、称名寺式か。地縄文に単沈線とこれに沿う沈線が垂下する小片 2 片、堀之内 1 式か。地縄文小片 9 片。底部小片 1 片。微細片 11.8 g。小礫塊 1 片である。

P-24 の時期は後期初頭～後期前葉の可能性はあるが、住居跡の時期を示すものか判然としなない。



第 25 図 第 281 号遺構出土遺物実測図



第 26 図 第 281 号遺構周辺実測図

第3節 袋状土坑

1. 調査の概要

本調査区からは 38 基の袋状土坑を確認した。上面の削平により、開口部・頸部・括れ部上部を失う遺構が多く、僅かな括れ部から袋状土坑と判断した遺構もある。また、「第4節土坑」の中に記載した中で、削平により底面のみが残存する遺構については、袋状土坑であるものが含まれる可能性は高い。

本調査区で確認された袋状土坑は、底部から内傾して立ち上がり、底径と括れ部の最大径が一致する、所謂フラスコ状は少なく、皿状や凹凸のあるものの概ね平坦な底面から緩やかに立ち上がり、内傾する断面形を持つ形状のものが多くを占める。底面が皿状の遺構については、壁への立ち上がりが曖昧ではあるが、立ち上がりの屈曲点を底径とした。上部の削平により判然としないが、底面から 0.2 m 程上位が最大径となるものが多い。底径は 1.0 m 前後～2.0 m を超えるものが確認される。

最も残存状況が良好であるのは SK-04、SK-71 等である。削平や重複により遺構の全容を調査し得なかったが遺構上部が良好に残る。

SK-17・SK-47・SK-63・SK-121・SK-153・SK-166・SK-294 については、遺構上部の削平から断面形の確認はできなかったものもあるが、形状や規模、覆土の堆積状況等から袋状土坑と判断した。

SK-103・106・227・286 は近接して位置し、上面の削平や後出する遺構などにより底面のみが残存する。いずれも形状や規模などから、SK-103・227 については SK-151 同様の底径 1.0 m ほどの袋状土坑、SK-106・286 は SK-04 等と同様の底径の大きな袋状土坑と判断した。

また、「第4節土坑」に記載した SK-18・133・137 などについては現状で断面の括れは確認できないが、袋状土坑である可能性が高い。

遺構内からの出土遺物の主体は人頭大～親指大の礫や礫石器である。被熱による赤色変化やススの付着が観察されるものが少なくない。調査の進捗上、全てを取り上げることはできず、石器やこれに類する形状の礫、被熱等の痕跡のある自然石、礫塊を中心に取り上げを行った。事実記載中に表で示したが、取り上げを任意に行わざるを得ず、遺構の全容を明らかにし得なかった点や遺構ごとに取り上げの多少があり均一な調査をなし得なかった点などがあることを明示する。縄文土器については出土遺物の全てを取り上げた。多くは小片である。深鉢形土器の小片が主体となるが、壺形や赤彩を施す土器の小片の出土が目立つ。

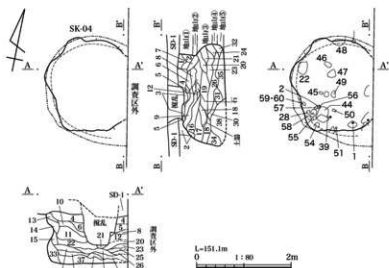
2. 袋状土坑

第4号土坑 (SK-04) (第27～30図 表23 図版三・二)

位置 C区E-13グリッドに位置する。遺構東端部は調査区外にある。**重複関係** SD-01が遺構上面で重複する。本遺構が古い。**形状・規模・主軸** 開口部の平面形は、上部の崩落、SD-01の重複により不詳である。括れ部上端は径 1.0 m 以内の円形状と考えらる。底面形はやや東西に長い楕円状で、底径は東西 1.6 m 以上・南北約 1.94 m、遺構確認面からの深さ約 0.9 m、主軸 N-90°-W である。東壁際の底面端部は遺物の出土により観察を逸した。断面形は袋状である。括れ部上端部のレベルは 150.7 m 前後で、遺構確認面から約 20cm 下部、底面より約 70cm 上位にあたる。最大径部のレベルは 150.0 m 前後で、括れ部上端から約 50cm 下部、底面より約 30cm 上位にあたる。最大径は東西 1.7 m 以上・南北約 2.2 m である。最大径部は上端部の平面形より 0.5～0.6 m オーバーハングするものと判断される。底面レベルは 149.64 m 前後である。底面は概ね平坦で、砂質ローム下の粘性のあるローム層である。壁面は砂質ローム層を掘り込んで構築される。**覆土** 38層を確認した。1・2・10・13～15・21・24・32・33は壁の前落土か。37・38層は比較的似た特徴

を持つが、SP-A・Bでは、焼土粒子の混入等など、覆土に若干の差異が認められる。砂層などの堆積は確認されなかった。

遺物出土状況 覆土中から土器片 166 点が出土した。石器・自然礫は出土が多量であり、79 点のみを取り上げた。遺構上層から底面に至るまで、人頭大の礫や土器片の出土が顕著であり、小片・小礫を取り上げつつ覆土除去作業を行った状況が第 27 図・図版三である。便宜的に、出土レベルによって、床面付近、覆土



SK-04

- 黄色土 褐色土混じる。しまりあり、粘性あり。
 2 暗黄褐色土 ローム粒子多量。しまりややあり、粘性あり。
 3 暗褐色土 ローム粒子・ロームブロック少量・暗黄褐色土少量。しまりややあり、粘性あり。
 4 暗黄褐色土 ローム粒子・ロームブロック少量。赤色粒子(焼土)若干。しまりややあり、粘性少ない。
 5 暗褐色土 ローム粒子含む。しまりあり、粘性ややあり。3層と同一層。
 6 暗褐色土 ローム粒子(-0.2m)含む。ロームブロック(-1.0m)・炭化物粒子(径0.4cm)少量。白色粒子若干。しまり強い。
 7 暗黄褐色土 ローム粒子多量。ロームブロック少量。炭化物粒子・赤色粒子若干。しまりややあり、粘性ややあり。
 8 暗黄褐色土 ロームブロック含む。ローム粒子少量。炭化物粒子・赤色粒子若干。しまりややあり、粘性ややあり。
 9 暗黄褐色土 ローム粒子・ロームブロック少量。炭化物粒子若干。しまりややあり、粘性ややあり。
 10 暗褐色土 ローム粒子(-0.2m)やや多量。ロームブロック(-1.5m)含む。炭化物粒子(-0.2m)・白色粒子若干。しまりあり。
 11 暗黄褐色土 ローム粒子(-0.2m)やや多量。ロームブロック(-1.0m)含む。炭化物粒子(-0.5m)少量。白色粒子若干。しまり強い。
 12 暗黄褐色土 ローム粒子少量。ロームブロック含む。炭化物粒子若干。しまりややあり、粘性ややあり。
 13 暗褐色土 ローム粒子(-0.5m)含む。白色粒子若干。しまり強い。
 14 暗黄褐色土 ローム粒子(-0.2m)多量。ロームブロック(-0.5m)含む。炭化物粒子(-0.1m)少量。しまり強い。
 15 暗黄褐色土 ローム粒子(-0.2m)・ロームブロック(-1.0m)多量。しまりややあり。
 16 暗黄褐色土 ローム粒子含む。ロームブロック・炭化物粒子若干。しまりややあり、粘性ややあり。
 17 暗黄褐色土 ローム粒子少量。黄色土含む。炭化物粒子若干。しまりややあり、粘性ややあり。
 18 暗黄褐色土 ローム粒子・ロームブロック・黄色土少量。炭化物粒子若干。しまりややあり、粘性ややあり。
 19 暗黄褐色土 ローム粒子・ロームブロック含む。黄色土・炭化物粒子少量。しまりややあり、粘性ややあり。
 20 暗黄褐色土 ローム粒子含む。黄色土・炭化物粒子少量。赤色粒子少量。しまりややあり、粘性ややあり。
 21 暗黄褐色土 ローム粒子多量。黄色土含む。礫(5.0cm)少量。しまりややあり、粘性ややあり。
 22 暗褐色土 ローム粒子(-0.2m)やや多量。ロームブロック(-1.5m)含む。炭化物粒子(-0.3m)少量。白色粒子若干。しまりあり。
 23 暗褐色土 ローム粒子(-0.1m)・ロームブロック(-1.5m)含む。炭化物粒子(-0.2m)・白色粒子若干。しまり強い。
 24 暗黄褐色土 ローム粒子(-0.2m)含む。ロームブロック(-8m)・炭化物粒子(-0.1m)少量。白色粒子若干。しまり強い。
 25 暗褐色土 ローム粒子・ロームブロック含む。黄色土・炭化物粒子少量。しまりややあり、粘性ややあり。
 26 暗黄褐色土 ローム粒子(-0.2m)多量・ロームブロック(-1.0m)多量。炭化物粒子(-0.2m)少量。白色粒子若干。しまり強い。
 27 暗黄褐色土 ローム粒子(-0.2m)・ロームブロック(-1.0m)主体。しまりあり。
 28 暗黄褐色土 ローム粒子(-0.2m)・ロームブロック(-1.0m)多量。白色粒子若干。しまりあり。
 29 暗黄褐色土 ローム粒子・ロームブロック少量。しまりややあり、粘性ややあり。
 30 黄褐色土 ロームブロック多量。ローム粒子含む。炭化物粒子少量。赤色粒子若干。
 31 黄褐色土 黄色土多量。ロームブロック少量。しまりあり、粘性ややあり。
 32 暗黄褐色土 ローム粒子(-0.2m)・ロームブロック(-3.0m)多量。炭化物粒子(-0.2m)少量。しまりややあり。
 34 黄褐色土 ローム粒子(-0.2m)多量。ロームブロック(-1.0m)少量。しまりあり。
 35 黄褐色土 ローム粒子・黄色土少量。しまりややあり、粘性ややあり。(B・F)
 35 暗黄褐色土 ローム粒子(-0.3m)多量。ロームブロック(-1.0m)・炭化物粒子(-0.1m)少量。白色粒子若干。しまりややあり。(A・A)
 36 暗褐色土 ローム粒子(-0.2m)含む。白色粒子若干。しまり強い。
 37 暗黄褐色土 ロームブロック(-3.0m)主体。しまりあり。
 38 黄褐色土 黄色土多量。ロームブロック少量。しまりあり、粘性ややあり。32層と似る。

地山① 砂質ローム層。

地山② 地山①・地山③の遷移層。

地山③ 地山①のローム層に砂質ロームブロック(-6.0m)を含む。

地山④ 砂質ローム層。

地山⑤ 地山④に類似した砂質ローム層。

第 27 図 第 4 号土坑実測図

下層（149.7～149.8 m；底面から挟れ部下端）、挟れ部下位（149.8～150.0 m）、挟れ部中位（150.0～150.2 m）、挟れ部上位（150.2～150.5 m）、覆土上層（150.5～150.6 m）に区分すると、29・30・31は床面付近、1～4・7～11・14・19～21・26・27は覆土下層、5・16～18は挟れ部下位、6・13・22～24は挟れ部中位、25は挟れ部上位、12は挟れ部上端、15・28は確認面に相当する。1～31は土器片、32～39は石器・礫である。第27図中、番号を付さなかった遺物は礫である。

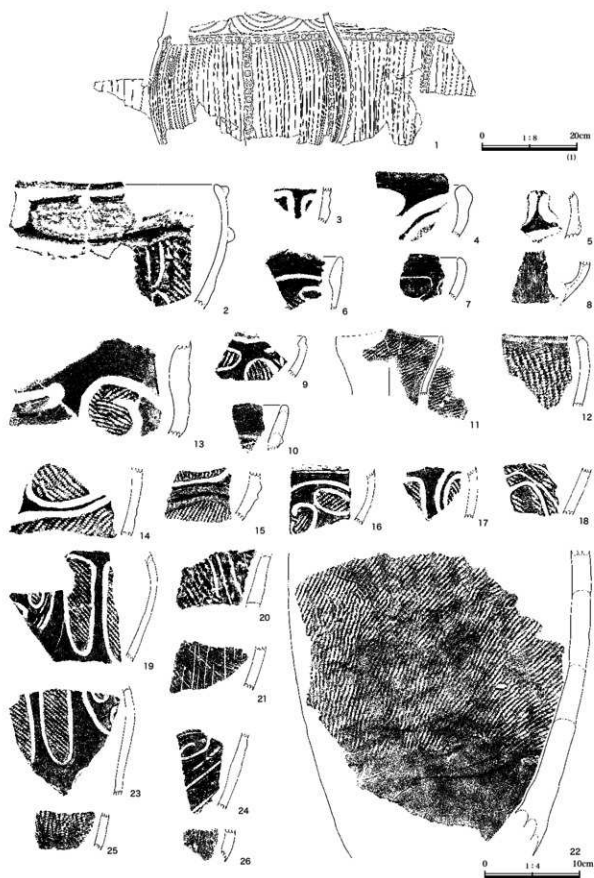
出土遺物 1は口縁部と体部を押捺を付した隆帯で区画する。口縁部は弧状の沈線が連続する。体部は地条線に押捺を付した隆帯が垂下する。曾利式か。8は橋状把手である。右下部1/4が残存する。細く鋭い工具で条線を施す。2は深鉢形土器の小片である。口縁部文様帯は隆帯と沈線で円形の単位文、区画文を作出する。隆帯は断面が三角形となる部分が多い。体部は沈線で区画した磨消部でモチーフを描く。器面の色調は深い橙色で胎土の混入物が比較的多い。内外面とも器面の磨滅が顕著である。大木8b式か。5は瀟洒な隆帯と凹線状の沈線で単位文と区画文を作出する。単位文は渦巻き状か。3は隆帯と沈線で口縁部文様帯を作出か。7は沈線で口縁部文様帯を描出か。3・5・7は加曾利EⅡ～Ⅲ式か。4は隆帯と太めの沈線で作出した口縁部文様帯か。6・12・13は沈線で口縁部文様帯を描出か。加曾利EⅢ式か。11は波状口縁部から地縄文を施す。縦位の間隔施文を意図か。12は口縁部下から横位の縄文を施す。口縁部の形状から加曾利EⅢ式か。10は無文の口縁部を微隆起線上の高まりで区画か。体部の縄文は高まり上に施文される。14・15は隆帯と沈線で作出された口縁部文様帯か。隆帯は細く、沈線は凹状である。15の隆帯は断面が三角形である。加曾利EⅢ式か。16・17・19・23は同一個体か。沈線で区画された縄文部で文様を描く。上下2段の文様構成と判断される。加曾利E式後半か。18は沈線で文様を描く大木8b式の体部小片か。20は磨消を伴う沈線が斜方向に垂下する。加曾利EⅡ式か。28は懸垂文か。加曾利EⅢ式か。22は深鉢形土器の体部下半の破片ある。地縄文は重複し判然としなが、縦位の間隔施文を意図か。内外面ともオコゲが付着する。器厚3.0cm前後、現重量2.3kgである。加曾利E式前半か。21は無文に条線が垂下する。曾利式系か。26は細く鋭い工具で縦位のモチーフを描く。堀之内式のモチーフともみえるが使用される工具は8の橋状把手に似る。24は帯状区画内でモチーフを描くか。刺突を伴う短沈線が配される。称名寺式か。25は底周部の小片である。内面にスガが付着する。29は底部小片である。内外面にスガが付着する、30は磨消を伴う懸垂文が垂下する。加曾利EⅡ～Ⅲ式か。31は土製円盤か。タテ3.9cm×ヨコ3.7cm×厚さ1.3cm×重さ20.25gである。磨滅・劣化が著しい。

32～40は礫石器か。図示し得なかった石器・礫等とともに表23に記した。40には石皿の可能性が残る。礫石器に分類しなかった不定形な礫についても、礫石器の形状に似たものが多い。

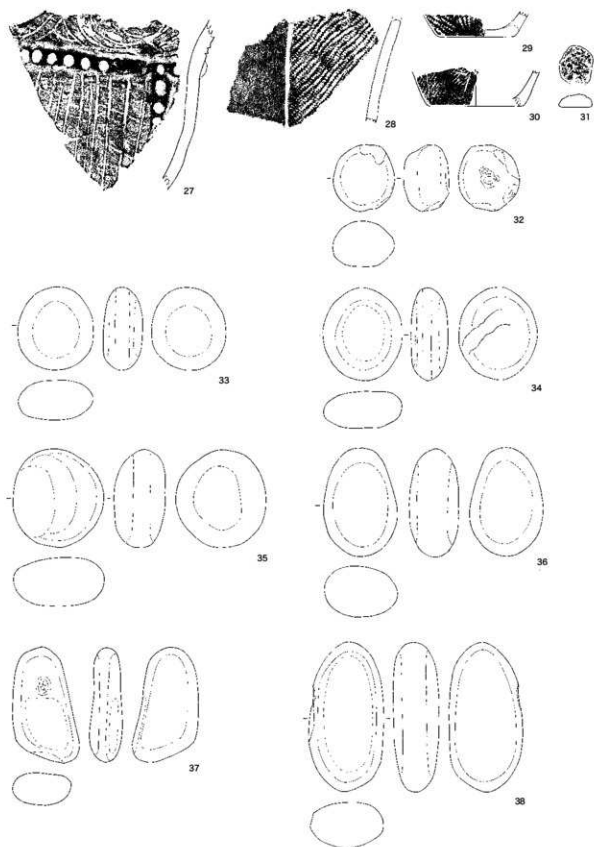
この他、図示し得なかった出土土器は以下のとおりである。

隆帯と沈線で作出する口縁部文様帯4片、加曾利EⅡ～Ⅲ式か。無文の口縁部下に沈線で文様を描く小片1片、加曾利EⅢ式の口縁部文様帯か。幅広い無文の波状口縁部下に斜位の地縄文を施す小片1片、無文の口縁部小片3片、時期不明。橋状把手小片1片。地縄文に断面三角形の隆帯が貼付される体部小片2片。加曾利E式中頃か。磨消を伴う懸垂文を施す体部小片2片。加曾利E式中頃。懸垂文或いは磨消縄文手法の体部小片7片。加曾利EⅢ式。地縄文に沈線が施される小片14片。中期後半～後期初頃か。微隆起線で縄文部と無文部を区画する小片2片。無文帯に微隆起線を配する小片5片。曾利式とみられる地条線4片。先の細い工具で施す地条線3片。中期末葉～後期前葉。無文に細い沈線でモチーフを描く小片4片。無文の底部2片。加曾利E式後半～後期前葉。縄文を施す小片48片。無文の小片34片。その他、磨滅した小片及び微細片である。

本遺構の時期は覆土下層に10が出土することから、後期初頃か。

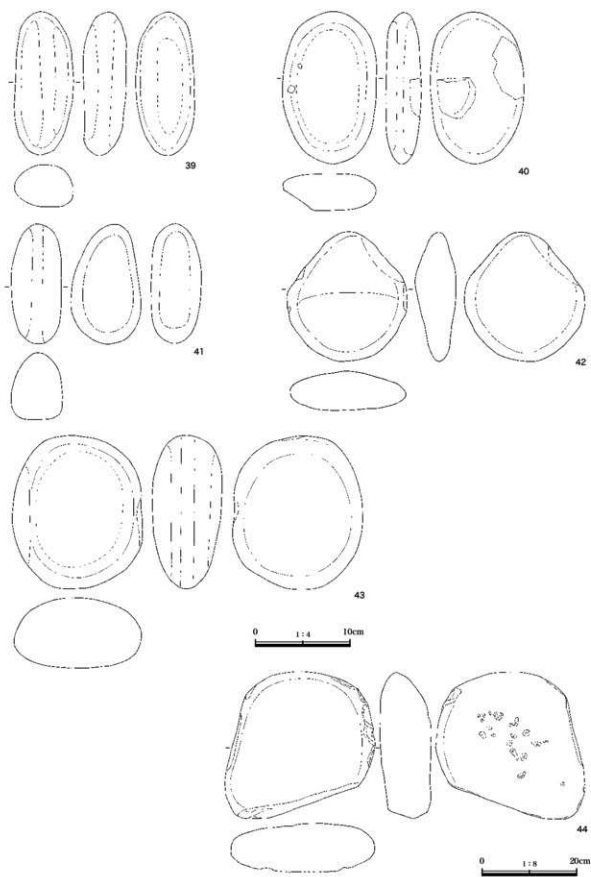


第28图 第4号土坑出土遗物实测图(1)



第29図 第4号土坑出土遺物実測図(2)

0 1:4 10cm



第30图 第4号土坑出土遗物实测图(3)

第5号土坑 (SK-05) (第31・32図 表24 図版三)

位置 C区D・E-11グリッドに位置する。調査区東側にあり、半部は調査区外にある。**重複関係** SK-06と重複する。本遺構が古い。**形状・規模・主軸** 削平によって遺構上半部は失われている。調査終了時には崩落したが、遺構南半部は最大径部付近が遺構の上ばとして残存しており、第31図に破線で示した。平面形は不詳であるが、円または楕円状、断面形は袋状とみられる。深さは約0.4mを確認した。最大の括れ部は、現状で底面から約0.3m上位の150.2m付近に観察される。底面径は約1.85m、最大の括れ部は、SP-Aで底面より20cmほど外側に括れることから、2.0m以上の径と考えられる。底面レベルは149.88m前後である。遺構西北部の底面に壁面を円形状に穿つ浅い掘り込みが確認された。深さは5.0cmほどである。土坑内の子ピットの可能性もあるが、小ピット内から出土する13や覆土中から出土する3・14に後出する特徴がみられることから、時期を遡る可能性が考えられる。遺構自体の壁面はローム層を掘り込む。底面は中央部付近に浅い皿状の凹凸があり、凹部は小礫層、凸部はローム層となる。**覆土** 16層を確認した。15層以下の堆積を失したが、北側の12・15層の堆積が最下位にあり、ロームを多く含む。早い段階で括れ部以上が取り払われた可能性も考え得るか。2・4層は壁の崩落層か。

遺物出土状況 覆土中から99点が出土する。13は子ピットから出土する。10は底面付近、7は底面とに4.0cmほどの間層を挟む。図示し得なかったが16・17は礫である。

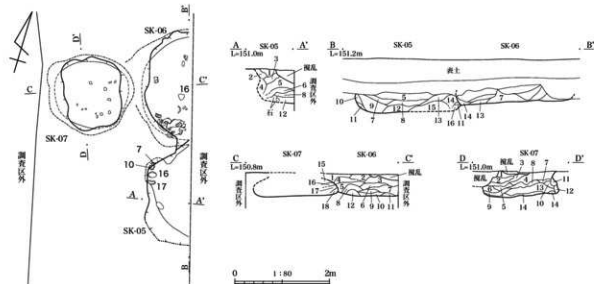
出土遺物 1は突起の上部部に渦巻き状の沈線を描く。渦巻き下部から沈線が垂下する。加曾利E式後半か。2・4・8・9は同一個体か。波頂部下に円形の単位文とこれに続く区画文を沈線で配する。懸垂文は幅広で沈線間に磨消を伴う。8は括れ部付近から下方、9は括れ部以下の破片か。6は低平な隆帯と沈線で円形の単位文を作出する。これに続く区画文は沈線で施される。懸垂文は幅広で沈線間に磨消を伴う。内外面にススやオコゲが付着する。5は隆帯と沈線で単位文を作出、これに続く区画文を沈線で施す。懸垂文は幅広で磨消を伴う。2・4～6は加曾利EⅢ式か。7は隆帯と沈線で作出すり口縁部文様か。区画文内に凹状の刺突列を配する。加曾利EⅡ～Ⅲ式か。3は無文の口縁部下に微隆起線が巡る。加曾利EⅣ式～後期初頭か。10は磨消縄文手法か、懸垂文か。11・12は同一個体か。内面にススが付着する。磨消部でモチーフか。11は括れ部から上方、12は括れ部付近の破片か。加曾利EⅢ～Ⅳ式か。13は微隆起線でモチーフを描くか。加曾利EⅣ式か。14は微隆起線で縄文部と無文部を区画しモチーフを描く。加曾利E式に平行する後期初頭の薄片か。その他、図示し得なかった土器片は、無文の波状口縁部3片、無文の口縁部下に沈線のみえる小片2片、磨消縄文手法か或いは懸垂文8片、地縄文に沈線で波状の沈線を描く小片1片、無文に沈線でモチーフを描く小片6片、櫛歯状工具で条線を描く小片2片、地縄文を施す小片11片、無文の小片31片、磨滅片6片等である。

取り上げた石器・礫は表24に記載する。

本遺構は加曾利EⅢ式の出土が多いが、中期末葉～後期初頭である可能性が考えられる。

第6号土坑 (SK-06) (第31・33図 表25 図版四・一八・二一)

位置 C区D-11グリッドに位置する。調査区東側にあり、半部は遺構外にある。**重複関係** 西側に後出するSK-07、南側に先行するSK-05が重複する。**形状・規模・主軸** 削平によって遺構上半部は失われている。調査の過程で大方が崩落したが、遺構確認時は壁面の挟り込みの残存が良好であり、第31図は遺構確認時の状況を示した。なお、図版四は崩落後の状況を撮影したものである。平面形は不詳であるが、円または楕円状とみられる。断面形は袋状である。構確認面からの深さは0.45m前後である。壁面の括れ部は、削平・重複により判然としなが、底面より0.2m上位の150.2～3m付近に最大径を持つか。底面径は



SK-05

- | | | |
|----|-------|--|
| 1 | 暗茶褐色土 | ローム粒子(～0.1m)含む、炭化物粒子(～0.1m)少量、白色粒子若干層、硬くしまる。 |
| 2 | 暗褐色土 | ローム粒子多量、ロームブロック(～0.5m)含む、硬くしまる。壁の崩落土か。 |
| 3 | 暗茶褐色土 | ローム粒子(～0.1m)含む、黒色土ブロック(～1.0m)少量、白色粒子若干層、しまりややあり。 |
| 4 | 暗茶褐色土 | ローム粒子(～0.1m)多量、ロームブロック(～0.3m)やや多量、炭化物粒子若干層、しまりあり。壁の崩落土か。 |
| 5 | 暗褐色土 | ローム粒子(～0.2m)やや多量、ロームブロック(～0.5m)少量、炭化物粒子・白色粒子少量、しまりあり。 |
| 6 | 暗茶褐色土 | ローム粒子(～0.1m)含む、炭化物粒子(～0.1m)少量、白色粒子若干層、しまりあり。 |
| 7 | 黒褐色土 | ローム粒子(～0.2m)含む、炭化物粒子・白色粒子少量、しまりあり。 |
| 8 | 暗褐色土 | ローム粒子(～0.2m)含む、炭化物粒子(～0.3m)含む、白色粒子少量、しまりあり。 |
| 9 | 黒褐色土 | ローム粒子(～0.2m)含む、ロームブロック(～5.0m)少量、しまりあり。 |
| 10 | 暗褐色土 | ローム粒子(～0.2m)含む、ロームブロック(～1.5m)少量、炭化物粒子・白色粒子少量、しまりあり。 |
| 11 | 暗茶褐色土 | ローム粒子(～0.2m)含む、炭化物粒子(～0.5m)含む、白色粒子少量、しまりあり。 |
| 12 | 黒褐色土 | ローム粒子～ロームブロック(～1.0m)多量、炭化物粒子・白色粒子少量、しまりあり。 |
| 13 | 暗茶褐色土 | ローム粒子(～0.2m)含む、ロームブロック(～1.0m)多量、炭化物粒子・白色粒子少量、しまりあり。 |
| 14 | 暗褐色土 | ローム粒子(～0.2m)含む、炭化物粒子・白色粒子少量、しまりあり。 |
| 15 | 暗茶褐色土 | ローム粒子(～0.2m)やや多量、ロームブロック(～1.0m)多量、しまりあり。 |
| 16 | 暗褐色土 | ローム粒子(～0.1m)含む、炭化物粒子・白色粒子少量、しまりあり。 |

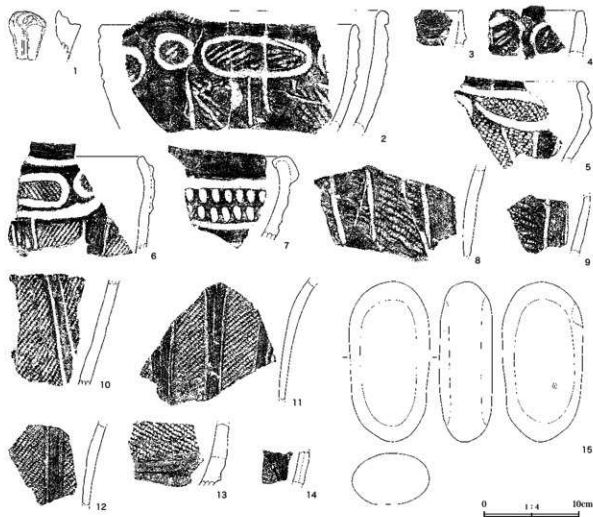
SK-06

- | | | |
|----|-------|---|
| 1 | 暗褐色土 | ローム粒子(～0.2m)・ロームブロック(～1.0m)少量、しまりあり。 |
| 2 | 暗茶褐色土 | ローム粒子(～0.1m)多量、ロームブロック(～1.0m)少量、白色粒子若干層、しまりあり。 |
| 3 | 暗茶褐色土 | ローム粒子(～0.1m)含む、しまりあり。 |
| 4 | 暗茶褐色土 | ローム粒子(～0.2m)多量、ロームブロック(～1.0m)やや多量、白色粒子少量、しまり強い。 |
| 5 | 暗茶褐色土 | ロームブロック(～5.0m)主体、ローム粒子(～0.2m)多量、白色粒子若干層、しまりあり。 |
| 6 | 暗茶褐色土 | ローム粒子(～0.2m)やや多量、ロームブロック(～1.0m)少量、白色粒子若干層、しまりあり。 |
| 7 | 暗茶褐色土 | ローム粒子(～0.1m)やや多量、ロームブロック(～0.5m)含む、炭化物粒子(～0.1m)若干層、しまりあり。 |
| 8 | 暗茶褐色土 | 7層に似る若干層人物の痕が少なめ、しまりあり。 |
| 9 | 黒褐色土 | ローム粒子(～0.2m)・ロームブロック(～1.0m)含む、硬くしまる。 |
| 10 | 暗褐色土 | ローム粒子(～0.1m)やや多量、ロームブロック(～0.5m)含む、しまりあり。 |
| 11 | 暗茶褐色土 | ローム粒子主体、ロームブロック(～0.2m)少量、炭化物粒子(～1.0m)若干層、しまりあり。 |
| 12 | 暗茶褐色土 | ローム粒子(～0.2m)含む、ロームブロック(～0.8m)少量、炭化物粒子(～0.2m)・白色粒子若干層、しまり強い。 |
| 13 | 暗茶褐色土 | ローム粒子(～0.2m)やや多量、炭化物粒子・白色粒子少量、しまりあり。 |
| 14 | 暗茶褐色土 | ロームブロック(～1.0m)多量、ローム粒子(～0.1m)含む炭化物粒子・白色粒子少量、しまりあり。 |

SK-07

- | | | |
|----|-------|--|
| 1 | 茶褐色土 | ローム微粒子少量、炭化物粒子(～0.1m)少量、ロームブロック(～1.0m)若干層、しまりやや強い。 |
| 2 | 茶褐色土 | ローム粒子(～0.1m)含む、炭化物粒子(～0.1m)少量、ローム粒子(～0.3m)若干層、硬くしまる。 |
| 3 | 茶褐色土 | ローム粒子(～0.1m)含む、ロームブロック(～5.0m)少量、ローム粒子(～0.5m)若干層、硬くしまる。 |
| 4 | 茶褐色土 | ローム粒子(～0.3m)・粘土粒子(～0.3m)含む、白色粒子少量、ロームブロック(～0.5m)若干層、しまりあり。 |
| 5 | 茶褐色土 | ローム粒子(～0.1m)やや多量、粘土微粒子・白色微粒子若干層、しまりあり。 |
| 6 | 茶褐色土 | 5層が上から硬く、根のカクランによって柔らかくなった層か。 |
| 7 | 暗茶褐色土 | ローム粒子(～0.1m)・炭化物粒子少量、しまりあり。 |
| 8 | 暗茶褐色土 | ローム粒子(～0.1m)含む、ロームブロック(～5.0m)少量、炭化物粒子(～0.1m)少量、しまりあり。 |
| 9 | 暗茶褐色土 | ローム粒子(～0.3m)含む、粘土微粒子若干層、しまりあり。 |
| 10 | 暗茶褐色土 | ローム粒子(～0.1m)やや多量、ローム粒子雲状に集合(～3.0m)・褐色粒子(～0.1m)、硬くしまる。 |
| 11 | 暗茶褐色土 | ローム粒子含む、ロームブロック(～1.0m)少量、しまりあり。 |
| 12 | 暗茶褐色土 | ローム粒子(～0.2m)多量、しまりあり。 |
| 13 | 暗茶褐色土 | ロームブロック(～1.5m)主体、褐色粒子(ロームか焼土か)少量、しまりあり。 |
| 14 | 暗茶褐色土 | ロームブロック(～1.5m)主体層、しまりあり。 |
| 15 | 暗赤褐色土 | 焼土層、ローム粒子(～0.2m)含む、炭化物粒子(～0.2m)少量、白色粒子若干層、しまり強い。 |
| 16 | 暗茶褐色土 | ローム粒子(～0.2m)・ロームブロック(～0.8m)主体層、しまり強い。 |
| 17 | 暗茶褐色土 | 焼土粒子焼土ブロック(～1.0m)・ローム粒子(～0.2m)含む、ロームブロック(～0.8m)少量、白色粒子若干層、しまりあり。 |
| 18 | 暗茶褐色土 | ローム粒子(～0.1m)含む、ロームブロック(～0.8m)・炭化物粒子(～0.1m)少量、白色粒子若干層、しまりあり。 |

第31図 第5・6・7号土坑実測図

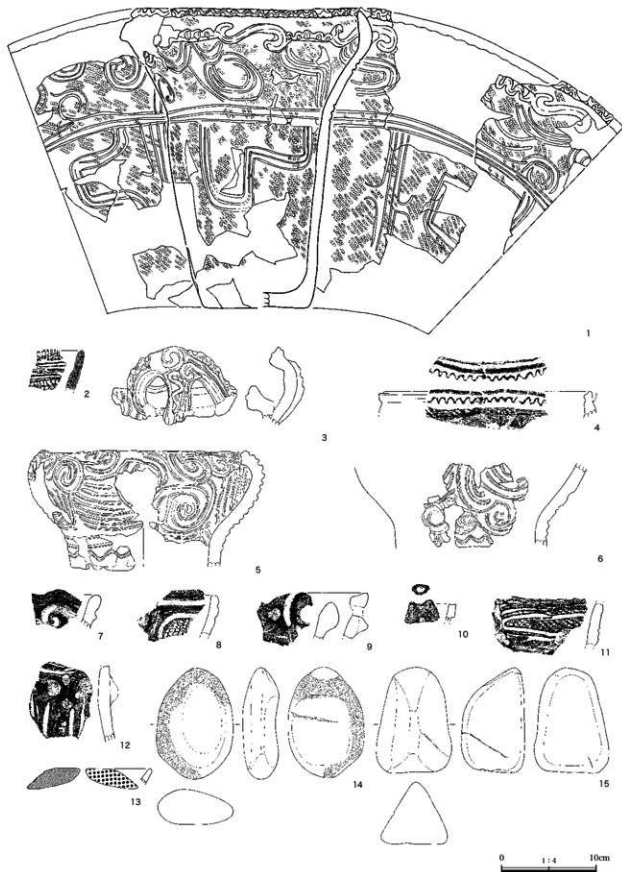


第32図 第5号土坑出土遺物実測図

現状で南北約2.15mを確認した。推定される最大括れ部の径は約2.4mである。底面レベルは150.1m前後である。壁面はローム層を掘り今で構築される。底面は中央部付近に浅い皿状の凹凸があり、凹部は小礫層、凸部はローム層となる。覆土 14層を確認した。1層を掘り込んで、2・4層が壁面のラインか。レンズ状に分層されるが、ロームの多い5層・7層・10・11層と、暗茶褐色土の6・8層・黒褐色土の9層が交互に堆積する。

遺物出土状況 覆土中から62点が出土する。土器は何れも破片であるが、大きめの土器片や礫は括れ部からの出土が目立つ。1～12は遺構南西部の括れ部付近から出土する。8～12は9層に相当する覆土中から、底面に若干の間層を挟んで出土する。1～6は8～12直上の4層に似た覆土から出土する。7・17は底面付近から出土する。1～11は土器片、14・15は石器・礫である。

出土遺物 2は関山式の口縁部小片か。口縁端部から条線・半載竹管状工具による沈線・相互刺突文・半載竹管状工具による沈線・ループ文を配する。外面のループ文付近にオコゲの付着が顕著である。1・4は同一個体か。1は口縁端部に波状の瀟洒な隆帯を配する。口縁部文様帯には「S」字状の高く突出した隆帯を横に配し、押捺を施した隆帯が連続する。以下、沈線で口縁部の文様及び区画線、体部の懸垂文を幾何学的に施す。体部下半は地縄文のみを施す。大木8b式か。4は深鉢形土器の口縁端部に瀟洒な隆帯を波状



第33图 第6号土坑出土遗物实测图

に配する。口縁内面の口端部は受け口状に作出される。3は中空の把手である。正面に2孔、裏面に1孔を有する。把手頂部の渦巻き状の隆帯から上端部沿い及び2孔の間に蛇行する隆帯を貼付する。2孔を眼窩とする人面を表現した可能性も考えられよう。器面は脆弱である。5・6は同一個体とみられる。口縁部文様帯全面に沈線で渦巻き状の文様とこれを繋ぐ沈線を配する。頸部には波状の沈線が巡る。この他、同一個体とみられる口縁部・体部の破片が約900g出土するが、極めて脆弱であり、復元し得なかった。7・8は口縁部文様帯か。加曾利EⅡ式前後か。7は隆帯と沈線で単位文の渦巻きを作出する。8は隆帯で単位文、沈線で区画文を作出か。9は半捻転状突起の中央に貫通孔を配するか。貫通孔に沿って弧状の沈線を施す。突起基部の凹孔から沈線が巡るか。10は山形の突起の頂部に押厚を加える。頂下には円形の刺突を施す。11は帯状区画か。10・11は後期初頭から後期前葉か。12は壺形土器か。破片上部の沈線は一次区画線か。沈線下に双頭の突起を付し、突起の上下左右の刺突を施す。突起の左右側部から沈線が垂下する。後期初頭か。13は無文の器面の堅緻な小片である。内外面に赤彩を施す。図示し得なかったが16は沈線で区画し無文帯が垂下する小片である。

この他、図示し得なかった土器片は、外面に赤彩を施す口縁部1片。無文の口縁部小片1片。隆帯と沈線による口縁部文様帯とみられる小片4片、加曾利EⅡ～Ⅲ式か。地文を摺り糸とし3条単位の懸垂文が垂下する小片1片、加曾利E式前半か。懸垂文とみられる数条1組の沈線の垂下する小片4片、加曾利EⅡ～Ⅲ式か。地縄文に渦巻き状の沈線が見える小片1片、加曾利E式後半か。磨消縄文手法或いは帯状区画とみられる小片3片、加曾利E式後半或いは称名寺式か。無文に微隆起線が1本みえる小片1片、中期末葉～後期初頭。帯状区画に刺突を施す小片1片、称名寺式。地縄文に平行する沈線のみえる小片3片、後期初頭～後期前葉か。櫛歯状工具で条線を施す小片3片、無文に波状などの沈線のみえる小片2片、地縄文に沈線の一部が見える小片5片、無文に沈線の一部のみえる小片2片。この他、微細片116.8gである。

石器・礫は表25に記載する。

出土する土器片の時期幅は大きい、本遺構の時期は後期初頭以降とみるべきか。

第7号土坑 (SK-07) (第31図 表26 図版四)

位置 C区D-11グリッドに位置する。 **重複関係** 東側にSK-06が重複する。本遺構が新しい。 **形状・規模・主軸** 削平によって遺構上半部は失われている。調査の過程で大方が崩落したが、遺構確認時は壁面の抉り込みの残存が特に良好であり、第31図は遺構確認時の状況を示した。図版四は崩落後の状況を撮影した。遺構上部の平面形は不詳である。底面形は、東西に長い不整な楕円状、断面形は袋状である。遺構確認面からの深さは0.55m前後を確認した。壁面の括れ部は底面より0.2m弱上位の150.2m付近に最大径を持つ。底径は東西約1.6m・南北約1.4m、括れ部の最大径は東西約1.9m・南北約1.7mである。底面レベルは150.06m前後である。壁面はローム層を掘り込んで構築される。底面は中央部付近に浅い皿状の凹凸があり、凹部は小礫層、凸部はローム層となる。 **覆土** 18層を確認した。焼土の堆積が目立つ。ロームブロックを多量に含む最下層の13・14層と大きなロームブロックを含む3層が、焼土粒子を含む4・7・8・9層を挟んで堆積する。

遺物出土状況 覆土中から19点が出土する。土器片はSK-06・07重複部から、礫は覆土中から出土する。

出土遺物 SK-06・07重複部から出土する土器片は小片であり図示し得なかったが、以下のとおりである。隆帯と沈線による口縁部文様帯とみられる小片1片、加曾利EⅡ～Ⅲ式。沈線による口縁部文様帯とみられる小片2片、加曾利EⅢ式か。磨消縄文手法とみられる小片3片、加曾利E式後半～後期初頭か。地縄文に平行する4本の沈線(2本1組か)でモチーフを描くとみられる小片1片、地縄文に沈線のみえる小片2片、

地条線を施す小片2片、櫛歯状工具による地条線を施す小片2片、地縄文4片、粘土塊1点 12.9 g、磨滅片・微細片 21.0 gである。

礫については表26に記載する。

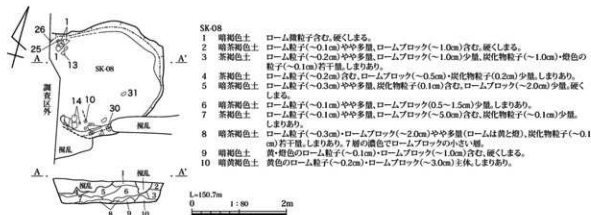
本遺構に時期は不詳である。

第8号土坑 (SK-08) (第34～36図 表27 図版四・五・二一)

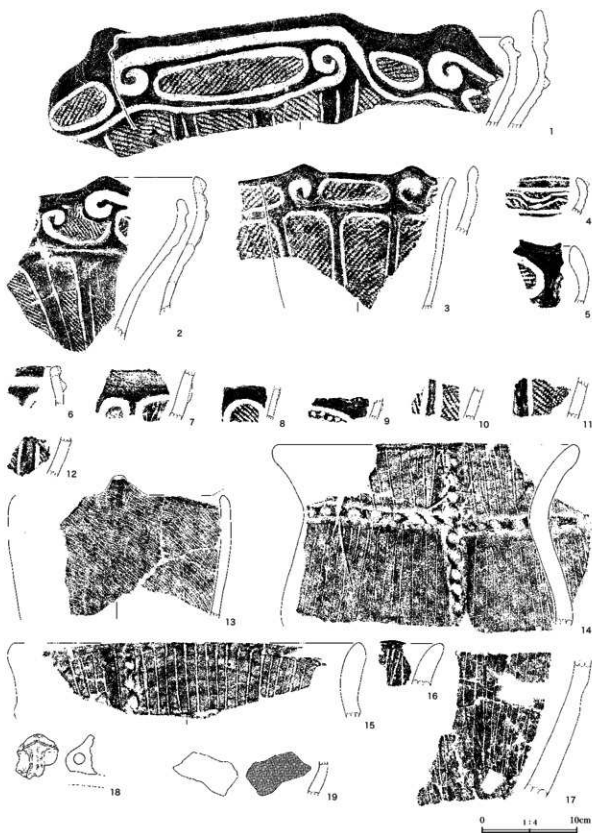
位置 C区D-11・12グリッドに位置する。遺構西端部は調査区外に延びる。**重複関係** 重複する遺構はない。しかし、出土遺物に時期の幅があり、調査着手前に削平された遺構上部に後出する遺構が存在した可能性は残る。**形状・規模・主軸** 攪乱により西半部の中層以上は失われている。底面形はやや東西に長い楕円状、断面形は袋状とみられる。底径は東西2.4 m以上・南北約2.4 m、遺構確認面からの深さは約0.5 mである。壁面の括れ部は、現状で底面から約0.2 m上位の150.35 m付近に観察されるが詳細は不明である。底面・壁面はローム層で、底面レベルは150.12前後である。**覆土** 10層を確認した。全体的に暗黄褐色土が堆積する。中層以下はロームブロックの堆積が目立つが、7層は橙色ローム、8層は橙色・黄色ローム、12層は黄色ロームのブロックが堆積する。砂層などの堆積は確認されなかった。レンズ状に堆積するが詳細は不明である。

遺物出土状況 149点が出土する。土器は何れも破片であるが、大きめの土器片や礫は括れ部からの出土が目立つ。10などの南壁付近からの出土遺物は7・8層上位の覆土中層から出土する。20は床面から出土する。1～19は土器片、20～24は石器・礫である。

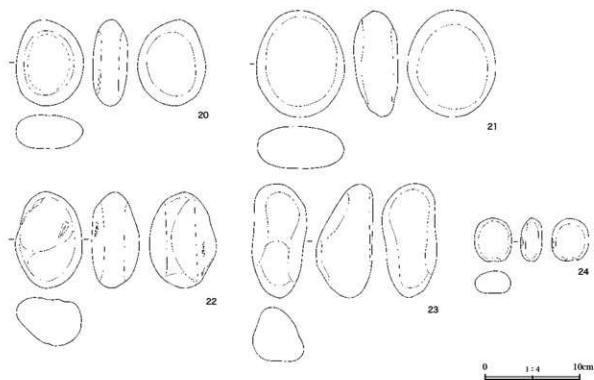
出土遺物 1は隆帯と沈線で、口縁部文様帯を作出する。波頂下の渦巻き状の単位文は区画文間の渦巻きに連続する。区画文間の渦巻き状の単位文は上部が瘤状に突出する隆帯で作出される。体部は3条一組と2条一組の懸垂文が交互に配される。懸垂文間は磨消を施す。加曾利EⅢ式。2は波頂部の渦巻きとこれに連続する区画文を隆帯と沈線で作出する。特に渦巻き部は他所より隆帯を高めに配する。口縁部文様帯と体部は沈線で区画される。体部は沈線で区画した縄文部を逆U字状に配し懸垂文となすか。3は低平な隆帯で口縁部文様帯を作出する。単位文となる渦巻きは概ね波頂下に配される。体部は口状の懸垂文が垂下する。4は隆帯と沈線で口縁部文様帯を作出し、区画内に連続する文様を配する。5～7は隆帯と沈線で口縁部文様帯を作出する。7は単位文が渦巻き状になるか。区画文内には条線を充填する。8・9は沈線で口縁部文様帯を作出する。9は区画内で刺突を充填する。10～12は磨消を伴う懸垂文。10・11は同一個体か。1～12は加曾利EⅡ～Ⅲ式か。13は波頂部に円筒状の小突起を配し、体部に地縄文を施す。14～17は口縁部



第34図 第8号土坑実測図



第35図 第8号土坑出土遺物実測図(1)



第36図 第8号土坑出土遺物実測図(2)

から体部に垂下する隆帯、一次区画隆帯に押捺を施す。口縁部、体部の地条線は隆帯貼付後に施すか。曾利式系か。18は壺形土器の注口部か。把手の背面及び右側部は刺突列、左側部は沈線が施され、口縁部下に刺突列に連繋する。注口の径は1.5cm前後か。19は無文の体部小片である。深鉢形以外の器形である可能性も高い。内面には赤彩が良好に残る。18・19は後期初頭か。

この他、図示し得なかった土器片は以下のとおりである。

隆帯と沈線で作出する口縁部文様帯小片、9片。加曾利EⅡ～Ⅲ式。口縁部下に沈線で区画された横位の縄文部が巡る口縁部小片1片、加曾利E式後半～後期初頭。無文の口縁部小片1片、頸部に一次区画か。沈線で区画された無文帯が垂下する体部小片13片、磨消縄文手法或いは帯状区画か。地縄文に沈線が垂下する体部小片1片、懸垂文或いは単沈線か。地縄文に沈線で幾何学的な文様を施す小片1片、後期初頭～前葉か。地縄文に沈線でモチーフを描く小片2片、単沈線か。無文に平行する数条の沈線でモチーフを描く小片1片、単沈線或いは集合沈線か。地縄文に沈線の一部のみ見える小片1片。無文に沈線の一部のみ見える小片2片。地条線を施す小片1片。櫛歯状工具で条線を施す小片1片。底部片1片。地縄文の小片23片。無文の小片20片。磨滅片・微細片60gである。

石器・礫は表27に記載する。

本遺構の時期は、中期後葉の土器片が目立つが、後期初頭とみるべきか。

第16号土坑 (SK-16) (第37～39図 表28 図版五・二一)

位置 C区D-11グリッドに位置する。遺構東端部は調査区外に延びる。 **重複関係** 重複する遺構はない。

形状・規模・主軸 遺構上位は削平され、底部付近のみ残存する。また、遺構中央部は攪乱により失われている。平面形は不詳であるが、東西に長い楕円状か。断面は判然しないが袋状と判断される。底径は南北約1.6m、東西は現状で1.7mを確認した。深さは約0.2mを確認した。挟り込み部の詳細は不明であるが、

現状での最大径は上ば付近にある。底面レベルは150.5 mである。現状での最大径部は150.3 m付近にある。壁面は底面から20cmほど上位はローム層、下位から底面は小礫層で直下は砂質のローム層か。現状の最大径部は小礫層とローム層の変移層付近にある。覆土 5層を確認した。最下層は5層か。5層に堆積するロームブロックはやや砂質を帯びる。堆積はレンズ状か。

遺物出土状況 149点が出土する。2・3は床面付近から。1は底面より15cmほど上位から出土する。いずれも1層中の出土か。1～29は土器片、30～32は石器・礫である。10・26出土位置からはこの他に地縄文小片、沈線で縄文部と無文部を区画する小片2片が出土する。加曾利E式後半～後期初頭か。

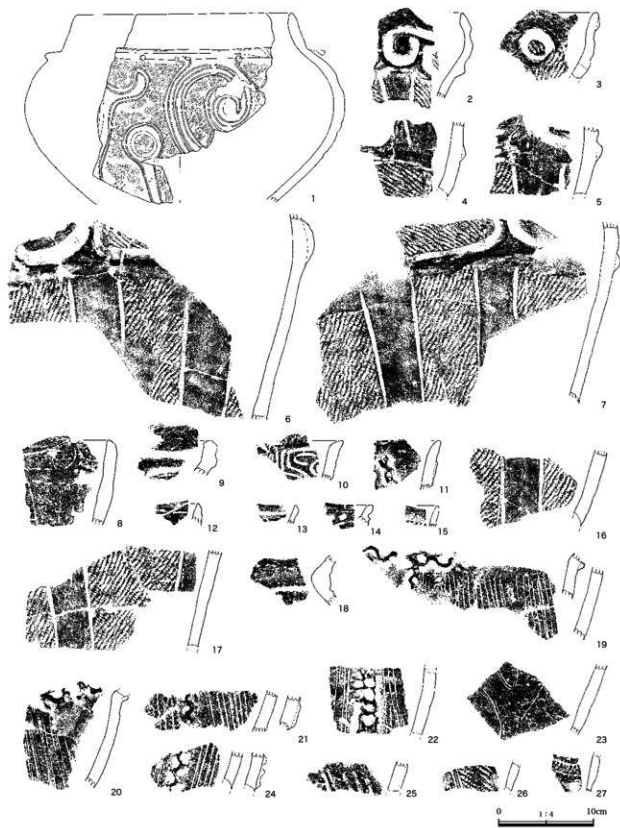
出土遺物 27は平行する沈線施文後爪形文を配する。多載竹管状工具か。諸磯b式か。1は口縁部下の隆帯下に貫通孔が数カ所施される。隆帯の突出はさほど明瞭ではなく貫通孔が隆帯下に付す有孔罅付土器か。大木9式の影響が強い。4～7・16・17は同一個体か。この他に第37図36から出土した体部片1片、覆土から出土した体部片7片も同一個体とみられる。隆帯と沈線口縁部文様帯を作出する。単位文は円形状であるか渦巻き状であるか判別できない。口縁部文様帯下を隆帯で区画し、体部は磨消を伴う幅広い懸垂文が垂下する。胎土に白色小礫を多量に含む。2は隆帯と凹線状の沈線で口縁部文様帯を作出する。波頂部の単位文は渦巻き状。3は低平な隆帯と凹線状の沈線で波頂下に円形の単位文を配する。9は隆帯と凹線状の沈線で口縁部文様帯を作出する。8は無文に沈線で口縁部文様帯と懸垂文を描く。口縁部の単位文は円形で、連続して区画文を配する。10は沈線で口縁部文様帯を描くか。渦巻き状の沈線は単位文か。2・3・8～10は加曾利EⅢ式か。11は無文の口縁部に鎖状の隆帯が弧状に付される。後期初頭～後期前葉か。12は波頂部に向かって沈線が施される。13は波頂部下に凹線状の沈線が沿う。14は波頂部下に円形の刺突列を配する。15は無文の口縁部下に円形の刺突列が巡る。12～15は後期初頭か。18は口縁部破片か。器壁は厚く屈曲する。壺形か。同一個体とみられる1片が出土する。19・20は同一個体か。押捺を施した一次区画隆帯から、同じく押捺を施した隆帯が垂下する。体部は条線が施される。21・22・24は地条線の体部に波状の隆帯が垂下する。21・22は波状の隆帯に右側のみ押捺を施す。24は条線がためて深く明瞭である。25は凹線状の沈線が斜位に施される。19～22・24・25は曾利式系か。23は半載竹管状工具で幾何学的な文様を描く。大木9式の影響が強い。26は懸垂文か。地縄文は間隔施文か。28は無文の体部下半～底部の破片である。中央充填技法か。破砕部付近の内面にオコゲの付着が顕著である。29は土師器片。内面ミガキ後黒色処理、外面は磨滅により不詳であるがヘラケズリか、底部は糸切り痕の残る。第37図39は図示し得なかったが横位の地縄文小片である。

この他、図示し得なかった土器片が以下のとおりである。

隆帯と沈線による口縁部文様帯2片、加曾利EⅡ～Ⅲ式。無文の口縁部2片。曾利式系の押捺を施した横位の区画隆帯3片、垂下隆帯1片、条線を施す体部小片7片。磨消縄文手法の小片3片、加曾利E式後半～



第37図 第16号土坑実測図

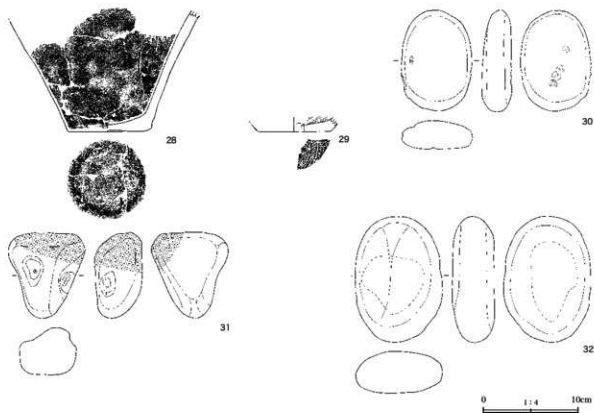


第38图 第16号土坑出土遗物实测图(1)

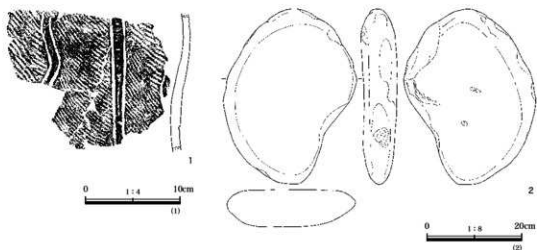
後期初頭。無文に微隆起線を配する小片2片、後期初頭か。地条縄文に単沈線2片、堀之内式か。無文に沈線でモチーフを施す小片2片。地条線を施す小片4片。櫛歯状工具で地条線を施す小片2片。地縄文に沈線のみえる小片1片。無文に沈線を施す小片3片。底部破片2片。地縄文を施す小片10片。無文の小片15片。磨滅片・微細片90g。

石器・礫は表28の他に親指大前後の自然礫・破砕礫を86個取り上げた。

本遺構は底面付近に加曾利EⅢ式が出土するが、後期初頭までの土器が出土する。



第39図 第16号土坑出土遺物実測図(2)



第40図 第17号土坑出土遺物実測図

第17号土坑 (SK-17) (第40・41図 表29 図版五)

位置 C区D-10グリッドに位置する。遺構東端部は調査区外に延びる。**重複関係** SZ-30と重複する。本遺構が古い。**形状・規模・主軸** 遺構上位は削平され、底部付近のみ残存する。平面形は不詳であるが、円形状か。断面は確認し得なかったが、底径などから袋状である可能性が残る。底径は南北約2.1m、深さは約0.2mを確認した。現状での最大径は上ば付近にあり、径は南北約2.4mである。底面レベルは150.0m前後である。最大径部は底面より0.2mほど上位の150.2m付近にある。底面は緩やかな凹凸があり、凹部は小礫層、凸部はから壁面はローム層である。**覆土** 3層を確認した。

遺物出土状況 5点が出土する。概ね2層中から出土する。1は土器片、2・3は石器・礫である。

出土遺物 1は磨消を伴う懸垂文が垂下する。加曾利EⅡ～Ⅲ式。

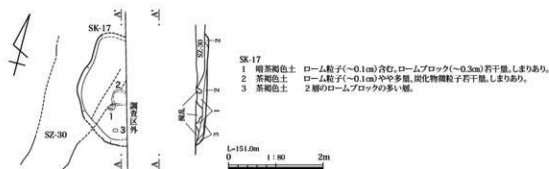
この他、図示し得なかった土器片は2片である。磨消を伴う懸垂文とみられる小片1片、加曾利EⅡ～Ⅲ式。無文に逆「レ」字状の沈線をひく体部小片1片、後期初頭～後期前葉か。

石器・礫は表29に記載する。

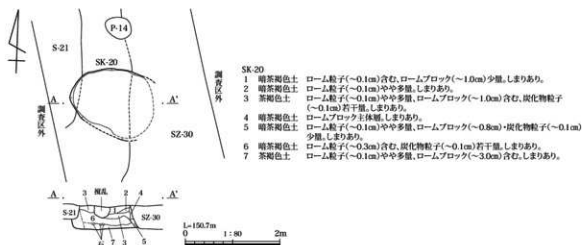
本遺構の時期は、後期初頭～後期前葉か。

第20号土坑 (SK-20) (第42・43図 表30 図版五)

位置 C区D-10グリッドに位置する。**重複関係** 後出するSZ-30・S-21が重複する。**形状・規模・主軸** 遺構上半部は削平によって、壁面の一部(特に南東側)は崩落によって失われている。底面形は重複により判然としませんが、底面の小礫の範囲からやや東西に長い楕円形状か。断面は袋状である。現状での決



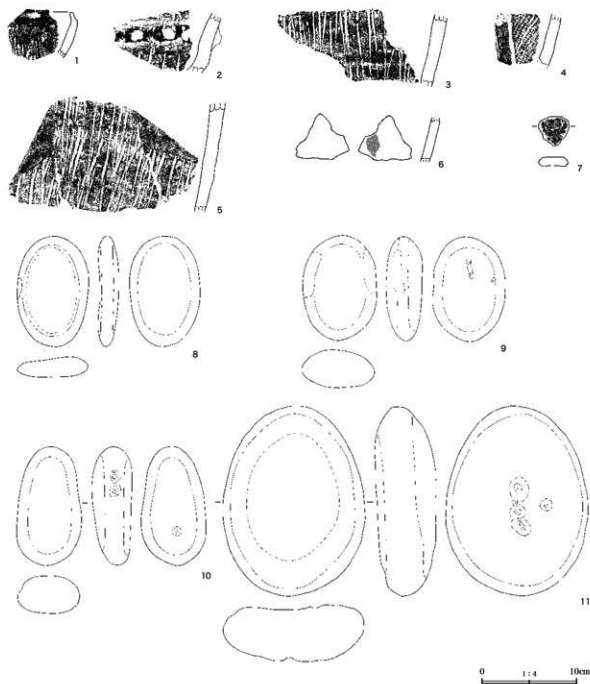
第41図 第17号土坑実測図



第42図 第20号土坑実測図

れ部の最大径は上付近にある。底径は東西約1.75 m・南北約1.3 m、現状での括れ部最大径は東西約1.9 m・南北約1.4 mと推定される。遺構確認面からの深さ約0.4 mである。底面のレベルは約150.08 m、括れ部のレベルは150.26 m前後である。主軸は概ねN-90°-Wか。覆土7層以下から底面にかけては小礫層、7層より上位の壁面はローム層である。覆土7層を確認した。上層から下層至るまで、覆土中には拳大から人頭大の礫が多量に出土した。特に壁面付近には著しく、SP-A西側端部(図中2点破線部)の土層を確認し得なかった。覆土は全体的に茶褐色土が目立つ。4・5層は後出するSZ-30周溝に起因する層か。

遺物出土状況 72点が出土する。多量の礫が出土したが、自然石と判断される礫については、調査の進



第43図 第20号土坑出土遺物実測図

捲上、取り上げは行わなかった。

出土遺物 1は口縁部の鋭角な屈曲下に横位の地縄文を施す。後期か。2は押捺を施す隆帯が横巡する。3・5は同一個体か。地条線を施す。2・3・5は曾利式系か。4は磨消を伴う懸垂文が垂下する。加曾利EⅡ～Ⅲ式。6は無文の堅緻な体部小片。内面に明瞭に赤彩が残る。7は土製円盤。タテ3.2cm・ヨコ3.3cm・厚1.3cm・重12.37g。平面三角形状で周縁全面を研磨する。図上の上側面は顕著である。

この他、図示し得なかった土器片は以下のとおりである。

無文の口縁部2片。地縄文に沈線が沿うとみられる断面三角形状の隆帯を配する小片1片。加曾利EⅢ式～称名寺式に平行する加曾利E式か。無文に数条の沈線のみ見える小片5片。地条線小片4片。地縄文6片。無文の小片5片。底部破片1片、後期か。

石器・礫は表30に記載する。この他、小礫・小礫塊が20個出土する。

本遺構の時期は、後期初頭とみるべきか。

第45号土坑 (SK-45) (第44・45図 表31)

位置 B区B-3グリッドに位置する。調査区東端部にあり、調査区外に延びる。 **重複関係** P-255と重複する。新旧関係は不明である。 **形状・規模・主軸** 不整な円形状である。断面形は袋状である。北辺は上ばと下ばのラインがほぼ一致する。P-255重複部から南辺にかけては上ばと扱れ部のラインがほぼ一致する。規模は、遺構確認面の東西0.8m以上・南北約0.95m、底面の東西0.8m以上・南北約0.9m、遺構確認面からの深さ約0.5mである。扱れ部は、底面から0.2～0.3m上位の150.9～151.0m付近のレベルにある。底面は緩やかな凹凸がみられる。底面のレベルは約150.7mである。壁・床面はローム層を掘り込む。

覆土 11層を確認した。8層は壁面の崩落層、3・4層は覆土堆積の過程で壁面付近にできた空白層への堆積土か。6層と7層、9層と10層は似る。

遺物出土状況 覆土中から24点が出土する。1・5は覆土6・10層分層線付近に相当するレベルから出土する。

出土遺物 1は浅鉢形土器か。推定される器高は30cm程度か。内外面ともオコゲの付着が著しい。注口を伴う可能性があらうか。口縁部は2条の沈線間にキザミ列を施し、盲孔を付す。堀之内1式か。2は口縁部下の微隆起線状の高まりを一次区画線とする。欠失した体部は膨らみを持つか。後期初頭～前葉か。3は無文の口縁部下を沈線で区画し、波頂部に連ねた2つの盲孔を起点に単沈線で単位文的なモチーフを描く。堀之内1式か。4は長めの刺突を施す。帯状区画か単沈線か。称名寺式或いは堀之内1式か。5は無節(R)



第44図 第45号土坑・第255・256号ピット実測図

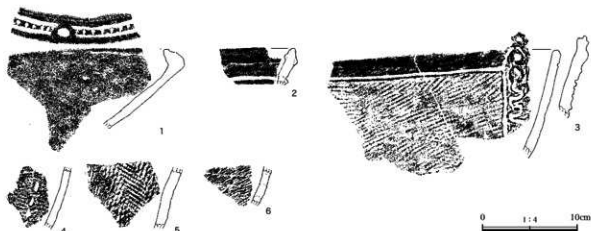
と単節（LR）の異なる原体を用いて羽条に施す。加曾利E式後半か。6は斜位の地縄文を施す。色調や器面の状況からは後期か。

この他、図示し得なかった土器片は以下のとおりである。

無文の口縁部小片3片、うち2片は沈線が横巡するか。押捺或いは盲孔とみられる小片1片。沈線で渦巻きを描く小片1片。無文に微隆起線状の高まりのみ見える小片1片、中期末葉～後期初頭か。地縄文に沈線の一部分のみ見える小片1片。地縄文片6片。磨滅片・微細片19.3g。

石器・礫は表31に記載する。この他、小礫塊3ヶが出土する。このうち1片は赤色変化する。

本遺構の時期は堀之内1式期か。



第45図 第45号土坑出土遺物実測図

第50号土坑（SK-50）（第46・47図 表32 図版五）

位置 A区A・B・1グリッドに位置する。**重複関係** SK-274・297と重複する。古い順に本遺構→SK-274→SK-297である。**形状・規模・主軸** 南北に長い楕円形状である。西辺付近の断面形は袋状であり、この部分のみ上ばと下ばのラインがほぼ一致する。遺構確認面の東西1.1m前後・南北約1.45m、底面の東西0.9m前後・南北約1.4m、遺構確認面からの深さ約0.47mである。括れ部の最大径は底面から約0.15m上位の151.3mのレベル付近にある。最大径は南北約1.4mである。主軸はN-43°・Eである。底面のレベルは約151.14mである。**覆土** 9層を確認した。総じてロームブロックの堆積が目立つ。4層は炭化物が多く堆積する。2・7・8層は壁面の崩落層か。

遺物出土状況 覆土中から54点が出土する。覆土除去の過程でSK-297を確認したが、出土遺物はSK-50として取り上げており、本遺構とした遺物の中にはSK-297に帰属するものが含まれる可能性が考えられる。

出土遺物 1は隆帯と沈線で区画する口縁部文様帯である。加曾利E式中頃か。2は口縁部下に沈線が横巡する。3は無文の口縁部小片で、口縁端部を欠失する。外面にオコゲの付着が著しい。4は帯状区画でモチーフを描くか。称名寺式か。5・6は無文にキザミ列を配する帯状区画でモチーフを描くか。称名寺式か。7は口縁部の立ち上がる屈曲部以上を失っている。壺形か。屈曲部内側は沈線状に凹む。体部は単沈線で縦位のモチーフを描く。堀之内1式か。8は地縄文に単沈線で縦位のモチーフを描く。堀之内1式か。

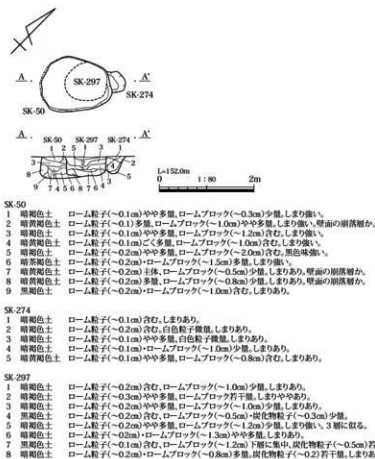
この他、図示し得なかった土器片は以下のとおりである。

磨消縄文手法でモチーフを描くと判断される小片5片、地縄文に曲線的な沈線のみ見える小片1片。加曾利E式後半～後期初頭か。2本単位の微隆起線でモチーフを描く小片1片、加曾利EⅣ式。微隆起線で縄文部

と無文部を区画する小片1片、称名寺式に平行する加曾利E式。無文の帯状区画内に刺突列を配するとみられる小片1片、刺突の痕跡のみえる磨滅した小片2片、後期初頭～前葉か。曲線的な沈線内に条線を施すとみられる小片1片。地縄文に直線的な沈線の一部分のみえる小片3片。地縄文片18片。

石器・礫は小片のため図示し得なかったが、表32に記載する。

本遺構からは加曾利E式中頃から堀之内1式の土器片が出上する。重複遺構の遺物が混在する可能性はあるが、堀之内1式か。



第46図 第50・274・297号土坑実測図



第47図 第50号土坑出土遺物実測図

第53号土坑 (SK-53) (第48・49図 表33)

位置 A区B-2グリッドに位置する。 **重複関係** S-57の範囲内に位置する。断面的な重複はない。 **形状・規模・主軸** 底面の平面形はやや東西に長い円形状である。断面形は袋状である。遺構確認面の平面形は袂れ部が崩落した形状であり、上ばと下ばはほぼ同ラインを描く。規模は、遺構確認面・底面の径1.0m前後、

遺構確認面からの深さ 0.3 m前後である。挟れ部の最大径は、底面から約0.18 m上位の 150.28 m付近にある。最大径は東西 1.25 m前後・南北 1.1 m前後であり、底面から約0.1 m奥となる。遺構底面のレベルは約 151.1 mである。壁・底面はローム層を掘り込む。底面には中央やや南寄りに p 1 が穿たれる。p 1 の径約 0.3 m・底径約 0.25 m、遺構底面からの深さ約 0.08 mである。後述のとおり、覆土の堆積状態から、p 1 が開口した状態で本遺構は埋没したものと判断される。覆土 10 層を確認した。総じて、ロームブロックの混入が目立つ。2層は壁面の崩落層か。9層は遺構最下面の堆積土であり、p 1 内にも堆積するものとみられる。

遺物出土状況 覆土中から 14 点が出土する。特に、遺構南西部の挟れ部付近から多くの礫が出土する。土器片は何れも小片である。

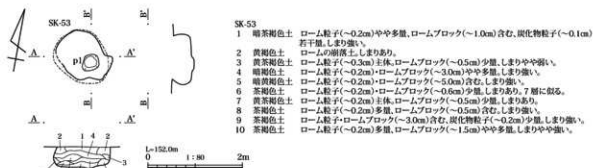
出土遺物 1 は無文の口縁部に微隆起線が横巡する。加曾利 E IV 式～後期初頭か。2 は波状の口縁部右端に沈線が巡る。波頂部は凹み部下の円形の貼付文から沈線が垂下する。堀之内 I 式か。3 は円形の貼付文と曲線的な沈線を配する。後期前葉か。4 は櫛歯状工具で地条線を施す。後期前葉か。5 は底部破片。磨減が顕著であり、底面にススが附着する。器形等から後期前葉か。

この他、図示し得なかった土器片は以下のとおりである。

無文の口縁部 2 片、中期末葉～後期初頭か。一次区画沈線とみられる小片 1 片、後期前葉か。地縄文に曲線的な沈線の一部がみえる小片 1 片、称名寺式か。地縄文に欵手的な沈線の一部がみえる小片 1 片、堀之内 I 式か。区画なく無文部と縄文部が連続する小片 1 片。沈線に境に段差を持つ無文の小片 1 片、深鉢形以外の器形か。無文の底周部破片 1 片。

石器・礫は表 33 に記載する。

本遺構の時期は堀之内 I 式期か。



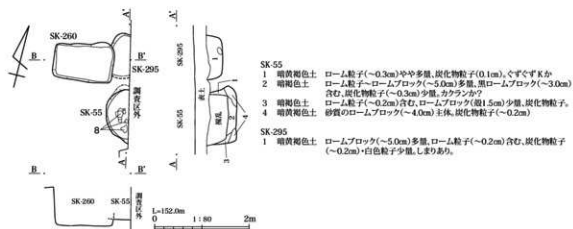
第 48 図 第 53 号土坑実測図



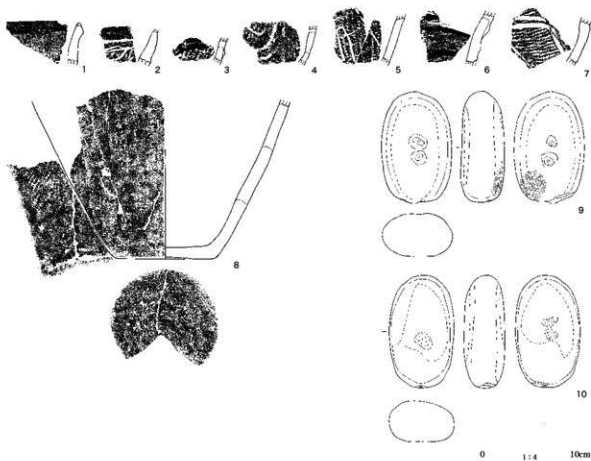
第 49 図 第 53 号土坑出土遺物実測図

第55号土坑 (SK-55) (第50・51図 表34)

位置 B区B-3グリッドに位置する。調査区東端部にあり、調査区外に延びる。重複関係 SK-260と重複する。新旧関係は不明である。**形状・規模・主軸** 円形状である。断面形は袋状である。北辺付近に抉れ部が残る。規模は、遺構確認面の南北約1.05m、底面の南北約1.03m、遺構確認面からの深さ0.6m前後である。抉れ部の最大径部は底面から0.17mほど上位の150.9m付近にある。径約1.22mである。底



第50図 第55・260・295号土坑実測図



第51図 第55号土坑出土遺物実測図

面は概ね平坦であり、レベルは150.74 m前後である。壁・底面はローム層を掘り込む。覆土 4層を確認した。

遺物出土状況 覆土中から37点が出土する。8は底面付近から出土する。

出土遺物 1は微隆起線状の高まりで口縁部を区画する小片である。中期末葉～後期初頭か。2は口縁端部を欠失する。磨消を伴わない帯状区画でモチーフか。後期初頭か。3は2本単位の微隆起線でモチーフか。称名寺式に平行する加曽利E式か。4は磨滅により地文不詳。帯状区画でモチーフか。称名寺式か。5は地縄文に沈線でモチーフか。称名寺式か。6は無文に3本のほぼ平行する微隆起線状の高まりでモチーフか。器面は丁寧なミガキが施され光沢がある。内面にススが附着する。後期初頭か。7は沈線で文様を描く。口縁部文様帯であれば加曽利EⅢ式か。8はタテ方向の丁寧なミガキにより地文が消される。後期初頭か。

この他、図示し得なかった土器片は以下のとおりである。

無文の口縁部小片2片、後期初頭か。地縄文に沈線のみえる小片2片。地縄文片4片。無文の小片15片。磨滅片・微細片24.3 gである。

石器・礫は表34に記載する。

本遺構の時期は後期初頭か。

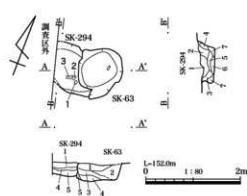
第63号土坑 (SK-63) (第52・53図 表35 図版八・二一)

位置 B区B-3グリッドに位置する。**重複関係** SK-294と重複する。本遺構が新しい。**形状・規模・主軸** 底面は北東-南西方向にやや長い円形状である。断面形は、覆土5層が壁面の崩落層であるとすれば、袋状と考えられるが、判断としない。規模は、遺構確認面の南北約1.03 m、底面の東西約0.66 m・南北約0.75 m、深さ約0.4 mである。主軸は、N-37°・Eである。底面は緩やかな凹凸がみられる。底面レベルは150.84 m前後である。壁・底面はローム層を掘り込む。覆土 5層を確認した。5層はロームブロック主体層である。

遺物出土状況 覆土中から35点が出土する。5は注口土器の注口部であり、覆土1層上位に相当するレベルから出土する。**出土遺物** 5は注口土器である。器壁は厚く大形品の可能性が考えられる。下面に入り組文状のモチーフが描かれる。半截竹管状工具による沈線とも見えたが、沈線が平行しない部分がある。1は波状口縁に沿って沈線が巡る。2は口縁部の無文部から区画なく体部の地縄文が施文される。3は口縁部下の高まりで体部と区画か。4は無文の底部である。器質は硬質である。

図示し得なかった土器片は以下のとおりである。

地縄文に単沈線でモチーフを描く小片、堀之内1式か。地縄文に沈線の一部が見える小片1片。無文に沈



第52図 第63・294号土坑実測図

SK-63	
1 暗褐色土	ローム粒子(～0.2m)含む、ロームブロック(～1.0m)・炭化物粒子(～0.2m)少量、白色粒子若干層、しりあり。
2 暗褐色土	ローム粒子(～0.2m)やや多量、炭化物粒子(～0.2m)少量、白色粒子若干層、しりあり。
3 暗褐色土	ローム粒子(～0.1m)・ロームブロック(～1.4m)・白色粒子少量、しりあり。
4 暗褐色土	ローム粒子(～0.2m)・ロームブロック(～1.0m)含む、炭化物粒子(～1.0m)少量、白色粒子若干層、しりあり。
SK-294	
1 暗褐色土	炭化物粒子(～0.2m)含む、ローム粒子(～0.1m)少量、白色粒子若干層。
2 暗褐色土	ローム粒子(～0.1m)含む、炭化物粒子(～0.1m)少量、白色粒子若干層。
3 暗褐色土	ローム粒子(～0.2m)・炭化物粒子(～0.2m)少量、白色粒子若干層。
4 暗褐色土	ロームブロック(～1.0m)多量、ローム粒子(～0.2m)含む。
5 暗褐色土	ローム粒子(～0.2m)やや多量、ロームブロック(～0.3m)・炭化物粒子(～0.2m)・白色粒子少量。
6 暗褐色土	ローム粒子・ロームブロック(～0.5m)やや多量、炭化物粒子(～0.1m)少量、白色粒子若干層。
7 暗褐色土	ローム粒子(～0.2m)・ロームブロック(～1.5m)多く多量、炭化物粒子(～0.1m)・白色粒子少量。

線の一部がみえる小片1片。地縄文片6片。無文の小片14片。磨滅片・微細片10.1g。

石器・礫は表35に記載する。

時期の判然としない土器片が多いが、本遺構の時期は堀之内1式期か。

第71号土坑 (SK-71)

(第54・55図 表36 図版六・二三)

位置 C区E-13グリッドに位

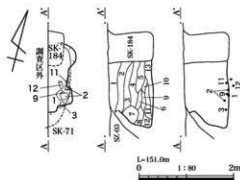
置する。遺構西半部は調査区外にある。**重複関係** 南側にSZ-03が近接する。北側にSZ-184が重複する。本遺構が古い。**形状・規模・主軸** 遺構上半部は削平されており、括れ部以下が残る。平面形は不詳であるが、円形、或いは楕円形状か。断面はフラスコ状で、底面から内傾しつつ壁が立ち上がり、底径が最大径となる。覆土10層を遺構中心部の堆積と仮定すると、括れ部は径1.0m以内の円形状、底面は径1.6m以上の円形状か。遺構確認面からの深さは約0.9mである。南壁は括れ部の形状が比較的良好に残る。現状で、括れ部上端のレベルは150.7m前後、底面までの深さは約0.7mである。南壁中位の壁面屈曲部(7・8層分層線付近)から底面までの深さは約0.4mである。底面レベルは150.0m前後である。底面はロームで、比較的平坦である。**覆土** 13層を確認した。1層は後世の流入層か。7層は壁の崩落土か。9層までは逆レンズ状に堆積する。9～13層はロームが主体的に堆積する。砂層などの堆積は確認されなかった。**特記事項** 覆土下層の9～13層の堆積はロームを主体とするが、特に11層は地山と見紛うロームの堆積層である。11～13層上面が150.25m付近に水平に堆積することから、SK-73・74・75同様に埋め戻された可能性が残る。この場合、南壁の屈曲部が最大径となる。また、断面形はフラスコ状ではなく、底面から丸みを持って立ち上がる袋状となる可能性がある。層上面から括れ部上端までは約45cm、層上面から南壁の屈曲部までは約15cmである。

遺物出土状況 覆土中から159点が出土する。小片が多い。1・2は底面より5cm前後上位、3～8は床面付近から出土する。何れも11層以下に相当する。

出土遺物 1は隆帯と浅く広い凹線状の沈線で口縁部文様帯を作出する。単位文は渦巻きを配する。体部は磨消を施す懸垂文が垂下する。2・3は同一個体か。口縁部に僅かな無文部を残し地縄文を施す。口縁部直下は一部施文方向を変える。体部は縦方向の施文を部分的に縦方向に磨消する。間隔施文を意識か。4は磨



第53図 第63号土坑出土遺物実測図



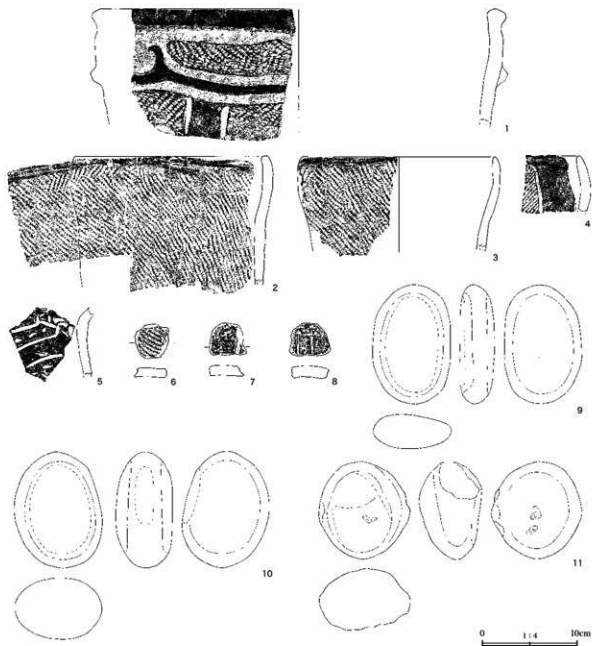
第54図 第71号土坑実測図

SK-71	
1 黒褐色土	ロームブロック(～8.0cm)多量。炭化物粒子(～0.1m)・白色粒子少量。しまりあり。
2 暗茶褐色土	ロームブロック(～0.8cm)含む。炭化物粒子(～0.1m)・白色粒子少量。しまりあり。
3 暗茶褐色土	ローム粒子(～0.2m)含む。炭化物粒子(～0.1m)・白色粒子少量。しまりあり。
4 暗茶褐色土	ローム粒子(～0.2m)含む。炭化物粒子(～0.1m)・白色粒子少量。しまりあり。
5 暗褐色土	ローム粒子(～0.2m)含む。炭化物粒子(～0.1m)・白色粒子少量。しまりあり。
6 暗褐色土	ローム粒子(～0.2m)含む。炭化物粒子(～0.5cm)。
7 暗茶褐色土	ローム粒子(～0.2m)。炭化物粒子(～0.3cm)。
8 暗褐色土	ローム粒子(～0.2m)。
9 黄褐色土	ロームブロック(～5.0cm)。
10 黄褐色土	ローム粒子。
11 黄褐色土	ロームブロック(～8.0cm)主体。
12 黄褐色土	ロームブロック(～0.5cm)。炭化物粒子(～0.5cm)含む。
13 暗褐色土	ローム粒子(～0.2m)、ロームブロック(～1.0m)。炭化物粒子(～0.2m)。

消縄文手法で逆「U」字状のモチーフを描くか。加曾利EⅢ式。5は無文の帯状区画に刺突列を配する。称名寺式。6～8は周縁の一部に研磨が施される。土製円盤の未製品か。6は地縄文を施す。周縁の研磨は右肩部分。タテ3.5cm・ヨコ3.7cm・厚1.1cm・重14.33g。7は磨滅する。無文に沈線か。上端から左側部の周縁に研磨が施される。タテ3.3cm・ヨコ3.8cm・厚1.0cm・重17.50g。8は磨滅。帯状区画か。上端から右側部の周縁に研磨が施される。タテ3.3cm・ヨコ4.2cm・厚1.5cm・重17.50g。磁器1片が出土する。第12節3に記載する。

この他、図示し得なかった土器片は以下のとおりである。

無文の口縁部小片3片。口縁部文様帯とみられる小片5片、うち1片は細い隆帯を貼付しており古手か。また1片は沈線で作出した区画文内に円形の刺突を充填する。隆帯と沈線で作出した口縁部文様帯下部5片。磨消縄文手法モチーフを描くとみられる小片12片。地縄文に微隆起線を施す小片1片、加曾利EⅣ式。無文に微隆起線を施す小片5片、中期末葉～後期初頭。無文に鎖状の隆帯を施す小片1片。地縄文に沈線の一



第55図 第71号土坑出土遺物実測図

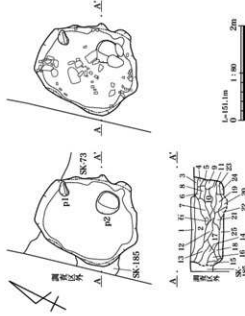
部がみえる小片6片。無文に花線の一部がみえる小片5片。底部小片4片。地条線小片3片。地網文小片49片。無文の小片20片。磨滅片8片。

石器・竈については表36に記載する。その他、小竈・小環埴が10個出土する。

本遺構の時期は判断としないが後期初末か。ただし、重複するS184から屈之内式と判断される土器片が出土する。本遺構からの流入遺物であるとすれば、本遺構の時期は後前葉か。

第73号土坑 (SK.73) (第56・57・58図 表37 図版六・二一・二二・二四・二八)

位置 C区E-13グリッドに位置する。**重複関係** 遺構北側のSZ-26は後出する円墳の四溝であり、重複により本遺構は北壁を失う。西側で重複するSK-185より本遺構が新しい。また、SI-85と重複する可能性があるが詳細は不明である。**形状・規模・軸** 括れ部より上面は削平により不明である。底面形は南北に長い楕円形で、断面は袋状である。SPA西側の壁面の立ち上がりラインはSK-185との重複により明確ではない。遺構上面の削平、前後より、レベルの高低差はあるものの、図中の遺構確認と最大径部のラインが重なる部分がある。底径は東西約1.6m・南北約1.9m。主軸はN・7°・Wである。遺構確認面からの深さは約0.7mである。最大径部は底面より30cmほど上位の15.04m付近にあり、東西約0.7m、南北は推定で約2.2mである。括れ部は、覆土4・5層が崩落層とすれば、150.15～150.45m付近となる。概ね平坦で、壁際付近で皿状となる底面から、やや外傾しつつも垂直気味に立ち上がる。最大径部は括れ部の上



SK.73

1	埋藏面上	ロ-ム灰子(-0.2m)少量、炭化物粒子(-0.2m)・白磁粒子(-0.1m)少量、黒磁粒子(-0.1m)少量、黒磁土、黒砂あり。
2	埋藏面上	ロ-ム灰子(-0.1m)少量、ロ-ムフツク(-0.8m)・炭化物粒子(-0.2m)・白磁粒子(-0.2m)少量、黒砂あり。
3	埋藏面上	ロ-ム灰子(-0.2m)少量、ロ-ムフツク(-0.8m)・炭化物粒子(-0.2m)少量、黒砂あり。
4	埋藏面上	ロ-ム灰子(-0.2m)少量、ロ-ムフツク(-0.8m)・炭化物粒子(-0.2m)少量、黒砂あり。
5	埋藏面上	ロ-ム灰子(-0.2m)少量、ロ-ムフツク(-0.8m)・炭化物粒子(-0.2m)少量、黒砂あり。
6	埋藏面上	ロ-ム灰子(-0.2m)少量、ロ-ムフツク(-0.8m)・炭化物粒子(-0.2m)少量、黒砂あり。
7	埋藏面上	ロ-ム灰子(-0.2m)少量、ロ-ムフツク(-0.8m)・炭化物粒子(-0.2m)少量、黒砂あり。
8	埋藏面上	ロ-ム灰子(-0.2m)少量、ロ-ムフツク(-0.8m)・炭化物粒子(-0.2m)少量、黒砂あり。
9	埋藏面上	ロ-ム灰子(-0.2m)少量、ロ-ムフツク(-0.8m)・炭化物粒子(-0.2m)少量、黒砂あり。
10	埋藏面上	ロ-ム灰子(-0.2m)少量、ロ-ムフツク(-0.8m)・炭化物粒子(-0.2m)少量、黒砂あり。
11	埋藏面上	ロ-ム灰子(-0.2m)少量、ロ-ムフツク(-0.8m)・炭化物粒子(-0.2m)少量、黒砂あり。
12	埋藏面上	ロ-ム灰子(-0.2m)少量、ロ-ムフツク(-0.8m)・炭化物粒子(-0.2m)少量、黒砂あり。
13	埋藏面上	ロ-ム灰子(-0.2m)少量、ロ-ムフツク(-0.8m)・炭化物粒子(-0.2m)少量、黒砂あり。
14	埋藏面上	ロ-ム灰子(-0.2m)少量、ロ-ムフツク(-0.8m)・炭化物粒子(-0.2m)少量、黒砂あり。
15	埋藏面上	ロ-ム灰子(-0.2m)少量、ロ-ムフツク(-0.8m)・炭化物粒子(-0.2m)少量、黒砂あり。
16	埋藏面上	ロ-ム灰子(-0.2m)少量、ロ-ムフツク(-0.8m)・炭化物粒子(-0.2m)少量、黒砂あり。
17	埋藏面上	ロ-ム灰子(-0.2m)少量、ロ-ムフツク(-0.8m)・炭化物粒子(-0.2m)少量、黒砂あり。
18	埋藏面上	ロ-ム灰子(-0.2m)少量、ロ-ムフツク(-0.8m)・炭化物粒子(-0.2m)少量、黒砂あり。
19	埋藏面上	ロ-ム灰子(-0.2m)少量、ロ-ムフツク(-0.8m)・炭化物粒子(-0.2m)少量、黒砂あり。
20	埋藏面上	ロ-ム灰子(-0.2m)少量、ロ-ムフツク(-0.8m)・炭化物粒子(-0.2m)少量、黒砂あり。
21	埋藏面上	ロ-ム灰子(-0.2m)少量、ロ-ムフツク(-0.8m)・炭化物粒子(-0.2m)少量、黒砂あり。
22	埋藏面上	ロ-ム灰子(-0.2m)少量、ロ-ムフツク(-0.8m)・炭化物粒子(-0.2m)少量、黒砂あり。
23	埋藏面上	ロ-ム灰子(-0.2m)少量、ロ-ムフツク(-0.8m)・炭化物粒子(-0.2m)少量、黒砂あり。
24	埋藏面上	ロ-ム灰子(-0.2m)少量、ロ-ムフツク(-0.8m)・炭化物粒子(-0.2m)少量、黒砂あり。
25	埋藏面上	黒色ロ-ム灰子(-0.1m)少量、ロ-ムフツク(-0.8m)・炭化物粒子(-0.2m)少量、黒砂あり。

第56図 第73号土坑断面図

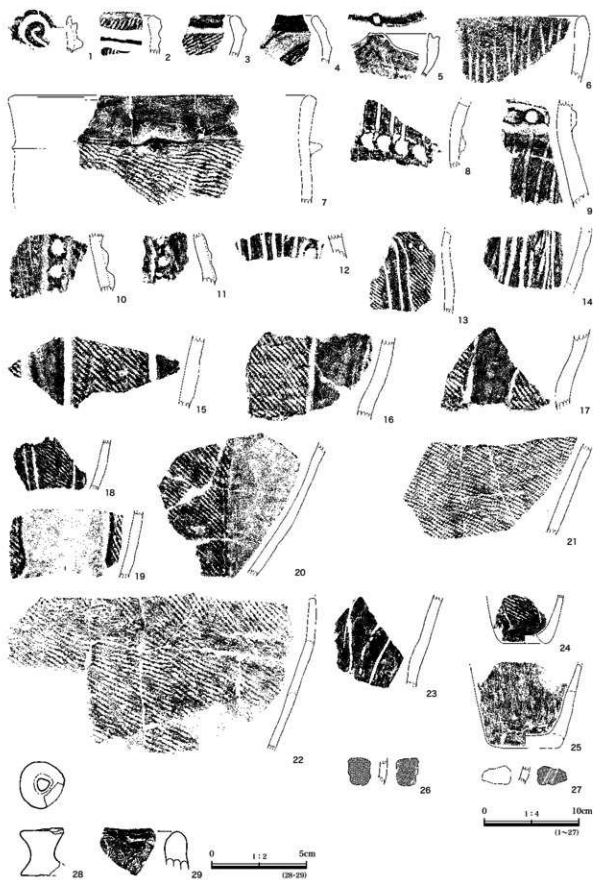
端部にあたりとみられる。底面のレベルは 150.1 m前後である。壁・底面はローム層で、底面のロームは砂質を帯びる。**付属施設** 底面の東壁によりには p 1・p 2 がある。p 1 の詳細は不詳である。p 2 は径約 0.5m である。底面はやや南北に長いが、主軸は N-7°-W で遺構の主軸と一致する。**覆土** 25 層を確認した。3・4・5・15 層は壁の前落土か。13 層は炭化物の堆積が顕著である。19・20 層は p 2 覆土か。21～24 層は p 2 周辺の覆土で、他の土層よりもしまりが強い。21・23 層は土層の特徴が似る。砂層等の堆積は確認されなかった。**特記事項** 覆土の堆積状況から、17～24 層は p 2 構築に関わる土層との推定が可能である。21～24 層が p 2 の構築土であるとすれば、p 2 開口時の底面は 17・21・23 層上面と考えられる。19・20 層が 21～24 層を掘り込むように堆積することから、本遺構構築時に底面まで掘削した後、150.25m 付近まで埋め戻し、p 2 を穿った可能性も考えられる。p 2 上面からの括れ部の最大径部は約 0.15m 上位となる。17・21・23 層、p 2 最上層の 19 層に土層の硬化等は観察されなかった。19・20 層の堆積後上層の覆土が堆積することから、遺構覆土の堆積は p 2 埋没後と推定される。遺構西側と東側の堆積状態に差異があり、本遺構廃絶時には、西側の括れ部上端が広く開口した状態で土層の堆積が始まった可能性を考え得る。遺構底面からの深さ約 7.0cm、19・20 層からの深さ約 15.0cm である。

遺物出土状況 覆土中から 302 点の遺物が出土する。6・10 は床面直上、8 はピット内から出土する。

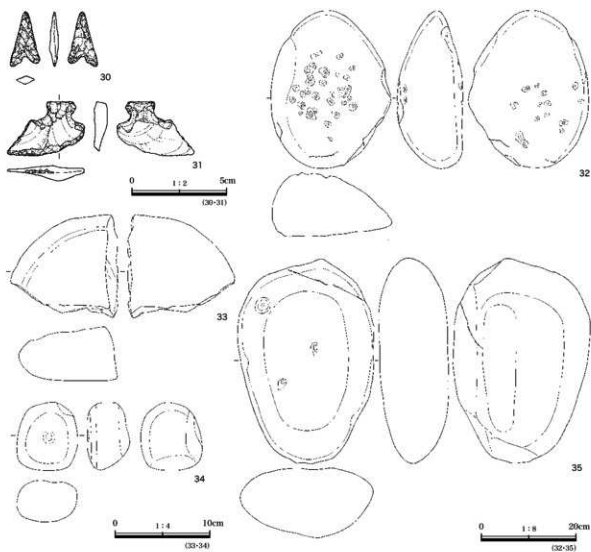
出土遺物 1 は波頂部か。渦巻き状の隆帯と沈線を配する。2 は口縁端部が三角形形状となる。口縁端部の僅かな無文部に縄文を施す。沈線は竹管状工具か。後期初頭か。3 は波状口縁部か。断面台形状の隆帯と凹線状の沈線が巡る。後期初頭か。4 は無文の口縁部下に横巡する微隆起線に接して 2 条 1 組の微隆起線でモチーフを描く。称名寺式に平行する加曾利 E 式か。5 は波頂部に盲孔を付す。体部は粗いナデが施される。後期前葉か。6 は口縁部に条線を施す。外面の口縁部下にススが付着する。8～12・14 は押捺を施す隆帯と地条線を配する。8 は隆帯直下は体部の地条線を施す前に隆帯に沿ってナデるか。器面は堅緻。9 は隆帯上部に沈線が沿う。10 は内外面ともススが付着する。内面に顕著である。11・12 は内面にススが付着する。6・8～12・14 は曾利式系か。何れも別個体と判断される。7 は無文の口縁部下に横巡する微隆起線に舌状突起を付す。体部は地縄文 (RL) を施す。称名寺式に平行する加曾利 E 式か。13 は口縁部下の括れ部に円形を刺突列を配するか。磨消縄文手法で逆「U」字状のモチーフを描く。18・24 は同一個体か。加曾利 E Ⅲ式か。15～17 は沈線で区画した縄文部と無文部でモチーフを描く。同一個体の可能性は低い。加曾利 E 式後半か。19・20 は微隆起線で区画した縄文部と無文部でモチーフを描く。同一個体か。加曾利 E Ⅳ式か。23 は無文に帯状区画を配する。区画内には単沈線と刺突のセットを配するか。後期初頭か。22 は縦位の地縄文 (LR) を配する。加曾利 E 式後半か。21 は縦位の地縄文 (RL) を配する。25 は地条線を施す。内外面にススが付着する。26・27 は無文に沈線を施す。内外面に赤彩を施す。同一個体か。28 は鼓形の栓状耳飾り。一部欠損する。29 は微細片であり判然としなが腕輪か。

この他、図示し得なかった土器片は以下のとおりである。

断面三角隆帯とこれにそう凹線で口縁部文様帯或いはモチーフを作出する小片 3 片、加曾利 E Ⅲ式か。無文の口縁部下に断面台形状の隆帯を付す小片 2 片。口縁部下に沈線が巡る小片 3 片、うち 2 片は以下地縄文。無文の口縁部下に円形の貫通孔を配する小片 1 片。後期初頭～前葉か。詳細不明の無文の口縁部微細片 2 片。沈線で縄文部と無文部を区画する小片 12 片、加曾利 E 式後半～後期初頭か。2 条 1 組の微隆起線でモチーフを描く小片 5 片、4 片は加曾利 E Ⅳ式、1 片は称名寺式に平行する加曾利 E 式か。断面三角形の一次区画隆帯の盲孔から縦位の集合沈線で無文部にモチーフを描くとみられる小片 1 片、後期前葉か。地縄文に縦位の集合沈線とみられる小片 1 片、後期前葉か。地縄文に沈線の一部がみえる小片 2 片。無文に沈線の



第57圖 第73号土坑出土遺物実測図(1)



第58図 第73号土坑出土遺物実測図(2)

一部のみえる小片3片。地条線小片10片。地縄文小片74片。無文の小片62片。底部小片2片。

石器・礫については表37に記載する。この他に、微細礫・微細片が28ヶが出土する。このうち、3片は石皿或いは礫石器の小破片か。比較的、礫石器や石皿等の定形的な石製品の出土が少ない。

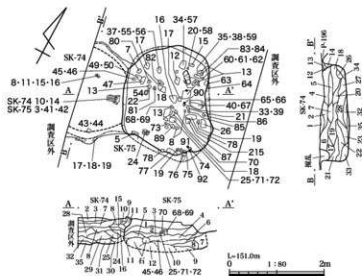
本遺構の時期は、中期後半、或いは後期初頭か。

第74号土坑 (SK-74) (第59・60図 表38 図版六・十九・二二・二八)

位置 C区D-12グリッドに位置する。調査区西端部に位置し、遺構は調査区外に延びる。 **重複関係** SZ-26内部にある。東側でSK-75、北側でP-196と重複し、本遺構が古い。 **形状・規模・主軸** 確認し得たのは遺構の一部であるが、概ね、円形状或いは楕円形状か。断面形は袋状で、図上に示した上は開口部が崩落した状況とみられる。残存する南北ライン(調査区端部)の底面径は約1.75m、括れ部径約2.0mである。遺構確認面からの深さ0.6m前後である。残存する最大括れ部は、覆土12~14層を壁の崩落層とするならば、底面から約0.25mほど上位の150.5m前後のレベル付近にある。底面はほぼ平坦で、底面レベル150.25m前後である。底面・壁面はローム層である。 **覆土** 35層を確認した。12~14・33・34層は壁面の崩落土か。ロームを多量に含む19・21・27・28・35(33・34)層と黒味の強い色調の20・

22・32層が交互に堆積する。レンズ状の層序が観察できるが、19層（或いは18層）以下に埋め戻された可能性を指摘しておきたい。

遺物出土状況 89点が出土する。1・5・8は床面付近から、17～19は覆土中層以下から出土する。何れも覆土19層以下の出土であり、覆土19層以下の堆積状況に連動するものか。



SK-74

- | | |
|----------|---|
| 1 黒褐色土 | ローム粒子(～0.1m)・ロームブロック(～0.3m)・白色粒子少量、炭化物粒子微量、しまりあり。 |
| 2 暗茶褐色土 | ローム粒子(～0.2m)やや多量、ロームブロック(～0.8m)炭化物粒子・白色粒子少量、しまりあり。 |
| 3 暗茶褐色土 | ローム粒子(～0.1m)やや少量、ロームブロック(～0.3m)少量、炭化物粒子若干量、しまり強い。 |
| 4 暗茶褐色土 | ローム粒子(～0.4m)含む、炭化物粒子(～0.2m)・白色粒子少量、しまり強い。 |
| 5 暗褐色土 | ローム粒子(～0.2m)含む、ロームブロック(～1.0m)炭化物粒子・白色粒子少量、しまりあり。 |
| 6 暗褐色土 | ローム粒子(～0.1m)やや多量、炭化物粒子・白色粒子少量、しまりあり。 |
| 7 暗茶褐色土 | ローム粒子(～0.2m)含む、ロームブロック(～2.0m)少量、炭化物粒子若干量、しまり強い。 |
| 8 暗茶褐色土 | ローム粒子(～0.1m)やや少量、ロームブロック(～0.8m)少量、白色粒子若干量、しまり強い、崩落した壁の隙間土か |
| 9 暗黄茶褐色土 | ローム粒子(～0.3m)やや多量、炭化物粒子(～0.1m)若干量、しまり強い、崩落土か。 |
| 10 暗黄褐色土 | ロームブロック(～1.5m)主休層、崩落土か。 |
| 11 暗茶褐色土 | ローム粒子(～0.2m)やや多量、ロームブロック(～0.5m)少量、白色粒子若干量、しまり強い、壁間隙間土か。 |
| 12 暗黄褐色土 | ローム粒子・ロームブロック(～2.0m)含む。 |
| 13 暗褐色土 | ローム粒子含む、ロームブロック(～1.0m)少量。 |
| 14 暗黄褐色土 | ローム粒子・ロームブロック(～6.0m)含む。 |
| 15 暗黄褐色土 | ローム粒子(～0.2m)少量、炭化物粒子(～0.2m)若干量、しまり強い。 |
| 16 暗茶褐色土 | ローム粒子(～0.1m)やや少量、炭化物粒子(～0.2m)若干量、しまり強い。 |
| 17 暗茶褐色土 | ローム粒子(～0.2m)やや多量、炭化物粒子(～0.3m)・白色粒子少量、しまりあり。 |
| 18 暗茶褐色土 | ロームブロック(～0.5～5.0m)やや多量、ローム粒子(～0.2m)含む、炭化物粒子(～0.2m)少量、白色粒子若干量、しまり強い。 |
| 19 暗褐色土 | ローム粒子(～0.2m)含む、ロームブロック(～5.0m)炭化物粒子・白色粒子少量、しまりあり。 |
| 20 暗茶褐色土 | ローム粒子(～0.3m)やや多量、ロームブロック(～0.8m)炭化物粒子(～0.4m)・白色粒子少量、しまりあり。 |
| 21 暗褐色土 | ローム粒子含む、ロームブロック(～1.2m)少量。 |
| 22 暗褐色土 | ローム粒子(～0.3m)少量、炭化物粒子・白色粒子少量、しまりあり。 |
| 23 暗褐色土 | ローム粒子(～0.3m)多量、ロームブロック(～1.0m)含む、褐色粒子(～0.3m)炭化物粒子・白色粒子少量、しまりあり。 |
| 24 暗褐色土 | ローム粒子(～0.1m)少量、ロームブロック(～0.3m)炭化物粒子(～0.1m)若干量、しまり強い。 |
| 25 暗茶褐色土 | ローム粒子(～0.2m)含む、ロームブロック(～0.8m)炭化物粒子(～0.2m)少量、しまり強い。 |
| 26 暗茶褐色土 | ローム粒子(～0.2m)やや多量、ロームブロック(～0.8m)炭化物粒子(～0.1m)・白色粒子少量、しまりあり。 |
| 27 暗茶褐色土 | ローム粒子(～0.2m)ごく多量、炭化物粒子・白色粒子少量、しまりあり。 |
| 28 暗茶褐色土 | ローム粒子(～0.3m)多量、ロームブロック(～1.0m)含む、炭化物粒子・白色粒子少量、褐色粒子(～0.3m)微量、しまりあり。 |
| 29 茶褐色土 | ローム粒子(～0.2m)やや多量、ロームブロック(～1.0m)少量、炭化物粒子(～0.2m)若干量、しまり強い。 |
| 30 暗黄褐色土 | ロームブロック(～1.5m)多量、ローム粒子(～0.1m)少量、炭化物粒子(～0.1m)若干量、しまりやや弱い。 |
| 31 暗茶褐色土 | ローム粒子(～0.2m)やや多量、ロームブロック(～0.8m)炭化物粒子(～0.2m)少量、しまり強い。 |
| 32 暗茶褐色土 | ローム粒子(～0.2m)含む、ロームブロック(～0.8m)少量、白色粒子若干量、しまり強い。 |
| 33 暗茶褐色土 | ローム粒子・ロームブロック(～5.0m)多量、炭化物粒子(～0.5m)・白色粒子少量、しまりあり。 |
| 34 暗黄褐色土 | ローム粒子(～0.3m)ごく多量、白色粒子少量、炭化物粒子微量、しまりあり。 |
| 35 暗褐色土 | ローム粒子(～0.1m)・ロームブロック(0.3～1.5m)少量、しまり強い。 |

SK-75

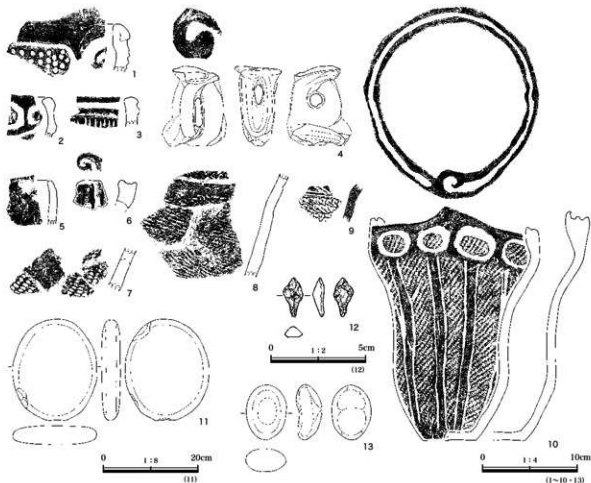
- | | |
|----------|--|
| 1 暗褐色土 | ローム粒子(～0.1m)含む、ロームブロック(～0.8m)炭化物粒子(～0.3m)・白色粒子少量、しまり強い。 |
| 2 暗褐色土 | ローム粒子(～0.1m)やや多量、ロームブロック(～1.5m)炭化物粒子(～0.8m)含む、白色粒子若干量、しまりあり。 |
| 3 暗褐色土 | 4層に似る。4層よりローム粒子少量。 |
| 4 暗褐色土 | ローム粒子(～0.1m)炭化物粒子(～0.8m)含む、ロームブロック(～0.8m)少量、白色粒子若干量、しまりあり。 |
| 5 暗褐色土 | ローム粒子(～0.4m)やや多量、炭化物粒子(～0.3m)少量、しまりあり。 |
| 6 暗茶褐色土 | ローム粒子(～0.2m)炭化物粒子(～1.0m)少量、しまりやや弱い。 |
| 7 暗黄褐色土 | ローム粒子(～0.2m)・ロームブロック(～0.8m)炭化物粒子(～0.2m)少量、白色粒子若干量、しまりあり。 |
| 8 暗黄褐色土 | ローム粒子・ロームブロック主休層、炭化物粒子(～0.5m)少量、しまりあり。 |
| 9 暗茶褐色土 | 6層に似る。6層よりロームブロック少量。 |
| 10 暗褐色土 | ローム粒子(～0.2m)炭化物粒子(～0.3m)少量、しまりあり。 |
| 11 暗黄褐色土 | ローム粒子(～0.2m)・ロームブロック(～2.0m)主休層、しまり強い。 |
| 12 黄褐色土 | ロームブロック層。 |

第59図 第74・75号土坑実測図

出土遺物 9は半載竹管状工具で施した菱形の文様下にループ文を施す。関山2式か。10は波頂部に渦巻きを配する小型の深鉢形土器である。内面にオコゲが付着する。理化学分析の結果、ドングリに由来するオコゲであることが確認された。1～3は隆帯と沈線で先出される口縁部文様帯である。加曾利EⅡ～Ⅲ式か。1の波頂部下の単位文は渦巻きか。区画文内に円形の刺突を充填する。2の区画文内は縄文か。3は区画文内に条線を充填する。5は無文の口縁部。内湾する形状から加曾利E式後半の可能性があろうか。内面の口縁部下にオコゲが付着する。6は突起上端の渦巻きから連続して沈線が垂下する。加曾利E式後半か。4は突起正面に低平な隆帯を弧状に配する。上端部は渦巻き状の沈線を配する。8は口縁部文様帯下部か。沈線で区画する。10は沈線で無文部を区画する。モチーフは不詳である。

この他、図示し得なかった土器片は以下のとおりである。

無文の口縁部小片2片。無文に沈線のみ見える小片2片。隆帯と沈線で作出される口縁部文様帯とみられる小片8片。加曾利E式後半。沈線で区画された口縁部文様帯下部から磨消を伴う懸垂文が垂下するとみられる破片1片。加曾利E式後半。沈線で区画された無文部小片7片。加曾利E式後半～後期初頭。帯状区画とみられる縄文施文の小片1片、称名寺式か。無文に微隆起線のみ見える小片1片、加曾利EⅣ式～後期初頭。地縄文に複数の平行する沈線のみ見える小片7片、口縁部文様帯或いは懸垂文か。縄文に沈線の一部のみ見える小片1片。無文に沈線のみ見える小片8片。半載竹管状工具でモチーフを描く小片1片。地条線を施す小片1片。地縄文小片14片。無文の小片5片。地縄文を施す底部小片1片。磨滅片・微細片70.8g。



第60図 第74号土坑出土遺物実測図

石器・礫は表38に記載する。その他、小礫2ヶ、小礫塊4片（うち1片は赤色変化）が出土する。

本遺構の時期は19層以下は加曾利E式後半、19層より上層は後期初頭か。

第75号土坑（SK-75）（第59・61～63図 表39 図版六・二二）

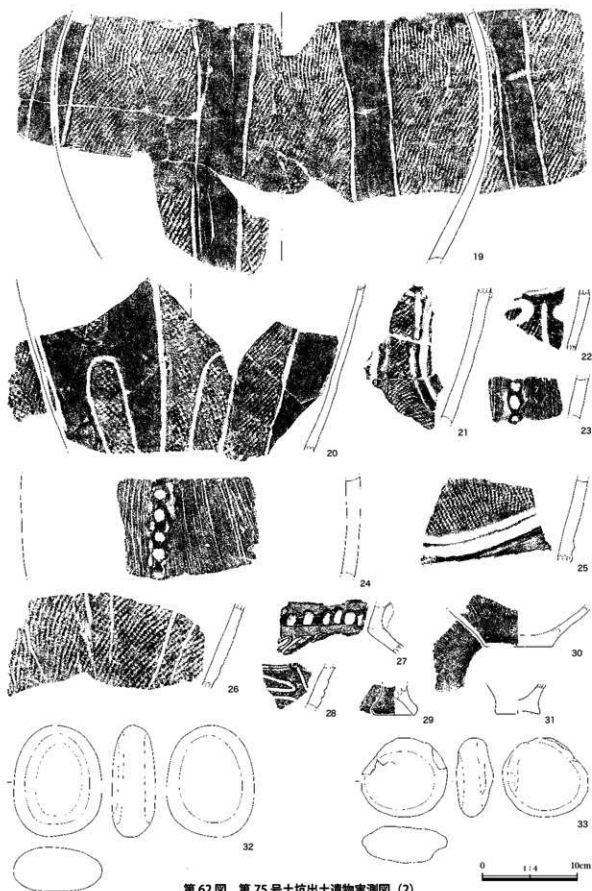
位置 C区E-12グリッドに位置する。**重複関係** SZ-26内部にある。西側にSK-74、南側にP-195が重複する。SK-74より新しい。S-195との新旧関係は不明である。**形状・規模・主軸** 図上に示した上は開口部が崩落した状況とみられる。北東部の上は後世の削平によるものか、大きく原況を失っている。東～南壁の残存状況は良好と判断される。底面は南北に長い楕円形、断面形は袋状である。底面は浅い皿状で、壁面と底面の境は曖昧なまま括れ部最大径部まで立ち上がる。このため、第59図の下は最大径部を示す。括れ部の最大径は東西約1.8m・南北約2.4mである。遺構確認面からの深さ0.65m前後である。残存する最大括れ部は、底面から約0.25m前後上位の150.4mのレベル付近にある。西～北壁にかけては、150.5m付近まで僅かに内傾しつつも垂直気味に壁の立ち上がる部分が観察される。底面の中央部に緩やかな皿状の最深部があり、150.05m前後のレベルである。底面・壁面はローム層である。**覆土** 12層を確認した。遺物の出土によって底面付近の堆積を確認し得なかったが、全体的に炭化物の混入が目立つ。7層はロームの堆積が少なく、壁の崩落層とは考えがたい。3層以下はローム粒子を比較的多く含む。3層以下の堆積は、ロームを多く含む8・12層とロームの少ない3～5・9・10層が横線状に堆積する。また、SP-A西側にの層序を見る限り、壁の崩落とみられる堆積が観察されない。レンズ状の層序が観察できるが、早い段階で開口部付近を取り払い、3層以下を埋め戻した可能性を指摘しておきたい。

遺物出土状況 273点が出土する。SP-Aに示した礫2点は覆土3層以下の堆積状況に連動するものか。第59図に示した出土遺物は概ね3層以下から出土する。1・8・21・29・70・75・89は床面付近から、5・12・13・17～20・24・25・37・55・56・58・68・69・71・72・80・82は床面から若干高いレベルから、3・15・16・22・26は3層以下から、2・4・7・9・11・14・19・23・27・28・31は覆土中から出土する。76は3層上で出土した。21は床面出土と3層以下出土の破片が接合する。10は確認面付近から出土する。

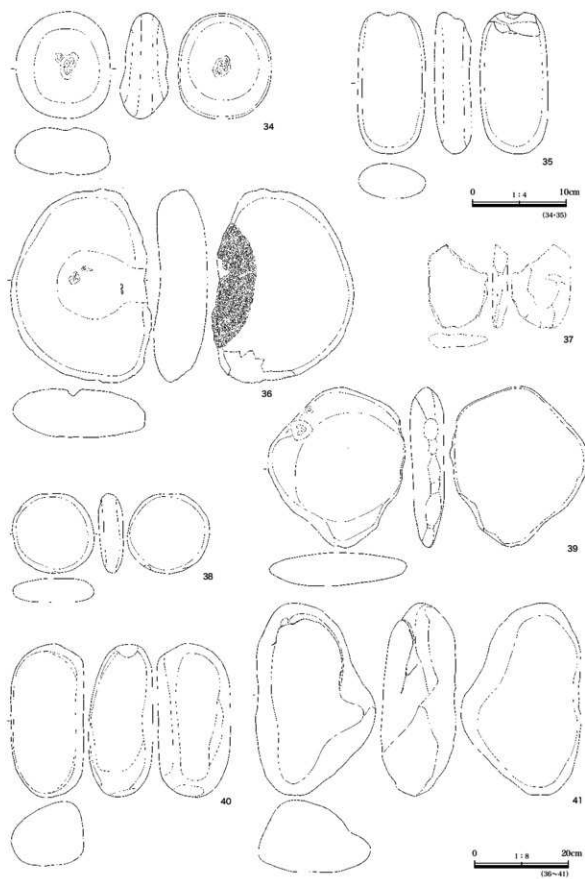
出土遺物 2は突起頂部の渦巻きを連続して体部のモチーフを描出か。1は円筒状の突起の上面が凹む。口縁部下には沈線が巡るか。4・5は隆帯と沈線で口縁部文様帯を作出する。4の隆帯は低平であり、単位文は渦巻きか。5は円形の単位文を付す。3・6～9は沈線で口縁部文様帯を作出する。3は区画文間に渦巻き状の沈線を配する。懸垂文は区画文下から垂下する。16と同一個体か。6の単位文は渦巻きか。加曾利EⅢ式か。10は口縁部下に微隆起線が横巡るか。円形の刺突は体部のモチーフとの接点に配されるか。中期末葉～後期初頭か。12は無文の口縁部。外面口端部に稜をもつ。後期初頭～後期前葉か。11は口縁端部から縦位の地縄文(LR)を施す。中期か。13は楕状把手を横方向2段に付す。無文の口縁部下に沈線が横巡るか。体部には逆「U」字状のモチーフを描き縄文を施文する。14は隆帯と沈線で作出する口縁部文様帯か。単位文は円形か。17～19は同一個体か。胎土に小礫を含む。20は沈線で区画された無文帯で「H」字状のモチーフを描く。加曾利E式後半か。15は隆帯と沈線で体部文様を作出か。15は文様の接点に円形の刺突を付すか。21の沈線は凹線状。加曾利EⅢ式か。23・24・27は押捺を施す隆帯を配する。27は頸部か。27は沈線でモチーフを描くか。器面の状況からは加曾利E式後半か。28は無文に帯状区画を配する。称名寺式か。26は地縄文に1～2本の沈線が垂下する。堀之内1式か。29は加曾利E式後半～後期初頭の底部か。30は地条線を施す。器面は堅緻である。29は台か。裾部の径は約4.2cmである。図示し得なかったが、68・69は微隆起線の一部がみえる無文の小片、後期初頭か。80は縄文部と無文部に区画を持たない小片。82・88は沈線で区画した縄文部と無文部が垂下する破片。89は沈線で作出する口縁部文様帯。波頂下に円



第61図 第75号土坑出土遺物実測図(1)



第62圖 第75号土坑出土遺物実測圖(2)



第63図 第75号土坑出土遺物実測図(3)

形の単位文を配する。床面からは、沈線で作出する口縁部文様帯の区画文2片、断面三角形の隆帯と沈線を施す体部小片1片、沈線で区画した縄文部と無文部が垂下する破片1片、無文に微隆起線を配する小片1片が出土する。

この他、図示し得なかつた土器を記す。

3層以下から出土するのは以下のとおりである。

沈線で区画した縄文部と無文部が垂下する破片4片。地縄文に沈線の一部がみえる小片3片。地条線小片2片。地縄文破片3片、うち2片は縦文(LR・RL)、1片(LR)は斜位に施文する。

覆土中から出土するのは以下のとおりである。

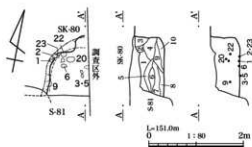
隆帯と沈線で作出する口縁部文様帯2片、加曾利E式後半。沈線で作出する口縁部文様帯6片、加曾利E式後半。無文の口縁部2片、微細片2片。押捺を施す隆帯小片1片、曾利式系。沈線で区画した縄文部と無文部が垂下する破片25片。縄文部と無文部に区画を持たない小片1片。微隆起線を施す小片6片。無文に数条の沈線が垂下する小片1片、加曾利E式後半～後期前葉か。無文に数条の沈線が施される小片3片。地縄文に沈線の一部がみえる小片13片。無文に沈線の一部がみえる小片10片。地縄文小片36片。地条線小片10片。無文の小片30片。底部片6片、うち2片は地縄文を施す。磨滅片・微細片66.3gである。

石器・礫は表39に記載する。この他、微細礫・微細片が13ヶ出土する。

本遺構からは加曾利EⅢ式～堀之内1式とみられる時期の土器片が出土する。床面付近からは加曾利E式後半に平行する時期の遺物が出土する。3層以下が埋め戻されたと仮定した場合、埋め戻し以前は加曾利E式後半、本遺構の廃絶時期は後期初頭～後期前葉か。

第80号土坑(SK-80) (第64・65図表40 図版7)

位置 C区D・E-12グリッドに位置する。調査区西端部に位置し、遺構は調査区外に延びる。重複関係SZ-26内部にあり、南側にSZ-26埋葬施設とみられるS-81が重複する。本遺構が古い。**形状・規模・主軸** 確認し得たのは遺構の一部であり、平面形は不明であるが、調査区内で確認された袋状土坑同様、円形状か楕円形状である可能性は高い。断面形は袋状で、図上に示した上は開口部が崩落した状況とみ



SK-80

- 1 暗褐色土 ローム粒子(～0.1cm)・炭化物粒子(0.5cm)・白色粒子少量。しまりあり。
- 2 暗褐色土 ローム粒子・ロームブロック(～1.0cm)主体層。炭化物粒子(～0.2cm)少量。しまりあり。崩壊土か。
- 3 暗褐色土 ローム粒子(～0.3cm)や多量。炭化物粒子若干量。しまりあり。崩壊土か。
- 4 暗褐色土 炭化物粒子(～0.3cm)や多量。ローム粒子(～0.3cm)・白色粒子少量。しまりあり。
- 5 暗褐色土 炭化物粒子(～0.5cm)やや多量。ローム粒子(～0.1cm)・白色粒子少量。しまりあり。
- 6 暗褐色土 ローム粒子(～0.2cm)含む。ロームブロック(～1.0cm)・炭化物粒子(～0.3cm)・白色粒子少量。しまりあり。
- 7 暗褐色土 ローム粒子(～0.3cm)・ロームブロック(～1.0cm)多量。炭化物粒子・白色粒子少量。しまりあり。
- 8 暗褐色土 ローム粒子(～0.3cm)や多量。ロームブロック(～1.2cm)含む。炭化物粒子(～0.5cm)・白色粒子少量。しまりあり。
- 9 暗褐色土 ローム粒子(～0.3cm)多量。炭化物粒子(～0.2cm)・白色粒子少量。しまりあり。
- 10 暗褐色土 ローム粒子(～0.2cm)・ロームブロック(～1.0cm)多量。炭化物粒子(～0.5cm)・白色粒子少量。しまりあり。

第64図 第80号土坑実測図

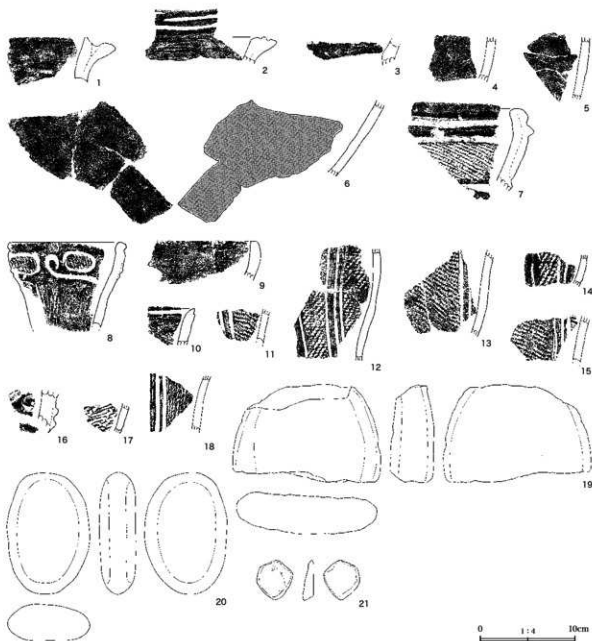
られる。底面径は東西約0.9m・南北約1.0m、括れ部径東西約1.0m・南北約1.2mの範囲を確認した。遺構確認面からの深さ0.6m前後である。残存する最大括れ部は約10cmほど上位の150.22m前後のレベル付近にあり、150.45m付近まで垂直気味に立ち上がる。底面はほぼ平坦で、底面レベル150.12m前後である。底面・壁面はローム層である。覆土10層を確認した。壁よりの2・3層が壁面の崩落土とすれば、9・10層の堆積は壁面の崩落土を含むか。層序はレンズ状で、括れ部からの堆積が観察できる。

遺物出土状況 75点が出土する。1～3・5・6・23は床面付近から出土する。特に、

6・9は覆土8層に相当する覆土中、9・20・22は覆土4・6層相当層からの出土か。

出土遺物 17はループ文を重層する。関山式。1は無文の浅鉢か。口縁部は波状か。胎土に小礫を含む。2～6は同一個体か。無文で堅緻、器色は赤色が強い。2・6は内面、3は外面に赤彩を施す。特に6は明瞭に残る。7は降帯と沈線で口縁部文様帯を作出か。8は低平な降帯と沈線で渦巻きよこれに連続する区画文を配する。体部は地条線。7・8は加曾利EⅡ～Ⅲ式か。9は無文の口縁部である。内湾気味か。外面の口縁端部にオコゲが付着する。10は口縁部直下に沈線が巡る。波状口縁か。16は降帯と沈線で口縁部文様帯を作出か。18は3条一組の懸垂文か。加曾利EⅡ～Ⅲ式か。11～15は同一個体か。3条一組の懸垂文が垂下する。11は底周部か。図示し得なかったが23は明瞭な地条線を施す小片である。

この他、図示し得なかった土器片は以下のとおりである。



第65図 第80号土坑出土遺物実測図

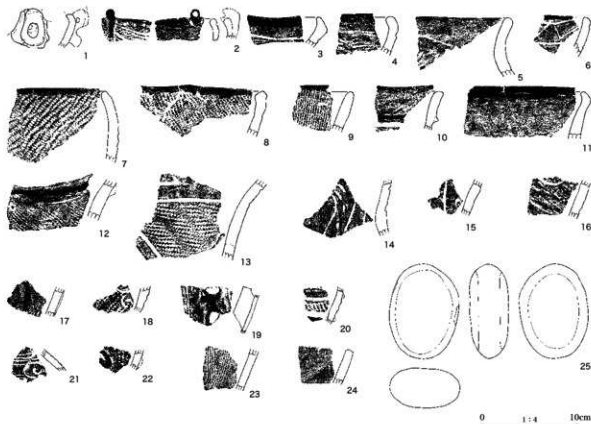
堆積するが、埋没に伴うとすれば、廃絶からさほどの時間さを持たず、開口部は取り払われているか。

遺物出土状況 覆土中から159点が出土する。7・11・12は確認面付近から出土する。1～3は人頭大の礫である。表土直下から出土する。

出土遺物 1は上端部を欠失するが「8」字状の突起が付されるか。下端からは図上左側に微隆起線状の高まりが続く。称名寺式か。2は瘤状の突起を施す口縁部。口縁端部に沿って円形の刺突列が巡る。以下、帯状区画でモチーフか。称名寺式か。3は屈曲する口縁部以下は帯状区画か。称名寺式か。4は波状口縁か。口縁部下に沈線が横巡し、以下、縄文を施す。中期末～後期初頭か。5は無文の口縁部下に斜位とみられる縄文を施す。後期初頭か。6は口縁端部から無文地に沈線モチーフを描くか。後期初頭か。7は口縁部直下から横位・斜位の地縄文を施す。後期か。8は波状口縁か。口縁部直下から横位の地縄文を施し、口縁端部に薄く粘土を貼付する。後期か。9は口縁端部からやや斜方向に条線を施す。7本単位の帯筒状工具か。10



第 68 図 第 99号土坑実測図



第 69 図 第 99号土坑出土遺物実測図

は波状口縁部下に断面三角形の隆帯が巡る。隆帯下部は不明瞭であるが沈線か。後期初頭か。11は端部が屈曲する無文の口縁部である。外面にスス、内面にスス垂れの痕跡が付着する。12は内面にスス垂れの痕跡が付着する。13はモチーフは不詳であるが帯状区画内か。称名寺式か。14は帯状区画内に刺突列を配する。渦巻き状のモチーフか。称名寺式。15は地縄文に帯状区画を配する。モチーフは不詳である。称名寺式か。16は帯状区画内に粗いナデを施す。称名寺式か。17は無文に微隆起線で曲線的なモチーフを描く。後期初頭か。18は地縄文に単沈線でモチーフを描く。堀之内1式か。22は盲孔を付す円形の貼付文か。堀之内式か。19は地条線に盲孔を付す隆帯が垂下する。堀之内式か。20は沈線の沿う細い隆帯間に横位の縄文を施す。深鉢形以外の器形か。21は数条の細い沈線間に沈線でモチーフを描く。加曾利B式の注口土器か。23は櫛歯状工具で地条線を施す。24は6本単位の櫛歯状工具で斜方向の条線を施す。

この他、図示し得なかった土器片は以下のとおりである。

楕状把手の小片1片、大形か。中期末葉～後期初頭。無文の口縁部下に沈線が横巡する小片1片。無文の口縁部小片4片。無文の波状口縁部小片1片。隆帯と沈線で作出する口縁部文様帯とみられる小片2片。沈線間に磨消を施す小片7片、磨消縄文手法でモチーフを描く小片3片、加曾利E式後半～後期初頭か。地縄文に沈線を配する小片2片。無文に沈線を配する小片2片、1片は後期初頭か。地条線小片3片。地縄文小片38片。無文の小片42片。底部小片2片、1片は内外面に顕著にススが付着する。磨滅片17.6g。

石器・礫は表42に記載する。この他、微細な自然石・小礫片が11片出土する。

本遺構の時期は、21に後出する様相がみられるが、後期初頭～前葉か。

第103号土坑 (SK-103) (第70・71図 図版七・二三)

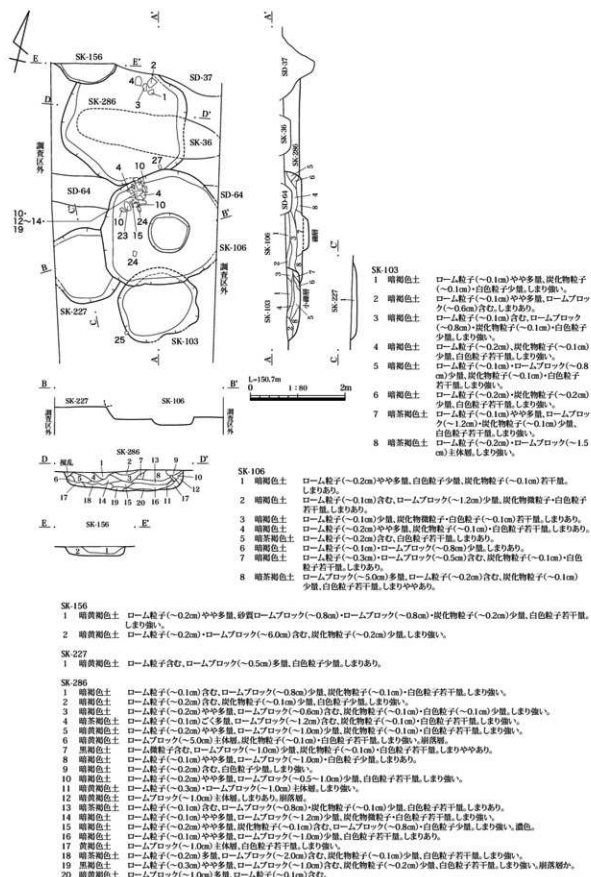
位置 B区C-6グリッドに位置する。**重複関係** SK-106と重複する。本遺構が新しい。**形状・規模・主軸** 削平により底面付近のみが残存する。断面形は不詳であるが、位置、平面形状からSK-151同様の袋状土坑である可能性が考えられる。形状は不整であるが円形状である。径は、確認面の東西約1.75m・南北約1.6m、底面の径は東西約1.4m・南北約1.2mであり、やや東西に長い。遺構確認面からの深さは約0.25mである。底面は緩やかな皿状で、遺構中央部のレベルは約150.12mである。底面中央部付近は小礫層が露出する。底面周縁部から壁面はローム層を掘り込む。**覆土** 8層を確認した。8層はロームブロック主体層である。堆積はレンズ状であるが、5～8層上面は水平な堆積が確認できる。

遺物出土状況 覆土中から11点を確認した。本遺構に帰属する遺物が重複するSK-106に混入する可能性が残るが、現地調査時の取り上げ遺構において記載する。

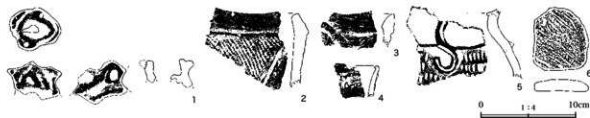
出土遺物 1は円筒状の突起である。上面に対弧状の低い隆帯を付し、刺突を配する。外面は2本一組の低平な隆帯が垂下する。内面は対弧状の隆帯が貫通孔に連繋する。称名寺式か。2は波状の口縁部である。口縁部下には微隆起線が横巡する。波頂下から沈線で区画した無文部でモチーフを描出か。加曾利EIV式か。3は波状口縁部下に沈線が途切れながら巡る。沈線に連繋して曲線的な隆帯が配されるが、「C」字状になるか。後期前葉か。4は紐線の巡る口縁部である。紐線間に刺突が配される。堀之内2式か。5は一次区画とみられる断面三角形の隆帯を挟んで「S」字状の隆帯が配される。区画線以下はキザミ列が巡る。壺形土器か。三十稲葉式か。6は地縄文を施す小片。図上部が研磨される。土製円盤の未製品か。タテ6.5cm・ヨコ5.9cm・厚1.3cm・重51.05g。

この他、図示し得なかった出土遺物は以下のとおりである。

波状口縁部下に凹線が横巡する小片1片、加曾利EⅢ式の口縁部文様帯か。舌状突起状の高まりの中央部に刺突が施される小片1片。後期初頭～前葉か。無文の口縁部下に微隆起線が横巡する小片1片、加曾利E



第70図 第103・106・156・157・227・286号土坑実測図



第71図 第103号土坑出土遺物実測図

IV式。隆帯に刺突を施す小片1片、後期前葉か。地縄文に沈線の一部のみ見える小片1片である。

本遺構の時期は後期前葉か。

第105号土坑 (SK-105) (第70・72・73図 表43 図版7)

位置 B区C-6グリッドに位置する。**重複関係** 重複する遺構はない。**形状・規模・主軸** 円形である。断面は、壁面に覆土2・3層下部で僅かに内傾すること、覆土2・3層が壁の崩落土とすれば袋状と考えられる。遺構確認面の径は1.1m前後、底面の径は約0.92m、遺構確認面からの深さ約0.4mである。括れ部の最大径は、覆土2・3層下部となる底面より約0.25m上位の150.35m前後付近か。底面は僅かに皿状であり、中央部が遺構の最深部となる。レベルは約150.02mである。壁～底面はローム層を掘り込むが、遺構の最深部となる底面中央は砂質を帯びるロームが混入する。**覆土** 14層を確認した。2・3・8・12層はロームブロックの堆積が多く、壁面の崩落層か。7～9層下位はローム粒子・ロームブロックの堆積が顕著にみられる。

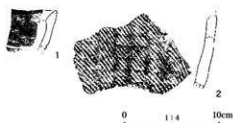
遺物出土状況 覆土中から11点を確認した。3は遺構確認面上、1は覆土4・5層端境部、2・4は床面付近から出土する。

出土遺物 1は波状口縁部である。口縁部下に沈線と縄文が見える。後期初頭か。2はタテ方向の地縄文を施す体部である。

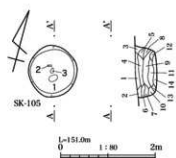
この他、図示し得なかった土器片は、無文の小片2片、地縄文小片3片である。

石器・礫は表43に記載する。

本遺構の時期は判然としなが、後期初頭か。



第72図 第105号土坑出土遺物実測図



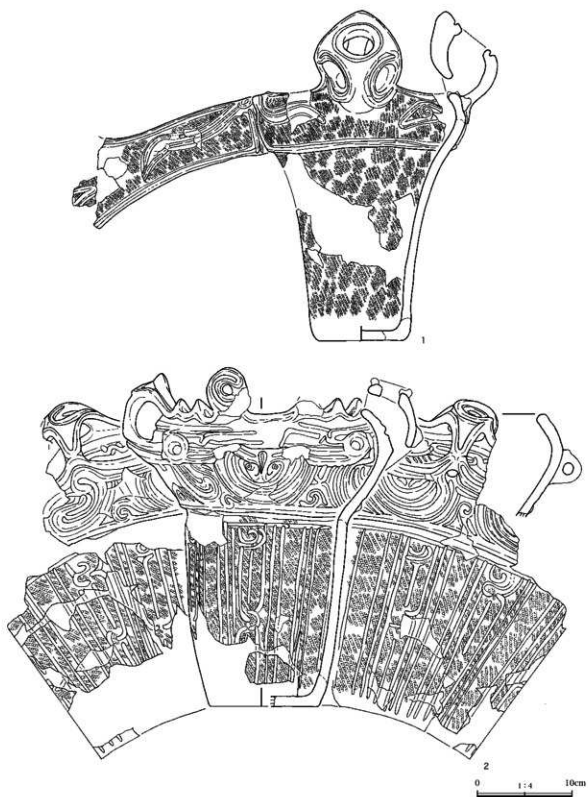
SK-105	説明
1 暗褐色土	ローム粒子(～0.1m)含む、炭化物粒子(～0.1m)少量、白色粒子若干量、しまり強い。
2 暗褐色土	ローム粒子(～0.2m)・ロームブロック(～1.0m)多量、しまり強い。
3 暗褐色土	ローム粒子(～0.2m)・ロームブロック(～1.0m)含む、炭化物粒子(～0.1m)少量、白色粒子若干量、しまり強い。
4 暗褐色土	ローム粒子(～0.2m)含む、ロームブロック(～0.8m)・炭化物粒子(～0.2m)・白色粒子少量、しまり強い。
5 暗褐色土	ローム粒子(～0.2m)やや多量、ロームブロック(～0.8m)・炭化物粒子(～0.2m)少量、白色粒子若干量、しまり強い。
6 暗褐色土	ローム粒子(～0.2m)やや多量、炭化物粒子(～0.2m)含む、白色粒子若干量、しまり強い。
7 暗褐色土	ローム粒子(～0.2m)・ロームブロック(～1.0m)多量、炭化物粒子(～0.2m)少量、白色粒子若干量、しまり強い。
8 暗褐色土	ローム粒子(～0.2m)・ロームブロック(～1.5m)多量、炭化物粒子(～0.2m)少量、白色粒子若干量、しまり強い。
9 暗褐色土	ローム粒子(～0.2m)・ロームブロック(～0.8m)やや多量、炭化物粒子(～0.3m)含む、白色粒子若干量、しまり強い。
10 暗褐色土	ローム粒子(～0.2m)やや多量、ロームブロック(～1.0m)含む、炭化物粒子(～0.5m)少量、しまり強い。
11 暗褐色土	ローム粒子(～0.2m)・炭化物粒子(～0.2m)含む、ロームブロック(～0.6m)少量、白色粒子若干量、しまり強い。φ0.1cmのロームブロック・14層間に集中。
12 暗褐色土	ローム粒子(～0.2m)・ロームブロック(～3.0m)多量、炭化物粒子(～0.2m)少量、しまりあり。
13 暗褐色土	ローム粒子(～0.2m)多量、炭化物粒子(～0.2m)少量、しまり強い。
14 暗褐色土	ローム粒子(～0.2m)・ロームブロック(～0.8m)含む、炭化物粒子(～0.2m)少量、白色粒子若干量、しまり強い。

第73図 第105号土坑実測図

第106号土坑 (SK-106) (第70・74・75図 表44 図版七・二〇・二三)

位置 B区D-6グリッドに位置する。調査区東端部にあり調査区外に延びる。**重複関係** 遺構北端部の上面に後出するSD-64が重複する。西・南・北にSK-227・SK-103・SK-286が重複する。新旧関係は、古い順にSK-286→本遺構→SK-103である。SK-227との新旧関係は確認できなかった。**形状・規模・主軸** 東側端部は調査区外にある。上面の削平により底面付近のみが残存する。やや東西に長い円形状である。断面形は削平により不詳であるが、平面形状、規模、壁面が丸みをもって立ち上がる形状等からSK-04などと同様の袋状土坑である可能性が考えられる。遺構確認面の径は、東西の推定径約2.5m・南北約2.4mである。底面の径は、東西の推定径約2.2m・南北約2.08mである。遺構確認面からの深さは約0.35m、主軸はN-77°-Eである。壁面の形状や調査区内で確認された規模の大きな袋状土坑の形状などから、遺構確認面が括れ部の最大径部である可能性が考えられる。遺構確認面は底面から0.3m前後上位の150.4m前後にある。底面は凹凸はあるものの概ね平坦である。中央部のレベルは約150.065mである。壁・底面は小礫層直上のローム層であり、p1中位の150.0m付近以下は小礫層である。**覆土** 8層を確認した。砂層は確認されなかった。8層はロームブロックを多量に含む。7層は8層を掘り込むようにp1内に堆積し、上面に1~4層以上が堆積する。5・6層の堆積は暗褐色土であり、壁の崩落土とは捉え難い。1~6層の堆積はレンズ状であり、開口部が現状の径に近い状態で埋没であったとも考え得る。**付属施設** 底面中央部に円形の掘り込み(p1)が確認される。遺構底面の径は0.835m前後、p1底面の径は約0.7m、遺構底面からの深さ約0.12mである。覆土はロームブロックを含む7層で、最下層の8層を掘り込むように堆積する。7・8層上面は水平であり、ロームブロックを含む8層で底面を埋め戻しp1を掘り込んだ可能性も考えられる。その際、5・6層が埋め戻しに関わる覆土であるかどうかは判然としない。8層上面の硬化等は観察されない。4・8層上面からp1底面までの深さは0.25m前後である。4・8層上面は遺構底面より0.12m前後上位の150.18m前後にある。p1底面は約149.93mである。p1中位の150.0m付近以下は小礫層である。

遺物出土状況 覆土中から175点を確認した。SK-103に帰属する遺物を本遺構と誤認したと判断される遺物を含む。1・2・4・10・12~15・19・23・24は重複するSD-64底面直下から出土する。4層中位に相当する。**出土遺物** 1は中空の突起を有する深鉢形土器である。外側の貫通孔は上部一面・正面二面、内側は正面二面・下部に一面が施される。外側は貫通孔の周囲に沈線を配する。内側の二孔のうち左側には両端部が渦巻き状となる沈線が配される。内側の貫通孔は顔の表現か。口縁部文様帯は隆帯と沈線で緩やかなクランク状の文様を配する。クランクの始点と口縁部が接する部分には渦巻き状の隆帯を配し、2条一組の隆沈線が垂下、及び、クランクの終点となる区画隆帯付近に渦巻きを配する。体部は間隔施文が施される。大木8b式に平行する時期か。2は二単位の中空の把手が付されるか。貫通孔上部一面・正面二面である。口縁部には鶏冠状の突起とすでに欠落した中空の把手を付したか。残存する中空の把手の中央に渦巻き状の沈線に沿う橋状の把手を付す。この橋状の把手と中空の把手の間に、上2ヶ・下1ヶの押捺を施した突起を配する。顔の表現か。口縁部文様帯は隆沈線と渦巻き状や半円状などのモチーフを描く。体部は地縄文(LR)に三本単位の懸垂文が垂下する。懸垂文間には渦巻きを始点とする沈線が垂下する。3は隆帯と沈線で渦巻き状の文様とこれに続く文様を作出する口縁部文様帯か。4・5は口縁部文様帯か。隆帯と沈線で区画する。5・16は同一個体か。3~5は加曾利EⅡ~Ⅲ式か。6~9はSK-103に帰属か。6は無文の口縁部を隆帯で区画する。隆帯以下は縦位の地縄文を施す。7は横方向の帯状区画下に沈線で獸手状のモチーフを描く。外面はオコゲの付着が著しい。称名寺式か。8は無文の浅鉢形土器の口縁部か。内面は口端部に3本、その

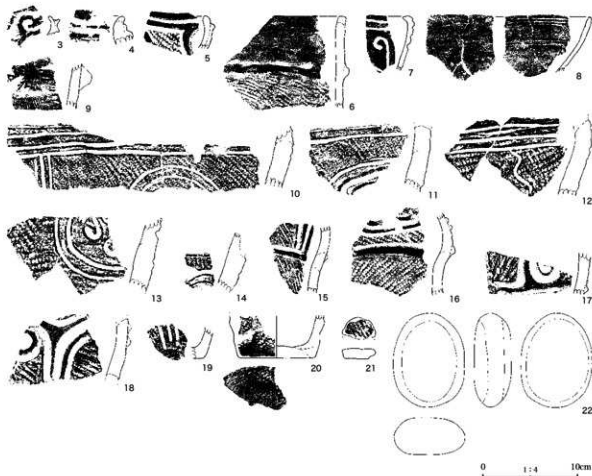


第74图 第106号土坑出土遗物实测图(1)

下部に2本の沈線で内面文様を描く。堀之内2式か。9は一次区画線に付された舌状突起か。体部は7本単位の櫛歯状工具で地文或いはモチーフを描く。中期末葉～後期前葉か。10～14は同一個体か。大木8b式か。10～12は口縁部文様帯下部、13・14は体部か。並行する沈線で曲線的なモチーフや懸垂文を施す。モチーフ間に波状沈線が垂下する。15は隆帯と沈線で区画する口縁部文様帯である。加曾利E式前半か。16は15と同一個体か。17は隆帯と沈線で渦巻き状の文様と区画文を作出する口縁部文様帯である。加曾利E式前半か。18は隆帯と沈線で曲線的な文様を描く体部破片である。大木8b式に並行する時期か。19は底周部の小片である。沈線で懸垂文を描くが、沈線間は磨消が施されるか。加曾利EⅡ式か。20は底部破片である。体部は地縄文を施す。底部は編組品圧痕が残る。磨消のため不詳であるが、ござ目編みの類(1-2-1)か。加曾利E式前半か。21は土製円盤である。タテ2.2cm・ヨコ3.5cm・厚1.3cm・重8.79g。深鉢形土器の体部を利用か。地縄文が施される。半部を失うが、周縁部は研磨される。

この他、図示し得なかった土器片は以下のとおりである。

無文の口縁部小片1片。頸部の屈曲する小片1片。浅鉢か。口縁部文様帯下とみられる小片6片。1片は単位文から続く隆帯小片。3片は体部があり地縄文。磨消を伴う懸垂文小片10片。加曾利EⅡ～Ⅲ式。地縄文に沈線で曲線を描く小片3片、大木8b式か。地縄文に渦巻き状の低平な隆帯が付す小片1片、大木系か。無文に数条の沈線が横巡する小片、2片。地縄文小片59片、うち1片は間隔施文。地燃り糸文小片1片。無文の小片28片。底部小片1片。器壁薄く、底径が小さい。磨滅片・微細片1124g。



第75図 第106号土坑出土遺物実測図(2)

石器・礫は表 44 に記載する。その他、微細な小礫・小塊が 14 個出土する。

本遺構の時期は加曽利 E 式前半と判断される。

第 108 号土坑 (SK-108) (第 76・77 図 表 45)

位置 B 区 C・4 グリッドに位置する。**重複関係** SK-292・SZ-41 (北) と重複する。何れよりも本遺構が古い。**形状・規模・主軸** SZ-41 (北) との重複により遺構北半、SK-292 との重複により遺構南西部の遺構確認面付近を失う。平面形は円形状とみられる。下ばのラインは現状の上ばのラインとほぼ一致する。断面形は東壁に袋状の括れ部が残る。径は、遺構確認面の東西約 1.2 m・底面の東西約 0.93 m である。括れ部の最大径部は底面から約 0.1 m 上位の 150.65 m 付近にある。最大径は、西壁が崩落した現状で約 0.8 m である。遺構確認面からの深さ約 0.4 ~ 0.45 m である。底面のレベルは 150.36 ~ 150.4 m である。壁・底面はローム層を掘り込む。**覆土** 9 層を確認した。7・9 層はロームブロックを多量に含む。

遺物出土状況 覆土中から 19 点を確認した。

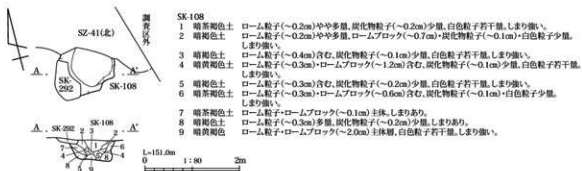
出土遺物 1 は口縁端部に巡る沈線から被頂部に渦巻状の突起を配する。3 は口縁端部から地縄文を施す。口縁部付近の円孔は補修孔か。小片であり判然としなが、開口部の形は小さいと判断される。堀之内式の粗製土器か。2 は口縁部に沿って紐線と沈線が横位に巡る。堀之内 2 式か。4 は口縁部端部を欠失する。渦巻状の突起から隆帯と沈線が連繫する。破砕断面の下端部は滑らかであり、研磨された可能性が窺われる。5 は地条線を施す体部小片である。

この他、図示し得なかった土器片は以下のとおりである。

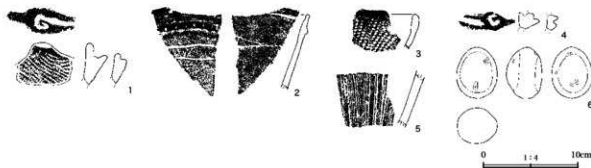
無文の口縁部下に微隆起線が横巡る小片 1 片、中期末葉～後期初頭。隆帯とこれに沿う沈線で曲線を描く小片 1 片。櫛歯状工具で条線を施す小片 1 片。地縄文小片 3 片。無文の小片 4 片。

石器・礫は表 45 に記載する。この他、小礫塊 2 片が出土する。

本遺構の時期は後期前葉か。



第 76 図 第 108 号土坑実測図



第 77 図 第 108 号土坑出土遺物実測図

第121号土坑 (SK-121) (第78・79図 表46 図版七)

位置 A区B-1グリッドに位置する。調査区東・北端部にあり、調査区外に延びる。**重複関係** 重複する遺構はない。**形状・規模・主軸** 調査区外に延びるため、平面形は不詳である。西辺に袋状の断面が確認される。最大径は底面にある。底面は周縁部が高い皿状である。遺構確認面から現状での最深部までの深さ約0.38m、レベル約151.3mである。括れ部の最小径部は、底面の最深部から約0.3m上位の151.6m付近にある。**覆土** 5層を確認した。

遺物出土状況 覆土中から31点を確認した。

出土遺物 1は口縁部下に沈線が横巡する。体部は単沈線で縦位のモチーフを描く。堀之内1式か。2は沈線で区画した縄文部と無文部でモチーフを描く。中期末葉～後期初頭か。3は単沈線でモチーフを描く。沈線間は磨り消されるか。堀之内1式か。4は盲孔を付した隆帯が垂下する。堀之内式と判断したが、曾利式の可能性も残る。

この他、図示し得なかった土器片は以下のとおりである。

無文に沈線を施す小片3片。地縄文に沈線の一部のみ見える小片1片。地縄文小片11片。無文の小片6片。磨減片・微細片39.0g。

石器・礫は表46に記載する。この他、微細な小片2片が出土する。

本遺構の時期は堀之内1式明か。



第78図 第121号土坑実測図



第79図 第121号土坑出土遺物実測図

第123号土坑 (SK-123) (第80・81図 表47 図版二四・二八)

位置 C区D-10グリッドに位置する。調査区西端部にあり、調査区外に延びる。**重複関係** SZ-30埋葬施設S-21と重複するが攪乱により新旧関係は判然としなない。しかし、形状や出土遺物から本遺構が古い可能性が考えられる。**形状・規模・主軸** 攪乱により中央部を著しく失っている。平面形は円形、断面形は袋状と判断される。底面は北から南に傾斜がみられる。EP-Bからは現状の上ばと括れ部の最大径部はほぼ同レベルとみられる。残存する南北の径は約1.9m、底径は約1.45mである。深さは約0.25mである。括れ部の最大径部は、底面から0.1～0.2m上位の150.4m前後にある。底面レベルは150.24m前後、砂質の強いローム層である。**覆土** 3層を確認した。2層に含まれるロームのみ砂質を帯びる。

遺物出土状況 覆土中から8点を確認した。

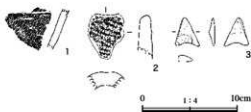
出土遺物 1の横位の沈線は一次区画線か。以下細かい条線で施す。2は腕輪か。端部を除き縄文を施す。内径約4.8cm、内周長約151mmと推定される。

この他、図示し得なかった土器片は以下のとおりである。

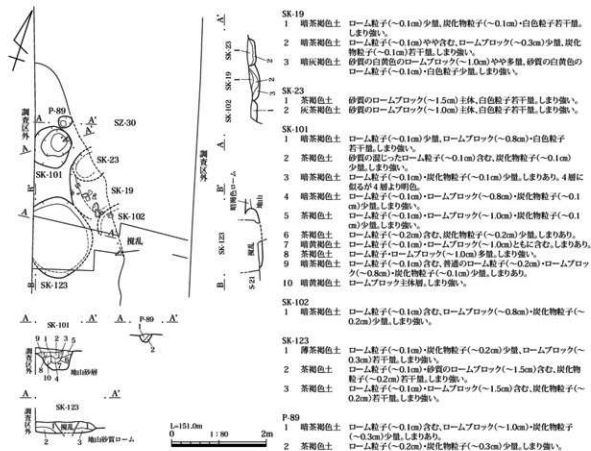
沈線で縄文部と無文部を区画する小片、加曾利E式後半か。地縄文小片2片。無文の小片2片、器面は堅緻であり後期か。

石器・礫は表47に記載する。

本遺構の時期は、出土遺物が少なく判然としないが、後期か。



第80図 第123号土坑出土遺物実測図



第81図 第123・19・23・101・102号土坑・第89号ピット実測図

第124号土坑 (SK-124) (第82・83図 表48)

位置 C区E-12グリッドに位置する。**重複関係** 後出するSZ-26(北)との重複により北半部を失う。南東部でP-145と重複するが新旧関係は不明である。**形状・規模・主軸** 平面形は円形状か。断面は袋状である。底径は東西約2.15m、遺構確認面からの深さは約0.4mである。最大の括れ部は、底面から0.15mほど上位の150.3m付近にある。底面のレベルは150.18m前後である。底面・壁面はローム層である。

覆土 15層を確認した。全体的に炭化物の堆積が目立つ。括れ部の覆土はロームを多量に含む。

遺物出土状況 104点が出土する。9は床面付近から出土する。

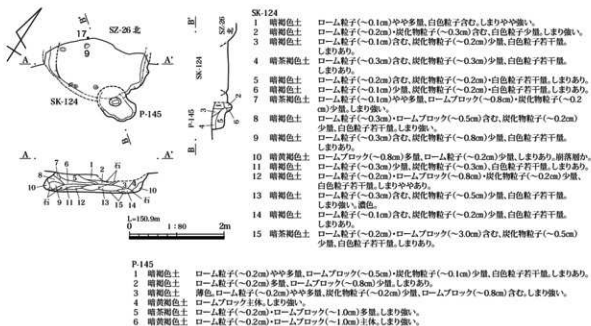
出土遺物 1は4単位の突起を施すと判断される。残存するのは3単位である。口縁部端部から粗雑な地条線を施す。内外面ともオコゲが付着するが、体中位以下に顕著に確認される。2は隆帯で口縁部文様帯を作出する。円形の単位文内は無文である。3は低平な隆帯と凹縁で口縁部文様帯を作出する。単位文は円形か。体部は頸部の区画なく懸垂文が垂下する。2・3は加曾利EⅢ式か。4は懸垂文あるいは磨消縄文手法か。加曾利E式か。6・9は押捺を施す隆帯が施される。6・8・9は曾利式系と判断されるが別個体とみられる。5は帯状区画あるいは単沈線か。後期初頭あるいは前葉か。7は沈線で文様を描出する。器面は堅緻である。後期前葉か。10は半截竹管状工具で波状の沈線を施す。器色は白みが強い。11は内外面に赤彩を施す口縁部。外面は僅かに確認される程度であるが内面は良好に残る。図示し得なかったが17は斜位の地縄文を施す体部片である。SZ-26周溝内から出土するが、本遺構に帰属するか。

この他、図示し得なかった出土遺物は以下のとおりである。

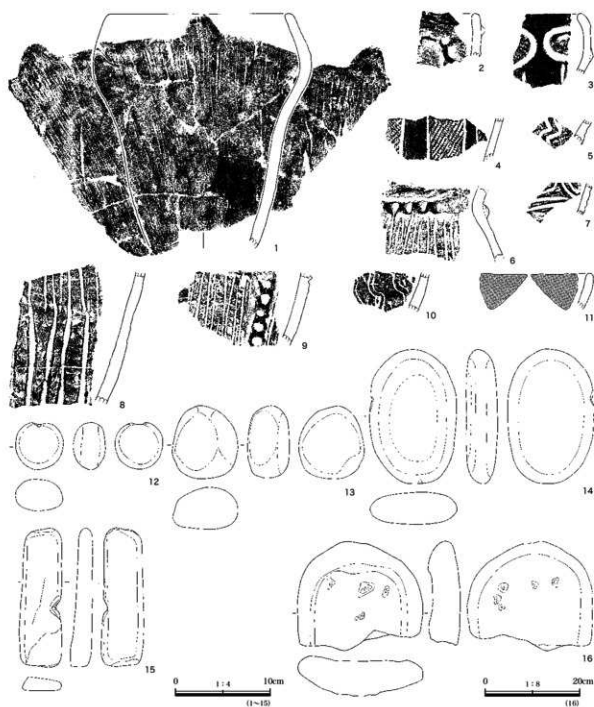
沈線で作出する口縁部文様帯とみられる小片3片、加曾利EⅢ式か。口縁部端部から斜位の地縄文を施す口縁部小片2片。うち1片は内湾し、内面にオコゲの付着が著しい。幅狭の無文帯が垂下する小片5片、沈線で区画された幅広の無文帯が垂下する小片7片。懸垂文あるいは磨消縄文手法か。加曾利E式後半か。地縄文に沈線間を磨り消すと判断される小片4片。帯状区画とみられる小片2片。地縄文に沈線の一部分のみ見える小片3片。無文に沈線のみ見える小片1片。無文に複数の沈線のみ見える小片8片、後期初頭か。半截竹管状工具で波状の沈線を施す小片2片。地条線小片5片。地縄文小片15片。無文の小片21片。底部片3片。磨滅片・微細片13.5g。

石器・礫は表48に記載する。この他、剥片とみられる小片1片。頁岩か。

本遺構の時期は後期初頭あるいは前葉か。



第82図 第124号土坑・第145号ピット実測図



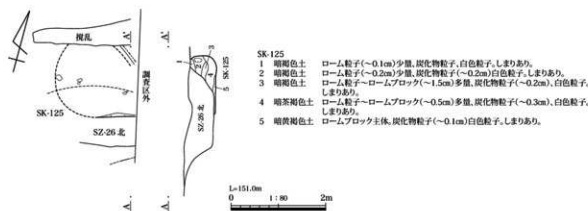
第83図 第124号土坑出土遺物実測図

第125号土坑 (SK-125) (第84図)

位置 C区E-12グリッドに位置する。**重複関係** 後出するSZ-26(北)底面下に確認した。**形状・規模・主軸** 確認し得たのは底面付近のみであり不詳な点が多い。平面形は不明である。底形はSZ-26(北)底面の観察からは第84図に示したような円形形状か。断面形は袋状である。底面より約0.2m上の150.2m付近が最も括れ、内傾するもほぼ平坦に0.2m程立ち上がる。底面はローム層で、レベルは150.0m前後である。

覆土 5層を確認した。下層の4・5層はロームを主体とする。

遺物出土状況 遺物の出土は確認されなかった。



第84図 第125号土坑実測図

第148号土坑 (SK-148) (第85・86図 表49)

位置 B区D-9グリッドに位置する。**重複関係** SK-149と重複する。本遺構が新しい。**形状・規模・主軸** 南北に長い楕円形状である。遺構確認面の径は南北約1.2m、底面の径は南北約0.95m、遺構確認面からの深さ約0.4m、主軸N-10°Wである。断面形は袋状で、皿状の底面から丸みを持って立ち上がる。最大径は底面より約0.2m上位の150.3m付近にある。底面のレベルは150.0m前後である。最大径部付近の150.3mを境に下位は砂質の強いローム層、上位はその漸移層とみられる砂質ロームブロックを含むローム層である。**覆土** 5層を確認した。4・5層は崩落土か。

遺物出土状況 覆土中から18点が出土する。何れも小片である。

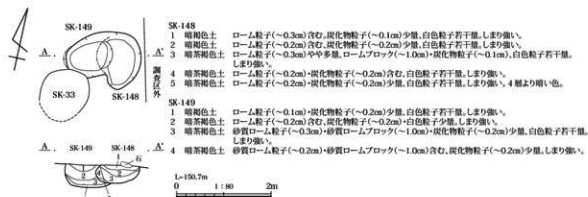
出土遺物 1は無文の口縁端部に沈線が横巡る。破片端部は盲孔か。後期初頭の所産か。2は地縄文に集合沈線でモチーフを描く。堀之内1式か。3は斜方向の地縄文に半載竹管状工具で沈線を施す。文様意匠には乏しいか。

この他、図示し得なかった出土遺物は以下のとおりである。

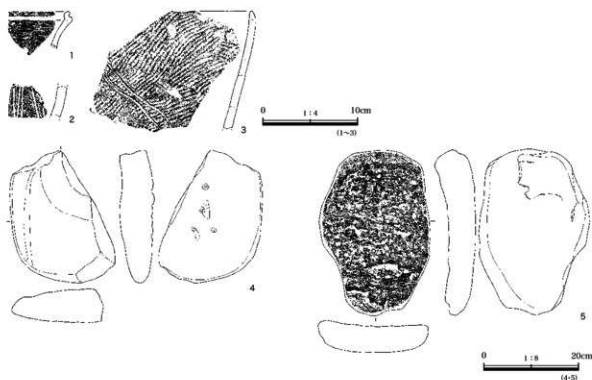
無文に半載竹管状工具による沈線を施す小片1片、後期前葉か。地条線を施す小片1片。無文に沈線を施す小片2片。無文の小片2片。微細片1.6g。

石器・礫は表49に記載する。

本遺構は堀之内1式に相当する時期か。



第85図 第148・149号土坑実測図



第86図 第148号土坑出土遺物実測図

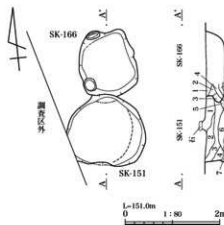
第151号土坑 (SK-151) (第87・88図 表50 図版七・八・二三)

位置 B区C・6グリッドに位置する。調査区西端部に位置し、調査区外に延びる。**重複関係** SK-166と重複する。本遺構が古い。**形状・規模・主軸** 東西に長い楕円形状である。断面は袋状である。遺構下半に括れ部が残るが、遺構上半は壁面の崩落した状況と判断される。遺構確認面の径は、東西約1.65m(推定)・南北約1.45m、遺構確認面からの深さ約0.7m、主軸W・6°Sである。現状の括れ部最大径は、皿状の底面の周縁にある。底面中央部の遺構最深部から0.2mほど上位の150.0m前後付近にあたる。径は東西約1.55m・南北約1.45mである。遺構の最深部のレベルは約150.81mである。現状で確認できる括れ部の上端部は150.2m付近にあり、これより上位はローム層、下位は小礫層となる。ただし、図中に破線で示した遺構東南隅部は小礫層ではなく、砂質を帯びるロームが混じるローム層である。**覆土** 13層を確認した。2層以下はローム粒子・ロームブロックの多い暗茶褐色土が堆積する。中央部に堆積する2・3・6・7・9・12層には小礫が混入する。11層は焼土主体層、3層は炭化物の堆積が多い。4・11・12層に堆積するロームは砂質を帯びるものが混じる。底面と12・13層を挟んで堆積する8・9層に形状の大きなロームブロックが堆積する。明確に壁面の崩落と捉えられる層がないことから、遺構上半部は早い段階で取り払われた可能性が考えられるか。

遺物出土状況 覆土中から91点が出土する。SP-Aに図示した礫は遺構中央部から出土する。

出土遺物 1は無文の口縁部下に微隆起線が横巡る。加曾利EⅣ式か。2は口縁部の波頂部下に橋状の把手を施す。地文には僅かに縄文がみえるが、把手作出の際に磨滅か。波状の口縁部下には断面が三角形に近い微隆起線状の高まりが巡る。3は短沈線状のキザミを伴う隆帯を一次区画帯とする。波状口縁部か。2・3は後期初頭～後期前葉か。4は「く」字状の口縁部下に細い隆帯が巡る。体部は地縄文に集合沈線帯縦位のモチーフを描くか。外面口縁部、内面にオコゲ状付着物が確認される。堀之内1式か。5の口縁部は波状とみられる。

無文の口縁部下に横巡する沈線から帯状区画で渦巻き状のモチーフを描くか。堀之内1式か。6は波頂部の貫通孔を起点にキザミを施す隆帯がみえる。7は無文の口縁部にオコゲ状の付着物が確認される。8は堀之内2式の鉢形か。9は体部に沈線の沿う隆帯を貼付する。隆帯端部の刺突から沈線で文様を描くが意匠には乏しいか。10は体部に節歯状工具でモチーフを描出か。11は無文の硬質な小片で、内外面に赤彩が残る。12は土製円盤の破片。地縄文が残るが磨滅のため詳細は不明である。タテ3.3cm・ヨコ2.1cm・厚1.0cm・重8.79g。

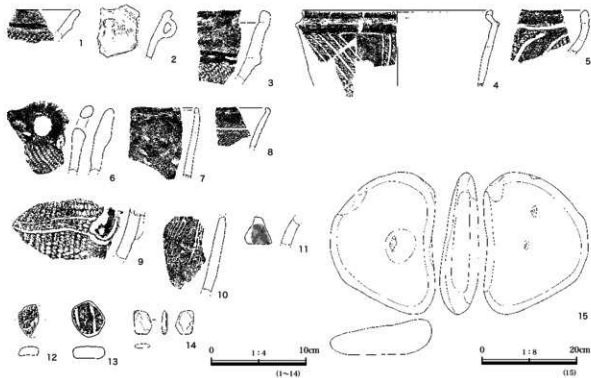


- | SK-151 | |
|--------|--|
| 1 | 暗茶褐色土 ローム粒子(~0.2cm)・炭化物粒子(~0.1cm)・白色粒子含む。しまり強い。 |
| 2 | 暗茶褐色土 ローム粒子(~0.2cm)やや多量。炭化物粒子(~0.3cm)・小礫(0.5cm大)含む。ロームブロック(~0.5cm)少量。白色粒子若干量。しまり強い。 |
| 3 | 暗茶褐色土 ローム粒子(~0.2cm)・炭化物粒子(~0.2cm)やや多量。ロームブロック(~1.0cm)含む。小礫(1.0cm大)少量。白色粒子若干量。しまり強い。 |
| 4 | 暗茶褐色土 ローム粒子・砂質のローム粒子(~0.5cm)含む。炭化物粒子(~0.2cm)少量。白色粒子若干量。しまり強い。 |
| 5 | 暗黄褐色土 ローム粒子(~0.2cm)多量。ロームブロック(~1.5cm)・炭化物粒子(~0.1cm)少量。白色粒子若干量。しまり強い。 |
| 6 | 暗茶褐色土 ローム粒子(~0.2cm)多量。ロームブロック(~1.0cm)・炭化物粒子(~0.1cm)・小礫(~1.0cm大)含む。白色粒子若干量。しまり強い。 |
| 7 | 暗茶褐色土 ローム粒子(~0.2cm)・ロームブロック(~1.0cm)・炭化物粒子(0.2cm)・小礫(1.0cm大)含む。白色粒子若干量。しまり強い。 |
| 8 | 暗茶褐色土 ローム粒子(~0.2cm)・ロームブロック(~4.0cm)含む。炭化物粒子(~0.1cm)若干量。しまり強い。 |
| 9 | 暗茶褐色土 ローム粒子(~0.2cm)多量。小礫(1.0cm大)やや多量。ロームブロック(~5.0cm)含む。炭化物粒子(~0.1cm)少量。白色粒子若干量。しまり強い。 |
| 10 | 暗黄褐色土 ロームブロック(~5.0cm)主体。 |
| 11 | 暗赤褐色土 焼土粒子?主体。ロームブロック・砂質のロームブロック(~0.3cm)含む。しまりあり。 |
| 12 | 暗茶褐色土 ローム粒子(~0.2cm)含む。小礫(1.0cm大)少量。ロームブロック・砂質のロームブロック(~1.0cm)・炭化物粒子(~0.2cm)・白色粒子若干量。しまり強い。 |
| 13 | 暗茶褐色土 ローム粒子(~0.1cm)多量。炭化物粒子・白色粒子若干量。しまり強い。 |

SK-166

- | | | |
|---|-------|--|
| 1 | 暗褐色土 | ローム粒子(~0.2cm)含む。炭化物粒子(~0.1cm)少量。白色粒子若干量。しまり強い。 |
| 2 | 暗茶褐色土 | ローム粒子(~0.2cm)やや多量。炭化物粒子(~0.1cm)少量。白色粒子若干量。しまり強い。 |
| 3 | 暗黄褐色土 | ローム粒子(~0.2cm)主体。炭化物粒子(~0.1cm)少量。ロームブロック(~1.5cm)・白色粒子若干量。しまり強い。 |
| 4 | 暗褐色土 | ローム粒子(~0.2cm)含む。ロームブロック(~0.8cm)・炭化物粒子(~0.2cm)少量。白色粒子若干量。しまり強い。 |
| 5 | 暗褐色土 | ローム粒子(~0.3cm)含む。ロームブロック(~0.8cm)・炭化物粒子(~0.2cm)少量。白色粒子若干量。しまり強い。 |
| 6 | 暗茶褐色土 | ローム粒子(~0.1cm)含む。炭化物粒子(~0.1cm)少量。しまり強い。 |

第87図 第151・166号土坑実測図



第88図 第151号土坑出土遺物実測図

13は土製円盤。磨滅するが周縁は全周研磨される。タテ3.7cm・ヨコ3.2cm・厚1.3cm・重16.38g。

この他、図示し得なかった出土遺物は以下のとおりである。無文の口縁部小片2片。幅狭の磨消縄文でモチーフが垂下する小片5片、加曽利E式後半～後期初頭。2本一組の微隆起線でモチーフを描く小片1片、1条の微隆起線がみえる小片1片、無文に1条の微隆起線がみえる小片2片、中期末葉～後期初頭か。地縄文に2本の単沈線か、1片。無文に沈線のみ見える小片2片。地縄文小片22片。無文の小片16片。底部小片1片。磨滅片・微細片17.3g

石器・礫は表50に記載する。この他、小礫・小礫塊が11個出土する。

本遺構は堀之内1～2式期か。

第153号土坑 (SK-153) (第89・90図 表51 図版八)

位置 B区B-4グリッドに位置する。**重複関係** SK-152、P-254と重複する。新旧関係は不明である。また、南西側の攪乱により遺構の一部、上面の攪乱により北半部の遺構上面を失っている。**形状・規模・主軸** 平面は円形状である。断面形は、SP-A'付近のみ括れが観察される。径は、括れ部約1.3m、底面1.1～1.2m、遺構確認面からの深さ0.6～0.7mである。括れ部の最大径は、底面から0.2m程上位の150.6m付近にある。底面は凹凸がみられ底面レベル150.3～150.4mである。壁・底面はローム層を掘り込む。

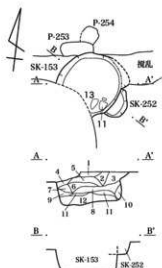
覆土 12層を確認した。最下層の12層は地山と見紛うロームブロック主体層である。

遺物出土状況 覆土中から63点が出土する。1・2は遺構中位、覆土5層相当付近から出土する。3は床面付近から出土する。

出土遺物 2は波状の口縁部小片である。沈線で文様を描くか。後期初頭か。1は口縁端部から地条線を描く。堀之内式か。3は口縁部付近の小片か。2条の沈線間に刺突列を配する。後期初頭か。7は地縄文に沈線で箆手状のモチーフを描くか。後期初頭～後期前葉か。4は一次区画線下に単沈線で紡錘状のモチーフを描くか。堀之内1式か。5は一次区画線下に器面を埋めるように集合沈線でモチーフを描く。堀之内1式か。6は磨消を伴う沈線でモチーフを描く。波状の単沈線との接点には中央に刺突を施す円形の貼付文が付けられるか。上部の沈線は区画線か。8は口縁部小片である。体部は無文、底部に圧痕はみられない。

この他、図示し得なかった出土遺物は以下のとおりである。

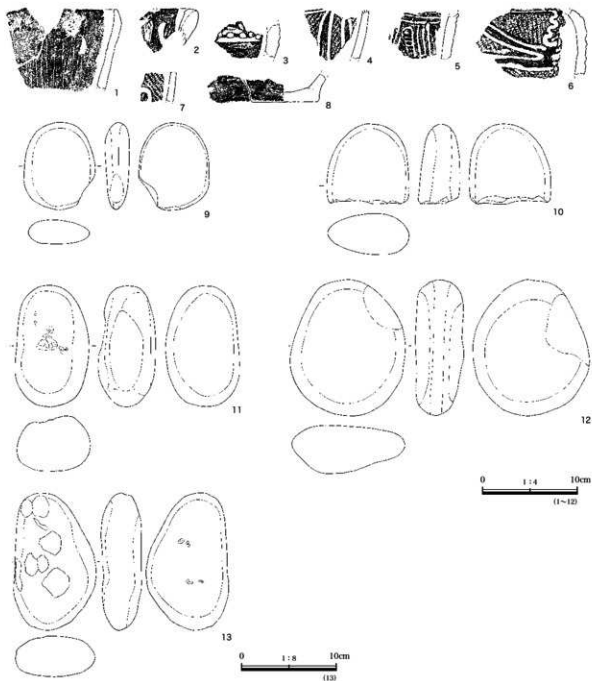
無文の口縁部小片1片。無文に沈線のみ見える小片4片。沈線で縄文部と無文部を区画する小片1片。地縄



SK-153	
1 暗褐色土	ローム粒子(～0.1m)やや多量、炭化物粒子(～0.1m)・白色粒子少量、しまり強い、
2 暗褐色土	ローム粒子(～0.3m)やや多量、ロームブロック(～1.0m)含む、炭化物粒子(～0.1m)・白色粒子少量、しまり強い、
3 暗褐色土	ローム粒子(～0.3m)多量、ロームブロック(～3.0m)含む、炭化物粒子(～0.1m)少量、白色粒子若干量、しまり強い、
4 暗茶褐色土	ローム粒子(～0.2m)多量、ロームブロック(～0.3m)・炭化物粒子(～0.2m)少量、白色粒子若干量、しまり強い、
5 暗褐色土	ローム粒子(～0.2m)やや多量、ロームブロック(～1.0m)・炭化物粒子(～0.1m)・白色粒子少量、しまり強い、
6 暗褐色土	ローム粒子(～0.2m)含む、炭化物粒子(～0.3m)少量、白色粒子若干量、しまり強い、
7 暗茶褐色土	ローム粒子(～0.2m)多量、炭化物粒子(～0.1m)・白色粒子少量、しまり強い、
8 暗褐色土	ローム粒子(～0.2m)多量、ロームブロック(～1.5m)・炭化物粒子(～0.2m)・白色粒子少量、しまり強い、
9 暗褐色土	ローム粒子(～0.2m)やや多量、炭化物粒子(～0.3m)少量、しまり強い、
10 暗茶褐色土	ローム粒子(～0.2m)多量、ロームブロック(～0.8m)含む、炭化物粒子(～0.1m)少量、白色粒子若干量、しまり強い、
11 暗黄褐色土	ローム粒子(～0.2m)多量、ロームブロック(～1.0m)含む、炭化物粒子若干量、しまり強い、
12 黄褐色土	地山と見紛うロームブロック層、しまり強い、

L=151.3m
0 1:80 2m

第89図 第153・252号土坑実測図



第90図 第153号土坑出土遺物実測図

文に単比線のみ見える小片2片。条線を施す小片1片。地縄文小片13片。無文の小片17片。底部小片1片。磨滅片・微細片55.1g。

石器・礫は表51に記載する。

本遺構の時期は堀之内1式期か。

第156号土坑 (SK-156) (第70・91図 図版七)

位置 B区C-6グリッドに位置する。重複関係 後出するSK-287・SD-37により北半部を失う。南側にSK-286が重複するが新旧関係は不明である。形状・規模・主軸 平面は円形状、径約1.6mと推定される。

位置・規模等からSK-151同様の袋状土坑の可能性が残る。遺構確認面からの深さ約0.2m、底面レベル約150.1mである。壁・底面は砂質を帯びるローム層を掘り込む。覆土2層を確認した。

遺物出土状況 1点を確認した。

出土遺物 1は隆帯と凹線で作出された口縁部文様帯か。

区画文内に円形の刺突を施す。加曾利EⅢ式。

本遺構の時期は判然としない。



第91図 第156号土坑出土遺物実測図

第166号土坑 (SK-166) (第87・92図)

位置 B区C・6グリッドに位置する。**重複関係** SK-151と重複する。本遺構が新しい。**形状・規模・主軸** 平面形はやや南北に長い楕円形状か。断面形はSP-Aから袋状と判断される。遺構確認面の径は東西約1.2m・南北約1.6m、底面の径は東西約1.0m・南北約1.1m、遺構確認面からの深さ約0.4m、主軸N-12°-Wである。括れ部の最大径は、底面から約0.25m上位の150.25m付近にある。底面は概ね平坦であるが、周縁は皿状に立ち上がる。底面のレベルは150.1m前後である。p1は深さ約0.1mの円形の掘り込みである。掘り込まれた時期は確認しなかった。壁～底面はローム層を掘り込む。覆土SK-151との重複部の6層を確認した。壁面に近い2・3層はロームの堆積が多い。レンズ状の堆積と推定できる。明確な壁面の崩落層は観察されず、埋没の早い段階で遺構上半が取り払われた可能性を指摘できる。

遺物出土状況 掘土中から17点が出土する。1は括れ部の壁面の接して出土する。

出土遺物 1は口縁端部に沈線が巡る。集合沈線でモチーフか。堀之内1式～2式か。2は口縁端部の刺突列から縄文を施す。3は菱形のモチーフを横位に配するか。堀之内2式か。4は括弧状の区切りを配する。加曾利B2式のモチーフと判断されるが、器面の状況等から古手の可能性が残る。

この他、図示しなかった出土遺物は以下のおりである。

条線を施す小片1片。地縄文に沈線の一部がみえる

小片1片。無文の小片11片。

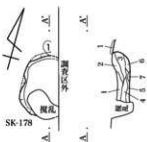
本遺構の時期は堀之内2式期か。



第92図 第166号土坑出土遺物実測図

第178号土坑 (SK-178) (第93・94図 表52)

位置 B区C・6グリッドに位置する。調査区東端部に位置し、調査区外に延びる。**重複関係** 上面削平のため判然としないが、SK-105と重複する可能性がある。**形状・規模・主軸** 西半部のみ確認した。南側の一部を掘乱しのため失っている。平面は円形状、断面は曖昧ではあるが、壁面が丸みを持って立ち上がる。位置・規模等からSK-151同様の袋状土坑と判断される。遺構確認面の径約1.4m、底面の径約1.2mと推定される。遺構確認面からの深さ約0.4mである。括れ部の最大径は、底面より0.25m程上位の150.35m



SK-178	
1 暗褐色土	ローム粒子(～0.3m)含む、ロームブロック(～1.0m)・炭化物粒子(～0.2m)少量、白色粒子若干量。
2 暗褐色土	ローム粒子(～0.3m)やや多量、砂質のロームブロック(～1.0m)・炭化物粒子(～0.3m)・白色粒子少量。
3 暗褐色土	ローム粒子(～0.3m)含む、炭化物粒子(～0.2m)少量、白色粒子若干量。
4 暗褐色土	ローム粒子(～0.2m)多量、ロームブロック(～1.0m)・炭化物粒子(～0.2m)・白色粒子少量。
5 暗褐色土	ローム粒子(～0.2m)・ロームブロック(～2.0m)多量、炭化物粒子(～0.2m)・白色粒子少量。
6 暗褐色土	ローム粒子(～0.2m)・ロームブロック(～1.0m)多量、炭化物粒子(～0.1m)少量、白色粒子若干量。
7 暗褐色土	ロームブロック(～3.0m)主体層。

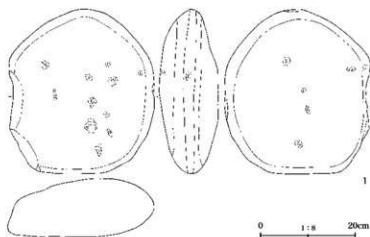
第93図 第178号土坑実測図

付近にある。底面レベル約 150.1 m 前後である。壁・底面はローム層を掘り込む。覆土 7 層を確認した。総じて茶褐色土が堆積する。

遺物出土状況 1 は遺構北側から出土する礫である。本遺構に関わるものか判じ得なかった。

出土遺物 1 は石皿である。表 52 に記載する。

本遺構の時期は不詳である。



第 94 図 第 178 号土坑出土遺物実測図

第 181 号土坑 (SK-181)

(第 95・96 図 表 53 図版八・二二)

位置 C 区 E-13 グリッドに位置する。調査区南東端部に位置し、遺構の大部分は調査区外にある。**重複関係** 遺構上面に SD-01、遺構西側に SZ-03 が重複する。本遺構が古い。**形状・規模・主軸** 確認し得たのは遺構の一部であり、平面形は不明である。図上に示した一点破線は SZ-03 上ばである。これに続く実線は本遺構の上ばと判断されるが、原況を示すものとは判断できない。断面形は袋状である。現状では底面より約 10cm 上位の 150.3m 付近が最も括れるが不詳な点が多い。底面のレベル 150.3m 前後である。壁面・底面はローム層である。**覆土** 2 層を確認した。ほぼ水平に堆積し、特出した混入物や混入量は認められない。

遺物出土状況 20 点が出土する。多くは、床面から 0.2 ~ 0.3m 上位で纏まった状態で出土する出土レベルは、4 ~ 6・10 は 150.3m 付近、3・7・8 は 150.4m 付近である。1・16 は床面付近から出土する。16 は床面付近の遺物が SZ-03 に落ち込んだ状態か。SZ-03 出土遺物と混在する可能性が高い。

出土遺物 1・2・4 ~ 8 は同一個体か。5・6・8 は重複する SZ-03 出土遺物であるが、同一個体の可能性が極めて高いと判断し本遺構に記載する。波頂部の満きから口縁部上端を割る沈線が連続する。波頂下には貫通孔を配する。体部は地縄文 (LR) を施し、磨消を伴わない懸垂文が垂下、また、沈線で幾何学的な文様を施す。大木 8 b 式か。3 は 1・2 はと同様の文様を施す。

この他、図示し得なかった出土遺物は以下のとおりである。

無文の口縁部小片 2 片。地縄文小片 3 片、うち 1 片は 1 などと同一個体か。無文の底周部小片 1 片、加曽利 E 式後半以降か。

石器・礫は表 53 に記載する。

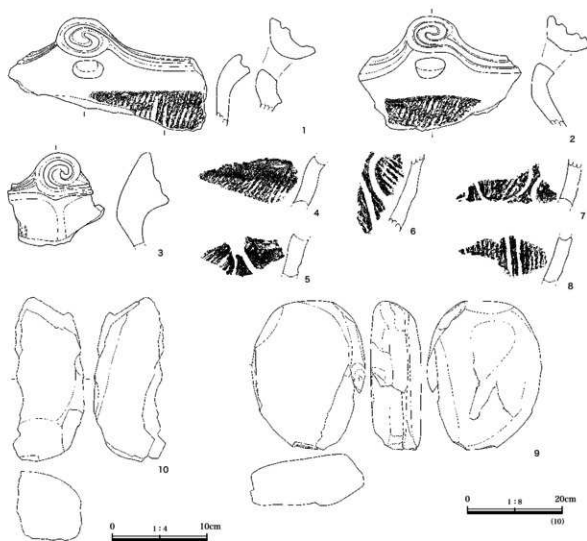
本遺構の時期は中期後葉か。



SK-181

- 1 暗褐色土 ローム粒子やや多量、ロームブロック(～0.5m)含む、白色粒子少量、しまりあり。
- 2 暗褐色土 ローム粒子やや多量、ロームブロック(～0.5m)、白色粒少量、しまりあり。

第 95 図 第 181 号土坑実測図



第96図 第181号土坑出土遺物実測図

第227号土坑 (SK-227) (第70図 図版七)

位置 B区C-6グリッドに位置する。調査区西端部に位置し、調査区外に延びる。**重複関係** SK-106と重複する。遺構確認時の観察では本遺構が新しい。**形状・規模・主軸** 上面を攪乱により失っており、底面付近のみ残存する。平面は円形状とみられる。断面は判然としないが、位置・規模等からSK-151同様の袋状土坑の可能性が残る。径は、遺構確認面の南北約1.6m、底面の南北約1.35mである。遺構確認面からの深さ約0.1m、底面レベル約150.33mである。壁・底面はローム層を掘り込む。**覆土** 1層を確認した。地山であるローム面に同色のシミ状に平面プランが確認できる覆土である。

遺物出土状況 遺物の出土は確認されなかった。

本遺構の時期は、ローム面にシミ状の平面プランが確認されることから、後期の範疇か。

第286号土坑 (SK-286) (第70図 表54 図版七)

位置 B区C-6グリッドに位置する。**重複関係** 上面にSK-36、北側にSD-37が後出する。南側に重複するSK-106とは本遺構が古い。北西に重複するSK-156との新旧関係は不明であるが、平面プラン確認時の状況からは本遺構が古い。**形状・規模・主軸** 上面を攪乱や重複により失っており、底面付近のみ残存する。平面形はやや南北に長い楕円形状か。断面は判然としないが、壁面が丸味をもって立ち上がること、

位置・規模等からSK-04等同様の袋状土坑の可能性が考えられる。壁面の形状や調査区内で確認された規模の大きな袋状土坑の形状などから、遺構確認面が括れ部の最大径部である可能性が考えられる。遺構確認面の径は東西約2.7m・南北2.4m以上、底面の径は東西2.4m・南北2.4m以上、遺構確認面からの深さ約0.45mである。主軸はN-19°・Wとみられる。底面は凹凸はあるが概ね緩やかな皿状であり、最深部はレベル150.12mを測る覆土16・20層下にある。これを挟んで、東側の底面レベルは約150.2m、西側の底面レベルは約150.16mであり、4cmほどの高低差が観察される。壁・底面は砂質を帯びた黄褐色ロームを掘り込む。確認面より上位はローム層である。覆土20層を確認した。総じてロームの堆積が多いが、特に西側に顕著である。6・10・12・19層は壁面の崩落層か。7層は8層が攪乱をうけた状況か。

遺物出土状況 5点が出土する。4は遺構中位から、1～3は遺構上位から出土する。砥石及び礫であり、表54に記載する。

本遺跡の時期は不詳である。

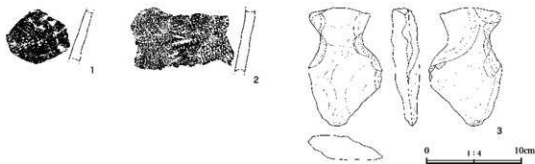
第294号土坑 (SK-294) (第97図 表55 図版八・二四)

位置 B区B-3グリッドに位置する。調査区西端部に位置し、調査区外に延びる。**重複関係** SK-63と重複する。本遺構が古い。**形状・規模・主軸** SK-63との重複や調査区外に延びることから、平面形は不明である。断面形は、SP-Bによれば袋状の可能性はある。括れ部はSP-B付近の南辺にのみ観察される。規模は、東西0.5m以上、遺構確認面の南北約1.0m・底面の南北約0.8m、深さ0.3m前後である。底面には傾斜があり、括れ部の観察された南に向かって高くなる。底面のレベルは150.95～151.06mであり、括れ部となる底面レベルは約150.95mである。壁・底面はローム層を掘り込む。覆土7層を確認した。4・6・7層はロームブロックを多量に含む。壁面の崩落層か。

遺物出土状況 重複するSK-63と混在する可能性が高い。1・2は縄文土器小片であり、覆土5層に相当する位置から出土する。1は緑色の打製石斧片であり、覆土4層に相当するレベルから出土する。

出土遺物 1・2は地縄文を施す。2は不明瞭な地縄文が施される。色調は白色味が強い。3は緑色の鮮やかな打製石斧。1/2が残存する。表面は破砕面、裏面は自然面を多く残す。成形、整形、刃部作出のための剝離は薄い。未製品か。

本遺構の時期は不詳であるが、SK-63との重複から堀之内1式以前と考えられる。



第97図 第294号土坑出土遺物実測図

第4節 土坑

1. 調査の概要

本調査区からは64基の土坑を確認した。上面の削平により遺構上部を失う遺構や遺物の出土のない遺構、出土土器片の時期幅が大きい土坑が多く、総じて詳細は判然としなが、縄文時代の遺構、或いは古墳時代の遺構に関わる土坑が存在する可能性が指摘される。

縄文時代の遺構については、遺構底面のみが残る土坑には袋状土坑である可能性、覆土の堆積状況や遺構の配置から土坑以外の遺構である可能性が考慮されるものがある。

袋状土坑の可能性が残る土坑はSK-18・47・51・133・137・230・273などである。SK-47については断面の袋状を確認出来ず、本節に記載するが、形状・規模・覆土の堆積状況等から袋状土坑である可能性も残る。形状が不整な点は袋状土坑としては留意される。SK-230については袋状土坑の可能性もあるが底面が浅いこと、径約1.0m前後でSK-151よりやや小さいことから本節で記載する。

土坑以外の遺構としては上面を削平された竪穴状遺構などが考慮される。SK-101はビット状の覆土を持ち、連続するSK-19・23・102 P-14は半円状に並ぶ。底面レベルはSK-101が約150.5mとやや深いが、150.24m・150.33m・150.3m・150.35mと近似する値を示す。また、SK-101北側のP-89の底面レベルが約150.57mである点も留意される。SK-159はSI-180と重複するが関連は不明である。SK-140については炉跡の可能性とP78・79・277との関連が考慮されたが判じ得なかった。SK-295は調査区壁際に確認し人頭大の礫が出土する。S-180同様の炉跡である可能性も考え得る。また、SK-298についてはSI-281を構成する遺構である可能性がありSI-281に記載する。

SK-160・161・162は何れも細い円筒形であり、土坑内からは縄文土器小片・人頭大の礫が出土する。SK-160については褐色土とロームの交互堆積が観察される。円筒形状の貯蔵穴の可能性が考えられようか。

SK-87については、砂質ローム層中に掘り込まれたとみられ、遺構として不明瞭な点が多い。

古墳時代の遺構については、何れも詳細を判じ得なかったが埋葬施設の可能性が考慮される。SK-186・187・P-188・P-195にはSZ-26埋葬施設に関連する可能性が残る。SK-131については、現地調査において、形状の大きいロームブロックが堆積し、平坦な底面から垂直に壁面が立ち上がることから攪乱穴と判断した。しかし、堆積土がロームブロックを含んで積状に堆積する点は古墳時代の埋葬施設と似た特徴であり、遺構の可能性が残るため、本節に記載する。SK-36については東端部は調査区外にあり判然としなが、西端部が直線的であるのに対し、東端部は窄まった形状となる可能性があり、舟形木棺が考慮される。SK-184については、判然としなが、覆土の堆積状況から埋葬施設である可能性が考えられ、第8節古墳に記載する。

このほか、留意される点は以下のとおりである。SK-128の床面付近には礫が出土し、SK-129は礫層直上のローム層を底面とする。礫床を意図か。SK-152は風倒木の可能性が残る。SK-288はビットの可能性が残る。SK-173はP-169～172を包括した遺構である可能性が残る。

出土遺物は縄文土器片、石器、礫を主体とする。土器片の時期幅が大きいことや出土状況から遺構の時期を示すものであるか判然としなが。

2. 土坑

第18号土坑 (SK-18) (第98・99図 表56 図版九・二三)

位置 C区D-10グリッドに位置する。調査区東端部に位置し、調査区外に延びる。 **重複関係** 後出するとSZ-30周溝により遺構上半は失われ、底面付近のみ残存する。 **形状・規模・主軸** 平面形は円形状か。

残存面の径約1.22m・底径約1.0mである。深さはSZ-30底面から約0.25mを確認した。底面は小礫層直上の砂質の強いローム層である。覆土下層に礫の混入が顕著であり、部分的に底面・壁面の確認を逸した。底面レベルは149.9m前後である。覆土1層を確認した。礫が混入する。

遺物出土状況 覆土中から17点を確認した。2は石棒、1は蓋型土器小片、3・4は赤色の小礫、5は石皿か。2・3・4は床面付近、1は1層中位、5は1層上～中位から出土する。

出土遺物 1は蓋形土器小片、上面に巡る微隆起線に接して橋状の把手を付す。肩部との接点にはキザミ状の線が放射状に延びる。推定径約9.2cm。器壁の状況などから後期初頭か。2は小型の石棒。基部欠損する。断面はやや楕円形。表裏面は赤彩の痕跡か。3・4は球状の小礫。3は赤彩が施されるか。直径約3.0cm。4は三角錐状の小礫。球形を意識か。赤色は被熱により作出か。直径約4.0cm。

この他、図示し得なかった土器片は以下のとおりである。

無文の口縁部小片、口縁端部の形状から後期初頭か。竹管状工具で平行する曲線を描く小片1片。地縄文小片4片。無文の小片4片。底部破片1片。

石器・礫は表56に記載する。

本遺構の時期は後期初頭か。



第98図 第18号土坑実測図

第19号土坑 (SK-19) (第81・99図 表57 図版九)

位置 C区D-10グリッドに位置する。 **重複関係** SK-23・102と重複する。本遺構が古い。後出するとみられるSZ-30周溝により東半部を失っている。 **形状・規模・軸** 平面形は円形状か。残存する南北の大きさから、径1.3m・底径1.0mほどと推定される。深さは遺構確認面から約0.23mを確認した。底面は砂質の強いローム層である。底面レベルは150.24m前後である。 **覆土** 3層を確認した。3層のみ砂質の強いロームブロックが堆積する。

遺物出土状況 覆土中から61点を確認した。

出土遺物 1は無文の口縁部である。形状や器面の状況から後期初頭か。2は波状口縁か。口縁部下に横位の沈線が施される。後期初頭～後期前葉か。3は無文に2本の並行する断面が三角形の隆帯でモチーフを描出か。磨滅により判然としない。4は半載竹管状工具で刺突を施す。後期初頭～後期前葉か。5は地縄文に半載竹管状工具で沈線を施す。後期前葉か。6は底周部の破片である。磨消を伴う懸垂文が垂下する。加曾利E式後半～後期初頭か。

この他、図示し得なかった土器片は以下のとおりである。

加曾利EⅡ～Ⅲ式とみられる口縁部文様帯下部とみられる隆・沈線を配する破片1片、体部は地縄文(RL)を縦位に施す。時期不明の無文の口縁部小片2片、うち1片は波状口縁。沈線で区画された縄文部と無文部が垂下する小片3片。沈線で区画された幅の狭い無文部でモチーフを描く小片1片。無文に平行する沈線が見える小片3片、うち1片は半載竹管状工具、うち1片は帯状区画か。無文に沈線のみ見える小片1片。地縄

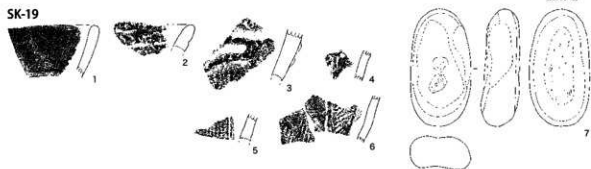
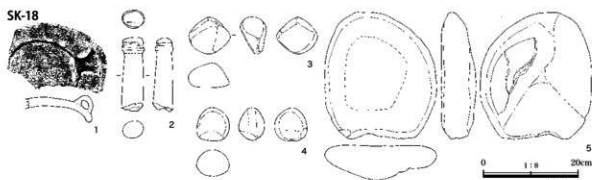
文に沈線の一部がみえる小片3片。地条線小片5片。地縄文小片21片。無文の小片11片。底部小片2片。磨滅片・微細片 36.0g。

石器・礫は表 57 に記載する。

本遺構の時期は後期初頭～後期前葉か。

第23号土坑 (SK-23) (第81・99図 表58)

位置 C区D-10 グリッドに位置する。**重複関係** SK-19と重複する。本遺構が新しい。後出するとみられるSZ-30 周溝により東半部を失っている。**形状・規模・軸** 平面形は円形状で、確認面の径は南北約0.6m、底面の径は約0.4mである。深さは遺構確認面から約0.2mを確認した。底面は砂質の強いローム層である。底面レベルは150.33m前後である。**覆土** 2層を確認した。砂質の強いロームブロックが堆積する。



第99図 第18・19・23・36号土坑出土遺物実測図

遺物出土状況 覆土中から10点を確認した。

出土遺物 1は無文の口縁部下に断面三角形の隆帯と沈線が配される。口縁部は波状か。加曾利E式後半か。2は無文の口縁部下に微隆起線が巡る。称名寺式に並行する加曾利E式か。3は地縄文に集合沈線を配するか。後期前葉か。

石器・礫は表58に記載する。その他、小礫塊2片が出土する。うち1片は被熱により赤色変化する。

本遺構の時期は判然としませんが、後期前葉以降か。

第32号土坑 (SK-32) (第100図 表59)

位置 B区D-9グリッドに位置する。調査区南端部に位置し、調査区外に延びる。**重複関係** SZ-31、SK-33と重複する。SZ-31より新しい。SK-33より古いが、底面のレベルに大差がないことなどから、時間差は少ないと考えられ、同一用途での掘り直し等が推測される。**形状・規模・主軸** 平面形は円形状で、確認面の径は東西約1.6m、底径は東西約1.24mである。深さは表土下約0.4mを確認した。底面レベルは約150.2mである。底面はローム層である。**覆土** 3層を確認した。

遺物出土状況 覆土中から礫石器1点が出土する、表59に記載する。

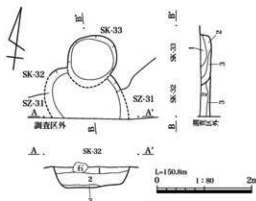
第33号土坑 (SK-33) (第100図 表60)

位置 B区D-9グリッドに位置する。**重複関係** SK-32と重複する。本遺構が新しい。SK-33とは、底面のレベルに大差がないことなどから、時間差は少ないと考えられ、同一用途での掘り直し等が推測される。

形状・規模・主軸 平面形は円形状で、確認面の径約1.1m、底径約0.86mである。深さは遺構確認面から約0.2mを確認した。底面レベルは約150.2mである。底面はローム層である。**覆土** 3層を確認した。

遺物出土状況 覆土中から6点を確認した。何れも礫である。

出土遺物 図示し得なかったが、表60に記載したほかに、磨石片とみられる小片1片、小礫塊1片が出土する。



SK-32	
1	暗褐色土 ローム粒子(～0.2m)少、黒土ブロック(～2.0m)含む、しまりややなし。
2	暗褐色土 ロームブロック(～2.5cm)少量、ローム粒子(～0.1m)含む、しまりややあり。
3	暗褐色土 ロームブロック(～1.0m)少量、ローム粒子(～0.1m)含む、しまりあり。
SK-33	
1	黒褐色土 ローム粒子(微粒)含む、ロームブロック(～1.0m)若干量、しまりあり。
2	黒褐色土 ローム粒子(～0.2m)やや多量、ロームブロック(～2.0m)含む、しまりあり。
3	黒褐色土 ロームブロック(～1.0m)少量、ローム粒子(～0.2m)含む、しまりややあり。

第100図 第32・33号土坑実測図

第36号土坑 (SK-36) (第99・101図 表61 図版九)

位置 B区C-7グリッドに位置する。調査区東端部にあり、調査区外に延びる。**重複関係** 下面にSK-286が位置する。本遺構が新しい。**形状・規模・主軸** 東西に長い長円形である。西北部はSK-286との重複により形状は明瞭ではない。東端部は調査区外にあり判然としませんが、西端部が直線的であるのに対し、東端部は窄まった形状となる可能性がある。遺構確認面の規模は東西約3.1m以上・南北約0.8m、底面の規模は東西約2.9m・南北約0.65mである。深さは遺構確認面から0.4m前後である。主軸はN85°Eである。

SK-286 との重複のない壁・底面はローム層で、底面レベルは約 150.35 m 前後、東端部は 10cm 前後高い。

覆土 3層を確認した。堆積は水平である。攪乱により判然としなが、3層上面と底面東端部のレベルが近く、3層は埋土である可能性が考えられる。

遺物出土状況 覆土中から 146 点を確認した。1～3は東端部の床面付近から出土する。21は礫で遺構確認面付近から出土する。

出土遺物 1は無文の橋状把手。上部が太く下部は細いか。2は沈線で作出する口縁部文様帯か。内面にオコゲの付着顕著。3は口縁部から地条線を施す。6本前後単位の櫛歯状工具か。4は口縁部下に縦位の地縄文(LRか)を施す。中期か。5は帯状区画内に刺突列を配する。称名寺式か。

この他、図示し得なかった土器片は以下のとおりである。

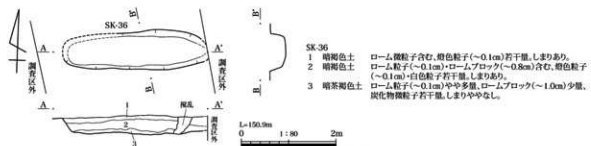
隆帯と沈線で作出する口縁部文様帯とみられる口縁部小片 5片、加曾利EⅡ～Ⅲ式か。無文の口縁部下に地縄文(斜位、横位)を施す小片 2片。無文の口縁部小片 2片。沈線で作出する口縁部文様帯下部小片 1片、加曾利EⅢ式か。磨消を伴う数条一組の懸垂文とみられる小片 4片、うち 1片は底部を伴う。押捺を施す隆帯が垂下する明瞭な地条線破片 1片、曾利式系か。沈線で区画された無文帯或いは懸垂文の垂下する小片 3片、加曾利E式後半～後期初頭か。ナデを伴う微隆起線で曲線的なモチーフを描く小片 3片、加曾利EⅣ式か。帯状区画とみられる小片 1片、帯状区画内に短沈線を施す小片 1片、称名寺か。地縄文に沈線を配する小片 3片、堀之内1式か。無文に傘状の沈線を配する小片 1片、堀之内1式か。櫛歯状工具で波状の地条線を施す数条一組の沈線が垂下する破片 2片(同一個体か)、後期前葉か。地縄文に沈線がみえる小片 3片。地縄文を施す小片 40片。無文の小片 39片。底部破片 1片。微細片 4片。

礫は表 61 に記載する。この他、小礫塊 19ヶが出土する。

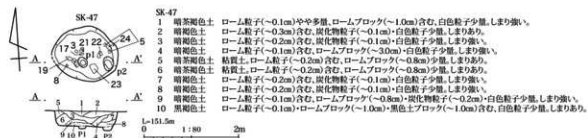
本遺構からは加曾利E式後半から後期前葉以降の土器片が出土する。

第47号土坑(SK-47) (第102・103図 表62 図版九・二)

位置 B区B-3グリッドに位置する。**重複関係** 重複する遺構はない。**形状・規模・主軸** 東西に長い不整な楕円形状である。断面形は丸みを持って立ち上がる。規模は、遺構確認面の東西約 1.4 m・南北約



第101図 第36号土坑東測図



第102図 第47号土坑東測図

0.25 m、底面の東西約1.15 m・南北0.9 m前後、遺構確認面からの深さ0.3 m前後である。底面のレベルは150.94 m前後である。壁・底面はローム層を掘り込む。底面にはp1・2が穿たれるが、帰属は判然としない。p1の底面からの深さは約0.09 m、底面レベルは約150.9 mである。覆土10層を確認した。逆シズク堆積が観察される。最下層の10層は黒色ブロックを含む。5・6層は壁面の崩落層か。6・9層境界線は遺物の出土により不詳である。

遺物出土状況 覆土中から154点を確認した。12は1の下部、13は10の下部の床面付近から出土する。8（18の破片を含む）は10層相当、19・8は10層上位相当、17は9・10層分層線相当、21・3は3・9層分層線相当、5は覆土中位から出土する。19・21は縄文土器底部、23は破砕礫である。

出土遺物 1は無文の口縁部下に横巡する微隆起線から連続する微隆起線で区画された無文部でモチーフを描く。2は無文の口縁部下を微隆起線が横巡する小片。1・2は加曾利EⅣ式か。3は口縁部下直下から斜位の縄文を施す。後期か。4は口縁部下の並行する沈線に刺突を伴う。或いは無文の口縁部に垂下する隆帯の上下に施された刺突か。堀之内式に並行か。5は波頂下の刺突を中心に同心円状のモチーフを描く。同心円状のモチーフの上端部には刺突がほどこされる。何れの刺突も竹管状工具を用いる。同心円状のモチーフ描出後、口縁部下に横巡する沈線が施され、波頂下の刺突下から縦位のモチーフを描く沈線が垂下する。堀之内1式か。6は微隆起線で縄文部と無文部を区画しモチーフを描く体部小片。称名寺式に並行する加曾利E式か。7は沈線で縄文部と無文部を区画する。縄文部に沈線がみえるが帯状区画か。後期初頭か。8は帯状区画で渦巻き状のモチーフを描出か。称名寺式か。9は波頂部にキザミを施し、口縁端部及び口縁部下に沈線が横巡する。波頂下には縦位の単沈線が施される。堀之内1式か。10は地縄文に近接する2本の沈線でモチーフか。後期前半か。11は図上の上端に微隆起線状の高まりがみえる。一次区画線か。後期前半か。12・13は地縄文に単沈線が施される。堀之内1式か。14は帯状区画か。縄文部に刺突を施し周囲をナデる。15は地縄文に横位のモチーフが描かれるか。器面は内外面とも堅緻である。堀之内2式以降か。16は底周部の破片である。地縄文に沈線が垂下する。堀之内1式か。17は縦位の地縄文（RL）を施す。18は概ね斜位に地縄文（LR）を施す。19は波頂部上面にキザミを施す。口縁部下に横巡する沈線から連続して3条一組の沈線が垂下する。同一個体とみられる地縄文を施す体部小片が1片出土する。堀之内1式か。20は木葉痕の残る底部破片である。堀之内1式以降か。21は地縄文が施される。器面は内外面とも堅緻である。堀之内2式以降か。22は無文であるが、上部は地縄文の可能性が残る。図示し得なかったが24は口縁部下に曲線的な沈線のみ見える小片である。沈線下には横方向の縄文（RL）が施される。

この他、図示し得なかった土器片は以下のとおりである。

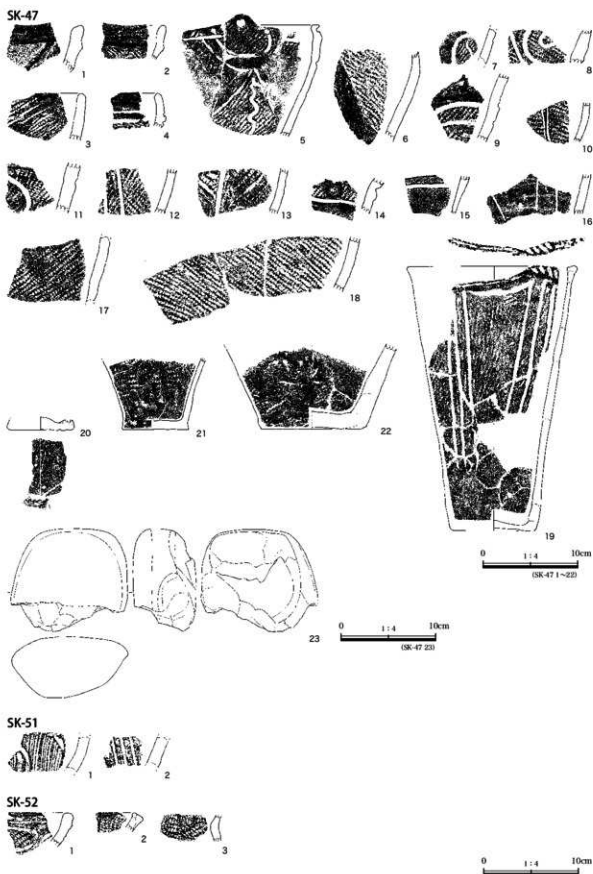
無文の口縁部小片2片。口縁端部下に斜位の縄文を施す小片。沈線で区画された幅狭の無文帯が垂下する小片3片。地縄文に単沈線を施す小片18片、堀之内1式か。無文に一次区画線を配する小片1片、無文に数条一組の沈線が垂下する小片4片、堀之内1式か。地縄文に沈線の一部がみえる小片4片。無文に沈線がみえる小片3片。地縄文小片39片。無文の小片37片、このうちオコゲ付着は4片。底部小片1片。粘土塊1ヶ7.4g。

石器・礫は表62に記載する。この他、小礫・小礫塊9ヶが出土する。このうち小礫塊2片は被熱により赤色変化する。

本遺構の時期は堀之内1式期か。

第51号土坑（SK-51）（第103・104図 表63）

位置 A区B-1グリッドに位置する。調査区西・南端部に位置し、調査区外に延びる。 **重複関係**



第103图 第47·51·52号土坑出土物实测图

SK-272 と重複する。本遺構が新しい。 **形状・規模・主軸** 平面形は不整な円形状である。遺構確認面の南北約 1.3 m、底面の南北約 1.0 m、遺構確認面からの深さは約 0.2 m、底面レベルは約 151.32m である。

覆土 1 層を確認した。

遺物出土状況 覆土中から 9 点を確認した。

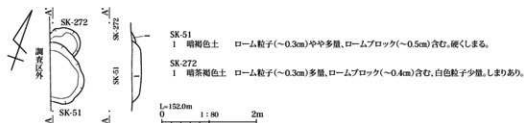
出土遺物 1 は地条線に沈線で渦巻き状の文様を描出す深鉢形土器の体部か。中期後半か。2 は太く深めの地条線が垂下する体部小片である。曾利式系か。

この他、図示し得なかった土器片は以下のとおりである。

ナデを伴う微隆起線を施す体部小片 1 片、加曾利 EIV 式。地縄文小片 3 片。磨滅片 3.4g

石器・礫は表 63 に記載する。

本遺構の時期は判然としませんが、中期後半以降か。



第 104 図 第 51・272 号土坑実測図

第 52 号土坑 (SK-52) (第 105・103 図 表 64 図版九)

位置 A 区 B-1 グリッドに位置する。 **重複関係** 重複する遺構はない。 **形状・規模・主軸** 平面形は円形状である。遺構確認面の径約 0.9 m、遺構確認面からの深さは約 0.15 m、底面レベルは約 151.4m である。

覆土 2 層を確認した。

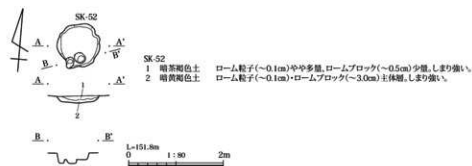
遺物出土状況 覆土中から 10 点を確認した。

出土遺物 1・2 は口縁部文様帯か。1 の口縁部は波状か。極めて低平な隆帯と沈線で単位文と区画文を作出する。2 は隆帯で作出する口縁部文様帯か。3 は縦位の地縄文を施す体部小片。中期末葉～後期初頭の深鉢形土器の括れ部か。

この他、図示し得なかった出土遺物は以下のとおりである。

無文の口縁部下の一次区画隆帯とみられる破片 1 片、隆帯上部に沈線が沿う。地縄文に沈線の一部がみえる小片 1 片。地縄文小片 3 片。無文の小片 1 片。小礫 1 個。表 64 に記載する。

本遺構の時期は中期後半か。

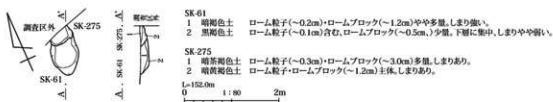


第 105 図 第 52 号土坑実測図

第61号土坑 (SK-61) (第106図)

位置 A区A-1グリッドに位置する。調査区北端部に位置し、調査区外に延びる。**重複関係** 北側にSK-275と重複する。本遺構が古い。**形状・規模・主軸** 重複により判然としなが、南北に長い不整形である。遺構確認面の東西約0.6m・南北約0.45m、底面の東西0.67m以上・南北0.5m以上である。遺構確認面からの深さ約0.18m、底面のレベル約151.42mである。**覆土** 2層を確認した。ロームブロックを多量に含む。

遺物出土状況 出土遺物は確認されなかった。



第106図 第61・275号土坑実測図

第62号土坑 (SK-62) (第107・110図)

位置 A区B-2グリッドに位置する。調査区西・南端部に位置し、調査区外に延びる。**重複関係** SK-271と重複する。本遺構が新しい。**形状・規模・主軸** 平面形は不詳である。遺構確認面からの深さは約0.18m、底面レベルは約151.11mである。**覆土** 2層を確認した。

遺物出土状況 覆土中から10点を確認した。

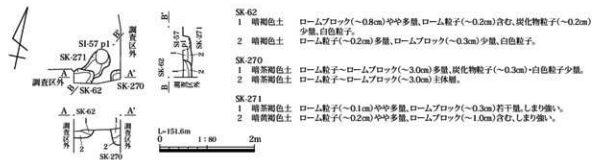
出土遺物 1は降帯とその片側に沿う沈線で曲線的な文様を描く。図上の下部端部に沈線が僅かにみえており、渦巻き状のモチーフが考えられる。加曾利EⅢ式と判断したが、後期前葉の可能性が残る。2は円形の貼付文の中央に刺突を施す。これを起点に単沈線で縦位のモチーフを描くか。堀之内1式か。3は沈線で渦巻き状のモチーフを描く。胎土等から堀之内1式とみられる。

この他、図示し得なかった出土遺物は以下のとおりである。

微隆起線で縄文部と無文部を区画する小片、称名寺式と並行する加曾利E式。地縄文に単沈線を施す小片1片、堀之内1式。地条線小片1片。地縄文小片1片。無文の小片4片。微細片6.1g。小礫塊1片、磨石片か。本遺構の時期は堀之内1式か。

第87号土坑 (SK-87) (第108・110図 表65 図版九・二二)

位置 B区C-7グリッドに位置する。調査区西端部に位置し、調査区外に延びる。**重複関係** SK-173と重複する。本遺構が古い。**形状・規模・主軸** 礫層部に位置し、砂質ローム漸移層を掘り込むとみられるが、覆土1層も地山層である可能性が残る。遺構確認面からの深さは約0.1m、底面レベルは約151.2m



第107図 第62・270・271号土坑実測図

である。覆土 1層を確認した。地山となる砂質ロームブロック層とは、砂質ロームブロックの堆積の有无で分層した。

遺物出土状況 覆土中から 21 点を確認した。何れも土器片である。1・2は底面から 6cm ほど上位に出土する。口縁部を下した状況で出土する。遺構の深さからは、逆位の土器が上面の削平により口縁部のみが残存した可能性も考えられるが、判断としない。

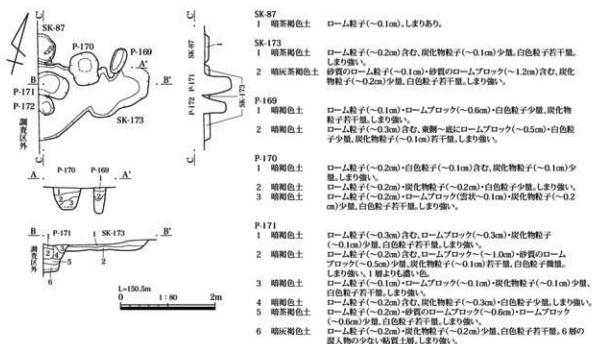
出土遺物 1・2は突出した隆帯を波状に配し、波頂下に渦巻き状の隆帯を付す。隆帯の両脇は丁寧なナデが伴う。波状の隆帯上は刺突列を 5 段に配する。3・5はなぞりを伴う微隆起線で縄文部と無文部を区画しモチーフを描くか。4はヨコ方向の地縄文を施す体部破片である。

この他、図示し得なかった出土遺物は以下のとおりである。

口縁部下に巡る微隆起線から連続する微隆起線で区画した無文部でモチーフを描く小片 1 片。無文の口縁部小片 2 片。微隆起線で区画した無文部で「W」状のモチーフを描く破片 1 片、加曾利 E IV 式。微隆起線で縄文部と無文部を区画する小片 2 片、加曾利 E IV 式。地縄文小片 6 片、このうち 2 片は横位、4 片は斜位である。磨滅片・微細片 8.4g。

石器・礫は表 65 に記載する。この他、小礫 1 個が出土する。

本遺構の時期は加曾利 E IV 式期～後期初頭か。

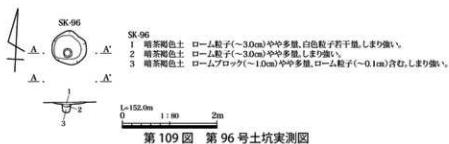


第 108 図 第 87・173 号土坑・第 169・170・171・172 号ヒット実測図

第 96 号土坑 (SK-96) (第 109 図)

位置 A区B-1グリッドに位置する。**重複関係** 重複する遺構はない。**形状・規模・主軸** 不整な円形状である。底面に p1 が穿たれる。遺構確認面の径約 0.72 m、底面の径 0.5 ～ 0.56 m である。遺構確認面からの深さ約 0.03 m、底面レベルは約 151.52 m である。p1 は径約 0.18 m、遺構底面からの深さ約 0.18 m、底面レベル約 151.35 m である。**覆土** 3層を確認した。遺構の埋没は、p1 覆土である 2・3層は堆積後と判断される。

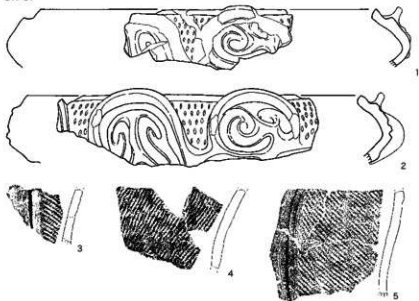
遺物出土状況 覆土中から 3 点を確認した。



SK-62



SK-87



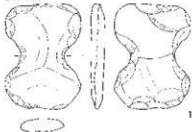
SK-96



SK-100



SK-110



第110図 第62・87・96・100・110号土坑出土土遺物実測図

出土遺物 1は波状口縁か。円形の刺突列は口縁部下に沈線に沿うものか。縦位の条線状の沈線施工後に刺突を施すとみられる。口縁部の形状から加曾利EⅢ式か。

この他、図示し得なかった土器片は以下のとおりである。沈線で区画した無文帯垂下する小片1片、加曾利E式後半～後期初頭か。地縄文を施す底周部周片の小片1片。微細な小礫1ヶ。

本遺構の時期は判然としなが、加曾利E式後半か。

第100号土坑 (SK-100) (第111図 表66 図版二二)

位置 C区D-9グリッドに位置する。**重複関係** 重複する遺構はない。**形状・規模・主軸** 平面形は円形、底面形は南北に長い楕円形である。径約1.0m、底径は東西約0.4m・南北約0.7m、遺構確認面からの深さは約0.3mである。底面は小礫層で、底面レベルは約150.08mである。**覆土** 2層を確認した。覆土中のロームは、遺構周辺の地山であるロームと砂質を帯びたロームとが観察される。

遺物出土状況 覆土中から12点を確認した。4・5は礫で2層中位から出土する。

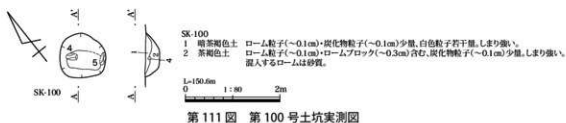
出土遺物 1は口縁端部以下調整の粗い無文の小片である。内面の口縁端部下の凹線状のくぼみは内面文様とは考えがたい。後期前葉か。2は沈線による区画内に条線を充填する。図上下部の区画内には刺突がみられ、渦巻き状のモチーフの巻止まり部の可能性が考えられる。3は地縄文を羽状に配する。上段はLR、下段はRLにループが確認される。黒浜式か。

この他、図示し得なかった土器片は以下のとおりである。

沈線間に磨消を伴う小片1片、加曾利E式後半～後期前葉か。地縄文に沈線がみえる小片1片。地縄文を施す小片2片。無文の小片2片。

礫は表66に記載する。

本遺構の時期は遺物の出土が少なく判然としなが、後期初頭～後期前葉か。



第111図 第100号土坑実測図

第101号土坑 (SK-101) (第81図)

位置 C区D-10グリッドに位置する。調査区西端部に位置し、調査区外に延びる。**重複関係** 重複する遺構はない。**形状・規模・主軸** 平面形は円形状、西側は段を持って立ち上がる。遺構確認面の径は南北約0.9m、底径0.37m前後である。深さは遺構確認面から約0.5mを確認した。底面は小礫層、底面レベルは150.35m前後である。**覆土** 10層を確認した。堆積するロームは砂質を帯びる。1層は遺構上部削平後の堆積か。2・3・4層はピット状に堆積する。3・4層は似た特徴が観察できる。2～4層をピット状の別遺構と考えることも可能であるが、最下層の10層がロームを主体とすること、5～9層の堆積が概ね水平であることなどから、柱穴である可能性も残る。

遺物出土状況 出土遺物は確認されなかった。

第102号土坑 (SK-102) (第81図 図版九)

位置 C区D-10グリッドに位置する。**重複関係** SK-19と重複する。本遺構が新しい。後出するとみられるSZ-30周溝により東半部を失っている。**形状・規模・主軸** 遺構の重複や南側に攪乱により判然と

しないが、円形状か。現状で0.5 mほどの径を確認した。深さは遺構確認面から約0.13 mである。壁・底面はローム層を掘り込む。底面レベルは150.7m前後である。覆土 1層を確認した。ロームの堆積が多い。

遺物出土状況 覆土中から1点を確認した。第81図中の1は石皿の小片である。

本遺構の時期は不詳である。

第110号土坑 (SK-110) (第112図 表67 図版二四)

位置 B区C-4グリッドに位置する。**重複関係** 重複する遺構はない。**形状・規模・主軸** 東西に長い楕円形状である。断面は皿状に緩やかに立ち上がる。規模は、遺構確認面の東西約1.05 m・南北約0.95 m、底面の東西約0.65 m・南北約0.48 m、遺構確認面からの深さ約0.2 mである。

底面は砂質の強いローム層である。底面レベルは150.3m前後である。覆土 1層を確認した。砂質のロームの堆積は観察されない。

遺物出土状況 覆土中から21点が出土する。

図示し得なかったが出土土器は以下のとおりである。

口縁端部から斜位の地縄文を施す小片1片。沈線で縄文部と無文部を区画する小片1片、加曾利E式末葉～後期初頭。無文に沈線のみえる小片1片。地縄文小片3片。このうち1片は周縁の一部が平滑な曲線となる。土製円盤の可能性も考えられるが、粘土紐接合部の可能性や平面形が不整である。無文の小片11片。

1は打製石斧である。礎とともに表67に記載する。この他、小礫塊1片が出土する。

本遺構の時期は判然としない。



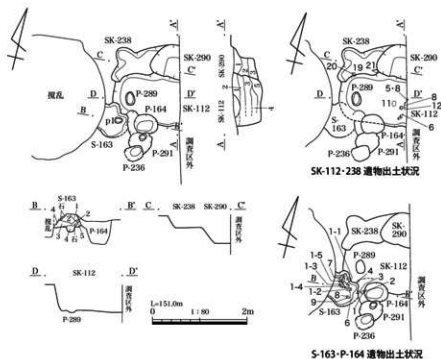
第112図 第110号土坑実測図

第112号土坑 (SK-112) (第113・115図 表68)

位置 C区C-4・5グリッドに位置する。調査区東端部に位置し、調査区外に延びる。**重複関係** 北側に重複するSK-290より新しい。北西に重複するSK-238、西側に重複するS-163・P-164、底面に重複するP-289との新旧関係は不明である。**形状・規模・主軸** 平面形は東西に長い長方形とみられる。確認し得た規模は、東西は遺構確認面1.4 m以上・底面1.3 m以上、南北は遺構確認面約1.0 m・底面約0.85 mである。遺構確認面からの深さは約0.85 mである。底面は調査区東壁に凹凸がみられるが、概ね平坦である。底面レベルは150.2～150.25 mである。壁・底面はローム層を掘り込む。覆土 5層を確認した。水平な堆積状況である。

遺物出土状況 覆土中から48点を確認した。11は2層下位、10は5層中位から出土する。10・11は自然礫である。

出土遺物 1は内面文様を有する口縁部である。壺之内2式の粗製土器か。2は磨削縄文手法で「U」字状のモチーフを描くか。加曾利EⅢ式と考えられるが後期初頭の可能性も残る。3は微隆起縁で縄文部と無文部を区画する小片である。加曾利EⅣ式。4は無文の体部小片である。器面は粗いが硬質である、内外面に赤彩が残る。5は無文の体部小片である。外面は細かく丁寧なミガキが鈍される。内面はオコゲが付着する。器面の状況などから壺之内2式以降か。6はヨコ方向の地縄文を施す体部片である。地縄文は不明瞭で、施



SK-112

- 1 暗褐色土 ローム粒子(～0.1cm)やや多量,褐色ロームブロック(～0.3cm)・ロームブロック(～0.3cm)少量,炭化物粒子(～0.1cm),白色粒子,
- 2 暗褐色土 ローム粒子・ロームブロック(～5.0cm)多量,炭化物粒子(～0.1cm)・白色粒子,
- 3 暗褐色土 ローム粒子(～0.2cm)多量,ロームブロック(～0.8cm)やや多量,炭化物粒子(～0.1cm)・白色粒子少量,
- 4 暗褐色土 ローム粒子(～0.2cm)多量,ロームブロック(～1.5cm)やや多量,炭化物粒子(～0.1cm)少量,白色粒子,
- 5 暗褐色土 ローム粒子(～0.2cm)・ロームブロック(～1.5cm)ごく多量,炭化物粒子(～0.1cm),白色粒子,

SK-290

- 1 暗褐色土 ローム粒子(～0.2cm)多量,ロームブロック(～1.0cm)少量,炭化物粒子(～0.1cm),白色粒子,
- 2 暗褐色土 ローム粒子(～0.1cm)やや多量,白色粒子含む,褐色ローム粒子(～0.1cm)・炭化物粒子(～0.1cm)少量,
- 3 暗褐色土 ローム粒子・ロームブロック(～2.0cm)ごく多量,炭化物粒子(～0.1cm)・白色粒子微量,

S-163

- 1 暗褐色土 ローム粒子(～0.1cm)・白色粒子含む,褐色ロームブロック(～0.2cm)少量,しまり強い,
- 2 暗褐色土 ローム粒子(～0.1cm)やや多量,白色粒子含む,褐色ローム粒子(～0.1cm)・炭化物粒子(～0.1cm)少量,しまり強い,
- 3 暗褐色土 ローム粒子(～0.2cm)・炭化物粒子(～0.1cm)・白色粒子少量,褐色のローム粒子(～0.1cm)若干量,しまりあり,
- 4 暗褐色土 ロームブロック(～1.5cm)主体層,白色粒子含む,しまりあり,
- 5 暗褐色土 ローム粒子(～0.1cm)やや多量,砂質のロームブロック(～0.1cm)含む,褐色のローム粒子(～0.1cm)・炭化物粒子(～0.1cm)少量,しまりあり,

第113図 第112・238・290号土坑・第164・236・289・291号ヒット・第163号埋設土器実測図

文後に粘土が塗布されるか。8はヨコ方向の地縄文を施す体部片である。体部全周の約1/3が残存する。7は底部破片である。中央部は磨り消されるが、周縁に編組品圧痕(1-2-1)が残る。材間に空間を持つ。

この他、図示し得なかった土器は以下のとおりである。

沈線で区画した幅広の無文帯が垂下する小片2片、加曾利E式後半～後期初頭。無文の口縁部下の一次区画隆帯とみられる破片1片。ナデを伴わない微隆起線で縄文部と無文部を区画する小片1片、称名寺式に並行する加曾利E式か。無文に複数の沈線がみえる小片1片。地条線を施す小片1片。地縄文を施す小片15片。無文の小片1片。磨滅片・微細片21.7g。

石器・礫は表68に記載する。この他、小礫・小礫塊が9ヶ出土する。

本遺構の時期は堀之内2式に相当するか。

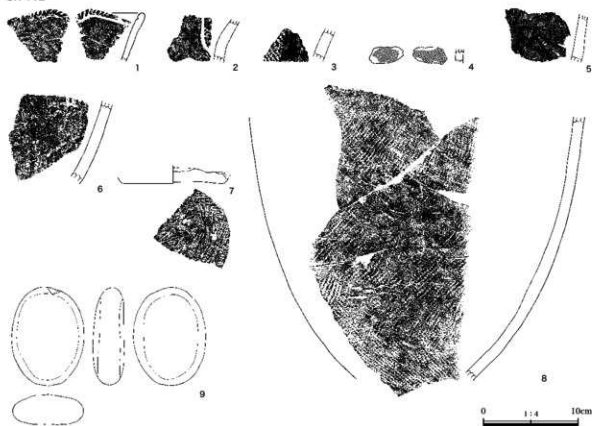
第128号土坑(SK-128) (第114・115図 表69)

位置 C区D-9グリッドに位置する。調査区北・東端部に位置し、調査区外に延びる。重複関係SK-129と重複する。本遺構が新しい。**形状・規模・主軸** 遺構の大部分は調査区外にある。平面形は円形状とみられる。遺構確認面からの深さは約0.5mである。底面は小礫層で直上のローム層で、底面の凹凸によって礫層が露出する。底面レベルは150.07m前後である。**覆土** 2層を確認した。

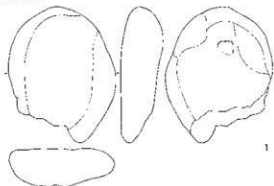


第114図 第128・129号土坑実測図

SK-112



SK-128



第115図 第112・128号土坑出土遺物実測図

遺物出土状況 覆土中から15点を確認した。何れも礫である。

出土遺物 石器・礫は表69に記載する。

本遺構の時期は判断としない。

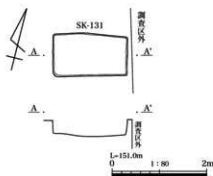
第129号土坑 (SK-129) (第114図)

位置 C区D-9グリッドに位置する。調査区東端部に位置し、調査区外に延びる。 **重複関係** SK-128と重複する。本遺構が古い。 **形状・規模・主軸** SK-128との重複により判断としないが、平面形は円形状とみられる。遺構確認面からの深さは0.2m前後である。底面はローム層で、底面レベルは150.21m前後である。 **覆土** 2層を確認した。

遺物出土状況 覆土中から14点を確認した。1～14は礫で、床面付近から出土する。

第131号土坑 (SK-131) (第116図 図版一〇)

位置 C区D-11グリッドに位置する。調査区西端部に位置し、調査区が延びる。 **重複関係** SK-137と重複する。本遺構が新しい。 **形状・規模・主軸** 平面形は不詳であるが、東西に長い形状と考えられる。東西約1.56m、南北0.8～0.9mであり、東に向かって窄む形状である。遺構確認面からの深さ約0.4mである。主軸はN-75°-Eである。底面は礫層直上のローム層であり、底面レベルは149.6m前後である。 **覆土** 観察でし得なかったが、図版一〇のとおり、形状の大きいロームブロックの含有量によって、水平方向の堆積に分層される。



第116図 第131号土坑実測図

遺物出土状況 出土遺物は確認されなかった。

第133号土坑 (SK-133) (第117・120図 表70 図版二二・二四)

位置 C区D-10グリッドに位置する。調査区西端部に位置し、調査区が延びる。SZ-30との重複により遺構の多くを失っており、北側の底面付近のみが残存する。 **重複関係** SZ-30と重複する。本遺構が古い。

形状・規模・主軸 平面形は不整形である。南側の立ち上がりはSZ-30のラインである可能性がある。遺構確認面の南北約1.8m、底面の南北約1.55m・東西約1.3mである。遺構確認面からの深さ約0.55m、表土下からの深さ約0.65mである。底面は砂質を帯びたローム層で、概ね平坦である。底面レベルは約150.1mである。 **覆土** 4層を確認した。何れも底面付近の堆積土である。ロームを多く含むため、壁面の崩落層である可能性が考えられる。壁面の現状は緩やかに外傾しつつ立ち上がるが、袋状土坑である可能性も否定できない。



第117図 第133号土坑実測図

遺物出土状況 覆土中から11点を確認した。第117図に番号を付した遺物はどれも底面から0.2mほど上位から出土する。3～6・10～12は礫である。9・1・1は遺構外から出土するが、SZ-30との重複に由来する可能性が考えられる。

出土遺物 1は口縁部に同心円状の沈線と並べ、その間にも弧線を重ねる。頸部及び体部には押捺を施す隆帯を配する。曾利式系か。石器・礫は表70に記載する。

本遺構の時期は判然としませんが、中期後葉か。

第135号土坑 (SK-135) (第118・120図 表71 図版九)

位置 C区D-11グリッドに位置する。調査区西端部にあり調査区外に延びる。 **重複関係** P-209・210と僅かに重複する。新旧関係は不明である。 **形状・規模・主軸** 現状の平面形は円形で、南北約1.1mである。現状では東西径1.15m、SP-Aにみえる深さ約0.5mを確認した。底面は小礫層で、底面レベルは150.1m前後である。 **覆土** 9層を確認した。

遺物出土状況 覆土中から12点を確認した。7・8は覆土上層、9～12床面付近から出土する。どれも礫である。

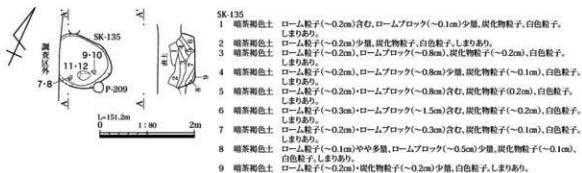
出土遺物 1は弧状の隆帯が対向する突起か。上に載る隆帯の折り返し部には小さな突起がほどこされる。称名寺式か。2は屈曲する口縁部下に一次区画線を有する。体部は地縄文に単沈線とモチーフを描くか。堀之内1式か。3は大きく開口する壺形か。4は無文に沈線でモチーフを描くか。後期初頭か。5は短沈線を施す隆帯でモチーフを描くか。後期初頭か。6は器台か。下端は破砕するか円孔の一部が残る。丁寧なミガキが施される。

石器・礫は表71に記載する。

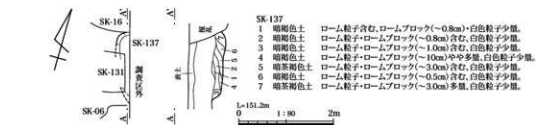
本遺構の時期は出土遺物が少なく判然としませんが、後期初頭～前葉か。

第137号土坑 (SK-137) (第119図)

位置 C区D-11グリッドに位置する。調査区東端部にあり調査区外に延びる。 **重複関係** 西側に後出するSK-131が重複する。また、SK-16と重複するが詳細は不明である。 **形状・規模・主軸** 遺構上面



第118図 第135号土坑実測図

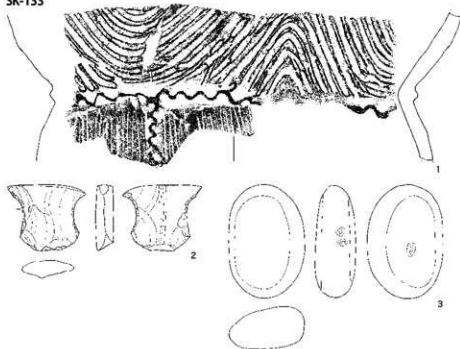


第119図 第137号土坑実測図

は削平されており、底部付近のみを確認した。袋状である可能性も考えられるが、現状では確認できない。現状の平面形は円形状、現状で南北約 1.1m、SPA にみえる深さ約 0.2m を確認した。底面はローム層で、底面レベルは 150.1 ～ 150.2m である。覆土 7 層を確認した。全体的に暗褐色土が堆積する。7 層は地山と見誤るロームブロック層である。壁面等の崩落層か。

遺物出土状況 出土遺物は確認されなかった。

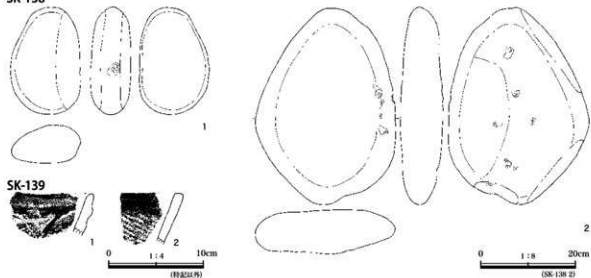
SK-133



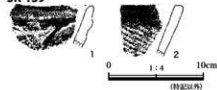
SK-135



SK-138



SK-139



第 120 図 第 133・135・138・139 号土坑出土遺物実測図

第138号土坑 (SK-138) (第14・120図 表72)

位置 C区E-13グリッドに位置する。東半部は調査区外に延びる。**重複関係** 上面に後出するSD-01が重複する。南側にSK-139が重複する。本遺構が古い。**形状・規模・主軸** 重複等により全容は不明である。東西約0.4m・南北約0.8mを確認した。深さは約0.3m、底面レベルは150.4m前後である。**覆土** 3層を確認した。全体的にロームの堆積が多い。SK-160のような円筒形の土坑の可能性もあろう。

遺物出土状況 2・4は覆土下層、1・3・5は覆土中層から出土する。何れも礫である。

石器・礫は表72に記載する。

第139号土坑 (SK-139) (第14・120図)

位置 C区E-13グリッドに位置する。東半部は調査区外に延びる。**重複関係** 後出するSD-01、SZ-26(南)により遺構上層、南半部を失う。北側にSK-138が重複するが本遺構が新しい。**形状・規模・主軸** 重複等により全容は不詳である。不整形であるが、北寄りの東西軸が0.2mほど突出することが要因か。東西(突出部を含む)1.0m以上、南北1.2m以上、深さは最深で約0.72mでを確認した。底面は突出部に向けて楕円状となる。底面レベルは149.95mである。**覆土** 12層を確認した。暗褐色土を基本とする層序で、2層は5・6層の、3層は7・9層の崩落層か。SZ-26(南)の構築が関与する可能性も考え得るが判然としない。

遺物出土状況 覆土中から13点の土器片が出土する。

出土遺物 1は波状口縁下にためではあるが微隆起線が横巡する。波頂下から2条1組の微隆起線でもチーフを描く。加曽利EⅣ式か。2は無文の口縁部から区画なく縄文を施す。

この他、図示し得なかった土器片は以下のとおりである。

無文の口縁部小片1片。沈線で区画した無文帯が垂下する小片1片、加曽利E式後半～後期初頭か。ナデを伴う微隆起線小片1片、加曽利EⅣ式か。ナデを伴わない微隆起線小片1片、称名寺式に並行する加曽利E式か。地縄文小片5片。底部小片2片。

本遺構の時期は、出土する遺物量が少なく判然としないが、後期初頭の可能性は残る。

第140号土坑 (SK-140) (第14・122図 表73)

位置 C区E-12グリッドに位置する。東半部は調査区外に延びる。**重複関係** 上面に後出するSD-01が重複する。本遺構が古い。**形状・規模・主軸** 重複等により全容は不明である。南北約1.5m、東西は約0.4mを確認した。深さ約0.3m弱、底面レベルは150.45m前後である。**覆土** 3層を確認した。1・2層に橙色のローム粒子が堆積する。

遺物出土状況 4・通し番号578は床面付近、3他は覆土中層から出土する。4などの30cm前後の礫が方形ライン上に出土することから、が跡の可能性も考えたが、火熱等明確な痕跡は観察できなかった。また、覆土1・2層の橙色ロームに焼土の特徴は観察されない。

出土遺物 1・2は同一個体か。微隆起線で区画した無文部でモチーフを描き、モチーフ間を舌状の突起で繋ぐ。微隆起線脇のナゾリは、明確に伴う部分、僅かに伴う部分、伴わない部分が混在する。

この他、図示し得なかった土器片は以下のとおりである。

2条1単位のナデを伴う微隆起線で曲線的なモチーフ描く小片1片、加曽利EⅣ式か。地縄文小片5片。

石器・礫は表73に記載する。

本遺構の時期は、出土する遺物量が少なく判然としないが、加曽利EⅣ式からその直後か。

第149号土坑 (SK-149) (第85図)

位置 B区D-9グリッドに位置する。**重複関係** 西側のSK-33より古い。東側のSK-148より新しい。

形状・規模・主軸 東西に長い楕円形で、東西約1.0m・南北約0.8m、遺構確認面からの深さ約46cm、主軸N70°E、底面レベルは149.9m前後である。遺構中位の150.3m付近を境に下位は砂質の強いローム層、上位はその漸移層とみられる砂質のロームブロックを多量に含むローム層である。 **覆土** 4層を確認した。3層に堆積ロームブロックは砂質を帯びる。

遺物出土状況 覆土中から10点が出土する。9点は土器小片、1点は小礫塊である。

出土遺物 何れも小片であり図示し得なかったが以下のとおりである。

沈線間に磨消を伴う小片3片、加曽利E式後半～後期前葉。無文に沈線を施す小片1片、帯状区画か。無文の小片2片。磨滅しオコゲの付着が顕著な小片1片。微細片2片である。

本遺構の時期は判然としなが、後期前葉以降か。

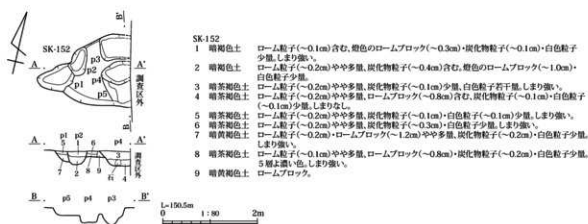
第152号土坑 (SK-152) (第121・122図 表74 図版二三)

位置 B区C-7グリッドに位置する。調査区東端部にあり、調査区外に延びる。 **重複関係** 重複する遺構はない。 **形状・規模・主軸** 平面形は不整で東西に長い。底面にビット状の落ち込みが複数確認され、便宜上、p1～p5を付した。風倒木の可能性が高い。規模は、遺構確認面の東西2.0m以上・南北約1.5m、遺構確認面からの深さ0.3m前後である。底面は大小の凹凸はあるがほぼ平坦である。底面レベルは150.22m前後である。p1～5は不整形である。遺構確認面からの深さは、p1:約0.28m・p2:約0.2m・p3:約0.38m・p4:約0.32m・p5:約0.18mである。各ビットの底面レベルは、p1:約150.11m・p2:約150.06m・p3:約149.8m・p4:約150.04m・p5:約150.18mである。ビット底面は砂質を帯びるローム層である。 **覆土** 9層を確認した。1・2層はp2覆土、3・4層はp4覆土である。1・2層には橙色のローム粒子の堆積がみられる。図示し得なかったがp4には3・4層より濃色土の堆積が確認される。p2・3・4ともに遺構確認面から掘り込まれる。5層と6層は似た特徴が観察される。5～7層は遺構自体の覆土か。8層はp1覆土と判断される。p5は遺構底面の凹凸面か。

遺物出土状況 覆土中から17点が出土する。

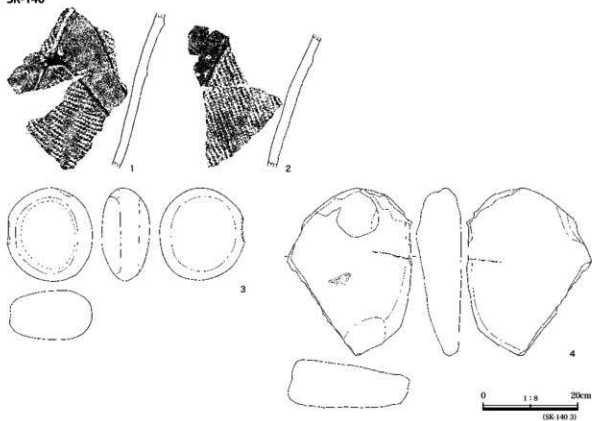
出土遺物 1は沈線で区画した縄文部でモチーフを描出か。加曽利E式後半～後期初頭か。2は底部小片である。外面は火熱により赤色変化する。器形の特徴から堀之内式以降か。3は土製円盤である。タテ3.6cm・ヨコ3.3cm・厚0.9cm・重9.23g。地縄文に並行する沈線が施される。図上部は研磨されるが下部は破砕した状態で残る。未製品の可能性があろうか。称名寺式あるいは堀之内1式か。

この他、図示し得なかった土器片は以下のとおりである。



第121図 第152号土坑実測図

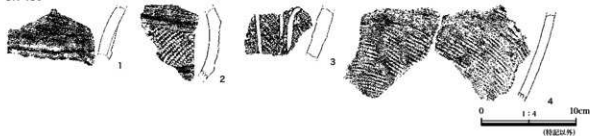
SK-140



SK-152



SK-159



第 122 図 第 140・152・159 号土坑出土遺物実測図

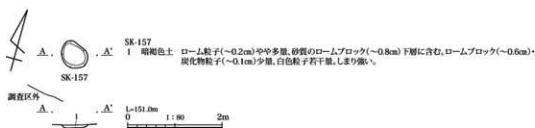
地縄文に比線のみ見える小片 1 片。地縄文小片 9 片。無文の小片 1 片。破砕片 1 片。

鏝は表 74 に記載する。

本遺構の時期は判然としないが、後期前葉か。

第 157 号土坑 (SK-157) (第 123 図)

位置 B 区 C-4 グリッドに位置する。**重複関係** 重複する遺構はない。**形状・規模・軸** やや東西に長い楕円形状である。規模は、遺構確認面の東西約 0.6 m・南北約 0.5 m、底面の東西約 0.5 m・南北約 0.4 m、表土下からの深さ約 0.08 m である。底面は概ね平坦であり、レベルは約 150.68 m である。本遺構の遺構確認面は、西側に位置する風倒木痕とみられる落ち込みのためか、周囲より低く、本来の遺構の深さは現状より



第123図 第157号土坑実測図

30cm以上深いものと判断される。また、本遺構が風倒木痕の一端である可能性は否めない。覆土1層を確認した。

遺物出土状況 出土遺物は確認されなかった。

第159号土坑 (SK-159) (第24・122図 表75)

位置 B区B-4グリッドに位置する。調査区西端部にあり、調査区外に延びる。**重複関係** S-180・SK-245と重複する。本遺構が新しい。**形状・規模・主軸** 平面形は不整な円形状である。規模は、遺構確認面の東西0.6m以上・南北約0.50m、底面の東西0.55m以上・南北約0.4m、表土下からの深さ約0.26mである。底面は概ね平坦であり、レベルは約150.62mある。**覆土** 1層を確認した。

遺物出土状況 覆土中から20点が出土する。4は覆土中層から出土する。

出土遺物 1は微隆起線を一次区画線とする無文の口縁部か。体部は地縄文か。2は微隆起線を一次区画線とするか。体部には微隆起線でモチーフを描くか。中期末葉～後期初頭か。3は地縄文に沈線でモチーフを描くか。1～3は中期末葉～後期初頭か。4は2片が接合した。縦位の地縄文を施す体部破片である。間隔施文か。同一個体とみられる小片1片が出土する。

この他、図示し得なかった出土遺物は以下のとおりである。

沈線間に磨消を伴う小片3片、加曾利E式後半～後期前葉か。ナデを伴わない微隆起線で縄文部と無文部を区画する小片1片。称名寺式と並行する加曾利E式か。地条線に数条単位の内線が垂下する小片1片。地縄文小片2片。無文の小片1片。磨滅した小片5片。

磯は表75に記載する。このほか、小磯塊1片が出土する。

本遺構の時期は後期初頭前後か。

第160号土坑 (SK-160) (第124・125 表76 図版一〇・二二)

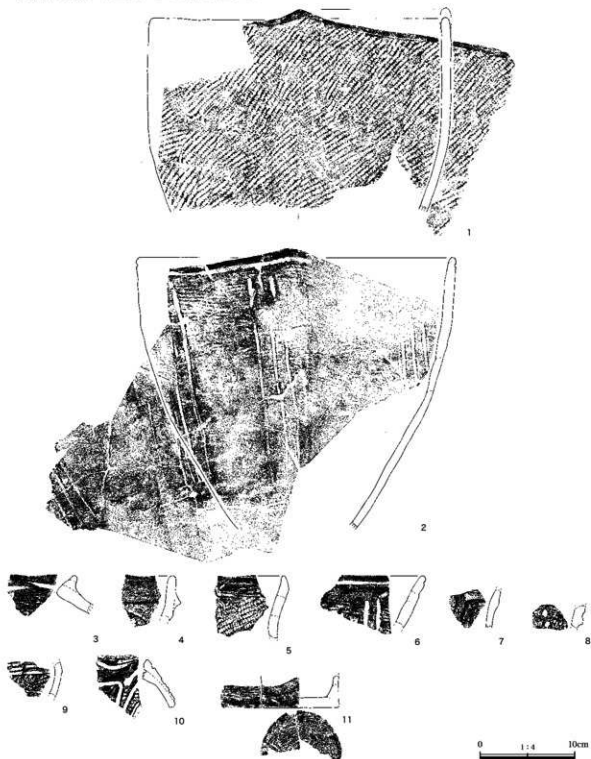
位置 B区D-8グリッドに位置する。調査区東端部にあり、調査区外に延びる。**重複関係** 重複する遺構はない。**形状・規模・主軸** 平面形は円形状とみられる。断面形は筒状である。現状の径は、遺構確認



第124図 第160号土坑実測図

面の南北約0.8 m、底面の南北約0.65 m、遺構確認面からの深さ約0.9 mである。底面はほぼ平坦、底面レベルは149.32m前後である。底面は砂質の強いローム層である。覆土16層を確認した。7・8・11層は壁面の崩落層か。全体的な色調は褐色であるが、ロームの混入の少ない層（1・2層、10・11層、16層）とローム粒子・ロームブロックの堆積の多い層（4・6層・12～16層）が交互に堆積する。

遺物出土状況 覆土中から64点が出土する。



第125図 第160号土坑出土遺物実測図

出土遺物 1は口縁部に波状の突起を配する。突起は3単位か。口縁部直下から縦位の地縄文を施す。確認面付近からの出土であり、本遺構に伴わない可能性が残る。2は緩やかな波状の口縁部下に太めの沈線が巡る。体部は縦位の地縄文に3本一組の太めの沈線が垂下する。堀之内1式か。3は頸部の屈曲する深めの浅鉢形か。屈曲部外面に沈線状となる強いナデの痕跡か。4は波状口縁部下を微隆起線が横巡する。体部は微隆起線でモチーフを描く、加曾利EIV式か。5は波状口縁部下を沈線が巡る。加曾利E式後半～後期初頭か。6は口縁部下を沈線で区画し、体部は単沈線で縦位のモチーフを描く。堀之内1式か。7は微隆起線でモチーフを描く。加曾利EIV式～後期初頭か。8は地縄文に竹管状工具で刺突を施す。帯状区画か。9は短沈線を配する帯状区画か。8・9は称名寺式か。10は肩部が屈曲する壺形か。口縁部下端と判断される屈曲部上端部には沈線が横巡する。体部は深く明瞭な沈線でモチーフを描く。堀之内1式か。11は無文の底部である。体部・底部とも細かなミガキが施される。器形等から堀之内式以降と考えられる。

この他、図示し得なかった出土遺物は以下のとおりである。

横位の隆帯とこれに沿う沈線を施す小片1片、口縁部文様帯か。無文の口縁部1片。沈線に磨消を伴う小片3片、加曾利E式後半～後期前葉。地縄文に集合沈線で半円状等のモチーフを描く小片2片、集合沈線が垂下する小片1片、堀之内1式か。微隆起線で区画された無文部小片1片、中期末葉～後期初頭か。帯状区画とみられる無文の小片1片。無文の明瞭な数条の沈線でモチーフを描く小片1片。無文に集合沈線が垂下する小片1片、無文に平行する沈線が垂下する小片2片、堀之内式か。地縄文に沈線の一部分のみ見える小片3片、無文に沈線の一部分のみ見える小片2片。地縄文小片15片。無文の小片16片。底部小片2片、うち1片は堀之内2式以降か。微細片1.6g。小礫塊1片、礫石器小片か。表76に記載する。

本遺構の時期は堀之内1式か。

第161号土坑 (SK-161) (第126・128図 表77 図版一〇・二五)

位置 B区D-8グリッドに位置する。**重複関係** 重複する遺構はない。**形状・規模・主軸** 平面形はやや東西に長い楕円形とみられる。断面形は筒状である。遺構確認面の径は東西約0.92m・南北約0.74m、底面の径は東西約0.88m・南北約0.68m、遺構確認面からの深さ約0.57m、主軸はN-74°-Wである。底面はほぼ平坦、底面レベルは149.64m前後である。底面は砂質の強いローム層である。**覆土** 8層を確認した。上層及び礫下部の土層観察を逃している。上面には炭化物粒子が目立つ。

遺物出土状況 覆土中から59点が出土する。小礫の出土が多く、床面付近から人頭大の礫10～12が纏まって出土する。

出土遺物 1は無文の口縁部破片である。破片上下の剝離痕は把手の痕跡か。壺形或いは注口を付すか。後期初頭～後期前葉か。2は一次区画線部が屈曲するか。単沈線でモチーフか。3は口縁下の華奢な隆帯を一次区画線とし、単沈線でモチーフを描く。4は口縁端部に沈線が巡る。口縁部下に横位に沈線の一部分がみ



第126図 第161号土坑実測図

える。5は口縁部下に沈線が巡る。破片下部にも沈線の一部分がみえる。6は口縁部から無文か。2～6は堀之内1式～2式か。7は帯状区画でモチーフか。称名寺式か。8は短沈線、9は集合沈線で縦位のモチーフを描くか。堀之内1式か。9は体下半の膨らむ器形か。

この他、図示し得なかった土器片は以下のとおりである。

無文の口縁部から区画なしに地縄文を施す小片1片、磨滅のため詳細不明。沈線で区画された縄文部でモチーフを描く小片1片、これに類するとみられる小片1片、後期初頭か。頸部の一次区画沈線とみられる小片4片、後期前葉か。単沈線或いはこれに沿う沈線が垂下する小片3片、堀之内1式か。横位の集合沈線下が無文となる器壁の薄い小片1片、堀之内式の壺形か。地縄文小片17片。無文の小片15片。底部小片1片。微細片13.4g。礫・石器は表77に記載する。

本遺構の時期は、堀之内1～2式か。

第162号土坑 (SK-162) (第127・128図 表78 図版一〇・二三)

位置 B区D-8グリッドに位置する。調査区東端部にあり、調査区外に延びる。**重複関係** 重複する遺構はない。**形状・規模・主軸** 形状は不明であるが円形とみられる。断面形は筒状で、調査区端部の壁面の観察からは円筒形か。現状の径は、遺構確認面の南北約0.9m、底面の南北約0.73m、遺構確認面からの深さ約0.5mである。底面はほぼ平坦、底面レベルは149.71m前後である。底面は砂質の強いローム層である。**覆土** 8層を確認した。1・2層は壁面の崩落層か。中層以下の4～8層はロームの堆積が目立つ。確認面より上位は東壁基本土層である。

遺物出土状況 覆土中から19点が出土する。

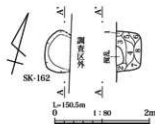
出土遺物 1は土製円盤か。タテ4.1cm・ヨコ4.0cm・厚1.3cm・重20.03gである。周縁は一部に研磨が施されるか。

この他、図示し得なかったが出土遺物は以下のとおりである。

無文の口縁部下に地縄文(LR)を横位に施す破片1片、後期か。帯状区画とみられる小片2片。地縄文片7片。無文の小片5片。微細片35.7g。粘土塊43.5g。

礫は表78に記載する。

本遺構の時期は判然としなない。



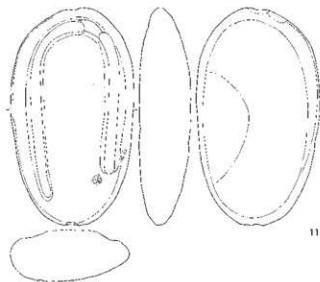
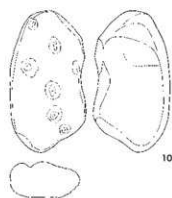
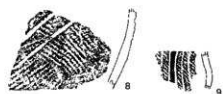
- SK-162
- | | | |
|---|-------|---|
| 1 | 暗黄褐色土 | ロームブロック主体層。 |
| 2 | 暗茶褐色土 | ローム粒子～ロームブロック(～0.5cm)主体層、炭化物粒子(～0.1cm)、白色粒子、しまりあり。 |
| 3 | 暗茶褐色土 | ローム粒子(～0.3cm)、ロームブロック(～0.5cm)、炭化物粒子(～0.4cm)、白色粒子、しまりあり。 |
| 4 | 暗茶褐色土 | ローム粒子(～0.2cm)、ロームブロック(～0.5cm)、炭化物粒子(～0.5cm)、白色粒子、しまりあり。 |
| 5 | 暗黄褐色土 | ローム粒子～ロームブロック(～1.0cm)多量、炭化物粒子(～0.5cm)、白色粒子、しまりあり。 |
| 6 | 暗黄褐色土 | ローム粒子～ロームブロック(～1.0cm)多量、炭化物粒子(～0.2cm)、白色粒子、しまりあり。 |
| 7 | 暗茶褐色土 | ローム粒子～ロームブロック(～1.5cm)、炭化物粒子(～0.3cm)、白色粒子、しまりあり。 |
| 8 | 暗茶褐色土 | ローム粒子～ロームブロック主体層、炭化物粒子、白色粒子、しまりあり。 |

第127図 第162号土坑実測図

第173号土坑 (SK-173) (第108・128図 表79)

位置 B区C-7・8グリッドに位置する。調査区東端部にあり、調査区外に延びる。**重複関係** SK-87・P-169～172と重複する。P-171より古いが、これ以外の遺構との新旧関係は不明である。**形状・規模・主軸** 東西に長い不整形である。P-169付近の形状は確認し得なかった。遺構確認面の東西2.1m以上・南北1.0～1.6m、底面の南北0.7～1.5m、遺構確認面からの深さ約0.2mである。底面は凹凸がみられる。底面レベルは約150.18mである。底面は砂質ローム層漸移層である。**覆土** 2層を確認した。2層は砂質のローム

SK-161



0 1:8 20cm
SK-161 11-12)

SK-162



SK-173



0 1:4 10cm
(原図1/6)

第128図 第161・162・173号土坑出土遺物実測図

ムブロックが堆積する。砂質のローム漸移層である可能性が残る。

遺物出土状況 覆土中から42点が出土する。

出土遺物 1は波状口縁部下の2条の微隆起線状の高まり内に刺突列を2列配する。称名寺式か。2は低平な隆帯と沈線と区画した内部に条線を充填か。後期初頭か。3は口縁端部に刺突を伴う円形の貼付文を配する。堀之内式か。4は微隆起線と区画した内部に沈線に沿う小片である。区画内部に刺突が見えるが詳細は不明である。5は細線を配する。注口土器の可能性が残る。堀之内2式か。

この他、図示し得なかった土器片は以下のとおりである。

無文の口縁部小片1片。無文の口縁部下に横位の沈線が見える小片1片。沈線間に磨消を伴う小片4片、加曾利E式後半～後期前葉。地縄文に微隆起線のみえる小片3片、加曾利EⅣ式。集合沈線で方形のモチーフを描く小片1片。内外面にオコゲの付着顕著。堀之内2式か。区画をもたず縄文と無文部が分かれる小片2片。地縄文に沈線の一部が見える小片1片。無文に沈線のみえる小片3片、うち1片は帯状区画、1片は格子目状の条線か、後期初頭～前葉か。地縄文小片11片。無文の小片7片。

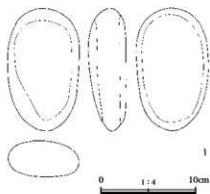
石器・礫は表79に記載する。

本遺構の時期は判然としないが後期前葉か。

第183号土坑 (SK-183) (第162・129図 表80)

位置 C区E-13グリッドに位置する。**重複関係** SZ-03と重複する。SZ-03確認面における平面プランの確認はなく、SZ-03を掘り下げる過程で確認した。明確な平面プランの確認は、SZ-03覆土13層下面である。SZ-03覆土13層下面(15・16層)は掘方埋土の可能性があり、SZ-03構築の過程の土坑か。**形状・規模・主軸** 平面形・底径ともにSZ-03掘方によって西壁を失っているが、円形と判断される。底径は0.9m前後か。深さは最深で約0.2mである。壁は緩やかに外傾して立ち上がるが、円筒形状となるか袋状となるかは判断できない。底面はほぼ平坦で、壁面近くで僅かに皿状となる。底面レベルは150.1mである。**覆土** 2層を確認した。2層は硬くしまる。

遺物出土状況 1が2層中から出土する。表80に記載する。

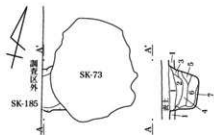


第129図
第183号土坑出土遺物実測図

第185号土坑 (SK-185) (第130図 表81)

位置 C区E-13グリッドに位置する。調査区西壁際であり、遺構の大部分は調査区外にあると考えられる。

重複関係 本遺構東側にSK-73が重複する。本遺構が古い。**形状・規模・主軸** 平面形は開口部、底面とも不明である。断面は円筒状である。確認面から底面までの深さは約0.5mで、底面レベルは150.3mである。



SK-185	
1 暗褐色土	ローム粒子(～0.2m)・黒色のロームブロック(～3.0m)含む、炭化物粒子(～0.1m)・白色粒子少量、しまりややあり。
2 暗褐色土	ローム粒子(～0.1m)やや多量、炭化物粒子(～0.2m)・白色粒子少量、しまりあり。
3 暗褐色土	ローム粒子(～0.2m)含む、炭化物粒子(～0.2m)、白色粒子、しまりあり。
4 暗褐色土	ローム粒子(～0.1m)・ロームブロック(～10cm)含む、炭化物粒子(～0.3m)・白色粒子少量、しまりあり。
5 暗褐色土	ローム粒子・ロームブロック(～1.0m)多量、炭化物粒子(～0.2m)・白色粒子少量。
6 暗褐色土	ローム粒子(～0.3m)含む、ロームブロック(～1.0m)・炭化物粒子(～0.5m)・白色粒子少量、しまりあり。
7 暗褐色土	ローム粒子・ロームブロック(～1.0m)多量、炭化物粒子、白色粒子。
1 暗褐色土	ローム粒子・ロームブロック(～1.0m)多量、地味あり。

L=151.3m
0 1.80 2m
1:80

第130図 第185号土坑実測図

底面はほぼ平坦である。覆土 7層を確認した。3・5・7は壁の崩落土か。

遺物出土状況 覆土中から礫の出土が多い。2点を取り上げた。

出土遺物 図示し得なかったが表81に記載する。

第186号土坑 (SK-186) (第131図)

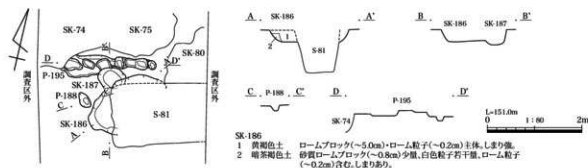
位置 C区E-12グリッドに位置する。**重複関係** SZ-26内部にあり、本遺構東側にSZ-26の埋設施設であるS-81が重複する。**形状・規模・軸** 平面形は不明である。遺構確認面から底面までの深さ約0.25mで、底面レベルは150.55m前後である。底面は所々に植物の根状の小穴があるが、底面の凹凸はこれに起因するか。**覆土** 2層を確認した。2層はロームブロックを主体とする層である。垂直方向に分層が可能である。SZ-26埋設施設に関わるものか。

遺物出土状況 出土遺物は確認されなかったが、重複するSZ-26埋設部S-81に本遺構帰属の遺物が流入する可能性が考えられる。S-81からは加曽利E式後半～堀之内式とみられる土器片が出土する。S-81と重複する袋状土坑SK-80の時期が加曽利E式後半と推察されるため、本遺構の時期が堀之内式期である可能性が指摘できる。

第187号土坑 (SK-187) (第131図)

位置 C区E-12グリッドに位置する。**重複関係** SZ-26内部にある。本遺構南側にSK-186、北側にP-195が重複する。何れとも新旧関係は不明である。上面に後出するSD-01が重複する。**形状・規模・軸** 平面形は判然としないが、底面は長円形か。想定される底面径は約0.3mである。遺構確認面から底面までの深さ約0.3m強で、底面レベルは150.48m前後である。底面は皿状で凹凸がある。**覆土** 確認し得なかった。

遺物出土状況 出土遺物は確認されなかった。



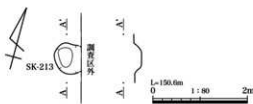
第131図 第186・187号土坑・第188・195号ピット実測図

第213号土坑 (SK-213) (第132図)

位置 C区D-10グリッドに位置する。調査区東端部に位置し、調査区が延びる。**重複関係** 重複する遺構はない。**形状・規模・軸** 不整な円形状で、底面は南北に長い。径約0.62m、底径は南北約0.42m・東西約0.3m、確認面からの深さ約0.17mである。

底面の軸はN-18°-Wである。底面は小礫層で、底面レベルは150.2m前後である。**覆土** 観察できなかったが、ローム粒子、少量のロームブロックを含む暗褐色土の堆積によって遺構と判断した。

遺物出土状況 出土遺物は確認されなかった。



第132図 第213号土坑実測図

第214号土坑 (SK-214) (第133図)

位置 C区D-9グリッドに位置する。調査区東端部にあり、調査区外に延びる。**重複関係** 重複する遺構はない。**形状・規模・主軸** 平面形は不詳であるが、現状は剛丸形状である。、確認面の径は南北約1.0m、底径は南北約0.85mである。深さは遺構確認面から約0.27mを確認した。底面レベルは約150.0mである。底面はローム層である。**覆土** 1層が堆積する。暗褐色土であるが、他遺構の堆積層に比べ白味の強い色調である。

遺物出土状況 出土遺物は確認されなかった。

第225号土坑 (SK-225) (第133図)

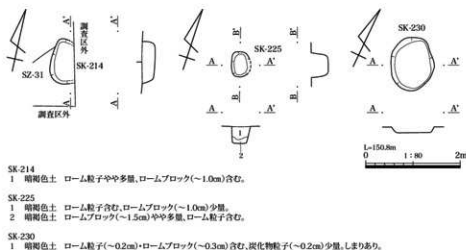
位置 B区C-6グリッドに位置する。**重複関係** 重複する遺構はない。**形状・規模・主軸** 南北に長い剛丸形状である。遺構確認面の規模は東西約0.8m・南北約0.7m、底面規模は東西約0.28m・南北約4.5mである。深さは遺構確認面から約0.36mを確認した。底面は砂質を帯びるローム層で、底面レベルは約150.145mである。**覆土** 2層を確認した。柱穴の可能性があろうか。

遺物出土状況 出土遺物は確認されなかった。

第230号土坑 (SK-230) (第133図)

位置 B区C-6グリッドに位置する。**重複関係** 重複する遺構はない。**形状・規模・主軸** 上面を削平によって失っており、底面付近のみが残存する。南北に長い不整な楕円形状である。遺構確認面の規模は東西約0.92m・南北約1.12m、底面規模は東西約0.78m・南北約1.0mである。深さは遺構確認面から約0.12mを確認した。主軸はN-20°-Wである。底面のレベルは約150.39mである。壁・底面はローム層である。**覆土** 1層を確認した。

遺物出土状況 出土遺物は確認されなかった。



第133図 第214・225・230号土坑実測図

第237号土坑 (SK-237) (第134図)

位置 C区C-5グリッドに位置する。調査区東端部にあり、調査区外に延びる。**重複関係** SK-288と重複する。本遺構が古い。**形状・規模・主軸** 攪乱のより遺構南側の上面を失っている。平面形は方形形状である。断面形は底面より直線的に外傾しつつ立ち上がる。遺構確認面の規模は南北約0.8mと推定される。底面の規模は南北約0.65mである。遺構確認面からの深さ0.35m前後である。底面は凹凸がみられる。底



- SK-237
- | | |
|--------|--|
| 1 暗褐色土 | ローム粒子(～0.2m)含む、炭化物粒子(～0.3m)・白色粒子少量。 |
| 2 暗褐色土 | ローム粒子(～0.2m)含む、ロームブロック(～1.0m)少量、炭化物粒子(～0.1m)、白色粒子。 |
| 3 暗褐色土 | ローム粒子(～0.2m)やや多量、ロームブロック(～1.0m)・炭化物粒子(～0.2m)・白色粒子少量。 |
| 4 暗褐色土 | ローム粒子(～0.3m)多量、炭化物粒子(～0.1m)、白色粒子。 |
| 5 暗褐色土 | ローム粒子～ロームブロック(～1.0m)多量、炭化物粒子(～0.2m)少量。 |
- SK-288
- | | |
|--------|---|
| 1 暗褐色土 | ローム粒子(～0.1m)含む、炭化物粒子(～0.1m)少量、白色粒子。 |
| 2 暗褐色土 | ローム粒子～ロームブロック(～2.0m)多量、炭化物粒子(～0.5m)少量、白色粒子。 |

第134図 第237・288号土坑実測図

面レベルは約150.4mである。壁～底面はローム層を掘り込む。覆土 5層を確認した。

遺物出土状況 出土遺物は確認されなかった。

第238号土坑 (SK-238) (第113・135図)

位置 C区C-4・5グリッドに位置する。**重複関係** 東側に重複するSK-290、南側に重複するSK-112との新旧関係は不明である。**形状・規模・主軸** 重複により平面形は不詳であるが、不整形である。遺構確認面からの深さ約0.25mである。底面は概ね平坦であり、底面レベルは約150.6mである。壁～底面はローム層を掘り込む。**覆土** 確認し得なかった。

遺物出土状況 覆土中から1片が出土する。

出土遺物 1は体下部の破片。地縄文を施すが磨滅により詳細は不明である。外面の破片上部にオコゲが付着する。

本遺構の時期は判然としない。



第135図 第238号土坑出土遺物実測図

第250号土坑 (SK-250) (第136図)

位置 B区B-4グリッドに位置する。調査区東端部にあり、調査区外に延びる。**重複関係** SK-251と重複する。本遺構が新しい。**形状・規模・主軸** 東西に長い不整形である。規模は、遺構確認面の東西0.95m以上・南北0.8m前後、底面の東西0.9m以上・南北0.6m前後、遺構確認面からの深さ0.23m前後である。底面は凹凸がみられる。底面レベルは150.84m前後である。壁～底面はローム層を掘り込む。攪乱である可能性が残る。**覆土** 1層を確認した。

遺物出土状況 出土遺物は確認されなかった。

第251号土坑 (SK-251) (第136図)

位置 B区B-4グリッドに位置する。調査区東端部にあり、調査区外に延びる。**重複関係** SK-250と重複する。本遺構が古い。**形状・規模・主軸** 平面形は不詳であるが、方形状か。壁は直立気味に立ち上がる。規模は、遺構確認面の東西0.5m・南北0.8m、底面の東西0.4m前後・南北約0.4m、遺構確認面からの深さ0.31m前後である。底面レベルは150.98m前後である。**覆土** 1層を確認した。

遺物出土状況 出土遺物は確認されなかった。



- SK-250
- | | |
|--------|---------------------------------------|
| 1 暗褐色土 | ローム粒子(～0.2m)含む、ロームブロック(～0.8m)少量、しりあり。 |
|--------|---------------------------------------|
- SK-251
- | | |
|--------|---------------------------------------|
| 1 暗褐色土 | ローム粒子(～0.3m)・ロームブロック(～1.0m)やや多量、しりあり。 |
|--------|---------------------------------------|

第136図 第250・251号土坑実測図

第252号土坑 (SK-252) (第89図)

位置 B区B-4グリッドに位置する。重複関係 SK-153、P-253と重複する。新旧関係は不明である。形状・規模・主軸 SK-153との重複により、西半部を失うが、円形状か。規模は、遺構確認面の南北約0.7m・底面の南北約0.3m、深さ約0.26m、底面のレベル約151.9mである。覆土 確認し得なかった。

遺物出土状況 出土遺物は確認されなかった。

第259号土坑 (SK-259) (第137図)

位置 B区B-3グリッドに位置する。重複関係 重複する遺構はない。形状・規模・主軸 南北にやや長い楕円形状である。規模は、遺構確認面の東西約0.8m・南北約0.67m、底面の東西約0.55m・南北約0.65m、深さ約0.1m、底面のレベル約151.81mである。覆土 確認し得なかった。

遺物出土状況 出土遺物は確認されなかった。

第260号土坑 (SK-260) (第50図)

位置 B区B-3グリッドに位置する。重複関係 SK-295と重複する。新旧関係は不明である。形状・規模・主軸 東西に長い長方形形状である。規模は、遺構確認面の東西約0.26m・南北約0.75m、底面の東西約1.15m・南北約0.67m、深さ約0.8m、底面のレベル約151.9mである。覆土 確認し得なかった。

遺物出土状況 出土遺物は確認されなかった。

第270号土坑 (SK-270) (第107図)

位置 A区B-2グリッドに位置する。調査区東・南端部に位置し、調査区外に延びる。重複関係 重複する遺構はない。形状・規模・主軸 平面形は不明である。遺構確認面からの深さは約0.35m、底面のレベル約150.97mである。覆土 2層を確認した。

遺物出土状況 出土遺物は確認されなかった。

第271号土坑 (SK-271) (第107図)

位置 A区B-2グリッドに位置する。重複関係 SK-62と重複する。本遺構が古い、S-57plと重複するが、新旧関係は不明である。形状・規模・主軸 平面形は不詳であるが、南北に細長い形状とみられる。遺構確認面の東西約0.4m・底面の東西約0.25m、遺構確認面からの深さは約0.2m、底面のレベル約151.12mである。覆土 2層を確認した。

遺物出土状況 出土遺物は確認されなかった。

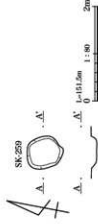
第272号土坑 (SK-272) (第104図)

位置 A区B-1グリッドに位置し、調査区西端部に位置し、調査区外に延びる。重複関係 SK-51と重複する。本遺構が古い。形状・規模・主軸 平面形は円形状とみられる。遺構確認面の東西約0.7m・底面の東西約0.57m、遺構確認面からの深さは約0.08m、底面のレベル約151.44mである。覆土 1層を確認した。

遺物出土状況 出土遺物は確認されなかった。

第273号土坑 (SK-273) (第157図)

位置 A区B-1グリッドに位置する。重複関係 SD-49と重複する。本遺構が古い。形状・規模・主軸 平面形は不整な円形状である。遺構確認面の東西約1.3m・南北約1.07m、底面の径約1.0m、遺構確認面からの深さ約0.2m、底面のレベル約151.4mである。覆土 2層を確認した。何れもローム・ムプロッ



第137図 第259号土坑実測図

クを主体とする。削平により、深さのあった遺構の底面のみが残ったと判断される。

遺物出土状況 出土遺物は確認されなかった。

第274号土坑 (SK-274) (第46図)

位置 A区B-1グリッドに位置する。**重複関係** SK-50・297と重複する。遺構の古い順番にSK-50→本遺構→SK-297である。**形状・規模・主軸** 遺構の重複により判断としないが、円形状か。遺構確認面の南北約0.43m、底面の南北径約0.35m、遺構確認面からの深さ約0.36m、底面のレベル約151.25mである。**覆土** 5層を確認した。

遺物出土状況 出土遺物は確認されなかった。

第275号土坑 (SK-275) (第106図)

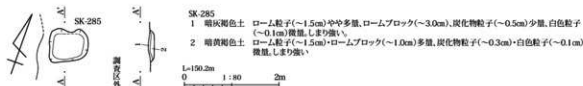
位置 A区A-1グリッドに位置する。調査区北端部に位置し、調査区外に延びる。**重複関係** SK-61と重複する本遺構が新しい。**形状・規模・主軸** 調査区外に延びるため判断としない。遺構確認面の東西0.5m前後・底面東西0.4m前後、遺構確認面からの深さ約0.13m、底面のレベル約151.47mである。底面は凹凸が顕著である。**覆土** 2層を確認した。ロームブロックを多量に含む。

遺物出土状況 出土遺物は確認されなかった。

第285号土坑 (SK-285) (第138図)

位置 C区D-10グリッドに位置する。**重複関係** SZ-30の底面に確認した。本遺構が古い可能性が高い。**形状・規模・主軸** 不整な隅丸形状である。遺構確認面の規模は東西約0.8m・南北約0.7m、底面の規模は東西約0.82m・南北約0.74mである。現状での深さ約0.1mを確認した。底面は小礫層で、底面レベルは約149.92mである。**覆土** 2層を確認した。

遺物出土状況 出土遺物は確認されなかった。



第138図 第285号土坑実測図

第287号土坑 (SK-287) (第139・140図)

位置 B区D-6グリッドに位置する。遺構西側は調査区外にある。全体図は調査区内を完掘した状況を示したもので、遺構の段部分以下に相当する。**重複関係** 後出するSD-37によって南東壁から南壁にかけての部分を見失う。SK-156と重複するが本遺構が新しい。**形状・規模・主軸** 長方形である。SD-37との重複部である南東壁から南壁にかけてはセクションの観察から推定し、図中に破線で示した。断面は、南壁は直立気味に立ち上がり、北壁は遺構中位で段を持つ。長さは、確認面の東西2.1m以上・南北約1.35m、段部分の東西2.0m以上・南北約1.0m、底面の東西1.9m以上・南北約0.8mである。現状での深さ0.5～0.7mを確認した。レベルは、段部分150.3m前後、底面149.95m前後である。壁面から底面はローム層を掘込む。遺構中位の150.25m前後以下のロームには黄褐色土の砂質の強いロームが混入する。**覆土**

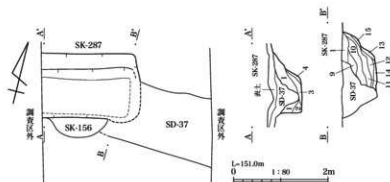
11層を確認した。分層は明瞭であるが、SP-Aにはロームブロックの堆積が少なく、SP-Bにはロームブロックの堆積が多いなど、特徴は差異があり、土層注記は各セクションごとに表記した。レンズ状の堆積と判断される。

遺物出土状況 覆土中から13点が出土する。

出土遺物 1は波頂部の渦巻きから連続して沈線が巡る。2は波状口縁下から地縄文を施す。口縁部下と体部は施文方向を違える。加曾利EIV式か。3は地条線に沈線でモチーフを描く。後期前葉か。4は内面文様を施す。堀之内2式。5・7は地条線に沈線で文様を描く。器壁は厚い。6・8は胎土の特徴が似る。同一個体か。8・9・12は3条一組の懸垂文が垂下する。別個体とみられる。9は不明瞭ではあるが磨消を伴う。10は帯状区画内に短沈線を充填する。称名寺式か。11は紐線を配する口縁部か。内外面にオコゲが付着する。堀之内2式。

この他、図示し得なかったが帯状区画を配するとみられる口縁部小片1片出土する。

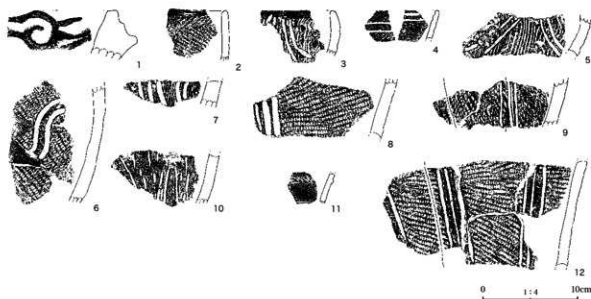
本遺構の時期は、堀之内2式期か。



SK-287

- | | | |
|----|------|--|
| 1 | 暗褐色土 | ローム粒子(～0.3cm)・暗茶褐色のロームブロック(～5.0cm)含む、ロームブロック(～0.8cm)少量、しまり強い。 |
| 2 | 暗褐色土 | ローム粒子(～0.1cm)・ロームブロック(～1.0cm)少量、炭化物粒子(～0.1cm)若干量、しまりあり。 |
| 3 | 暗褐色土 | ローム粒子(～0.1cm)含む、ロームブロック(～1.0cm)少量、炭化物粒子(～0.2cm)若干量、しまり強い。 |
| 4 | 暗褐色土 | ローム粒子(～0.3cm)・ロームブロック(～1.0cm)含む、炭化物粒子(～0.2cm)少量、しまりあり。 |
| 5 | 暗褐色土 | ローム粒子(～0.1cm)やや多量、ロームブロック(～1.0cm)含む、炭化物粒子(～0.2cm)・白色粒子若干量、しまりあり。 |
| 6 | 暗褐色土 | ローム粒子(～0.2cm)・ロームブロック(～1.0cm)多量、白色粒子若干量、しまりあり。 |
| 7 | 暗褐色土 | ローム粒子(0.1cm)・ロームブロック(～1.5cm)含む、炭化物粒子(0.1cm)少量、しまりやや強い。 |
| 8 | 暗褐色土 | ローム粒子(～0.2cm)やや多量、ロームブロック(～1.0cm)含む、白色粒子少量、しまりあり。 |
| 9 | 暗褐色土 | ローム粒子(～0.1cm)・ロームブロック(～0.3cm)含む、白色粒子若干量、しまりあり。 |
| 10 | 暗褐色土 | ローム粒子(～0.2cm)含む、ロームブロック(～1.0cm)含む、白色粒子少量、しまりあり。 |
| 11 | 暗褐色土 | ローム粒子(～0.1cm)・ロームブロック(～1.2cm)含む、しまりあり。 |

第139図 第287号土坑実測図



第140図 第287号土坑出土遺物実測図

第288号土坑 (SK-288) (第134図)

位置 C区C-5グリッドに位置する。調査区東端部にあり、調査区外に延びる。**重複関係** SK-237と重複する。本遺構が新しい。**形状・規模・主軸** SK-237との重複により形状は不明である。断面形は円筒状か。ピットの可能性もある。遺構確認面の規模は南北約0.3m、底面の規模は南北約0.2mである。遺構確認面からの深さ約0.28m、底面レベルは約149.48m前後である。壁～底面はローム層を掘り込む。

覆土 2層を確認した。2層の堆積が厚い。

遺物出土状況 出土遺物は確認されなかった。

第290号土坑 (SK-290) (第113図)

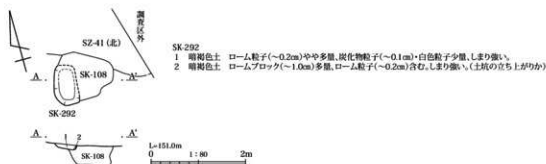
位置 B区C-4グリッドに位置する。調査区東端部に位置し、調査区外に延びる。**重複関係** 南側に重複するSK-112より古い。西側に重複するSK-238との新旧関係は不明である。**形状・規模・主軸** 平面形はSK-112との重複により判然としない。底面の形状から方形状である可能性が考えられる。確認した規模は、東西は遺構確認面0.8m以上・底面0.5m以上、南北は遺構確認面0.7m以上・底面0.4m以上である。遺構確認面からの深さは0.5m前後である。底面は大きな凹凸がみられる。底面レベルは150.3～150.4mである。壁・底面はローム層を掘り込む。**覆土** 3層を確認した。水平な堆積状況である。

遺物出土状況 出土遺物は確認されなかった。

第292号土坑 (SK-292) (第141図)

位置 B区C-4グリッドに位置する。**重複関係** SK-108と重複し、本遺構が新しい。縄文時代ではない可能性もあるか。**形状・規模・主軸** SK-108との重複により判然としないが、南北の長い隅丸形状か。断面形は緩やかに外傾しつつ立ち上がる。規模は推定となるが、遺構確認面の東西約(0.5)m・南北約(0.32)m、底面の東西約(0.85)m・南北約(0.65)mである。遺構確認面からの深さは約0.1mである。底面は凹凸がみられる、底面のレベルは150.72～150.78mである。壁・底面はローム層を掘り込む。**覆土** 2層を確認した。2層はロームを多量に含む。あるいは、重複するSK-108の壁に関連する土層か。

遺物出土状況 出土遺物は確認されなかった。



第141図 第292号土坑実測図

第295号土坑 (SK-295) (第50図)

位置 B区B-3グリッドに位置する。調査区東端部にあり、調査区外に延びる。**重複関係** SK-55・260と重複する。新旧関係は不明である。**形状・規模・主軸** 調査区外に延びるため不詳であるが、円筒状か。規模は、遺構確認面の南北約1.0m・底面の南北約0.87m、遺構確認面からの深さ約0.33mである。底面のレベルは約150.03mである。壁・底面はローム層を掘り込む。**覆土** 1層を確認した。

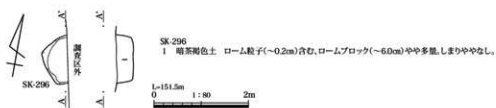
遺物出土状況 人頭大の礫を調査区壁面に確認した。殆どの部分が調査区外にあり、取り上げることは出

来なかった。S-180同様、が跡の可能性も考え得るか。

第296号土坑 (SK-296) (第142図)

位置 B区B-3グリッドに位置する。調査区東端部にあり、調査区外に延びる。**重複関係** 重複する遺構はない。**形状・規模・軸** 調査区外に延びるため不詳であるが、円形状か。規模は、遺構確認面の南北約1.02m・底面の南北約0.64m、遺構確認面からの深さ約0.38mである。底面のレベルは約150.84mである。壁・底面はローム層を掘り込む。**覆土** 1層を確認した。形状の大きなロームブロックを含み、根の進入が顕著である。攪乱である可能性は否めない。

遺物出土状況 出土遺物は確認されなかった。



第142図 第296号土坑実測図

第297号土坑 (SK-297) (第46図)

位置 A区A・B-1グリッドに位置する。**重複関係** SK-50・274と重複する。新旧関係は古い順番に、SK-50→SK-274→本遺構である。**形状・規模・軸** SK-50の覆土除去の過程で確認したものであり、平面形は不詳である。図中の破線は第二原図作成の過程で遺構確認状況写真から推定したものである。規模は、遺構確認面の南北約0.87m・底面の南北0.8m前後である。遺構確認面からの深さは0.4m前後、底面レベルは151.2m前後である。**覆土** 8層を確認した。

遺物出土状況 SK-50覆土除去の過程で確認したものがあり、出土遺物はSK-50として取り上げた。

第5節 ビット

1. 調査の概要

本調査区からは73基のビットを確認した。上面の削平によって、本来の規模や深さは失われているものと判断され、総じて詳細は判然としなが、中には、縄文時代の遺構に関連すると判断されるビットが複数基あるものと考えられる。SI-180に関連すると考えられるP-175～177・239・240・244・245、SI-154に関連すると考えられるP-232、SI-281に関連すると考えられるP-24・197～208・279であり、これらのビットについては各住居跡の事実報告において記載する。

また、P-94・97・190～193については、SI-85に関連すると考えられるが判然とせず、本節に記載する。同様に、P-14はSK-19・23・101・102と半円状に並び、P-209～212・282～284はSX-136西半部の周縁に沿うように位置するが関連は不明である。さらに、P78・79・277・SK-140についてもが跡等の可能性が考慮されたが明確に判じ得なかった。

各ビットの特徴としては、P-14・29の覆土が似ること、P-164に掘り方埋土・抜き穴とみられる覆土が確認されること、P-248に柱痕の可能性が考えられことなどがあげられる。また、P-219は基本土層④下のローム漸移層を掘り込んでおり、古墳時代以前の遺構とみられる。縄文時代に遡る可能性はあるのか。「第4節土坑」に記載したSK-288がビットである可能性、P-171・172が土坑である可能性、P-249が攪乱穴であ

る可能性も残る。

出土遺物は縄文土器片、石器、礫である。土器片の時期幅が大きいことや出土状況から遺構の時期を示すものであるか判然としない。

2. ビット

第14号ビット (P-14) (第143図)

位置 C区D-10グリッドに位置する。SZ-30・S-21間にある。**形状・規模** やや東西に長い円形で東西約0.6m・南北約0.4m、確認面からの深さ約0.14mである。底面レベルは約150.34mである。**覆土** 2層を確認した。2層はやや砂質を帯びる。P-29の覆土と似る。

遺物出土状況 覆土中から6点が出土する。

出土遺物 何れも小片であり図示し得なかったが以下のとおりである。

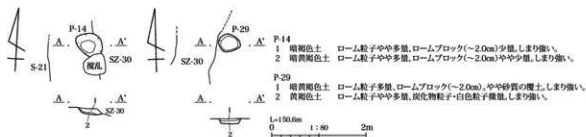
隆帯とこれに沿う沈線のみ見える小片4片。地縄文に平行する沈線を施す小片1片、堀之内式か。磨滅片1片。本遺構の時期は判然としないが、後期前葉以降か。

第29号ビット (P-29) (第143図)

位置 C区D-10グリッドに位置する。SK-16・17、SZ-30と近接する。**形状・規模** やや東西に長い円形で東西約0.5m・南北約0.4m、確認面からの深さ約0.1mである。底面レベルは約150.17mである。

覆土 2層を確認した。1層はやや砂質を帯びる。P-14の覆土と似る。

遺物出土状況 出土遺物は確認されなかった。



第143図 第14・29号ビット実測図

第78号ビット (P-78) (第14図 表82)

位置 C区E-12グリッドに位置する。SI-85北側にある。**形状・規模** 東西に長い円形で、東西約0.3m・南北約0.2mである。**覆土** 確認し得なかった。

遺物出土状況 確認面付近から礫2点が出土する。また、周辺から土器片が出土する。本遺構に伴出するか判然としない。この他、覆土中から土器片14片が出土する。

出土遺物 礫・石器は表82に記載する。

この他、図示し得なかった土器片は以下のとおりである。

地縄文にナデを伴わない微隆起線を配する小片1片、称名寺式に平行する加曾利E式か。帯状区画とみられる小片1片。円形の貼付文の端部とみられる地縄文小片1片、器色は白色が強い。後期前葉か。無文に沈線の一部のみ見える小片1片。地縄文小片9片。磨滅片1片。

本遺構の時期は後期前葉以降か。

第79号ビット (P-79) (第14・144図 表83)

位置 C区E-12グリッドに位置する。SI-85北側にある。**形状・規模** 東西に長い円形で、東西約0.4m・南北約0.3mである。**覆土** 確認し得なかった。

遺物出土状況 確認面付近から35点が出土する。本遺構に伴出するか判然としない。

出土遺物 石器・礫は表83に記載する。

この他、図示し得なかったが以下の土器片が出土する。

隆帯と沈線で作出する口縁部文様帯小片2片、加曾利E式後半。無文の口縁部小片1片。口縁端部の形状から後期初頭か。地縄文小片12片。無文の小片1片。底部片1片

本遺構の時期は判然としないが、後期初頭以降か。

第89号ビット (P-89) (第81図 表84)

位置 C区D-12グリッドに位置する。**形状・規模** 円形で、径約0.3m・底径約0.1m、確認面からの深さ約0.18mである。底面レベルは150.57m前後である。**覆土** 2層を確認した。2層は炭化物を含む。

遺物出土状況 確認面付近から13点が出土する。

出土遺物 図示し得なかったが出土した土器片は以下のとおりである。礫は表84に記載する。

沈線間に磨消を伴う小片1片、加曾利E式後半～後期前葉。ナデを伴わない微隆起線で縄文部と無文部を区画する小片1片、称名寺式に平行する加曾利E式。集合沈線でモチーフ描く小片2片、堀之内式。地条線1片。地縄文片4片。無文の小片1片。磨滅片2片。

本遺構の時期は堀之内式以降か。

第94号ビット (P-94) (第14図 表85)

位置 C区E-13グリッドに位置する。SI-85床面にあるがSI-85柱穴であるか判然としない。**形状・規模** 平面形は八の字形に円形のビットが並ぶ。別遺構である可能性もある。確認面 (SI-85床面) から底面までの深さ・底面レベルは南側で約0.4m・150.2m前後、北側で約0.1m・150.5m前後である。**覆土** 南側で3層、北側で1層を確認した。

遺物出土状況 北側中央部の確認面 (SI-85床面) でSI-85遺物16を確認した。表85に記載する。

第97号ビット (P-97) (第14図)

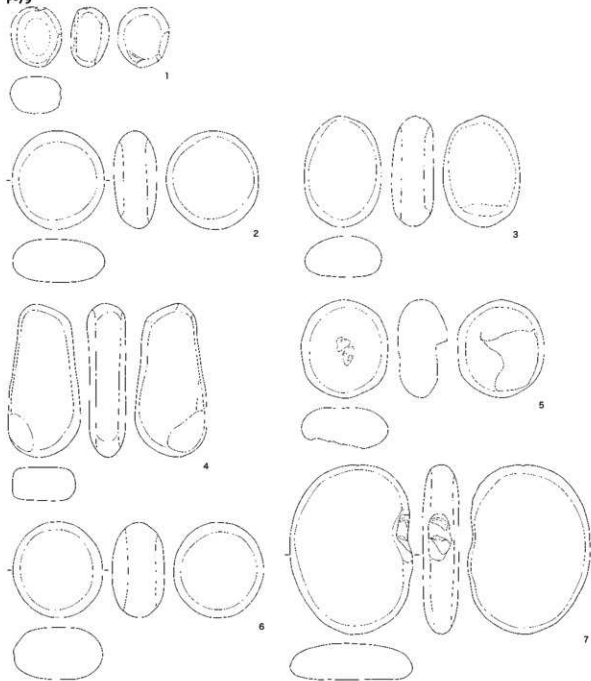
位置 C区E-13グリッドに位置する。SI-85床面にあるがSI-85に後出する可能性が高い。**形状・規模** テラス状の掘り込みの東側に円形のビットを穿つ。別遺構である可能性もある。確認面 (SI-85床面) から底面までの深さ・底面レベルはテラス側で約0.3m・150.3m前後、ビット側で約0.4m・150.2m前後である。**覆土** ビット側で1～4層、テラス側で5～8層を確認した。テラス側の覆土に構築土が想起される特徴はない。SI-85:SP-Aの堆積からは本遺構が後出する可能性が考えられる。

遺物出土状況 SI-85覆土中から出土した本遺構周辺の遺物 (第15図8～16・18) を本遺構関連の遺物と仮定した場合、埋没の過程で混入したものと判断される。SI-85に記載する。

第145号ビット (P-145) (第82図)

位置 C区E-12グリッドに位置する。**重複関係** SZ-26内部に位置する。SK-124と重複するが新旧関係は不明である。**形状・規模** 長円形で、東西0.8m・南北0.6m前後、遺構確認面からの深さ約0.3mである。底面レベルは150.3m前後である。底面中央部に長円形のビットが穿たれる。ビットの径は0.2m前後、深さ約0.15mである。**覆土** 遺構半部の堆積を確認した。6層に分層が可能である。1・2層が垂直に分層でき、2・4～6層がロームブロックを多量に含むことから、4～6層を掘方埋土とする柱穴が想

P-79



P-164



P-170



第144図 第79・164・170号ピット出土遺物実測図

定できる。2層は柱痕部の埋土、或いは、柱痕か。

遺物出土状況 出土遺物は確認されなかった。

第164号ビット (P-164) (第24・113・144図 表86)

位置 B区C-5グリッドに位置する。**重複関係** 西側に重複するSK-163より新しい。北側に重複するSK-112、南側に重複するP-291との新旧関係は不明である。**形状・規模** 上面の削平、遺構の重複により、平面形は不明である。また、重複により覆土8・9層に相当する部分の多くは失われている。SK-163-P-291間に僅かに残る。中ぼとして残る、レベル150.6m付近以下の平面形は東西に長い楕円形状である。径は東西約0.5m・南北約0.3m、底面の径は東西約0.4m・南北約0.22m、遺構確認面からの深さは約0.5mである。底面レベル約150.26mである。P164・233～236・289・291・293はS-180の住居範囲が径7.0m前後であった場合、柱穴となる可能性がある。底面レベルが150.5mより深いビットの配置は第24図のとおりである。**覆土** 9層を確認した。1～7層は8・9層以前の堆積と判断され、掘り直し等が行われた可能性が考えられる。1～3層は柱穴、4～7層は掘方の埋土か。中層以下の5～7層はロームブロックの堆積が多い。2層は抜き穴の可能性が考えられる。

遺物出土状況 覆土中から5点が出土する。1・2・3は9層下位、4は15層上面から出土する。

出土遺物 1は地縄文に沈線が見える小片、2は縦位の地縄文を施す小片、図示し得なかったが、4は破砕した小土器片である。石器・礫は表86に記載する。

本遺構の時期は判然としませんが、中期以降か。

第169号ビット (P-169) (第108図)

位置 B区C-7グリッドに位置する。**重複関係** SK-173と重複する。新旧関係は不明である。ただし、SK-173には地山である可能性が残る。**形状・規模** 南北長い楕円形状である。遺構確認面の東西約0.3m・南北約0.55m、底面の東西約0.16m・南北約0.46m、遺構確認面からの深さ約0.55mである。底面のレベルは149.78mである。砂質のロームブロックを含む漸移層を掘り込むか。**覆土** 2層を確認した。2層以下は土層を確認し得なかった。砂質のローム層を掘り込むとみられるが、覆土内への堆積は観察ない。

遺物出土状況 出土遺物は確認されなかった。

第170号ビット (P-170) (第108図 表87)

位置 B区C-7グリッドに位置する。**重複関係** SK-173と重複する。新旧関係は不明である。ただし、SK-173には地山である可能性が残る。**形状・規模** 南北長い楕円形状である。遺構確認面の東西約0.7m・南北約0.6m、底面の径約0.28m、遺構確認面からの深さ約0.48mである。底面のレベルは149.82mである。砂質のロームブロックを含む漸移層を掘り込むか。**覆土** 3層を確認した。図中の破線以下は土層を確認し得なかった。砂質のローム層を掘り込むとみられるが、覆土内への堆積は観察されない。

遺物出土状況 覆土中から13点が出土する。1は確認面付近から出土する。本遺構に伴うか判然としない。

出土遺物 1は底周部の破片。器壁は厚いが焼成は良好で比較的焼きしめる。櫛歯状工具で条線を施す。中期末葉～後期初頭か。

この他、図示し得なかった土器片は以下のとおりである。

沈線間に磨消を施す小片1片、加曾利E式後半～後期前葉。地縄文片3片。無文の小片1片。

礫は表87に記載する。

本遺構の時期は後期前葉か。

第171号ピット (P-171) (第108図)

位置 B区C-7・8グリッドに位置する。調査区西端部に位置し、調査区外に延びる。**重複関係** P-172と重複するが新旧関係は不明である。SK-173と重複する。本遺構が新しい。ただし、SK-173には地山である可能性が残る。**形状・規模** 平面形は不詳である。土坑となる可能性が考えられる。遺構確認面の南北約0.5m、底面の南北約0.38m、遺構確認面からの深さ約0.6mである。底面のレベルは149.7mである。砂質のロームブロックを含む漸移層・砂質のローム層を掘り込む。 **覆土** 6層を確認した。1・2層を柱痕、3～6層を掘方埋土とみることも可能であろうか。しかし、5・6層には砂質のロームブロックが堆積し、地山である可能性が残る。

遺物出土状況 出土遺物は確認されなかった。

第172号ピット (P-172) (第108・144図 表88)

位置 B区C-8グリッドに位置する。調査区西端部に位置し、調査区外に延びる。**重複関係** SK-171・173と重複するが新旧関係は不明である。SK-173には地山である可能性が残る。**形状・規模** 平面形は不詳である。土坑となる可能性が考えられる。遺構確認面の南北約0.4m、底面の南北約0.25m、遺構確認面からの深さ約0.5mである。底面のレベルは149.82mである。砂質のロームブロックを含む漸移層・砂質のローム層を掘り込む。 **覆土** 確認し得なかった。

遺物出土状況 確認面付近から礫が出土する。表88に記載する。

第188号ピット (P-188) (第131図)

位置 C区E-12グリッドに位置する。**重複関係** SZ-26内部に位置する。掘り込みを接する重複はない。**形状・規模** 径0.2m前後不整な小穴が東西に連続する。現状で7穴、東西約1.9mを確認した。 **覆土** 確認し得なかった。

遺物出土状況 出土遺物は確認されなかった。

第190号ピット (P-190) (第14図)

位置 C区E-13グリッドに位置する。SI-85床面にあるがSI-85柱穴であるか判然としない。**形状・規模** 円形で、径約0.2m、確認面 (SI-85床面) からの深さ約0.12mである。底面レベルは150.68mである。 **覆土** 2層を確認した。ロームを主体とする層で、柱穴の構築土の可能性が残る。

遺物出土状況 出土遺物は確認されなかった。

第191号ピット (P-191) (第14図)

位置 C区E-13グリッドに位置する。SI-85床面にあるがSI-85柱穴であるか判然としない。**形状・規模** 円形で、径約0.3m、確認面 (SI-85床面) からの深さ約0.15mである。底面レベルは150.45m前後である。 **覆土** 2層を確認した。2層はローム粒子を主体とする層で、柱穴の構築土である可能性が残る。

遺物出土状況 周辺からの遺物の出土はあるが、本遺構との因果関係は明らかではない。

第192号ピット (P-192) (第14図)

位置 C区E-13グリッドに位置する。SI-85床面にあるがSI-85柱穴であるか判然としない。**重複関係** 北側の上ぼがP-193と接するが新旧関係は不明である。**形状・規模** やや東西に長い円形で、東西約0.35m・南北約0.45mである。 **覆土** 確認し得なかった。

遺物出土状況 出土遺物は確認されなかった。

第193号ビット (P-193) (第14図)

位置 C区E-13グリッドに位置する。SI-85床面にあるがSI-85柱穴であるか判然としない。**重複関係** 南側の上ばがP-192と接するが新旧関係は不明である。**形状・規模** 円形で、径約0.45mである。

覆土 確認し得なかった。

遺物出土状況 掘り込み内からの遺物の出土はない。本遺構中心部のSI-85床面に第14図-2が出土する。本遺構に伴出するか判然としない。

第194号ビット (P-194) (第14図)

位置 C区E-13グリッドに位置する。SI-85床面にあるがSI-85柱穴であるか判然としない。**形状・規模** 不整な円形で、径約0.2mである。**覆土** 確認し得なかった。

出土遺物 出土遺物は確認されなかった。

第195号ビット (P-195) (第131図)

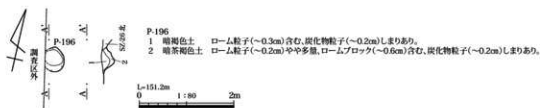
位置 C区E-12グリッドに位置する。**重複関係** SZ-26内部に位置する。西端部でSK-74と重複する。新旧関係は不詳である。**形状・規模** 径0.2m前後不整な小穴が東西に連続する。現状で7穴、東西約1.9mを確認した。**覆土** 確認し得なかった。

出土遺物 出土遺物は確認されなかった。

第196号ビット (P-196) (第145図)

位置 C区E-12グリッドに位置する。**形状・規模** 西端部が調査区外にあるが円形か。径約0.5m、確認面からの深さ約0.24mである。底面レベルは150.6m前後である。**覆土** 2層を確認した。

出土遺物 出土遺物は確認されなかった。



第145図 第196号ビット実測図

第209号ビット (P-209) (第183図)

位置 C区D-11グリッドに位置する。**重複関係** SX-136の周縁部に位置する。**形状・規模** 円形状で、径約0.22m、確認面からの深さ約0.33mである。底面レベルは約149.97mである。**覆土** 確認し得なかった。

遺物出土状況 出土遺物は確認されなかった。

第210号ビット (P-210) (第183図)

位置 C区D-11グリッドに位置する。**重複関係** SX-136の周縁部に位置する。**形状・規模** 円形状で、径約0.23m、確認面からの深さ約0.33mである。底面レベルは約149.97mである。**覆土** 確認し得なかった。

遺物出土状況 出土遺物は確認されなかった。

第211号ビット (P-211) (第183図)

位置 C区D-11グリッドに位置する。**重複関係** SX-136の周縁部に位置する。**形状・規模** 円形状で、径約0.22m、確認面からの深さ約0.25mである。底面レベルは約150.26mである。**覆土** 確認し得なかった。

遺物出土状況 出土遺物は確認されなかった。

第212号ピット (P-212) (第183図)

位置 C区D-11グリッドに位置する。**重複関係** SX-136の周縁部に位置する。**形状・規模** 南北に長い楕円形状で、東西約0.3m・南北約0.42m、確認面からの深さ約0.1mである。底面レベルは約150.26mである。**覆土** 確認し得なかった。

遺物出土状況 出土遺物は確認されなかった。

第215号ピット (P-215) (第146図)

位置 B区C・D・8グリッドに位置する。**形状・規模** 円形状で、径は東西約0.27m・南北約0.3m、確認面からの深さ0.3m前後である。底面レベルは149.97m前後である。**覆土** 確認し得なかった。

遺物出土状況 出土遺物は確認されなかった。

第219号ピット (P-219) (第146図)

位置 B区C-8グリッドに位置する。調査区西端部にあり、調査区外に延びる。**形状・規模** 円形状で、径は南北約0.49m、確認面からの深さ0.3m前後である。底面レベルは150.11m前後である。**覆土** 4層を確認した。何れも暗茶褐色土である。基本土層④下のローム漸移層を掘り込んでおり、古墳時代以前の遺構とみられる。

遺物出土状況 出土遺物は確認されなかった。

第220号ピット (P-220) (第146図)

位置 B区D-7グリッドに位置する。調査区東端部にあり、調査区外に延びる。**形状・規模** 円形状で、径は南北約0.46m、確認面からの深さ0.35m前後である。底面レベルは150.0m前後である。**覆土** 確認し得なかった。

遺物出土状況 出土遺物は確認されなかった。

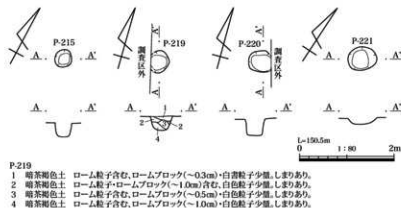
第221号ピット (P-221) (第146図)

位置 B区C-7グリッドに位置する。**形状・規模** 東西に長い楕円形状で、径は東西約0.61m・南北約0.5m、確認面からの深さ0.15m前後である。底面レベルは150.23m前後である。**覆土** 確認し得なかった。

遺物出土状況 出土遺物は確認されなかった。

第233号ピット (P-233) (第24図)

位置 B区C-5グリッドに位置する。**形状・規模** 円形で、径は遺構確認面約0.55m・底面約0.42m、遺構確認面からの深さ0.62m前後である。底面レベルは150.1m前後である。P164・233～236・



第146図 第215・219・220・221号ピット実測図

289・291・293はS-180の住居範囲が径7.0m前後であった場合、柱穴となる可能性がある。底面レベルが150.5mより深いビットの配置は第24図のとおりである。覆土 確認し得なかった。

遺物出土状況 出土遺物は確認されなかった。

第234号ビット (P-234) (第24図)

位置 B区C-5グリッドに位置する。形状・規模 円形で、南側の壁面は中段を持つ。径は、遺構確認面約0.55m・底面0.3～0.4m、遺構確認面からの深さ約0.6mである。底面レベルは150.15m前後である。P164・233～236・289・291・293はS-180の住居範囲が径7.0m前後であった場合、柱穴となる可能性が考えられる。底面レベルが150.5mより深いビットの配置は第24図のとおりである。覆土 確認し得なかった。

遺物出土状況 出土遺物は確認されなかった。

第235号ビット (P-235) (第24図)

位置 B区C-5グリッドに位置する。形状・規模 円形で、径は、遺構確認面の東西約0.35m・南北約0.4m、底面の0.3m前後、遺構確認面からの深さ0.22m前後である。底面レベルは約150.52mである。P164・233～236・289・291・293はS-180の住居範囲が径7.0m前後であった場合、柱穴となる可能性が考えられる。底面レベルが150.5mより深いビットの配置は第24図のとおりである。覆土 確認し得なかった。

遺物出土状況 出土遺物は確認されなかった。

第236号ビット (P-236) (第24・113図)

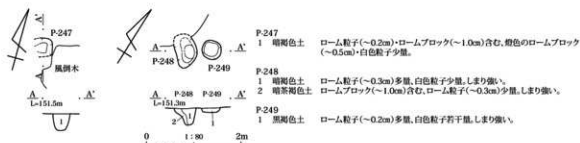
位置 C区C-5グリッドに位置する。重複関係 北側にP-291が重複するが新旧関係は不明である。

形状・規模 やや東西に長い楕円形状である。径は、遺構確認面の東西約0.38m・南北約0.23m、底面の東西約0.3m・南北約0.16m、確認面からの深さ0.43m前後である。底面レベルは150.27m前後である。P164・233～236・289・291・293はS-180の住居範囲が径7.0m前後であった場合、柱穴となる可能性が考えられる。底面レベルが150.5mより深いビットの配置は第24図のとおりである。覆土 確認し得なかった。

遺物出土状況 出土遺物は確認されなかった。

第247号ビット (P-247) (第147図)

位置 B区B-4グリッドに位置する。調査区西端部にあり、調査区外に延びる。重複関係 重複する遺構はない。形状・規模 円形状とみられる。径は、遺構確認面の東西約0.37m・底面約0.23m、遺構確認面からの深さ約0.37mである。底面のレベルは約150.84mである。南側の深さ0.7mほどの落ち込みは風倒木痕とみられ、或いは、本遺構は風倒木痕の一端である可能性は否めない。覆土 1層を確認した。



第147図 第247・248・249号ビット実測図

遺物出土状況 出土遺物は確認されなかった。

第248号ピット (P-248) (第148図)

位置 B区B-4グリッドに位置する。調査区西端部にあり、調査区外に延びる。**重複関係** 重複する遺構はない。**形状・規模** 南北に長い掘り込みに柱穴状のピットが穿たれる。遺構確認面の規模は東西約0.45m・南北約0.7m、ピット底面の径は0.25m前後である。遺構確認面からの深さは約0.37m、底面レベルは約150.75mである。**覆土** 2層を確認した。1層は柱痕、2層は構築土か。

遺物出土状況 出土遺物は確認されなかった。

第249号ピット (P-249) (第148図)

位置 B区B-4グリッドに位置する。**重複関係** 重複する遺構はない。**形状・規模** 円形状とみられる。径は、遺構確認面約0.4m・底面約0.3m、遺構確認面からの深さ約0.1mである。底面のレベルは約150.008mである。調査区内には現代のフェンスの土台である扁平なコンクリートを伴う浅い小穴が規則的の並ぶが、本遺構がこれにあたる可能性は否めない。**覆土** 1層を確認した。

遺物出土状況 出土遺物は確認されなかった。

第253号ピット (P-253) (第148図)

位置 B区B-3グリッドに位置する。**重複関係** SK-153、P-254と重複する。新旧関係は不明である。**形状・規模** 東西に長い掘り込みの東側に柱穴状のピットが穿たれる。SK-153との重複により南半部を失っている。遺構確認面の規模は東西約0.7m、ピット底面の径は東西約0.22m・南北約0.16mである。遺構確認面からの深さは、掘り込み部約0.3m・ピット約0.46m、底面レベルは約150.66mである。**覆土** 5層を確認した。5層はロームブロックを多量に含む。地山である可能性が残る。

遺物出土状況 出土遺物は確認されなかった。

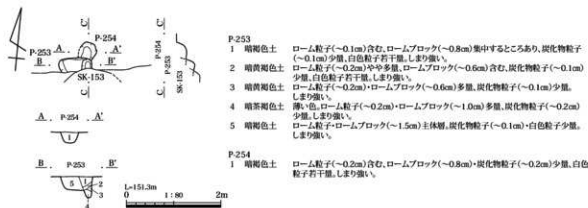
第254号ピット (P-254) (第148図)

位置 B区B-3グリッドに位置する。**重複関係** P-253と重複する。新旧関係は不明である。**形状・規模** P-253との重複により南半部を失っている。規模は、遺構確認面の東西約0.4m・南北0.3m以上、底面の東西約0.18m・南北0.25m以上である。遺構確認面からの深さは約0.22m、底面レベルは約150.54mである。**覆土** 1層を確認した。

遺物出土状況 出土遺物は確認されなかった。

第255号ピット (P-255) (第44図)

位置 B区B-3グリッドに位置する。**重複関係** SK-45、p P-256と重複する。新旧関係は不明である。



第148図 第253・254号ピット実測図

形状・規模 SK-45 との重複により東側の一部を失っているが、不整な円形状か。底面の北西よりにビットを穿つ。規模は、遺構確認面の南北約0.58m、底面の南北約0.45mである。ビットの底面は、東西約0.13m・南北約0.17mである。遺構確認面からの深さは約0.45m、底面レベルは約150.91mである。底面の深さは、底面から約0.17m、遺構確認面から約0.55m、底面レベル約150.74mである。 **覆土** 確認し得なかった。

遺物出土状況 出土遺物は確認されなかった。

第256号ビット (P-256) (第44図)

位置 B区B-3グリッドに位置する。SI-85床面にあるがSI-85柱穴であるか判然としない。 **形状・規模** 東西に長い円形で、東西約0.2m・南北約0.12m、確認面(SI-85床面)からの深さ約0.03mである。底面レベルは150.6m前後である。 **覆土** 確認し得なかった。

遺物出土状況 出土遺物は確認されなかった。

第258号ビット (P-258) (第149図)

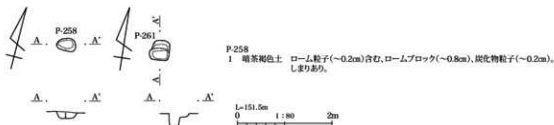
位置 B区B-3グリッドに位置する。 **重複関係** 重複する遺構はない。 **形状・規模** 東西に長い楕円形状である。規模は、遺構確認面の東西約0.38m・南北約0.37m、底面の東西約0.32m・南北約0.17m、遺構確認面からの深さは約0.15m、底面レベルは約151.15mである。 **覆土** 1層を確認した。

遺物出土状況 出土遺物は確認されなかった。

第261号ビット (P-261) (第149図)

位置 B区B-3グリッドに位置する。 **重複関係** 重複する遺構はない。 **形状・規模** 東西に長い楕円形状である。規模は、遺構確認面の東西約0.38m・南北約0.37m、底面の東西約0.32m・南北約0.17m、遺構確認面からの深さは約0.15m、底面レベルは約151.15mである。フェンス上台の掘乱である可能性が残る。 **覆土** 確認し得なかった。

遺物出土状況 出土遺物は確認されなかった。



第149図 第258・261号ビット実測図

第276号ビット (P-276) (第14図)

位置 C区E-13グリッドに位置する。SI-85床面にあるがSI-85柱穴であるか判然としない。 **形状・規模** 東西に長い円形で、東西約0.2m・南北約0.12m、確認面(SI-85床面)からの深さ約0.03mである。底面レベルは150.6m前後である。 **覆土** 確認し得なかった。

遺物出土状況 出土遺物は確認されなかった。

第277号ビット (P-277) (第14図)

位置 C区E-12グリッドに位置する。SI-85北側にある。 **形状・規模** 南北に長い円形で、東西約0.2m・南北約0.3m、確認面からの深さ約0.2mである。底面レベルは150.58m前後である。 **覆土** 確認し得なかった。

遺物出土状況 覆土上層から第14図・2・3が出土する。本遺構に伴出するか判然としない。何れも礫

である。第278号ピット(P-278)(第12図)

位置 B区C-8グリッドに位置する。調査区西端部にあり、調査区外に延びる。**形状・規模** 円形状で、南北約0.24m、確認面からの深さ約0.22mである。底面レベルは150.01m前後である。**覆土** 確認し得なかった。

遺物出土状況 出土遺物は確認されなかった。

第282号ピット(P-282)(第183図)

位置 C区D-11グリッドに位置する。**重複関係** SX-136の周縁部に位置する。**形状・規模** 円形状で、径0.18m前後、確認面からの深さ約0.23mである。底面レベルは約150.32mである。**覆土** 確認し得なかった。

遺物出土状況 出土遺物は確認されなかった。

第283号ピット(P-283)(第183図)

位置 C区D-11グリッドに位置する。**重複関係** SX-136の周縁部に位置する。**形状・規模** 東西に長い楕円形状で、東西約0.4m・南北約0.25m、確認面からの深さ約0.23mである。底面レベルは約150.32mである。**覆土** 確認し得なかった。

遺物出土状況 出土遺物は確認されなかった。

第284号ピット(P-284)(第183図)

位置 C区D-11グリッドに位置する。**重複関係** SX-136の周縁部に位置する。**形状・規模** 円形状で、径0.22m前後、確認面からの深さ約0.23mである。底面レベルは約150.32mである。**覆土** 確認し得なかった。

遺物出土状況 出土遺物は確認されなかった。

第289号ピット(P-289)(第24・113図)

位置 B区C-5グリッドに位置する。**重複関係** SK-112底面に穿たれるが帰属の如何は不明である。このため、SK-112と別に遺構番号を付した。S-180との関連も考慮されるが第113図に記載した。**形状・規模** 南北に長い長円形状で、東西約0.12m・南北約0.29m、確認面からの深さ約0.06mである。底面レベルは150.22m前後である。P164・233～236・289・291・293はS-180の住居範囲が径7.0m前後であった場合、柱穴となる可能性がある。底面レベルが150.5mより深いピットの配置は第24図のとおりである。**覆土** 確認し得なかった。

遺物出土状況 出土遺物は確認されなかった。

第291号ピット(P-291)(第24・113図)

位置 C区C-5グリッドに位置する。**重複関係** 南側にP-236、北側にP-164が重複するが新旧関係は不明である。**形状・規模** 円形状である。径は、遺構確認面約0.5m、中ばとなる150.36m付近約0.1m・底面0.15m前後、遺構確認面からの深さ約0.4mである。底面のレベルは150.3mである。P164・233～236・289・291・293はS-180の住居範囲が径7.0m前後であった場合、柱穴となる可能性がある。底面レベルが150.5mより深いピットの配置は第24図のとおりである。**覆土** 確認し得なかった。

遺物出土状況 出土遺物は確認されなかった。

第293号ピット(P-293)(第24図)

位置 B区C-5グリッドに位置する。**形状・規模** やや南北に長い円形で、径は遺構確認面の東西約0.2m・南北約0.3m、底面約0.15m前後、遺構確認面からの深さ0.22m前後である。底面レベルは約

150.54 mである。P164・233～236・289・291・293はS-180の住居範囲が径7.0 m前後であった場合、柱穴となる可能性がある。底面レベルが150.5 mより深いピットの配置は第24図のとおりである。覆土確認し得なかった。

遺物出土状況 出土遺物は確認されなかった。

第6節 埋設土器

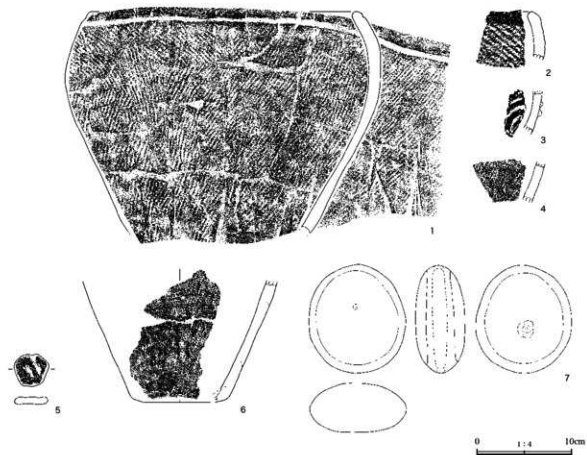
1. 調査の概要

本調査区から2基を確認した。S-163は土器が逆位で出土し、埋設土器として調査を行ったが、掘り込みを有し、石器・礫などの出土状況は土坑と同様である。土坑である可能性が残る。S-179は遺構確認に確認した。掘方はほぼなく、横位で出土するが削平により出土状態の上部を失っている。

2. 埋設土器

第163号埋設土器 (S-163) (第113図 表89 図版一一・二二)

位置 B区C・5グリッドに位置する。**重複関係** SK-112底面に確認した。SK-112に付属するか否か確認し得なかった。**形状・規模** 南北に長い長円形状で、東西約0.15 m・南北約0.29 m、SK-112底面からの深さ約0.06 mである。底面は凹凸がみられる。レベルは約150.22 mである。**付属施設** 底面にp1が穿たれる。覆土の堆積状況から土器埋設前に埋め戻されたものと判断され、本遺構に伴う可能性が高いが



第150図 第163号埋設土器出土遺物実測図

用途等は不明である。覆土 5層を確認した。何れも埋設土器内の堆積土である。

埋設土器出土状況 不整形の掘り込みの北東壁寄りに、1・1～12が纏まって出土する。1・1～1・6・7は逆位で、1・7・1・8は4下部、11は5下部、1・9～1・12・4・12・13は1～6下部から出土する。1・1～14のうち1・1～1・12が接合した。4・13・14は同一個体とみられる。8・9・10・11・12は礫である。1は体部下半及び土器の1/10ほどを失っているが、遺構上面の削平、SK-112との重複によるものと判断される。本来は、土器一個体分の掘り込みで逆位で設置されたものと推察される。

遺物出土状況 埋設土器以外に覆土中から35点が出土する。埋設土器と8・9・10・11・12の礫の関連は不詳である。

出土遺物 1は埋設土器か。口縁部下の横巡する沈線下に地縄文を施す。2は口縁部下に地縄文を施す。3は波状口縁の頂部か。隆帯で円形状の文様を作出か。口縁部に沿って刺突列が施される。4は横位に地縄文がほどこされる体部小片。磨滅が著しい。6は体下半の破片。内面は汚れ、外面はススが付着する。5は土製円盤か。周縁部は図上右側面は研磨が施されるか。磨滅し不詳であるが沈線状の凹みが観察される。タテ3.4cm・ヨコ3.5cm・厚0.9cm・重9.23g。後期初頭か。

この他、図示し得なかった土器片は以下のとおりである。

帯状区画とみられる小片1片。地縄文に沈線の一部がみえる小片1片。地条線小片2片。地縄文小片9片。無文の小片8片。磨滅片1片である。

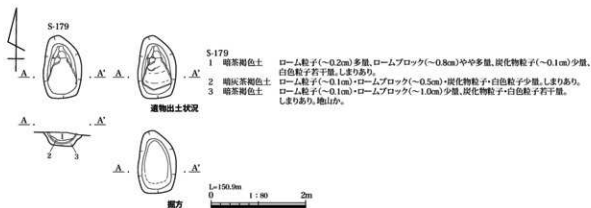
石器・礫は表89に記載する。

本遺構の時期は判然としないが、中期末葉～後期初頭か。

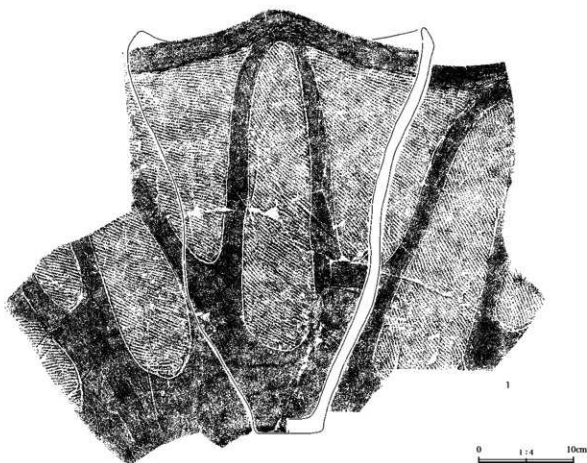
第179号埋設土器 (S-179) (第151・152図 図版一・一九)

位置 C区E-12グリッドに位置する。 **重複関係** 重複する遺構はない。 **遺構確認状況** 表土下約0.2mの遺構確認面に土器の破砕部の断面がほぼ水平に露出する。破砕部の土器断面はクリアではなく、調査以前の削平の際の破砕とみられる。

埋設土器出土状況 口縁部を南、底部を北に向けた横位で出土する。主軸はほぼ磁北に沿う。掘方はほぼ持たず、掘方底面は土器の形状に近い。上面の口縁部から体部中位は削平により失われている。 **掘方の形状・規模** 南北に長い長円形状とみられる。埋設土器口縁部側の掘方は、土器取り上げの際、失っており、推定ラインを図示した。開口部の東西約0.4m・南北約0.67m、遺構確認面からの深さ約0.15mである。壁面は埋設土器の中央ライン付近で屈曲する。底面は土器の形状に近い。底面のレベルは150.67mである。 **覆土** 3層を確認した。1・2層は埋設土器内の堆積土であるが、削平により、土器の内容物かは判然としない。3層は掘方埋土とみられるが、周囲の地山土と特徴が似ており、



第151図 第179号埋設土器実測図



第152図 第179号埋設土器出土遺物実測図

地山である可能性が残る。

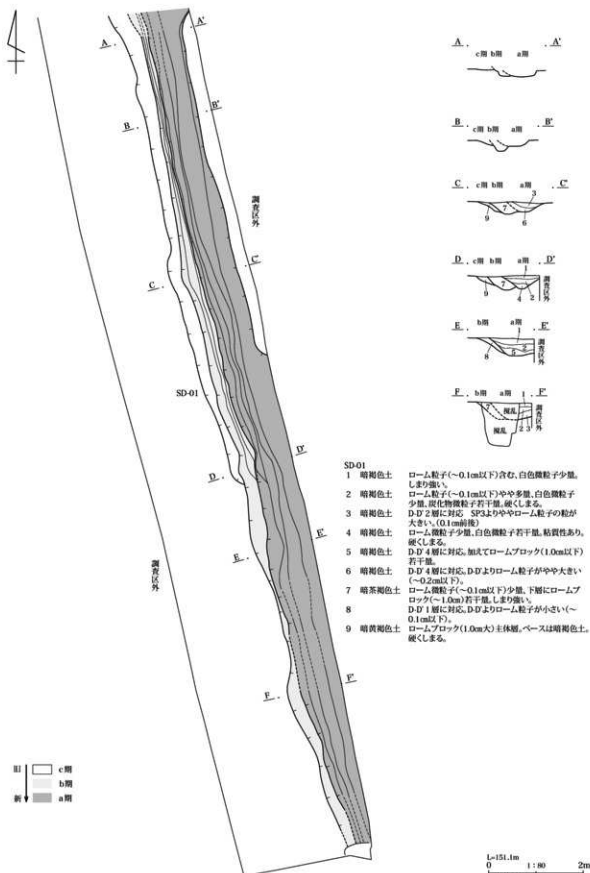
出土遺物 埋設土器1点を確認した。波状口縁部下にナゾリを伴わない微隆起線が横巡る。波頂部は2単位が残存するが、4単位であったと判断される。波頂部の微隆起線に接するように沈線で区画した無文帯で「W」状のモチーフが連続する。沈線は地縄文施文後に先端の尖った工具で施され、引き直された部分も観察される。地縄文（RLか）は縦位に施文されるが間隔施文を意識か。外面体下半は被熱により赤色変化し器壁は脆弱である。内面体上半は汚れが付着し発砲状の剝離が認められる。称名寺式に平行する加曾利E式か。

第7節 溝状遺構

1. 調査の概要

本調査区からは、5条の溝状遺構を確認した。SD-01は南北方向、SD-37・49・64・83は東西方向に延びるが、何れも調査区外に至る。このため、遺構の全容を明らかにし得た遺構はない。

A区SD-49は平成26年度に大田原市が調査を行ったSZ-1と連繋する可能性が考慮される。B区SD-37は菜研堀状で古墳周溝の最上層覆土に共通する黒色土（12層）が堆積することから古墳時代以前の遺構の可能性が考えられる。SZ-31周溝については、北側の周溝が未確認であるが、SD-37・64・83の可能性が考えられる。特に、SD-37・83については、覆土や遺構周辺から埴輪片が出土することや、覆土最上層に本調査区で確認される古墳周溝の最上層覆土に共通する黒色土が堆積することなどから可能性が高いと判断される。



SD-01

- 1 暗褐色土 ローム粒子(〜0.1mm以下)含む、白色微粒子少量、しまり強い。
- 2 暗褐色土 ローム粒子(〜0.1mm以下)やや多量、白色微粒子少量、炭化物微粒子若干量、硬くしまる。
- 3 暗褐色土 D-D 2層に対応、SP3よりややローム粒子の粒が大きい。(0.1mm前後)
- 4 暗褐色土 ローム微粒子少量、白色微粒子若干量、粘質性あり、硬くしまる。
- 5 暗褐色土 D-D 4層に対応、加えてロームブロック(1.0cm以下)若干量。
- 6 暗褐色土 D-D 4層に対応、D-Dよりローム粒子がやや大きい(〜0.2mm以下)。
- 7 暗茶褐色土 ローム微粒子(〜0.1mm以下)少量、下層にロームブロック(〜1.0cm)若干量、しまり強い。
- 8 D-D 1層に対応、D-Dよりローム粒子が小さい(〜0.1mm以下)。
- 9 暗黄褐色土 ロームブロック(1.0cm大)主体層、ベースは暗褐色土、硬くしまる。

第153図 第1号溝状遺構実測図

出土遺物は縄文土器片、石器、礫である。土器片の時期幅が大きいことや出土状況から遺構の時期を示すものであるが判然としない。

2. 溝状遺構

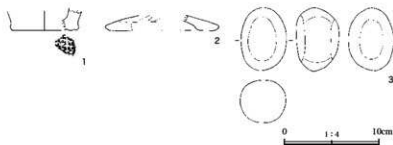
第1号溝状遺構 (SD-01) (第153・154図 表90 図版一一)

位置 C区E-12～13グリッドに位置する。調査区東端部を南北に延びる。E-12グリッド以北は上位面の削平により消失、南端部は調査区外に至る。**重複関係** SK-04・75・80・124・138・139・189・140、SZ-26及びS-81等と重複する。いずれの遺構よりも本遺構が新しい。**形状** 概ね南北を直線的に延びる。後述するa期の北端部が東方向に調査区外に至るが、遺構下に重複するSZ-26の形状に起因する可能性が高い。同様に、E-12・13グリッド境部でa期東側が東壁から調査区外に至る形状についても下面に位置するSK-140に起因する可能性が高い。**遺構の特徴** 覆土からは3時期以上が推定される。便宜上、廃絶時とみられる最も新しい掘り込みをa期、これ以前の掘り込みを新しい順にb期・c期とする。確認面の削平により遺構上位の詳細は不明であるが、a・b期が現行の溝より約0.2m東側を掘削すること、現行の溝の覆土が前時期の覆土を掘り込むことから、溝の埋没に伴い掘り直されたものと考えられる。**規模・主軸** 確認した長さは18.8mである。3時期分を含めた掘方の幅は約1.48m、遺構廃絶時(a期)の幅は0.7～0.8m、これ以前(b・c期)の溝幅はa期の掘り込みにより不詳である。深さは、a期:0.12～0.36m、b期:0.12～0.35m、c期:0.1～0.12mで、遺構南半部の残存状況が良好である。主軸はN-12°-Wである。**覆土** a期は1・2・4層の3層を基本として6層分を確認した。2層は粒子が固化したようシャリ感がある。b期は7層を基本として2層分を確認した。c期は9層の1層分を確認した。**底面** a区の底面は、SP-A付近で150.6m前後、SP-B～SP-D付近151.55m前後、SP-E付近で150.6m前後で緩やかな凹凸が見られ、底面に明確な傾斜は認められない。SP-F付近では150.45m前後である。底面の凹凸である可能性もあるが、SP-E以前の底面レベルの振れ幅より低い数値であり、南から北に向けて傾斜する可能性も否めない。

遺物出土状況 覆土中から235点が出土する。2の土師器小片、鉄製品(第12節記載)以外は縄文時代の遺物とみられ、本遺構埋没の過程で流入したものと判断される。

出土遺物 1は縄文土器底部小片。底部に網代編みの痕跡を残す。2は土師器器台の裾部か。鉄製釘が1本出土する。第12節3に記載する。その他、図示し得なかった土器片は以下のとおりである。

加曾利E式後半とみられる、隆帯とこれに沿う沈線を施す小片2片。数条1組の沈線が垂下する小片1片。磨削縄文手法で文様を描く口縁部小片1片、体部小片1片。加曾利E式後半～後期初頭とみられる、橋状把手とみられる小片2片、無文の口縁部小片1片、沈線間に磨削を施す小片12片、縄文部と無文部に区画を持たない小片2片。ナデを伴う微隆起線を配する小片1片、加曾利E IV式。ナデを伴わない微隆起線を配す



第154図 第1号溝状遺構出土遺物実測図

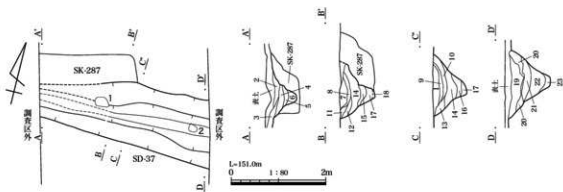
る小片2片、称名寺式に平行する加曾利E式。微隆起線がみえる小片4片。後期初頭とみられる、無文の口縁部2片、無文の口縁部下に沈線が巡る小片2片、帯状区画とみられる小片3片。堀之内式とみられる、無文の口縁部直下に横巡する沈線に付した盲孔から波状の単沈線が垂下する小片1片、地縄文に単沈線が垂下する小片6片、堀之内1式。キザミを施す隆帯が垂下する小片1片。堀之内式以降とみられる底部小片1片。この他、時期不明の無文の口縁部小片4片、地縄文に沈線がみえる小片2片、無文に沈線のみえる小片6片、地条線小片1片、地縄文小片70片、無文の小片42片、磨滅片・微細片50片。

石器・礫は表90に記載する。

本遺構の時期は判然としませんが、調査区内で確認された遺構の上位に掘削されており、中・近世以降である可能性が考えられる

第37号溝状遺構（SD-37）（第155・156図 表91）

位置 B区C-6グリッドに位置する。調査区を東西に延びる。全体図は調査区内を完掘した状況を示したもので、遺構の段部分以下に相当する。**重複関係** SK-287と重複する。本遺構が新しい。**形状** 調査区の東西を直線的に延び、東西の調査区外に至る。SK-287重複部は遺構範囲が判然とせず、図中にはセクションからの想定ラインを破線で示した。断面は遺構中位で段を持つ菜研堀状である。**規模・主軸** 確認した長さは東西約3.6m、遺構確認面からの深さは0.7～0.8mである。菜研堀状の段は150.3m付近にある。遺構幅は、遺構確認面の幅は東端部約1.4m・西端部約0.7m、菜研堀の段部分の幅は東端部約0.7m・西端部約0.4m、底面の幅は東端部約0.2m・西端部約0.15mを測り、東から西に狭くなる。主軸は東西方



SD-37

- | | | |
|----|------|--|
| 1 | 暗褐色土 | ローム粒子(～0.1cm)含む、ロームブロック(～0.8cm)少量、しまり強い、別遺構の覆土か。 |
| 2 | 暗褐色土 | ローム粒子(～0.1cm)やや多量、ロームブロック(～0.3cm)少量、しまり強い。 |
| 3 | 暗褐色土 | ローム粒子(～0.3cm)やや多量、硬くしまる。 |
| 4 | 暗褐色土 | ローム粒子(～0.2cm)含む、ロームブロック(～1.0cm)少量、黒色が層状(3cm)に入る。2層より黒色、硬くしまる。 |
| 5 | 暗褐色土 | ローム粒子(～0.1cm)含む、白色粒子少量、黒色土(～0.3cm)。 |
| 6 | 暗褐色土 | ローム粒子(～0.2cm)やや多量、ロームブロック(～0.3cm)少量、しまり強い。2層に入る木根でカクランを受けているか。 |
| 7 | 暗褐色土 | ローム粒子(～0.2cm)少量、白色粒子若干量、しまり強い。 |
| 8 | 暗褐色土 | ローム粒子(～0.3cm)やや多量、ロームブロック(～1.5cm)少量、白色粒子若干量。 |
| 9 | 暗褐色土 | ローム粒子(～0.1cm)やや少量、ロームブロック(～1.0cm)、炭化物粒子(～0.2cm)、白色粒子少量、しまりあり。 |
| 10 | 黒褐色土 | ローム粒子(～0.1cm)ロームブロック(～0.5cm)含む、炭化物粒子(～0.1cm)少量、しまりあり。 |
| 11 | 暗褐色土 | ローム粒子(～0.2cm)含む、白色粒子微量、しまりあり。 |
| 12 | 暗褐色土 | ローム粒子(～0.2cm)多量、ロームブロック(～1.0cm)含む、炭化物粒子(～0.2cm)若干量、白色粒子微量、しまりやや強い。 |
| 13 | 暗褐色土 | ローム粒子(～0.2cm)やや多量、ロームブロック(～0.5cm)少量、しまりあり。 |
| 14 | 黒褐色土 | ローム粒子(～0.2cm)やや多量、ロームブロック(～1.5cm)、黒色土ブロック(～3.0cm)含む、炭化物粒子(～0.1cm)若干量、白色粒子微量、しまり強い。 |
| 15 | 暗褐色土 | ローム粒子(～0.3cm)やや多量、炭化物粒子(～0.1cm)若干量、白色粒子微量、しまりやや強い、根のカクランにより上層の14層が侵入する。 |
| 16 | 暗褐色土 | ローム粒子(～0.2cm)やや多量、ロームブロック(～1.0cm)含む、白色粒子少量、しまり強い。 |
| 17 | 暗褐色土 | ローム粒子(～0.3cm)含む、暗褐色土粒子(～0.2cm)少量、炭化物粒子(～0.1cm)、白色粒子若干量、しまり強い。 |
| 18 | 暗褐色土 | ローム粒子(～0.4cm)含む、砂質ロームブロック(～1.0cm)少量、しまり強い。 |
| 19 | 暗褐色土 | ローム粒子(～0.1cm)含む、ロームブロック(～0.5cm)、白色粒子少量、しまりやや弱い。 |
| 20 | 黒褐色土 | ローム粒子(～0.3cm)やや多量、しまりあり。 |
| 21 | 黒褐色土 | ローム粒子(～0.1cm)少量、しまりあり、層間覆土の黒色土のような粘性はない。 |
| 22 | 暗褐色土 | ローム粒子(～0.1cm)やや多量、ロームブロック(～0.8cm)少量、炭化物粒子若干量、白色粒子若干量、しまりあり、一木の根がある。上下2層に分かれる。 |
| 23 | 暗褐色土 | ローム粒子(～0.1cm)ロームブロック(～1.0cm)含む、しまりあり。 |

第155図 第37号溝状遺構実測図

向より2度ほど北に傾く。覆土 23層を確認した。層序は明瞭である。土層は4カ所で確認したが、土層の特徴の対応は不明瞭であり、SP-A、SP-B・C、SP-Dごとに土層注記を表記した。SP-B・Cには、遺構中位の150.3～150.4 m付近に古墳周溝に堆積する黒色土に似た覆土14層が観察される。14層下面是薬研堀の断面の段部分に相当する。SP-A覆土21層に対応するものと判断されるが、古墳周溝堆積土に比べ粘性がない。SP-Aには確認されなかった。SP-B覆土11・12層とSP-C覆土13層、SP-B覆土15層とSP-C覆土16層は対応するものと判断される。底面 概ね平坦であり、傾斜等は観察されない。底面レベルは150.0 m前後である。壁・底面はローム層を掘り込む。

遺物出土状況 覆土中から165点が出土する。図示し得なかったが、タテ方向のハケを促す埴輪小片1片が出土する。SD-84確認面出土の埴輪片と似るが接合しない。これ以外は流入した遺物とみられる。

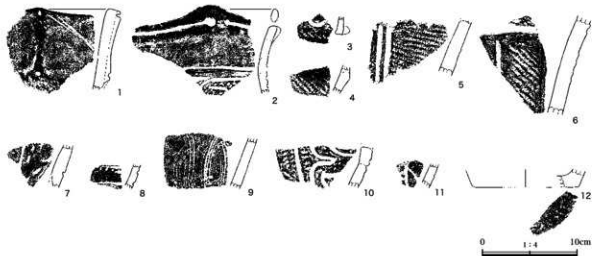
出土遺物 1は無文の口縁部に垂下する断面三角形の隆帯の上下に円孔を付す。一次区画線は微隆起線状の隆帯か。後期前葉か。2は波頂下に施した貫通孔から沈線が横巡する。一次区画線以下は単沈線で縦位のモチーフを描くか。堀之内1式。3は隆帯上端に縄文を施す。隆帯下は沈線で文様を施す。5は3条一組の懸垂文が垂下する。加曾利E式後半。6は一次区画線とみられる沈線下に懸垂文が垂下か。器壁は厚い。加曾利E式後半或いは堀之内式か。4は微隆起線で縄文部と無文部を区画する。微隆起線はわずかにナデを伴うか。加曾利E IV式。7は帯状区画内に刺突を施す。称名寺式。8は沈線に列点が沿うようにみられるが、浅い半截竹管状工具による沈線内のキザミともみえる。後期前半か。9は櫛歯状工具で紡錘状の格子目を描く。後期前葉か。10は地縄文に単沈線で縦位のモチーフを描く。堀之内1式。11は器壁の薄い小片。地文は燃り糸か。12は底部小片。編組系圧痕が残る。磨滅により不詳であるが中央部は磨り消されるか。

この他、図示し得なかった土器片は以下のとおりである。

注口部とみられる小片1片。無文の口縁部小片3片、口縁端部に沈線の巡る無文の小片1片。3条一組の隆・沈線が垂下する小片1片。地縄文に単沈線が施される小片1片、堀之内1式。無文に沈線を施す小片2片。横位の沈線で縄文部を区画する器壁の薄い小片1片、堀之内式の壺形か。地条線小片4片、中期後半～後期前葉までの小片が含まれるか。地縄文小片45片。無文の小片60片。底部片5片。微細片34.4 g。

礫は表91に記載する。この他、微細礫・微細片12片、被熱した微細片4片が出土する。

これらの遺物が本遺構に帰属する可能性は薄く、本遺構の時期は不詳である。



第156図 第37号溝状遺構出土遺物実測図

第49号溝状遺構 (SD-49) (第157・158図 表92 図版二四)

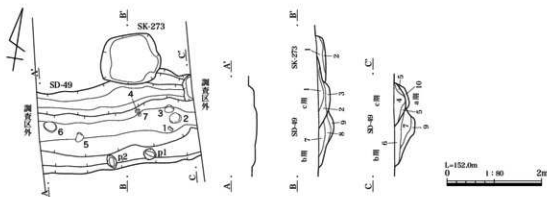
位置 A区B-1グリッドに位置する。調査区を東西に延びる。平成26年大田原市調査のSZ-1に連繋か。ただし、覆上の堆積状況からは、C区SD-01との関連が考慮される。**重複関係** SK-273と重複する。本遺構が新しい。**形状** 調査区を東西に延び、調査区外に至る。覆上の堆積状況から、a・b・c期の3時期が想定される。a・c期は同様のライン上、a・b期は遺構の北・南側に平行して位置する。**規模・主軸** 確認し得た長さは調査区の幅となる3.3m程である。主軸はN-74°-Eである。**覆土** 10層を確認した。1～5層はa期覆土である。1・2層と4層、3層と5層は対応するか。6～9層はb期の覆土である。10層はc期の覆土である。

a期 最も上層に位置する。遺構の北側にある。遺構確認面の幅は0.9～1.5m、底面の幅は約0.15～0.35mである。断面形は緩く浅い葉研場状である。遺構確認面からの深さは0.26～0.34mである。底面のレベルは概ね151.3m前後であり、溝としての傾斜は確認されない。

b期 中層に位置する。遺構の南側に位置する。遺構確認面の幅は1.6～1.9mと推定される。底面の幅は約0.3mである。断面形はa期同様、緩く浅い葉研場状である。遺構確認面からの深さは0.33～0.44mである。底面のレベルは東壁付近で約151.1m・SK-273重複部付近で151.22mであり、西から東方向への傾斜が確認される。南辺にp1・2が穿たれる。腐属の如何を含め詳細は不明である。p1の径は約0.22mである。p2は東西約0.3m・南北約0.2mである。

c期 最も下層に位置する。a期覆土直下にある。調査区東壁際に底面の立ち上がりを確認した。立ち上がり以西に覆土の確認はなく、a期の掘り込みによって消失したか、遺構自体が立ち上がるかは判然としない。遺構確認面の幅は0.6mほどと推定される。底面の幅は約0.15mである。底面は北から南方向に10cmほど傾斜する。遺構確認面から底面の最深部までの深さは約0.33mで、底面のレベルは151.24mである。

遺物出土状況 覆土中から87点が出土する。縄土器片・石器・礫であり、本遺構埋没の過程で流入したものと判断される。1～7は何れも礫である。



SD-49

- 1 暗褐色土 ローム粒子(～0.1cm)やや多量、しまりあり。
- 2 暗褐色土 ローム粒子(～0.1cm)・ロームブロック(～1.0cm)少量。
- 3 黒褐色土 ローム粒子(～0.3cm)含む、ロームブロック(～3.0cm)少量、しまりあり。
- 4 黒色土 ローム粒子(～0.1cm)少量、しまりあり。
- 5 暗褐色土 ローム粒子(～0.1cm)少量、ロームブロック(～2.0cm)若干量、しまりあり。
- 6 黒褐色土 ローム粒子(～0.1cm)やや多量、ロームブロック(～0.8cm)少量、しまりあり、5層より明色。
- 7 黒褐色土 ローム粒子(～0.1cm)含む、ロームブロック(～0.3cm)少量、しまりあり。
- 8 暗褐色土 7・9層の間隙。9層よりローム粒子・ロームブロック少量。
- 9 暗褐色土 ローム粒子(～0.1cm)やや多量、ロームブロック(～1.2cm)少量、しまりあり。
- 10 暗茶褐色土 ロームブロック(～1.0cm)若干多量、ローム粒子(～0.1cm)少量、しまりあり。

SK-273

- 1 暗茶褐色土 ロームブロック(～3.0cm)主軸部、しまり強い。
- 2 暗黄褐色土 ロームブロック(～3.0cm)主軸部、しまりあり。

第157図 第49号溝状遺構・第273号土坑東測図

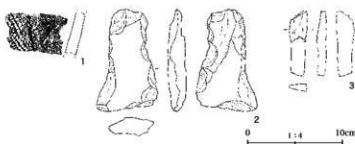
出土遺物 1は微隆起線で縄文部と無文部を区画しモチーフを描出か。加曾利E IV式か。覆土堆積の際に流入した遺物と判断される。陶器1片、磁器1片が出土する。第12節3に記載する。

この他、図示し得なかった土器片は以下のとおりである。

口縁端部から地縄文を施し、内面文様を有する口縁部小片1片、堀之内2式。帯状区画とみられる小片3片。無文に平行する沈線で曲線を描く小片1片。無文に沈線がみえる小片5片。地条線小片1片。地縄文小片6片。無文の小片24片。磨滅片・微細片26片。

石器・礫は表92に記載する。この他、小礫・小礫塊9片、被熱する小礫塊2片が出土する。

本遺構の時期は判然としない。



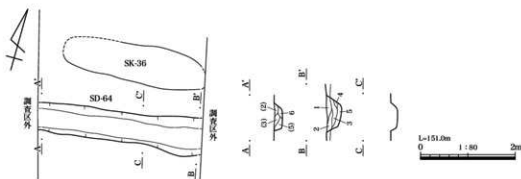
第158図 第49号溝状遺構出土遺物実測図

第64号溝状遺構 (SD-64) (第159図 表93 図版一一)

位置 B区C-6グリッドに位置する。調査区を東西に延びる。重複関係 SK-106 上面に位置する。本遺構が新しい。**形状** 調査区の東西を直線的に延び、調査区外に至る。**規模・主軸** 確認し得た長さは東西約3.5m、幅約0.5m、遺構確認面からの深さ0.2m前後である。主軸は東西方向より4度ほど北に傾く。

覆土 6層を確認した。図中の土層注記は、SP-Bを基本とし、SP-Aの()付きの土層番号はSP-B対応層を示した。**底面** SK-106との重複については判然としない。大小の凹凸はあるが概ね平坦であり、傾斜等は観察されない。底面の幅は約0.35m、底面レベルは150.3m前後である。壁・底面はSK-106との重複のない西半部はローム層を掘り込む。

遺物出土状況 覆土中から12点が出土する。何れも礫で、1点は22層下層、1点は17層下層から出土する。遺構外からの流入遺物か。



SD-64

- 1 暗茶褐色土 炭化物粒子(～0.1cm)・白色粒子少量、ローム粒子(～0.1cm)微量。
- 2 暗茶褐色土 ローム粒子(～0.1cm)含む、炭化物粒子(～0.1cm)・白色粒子少量。
- 3 暗茶褐色土 ローム粒子(～0.2cm)やや多量、炭化物粒子(～0.1cm)・白色粒子少量。
- 4 暗茶褐色土 ローム粒子・ロームブロック(～1.0m)多量、白色粒子若干量。
- 5 暗茶褐色土 ローム粒子(～0.3cm)含む、炭化物粒子(～0.2cm)・白色粒子少量。
- 6 暗茶褐色土 ローム粒子(～0.2cm)多量、ロームブロック(～0.1cm)含む、炭化物微粒子・白色粒子微量。

第159図 第64号溝状遺構実測図

出土遺物 図示し得なかったが、隆・沈線のみえる小片2片が出土する。礫は表93に記載する。その他、小礫・小礫塊6ヶが出土する。

本遺構の時期は不詳である。

第83号溝状遺構 (SD-83) (第160・200図 表94 図版一一)

位置 B区C-7グリッドに位置する。調査区を東西に至る。SZ-31の周溝北辺である可能性が考えられる。

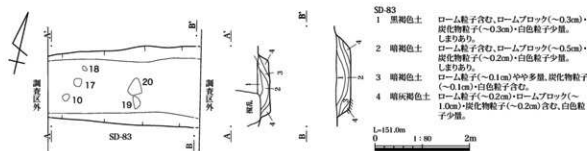
重複関係 重複する遺構はない。**形状** 調査区の東西を直線的に延び、調査区外に延びる。**規模・主軸** 確認し得た長さは東西約3.25m、遺構確認面からの深さ0.3m前後である。主軸は東西方向より12度ほど北に傾く。**覆土** 4層を確認した。レベルが150.3m付近の1・2層の色調は黒みが強い。**底面** 小さな凹凸は観察されるが概ね平坦である。底面のレベルは15.05m前後であり、傾斜等は確認されない。壁・底面ローム層を掘り込む。底面のロームは小礫層直上層とみられ、底面の凹凸によって礫層が露出する。図中SP-B底面の斜線部は小礫層面である。

遺物出土状況 覆土中から165点が出土する。第200図・埴輪1の埴輪片は調査区東壁際の表土中から出土する。表土中の出土であり、第12節に掲載する。SD-37出土の埴輪片と似るが接合しない。図示し得なかったが、17～20は何れも礫である。10・17は遺構確認面付近、3は覆土上層、4・5は表土中から出土する。図示した1・6・9は東半部、3・7・5・12・16は西半部、8・15は覆土から出土したが、覆土堆積の過程で混入した遺物と判断される。

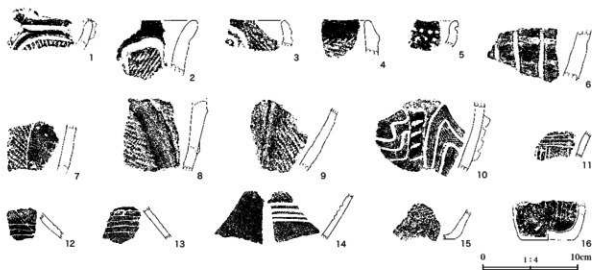
出土遺物 1は口縁部文様帯か。隆帯と沈線に沿ってキザミを施す。加曾利E式前半か。2は口縁部文様帯か。凹線状の沈線で円形状の単位文か。加曾利EⅢ式か。3は波状口縁か。平行する沈線でモチーフか。口縁部の形状から加曾利EⅢ式か。4は口縁部下にナデを伴わない微隆起線が横巡する。称名寺式に平行する加曾利E式か。5は波状口縁部下に2列の刺突列が巡る。後期初頭か。6は太く深めの地条線を施す。曾利式系か。7は細く鋭い沈線で縄文部と無文部を区画する。加曾利E式後半かまたは後期初頭か。8は2本の平行する微隆起線でモチーフを描く。加曾利EⅣ式か。9は微隆起線で縄文部と無文部を区画しモチーフを描く。加曾利EⅣ式か。10はキザミを施す隆帯で器面を分割する。称名寺式。11は無文に集合沈線でモチーフを描く。器壁は薄い。堀之内式か。12・13は注口土器か。別個体とみられる。堀之内2式か。14は内面文様を施す。器面は堅緻。15の地文は撚り糸か。16は底部の形状から後期前葉と判断される。外面にオコゲが付着しており不明瞭であるが地条線か。

この他、図示し得なかった出土遺物は以下のとおりである。

口縁部文様帯とみられる隆・沈線のみえる小片4片。磨滅のため詳細不明。無文の口縁部下に隆帯状の高まりが横巡する小片1片。無文の口縁部下に沈線が横巡する小片1片。無文の口縁部1片。沈線間に磨消を伴う小片5片、加曾利E式後半～後期前葉。ナデを伴う微隆起線を施す小片1片、加曾利EⅣ式。ナデを伴



第160図 第83号溝状遺構実測図



第161図 第83号溝状遺構出土遺物実測図

わなひ微隆起線を施す小片1片、称名寺式に平行する加曾利E式。無文に微隆起線を施す小片2片、後期初頭か。地縄文に単沈線を施す小片2片、集合沈線が垂下する小片2片、堀之内式か。無文に沈線で格子目を描く小片1片、後期前葉か。地縄文に沈線の一部のみ見える小片1片。無文に沈線のみ見える小片6片。地条線小片1片。地縄文小片35片。無文の小片48片。底部小片2片、うち1片は堀之内式以降か。磨滅片・微細片27片。

石器・礫は表94に記載する。この他、小礫・小礫塊3片、うち1片は赤色変化する。

本遺構に帰属すると判断される遺物の出土はなく、本遺構の時期は不明である。

第8節 古墳

1. 調査の概要

円墳5基分、埋設施設1基を確認した。古墳は調査区幅が狭く全容は不明であり、周溝を部分的に確認した。墳丘は後世の削平により調査以前から失われている。調査区周辺の地表面は、緯度や河川に向かっての緩やかな傾斜はあるが平坦である。近隣の古老によれば、以前にはC区南端部の西側に塚状の盛り上がりか確認できたが現在は失われており、また、周辺は墳丘の林立する状況ではなかったとのことである。少なくとも、調査区の現況である梨畑開削の際には古墳の墳丘は失われ、現在に至ったものと判断できる。

周溝の覆土は、何れの古墳も、粘性が強く、色調の濃い黒色土が遺構確認面付近に堆積することが共通する。第1節基本土層において記載したが、削平時に墳丘（盛土・旧表土）が整地された結果と考えられようか。SZ-41にのみ墳丘・旧表土が残る。

SZ-03の周溝は 底部幅 1.9m以上とみられ、古墳自体が大形である可能性が考えられる。位置的に古老の語る「大きな塚」に相当するか。周溝の一部を確認したのみであり、埋設施設等は不明である。

SZ-26は周溝の南・北辺、埋設施設とみられるS-81を確認した。周溝には周溝内土坑が確認される。

SZ-30は周溝の東辺、埋設施設とみられるS-21を確認した。

SZ-31はD-9グリッドに確認された周溝を墳丘南側と考え、S-35・95を埋設施設とする古墳と判断した。しかし、北側の周溝が明瞭ではない。地山土堆積状況や遺構堆積土、埴輪片の出土などからSD-83と判断されるが、判然とせず、S-35・95を埋設施設とする古墳ではない可能性も残る。

SZ-41は周溝の南・北辺を確認した。周溝には周溝内土坑が確認される。

埋葬主体とみられる土壌を伴う古墳はSZ-26・30の2基である。SZ-31についてはS-35・95が伴う可能性が高いが、土壌層である可能性が残る。

埋葬主体とみられる土壌は6基を確認した。このうち、4基はSZ-26・30・31に伴う可能性が考えられる。残る3基(SK-184・SK-36・131)は現状では周溝・墳丘が確認されなかった。SK-131については記録を逸し不詳な点が多く、SK-36とともに第4節土坑に記載する。SK-184は埋葬施設として本節に記載する。

確認された埋葬施設とみられる土壌は、何れも、埋葬主体を割竹形木棺或いは舟形木棺とすると考えられる。ロームブロックを充填する層と黒色土を充填する層が幅狭で交互に堆積するSZ-26(S-81)・SZ-31(S-35)・SK-184・SK-131には割竹形木棺の可能性、SZ-30(S-21)・SZ-31(S-95)・SK-36には舟形木棺の可能性が考えられる。

出土遺物は、SZ-31(S-35)からは鉄刀・鉄鏃、SZ-30(S-21)からは鉄製品、SZ-30周溝からは粗製土器等が出土するが、主体となるのは縄文土器片、石器、礫である。遺物の出土状況は土坑等と同様であり、時期幅の大きい縄文土器片、石器、礫が混在する。礫は古墳に関連するか判然としない。中には被熱による赤色変化やススの付着が認められ、炉材と判断されるものがある。多くは埋没に伴う流入遺物か。

2. 古墳

第3号古墳 (SZ-03) (第162～164図 表45 図版一二)

【立地】

位置 C区E-13グリッドに位置する。周溝の北北東付近の一部を確認した。**重複関係** SK-181・183と重複する。SK-181は縄文時代の袋状土坑である。SK-183は覆土の掘削の過程で確認した。

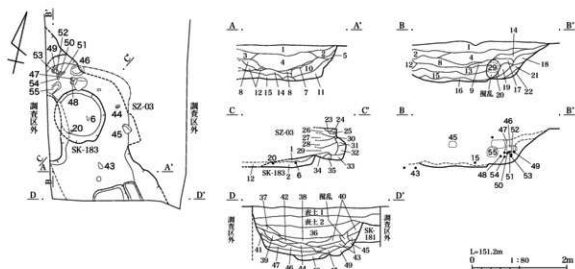
【墳丘】

墳形・規模 形状・規模とも不明である。外側の壁面に挟込土坑が穿たれる。第162図上ばの破線部は挟込土坑天井部の崩落による形状と判断される。

【周溝】

周溝 壁面は底面から25度前後の角度をもって立ち上がる。挟込土坑が穿たれる西壁付近は50度ほどの角度でなだらかに立ち上がる。調査区南西隅部は底面が皿状に立ち上がることから、周溝の内側隅部と判断される。その際、断面形は台形状、底部の幅は第162図破線部を下ばとして約1.5mとなる。底面は概ね平坦であるが、西壁寄り、南壁寄りに深さ0.1mほどの掘り込みがある。工具痕等は確認されなかった。確認面からの深さ約0.6～0.7mである。**覆土** 覆土は35層を確認した。遺構確認面は2～4層で、粘性が強く、色味の濃い黒色土層である。暗褐色土の6・8・9層を挟んでロームブロックを多量に含む12～14層が堆積する。10・11層はローム粒子を多量に含む暗茶褐色土層である。暗褐色土の15層下にロームを多量に含む16層が堆積する。36～51層は土層の特徴を逸したが、36・37層：2～4層、38～43層：6・8・9層、42～44層：12～14層、45～46層：47・48層：16層に相当すると判断される。ロームの混入が多少する層が交互に堆積するが、掘方埋土等の堆積の性格の差異がある可能性は否めない。**挟込土坑** 周溝外側に壁面にある。SZ-03覆土を掘り下げる過程で確認したもので形状等不詳な点が多い。覆土は23～35層を確認した。23～25は天井部の崩落層か。27～29層と31～33層は色調に明確な差異がある。また、層間は垂直に分層が可能であり、27～29層を棺体等の埋納部とする推定が可能であろうか。その際、25・30～35層は構築層、26層は被覆層とみられる。特に、ロームを主体とする25・34・35層は、34・35層を基底層、25層を最上層と考えられようか。

袂込土坑の形状等は明瞭に把握できなかったが、第162図遺物46・55・一点破線の下ば・遺物45・遺物55を結んだ範囲を含む可能性は高い。天井部が崩落したとみられるのは第162図破線部で遺物45・46間にある。即ち、壁面の挟り込みの範囲と捉えられよう。SP・B17～22層が袂込土坑に関連する堆積層とするならば、27～29層に相当する明確な堆積はなく、SP・B付近が端部にあたると推定される。出土遺物を見ると、袂込土坑周辺からは44・46～52が出土する。何れも礫である。46・55は比較的大きな礫で150.5m前後のレベル(28・29層に相当)から出土し、これら以外の小礫は46・55より下位から出土する。袂込土坑西側端部とみられる位置に集中することから、棺体の押さえとなる礫である可能性も否めない。小礫は裏込め、46・55は埋納部上面に設けられた礫である可能性が考えられる。その際、埋納部上面は27層あるいは28層



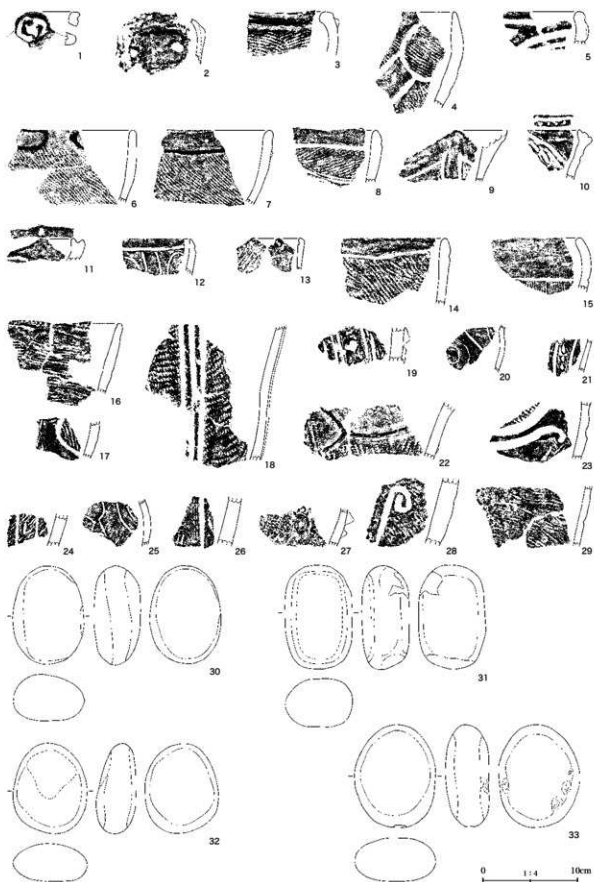
SZ-03

- 1 暗褐色土 ローム粒子(～0.1cm以下)やや多量、白色粒子(～0.1cm以下)含む、しりあり。
- 2 暗褐色土 ローム粒子(～0.1cm以下)やや多量、白色粒子少量、しりやや強い。
- 3 暗褐色土 ローム粒子(～0.1cm以下)やや多量、白色粒子少量、しりあり。
- 4 黒色土 ローム粒子(～0.1cm以下)やや多量、白色粒子(～0.1cm以下)少量、褐色微粒子若干量、しりやや強い、粘りあり。
- 5 暗褐色土 ローム粒子(～0.2cm)多量、しりあり。
- 6 暗褐色土 ローム粒子(～0.1cm)やや多量、ロームブロック(～0.8cm)含む、硬くしる。
- 7 黒色土 ローム粒子(～0.1cm)やや多量、しりやや強い。4層と10層の移行層。
- 8 暗褐色土 ローム微粒子・白色粒子少量、しりあり。
- 9 暗褐色土 ローム粒子(～0.1cm)多量、ロームブロック(～0.3cm)少量、しりあり。
- 10 暗茶褐色土 ローム粒子(～0.3cm)多量、白色粒子(0.1cm以下)微細、しり強い。
- 11 暗茶褐色土 ローム粒子(～0.2cm)多量、ロームブロック(～1.0cm)含む、しり強い。
- 12 暗茶褐色土 ローム粒子(～0.3cm)多量、ロームブロック(～1.0cm)含む、白色微粒子若干量、しりやや強い。
- 13 暗褐色土 ロームブロック(～1.0cm)多量、ロームブロック(1.0～3.0cm)・ローム粒子(～0.1cm)少量、しりやや強い。
- 14 暗褐色土 ロームブロック(～3.0cm)主軸層、ローム粒子(～0.2cm)含む、硬くしる。
- 15 茶褐色土 ローム粒子(～0.2cm)含む、ロームブロック(～1.0cm)少量、しりやや強い。
- 16 黄色土 ロームブロック(～3.0cm)主軸層、しりやや強い。
- 17 暗褐色土 ローム粒子(～0.1cm)多量、ロームブロック(～1.0cm)含む、硬くしる。
- 18 暗褐色土 ローム粒子含む、ロームブロック(～1.0cm)少量、しりあり。
- 19 暗褐色土 ローム粒子含む、ロームブロック(～3.0cm)少量、しりあり。
- 20 暗褐色土 ロームブロック(～3.0cm)主軸層、しりあり。
- 21 暗茶褐色土 ローム粒子やや多量、ロームブロック(～4.0cm)含む、しりあり。
- 22 暗褐色土 ローム粒子・ロームブロック(～3.0cm)含む、しりあり。
- 23 黒色土 掘戻土、ローム粒子(～0.1cm)含む、しりなし。
- 24 暗褐色土 4層対応、ローム粒子(～0.2cm)、しりあり。
- 25 暗褐色土 ロームブロック(～2.0cm)主軸層、しりあり。
- 26 暗褐色土 ローム粒子(～0.2cm)含む、ロームブロック(～0.5cm)・炭化物粒子(～0.2cm)・白色粒子少量、しりあり。
- 27 暗褐色土 ローム粒子(～0.1cm)やや多量、ロームブロック(～0.5cm)炭化物粒子(～0.3cm)・白色粒子少量、しりあり。
- 28 暗褐色土 ローム粒子(～0.2cm)やや多量、炭化物粒子(～0.3cm)・白色粒子少量、しりあり。
- 29 暗褐色土 ローム粒子(～0.1cm)やや多量、ロームブロック(～0.5cm)炭化物粒子(～0.1cm)少量、白色粒子若干量、しりやや強い。
- 30 暗褐色土 ローム粒子(～0.4cm)主軸層、しりあり。
- 31 暗茶褐色土 ローム粒子(～0.5cm)主軸層、硬くしる。
- 32 暗褐色土 ローム粒子(～0.2cm)・ロームブロック(～1.0cm)主軸層、硬くしる。
- 33 暗褐色土 ローム粒子(～0.3cm)多量、しりあり。
- 34 暗褐色土 ローム粒子(～0.2cm)・ロームブロック(～1.5cm)多量、しりやや強い。
- 35 暗褐色土 ローム粒子・ロームブロック(～1.5cm)主軸層、しりやや強い。

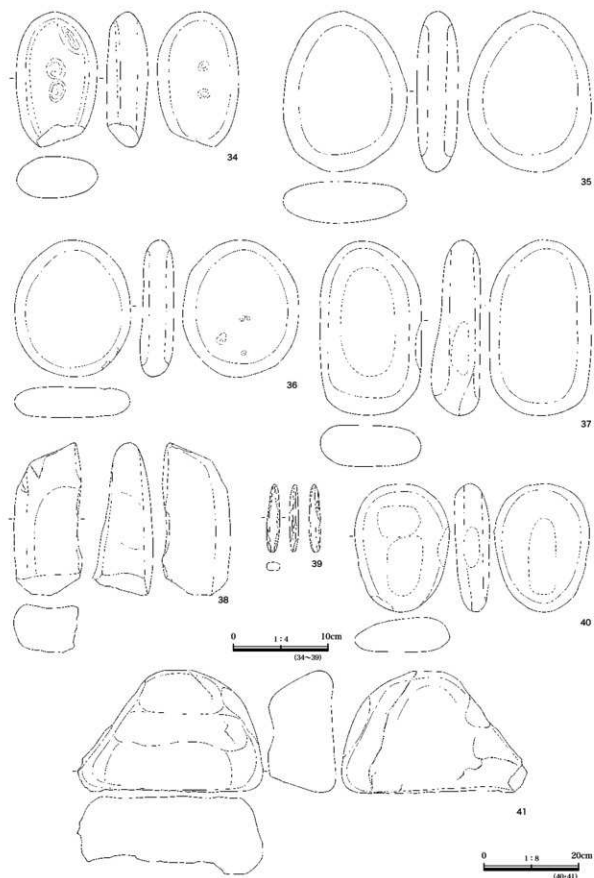
SK-183

- 1 暗茶褐色土 ローム粒子(～0.1cm)含む、しり強い。
- 2 暗茶褐色土 ローム粒子(～0.1cm)・ロームブロック(～1.0cm)含む、硬くしる。

第162図 第3号古墳・第183号土坑実測図



第163図 第3号古墳出土遺物実測図(1)



第164図 第3号古墳出土遺物実測図(2)

に相当する。45は44、46～52から離れて出土するが、46・55同様に150.5m前後から出土し、大きさ的にも似る。

【墳丘・埋葬施設】 調査区外とみられる。

【出土遺物】

遺物出土状況 扶込土坑周辺で44、46～55が出土する。45・46・55は28・29層中の出土レベルであるが、埋納部の崩落があったとすれば扶込土坑上面に設えられた可能性もあろう。調査中には確認されなかったが、本来扶込土坑埋納部上面は礫の付設があった可能性が考えられる。

この他、周溝覆土中から394点が出土する。土器片は何れも縄文土器であり、埋没に伴う流入、或いは重複するSK-181・183に帰属する可能性が考えられる。礫については帰属は判然としない。

出土遺物 1は口縁部の突起か。貫通孔の左右両側に弧状の沈線を施し、頂部に刺突を配する。2は形状不明。器壁の屈曲から図示したが、90度反転する可能性も否めない。図示のとおりであれば、壺形、或いは注口付きで、横方向の把手基部部分か。端部に円孔を付す。器壁は薄い。後期初頭か。3～5は口縁部文様帯か。3・4は隆・沈線、5は沈線で作出する。6・7は口縁部下に微隆起線を横巡する。別個体か。称名寺式に平行する加曾利E式か。6は双頭の突起を形成する。地縄文（RLか）は横・斜位に施文される。7の地縄文（LRか）は縦位に施文される。8は波状口縁か。口縁部下に沈線が巡る。下端にみられる沈線でモチーフか。後期初頭か。9は内面端部を欠く。帯状区画が器面を分割するか。称名寺式か。10は帯状区画内に刺突列を配する。口縁端部には沈線間に円形の刺突列を配する。11は波頂部に刺突を施す。沈線はモチーフか。後期初頭から前葉か。12は無文に一次区画線以下から沈線でモチーフを描く。堀之内式か。13は波頂部から斜方向に沈線を施す。口縁端部には小さな刺突列を配する。内面波頂下にも同様の刺突を配する。14は無文の口縁部下に沈線が巡るが口縁端部との間隔は平行ではない。間隔の狭まった頂部からモチーフを描くか。同一個体とみられる小片3片が出土する。堀之内式か。15は地条線後口縁部磨消、沈線を横巡させる手順が明瞭である。16は無文の口縁部下から区画なく地縄文を縦位に施す。29と同一個体か。18は3条一組の懸垂文が垂下する。隆・沈線で作出される。加曾利E式Ⅲ式前後か。17は磨消縄文手法でモチーフか。加曾利E式後半か。19は押捺を施す隆帯が垂下する。曾利式系か。22は微隆起線で区画した縄文部と無文部でモチーフを描くか。加曾利EⅣ式か。20は凹状の沈線で文様を描く。加曾利E式後半か。21は10同様のモチーフか。外面にオコゲ、内面に汚れが付着する。後期初頭か。21は10同様のモチーフか。外面にオコゲ、内面に汚れが付着する。24は帯状区画内に刺突列を配するか。称名寺式か。26は帯状区画内或いは単沈線間に短沈線を配するか。後期初頭～前葉か。25は帯状区画内に粗いミガキを施すか。27は地縄文に「8」字状の貼付文を付す。後期初頭～前葉か。28は地縄文に単沈線でモチーフを描くか。堀之内1式か。

この他、図示し得なかった土器片は以下のとおりである。

加曾利E式前半とみられる隆・沈線で作出する口縁部文様帯1片。加曾利E式後半から後期初頭とみられる、沈線間を磨消が垂下する小片11片、磨消縄文手法でモチーフを描く小片1片。加曾利EⅣ式とみられる、口縁端部の施文方向を遡る口縁部小片1片、地縄文に微隆起線を配する小片3片。称名寺式に平行する加曾利E式とみられる地縄文に微隆起線を配する小片1片。後期初頭とみられる、無文の口縁部小片2片、無文に微隆起線を配する小片7片、隆帯上に刺突列を配する小片1片。帯状区画とみられる小片10片。堀之内式とみられる、盲孔を付す磨消片1片、地縄文に単沈線を施す小片3片、集合沈線を施す小片2片、無文に単沈線を施す小片5片。時期不詳、無文の口縁部2片、地縄文を施す口縁部小片1片、地縄文に沈線を施

す小片7片、無文に沈線を施す小片4片、地条線に沈線、波状の沈線が垂下する小片2片。地条線小片（櫛歯状工具、明瞭な条線など）7片。地縄文小片116片。無文の小片40片。底部小片3片、うち1片は堀之内2式以降か。磨滅片・微細片59片。

石器・礫は表95に記載する。その他、小礫・小礫塊10ヶが出土する。

第26号古墳（SZ-26）（第165～168図 表96 図版一二・一三・三〇）

【立地】

位置 C区B-12、C-12・13グリッドに位置する。古墳の東半部の中心部付近を確認した。**重複関係** SK-173～75、124・125・138～140等と重複する。何れも縄文時代の遺構と考えられ、本遺構が新しい。また、SD-01と重複する。本遺構が古い。

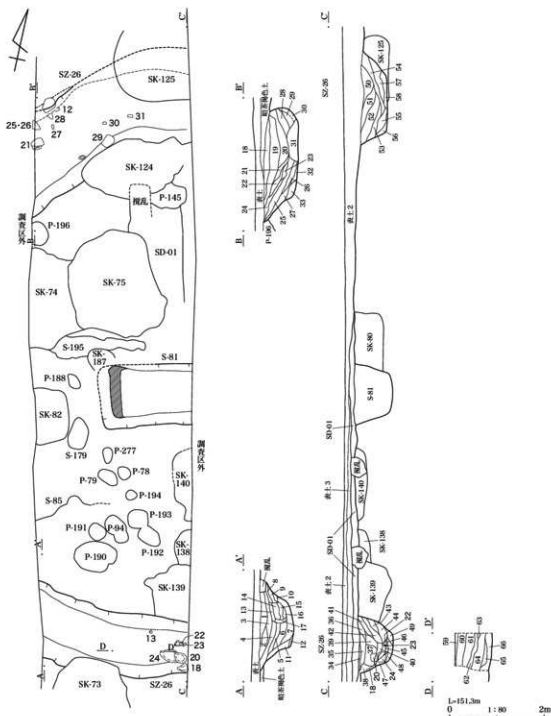
【墳丘】

墳形 円墳とみられる。墳丘は、調査以前から確認されておらず、後世の削平によって失われたものと判断される。遺構確認面は表土下約0.2～0.4mで、概ねローム漸移層である。**規模** 墳丘の直径は約10m弱、周溝外周の直径は約13mと推定される。**墳丘の構造** 古墳の中軸線に最も近い調査区西側の壁面及び東端部にあたる調査区東側の土層の観察を行った。主たる遺構確認面となるローム漸移層上面も削平されている可能性が高く、構造等は不明である。SZ-26表土3層は、5cm以上の大きさのロームブロックの堆積層、SZ-26表土4層は暗褐色土の堆積層である。本古墳より新しいSD-01を被覆することから、後世の削平に関わる層か。調査区西壁SK-04付近にも堆積する。古墳の盛土、或いは、旧表土に由来する可能性も残る。

【周溝】

周溝 古墳東半部の中心部付近を確認した。周溝北側の外周は遺構の重複や視乱により立ち上がるが判然としなない。遺構確認面での幅は1.0～2.0m、底面の幅は0.6～1.2mである。遺構確認面からの深さは、0.6～0.7mである。壁面の立ち上がり角度（古墳内側・外側）は、SP-A付近：35度・40度、SP-B付近：35度・挾込土坑、SP-C北側付近：25度・40度、SP-C南側付近：30度・20度である。周溝内側は25～35度で立ち上がるが、端部（SP-A・B付近）では35度、中心部（SP-C付近）では25～30度であり、比較的傾斜が似る。底面は概ね平坦であるが、周溝内土坑の想定されるSP-Cでは傾斜がみられる。底面のレベルは、SP-C南側付近：約150.94m、SP-C南-SP-A中間部付近：約150.07m、SP-A付近：約150.24m、SP-C北側付近：約150.03m、SP-C北側-SP-B中間部付近：約150.03m、SP-B付近150.15mであり、東端部に向けて低くなる。工具痕等は確認されなかった。**覆土** 69層を確認した。SP-B：18層・SP-C：34層、SP-D：59層は表土4層に対応するか。SP-A：1・2層、SP-B：19・20・21層、SP-C：35・50層、SP-D：60層は覆土差上層に堆積する黒色土である。SZ-3・30・41周溝最上層に堆積する粘性の強い黒色土に似る。SP-A：3～10・13～17層は周溝内土坑の堆積土か。11・12層は周溝内土坑以前の周溝覆土か。SP-B：28～31層は挟り込み土坑堆積土か。22～27層は挟り込み土坑以降、32・33層は挟り込み土坑以前の周溝覆土か。SP-C南側：34～39層は周溝内土坑に関わる堆積土か。SP-C北側：56・58層はロームブロックを多量に含む。50～56層を掘り直しに関わる堆積土とみることが可能であろうか。SP-D:61～63層は白色粒子を含み、シャリ感のある堆積土である。位置的にSP-C南側に観察される周溝内土坑との関連を考慮すべきか。**周溝内土坑** 平面的には観察されなないが、覆土の観察から、SP-A・SP-B・SP-C南側の3カ所に推定される。何れも周溝覆土を掘り込んで堆積する。周溝覆土の観察からは、周溝が人為的に埋め戻された痕跡は薄く、古墳との時期差が想定される。SP-Aは3～10・13～17層がこれにあたる。3層は周溝内土坑覆土、13～17層は埋納部、4～10層は構築、或いは、埋め戻しに関わる層か。SP-Bは28～31

層がこれにあたる。壁面の断面形状から挟り込み土坑か。周辺には、遺構下位から底面に12・25～28が出土する。何れも礎であるが、周溝内土坑に関わるものか。SP-C南側は37～40層がこれにあたるか。37層は方形状の堆積が観察でき、埋納部の想定が可能か。38～40層は構築土か。41～49層は周溝内土坑との関連は明確ではない。SP-D:61～63層にはシャリ感が認められる。位置的に周溝内土坑との関連が窺われる。周辺からは礎である13・18・20・22～24が出土する。何れも37層下部から出土する。特に18・20・24は37層を押さえる位置にある点、注意される。



第165図 第26号古墳実測図

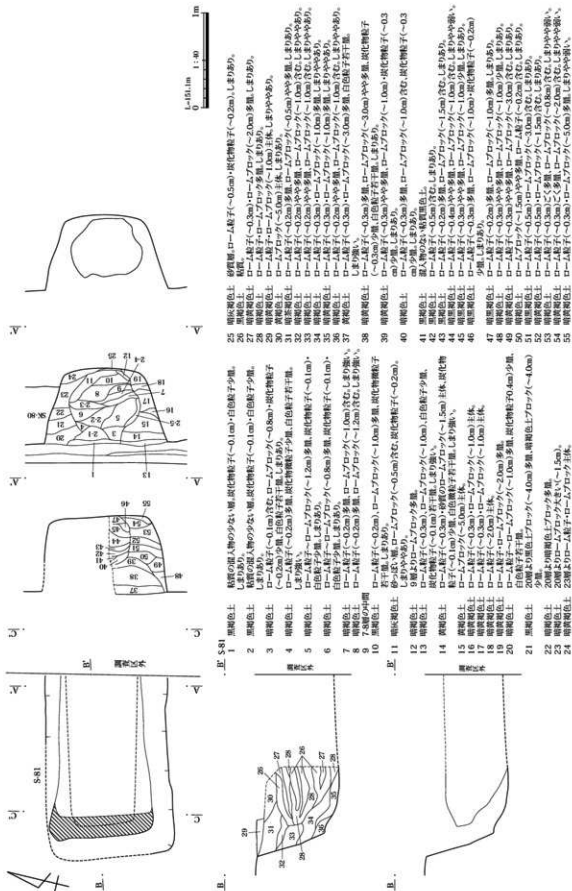
S2-26

西溝

1 黒褐色土	ローム粒子(-0.1m)、白色粒子少量、炭化物粒子微量、しりあり。
2 黒褐色土	ローム粒子(-0.1m)、白色粒子少量、炭化物粒子微量(中や粘質)、しりあり。
3 黒褐色土	ローム粒子(-0.1m)含む。炭化物粒子、白色粒子少量、しりあり。
4 黒褐色土	炭化物粒子、白色粒子多量(ローム粒子(-0.1m)含む)、しりあり。
5 黒褐色土	炭化物粒子多量、ローム粒子(-0.1m)含む、白色粒子少量、しりあり。
6 黒褐色土	ローム粒子(-0.2m)やや多量、炭化物粒子(-0.2m)、白色粒子少量、しりあり。
7 黒褐色土	ローム粒子(-0.3m)多量、炭化物粒子(-0.3m)少量、白色粒子若干量、しりやや中あり。
8 黒褐色土	ローム粒子(-0.2m)やや多量、炭化物粒子(-0.3m)、白色粒子少量、しりあり。
9 黒褐色土	ローム粒子(-0.2m)多量、白色粒子若干量、しりあり。
10 黒褐色土	ローム粒子(-0.1m)含む、ロームブロック(-1.2m)・炭化物粒子・白色粒子少量、しりあり。
11 黒褐色土	ローム粒子・ロームブロック(-1.2m)ごく多量、しりやや中あり。
12 黒褐色土	ロームブロック(-2.0m)主体、しりあり。
13 黒褐色土	ローム粒子(-0.2m)含む。炭化物粒子・白色粒子少量、しりあり。
14 黒褐色土	ローム粒子(-0.2m)多量、炭化物粒子(-0.2m)、白色粒子少量、しりあり。
15 黒褐色土	ローム粒子(-0.2m)やや多量、炭化物粒子(-1.0m)含む、しりあり。
16 黒褐色土	ローム粒子(-0.3m)やや多量、炭化物粒子・白色粒子少量、しりあり。
17 黒褐色土	ローム粒子(-0.1m)やや多量、炭化物粒子(-0.3m)、白色粒子少量、しりあり。
18 黒褐色土	ローム粒子(-0.2m)・炭化物粒子(-0.2m)、白色粒子少量、しりあり。
19 黒褐色土	ローム粒子(-0.1m)・炭化物粒子(-0.1m)、白色粒子少量、しりあり。
20 黒褐色土	炭化物粒子(-0.1m)含む、ローム粒子(-0.2m)少量、白色粒子、しりあり。
21 黒褐色土	ローム粒子(-0.1m)少量、炭化物粒子(-0.1m)、白色粒子、しりあり。
22 黒褐色土	ローム粒子(-0.1m)やや多量、炭化物粒子(-0.2m)、白色粒子、しりあり。
23 黒褐色土	ローム粒子(-0.3m)含む。炭化物粒子(-0.1m)、白色粒子、しりあり。
24 黒褐色土	ローム粒子(-0.1m)含む。炭化物粒子(-0.2m)、白色粒子、しりあり。
25 黒褐色土	ローム粒子(-0.1m)多量、炭化物粒子(-0.1m)、白色粒子、しりあり。
26 黒褐色土	ローム粒子(-0.2m)やや多量、炭化物粒子(-1.0m)含む、白色粒子、しりあり。
27 黒褐色土	ローム粒子(-0.1m)多量、炭化物粒子(-0.1m)含む、白色粒子、しりあり。
28 黒褐色土	ローム粒子(-0.1m)・炭化物粒子(-0.5m)少量、白色粒子、しりあり。
29 黒褐色土	ローム粒子(-0.1m)含む、ロームブロック(-0.8m)少量、炭化物粒子(-0.2m)、白色粒子、しりあり。
30 黒褐色土	ローム粒子(-0.2m)含む。炭化物粒子(-0.2m)、白色粒子、しりあり。
31 黒褐色土	ローム粒子(-0.1m)含む。炭化物粒子(-0.2m)、白色粒子、しりあり。
32 黒褐色土	ローム粒子(-0.1m)ロームブロック(-1.0m)多量、炭化物粒子(-0.2m)、白色粒子、しりあり。
33 黒褐色土	ローム粒子(-0.2m)ごく多量、炭化物粒子(-0.2m)、白色粒子、しりあり。
34 黒褐色土	白色粒子含む、ローム粒子(-0.1m)少量、炭化物粒子少量、しり強い。
35 黒褐色土	ローム粒子(-0.1m)、白色粒子含む。炭化物粒子(-0.1m)少量、しり強い。
36 黒褐色土	ローム粒子(-0.2m)やや多量、炭化物粒子少量、炭化物粒子(-0.3m)微量、しり強い。
37 黒褐色土	ローム粒子(-0.2m)やや多量、炭化物粒子(-0.5m)、白色粒子含む、しり強い。
38 黒褐色土	ローム粒子(-0.1m)・炭化物粒子・白色粒子少量、しり強い。
39 黒褐色土	ローム粒子(-0.1m)多量、炭化物粒子(-0.1m)・白色粒子少量、しり強い。
40 黒褐色土	ローム粒子(-0.2m)やや多量、炭化物粒子(-0.2m)、白色粒子少量、しり強い。
41 黒褐色土	ローム粒子(-0.2m)やや多量、白色粒子少量、炭化物粒子若干量、しり強い。
42 黒褐色土	ローム粒子(-0.3m)多量、炭化物粒子(-0.2m)、白色粒子少量、しり強い。
43 黒褐色土	ローム粒子(-0.1m)含む。炭化物粒子・白色粒子少量、しり強い。
44 黒褐色土	ローム粒子(-0.2m)・ロームブロック(-0.8m)含む。炭化物粒子・白色粒子少量、しりあり。
45 黒褐色土	ローム粒子(-0.2m)・ロームブロック(-1.5m)多量、炭化物粒子(-0.5m)、白色粒子少量、しりあり。
46 黒褐色土	ローム粒子(-0.2m)主体、ロームブロック(-0.8m)・炭化物粒子・白色粒子少量、しりあり。
47 黒褐色土	ローム粒子(-0.2m)主体、ロームブロック(-1.5m)含む。炭化物粒子(-0.2m)・白色粒子少量、しりやや中あり。
48 黒褐色土	ローム粒子(-0.2m)・ロームブロック(-1.0m)主体、しりやや中あり。
49 黒褐色土	ローム粒子(-0.2m)含む。炭化物粒子・白色粒子若干量、しりあり。
50 黒褐色土	ローム粒子(-0.1m)少量、炭化物粒子(-0.2m)、しりあり。
51 黒褐色土	ローム粒子(-0.1m)含む。炭化物粒子(-0.1m)、しりあり。
52 黒褐色土	ローム粒子(-0.2m)含む。炭化物粒子(-0.1m)、白色粒子。
53 黒褐色土	ロームブロック(-3.0m)多量、炭化物粒子、白色粒子。
54 黒褐色土	ローム粒子(-0.1m)少量、炭化物粒子(-0.1m)、白色粒子、しり強い。
55 黒褐色土	ローム粒子(-0.1m)、ロームブロック(-0.8m)、炭化物粒子、白色粒子、しりあり。
56 黒褐色土	ローム粒子・ロームブロック(-3.0m)主体、炭化物粒子。
57 黒褐色土	ローム粒子(-0.2m)・ロームブロック(-1.5m)多量、炭化物粒子(-0.2m)、白色粒子、しりあり。
58 黒褐色土	ローム粒子(-0.2m)・ロームブロック(-1.0m)多量、炭化物粒子(-0.2m)、白色粒子、しりあり。
59 黒褐色土	炭化物粒子(-0.4m)含む。白色粒子(-0.1m)少量、ローム粒子(-0.1m)微量、しりやや中あり。
60 黒褐色土	ローム粒子(-0.1m)含む。炭化物粒子(-1.0m)やや多量、白色粒子少量、しりやや中強い。
61 黒褐色土	ローム粒子(-0.1m)、白色粒子(-0.1m)含む。炭化物粒子(-0.2m)少量、しりやや中強い。
62 黒褐色土	炭化物粒子(-0.5m)やや多量、ローム粒子含む。白色粒子少量、しりやや中強い。
63 黒褐色土	ローム粒子(-0.1m)含む。炭化物粒子(-0.2m)やや多量、白色粒子若干量、しりやや中強い。
64 黒褐色土	ローム粒子(-0.1m)・炭化物粒子(-0.2m)やや多量、白色粒子若干量、しりやや中強い。
65 黒褐色土	ローム粒子(-0.3m)含む。炭化物粒子若干量、しりやや中強い。
66 黒褐色土	ローム粒子(-0.3m)多量、ロームブロックやや多量、しりやや中強い。

【埋葬施設】

埋葬施設 調査区東端部に位置するS-81が埋葬施設である可能性が考えられる。東側は調査区外にあるが、東西に長い長方形の土壌墓である。当初、直線的な平面プランとロームブロックの充填から視乱穴として覆土の除去を開始したため、遺構の全容を明らかにし得なかった。埋納部は後述のとおり、舟形木棺と想定される。縄文時代とみられるSK-80・186と重複する。**位置** 墳丘のほぼ中央部に位置する。南辺・北辺から周溝までは約4.2m×4.7mである。**形状・規模** 東側が調査区外にあるため東西の長さは不詳であるが、南北辺と同様に墳丘の中央部に位置すると仮定した場合、西辺から周溝までは約3.0mであることから、東西の長さは約4.0mと推定される。南北の幅は遺構確認面約1.3m・底面約0.9m、遺構確認面からの深さは約0.8mである。舟形木棺とみられる埋納主体は西端部にむかって窄まる形状にあるが、土壌の形状に



第166図 第26号古墳埋葬施設 S-81実測図

は反映されていないものと判断される。主軸はN-75°Eである。断面形は逆台形状で、壁面は20度前後の角度をもって立ち上がる。西辺の底面壁際は地山であるロームが杖状に高く、意図的に掘り残した可能性も考えられる。底面は概ね平坦であるが、SP-Bの東西では東から西へ0.04mほどの傾斜がみられる。底面のレベルは149.92m前後である。覆土55層を確認した。1～25層はSP-A、26～36層はSP-B、37～55層はSP-Cに観察される。SP-A・Cには円形状の堆積が観察される。SP-A：4～12層、SP-B：41～47層である。SP-B：26～28層の堆積はこの円形状の堆積に対応する。平面長形状、断面円形状の堆積層が土壌の中軸線上に沿う状態となり、埋納部と判断される。2・26・41～47層は黒褐色土であり、特に2層は粘性の強い黒色土である。SP-B：29・30層、SP-C：37～39層はロームブロックを主体とする、地山と見紛う堆積土である。35層は黄白色の粘質土である。埋納施設 土壌の中軸線上に沿う平面長形状、断面円形状の堆積層が埋納部と判断される。平面形状は、円形状堆積の幅がSP-A付近で約0.75m、SP-C付近で0.6～0.65mと想定され、西側にむかって窄むものと考えられる。横断面形状は、円形状の上面（SP-A：2・2・4・5層、SP-B：27層、SP-C：40層）が垂平気味に堆積する。また、円形状の堆積の底面からの立ち上がりが半円ではなく、僅かに逆台形状に直線的に立ち上がる。縦断面は、西側端部の約0.6mの堆積が約55度の角度で立ち上がる。縦・横断面の堆積形状から、埋納部は舟形木棺と推定できる。土壌底面の西壁際の杖状のロームの掘り残しは、軸状の西端部の形状を意識したものか。堆積層は黒色土を中心とした横縞状であるが、S-35の堆積から棺体の木質の痕跡と想定される。SP-A：2・2・4・5層、SP-B：26層最上層は棺蓋、SP-A：2・5層は棺身側面、SP-B：28層最下層は棺身底面の痕跡か。埋葬方法 埋納施設以外の堆積層については、埋土と判断される。埋土の特徴は均質ではなく、SP-A：南・北側では、南側にロームが多層される。また、堆積土の色調などから、上・中・下（後述の②・③・④に対応）に水平的な区分をすることが可能と判断される。SP-A南側では下位の18・19層は粒形の大きいロームブロックの目立つ暗黄褐色、中位の16・17層は暗黄褐色、上位の14・15層は黄褐色、最上層の13層は暗褐色である。SP-A北側では下位の24層の暗黄褐色、中位の22・23層の暗褐色、上位の21層の黒褐色、最上層の20層は暗褐色である。SP-Bは下位の35・36層の暗黄褐色、中位の33・34層の暗褐色、上位の31・32層の暗茶褐色である。SP-Cは下位の54・55層の暗黄褐色、中位の52・53層は暗黄褐色・暗褐色、上位の50・51層は黒褐色である。前述のとおり、埋土の特徴は均質ではないが、各位層ごとの傾向が窺われるとともに、各位層は棺体の底部付近・棺体の中位付近・棺体の肩部付近に相応する傾向が窺われる。これらの傾向やSP-B：35層の黄白色粘質土の堆積などから、①～⑤の棺体の埋納順序が推定される。

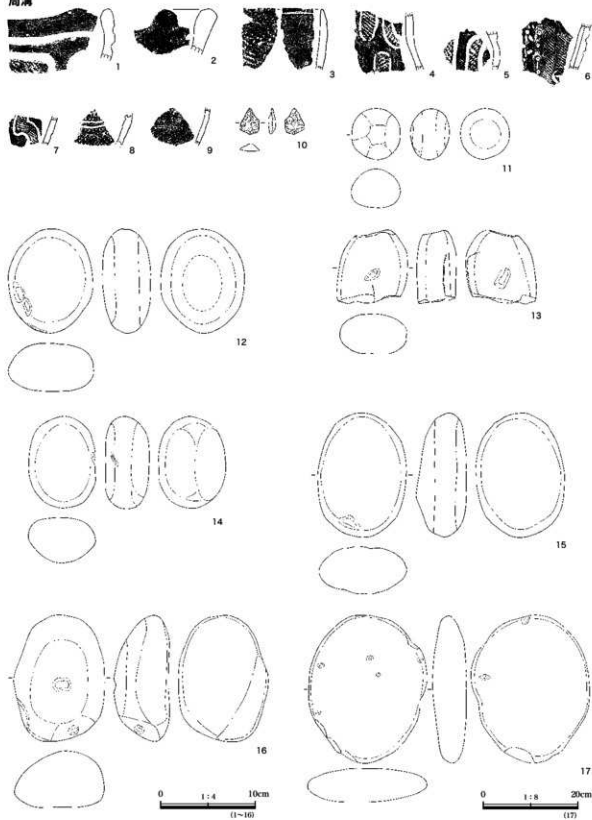
墓壇掘削（墓壇底面の西壁際の杖状の掘り残し）→①：棺体底面に黄白色粘質土（35層）敷設→②：棺体底面からの逆台形状の立ち上がり部までロームを中心とする暗黄褐色の埋土を充填→③：棺体中位付近まで暗褐色の埋土を充填→④：棺体肩部付近まで黒色の埋土を中心に充填→⑤：棺体上面までロームを主体とする黄褐色の埋土を充填

である。黄白色粘質土（35層）が棺体底部の全面に確認されないことや埋葬施設中央部にあたると思われるSP-C南側については埋土の傾向に外れることなど、留意されよう。

【出土遺物】

遺物出土状況 周溝及びS-81から出土する。周溝内からは縄文土器片・石器・礫が出土する。土器片・石器については埋設の際に流入したか。礫の帰属については判然としない。周溝出土遺物のうち13・18・20・22～24は周溝南側から出土する。周溝内土坑とみられる周溝37層下部から出土する。12・21・25～31は周溝北側の底面～下位付近から出土する。縄文時代の袋状土坑であるSK-125に近く、帰属は判然

周溝

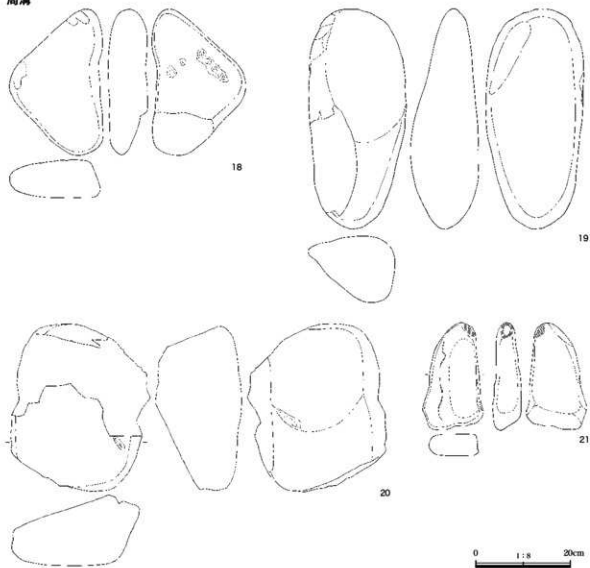


第167図 第26号古墳出土遺物実測図(1)

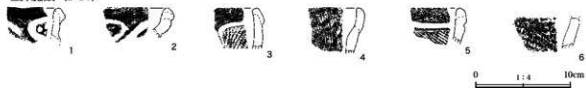
としない。S-81からは縄文土器・礫が出土する。重複するSK-80・186から流入した可能性が高い。

出土遺物 周溝内からは1～9を図示する。1は沈線で作出する口縁部文様帯小片か。加曾利EⅢ式。2は突起小片。3は口縁端部から地縄文を施す。波状口縁か、内面文様を有する。堀之内2式か。4・5は加曾利E式後半か。4は括れ部付近の小片。上下2段の文様構成とみられる。磨消縄文手法で「U」或いは「W」状のモチーフが連続するか。加曾利E式後半か。6はキザミを施す隆帯の上下に刺突列がそう。縦位の地縄文に沈線でモチーフを描くか。称名寺式か。7は带状区画か。8は沈線に沿って数条の刺突列を配する。

周溝



埋葬施設 (S-81)



第168図 第26号古墳出土遺物実測図(2)

三十稲葉式か。9は集合沈線でモチーフか。堀之内式か。

この他、周溝内からの出土遺物は以下のとおりである。

加曽利EⅡ～Ⅲ式とみられる隆・沈線で作出する口縁部文様帯5片・3条一組の懸垂文2片。加曽利E式後半～後期初頭とみられる沈線間を磨消懸垂文あるいは磨消縄文手法とみられる小片11片。加曽利EⅢ式とみられる、磨消縄文手法で逆「U」字状のモチーフを描くとみられる小片1片、隆帯と沈線で曲線的なモチーフを描くとみられる小片1片。加曽利EⅣ式とみられる、無文の口縁部下に微隆起線を巡る小片1片、体部片4片。称名寺式に平行する加曽利E式とみられる微隆起線を配する小片1片。後期初頭とみられる、口縁部小片2片、無文に微隆起線を配する小片7片。堀之内1式とみられる地縄文に単沈線が垂下する小片1片。時期不明の無文の口縁部小片2片。口縁部から地縄文を施す小片1片。地縄文に沈線を配する小片4片。無文に沈線を配する小片14片。地条線小片2片。地縄文片69片。無文の小片59片。底部小片1片。磨滅片・微細片28片。石器・礫は表96に記載する。この他、小礫・小礫塊が27ヶ出土する。

S-81覆土内からは1～6を図示する。重複する何れかの土坑に所属する遺物と判断されるが、本遺構に記載する。1・2は深鉢形土器の口縁部文様帯か。区画内に刺突を充填する。加曽利EⅢ式か。3は口縁部文様帯の区画文か。加曽利EⅢ式か。4は口縁部直下の施文の方向を違える。加曽利EⅣ式か。5は口縁部下に横位の沈線に区画された縄文が見える。口縁部形状から後期初頭の可能性を拭えない。6は斜位の地縄文を施す体部小片である。

この他、S-81からの出土遺物は以下のとおりである。

楕把手状或いは突起とみられる幅1.5cm前後の小片1片。無文の口縁部小片1片。沈線間に磨消を施す小片2片、加曽利E式後半～後期前葉。ナデを伴わない微隆起線で縄文部と無文部を区画する小片1片、称名寺式に平行する加曽利E式か。地縄文に弧状の沈線が垂下する小片1片、後期初頭～後期前葉か。地縄文に磨消を伴う集合沈線が垂下する小片1片、堀之内1式か。地条線に数条の沈線が垂下する小片1片。地条文に沈線の一部のみ見える小片3片。無文に沈線の一部のみ見える小片4片。地条線小片3片。地縄文小片13片。無文の小片8片。底部小片1片。礫は表96に記載する。この他、被熱によるとみられる色調変化と伴う小礫塊2片が出土する。

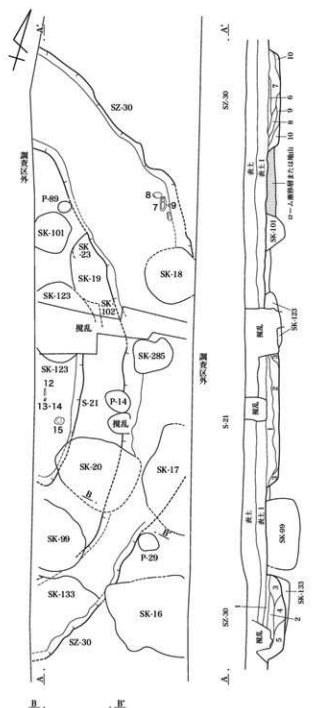
第30号古墳 (SZ-30) (第169・170図 表97・101 図版一三)

【立地】

位置 C区D-10グリッドに位置する。古墳の東端部を確認した。**重複関係** SK-16・18・19・20・23・99・117・123・133等と重複する。何れも縄文時代の遺構と考えられ、本遺構が新しい。

【墳丘】

墳形 確認し得たのは東端部のみであるが、円墳とみられる。墳丘は、調査以前から確認されておらず、後世の削平によって失われたものと判断される。遺構確認面は表土下約0.5mで、概ねローム漸移層である。**規模** 墳丘の直径は12m弱、周溝外周の直径は14m弱と推定される。**墳丘の構造** 古墳の中軸線に最も近い調査区西側の壁面の土層の観察を行った。主たる遺構確認面となるローム漸移層上面も削平されている可能性が高く、構造等は不明である。表土1層は本古墳だけでなく、調査区内を概ね被覆する黒色土である。B区SZ-41表土1層に対応すると判断される。SZ-41表土1層は調査区内で確認された古墳の最上層に堆積する黒色土と特徴が似る。本古墳表土1層はSZ-41表土1層より褐色の強い色調で、粘性は薄い。SZ-41の堆積を鑑み、旧表土或いは盛土が、古墳上面削平の際にならされた可能性を指摘しておきたい。周溝北側に堆積するSP-A6層は黒色土である7層の上位に堆積するが、周溝覆土であるか、表土の範疇の堆



- SZ-30
- 表土 1 暗黒褐色土 ローム粒子(～0.1cm)多量、炭化物粒子(～0.1cm)・白色粒子、しまりあり。
 2 黒褐色土 ローム粒子(～0.1cm)少量、炭化物粒子(～0.2cm)、白色粒子、しまりあり。
 3 暗褐色土 ローム粒子(～0.1cm)含む、炭化物粒子(～0.1cm)、白色粒子、しまりあり。
 4 暗褐色土 ローム粒子(～0.2cm)、炭化物粒子(～0.3cm)、白色粒子、しまりあり。
 5 暗褐色土 ローム粒子(～0.1cm)・ロームブロック(～0.8cm)少量、炭化物粒子(～0.2cm)白色粒子、しまりあり。
 6 暗褐色土 ローム粒子(～0.2cm)少量、炭化物粒子(～0.1cm)、白色粒子、しまりあり。
 7 黒褐色土 ローム粒子(～0.1cm)少量、炭化物粒子(～0.1cm)、白色粒子、しまりあり。
 8 暗褐色土 ローム粒子(～0.1cm)、炭化物粒子(～0.2cm)、白色粒子、しまりあり。
 9 暗褐色土 ローム粒子(～0.2cm)・炭化物粒子(～0.3cm)少量、白色粒子、しまりあり。
 10 暗茶褐色土 ローム粒子・ロームブロック(～5.0cm)主体、炭化物粒子(～0.3cm)少量、白色粒子、しまりあり。
 11 黒褐色土 ローム微粒子含む、粘質の黒色土。
 12 暗褐色土 ローム粒子(～0.1cm)含む、炭化物微粒子・白色微粒子若干量、しまりあり。
 13 暗褐色土 ローム粒子(～0.1cm)含む、炭化物粒子(～0.1cm)・白色粒子少量、しまりやあ。
 14 暗茶褐色土 ローム粒子(～0.1cm)含む、炭化物微粒子若干量、しまりあり。
 15 暗茶褐色土 ローム粒子(～0.1cm)含む、ロームブロック(～0.8cm)少量、炭化物微粒子・白色微粒子若干量、しまりあ。
 16 茶褐色土 ローム粒子(～0.1cm)やや多量、炭化物粒子少量、白色の小礫(～0.2cm)若干量、硬くしまる。
- S-21
- 1 暗褐色土 ローム微粒子やや多量、ローム粒子(～0.3cm)含む、白色微粒子若干量、硬くしまる。
 2 暗褐色土 ローム粒子(～0.1cm)含む、白色粒子・炭化物粒子少量、硬くしまる。
 3 暗褐色土 ローム粒子(～0.1cm)多量、ロームブロック(～1.0cm)含む、硬くしまる。



L-151.4m
 0 1:80 2m

第169図 第30号古墳実測図

積土であるが判然としない。

【周溝】

周溝 東端部を確認した。SK-16-18間については攪乱により確認できなかった。SK-133重複部の外側の立ち上がりは、本遺構のラインかSK-133のラインか判然としない。SK-99・133重複部の立ち上がりは重複により不詳である。遺構確認面での幅は0.8～2.0m底面の幅は0.6～1.6mでありが、最も狭まるは南東部を除けば、遺構確認面2.0m前後・底面1.6m前後である。遺構確認面からの深さは0.3～0.5mであり、北側がやや浅い。壁面の立ち上がり角度(古墳内側・外側)はSP-A南側:25度・30度、SP-B:25度・37度、SP-A北側:36度・37度であり、墳丘側の傾斜が強い傾向にある。底面は概ね平坦である。底面のレベルは、SK-99重複部付近:約150.14m、SP-B付近:約150.05m、SK-117付近:約150.03m、SK-18付近:約150.14m、SK-18調査区西壁間:150.26m、調査区西壁付近:150.22mであり、東側に向けて低くなる。工具痕等は確認されなかった。**覆土** 16層を確認した。1・7・11層は周溝内土坑の現状の最上層であり、粘性のある黒色土が堆積する。6層は、先述のとおり、表土であるか、周溝覆土であるか判然としない

【埋葬施設】

埋葬施設 周溝寄りに位置するS-21に埋葬施設である可能性が考えられる。調査区西端部に位置し、全容は不詳である。平面形は、北側を攪乱により失うが、南側は窄まる形状である可能性が考えられ、舟形を想定し得る。南北の規模は最大3.8m、東西は現状で約1.0m、深さ約0.3mである。底面のレベルは約150.32mである。覆土は3層を確認した。レンズ状の堆積が観察される。底面付近から12～14の鉄製品、底面から約0.1m上位から15の礫が出土する。本遺構がSZ-41の埋葬主体であったとしても、位置的に主たる埋葬施設とは考えがたい。

【出土遺物】

遺物出土状況 周溝及びS-21から出土する。周溝内からは粗製土器、縄文土器片・石器・礫が出土する。主に出土するのは縄文土器片・石器であるが埋没の際に流入したか。礫の帰属については判然としない。7～9は周溝北西部から出土する。7・8は底面付近、1は底面より0.1m程上位から出土する。礫である。4～6はS-21から出土する。S-21からは縄文土器片・石器・礫、鉄製品が出土する。鉄製品は本遺構に伴うものと考えられる。縄文土器・石器は埋没の際に流入したか。礫の帰属については判然としない。

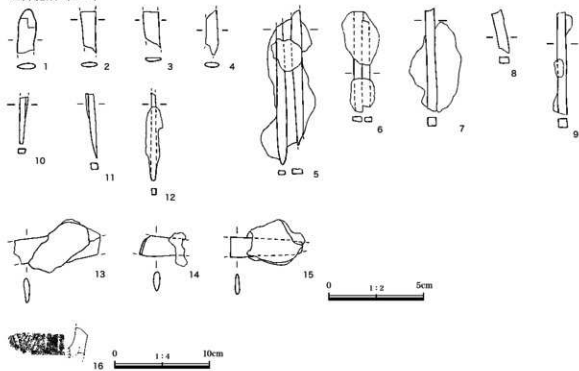
出土遺物 周溝からは1～8を図示する。1は貫通孔の周囲に沈線を施す突起片。裏面は浅く不明瞭な沈線が垂下する。3はキザミを施す隆帯に沈線が沿う。隆帯の貼付状況から図示したが、90度反転する可能性がある。体部は櫛歯状工具で条線を施すが、隆帯上部の状況は不明である。後期初頭か。2は横位の地縄文を施す。接合部に粘土組織み上げのためとみられるキザミ目が付される。4～6は粗製土器。表101に記載する。古墳時代以降の出土遺物は4～6のみである。4～6は別個体とみられる。形状からは7世紀代の特徴を有するか。本古墳に伴うか判然としない。

この他、図示し得なかった出土遺物は以下のとおりである。

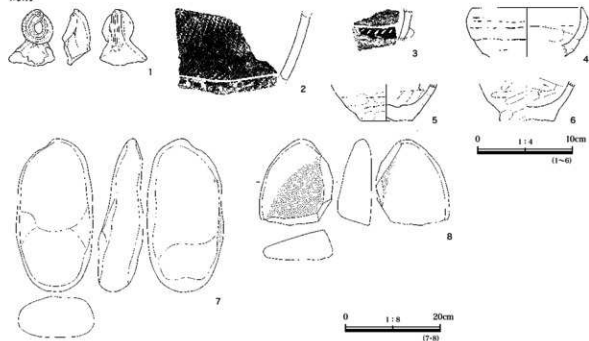
加曾利E1式の浅鉢とみられる口縁部片1片、溝巻きを付すか。加曾利E式後半とみられる口縁部文様帯小片2片、3条一組の磨消を伴う懸垂文小片1片。加曾利E式とみられる地条線に波状の沈線がみえる小片1片。加曾利EⅢ式とみられる口縁部文様帯或いは磨消縄文手法の小片1片。曾利式系とみられる押捺を施す隆帯が垂下する小片1片、地条線2片。加曾利E式後半～後期初頭とみられる沈線間に磨消を施す小片5片。称名寺式に平行する加曾利E式とみられる口縁部下に微隆起線が横断する小片1片。帯状区画とみられる小片6片。後期初頭とみられる、波状口縁の上端部に沈線を施す小片1片、口縁部下を窓枠状に沈線を施

す可能性のある小片1片。堀之内1式とみられる一次区画線とみられる沈線下に刺突を施す小片1片、地縄文に単沈線を施す小片1片。堀之内後式とみられる半載竹管状工具で半円状の沈線を描く小片3片、同一個体か。時期不明の無文に沈線がみえる小片1片、地縄文片54片。無文の小片33片。底部小片3片。磨滅片・微細片6片。石器・礫は表97に記載する。この他、小礫・小礫塊19片が出土する。このうち、2片には

埋葬施設 (S-21)



周溝



第170図 第30号古墳出土遺物実測図

赤色変化がみられる。

S-21からは1～16を図示する。16は流入遺物か。

1～15は鉄製品である。1～12は鉄箆か。1は箆身部先端、2～4は小片であるが箆身部か。1～4の幅はほぼ一致するが同一個体であるか別個体であるか判然としない。5～9は頸部、10～12は茎端部か。何れも小片であり接合せず、形状・本数は判然としないが、形状は両刃の頸部の長い鉄箆で、本数は茎端部の本数から3本以上か。何れも覆土下層からの出土であり、調査区外に残存する可能性が残る。1～12については表102に記載する。13～15は刀子か。接合せず詳細は不明である。13の残存値は長さ約(4.5)cm・幅約1.4cm・重さ約20.00g、14の残存値は長さ約(2.5)cm・幅約1.2cm・重さ約3.88g、15の残存値は長さ約(4.2)cm・幅約1.0cm・重さ約18.99gである。

16は磨消を伴う懸垂文が垂下する。縄文時代中期後半以降の破片であり、混入したものと判断される。この他、図示し得なかった出土遺物は以下のとおりである。

加曾利E式後半～後期初頭とみられる沈線間に磨消を施す小片1片。加曾利EⅤ式とみられる地縄文に微隆起線を施す小片1片。後期初頭～後期前葉とみられる無文「L」字形の沈線を施す小片1片。時期不明の地縄文に沈線は配する小片3片、無文に沈線を配する小片2片、地縄文片8片、無文の小片5片。石器・礫は表97に記載する。

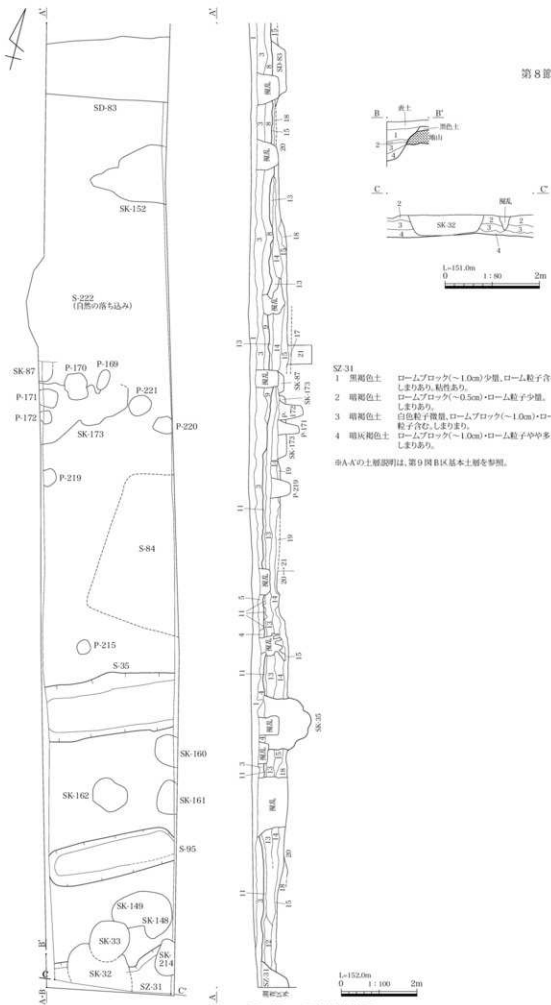
第31号古墳 (SZ-31) (第9・171～177図 表98 図版一三～一五・二九)

【立地】

位置 B区D-9グリッド以北に位置する。B区南端に確認された掘り込みは古墳の南側の周溝と考えられる。東・西側の周溝は調査区外とみられるが、北側の周溝は明瞭ではない。遺構の堆積土、地山土の堆積状況からはSD-83或いはSD-37と判断されるが、位置的にSD-64の可能性も否めない。**重複関係** 周溝と重複するSK-32は本周溝より新しい。周溝内側にあると判断されるSK-37・148・149・160～162は何れも縄文時代の遺構と考えられる。SK-152・214・216、P-169～172・217～221・278との新旧関係は不明である。

【墳丘】

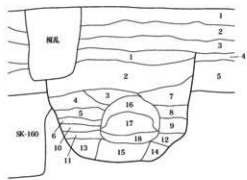
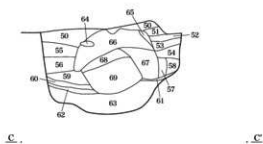
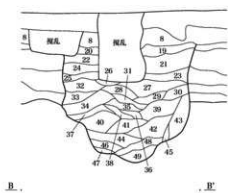
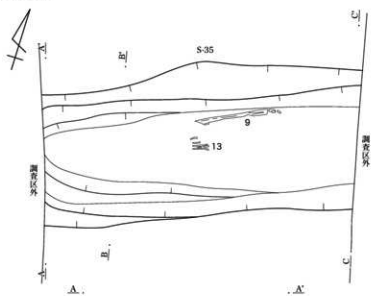
墳形 確認し得たのは一部であり、墳形は不明である。墳丘は、調査以前から確認されておらず、後世の削平によって失われたものと判断される。**規模** 北側の周溝が明瞭ではないが、SD-83を周溝の北側とするならば、SZ-31-SD-83間の距離は、調査区東壁で約22.0m、西壁で約23.0mである。**墳丘の構造** 調査区西側の壁面の土層の観察を行った。調査区東側の壁面は攪乱が著しく観察し得なかった。表土下には、表土1・3・4・8・9層、これらの下面には地山11～15層、さらに下面はローム漸移層・ローム層が堆積する。表土4層はロームブロックを主体とする層であり、SZ-35周辺の調査区西壁付近にのみ堆積する。現地調査時には、SZ-35被覆後の墳丘盛土最下層の可能性を考慮したが、南側に堆積する表土3層が周溝上を覆うこと、表土4層(ロームブロック層)の堆積がSZ-35全域を覆うものではないこと、また、表土4層(ロームブロック層)がC区SZ-26の調査区東壁付近に堆積する第10図表土3層と極めて似ること、などから、表土、或いは、墳丘盛土が後世の削平の際に再堆積したものと判断した。表土3・4層下に堆積する地山11層は旧表土とみられる黒色土である。埋葬施設とみられるSZ-35は地山11層(黒色土)以下を掘り込むことが確認される。C-8グリッドP-171付近より以北は黒色土ブロックを含む黒褐色土であり、SZ-41付近に確認される、後世の削平による再堆積土に類する堆積層と考えられる。P-171付近より以南は、黒色土の純層とみられ、旧表土と判断される。堆積厚が10cmほどと薄い、削平に伴うものか、墳丘への盛土に先立つ地



- SZ 31
- 1 黒褐色土 ロームブロック(～1.0m)少量、ローム粒子含む、しまりあり、粘性あり。
 - 2 暗褐色土 ロームブロック(～0.5m)・ローム粒子少量、しまりあり。
 - 3 暗褐色土 白色粒子散在、ロームブロック(～1.0m)・ローム粒子含む、しまりあり。
 - 4 暗灰褐色土 ロームブロック(～1.0m)・ローム粒子やや多量、しまりあり。

※A-Aの土層説明は、第9図B区基本土層を参照。

第171図 第31号古墳実測図



第172図 第31号古墳埋葬施設S-35実測図

山面の整地であろうか。

【周溝】

周溝 B区南端部のSZ-31が墳丘南側の周溝であるならば、周溝は調査区外を東西に周り、北側は調査区内を横切ると考えられるが、北側の周溝は明瞭ではない。C-7グリッドを東西に延びるSD-83は、地山土とみられる基本土層15層を掘り込んでいる点や、覆土の現状の最上層に他の周溝と共通する黒色土が堆積する点、周辺から埴輪片が出土する点などから、周溝である可能性が考えられる。位置的にSD-37・64の可能性も残る。特に、SD-37は覆土から埴輪片が出土する点や、粘性のある黒色土の堆積や埋納部ともとれる四角形状の堆積の観察から、周溝が想定される。**規模** 墳丘南側の周溝の幅は調査区外に延びるため不詳である。深さは表土下約0.7m、底面レベルは約150.0mであるが、最深の深さを表すものかは不明である。

覆土 墳丘南側で4層分を確認した。墳丘南側1層は粘性のある黒色土であり、SD-83・37の覆土にも観察される。墳丘南側では、旧表土と判断される墳丘11層(黒褐色土層)を掘り込んで堆積することから、周溝の立ち上がりは現状の標高150.8mより上位であろう。

【埋葬施設】

埋葬施設 S-35・95に埋葬施設の可能性が考えられる。埋納部は、形状や覆土の堆積状況からSZ-35は割竹形木棺或いは舟形木棺、S-95は舟形木棺か。何れも東西に長い土壌墓であり、ほぼ平行して位置する。新旧関係は判別できないが、先に穿たれた土壌墓の主軸が意識されているものと考えられる。墳丘上に占める位置的状況は不明である。S-35北側には、表土下直近に小礫層が露出するS-84がある。S-84については南側周溝SD-83の中央部にあたり、小礫層の露出状況などから、表土4層(ロームブロック層)同様の埋葬施設直上の埋土を疑いトレンチ調査を行った。しかし、手作業による掘削は極めて困難であり、このことを考慮するならば、S-35・95の南側周溝寄りの位置については、掘削に困難の伴うS-84を避けた結果とも考えられる。

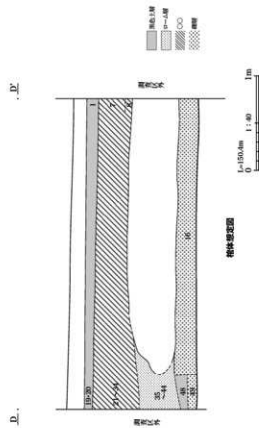
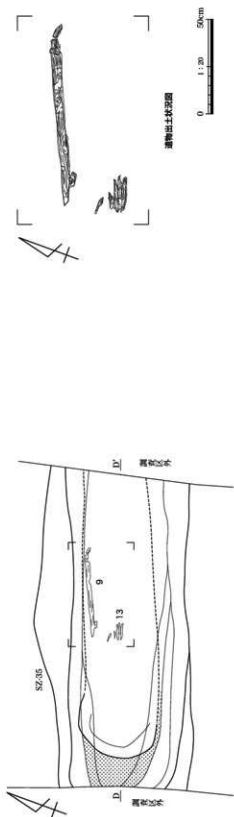
〈S-35〉

形状・規模 堆積土に礫を多量に含むため擾乱土と誤認し、遺構確認面を下げ、覆土の除去を行った。地山11層(黒色土)を掘り込むが、これより上面については不詳である。本遺構上面の表土4層(ロームブロック層)が墳丘盛土に由来するとすれば、確認された遺構上面は本来の掘り込み面付近に相当するか。

平面形は東西に長い長形である。底面の西側端部は徐々に窄む形状にある。断面形は中段を持ち、垂直気味に立ち上がる。中段部は概ね棺埋納部の下面に相当する。長さは不詳であるが、現状の東西長は、調査区幅の約3.1mである。幅は、遺構確認面の南北1.5m前後、中段部の南北約1.0m、底面の南北は0.7m前後であるが西端部は約0.2mまで窄む。深さは、現状で表土下約1.2mであるが、本来は更に深さがあるものと判断される。底面は概ね平坦である。中段部の標高は149.6～149.8m、底面の標高は約149.5mである。主軸はN-72°-Eである。

覆土 69層を確認した。1～18層は調査区東壁(SP-C)、19～49層は調査区西壁(SP-A)、50～69は西壁寄り(SP-B)に観察される。総じて、礫の混入が著しい。本遺構北側は表土下に礫層が露出するS-85があり、本遺構北壁はローム層を挟んで、S-85に続くと思われる小礫層となる。本遺構に礫層を穿った形跡はないが、この礫層部の礫が本遺構覆土の礫に利用された可能性は否めない。

調査区東壁は土壌墓の最も土壌墓中央に近いラインであり、埋納部の痕跡が観察される。覆土は水平な堆積であるとともに、①[土壌底面の13～15層]・②[埋納部とみられる16～18層]・③[埋納部底面付近(棺身部)の10～12層]・④[埋納部上面(棺蓋部上面)までの4～9層]・⑤[埋納部を被覆する2・3



第 173 図 第 31 号古墳埋葬施設 S-35 棺内状況図・遺物出土状況図

層)・⑥[墓壇を被覆する1層]の6分割が可能であり、覆土の堆積順序を示すと判断される。①:15層は礫を主体とするが、13・14層は礫の堆積は少ない。断面の中段部を目印に、埋納部直下に15層、その両側に13・14層を敷き、棺を置いたものと考えられる。②:16~18層は円形状に堆積する。16・18層は黒色土層であるが、16層は半円形、18層は端部に丸みのある平坦な堆積である。16層は棺蓋、18層は棺身、17層は埋納部の痕跡か。③:10~12層はローム・礫を含む。棺を据えた後、棺南側を10・11層、棺北側を12層で棺身上端まで埋め戻したものとみられる。或いは、棺の蓋を設けない状態であったことも推定される。④:4~9層は礫を多量に含む黒色土である。棺蓋を設えた後、棺南側を4~6層、棺北側を7~9層で棺蓋上面まで埋め戻したものとみられる。⑤:2・3層は墓壇埋土とみられる。2層はロームを多量に含み、水平に堆積する。3層については4~9層に類する可能性も否めないが、棺体を被覆する堆積層とみられる。2層は粒状20cm前後の黒色ブロックが斑状に堆積する。分層は行わなかったが、黒褐色土と暗褐色土が、西側20~33層のように交互に堆積する可能性は高い。⑥:1層は西側19・20層に対応するか。水平に堆積する。墓壇最上部に近い堆積土か。

調査区西側は土壇墓西側端部にあたる。埋納部の痕跡は調査区壁の約0.3m東方付近で終結する。堆積土は、色調によって大きく上下に二分できる。上半部はロームを主体とする黄褐色19~33層、下半部は黒色の34~49層である。上・下半部境界のレベルは150.2m前後であり、東側堆積層の、棺を被覆する1~3層、下半部は棺を埋める4~18層のレベルとほぼ一致する。埋め戻しが棺を境に大きく2回に分けて行われたと想定される。下半部はロームを含む黄褐色土が堆積するが、ロームの含有量の多少により、黄褐色と暗黄褐色を交互に埋め戻し、東側①~④との対応関係が見て取れる。①:棺下部となる遺構底面は暗黄褐色の45~49層が堆積する。堆積上面のレベルは149.7m前後であり、東側13~15層の上端部とほぼ一致する。②:埋納部は東方約0.3m付近で終結するため対応層はない。③:棺身部を埋める層位に堆積する42~43層は黄褐色土である。堆積上面のレベルは概ね149.8~150.0mであり、東側10~12層の149.8~149.9mのレベルに近い。④:棺蓋を埋め戻す層位に堆積する34~41層は暗黄褐色土と黄褐色土が交互に堆積する。下面から、暗黄褐色土(41層)→黄褐色土(40層)→暗黄褐色土(37~39層)→黄褐色土(34~36層)である。また、各層の堆積方向から、埋め戻しは南・北の2方向から水平を意識して行われたと判断される。⑤:埋納部を被覆する層位に堆積する21~33層は黒褐色土である。ロームの多少により、黒褐色、黄黒褐色に分層が可能であり、南・北2方向から色調を違えて交互に埋め戻したと判断される。南側は、下位から、黒褐色(33層)→黄黒褐色(32層)→黒褐色(25層)→黄黒褐色(24層)→黒褐色(22層)である。北側は、下位から、黄黒褐色(29~31層)→黒褐色(27・28層)→黄黒褐色(23層)→黒褐色(21層)である。南・北側とも堆積は概ね水平であるが、南・北側で色調を違えている点。留意される。⑥:墓壇を被覆する層位には19・20層が堆積する。ロームの含有量に多少はあるが、何れも黒色土である。下層の21層以下は色調を交互に違えた堆積が観察されるが、南側の22層→20層、北側の21層→19層とも黒色土が重なることから、表土11層(黒色土)層位付近は⑤とは性格を異にする堆積層である可能性が考慮される。明確な物証はないが、①~⑤は棺の埋納、⑥は墓壇の被覆に関わる堆積層である可能性を考えておきたい。

調査区西寄り埋納部西端部付近にあたる。堆積土は総体的に黒色であるが、棺身部付近に堆積する暗黄褐色土層の61・62層を挟んで黒褐色土が堆積するなど、東壁の堆積状況に共通する。63層は東側①(13~15層)、66~69層は東側②(16~18層)、61・62層は東側③(10~12層)、50~60層は東側④(4~9層)に対応する。50~60層は似通った色調ではあるが、ロームの堆積の多少による差異が観察され、棺南・

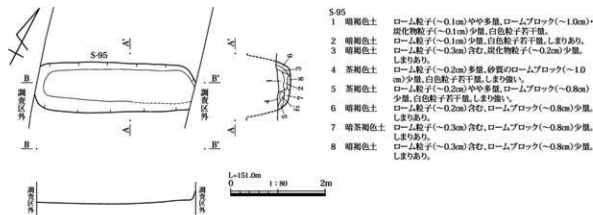
北側とも、黒褐色→黄黒褐色の交互堆積となる。南側は〔黒褐色土(60層)・黒褐色土(59層)〕→黄黒褐色土(55・56層)→黒褐色土(50層)、北側は〔黒褐色土(57層)・黄黒褐色土(58層)〕→黄黒褐色土(53・54層)→黒褐色土(51・52層)→黒褐色土(50層)である。

埋納部 掘乱穴との誤認、及び、多量の礫の堆積によって詳細な観察をなし得なかった。木質の腐食痕とみられる黒色土(16・18・66層)の観察から木棺と推定される。調査区西側壁より西方約0.3m付近より以東に確認される。平面形は長形で、墓壇に平行に位置する。現状での長さは約2.9mである。幅は、西端部では0.8m前後、調査区東壁付近では約0.65mであり、東に向かって窄む形状にある。高さは約0.5mであり、上・下面とも概ね水平であるが、上面は西側端部から約0.4m付近から、下面は西側端部から約0.3m付近から、端部に向かい窄まる形状にあり、棺底面からの高さ約0.18m付近で棺端部となる。端部は約0.1mほどの厚さの半円形状である。棺蓋上面は半円形状、棺身下面は端部に丸みのある平坦な形状である。棺身底部面、棺西端部の黒色土の堆積形状から舟形木棺、或いは割竹形木棺と想定される。

出土遺物 鉄刀1本、鉄鏃16本以上が出土する。鉄刀は、調査区東・西壁間の中央部付近、遺構底面付近北壁際から出土する。切っ先は破断し、10cmほど柄側の棟付近から出土する。茎部は折れた状態で出土する。覆土15層の相当する礫を多量に含む堆積土を除去する過程に確認した。切っ先を西側に向け、遺構掘方に平行して出土する。刃部の破断部近くから白色の粗い粒子が出土する。骨片の可能性が考慮されたが粒状であり詳細は不明である。鉄鏃は掘方底面の南北間の中央部付近、遺構底面より10cmほど上位での出土が確認される。西端部を鉄刀の切っ先を揃え、7本以上が束ねられたように纏まって出土する。木質等の確認はないが鞘等の容れ物に納められていた可能性も考慮すべきか。鉄刀、鉄鏃とも、遺構の底面付近、15層に相当する礫を多量に含む堆積層から出土しており、想定される棺体部からの出土ではない点、留意される。

(S-95)

形状・規模 表上下での確認ができず、遺構確認面を下げる結果となった。遺構確認面からの深さは約0.3mであるが、S-35周辺同様、更に上面から掘り込まれた可能性が高く、現状より深さがあつたものとみられる。平面形は、東西に長い長円形状であるが、東端部は角形を帯び、西端部は丸みを帯びる。また、底面は西にむかって窄む形状にある。長さは、遺構確認面の東西約3.5m、底面の東西3.2m前後と推定される。幅は、遺構確認面の南北約1.0m、底面の南北は東端部で約0.7m・西端部で約0.55mである。底面はほぼ平坦であり、底面レベルは149.85m前後である。主軸はN-64°-Eである。 **覆土** 8層を確認した。1層より上層は地山土と似た覆土である。1・2層は埋納部の痕跡か。2層底面のレベルは149.9m前後であり、墳



第174図 第31号古墳埋葬施設 S-95 実測図

丘4層（ロームブロック層）下面から0.8 m前後の深さにある。3～7層は土層中のロームの多少によって、上半部の3～5層、下半部の6・7層の区分が可能と思われる。8層を底面に敷設、1・2層を痕跡とする埋納部を水平に埋め戻したものと判断される。4層中には拳大の小礫が出土するが、1点のみの出土であり、礫部は確認されない。

【出土遺物】

遺物出土状況 周溝内から土器片33点、S-35内から鉄刀・鉄鎌・土器片38点・石器・礫41点が出土する。土器片は何れも縄文土器であり、本遺構に帰属する可能性は低いと考えられる。石器についても縄文時代の礫石器とみられる。礫については帰属は判別し得ない。S-95内からは遺物の出土は確認されなかった。

出土遺物 9は鉄刀、10～12は鉄刀に付随するか。13～32は鉄鎌である。

9は片間の鉄刀である。鞘とみられる木質部が良好に残るが錆の付着は著しい。切っ先は破断し原位置から離れて出土する。茎部は折れた状態で出土する。破断した切っ先と刃部は接合せず、間の破片は失われている。切っ先長約[7.0] cm・残存する刃部長約[73.0] cm、推定される刃部長約(79.0) cmである。茎長は約[18.9] cmである。刃部幅約3.0 cm・関付近で約3.3 cm、茎幅は刃部寄りの広い部分で約2.0 cm、柄頭寄りの狭い部分で約1.4 cm、刃部の棟厚約0.8 cm、茎の棟幅約0.6 cmである。X線写真によれば、刃部の各所に鉄の腐食によって原形を失う部分が観察される。また、茎元には抉りとみられる段状部が観察される。茎には目釘穴が3カ所穿たれるか。明瞭に確認されるのは関寄りの2ヶである。目釘は確認されない。穴の径は関に近い方から約0.5 cm・約0.5 cm・約0.5 cmである。鎌元にも1ヶが穿たれる。径約0.5 cmである。木質部の残存状況からみて、鞘木の内部まで茎元部が入り込む可能性が観察され、鞘や柄木の付け替えが行われた可能性が考慮される。茎の棟の部分に木目の痕跡はない。また、柄を巻く紐の痕跡も現状では確認されない。象眼は確認されない。10～12は木質の刀装具の一部か。接合はしない。表面は平滑で段差を持つ。10は粗い布目が付着する。11は孔が付される。12の詳細は不明であるが10同様粗い布目が付着する。刀装具の一部か。

13は纏まった状態で出土した鉄鎌である。鎌身部は、塊状の1に7本、14～17、及び、平滑な破片である18～20が鎌身部である可能性を考慮し、現状で12本以上とみられる。胴袂樹形であるが、逆刺が深い。関は台形関とみられる。茎の断面は方形である。13は塊状であるが、鎌身部～頸部4本、鎌身部とみられる平滑な破片1本、頸部から茎とみられる1本、茎端部1本が確認される。14は一部の木質が残る。15～20は鎌身部。14～17は逆刺が観察される。18～20は平滑な小片である。21～23は頸部の破片か。24は頸部から茎が残る。25～32は茎片である。頸部の全長が残るものではなく、残存する最大長は13の約(6.0) cmか。各計測値は表103に記載する。

1～8はS-35から出土するが流入遺物か。

2は棺体に張り付くように出土する。3条一組の懸垂文か。地縄文(RL)は太い縄と細い縄を巻き付けるか。1は沈線で口縁部文様帯を作出か。体部は磨消を施す懸垂文とみられる。加曾利EⅢ式か。

図示し得なかった出土遺物は以下のとおりである。

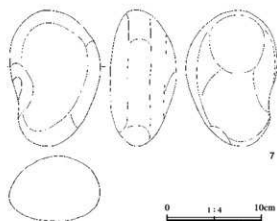
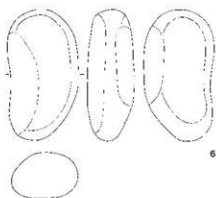
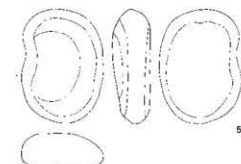
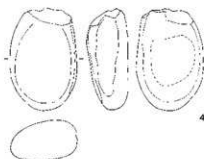
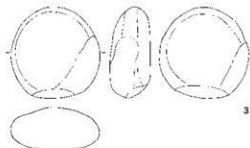
周溝内からは以下が出土する。無文の口縁部1片、無文に単沈線を施す小片1片、無文に集合沈線で紡錘状のモチーフを描く小片1片、堀之内1式か。縄文部と無文部との区画を持たない小片1片。地縄文に沈線の一部分のみ見える小片1片。無文に沈線を施す小片3片。地縄文小片12片。無文の小片12片。磨滅片・微細片14.7 g。

S-35からは1・2の他に以下が出土する。

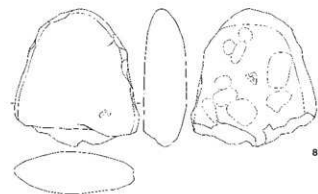
周溝



埋葬施設 (S-35)

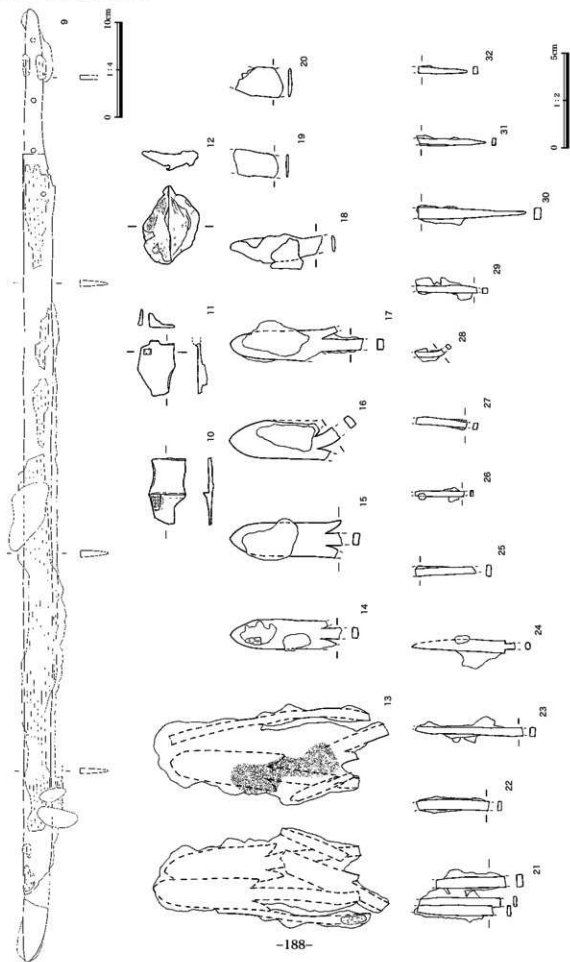


0 1:4 10cm
(1~7)



0 1:8 20cm
(8)

第175図 第31号古墳出土遺物実測図(1)



第176図 第31号古墳出土遺物実測図(2)

鉢縁間に磨消を施す小片2片、加曾目E式後半から後期初頭。縦位の地縄文に沈線がみえる小片1片。地縄文小片2片。無文の小片3片。磨滅片・微細片4片。石器・礫は表98に記載する。その他、微細歴・微細礫塊33ヶが出土する。

第41号古墳 (SZ-41) (第177～179図 表99 図版一五・一六・二四)

【立地】

位置 B区B・C・4、C-5グリッドに位置する。古墳の東半部の一部を確認した。**重複関係** SI-111・154、SK-108・110・159・237・238、P-163・164・232～236・238～240・242～245と重複する(第12図全体図参照)。SI-111・154は縄文時代の住居跡である。これ以外の遺構の詳細は不詳であり、本遺構との関連も判然としなない。

【墳丘】

墳形 確認し得たのは東側の一部であるが、円墳とみられる。墳丘は、調査以前から確認されており、後世の削平や擾乱によって失われたものと判断される。遺構確認面は表土下約0.4mで、概ねローム漸移層である。**規模** 墳丘の直径は12m弱、周溝外周の直径は14m弱と推定される。**墳丘の構造** 古墳の中軸線に近いと判断される調査区西側の壁面の土層の観察を行った。ローム漸移層上に0.07～0.2mの厚さの堆積土が観察される。図中、便宜上、墳丘1層(SP-A南側)と表記したが、盛土か地山土であるか判然としない。盛土であった場合は、墳丘1層下のローム漸移層が0.1mほどの厚さでローム面に至ることから、墳丘構築の際、ローム漸移層を削平し基底層とした可能性も考え得る。調査区内を通じて、ローム漸移層上面は南から北方へ向けて標高が高くなる傾向にあり、墳丘北側のローム漸移層については、削平のため本来の基底面を失っている可能性が考えられる。また、現地表下に堆積する表土1層は周溝覆土1・7・18・25・32層に似た粘性のある黒色土である。堆積するレベルを鑑み、旧表土或いは盛土が、古墳上面削平の際にならされた可能性を指摘しておきたい。表土2層については堆積方向から周溝内の旧表土がならされた可能性を想定しておきたい。表土1・2層は表土1・2層に対応するが、より淡色である。

【周溝】

周溝 東半部の南・北側を確認した。西半部、東側は調査区外にある。遺構確認面での幅は、1.2～2.0m、底面の幅は0.7～1.2m、遺構確認面からの深さは0.5m前後である。壁面の立ち上がり角度は一定ではなく、16°度から55度の幅を持つ。墳丘内外の角度は概ね一致するが、墳丘側の立ち上がりが若干ではあるが緩やかな傾向がみられる。底面は概ね平坦であるが、SP-C付近では楕円状となる。底面のレベルは、SP-A北側付近150.4～150.56m、SP-B付近150.42m、SP-C付近150.37m、SP-D付近150.2m、SP-E付近150.17m、SP-A南側付近150.28mで、周溝南東部にあたと推定されるSP-E付近に向けて低くなる。工具痕等は確認されなかった。底面にはp1～9が確認される。p1・2、p3・4は対状に位置する。p1・2を除き、周溝南東部にある。この付近の底面レベルが低いこととの関連は不明である。p1～8は何れも径0.2m前後の小穴で、周溝底面からの深さ・底面レベルは、p1:約0.15m・約150.4、p2:約0.2m・約150.36m、p3:約0.06m・約150.14m、p4:約0.16m・約150.07m、p5:約0.19m・約150.15m、p6:約0.1m・約150.16m、p7:約0.05m・約150.1m、p8:約0.06m・約150.09mである。**覆土** 覆土は47層を確認した。8～17・42・43層は周溝内土坑の覆土とみられ、粘性のある黒色土が堆積する。SP-A南:1層、SP-A北:7層、SP-B・F:18・19層、SP-C:25層、SP-D:32層が相応する。SP-B:21・23層は壁面の崩落層か。SP-C:29・30層はp1覆土、31層はp2覆土である。周溝堆積開始以前に埋没か。31層は土層の詳細を観察し得なかったが、30層より暗色であるが30層と似

SZ-41

1	黒褐色土	白色粒子含む、ローム粒子(-0.1m)少量、炭化物粒子(-0.1m)若干量、しまり強い、1・7-18-25に対応
2	暗褐色土	ローム粒子(-0.1m)含む、炭化物粒子(-0.1m)、白色粒子少量、しまりあり、3層より明るい、1層より明るい。
3	暗褐色土	ローム粒子(-0.1m)、白色粒子少量、炭化物粒子(-0.1m)若干量、しまりあり。
4	暗褐色土	ローム粒子(-0.2m)含む、ロームブロック(直径1.2m)下層に含む、しまりあり。
5	暗褐色土	ローム粒子(-0.3m)含む、ロームブロック(-0.8m)白色粒子少量、しまりあり。
6	暗黄褐色土	ロームブロック(-1.2m)多量、ローム粒子(-0.1m)含む、白色粒子少量、しまりあり。
7	黒色土	白色粒子含む、ローム粒子(-0.1m)若干量、しまり強い。
8	暗褐色土	ローム粒子(-0.1m)若干量、白色粒子微量、しまりややあり。
9	暗茶褐色土	ローム粒子(-0.1m)多量、白色粒子若干量、しまり強い。
10	暗褐色土	ローム粒子(-0.1m)やや多量、白色粒子若干量、しまりあり。
11	暗褐色土	ローム粒子(-0.1m)含む、ロームブロック(-0.3m)少量、白色粒子微量。
12	暗茶褐色土	ローム粒子(-0.1m)やや多量、炭化物粒子(-0.1m)含む、ロームブロック(-1.0m)下層に少量、白色粒子少量、しまりあり。
13	暗褐色土	炭化物粒子多量、白色粒子含む、ローム粒子(-0.1m)少量、しまりあり。
14	暗黄茶褐色土	ローム粒子(-0.1m)やや多量、ロームブロック(-1.5m)含む、白色粒子若干量、しまりやや強い。
15	暗褐色土	ローム粒子(-0.2m)やや多量、しまりやや強い。
16	暗黄褐色土	ローム粒子(-0.2m)多量、しまりやや強い。
17	黄褐色土	ロームブロック(-1.0m)主体層、ローム粒子多量、しまり強い。
18	黒色土	ローム粒子(-0.1m)、白色粒子少量、しまりあり、SPA1・7-18-25に対応
19	暗褐色土	ローム粒子(-0.1m)少量(18層より多量)、白色粒子少量(18層より多量)、1層より白色、しまり強い。
20	暗褐色土	ローム粒子(-0.2m)、白色粒子含む、しまりあり。
21	暗茶褐色土	ローム粒子(-0.1m)、ロームブロック(-0.5m)含む、しまりあり。
22	暗茶褐色土	ローム粒子(-0.1m)やや多量、炭化物粒子(-0.1m)、白色粒子(-0.1m)若干量、しまり強い。
23	暗茶褐色土	ローム粒子(-0.2m)多量、炭化物粒子(-0.1m)少量、しまり強い。
24	暗黄褐色土	ロームブロック主体、ロームブロックは砂質のものが多い。
25	黒色土	ローム粒子(-0.1m)少量、白色粒子少量、1・7-18-25層に対応、しまりやや強い。
26	暗黄褐色土	ローム粒子(-0.1m)、ロームブロック(-0.5m)含む、白色粒子微量、しまりややあり。
27	暗黄褐色土	28層よりローム粒子、ロームブロックの割合が多く、粘土となる黒色土は見えない、しまりややあり。
28	暗黄褐色土	黒色土中にローム粒子(-0.2m)、ロームブロック(-1.0m)含む、しまりややあり。
29	黄褐色土	ローム粒子ロームブロック(-1.0m)多量、しまりあり。
30	暗黄褐色土	ローム粒子(-0.1m)主体、ロームブロック(-0.2m)少量、28層より黄色味強い、しまりやや強い。
31	※事実記載参照	
32	黒色土	1・7-18(19)・25層に対応
33	暗褐色土	ローム粒子ロームブロック(-1.0m)含む、炭化物粒子白色粒子少量、しまりあり。
34	暗褐色土	ローム粒子ロームブロック(-1.0m)やや多量、炭化物粒子(-0.8m)含む、白色粒子少量、しまりあり。
35	暗茶褐色土	ローム粒子(-1.0m)やや多量、ローム粒子含む、炭化物粒子(-0.5m)、白色粒子少量。
36	暗黄褐色土	ローム粒子ロームブロック(-3.0m)やや多量、炭化物粒子白色粒子少量。
37	暗褐色土	白色粒子含む、ローム粒子(-0.1m)炭化物粒子(-0.1m)少量、しまりややあり。
38	※事実記載参照	
39	暗褐色土	白色粒子含む、ローム粒子(-0.1m)、砂質のロームブロック(-3.0m)炭化物粒子(-0.3m)少量、しまりやや強い。
40	暗黄褐色土	ロームブロック(-1.0m)多量、ローム粒子(-0.1m)やや多量、しまり強い、SPA6層に対応
41	暗褐色土	ローム粒子(-0.1m)やや多量、ロームブロック(-0.8m)、白色粒子含む、しまり強い。
42	暗褐色土	ローム粒子(-0.2m)多量、しまりあり。
43	暗茶褐色土	ローム粒子(-0.1m)やや多量、ロームブロック(-1.0m)少量、炭化物粒子(-0.1m)若干量、しまりあり。
44	暗褐色土	ローム粒子(-0.2m)含む、白色粒子少量、しまりあり。
45	暗茶褐色土	ローム粒子(-0.1m)やや多量、白色粒子少量、炭化物粒子(-0.1m)若干量、しまりあり。
46	暗黄褐色土	ローム粒子(-0.2m)やや多量、白色粒子若干量、しまり強い。
47	D・D 35層に対応。	

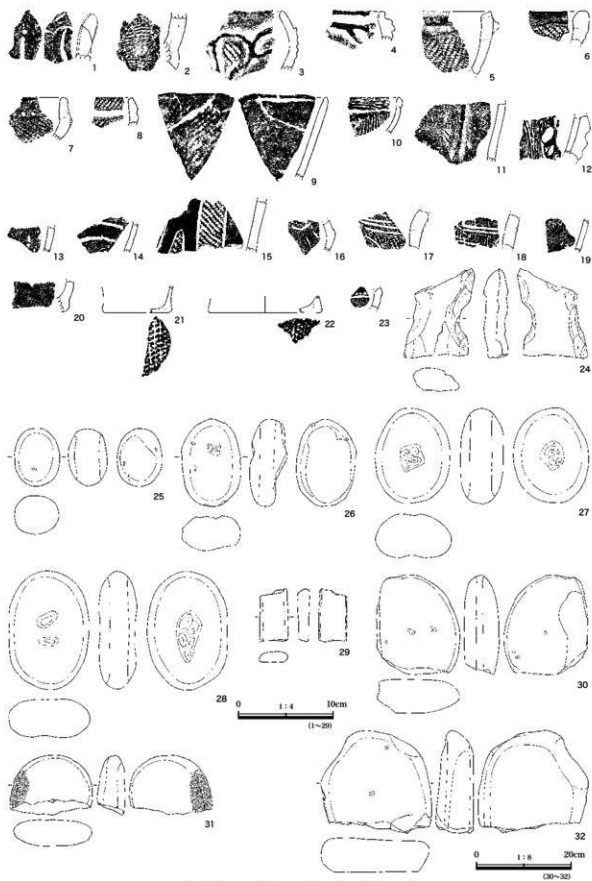
た特徴を持つ。SP-D:35層はp4覆土である。p4は周溝堆積開始以前に埋没か。34層下はp3覆土か。SP-E:38層は堆積層でなく、小礫が固化したような特徴を持つ。脆弱で崩れやすい。墳丘に関連する可能性はあろうか。

周溝内土坑 視覚的には観察されなれないが、調査区西壁よりの覆土から推定される。SP-A:8~17層、SP-F:42・43層を基に想定される範囲を図中に破線で示した。周溝覆土を掘り込んで堆積する。周溝覆土の観察からは、周溝が人為的に埋め戻された痕跡は薄く、古墳との時期差が想定される。覆土の観察から注意されることは、13層の堆積が方形状で炭化物を多量に含む点、8~10層、11・12層、14~17層が、13層の上位・周囲・下位に明確に堆積する点である。土坑の用途、古墳との関連は不詳であるが、13層を箱状の主体部とする埋葬施設である可能性も考え得る。

【埋葬施設】 調査区外とみられる。

【出土遺物】

遺物出土状況 周溝内から603点が出土する。土器片は、本古墳下部のSI-111・154 或いは周辺の縄文時代の遺構からの流入遺物か。周溝北東部の31は石皿片、34・35は自然礫であり、底面から5cmほど上位から出土する。本古墳下部の縄文時代の住居跡であるSI-111・154からは多量の礫が出土するが、その帰属については判然としなない。



第178図 第41号古墳出土遺物実測図(1)

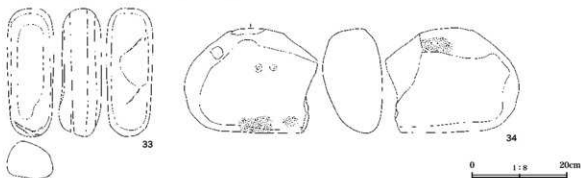
出土遺物 1は円環状の突起の小片か。表裏面は不明であるが、円孔を起点に沈線が沿うか。後期初頭か。2は舌状突起の小片か。中央部付近が凹状に窪む。中期末葉～後期初頭か。3～5は口縁部文様帯か。3・5は隆帯、4は隆・沈線で作出される。6は口縁部下の僅かに微隆起線の高まりが巡る。称名寺式に平行する加曾利E式か。7は口縁部下の僅かな微隆起線の高まりに列点が沿う。後期初頭か。8は帯状区画の口縁部か。称名寺式か。9は波頂部に円文を貼付する。裏面は口縁部に沿って沈線が巡る。堀之内2式か。10は粘土紐を貼り付けた口縁部にヨコ方向の条線、体部はタテ方向の条線を施す。11は微隆起線でモチーフを描くか。加曾利EⅣ式。12は押捺を施す隆帯が垂下する。曾利式系。13は帯状区画内に配された刺突列か。14・15は帯状区画か。16は無文に短沈線でモチーフを描くか。堀之内式か。17は単沈線でモチーフを描くか。一次区画線か。18は地条線に横位の沈線を施す。堀之内式か。19は不揃いの櫛歯状工具でモチーフを描くか。後期初頭～前葉か。20～22は底部小片である。底～体部の形状から堀之内2式以降か。21・22は編組品圧痕(1-2-1)かが残る。材間は空間を持つ。23は土製円盤か。タテ2.3cm・ヨコ2.3cm・厚0.9cm・重4.34gである。沈線下の右側面の一部は研磨が施されるか。後期初頭の小片か。

この他、図示し得なかった土器片は以下のとおりである。

表裏面に赤彩を施す無文の小片1片。加曾利E式後半とみられる隆・沈線で作出される口縁部文様帯10片。加曾利E式後半～後期初頭とみられる磨消縄文手法でモチーフを描くとみられる小片1片。加曾利E式後半～後期前葉とみられる沈線間に磨消を施す懸垂文状の小片6片。加曾利EⅣ式とみられる2条一組の微隆起線でモチーフを描く小片11片。称名寺式に平行する加曾利E式とみられる小片4片。称名寺式の帯状区画とみられる小片8片。後期初頭とみられる小片4片、1片は無文の口縁部、1片は一次区画隆帯とみられる無文の小片、1片は微隆起線に列点が沿う小片、1片は無文に刺突のみ見える小片、3片は鎖状の隆帯が垂下する小片。堀之内1式とみられる単沈線を配する小片3片。堀之内2式とみられる菱形の沈線を入れ子状に配する小片1片。堀之内式とみられる小片4片、1片は無文に盲孔を配する小片、1片は無文に半載竹管状工具で沈線を配する小片、1片は壺形等とみられる器壁の薄い小片、1片は底平な隆帯がみられる小片。時期不明の突起状の小片1片、時期不明の無文の口縁部小片1片、時期不明の無文に沈線でモチーフを描くとみられる小片26片。地条線小片8片。地縄文小片180片。無文の小片176片。底部小片7片。磨滅片・微細片123.1g。

石器・礫は表99に記載する。この他、小礫・小礫塊84ヶが出土する。

本古墳の時期は出土遺物からは図れない。



第179図 第41号古墳出土遺物実測図(2)

2. 埋葬施設

第184号土坑 (SK-184) (第180・181図 表100 図版一六)

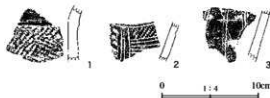
位置 C区E-13グリッドに位置する。調査区西端部に位置し、調査区外に延びる。**重複関係** SK-71と重複する。本遺構が新しい。**形状・規模・主軸** 平面形は不明であるが、方形状とみられる。規模は、遺構確認面の南北約0.7m・底面の南北約0.6mであり、垂直気味に立ち上がる。遺構確認面からの深さは約1.0mである。底面はローム層である。底面レベルは149.98m前後である。**覆土** 13層を確認した。確認し得た遺構空間が0.7m×0.3mほどと極めて狭く、かつ、調査区西壁に遮られており、土層面が暗く、覆土の観察は十分でない。7層～10層は平行に堆積する。何れもロームブロックの堆積が顕著である。7層は黒褐色土であるが、SZ-26・35の埋納部と棺蓋部とみられる堆積土に極めて似る。また、緩やかな半円状の堆積から棺蓋が想起されることから、埋葬施設である可能性を鑑み、本項に記載する。

遺物出土状況 覆土中から12点を確認した。重複するSK-71から流入した遺物である可能性が考えられる。

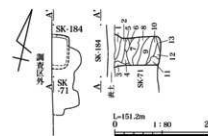
出土遺物 1は無文の口縁部下に微隆起線が巡る。加曾利EⅣ式。2は集合線縁でモチーフを描く。堀之内1式か。3は無文に半載竹管状工具で格子目を描く。後期前葉か。

この他、図示し得なかった土器片は以下のとおりである。

無文の口縁部小片2片。地縄文の沈線の一部がみえる小片2片。地縄文小片1片、周縁を打ち欠くように破砕しており土製円盤の未製品の可能性も残る。研磨等は確認されない。無文の小片2片。磨滅片・微細片19.5g。礎は表100に記載する。



第180図 第184号土坑出土遺物実測図



SK-184	
1 黒褐色土	ローム粒子・ロームブロック(～2.0cm)多量、炭化物粒子・白色粒子少量、しまりあり。
2 黒褐色土	ローム粒子・ロームブロック(～1.5cm)やや多量、炭化物粒子・白色粒子少量、しまりあり。
3 黒褐色土	ロームブロック(～2.0cm)多量、白色粒子少量、しまりあり。
4 暗褐色土	ローム粒子・ロームブロック(～4.0個程度)多量。
5 黒褐色土	ロームブロック(～5.0cm)主体、しまりあり。
6 暗褐色土	ロームブロック(～5.0cm)多量、ローム粒子(～0.1cm)含む、炭化物粒子少量、しまりあり。
7 暗褐色土	ローム粒子・ロームブロック(～1.0cm)多量、炭化物粒子、白色粒子。
8 暗褐色土	ロームブロック(～3.0cm)やや多量、ローム粒子含む、しまりあり。
9 黒褐色土	ロームブロック(～6.0cm)多量、しまりあり。
10 黒褐色土	ローム粒子・ロームブロック(～2.0cm)多量、しまりあり。
11 暗褐色土	ローム粒子・ロームブロック(～1.0cm)多量、しまりあり。
12 黒褐色土	ローム粒子・ロームブロックやや多量、しまりあり。
13 暗褐色土	ローム粒子・ロームブロックやや多量、しまりあり。

第181図 第184号土坑実測図

第9節 性格不明遺構・自然地形

1. 調査の概要

本節では性格不明遺構や旧来の地形の落ち込みについて記載する。

性格不明遺構はSX-136の1基である。掘り込みは確認されたが人為的なものかどうか判別し得なかった。重複するSZ-26との関連も考慮されるが判然としない。また、P-209～212・282～284はSX-136西半部の周縁に沿うように位置するが関連は不明である。

自然地形とみられるのは、S-84・222である。

S-84は礎層とみられ第12図破線部を中心に、C・D・7・8グリッドにかけて確認される。

S-222は自然の落ち込みか。

2. 性格不明遺構

第136号性格不明遺構 (SX-136) (第182・183図)

位置 C区D-11グリッドに位置する。遺構東側は調査区外に延びる。**重複関係** SK-06・07・16・131・133・135と重複する。新旧関係は不明である。本遺構西半部の周縁に沿って、P-209～212・282～284が位置するが関連は不明である。**形状** 形状は不明である。遺構確認時の平面形も不明瞭である。遺構確認面からの深さは約0.2mである。底面のレベルは150.23～150.36mであり、西側が高く、東側が低い。**覆土** 2層を確認した。上層は暗褐色土、下層は茶褐色土であるが、地山である可能性も否めない。

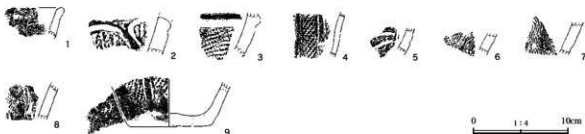
遺物出土状況 36点が出土する。

出土遺物 1は口縁部とみられるが、磨滅のため詳細は不明である。2・3は口縁部文様帯か。2は沈線、3は隆帯と沈線で文様帯を区画する。4は磨消縄文手法でモチーフを描出か。加曽利E式後半か。5は地縄文に単沈線でモチーフを描出か。堀之内1式か。6～8は同一個体か。櫛歯状工具で地文を施すか。中期末葉～後期前半か。9は磨消を伴う懸垂文が垂下する。中期後半か。

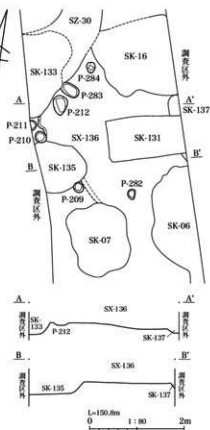
この他、図示し得なかった出土遺物は以下のとおりである。

隆帯に沈線の沿う小片2片、加曽利E式後半か。沈線間に磨消を施す小片3片、加曽利E式後半～後期前葉。ナデを伴わない微隆起線で区画する小片1片、称名寺式に平行する加曽利E式か。無文に数条の沈線が垂下する小片1片、堀之内式か。地縄文小片7片。無文の小片6片。底部小片1片。微細片1.4g。小礫及び小礫塊6ヶ。

本遺構は中期後半の土器片の出土がみられるが、堀之内1式に並行する時期の遺構と考えられようか。



第183図 第136号性格不明遺構出土遺物実測図



第182図 第136号性格不明遺構周辺実測図

第10節 遺構外出土遺物

1. 調査の概要

遺構外からは遺物収納箱（中）約150箱が出土する。内訳は、縄文土器5251片、土製品6点、石器・礫1047点、土師器15片、陶磁器片9片、埴輪1片、鉄製品16点などである。これらは、遺構外から出土した遺物や重機による表土除去の際に出土した遺物、掘乱穴から出土した遺物を含む。以下、時代ごとに概要を記す。

2. 縄文時代

（1）縄文土器

調査区内からは縄文時代前期～後期後葉にかけての土器片を主体に約5251片の土器片が出土する。小片が多く判然としない点が多いが、可能性の提示を念頭に時期毎に分別を試みた。分別項目については第5章まとめに記載する。小片のため、詳細については明瞭さを欠く点は否めず、分別時期に前後する土器片が含まれる可能性は否めない。分別項目に従って記載する。なお、出土位置及び破片数は分別項目に従い表17に記載する。最も出土数が多いグリッドはSI-111・154などを確認したC-5グリッドである。第11群加曾利EⅣ式を主体に前期～後期後葉まで1036片が出土し、他グリッドに突出する。最も出土数の多い時期は第20群堀之内1式で150片、次いで第11群加曾利EⅣ式129片である。

第1群 前期（第184図 表17）

調査区内において確認された前期の土器片は1のみである。2段ループ文とみられるが0段多条の可能性も残る。

第2群 加曾利EⅠ式（第184図 表17）

1～4は口縁部文様帯。1は4類1種、細い隆帯を貼付し文様帯を作出する。口縁部下に巡る隆帯に縄文が施される。この他、4片が出土する。2は4類2種、高い隆帯で渦巻きを作出する。3・4は4類3種、隆・沈線で渦巻きを作出する。口縁上端部には曖昧な沈線が巡るか。4上部の隆帯上は刺突列を意図か。この他、3片が出土する。5は地燃り糸文に隆帯とこれに沿う沈線で渦巻きを作出し、沈線の沿う隆帯が垂下する。大木系である可能性も残る。

6は6類1種、地燃り糸文に磨消を施さない懸垂文が垂下する。この他、地縄文に施される懸垂文が1片出土する。

この他、図示し得なかった加曾利EⅠ式とみられる土器片は、5類頸部無文帯小片3片が出土する。

第3群 加曾利EⅡ式（第184図 表17）

1・2は1類1種、隆帯とこれに沿う沈線で明確な渦巻き文から連繋する区画文を配する。この他、3片が出土する。1は区画文内に条線、2は刺突を充填する。2の体部は口状か。この他、3片が出土する。3～6は1類2種、低い隆帯とこれに沿う沈線で口縁部文様帯を作出する。この他、6片が出土する。3の単位文はしっかりと渦巻き状とみられる。4～6は口縁部文様帯下の区画が明瞭な土器片。4の体部は3条一組の懸垂文か。5の体部は口状か。6は幅広の懸垂文を配するか。

7は2類で1種で、沈線間に磨消を施す懸垂文が垂下する体部破片である。

第4群 加曾利E式前半（第184図 表17）

1・2は1類1種1、隆帯とこれに沿う沈線で口縁部文様帯が構成される。1は口縁端部の渦巻きから連繋して文様帯を作出する。2は渦巻き状の単位文から連繋して区画文が配される。地文は何れも縄文である。

この他、5片が出土し、うち2片が地縄文、3片が地条線である。3は1類2種で、口縁部文様帯下部が区画される。地文は撚り糸文。この他、12片が出土し、うち1片は刺突を充填する。1類1種の小片である1類1種4は図示し得なかったが、口縁部小片5片（うち、3片地縄文、2片地条線）、体部小片23片（地文不明）が出土する。4・5は1類2種、沈線で口縁部文様帯を作出する。この他、4片が出土する。何れも文様帯下部付近の小片である。4は単位文の渦巻きか。5は口縁部文様帯下の区画線か。6は1類3種、連弧文系か。6のみが出土する。

7は2類3種、沈線間に竹管状工具で刺突を施す。後期前葉の可能性も考慮されたが、器壁や胎土の状況から判断した。2類1種の沈線間に磨消を伴う懸垂文を施す体部小片については、図示し得なかったが、地縄文片3片、地撚り糸文片1片が出土する。地撚り糸文小片は大木系の可能性も残る。2類2種の波状懸垂文は3片が出土する。何れも地縄文に施される。

8は3類、浅鉢形とみられる。口縁部に渦巻きから連繋する区画が施されるとみられるが下部は欠損する。この他、無文の2片が出土する。

第5群 大木8b式（第185図 表17 図版二二）

大木8b式とみられるが、加曾利EⅠ・Ⅱ式と混在する可能性は否めない。

7は中空の突起。外面は橋状把手状で沈線が垂下する。内面は円窓を有する。突起頂部の渦巻き状の沈線は口縁部に連繋するか。

1は1類、口縁部文様帯片。懸垂文は単位文から連繋するか。後出する可能性も残る。1のみが出土する。

2は2類、口縁部文様帯下部か。横方向に巡る隆帯の上部に僅かに沈線のみ見える。この他、24片が出土する。

3～6は3類、体部小片である。3～5は地縄文を施す。この他、7片が出土する。6は地条線か。この他、4片が出土する。また、地文を撚り糸とする1片が出土するが図示し得なかった。体部小片は、地文不明の1片を含め、何れも3のような渦巻き状や幾何学的な文様を施す。

第6群 加曾利EⅢ式（第185図 表17）

1～4は1類、口縁部文様帯が作出されるとみられる土器片。1～3は1類1種1、口縁部文様帯。1は渦巻き状の沈線から連繋する沈線で口縁部文様帯を作出する。2は渦巻きが弱く、退化傾向がみられるか。3は単位文が円文化し、区画文への連繋はみられない。この他、2片が出土する。また、1類1種1の詳細不明の口縁部文様帯小片が7片出土する。4・5は1類1種2、断面三角形の隆帯、及びこれに沿う沈線で文様を作出する。4・5の他、13片が出土する。図示し得なかったが1類1種3、沈線で作出する口縁部文様帯小片が1片出土する。単位文と区画文の連繋はみられない。

14～16は2類、磨消縄文手法でモチーフを描くとみられる土器片。14・15は2類1種、上下2段構成が確認される土器片。「U」字或いは逆「U」字状のモチーフとみられる。16は中段部に隆帯が配される。7～11は2類2種1、文様構成不明の土器片である。6～8は細目の無文部でモチーフを繰り返すか。6はモチーフの頂部に突起が形成されるか。7は口縁部下の磨消部に円形の刺突と垂下する沈線を配する。この他、細目の縄文部を区画する1片が出土する。9・10は無文部で大振りのモチーフを描くか。11は口縁部下を横巡る凹線内に円形の刺突列を配する。モチーフ不詳の土器片は11の他に1片が出土する。

18は2類4種。小型で深鉢以外の器形か。

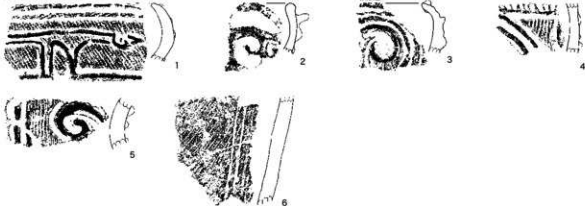
17は3類、胴部隆帯文系の土器片か。この他3片が出土する。

12・13は5類。12は5類1種2で、口縁部下に横巡る凹線内に刺突列が配される。5類1種1、口縁部は12片が出土し、何れも波状口縁である。13は5類3種、沈線でモチーフが描かれるか。13の他に1片

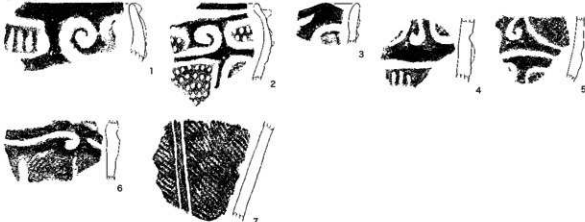
第1群



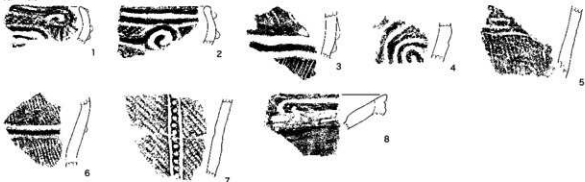
第2群



第3群

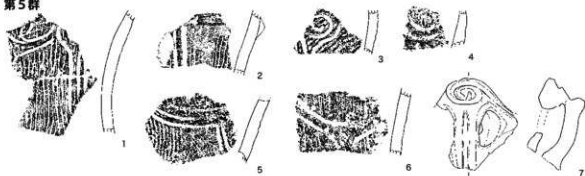


第4群

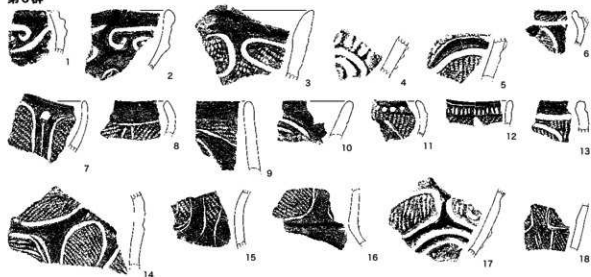


第184図 遺構外出土遺物実測図(1)

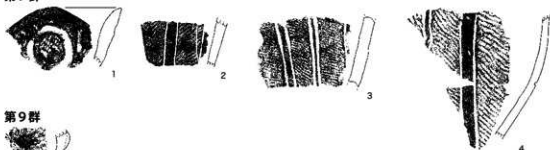
第 5 群



第 6 群



第 7 群



第 9 群



第 10 群



第 185 圖 遺構外出土遺物実測図 (2)

が出土する。

第7群 加曾利E II～III式 (第185図 表17)

1は1類1種、沈線で円文を描く。この他、3片が出土する。また、隆・沈線で円文を描く小片が3片出土する。

2～4は1類2種1、沈線間を磨り消す懸垂文とみられるが、磨消縄文手法の可能性も残る。2～4の他、15片が出土する。

この他、1類2種2、沈線で区画された縄文部と無文部がみえる小片12片が出土する。後出する時期である可能性も残る。

第8群 大木9式 (第185図 表17)

遺構外からの出土はない。

第9群 牛蛭式 (第185図)

1は小片であり判然としないが貼瘤の可能性を考慮し、本群とした。1のみが出土する。

第10群 曾利式系 (第185図 表17)

1～5は何れも地条線を施す。1・2は口縁部。3は体部とみられ、地縄文を磨り消し地条線を施すとみられ、地縄文が残る。条線は細目であり、他群である可能性が残る。4は押捺を施した隆帯が横位に巡る。口縁部は無文か。体部は条線が施される。この他、地条線を施す体部小片が20片出土する。

第11群 加曾利E IV式 (第186図 表17)

1～5は1類。1・2は1類1種1、円筒状の突起。1は微隆起線に連繋する渦巻きが明確不施される。2は頂部の円形とみられる刺突下部が欠損する。渦巻きは退化傾向にあるか。この他、半捻転状の突起が2片出土する。3は1類1種、双頭の突起が付される。双頭の突起は3の他1片、単頭の突起1片、単・双頭不詳の2片が出土する。5は1類1種4、舌状の突起。5の他2片が出土する。4は1類2種、橋状の把手。4は丸みが強く、上面に縄文が施される。把手下端から微隆起線が連繋しモチーフを描くとみられる。把手上端部は円形に窪む。この他、無文の橋状把手1片、「S」字状の微隆起線を配するとみえる小片1片が出土する。

21は2類1種、微隆起線で上下2段のモチーフを描く中段部とみられる。19同様、中段部とみられる小片が3片出土する。

6～15・17～20・22・23は4類。6～13は4類1種。6は行する2本の微隆起線で「U」字・逆「U」字状のモチーフを描くか。この他に口縁部小片2片・体部小片9片が出土する。19・20は1本の微隆起線でモチーフを描くか。22は上端部はモチーフの結合部か。低平に盛り上がる。この他、1片が出土する。7・8・20・23は微隆起線で区画された縄文部と無文部でモチーフを描く。7は頂部でモチーフが連結するが突起とするには弱い。8は双頭の突起が形成される。23は体部小片である。20の他、体部片26片は同種とみられる。9・10・11は文様構成不詳の破片。9・10・11は何れも口縁部下に横巡する微隆起線から「U」字・逆「U」字状のモチーフを描くとみられる。12は文様構成・モチーフ不詳の土器片。口縁部下に微隆起線が横巡する。この他、口縁部片6片(うち3片波状口縁部)・体部片26片が出土する。13は無文に懸垂文状のモチーフか。中段部を持たない文様構成の可能性が考えられるか。14・15は4類2種で、沈線でモチーフを描く。14は「U」字・逆「U」字状のモチーフか。15は不明瞭であるが地縄文を施す。懸垂文状のモチーフか。

16・24は5類。24は5類1種、微隆起線に沈線が沿う。16は5類2種、凹線内に竹管状工具とみられる円形の刺突列を配する。

17・18は5類で、口縁部直下の施文方向を違える口縁部。17は沈線で区画した無文帯で「U」或いは逆「U」字状のモチーフを描くか。17・18の他、1片が出土する。

第12群 称名寺式に並行する加曾利E式 (第186図 表17)

13は1類、モチーフの中段部か。12の他に1片が出土する。

1～15は2類。1～5は口縁部下に微隆起線が横巡する小片。1・2は無文の口縁部が1.0cm前後、3～5は無文の口縁部が2.0cm以上の長さがある。3は縦位、4は斜位、5は横位の地縄文を施す。5に施文方向を違える意図があったか判然としない。この他、3片が出土する。このうち、1片は縦位、2片は斜位の地縄文を施す。6は無文の口縁部下部、微隆起線上位に刺突列が沿う。7・8は円形の貫通孔を伴う。残存状況は悪いが、孔下端に粘土が貼り付けてあり、突起基部か。9は2条一組の微隆起線で「U」字・逆「U」字のモチーフを描くか。12は微隆起線で区画した縄文部と無文部でモチーフを描くとみられる小片、この他に1片が出土する。14・15は2条一組の微隆起線でモチーフを描くとみられる小片。14・15の他に4片が出土する。10・11は詳細不明の口縁部小片、この他に3片が出土する。

この他、地縄文と微隆起線1本がみえるのみの詳細不明の体部小片が20片出土する。

第13群 大木10式 (第187図 表17)

1・2は大木10式の可能性が考えられる。小片であり判然としない。1は口縁部の形状から判断した。2はアルファベット文である可能性を考慮した。この他に、胎土に似る無文の1片が出土する。

第14群 中期後半とみられる土器片 (第187図 表17)

1・2は1類2種、橋状把手か。1は破片上端部の刺突とみられる半円状の痕跡がみえる。口縁部下の刺突列か。

3～6は2類。3・5は無文の口縁部下に地縄文を施す。口縁部の形状から判断したが、5は後出するか。地縄文を横位に施す。3は縦位に地縄文を施す。6は無文の口縁部下に地条線を施す。櫛歯状工具か。4は無文の口縁部と地縄文を区画する微隆起線状の高まり直下の地縄文上に刺突を配する。刺突列か。微隆起線状の高まりは明瞭な微隆起線ではなく本群に含めたが、後出する可能性が残る。

7は3類3種、隆帯であるか微隆起線であるか判然としない。図示し得なかったが3類2種の沈線で縄文部と無文部を区画する小片が47片出土する。磨消を伴う懸垂文或いは磨消縄文手法の小片が混在するものと判断される。

第15群 称名寺式 (第187図 表17)

1は1類、円盤状の突起。外面は沈線を伴う弧状の隆帯を配し、上・下端に円形の刺突を施すとみられる。下端の刺突は欠しているが、刺突底面が僅かに残る。内面は円形の刺突の周囲に口縁部が付される。

2は2類。窓枠状の区画が施されるか。

11は3類か。単位的なモチーフとなるか。11の他、1片が出土する。

12は4類。キザミを施す隆帯が垂下し、器面を分ける。12の他、1片が出土する。

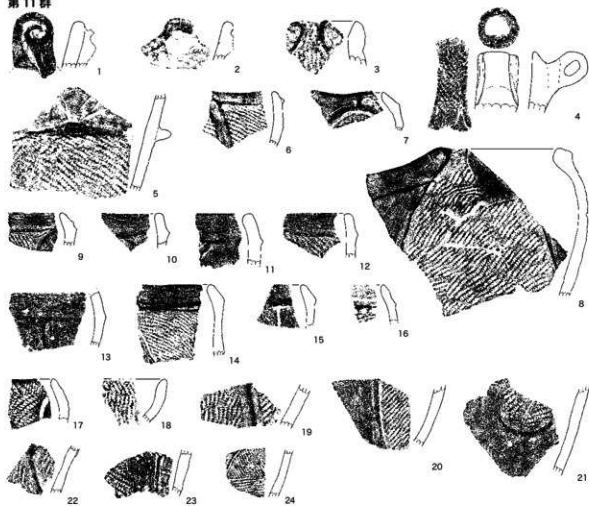
13は5類。菱形状のモチーフとなるか。

14は6類か。括れ部とみられる。14の他、1片が出土する。

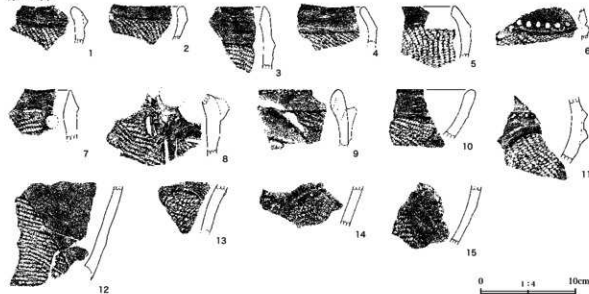
4～27は7類。4・6は7類1種、口縁部に縄文が施される。区画内は無文、モチーフは「J」字状か。

5・7・15～19は7類2種、「J」字状のモチーフが描かれるか。5は単位的なモチーフの可能性も残る。同種の小片1片が出土する。15・17の縄文は不明瞭であるが磨消の意図は判然としない。20は7類4種、「X」字状のモチーフが描かれるか。8～10・21～26は7類5種。21は帯状区画内に縄文を施す小片。21の

第11群



第12群

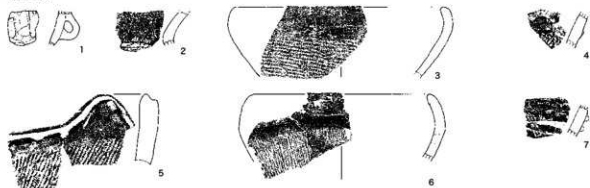


第186図 遺構外出土遺物実測図(3)

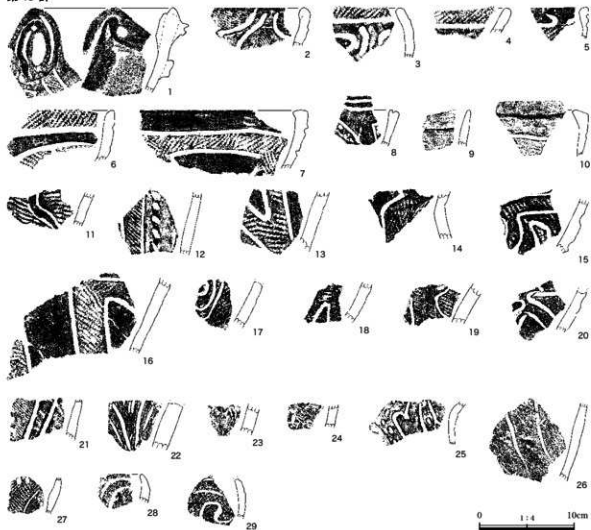
第 13 群



第 14 群



第 15 群



第 187 圖 遺構外出土遺物実測図 (4)

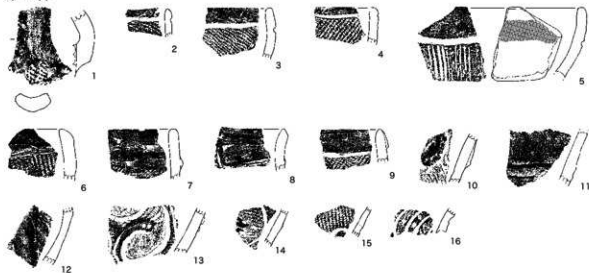
他に 34 片が出土する。22 は帯状区画内に短沈線を配する。22 の他に 1 片が出土する。23・24 は帯状区画内にキザミ状の刺突を充填する。8・25 は帯状区画内に刺突列を配する。8・25 の他に 6 片が出土する。9・10・26 は帯状区画内に粗いナデを施す。9・10・26 の他に 3 片が出土する。27 は区画線に沿って刺突列を配する。

28・29 は 8 類、深鉢以外の器形となるか。器壁は薄く、丁寧なミガキが施される。

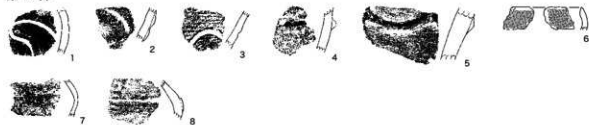
第 16 群



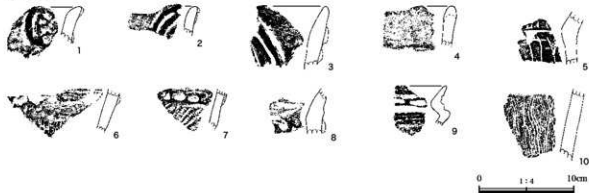
第 17 群



第 18 群

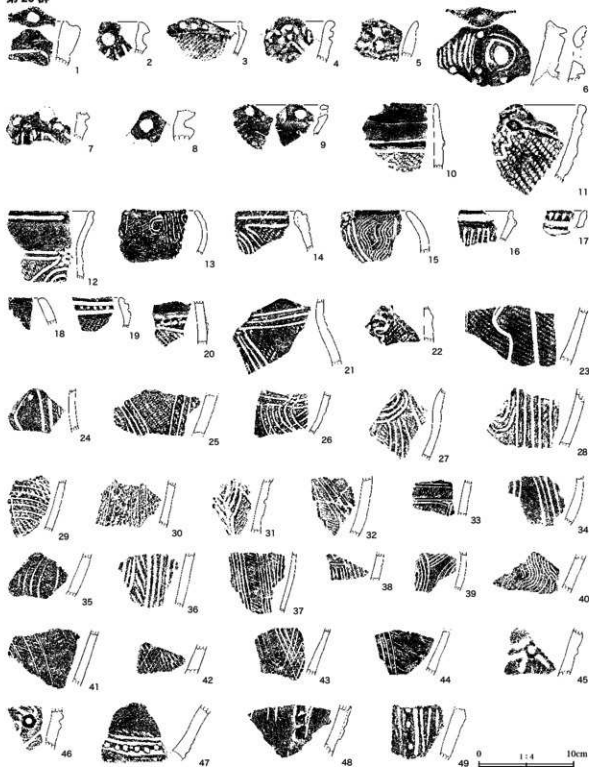


第 19 群



第 188 図 遺構外出土遺物実測図 (5)

第 20 群



第 189 図 遺構外出土遺物実測図 (6)

この他、第15群で図示し得なかった土器片は、7類5種で等分割構成とみられる小片9片、7類5種3帯状区画内に条線を充填する小片3片、7類5種8区画内外を無文とする小片15片、7類5種9帯状区画とみられる小片7片である。

第16群 三十稲葉式とみられる土器片 (第188図 表17)

1が出土する。器壁は薄く、深鉢以外の器形か。

第17群 中期末葉～後期初頭とみられる土器片 (第188図 表17)

1は1類2種、橋状把手。ブリッジ両端は縄文が施されるか。把手下部から微隆起線が巡るようにもみえるが不明瞭である。

2～4は2類1種、磨消縄文手法或いは帯状区画とみられる小片である。2～4のみが出土する。

5・6は2類2種、沈線直下から横位の地縄文を施す。5は内画面に赤彩が残る。外面は僅かに残る程度であるが、外面とほぼ同じ部位に観察される。

7・8は3類。7は体部の櫛歯状工具で条線を施す。8は無文の口縁部に「J」状の微隆起線が付されるか。口縁部下を巡る微隆起線には沈線が載る。

9は4類。低平で幅のある隆帯が付される10は同類か。部位不明。第12群(加曾利E式に平行する加曾利E式) - 9と同類か。

11は5類1種か。無文に微隆起線でモチーフを描く。11の他、微隆起線2本一組とみられる小片が3片出土する。12は5類3種。微隆起線1本でモチーフを描くか、モチーフの近接部分か。この他、3片が出土する。図示し得なかったが、5類2種微隆起線1本でモチーフを描くちみられる小片は2片、5類4種本数不明の微隆起線でモチーフを描く土器片は13片出土する。

13～16は7類。13は低平な隆帯とこれに沿う沈線で渦巻き状のモチーフを描くか。13の巻込み部は沈線で背を割った隆帯で作出され末端部は刺突が付される。文様内は磨消部と縄文部が併存する。器面や胎土の状況からは第6群3類胴部隆帯文系とも考えられるが、称名寺式の可能性が否めず、本群とした。14は沈線で区画した縄文部と無文部で渦巻き状のモチーフを描くか。巻込み部先端は隆帯で作出か。15・16は沈線内は不明瞭ながら磨り消されるか。15の渦巻き先端部は刺突が施されるか。14～16は器面や胎土の状況から後期初頭である可能性が考えられる。

図示し得なかった中期末葉～後期初頭の土器片は、6類沈線で区画した縄文部と無文部のみえる小片31片(1種幅狭の無文帯5片、2種幅広の無文帯14片、3種1・2種不明12片)が出土する。

第18群 後期初頭 (第188図 表17)

1～3は2類1種。1・2は無文に沈線で渦巻きを作出するか。1は渦巻き先端か。器面は丁寧にミガキが施され、器壁は薄い。2は沈線で渦巻きを重ねるか。後期前葉の可能性も残る。3は中央が窪み、渦巻き或いは同心円状のモチーフか。沈線で描く同一個体とみられる2片が出土する。4・5は2類2種。隆帯でモチーフを描くか。4は櫛歯状工具で条線を施すか。この他、2片が出土する。

6・7は3類。無文でミガキが施され、器壁は薄い。瓢形か。6は口縁部で内外面に赤彩が施される。小片であり、器形は判然としない。6・7の他、2片が出土する。

8は4類。壺形、或いは、注口土器か。上部の沈線の沿う低平な隆帯が横位に配される。

図示し得なかった後期初頭とみられる土器片は、1類円環状の突起とみられる小片が1片、2類1種2同心円状のモチーフ1片、2類1種3モチーフ不詳の小片1片、2類2種隆帯を付す無文の体部小片3片が出土する。

第19群 後期前葉 (第188図 表17)

1～3は1類1種、無文の口縁部の「C」字状の隆帯が垂下する。2・3は隆帯は2本か。

4～9は2類、一次区画線とみられる小片。4・5は一次区画線を沈線とする。5の一次区画線は沈線間にキザミを施すか。隆帯上のキザミ或いは盲孔を沈線で表現したもののか。体部の条線は間隔が粗い。6・7は剥落で不明瞭であるが隆帯を区画線とする。体部に地条線を施す。7は一次区画隆帯に盲孔を付す。7の隆帯は高い。9は沈線間に短沈線を配する。壺形か。

10は3類、櫛歯状工具で地条線を施す。この他、6片が出土する。

第20群 堀之内1式 (第189図 表17)

1～9は1類2種。2・3は波状口縁部の波頂下に盲孔を付す。1は波頂部に盲孔を付す。口縁部下は地帯文に沈線でモチーフか。2は盲孔を起点に沈線が垂下する。2同様の円形の盲孔を付す小片が7片出土する。このうち2片は内外面に盲孔を付す。4類朝顔形になる可能性が考えられる。3は円形の盲孔が3ヶ並ぶ。3同様の刺突状の盲孔を付す小片が4片出土する。4・5は「8」字状の盲孔が付される。4は波頂部に沿ってキザミが施される。6～9は貫通孔を伴う。6は波頂部下に貫通孔を付す。波頂部上端は凹む。貫通孔周囲の「C」字状の隆帯上・下端部に刺突を伴う。隆帯を挟み、沈線が沿う。貫通孔下は把手状か。8は波頂部の盲孔下に貫通孔を有する。欠損が多いが、波状の口縁端部に沈線を施す。9は無文の波頂下に貫通孔を有する。

10～12・21は1類。10・11は無文の口縁部下に隆帯を配する。11は隆帯に刺突を施す。12は微隆起線状の隆帯が横巡る。12・21は屈曲する頸部に沈線を配する。12は一次区画線に「8」字状に刺突を付し、単沈線で同心円状のモチーフが描かれる。21は一次区画線か傘状のモチーフが垂下する。

13・14・22～26は5類1種。13は深鉢形以外の器形となるか。22は戟手状の単沈線が垂下する。この他、8片が出土する。23・24は波状の単沈線が垂下する。この他、4片が出土する。25は紡錘状のモチーフか。14は同心円状のモチーフか。

26～32は5類2種。26～31は紡錘状や同心円状のモチーフか。26の横位の沈線は一次区画線か。32は傘状のモチーフか。

33は5類3種。無文にモチーフを描く。33は一次区画線付近か。

15・34～40は5類4種。34・35は単沈線で紡錘状のモチーフか。36～39は集合沈線間に集合沈線を充填する。36・37は垂下する集合沈線間に斜位の短沈線を配する。39は同心円状のモチーフか。15・40はモチーフ不詳。櫛歯状工具で波状沈線を施す。地文の可能性もあろう。

16～19・41～48は堀之内1式か。16は口縁部上端部の沈線下に集合沈線が垂下する。17・18は口縁端部の沈線下に刺突列を配するか。19は口縁端部の横位の沈線下にモチーフか。

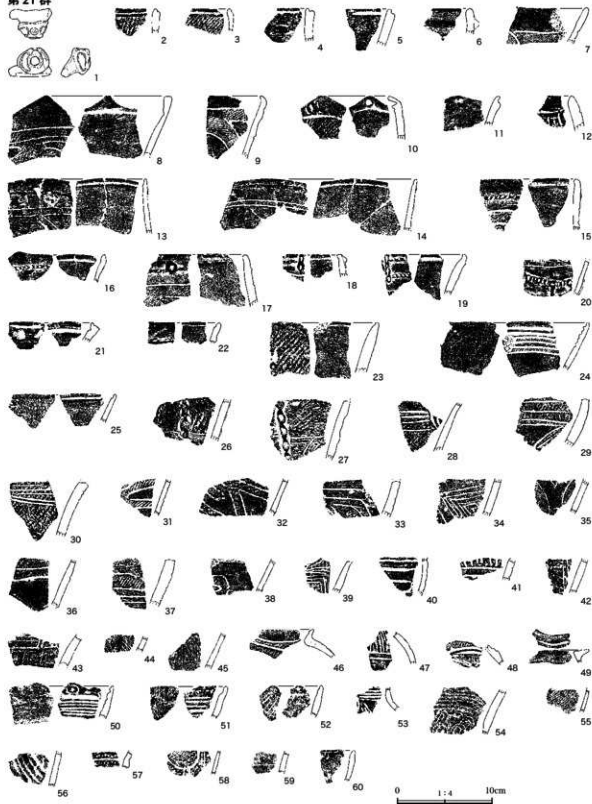
41～44は格子目状の集合沈線を施す。42～44は櫛歯状工具か。42～44の他、3片が出土する。45・46は盲孔を起点にモチーフか。47は沈線間に刺突を配する。壺形等の可能性を考慮すべきか。48・49は垂下隆帯にキザミを施す。49は鎖状にみえる。

この他、図示し得なかった小片は、1類2種②波頂部に円形の盲孔を付す口縁部1片、5類1種③沈線或いは間隔のある2～3条が垂下する小片17片、5類1種⑥曲線的な単沈線が描かれる小片19片、5類2種①③集合沈線が垂下する小片13片が出土する。

第21群 堀之内2式 (第190図 表17)

1は1類1種、球状の突起。外面に向けて付される。沈線で区画されたモチーフを描く。

第21群



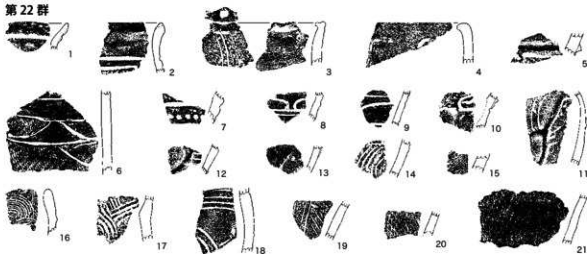
第190図 遺構外出土遺物実測図(7)

2～10は2類。2～5は2類1種、口唇部に沈線を配する。2・3は地縄文、4・5は無文の口縁部片である。6は2類2種、口縁部に横線状の隆線が巡る。2類2種はこの他2片が出土するが、うち1片は一次区画線か。26・27は2類3種。口縁部に鎖状の隆帯が垂下する。地縄文に沈線でモチーフか。28～30は2類4種、一次区画線か。28は横位の沈線にモチーフがみえる。29は横位の沈線からモチーフか。28～30の他、1片が出土する。

7は3類、沈線でモチーフを描く。

8～10・25・31～40は4類。磨消縄文を単位文状に配する。8～10・31は渦巻きや円形状のモチーフか。

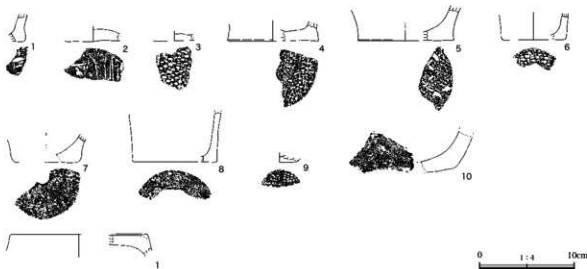
第22群



第23群



第24群



0 1:4 10cm

第191図 遺構外出土遺物実測図(8)

10は9、31は8と同様のモチーフか。32～34は三角形状や菱形状のモチーフか。35は幾何学的なモチーフがみえる。36～38は4類3種、詳細不明の小片。

11・39は5類2種、無文に沈線でモチーフを描く。39は菱形状のモチーフを密な入れ子状に配する。11は波頂部に不明瞭な盲孔を付し、三角形或いは菱形状のモチーフを描く。沈線は細く、意匠的に明瞭さをかいており、6類に近い。40は5類3種、モチーフは不詳である。

12・41～43は6類。無文に沈線でモチーフを施すが、意匠に乏しいか。43は半載竹管状工具とみられる。

13～20は7類。口縁部に紐線を配する。13～17は7類1種、口縁部に紐線が横巡する。何れも内面文様を有する。13は磨消縄文で三角形状のモチーフか。16は波状口縁。17～20は7類2種。17は紐線に円形の貼付文、18は「8」字状、19は鎖状、20は紐線に付した刺突から細い隆帯が垂下する。口端部を欠する。

21～25は8類。内面文様を有する。21は口唇部の沈線下に押捺を施す低平な隆帯を配する。22は断面三角形状の細い隆帯が横巡する。23・25は口縁直下から地縄文を施す。この他、4片が出土する。24は無文。24は内面の口端部下は隆線状。沈線間には交互にキザミを施す。器壁は堅緻である。

44・45は9類。格子目状に細かい条線を施す。44は網目状にもみえるが判然としない。

46～60は11類、深鉢以外の器形とみられる。46～48は注口土器か。46は横位の磨消縄文、47は沈線、48は縄文帯で文様を描く。この他、無文の1片が出土する。49は口縁部下から屈曲して膨らむ器形か。50～60は器形は判然としない。50～52は無文。50～52は内面文様を有する。50・51は無文の小片、52は外面に斜方向の沈線、内面の波頂下に刺突を施す。53・54は頸部一次区画線か。53は傘状の沈線が垂下、54は半載竹管状工具でループを描く。55・56は集合沈線を配する。57は沈線間に刺突列を配する。60は堅緻な無文に細い半載竹管状工具で五角形状の沈線を引くとみられる口縁部小片。50～57・60の他、5片が出土する。横位に4条以上の沈線がめぐる口縁部小片、無文に半載竹管状工具の沈線を横位に施す小片2片、無文に低平な隆帯状の帯を横位に施す小片である。58・59は磨消縄文を施す。この他、2片が出土する。

この他、図示し得なかった土器片は、2類2種2、頸部一次区画隆帯とみられる小片2片、うち1片は盲孔が付される。2類2種3、部位不明の隆帯小片1片が出土する。また、10類、薄く堅緻な器壁等から本群とみられる無文の体部小片7片、底部小片3片が出土する。

第22群 堀之内式を含む後期前葉とみられる土器片 (第191図 表17)

1・2は1類、口縁部。1は口縁端部に三角形状のエッジを作出する。緩やかに屈曲する頸部には一次区画線か。2は口縁端部に低平な帯状の隆帯を付し沈線を施す。破片下部には屈曲がみられる。

5は2類、頸部の一次区画か。断面三角形状の鋭い隆帯の上下に沈線が治う。隆帯に「8」字状などの貼付文が付されるか。5の他、一次区画隆帯に押捺を施す1片が出土する。

3・4・6～19は3類、体部片。

3・6は3類1種、地縄文に沈線で図形的なモチーフを施す。3は波頂部の凹みを起点に4本の沈線がやや斜方向に垂下する。文様意匠は乏しいか。内面文様を有する。6は縄文施文後沈線を施すか。8とモチーフが似るか。3・6の他、1片が出土する。4・7～19は3類2種、無文に沈線で図形的なモチーフを施す。4・6～9は沈線のみでモチーフを施す。4はモチーフ不詳。7は沈線と刺突列が平行する。8は6とモチーフが似るか。9は帯状の区画線でモチーフか。外面にオコゲの付着が著しい。10～13はモチーフに隆帯を配する。10は欠損するが瘤状の突起か。横位のモチーフが連繋する。11・12は低平な隆帯でモチーフを描く。

11は図上部の器壁が薄く屈曲がみられる。13は帙状の低平で幅広の隆帯を貼付する。10～13の他、部位不明の1片が出土する。

14～19は集合沈線を施す。14は集合沈線で同心円状のモチーフを施す。14の他、4片が出土する。このうち2片は緩やかな曲線、2片は同心円状を描く。15・16は櫛歯状工具で集合沈線を施す。何れも同心円状のモチーフを描く。17～19は半載竹管状工具で集合沈線を施す。17は屈曲する頸部か。18・19は一次区画線からモチーフか。

20・21は3類3種、沈線で格子目を描く。この他4片が出土する。20・21は網目状か。20は晩期或いは弥生時代の可能性も残る。同一個体とみられる1片が出土する。

第23群 加曾利B式 (第191図 表17)

1は沈線間にキザミを施す。

この他、小片であり、図示し得なかったが5片が出土する。何れも器壁が薄く、密な集合沈線で曲線的な条線を施す。注口土器の小片か。

第24群 時期不明の縄文土器片 (第191図 表17 図版二三)

1類、口縁部小片は37片が出土する。1類1種口端部直下から地縄文を施す口縁部のうち、縦位の地縄文は6片、横位の地縄文は5片が出土する。横位の地縄文のうち5片は地縄文が粗く不明瞭であり、堀之内式の可能性が残る。1類2種無文の口縁部下に斜位の地縄文は8片が出土する。1類3種1無文の平口縁は81片、このうち1片は円孔を穿つ。2波状口縁は16片、口縁部下に1類4種沈線は横巡する口縁部2片が出土する。

2類、体部小片は2624片が出土する。2類1種有文の小片は308片が出土する。地縄文に沈線を施す小片、無文に沈線を施す小片である。

1は三叉文状のモチーフを描くが、縄文施文後に沈線を施す。器壁や胎土からは後期後半と判断されるが、モチーフ的には後期後葉～晩期の可能性が考慮される。また、欠失するが隆帯状の高まりが観察される。

2類2種、地縄文は1327片が出土する。単節の地縄文1321片、付加条4片、羽条2片である。付加条の4片のうち3片は弥生土器の可能性も残るが小片であり判断としない。

2類3種、無文は983片が出土する。このうち、内面に赤彩を施す小片2片が出土する。

2類4種、地条線は、櫛歯状工具とみられる土器片49片、半載竹管状工具とみられる土器片は7片、先端の細い工具とみられる土器片5片が出土する。

3類、底部片は184片が出土する。10は底部であるか判断としない。やや深い浅鉢形の底部の可能性があろうか。3類3種、圧痕の付着する底部片は9片出上する。1～9を図示する。2は工具痕か。沈線状の平行線がみえる。圧痕が磨り消された痕跡は観察されない。1・3～5は1-2-1か。2は太い材を用いるが小片であり、判断としない。4は圧痕の乱れが観察される。圧着時の乱れか編組品自体のバラケか判断としない。5は編組品の浅い圧痕に、工具痕が深く明瞭に残る。編組は不明瞭で判断としないが、1-2以上-1か。6は圧痕が浅く不明瞭。丸みのある材で2-1-1か。もちろん編みの可能性も残る。7・8はナデが施されるとみられ、圧痕は不明瞭であるが、僅かに材の痕跡が確認される。7・8ともに底部穿孔か。7は中央に径1.0cmほどの穴がみられるが、外面は播鉢状。8は中央充填手法の外周付近が残る。9はタテ材が不明瞭。細いタテ材を使用する可能性が考慮されるが現状では明確に観察されない。編組品であるとすれば、ヨコ材は密に配した三つ目以上とばし、あるいは、もちろん編みの可能性が考えられる。

底部の立ち上がり、器壁、胎土等から、4～6は堀之内2式以降か。

4類は深鉢形以外の器種である。1は器台とみられる。同一個体とみられる1片と別個体とみられる1片が出土する。1は上面の径約14.4cm・現状での高さ約(2.4)cmである。別個体とみられる1片は小片である高さ約1.7cmである。

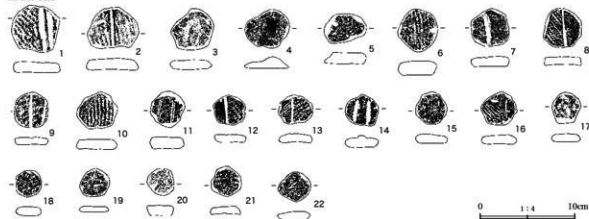
(2) 土製品

調査区内からは、土製円盤22点、腕輪片2片が出土する。

【土製円盤】(第192図 表4 図版二三)

出土した22点は表4に記載する。何れも、土器体部転用したものと判断でき、土器の丸みを残すものが多い。周縁は研磨が施されるものが多いが、正円となるものは少ない。出土位置は、B区C-10・C区D-10グリッドから2個づつが出土するが、大きな偏りはないものと判断される。

土製円盤



第192図 遺構外出土遺物実測図(9)

表4 遺構外出土土製円盤観察表

調査区	出土位置 グリッド	寸法				型	残存度	研磨	孔	時期	特記	
		長軸	短軸	最大厚	重量							
1	B	IS内	5.4	(4.9)	0.9	(32.8)	LL	下環欠	側縁	無	加群利匠後半か	研磨が施されるが不整形
2	C	IS内	5.4	(4.2)	1.2	(33.7)	LL	下環欠	側縁	無	堀之内式か	研磨が施されるが不整形
3	B	IS内	4.7	4.4	1.1	5.8	L	完存か	側縁右半部	無	時期不明	不整形に打ちきか 無文
4	C	D-10	4.6	4.1	1.2	20.3	LL	完存か	側縁右上半部・内外面	無	後期初頭か	文様は90度回転方向か 内外面とも顕著な研磨あり
5	C	IS内	4.5	(3.0)	1.1	(18.0)	LL	下半部欠	側縁上半部	無	時期不明	下半部を欠損するがLサイズか 無文
6	C	IS内	4.4	4.2	1.5	32.1	L	完存か	側縁全周か	無	後期か	研磨が施されるが不整形 地縄文横方向か
7	B	C-5	4.1	3.9	1.0	20.3	L	完存か	側縁全周か	無	中期末～後期初	研磨が施されるが不整形 厚みあり
8	B	C-8	4.0	0.8	0.9	19.4	L	完存か	側縁上端部	無	称名寺式か	
9		調査区内	3.7	3.5	0.7	16.0	L	完存か	側縁全周か	無	堀之内式か	研磨が施されるが不整形
10	B	D-9	4.2	3.9	1.1	16.9	L	完存か	なし	無	後期か	地縄文横方向か
11	C	D-10	3.8	3.5	1.1	19.5	L	完存か	側縁全周か	無	堀之内式か	研磨が施されるが不整形 斜めの研磨により上・下面の径に差異
12		調査区内	3.4	3.2	0.9	10.4	M	完存か	側縁全周か	無	後期初～前葉か	長円形状
13	B	C-8	3.6	3.0	1.0	11.8	M	完存か	側縁右側中央部	無	堀之内式か	長円形状
14	B	C-7	3.5	3.2	1.1	14.6	M	完存か	側縁全周か	無	中期末～後期初	厚さ地部で計測 文様は90度回転方向か
15	C	E-12	3.4	3.3	1.0	12.3	M	完存か	側縁全周か	無	時期不明	やや不整な円形状
16	C	IS内	3.4	3.0	0.9	13.3	M	完存か	側縁全周か	無	中期末～後期初	研磨が施されるが不整形
17		調査区内	3.3	3.0	0.8	9.8	M	完存か	側縁全周か	無	時期不明	研磨が施されるが不整形
18	B	IS内	2.7	2.6	1.0	6.1	S	完存か	側縁全周か	無	時期不明	不整な円形状 地縄文 内外面直磨
19	B	IS内	3.1	3.0	0.6	5.8	S	完存か	側縁全周か	無	時期不明	研磨が施されるが不整形 無文
20		調査区内	2.8	2.7	1.1	9.4	S	完存か	側縁全周か	無	時期不明	研磨が施されるが不整形 地縄文 磨滅
21	B	B-4	3.2	3.1	0.9	9.4	S	完存か	なし	無	時期不明	地縄文 磨滅
22	C	IS内	3.5	3.2	0.8	7.4	S	完存か	側縁全周か	時期不明	時期不明	研磨が施されるが不整形 無文

【腕輪・環状土製品】(第193図 図版二四)

調査区内からは腕輪と見られる小片2片、環状の土製品1片が出土する。

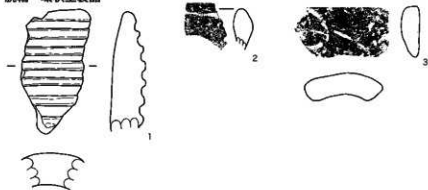
1は平行する沈線を施す。沈線内に灰白色(10YR8/2)の付着物が観察される。外面全面へ塗布された可能性が考えられる。推定される直径は約5.8cm、内周径は約18.21cm、重さ約(32.75)g。2は小片であり種別の特定は難しいが、端部の成形から腕輪の可能性を考慮した。端部は沈線が施されるか。沈線状の部分を境に厚みが増す。重さ約(3.68)g。3は環状の土製品。腕輪・貝輪等を考慮したが判然としない。円形状の沈線がみえるが、施文か否か判然としない。径約8.5cm、内周径約18.2cm、重さ約(16.38)g。

【不明土製品】(第193図 図版二四)

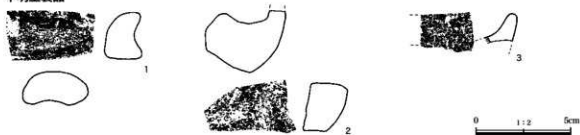
調査区内からは種別の判然としない破片が3片出土する。

1・2は上面からみると曲線を描く。図上の下部は直線的に作出される。1の外面中央部は凹む。左・右端は下半は欠損するもの、上半の残存状況からほぼ原形を留めるものと判断される。高さ約2.4cm・幅約3.3cm・中央部厚さ約1.5cm・重さ約13.6g。2はやや角形か。右端部は欠損するが原形を留めるか。高さ約2.5cm幅約4.1cm・厚さ1.9cm前後・重さ約(25.59)g。3は下部、図上の左側部を欠失する。ミニチュア土器底部、或いは、1・2同様か。高さ約1.6cm・幅約(2.7)cm・重さ約(8.43)g。

腕輪・環状土製品



不明土製品



第193図 遺構外出土遺物実測図(10)

(3) 石器・礫

遺構外からは総数で1047点の石器・礫が出土する。石器は石鏃などの剥片石器、剥片、打製石斧、石皿、礫石器、石錘、砥石、石棒、砥石が出土する。礫は自然礫をはじめ、石器類の石材とみられる材質や形状の礫などが出土する。詳細な時期の判別は不詳であり、弥生時代以降に帰属するものも含まれると考えられるが、明瞭に時期を判別し得ない石器・礫類について一括する。事実記載にあたっては、第5章第2節に記載する類別に従って表で示す。

石器・礫類の出土状況を見ると、遺構内出土の石器・礫と同様の組成と判断される。遺構中に入ったものが、後世の削平等によって現表土や遺構確認面上に表出したものと考えられる。遺構内・外の出土状況の比較を念頭に、遺構内出土の石器・礫の観察表についても、併せて本項で示す。

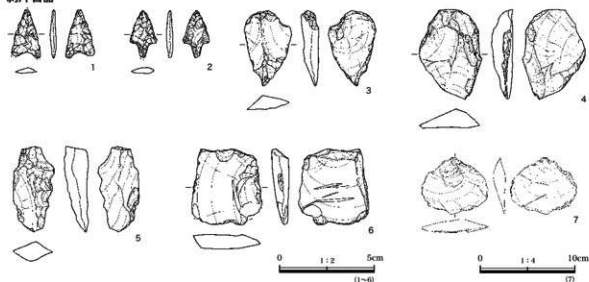
①剥片石器・剥片(第194図 表5・6 図版二七・二八)

遺構外から剥片石器8点、剥片88点が出土する。剥片石器は、石鏃3点、スクレイパー2点、剥片石4点が出土する。何れも調査区内からの表採遺物である。

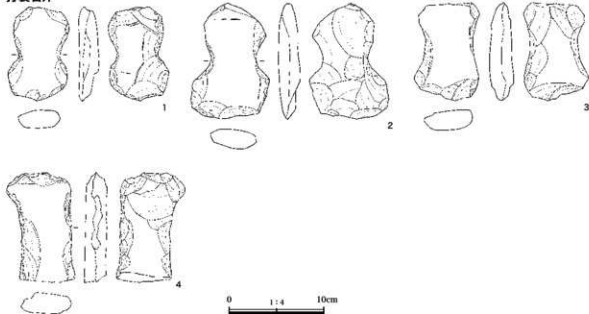
剥片小片が多い。石核とみられる大きさのものも出土するが不詳であり一括して表化する。寸法は最大長・最大幅・最大厚を記載する。

B区D-8グリッド出土1071は良質な珪質頁岩製の剥片である。C区D-9グリッド出土45は石核の可能

剥片石器

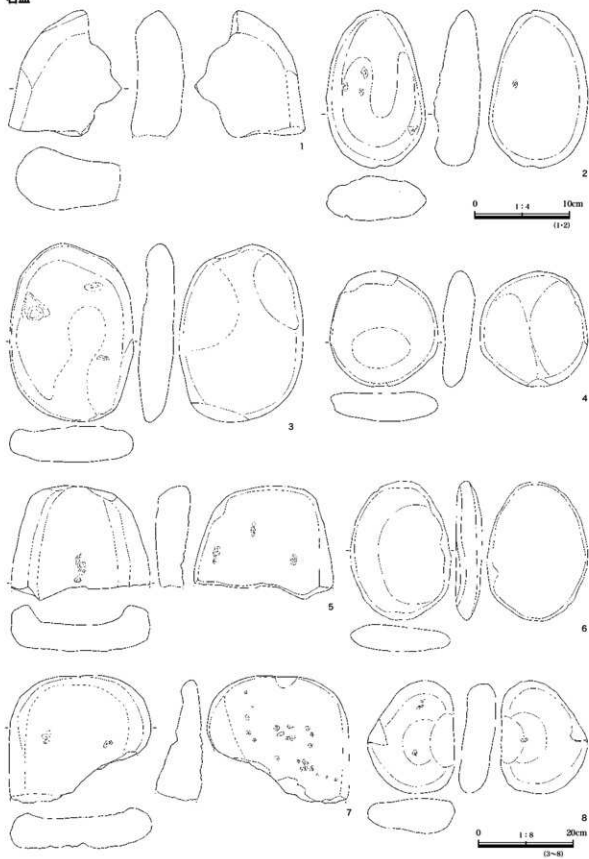


打製石斧



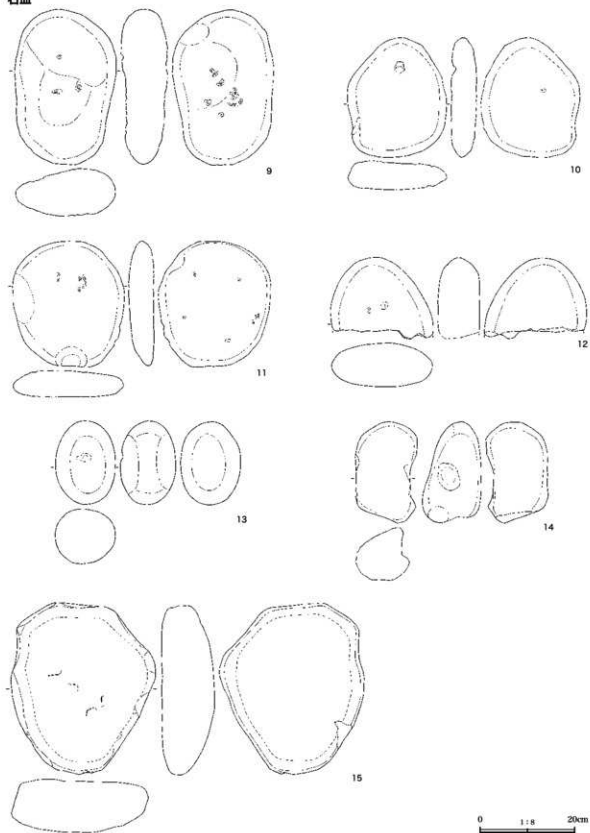
第194図 遺構外出土遺物実測図(11)

石皿



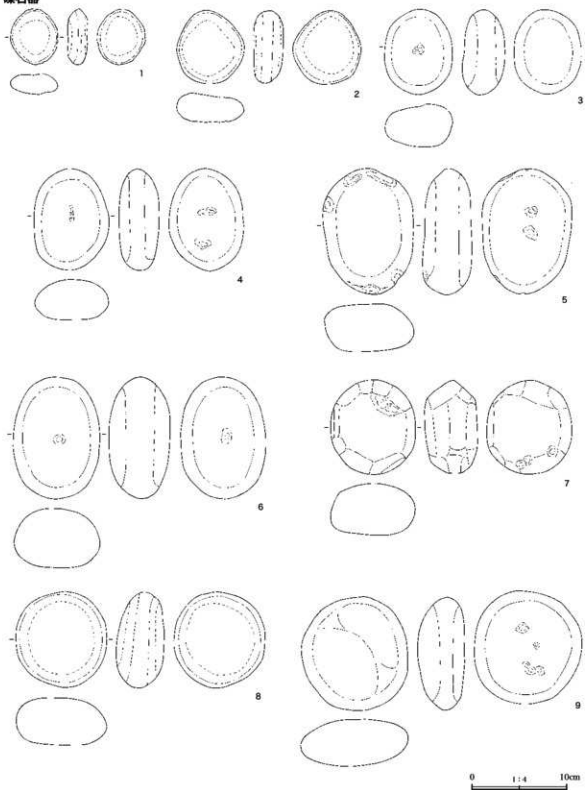
第 195 図 遺構外出土遺物実測図 (12)

石皿



第 196 図 遺構外出土遺物実測図 (13)

礫石器



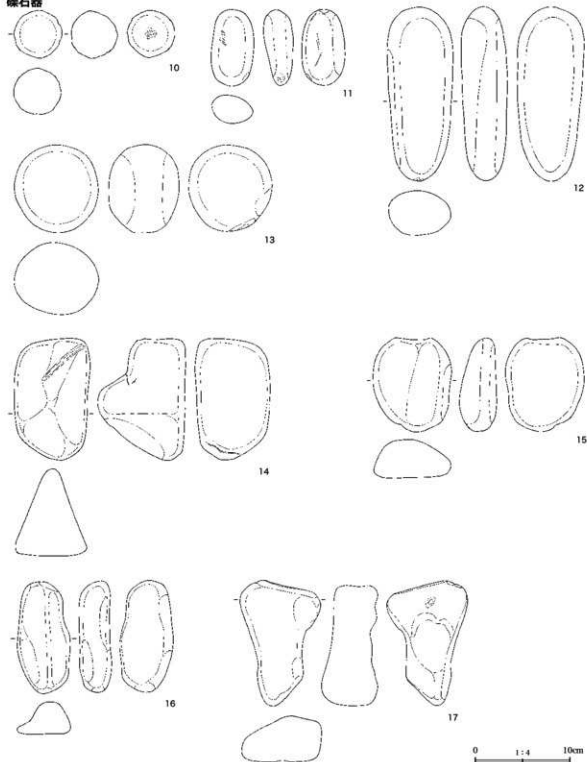
第 197 図 遺構外出土遺物実測図 (14)

性もあろう。B区C-5グリッド618は上半部鋭利な三角形状、下半部方形状であり、石鏃等の未製品の可能性もあるが、周縁等への調整剝離は観察されない。

②打製石斧（第194図 表7 図版二四）

遺構外からは16点が出土する。形状的に完存するものは4点、欠損するものや破片であるものは12点

礫石器



第198図 遺構外出土遺物実測図(15)

である。破片であるものについては判然としなが、自然面を多く残し、刃部や袂部への剥離が粗雑であるものが主体となる。破片であるものを含め、未製品である可能性も考慮される。破片については、製作過程において欠損したものが含まれるものと考えられる。

③石皿（第195・196図 表8 図版二五・二六）

遺構外からは124点が出土する。磨滅面の顕著な自然礫についても観察を行った数量である。

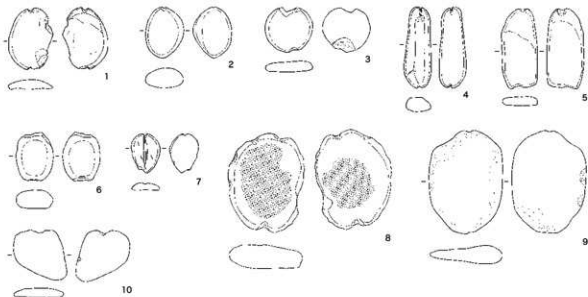
④礫石器（第197・198図 表9 図版二六）

遺構外からは149点が出土する。

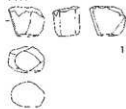
⑤石錘（第199図 表10 図版二七）

遺構外からは22点が出土する。石材や形状から観察表に記載したものを含む。SK-106等の袋状土坑などが近接するB区C-6グリッドからの出土が目立ち、SK-106等の時期に帰属する可能性も残る。

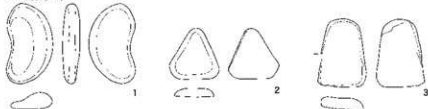
石錘



石棒



その他小礫



第199図 遺構外出土遺物実測図(16)

⑥石棒（第199図 表12 図版二七）

遺構外からは3片が出土する。何れも小片であり、種別の判別は困難であるが可能性を指摘することを棟に観察を行う。

⑦砥石（表11）

図示し得なかったが、遺構外からは7片が出土する。時期は判然としない。

⑧その他の小礫（第199図 表13）

石器としての使用痕は観察されないものの、形状の類型化や石器素材の可能性のあるものについて観察を行う。長円形・扁平であるものは石錐素材、色調の赤色のものはSK-18同様の赤玉の可能性が考えられようか。

⑨礫（表14）

調査区内から出土する石器や礫の石材については、附章「岩石鑑定」に自然科学分析結果を掲載するが、岩石鑑定を行い得た礫は一部である。岩石鑑定を逸した自然礫や破砕礫の中で、形状や石材から石器素材材或いは石器片の可能性のある礫、調査区内で出土する石器への利用が少ないとみられる礫について、岩石鑑定に付した出土物とともに表14に一括する。石材の記載については、岩石鑑定に付したものを基本的に識別した。また、表以外に被熱による赤色変化の認められる礫57片42627g、調査区内出土で表化できなかった自然礫・破砕礫474片80536gを確認した。石材である可能性のある礫や石器・石製品の可能性のある礫が含まれると考えられる。

3. 古墳時代以降

①土師器・粗製土器（第200図 表15 図版三〇）

調査区内からは15片の土器片が出土する。小片が多く判然としにくい点が多い。

土師器環は8片が出土する。このうち、4片は1及び同一個体とみられる小片で、C区D-10グリッドから出土する。1片は漆仕上げを施す小片である。B区から出土する。2片は環小片で内面黒色処理を施す。B区D-9グリッドとC区D-11グリッドから出土する。1片は微細片であり器種の判別は難しいが、胎土や色調から環と判断した。A区から出土する。

土師器甕とみられる小片が5片出土する。1片は頸部、4片は体部か。何れも小片であり判然としなが、同一個体の可能性も考えられる。C区D-11グリッドから出土する。

土師器甕とみられる小片が1片出土する。器壁は薄く、甕と判断するには躊躇されるが、頸部の形状から可能性を考慮した。C区から出土する。

粗製土器は2が出土する。底部であり、粘土紐巻き上げの凹みが残る。C区D-11グリッドから出土する。

②埴輪片（第200図 表16 図版三〇）

B区C-7グリッド、SD-83上面から1片が出土する。円筒埴輪突帯とみられる。遺構確認面上からの出土であり、本節に記載するが、SZ-31周溝の可能性のあるSD-83との関連は否定しきれない。

③石製品（第200図 図版三〇）

B区SD-83上面から石製紡錘車が出土する。

溶結蛇灰岩石を材とする紡錘車である。石基を見ると暗緑部と暗黄緑部が認められ、前者は緑泥片岩の密集部、後者は緑簾石の密集部と見られる。これらが干渉し合い構成されるが、微細な絹雲母にとみ、一部には、所謂くまび石のチタン石と見られる酸化分解物が黒い点紋となっている。製作は、石材を台形円板状に荒削り、調整を加え形削りを施す。次に片面穿孔押圧貫通を上部広端面から行い、貫通後、裏面孔から仕上げ

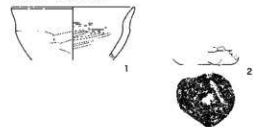
孔を加えている。各面の仕上げは鉄製刃部によって削られており、その際、使用時の上部広端面を下にしている。そのため、側面は製作上の上部から側面中程まで垂直、下部は斜方向に削られる。従って、側面中位に外へ開く傾斜変換点を持つ。使用時の上部広端面は、最後に一方へ削り、また、使用時下部の狭端面は、最低四方向の削りで仕上げている。上部・下部何れも孔の周囲2mmに薄く同心円状の痕跡が認められる。これらは、仕上げを擦っているため、使用痕と見られる。孔内には、穿孔具の回転痕ではなく縦方向の擦痕があり、複数回若しくは高圧力の軸差し込みがなされたものと思われる。上部広端面縁は、1~2mm幅で面取りがされているが、一部は使用により丸くなっている。上部広端面縁径51~52mm、下部狭端面径31~32mm、穿孔径6~6.2mm、厚15.5mm~17mm、重量70.51g。

注1 縦横は当センター-藤原府-副土葬による。

④鉄製品 (第200図 図版三〇)

調査区内から16点が出土する。15は轡、14は鉄銛頭部、16は椀形鉄鏝、1・7~9は釘、10は鋸

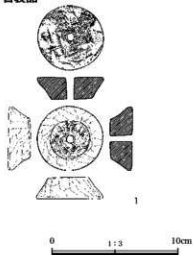
土師器・粗製土器



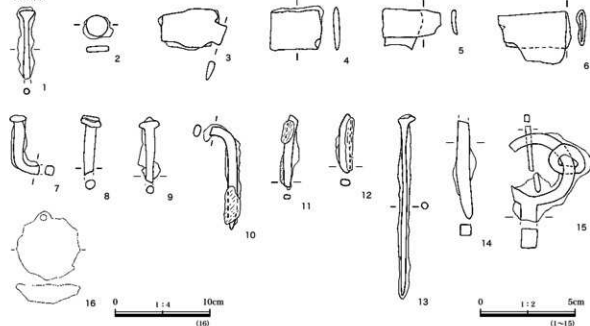
埴輪



石製品



鉄製品



第200図 遺構外出土遺物実測図(17)

とみられるが、この他は種別の判別は難しい。出土位置をみると、SD-01、SZ-26などの位置するC区D・E-12、SZ-41などの位置するB区B-4・C-7、SD-83の位置するB区C-7の遺構確認面や掘乱穴からの出土が目立つが、帰属は不詳である。

1は槽か。B区B-4グリッド遺構確認面から出土する。現状では銹の付着が著しく、外見からの観察は極めて困難である。エックス線撮影写真に沿って図示する。細部の観察に齟齬が生じる点、明記する。残存部は引手、及び、引手内環か。引手に連続するようにみえる細目の棒状材は立開用具が折れた状態で残るか。外周直径約3.9cm・内周直径約2.7cm、引手内環の外周直径最大約1.9cm・内周直径最大約1.0cm、引手の幅0.8cm前後、立開用具の幅0.3cm前後、重さ約47.66gである。

14は鉄鍔蓋部か。C区D・E-12グリッド境付近の遺構確認面から出土する。C区D・E-12グリッドにはSZ-26などが確認されるが、帰属は不詳である。長さ約(5.3)cm・幅約0.6cm・重さ約10.34gである。

3～6は種別不明。3～5はB区C-7グリッド遺構確認面から出土する。C-7グリッドにはSD-83などが位置するが、帰属は不詳である。3は断面は逆三角形状であり、刀子などの可能性が考慮されようか。長さ約(3.7)cm・幅左側端部約1.5cm・中央部約2.0cm・右側端部約1.1cm・重さ10.31gである。4は長さ約(2.6)cm・幅約2.0cm・重さ2.48gである。5は長さ約(3.2)cm・幅1.4・1.1cm・重さ6.19gである。6はC区D・E-12グリッド境付近から出土する。C区D・E-12グリッドにはSZ-26などが確認されるが、帰属は不詳である。長さ約(3.7)cm・幅1.9～1.4cm・重さ5.67gである。

16は碗形鉄滓か。調査区内から出土する。時期は不明である。径約6.5cm・厚さ約2.1cm・重さ191.26gである。比較的重量はあるか。

2は種別不明。C-4グリッド遺構確認面から出土する。B区C-4グリッドにはSZ-41などが確認されるが帰属は不詳である。径1.1cm前後・厚さ約0.3cm・重さ1.99gである。

1・7～13は釘か。13はSD-01から出土する。9・12はC区D・E-12グリッド境付近から出土する。C区D・E-12グリッドにはSZ-26などが確認されるが、帰属は不詳である。10・11は調査区内から出土する。何れも断面は円形状であり、現代に近い時期か。9～13の長さ・幅・重さ(約cm・g)は、9:(2.9)・0.4・4.24、10:(3.2)・0.3・5.24、11:(3.6)・0.3・3.78、12:(4.0)・0.5・5.42、13:(9.3)・0.3・13.41である。

10～12は種別不明。調査区内の掘乱穴から出土する。10は鏝か。11・12は10同様の木質が付着することから、鏝状の鉄製品か。古代以降の時期とみられるが、現代に近い可能性が考慮される。10～12の長さ・幅・重さ(約cm・g)は、10:(3.1)・0.5・3.63、11:(3.7)・0.3・4.39、12:(5.4)・0.5・7.62である。

⑤陶磁器(第201図)

調査区内から小片9片が出土する。1～6は磁器、7～9は陶器とみられる。出土位置は3・7がA区SD-49、8がC区SK-71、6が潟津上小学校校地内確認調査第1号トレンチから出土する以外は遺構確認面からの出土である。²¹

1・3・4は肥前波佐見系の丸碗か。肥前編年Ⅳ～Ⅴ期、18～19世紀か。1はC区、3はSD-49、4はC区C・D-12グリッドから出土する。

2は印判手の皿か。C区から出土する。型紙刷り、或いは機械製版とみられるが、後者の可能性が高いか。緑色のクロム釉を用いるとみられる。20世紀初頭か。

5は染付の小型丸碗か。調査区内から出土する。西洋須崎からみて19世紀後半～20世紀前半か。

6は機械製版か。潟津上小学校校地内確認調査第1号トレンチから出土する。コバルト釉を用い、明治時代末～大正時代の可能性が考えられる。

7は広義の瀬戸・美濃系の鉄軸の焼か。A区SD-49から出土する。連房式登窯期後半（江戸時代）か。

8は非瀬戸・美濃系の灰軸か。C区SK-71から出土する。消去法的に、大畑粗馬焼の可能性が考慮される。

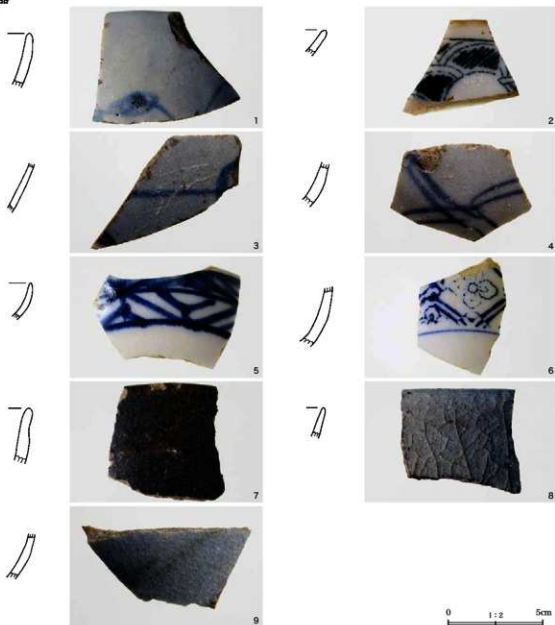
9は調査区内から出土する。灰軸を施した上で、シミ状の流しかけ状の痕跡、或いは、絵付状の痕跡のような濁りが認められる。

註1 観察は当センター池田敏広係長による。

⑥粘土塊

調査区内から、図示し得なかったが2点の粘土塊が出土する。1点はB区C-4グリッドから出土する。C-4グリッドにはSZ-41などが位置するが帰属は不詳である。平面形・断面形とも二等辺三角形状である。平面形の高さ約3.5cm・底辺約2.5cm、断面形の高さ約3.5m、厚さ約2.3cm・重さ約16.42gである。平面

陶磁器



第201図 遺構外出土遺物実測図(18)

第3章 確認された遺構と遺物

形の頂部に刺突状の凹みが観察される。色調 5YR6/1 褐色色の全面にスズ状の汚れが付着する。1点はB区D・8グリッドから出土する。D・8グリッドはSZ-31埋葬部とみられるS-35などが位置する。平面形は長円形であり、タテ約3.8cm・横約3.1cm・厚さ約1.4cm・重さ約10.69gである。色調は7.5YR2/2にぶい黄褐色である。粗製土器の色調に似るが関係性は不明である。

表5 遺構外出土剥片石器観察表

検出番号	遺し番号	種類	出土位置	長	幅	厚	量	石材	特記事項
1	1175	石鏃	調査区内	25.7	15.3	3.3	0.9	流紋岩	両側基部欠損 断面部縦線は比較的直利 石材は白色
2	1128	石鏃	調査区内	25.1	14.3	3.5	0.9	流紋岩	左側部欠損 断面部縦線は比較的直利 石材は灰色色
3	7	スクレイパー	調査区内	39.9	25.3	0.4	7.1	チャート	左右両側部は直利
4	1227	スクレイパー	調査区内	47.5	33.3	11.2	16.1	チャート	左右両側部に3ほどの直利さない 石材は部分的に灰白色
5	1226	剥片石鏃	調査区内	45.2	21.8	13.0	10.4	玉髄	石材は透晶性のある白色で部分的に白色斑入り
669	剥片石鏃	調査区内	34.3	43.8	13.2	17.2	ホルンフェルス	刃部は磨滅か	
7	62	剥片石鏃	調査区内	60.4	70.5	14.4	43.6	ホルンフェルス	刃部は比較的直利
6	1136	剥片石鏃	調査区内	40.2	37.2	9.1	17.2	重石ホルンフェルス	細かな押圧は観察されるが磨滅か

単位: cm, g

表6 遺構外出土剥片計測表

遺し番号	出土位置	長	幅	厚	量	石材	遺し番号	出土位置	長	幅	厚	量	石材
37	A 区内 (5.3)	(3.3)	(1.0)	(15.3)		頁岩 (new)	720	B C-7	(5.4)	(3.8)	(1.4)	(25.1)	赤玉石
502	B-B4 (3.1)	(2.7)	(1.0)	(7.7)		チャート	830	B C-7	(2.0)	(1.9)	(1.0)	(3.5)	玉髄
528	B-B4 (2.6)	(2.1)	(1.0)	(4.1)		鉄石混入	831	B C-7	(2.6)	(1.8)	(0.6)	(2.5)	チャート
533	B-B4 (4.7)	(3.8)	(1.7)	(27.4)		チャート	879	B C-7	(5.2)	(3.5)	(1.0)	(20.1)	肥後チャート
481	B C-4 (2.9)	(2.8)	(0.7)	(6.1)		チャート	880	B C-7	(3.6)	(1.8)	(0.6)	(3.5)	赤玉石
561	B C-4 (2.7)	(2.1)	(0.6)	(4.6)		チャート	987	B C-8	(2.6)	(2.4)	(0.7)	(3.4)	チャート
563	B C-4 (4.1)	(2.9)	(1.1)	(10.1)		チャート	1019	B D-8	(4.4)	(2.5)	(1.2)	(11.9)	チャート
589	B C-4 (2.0)	(1.5)	(0.4)	(0.8)		チャート	1020	B D-8	(2.2)	(1.9)	(0.4)	(1.1)	チャート
458	B C-5 (2.4)	(1.8)	(0.7)	(2.7)		球賢泥岩	1071	B D-8	(4.1)	(4.0)	(1.0)	(12.1)	球賢泥岩 (直貫)
617	B C-5 (5.1)	(4.1)	(1.0)	(17.8)		肥後チャート	1114	B 区内	(4.6)	(2.7)	(0.8)	(10.4)	チャート
618	B C-5 (4.0)	(3.0)	(1.3)	(12.2)		チャート	1115	B 区内	(1.8)	(1.3)	(0.5)	(0.94)	チャート
619	B C-5 (4.2)	(2.7)	(1.1)	(8.7)		肥後チャート	1116	B 区内	(3.0)	(2.5)	(0.7)	(4.3)	玉髄
620	B C-5 (3.8)	(2.5)	(1.0)	(6.6)		肥後チャート	1174	B 区内	(2.2)	(2.0)	(0.6)	(2.0)	チャート
621	B C-5 (3.2)	(2.3)	(0.9)	(7.1)		肥後チャート	1072	C D-8	(4.6)	(3.3)	(0.9)	(12.6)	チャート
622	B C-5 (2.4)	(2.0)	(0.6)	(3.9)		玉髄	45	C D-9	(5.5)	(4.6)	(2.5)	(76.8)	チャート
623	B C-5 (2.7)	(2.3)	(0.8)	(4.8)		肥後チャート	—	C D・E-12	(2.0)	(1.9)	(0.8)	(2.0)	球賢泥岩 (直貫)
624	B C-5 (2.7)	(2.3)	(0.8)	(3.4)		チャート	1084	C D・E-12	(2.5)	(2.3)	(0.7)	(3.3)	チャート
625	B C-5 (2.2)	(2.2)	(1.0)	(4.6)		チャート	1087	C B-13	(3.5)	(3.3)	(0.8)	(7.1)	頁岩
626	B C-5 (4.1)	(2.4)	(0.6)	(6.3)		頁岩	370	C 区内	(3.6)	(2.0)	(1.0)	(7.1)	チャート
627	B C-5 (2.3)	(2.0)	(1.8)	(7.4)		赤玉石	371	C 区内	(4.3)	(1.6)	(0.6)	(2.8)	チャート
628	B C-5 (2.0)	(1.7)	(0.9)	(3.1)		赤玉石	372	C 区内	(2.3)	(1.9)	(1.0)	(4.7)	チャート
629	B C-5 (1.3)	(1.2)	(0.5)	(0.8)		玉髄	373	C 区内	(2.1)	(1.2)	(0.6)	(1.4)	チャート
680	B C-5 (5.0)	(3.1)	(1.4)	(18.04)		赤玉石	397	C 区内	(4.5)	(1.8)	(0.9)	(6.0)	チャート
681	B C-5 (4.7)	(2.8)	(1.1)	(9.5)		黒石混入	398	C 区内	(3.0)	(2.3)	(0.9)	(3.3)	チャート
682	B C-5 (2.2)	(1.7)	(0.8)	(3.9)		玉髄	399	C 区内	(2.3)	(2.0)	(0.5)	(2.3)	チャート
687	B C-5 (3.3)	(2.3)	(0.5)	(3.3)		頁岩	400	C 区内	(2.5)	(1.5)	(0.6)	(2.3)	チャート
696	B C-5 (4.5)	(3.0)	(0.9)	(7.8)		肥後チャート	401	C 区内	(2.4)	(1.2)	(0.4)	(1.1)	チャート
697	B C-5 (5.0)	(3.5)	(1.0)	(17.0)		チャート	402	C 区内	(1.5)	(1.5)	(0.5)	(1.3)	チャート
698	B C-5 (3.0)	(2.4)	(1.0)	(5.0)		チャート	496	C 区内	(4.3)	(2.9)	(1.0)	(11.0)	チャート
699	B C-5 (3.1)	(2.3)	(0.7)	(3.4)		チャート	497	C 区内	(3.0)	(2.3)	(0.6)	(2.7)	チャート
700	B C-5 (2.4)	(2.0)	(1.3)	(4.8)		チャート	703	C 区内	(2.0)	(1.4)	(0.5)	(0.6)	赤玉石
701	B C-5 (2.3)	(1.7)	(0.7)	(0.7)		肥後チャート	1160	C 区内	(6.3)	(3.4)	(1.5)	(33.7)	チャート
702	B C-5 (3.0)	(1.4)	(0.5)	(2.0)		チャート	45	調査区内	(4.5)	(2.8)	(1.1)	(14.8)	頁岩
753	B C-6 (4.3)	(3.3)	(0.9)	(17.2)		チャート	70	調査区内	(2.3)	(1.9)	(0.6)	(3.3)	チャート
754	B C-6 (13.3)	(2.2)	(0.8)	(5.0)		チャート	185	調査区内	(4.9)	(4.6)	(2.0)	(36.6)	チャート
755	B C-6 (3.8)	(2.6)	(1.1)	(8.3)		チャート	239	調査区内	(2.4)	(2.4)	(0.4)	(2.4)	チャート
756	B C-6 (3.6)	(2.7)	(0.8)	(7.9)		チャート	242	調査区内	(4.1)	(3.7)	(2.5)	(31.3)	チャート
757	B C-6 (3.3)	(3.3)	(1.8)	(17.3)		頁岩	277	調査区内	(2.3)	(1.7)	(0.8)	(3.2)	チャート
758	B C-6 (3.7)	(3.1)	(1.1)	(5.4)		頁岩	360	調査区内	(3.4)	(2.1)	(0.7)	(4.9)	チャート
759	B C-6 (2.8)	(2.7)	(1.0)	(5.4)		頁岩	361	調査区内	(1.5)	(1.0)	(0.3)	(0.4)	チャート
760	B C-6 (3.4)	(3.1)	(1.0)	(6.4)		頁岩	417	調査区内	(2.2)	(1.3)	(0.6)	(1.4)	チャート
761	B C-6 (3.0)	(2.8)	(1.0)	(4.0)		チャート	418	調査区内	(3.3)	(2.9)	(1.3)	(14.1)	チャート
762	B C-6 (3.0)	(2.0)	(0.6)	(2.8)		肥後チャート	428	調査区内	(2.4)	(1.7)	(0.5)	(2.6)	チャート
764	B C-6 (1.7)	(1.3)	(0.4)	(0.5)		チャート	763	調査区内	(2.1)	(1.8)	(0.5)	(1.2)	チャート

単位: cm, g

表7 遺構外出土打製石斧観察表

単位: cm, g

検出 番号	通し 番号	出土位置 区 グリッド	形状	断面形状 断面 先端	長さ	幅		厚	重	残存 状況	石材	特徴
						頂	底					
1	80	調査区内	A-1	① a	9.7	6.2	4.3	2.1	145.6	イ	黒曜石・カルンフェルス	片面自然面・片面自然面の磨滅感 断面・縁部 の磨滅感 本製造か
2	501	B-4	A-1	② b	12.1	8.3	5.0	2.2	213.1	イ	黒曜石・カルンフェルス	片刃か・上面部は自然面磨 断面は本製 本製造か
	677	B-5	A-1	— a	(8.5)	8.6	5.4	2.3	130.1	イ	カルンフェルス系	自然面磨 断面・縁部磨滅 本製造か
3	948	B 区内	A-2	① b	10.4	6.7	5.1	2.5	205.8	イ	黒曜石・カルンフェルス	自然面磨 断面・縁部磨滅 本製造か
	84	調査区内	A	— b	(6.8)	7.4	—	2.6	172.7	イ	カルンフェルス	自然面磨 断面・縁部磨滅 本製造か
	752	B-6	A	— a	(3.9)	7.8	—	0.8	24.0	ヘ	シルト岩	断面・縁部磨滅 本製造か
	590	B-4	(A)	— b	(5.6)	(5.5)	(4.1)	(0.9)	(33.5)	イ	カルンフェルス系	片面自然面 片面大きく磨滅 本製造か
	748	B-6	(A)	— a	(8.1)	(6.5)	(4.6)	2.4	(118.6)	イ	カルンフェルス系	片面刃部・片面断面に大きな割傷 刃部に破砕か
	950	C D-10	(A)	—	(5.6)	—	(6.3)	1.3	(79.5)	チ	カルンフェルス系	断面磨滅 製作途中に破砕か
4	988	A 区内	B	— a	(11.8)	6.8	5.0	2.6	(99.9)	ハ	カルンフェルス	断面は自然面磨滅 断面先端に鋭利な欠けか
	1135	C 区内	B	— b	(6.8)	(5.2)	3.7	1.1	(50.6)	イ	カルンフェルス系	小形の断面か 片面自然面磨滅で平削 断面 中央に大きな割傷 1
	1133	C 区内	Ba	— a	8.8	5.5	4.3	2.1	94.5	イカ	カルンフェルス系	自然面磨 加工痕あり 自然面に破砕か
	1178	B 区内	—	— b	(8.3)	—	—	2.8	(31.7)	ヘ	カルンフェルス系	自然面磨 加工痕あり 自然面に破砕か
	1156	C 区内	—	—	(5.5)	(4.5)	—	(1.2)	(29.4)	イ	カルンフェルス系	小形 加工痕少ない
	78	A 区内	—	—	7.6	—	4.8	1.2	44.4	チ	頁岩	片刃片か 加工痕少ない
	609	B-5	—	— b	(2.8)	6.8	—	1.3	(31.6)	ヘ	カルンフェルス系	片刃先端部か 断面あるが磨滅

表8 遺構外出土石皿観察表

単位: cm, g

検出 番号	通し 番号	出土位置 区 グリッド	形状	断面形状	断面形状加工	残存 部位	磨面	最大長	最大幅	最大厚	重量	石材	特徴
3	1104	B SK105 北東	長円形	I	Aa A'	片面	37.8	26.0	7.7	9350	多孔黒輝石(矽石)系	大きさ(大) 基本 上面磨滅 底の磨り上がり 下面平削	
	307	C 区内	長円形	I	Aa D	片面	(7.5)	(11.7)	(5.8)	(466.3)	矽石系	断面磨滅	
5	1259	B 区内	長円形	I	Aa B	片面	(23.0)	(25.5)	(10.0)	(7350.9)	多孔黒輝石(矽石)系	磨とし(小) 基本 磨とし(小)か	
7	446	B-4	長方形	I	Aa B	片面	(26.0)	(30.1)	(10.5)	(7800.9)	多孔黒輝石(矽石)系	SS-180 西壁付足 磨とし(小)あり	
	89	B-8	長円形	I	Aa A	片面	25.5	23.4	5.6	5200.0	矽石系	断面磨滅	
1	949	B 区内	長円形	I	Aa B	片面	(14.1)	(11.0)	(6.9)	(1009.8)	矽石系	小片 外形切羽側面減少	
	1282	B 区内	長方形	I	Aa B	片面	(11.1)	(8.8)	(3.7)	(476.0)	矽石系	片面磨滅	
	1277	B 区内	長方形	I	Aa B	片面	(12.5)	(11.8)	(5.7)	(1272.2)	矽石系	磨とし(小)あり	
	825	B-7	長方形	I	Aa D	片面	(9.8)	(8.0)	(3.5)	(358.3)	頁岩	磨とし(小)あり	
	1229	B 区内	長方形	I	Aa D	片面	(11.1)	(9.9)	(6.3)	(1075.53)	矽石系	断面磨滅	
	953	B-8	不明	I	Aa D	片面	(16.0)	(13.0)	(8.0)	2950	矽石系	形状不明 平削	
	918	B-8	不明	I	Aa D	片面	(13.4)	(5.5)	(7.5)	494.80	矽石系	小片 形状不明 平削	
	1226	B 区内	不明	I	Aa D	片面	(13.0)	(8.8)	(7.4)	844.12	矽石系	形状不明 平削	
	907	B-8	不明	I	Aa B	片面	(15.8)	(14.0)	(6.0)	1295.96	矽石系	形状不明 平削	
	992	B-8	不明	I	Aa D	両面磨滅	(12.1)	(9.9)	(7.8)	696.37	矽石系	形状不明 平削	
	807	B-6	不明	I	Aa E	片面	(9.5)	(6.2)	(3.9)	263.73	矽石系	形状不明 平削	
	379	調査区内	不明	I	Aa F	片面	(7.5)	(4.5)	(2.3)	90.30	矽石系	形状不明 平削	
	826	B-7	不明	I	Aa E	片面	(6.2)	(8.1)	(6.6)	270.19	矽石系	形状不明 平削	
	805	B-6	不明	I	Aa D	—	(12.2)	(9.6)	(6.9)	665.40	矽石系	形状不明 平削	
	1273	B 区内	不明	I	Aa F	両面	(8.5)	(5.5)	(3.0)	167.87	矽石系	小片	
	1225	B 区内	不明	I	Aa E	両面	(9.3)	(11.6)	6.3	1009.54	矽石系	小片 両面磨滅	
	1130	C 区内	不明	I	Aa F	両面磨滅	(12.0)	(6.0)	(2.7)	219.78	矽石系	小片 平削 研面あり	
	882	B-7	不明	I	Aa F	(片面)	(7.5)	(7.2)	(2.8)	186.61	矽石系	小片 平削 研面あり	
	211	B 区内	不明	I	Aa F	両面磨滅	(9.9)	(6.9)	(6.5)	589.02	矽石系	小片	
	1195	C 区内	不明	I	Aa D	(片面)	(9.5)	(8.0)	(7.5)	628.76	矽石系	小片 平削 片面磨滅	
	22	調査区内	不明	I	Aa F	両面磨滅	(14.5)	(13.9)	(9.0)	2250	矽石系	小片 平削 研面あり	
	1123	C 区内	不明	I	Aa F	片面	(6.8)	(4.6)	(2.7)	64.05	矽石系	小片	
4	72	調査区内	円形	I	B A'	両面	24.0	23.0	6.7	4900	石形磨石	上面平削付 磨滅感を意識か	
	1280	B 区内	円形	I	B D	両面	(15.5)	(10.3)	(4.8)	723.68	矽石系	断面磨滅	
	296	B 区内	不明	I	B	片面	(10.3)	(7.7)	(4.3)	(358.5)	矽石系	残存面は自然面 切羽側面減少	
	1194	C 区内	不明	I	Ba D	片面	(13.1)	(16.0)	(12.5)	2450	矽石系	形状不明	
	1193	C 区内	三角形	I	Ce A'	両面	33.2	37.8	8.5	8950	矽石系	三角形(大) 基本 磨とし(小)か	
6	57	A 区内	三角形	I	Ce C	片面	(23.0)	(25.0)	(7.4)	4650	矽石系	三角形(中)	
	1117	C 区内	三角形	I	Ce D	両面	29.2	21.5	5.7	4650	矽石系	三角形(中) 表面磨とし(小)か	
	7	C 区内	不明	I	Ce D	両面	(10.5)	(12.7)	(3.9)	698.98	矽石系	形状不明	
	8	調査区内	不明	I	Ce C	両面	26.2	(21.0)	9.1	6700	矽石系	形状不明	
	1276	B 区内	不明	I	Ce E	両面	(15.8)	(15.7)	(6.6)	1616.46	矽石系	形状不明	
	586	B-4	不明	I	Ce E	両面	(13.3)	12.5	(6.7)	1191.93	矽石系	形状不明	
	74	調査区内	不明	I	Ce D	(片面)	(15.5)	(13.8)	(7.5)	1736.42	矽石系	形状不明 片面磨滅	
	94	A 区内	長円形	I	Ce A'	両面	22.4	17.5	8.1	3700	矽石系	磨滅	
	90	B 区内	三角形	I	Ce A	全面か	36.8	30.6	14.0	175500	矽石系	三角形(大) 主断面片面	
	1287	調査区内	三角形	I	Cd A	片面	41.1	25.3	13.5	175000	矽石系	三角形(大)	
	40	調査区内	三角形	I	Cd A	片面	36.6	27.0	13.6	16800	矽石系	三角形(大) 凹孔自然か	
	1269	B 区内	三角形	I	Cd A	片面	14.4	12.2	4.6	1170.20	矽石系	三角形(小)	
8	2	調査区内	三角形	I	Cd A'	両面	24.1	18.5	8.0	4200	火山噴出物	上面中央・下面磨滅や中盛り 上がる	
	1267	B 区内	三角形	I	Ce	両面	(12.6)	(9.0)	(3.1)	(361.1)	矽石系	破片三角形(中)	
2	908	B-10	三角形	I	Ce A	両面	16.7	10.4	5.0	985.84	矽石系	三角形(小) 縁高は前縁状の突起か	

第3章 確認された遺構と遺物

探検 番号	通し 番号	出土位置 区	グリッド	平面形 遺物	形状 遺物	形状加工 状況	現存 部位	遺物 種類	最大長	最大幅	最大厚	重量	石材	特記
	1281	B	区内	不明	I	C-d	D	両面	(12.7)	(10.0)	(6.1)	724.90	燧石の系	形状不明
	630	B	C-5	不明	I	C-e	B	両面	(9.0)	(9.5)	(5.4)	536.40	燧石の系	形状不明
	630	B	C-5	不明	I	C-e	B	両面	(9.0)	(9.5)	(5.4)	536.40	燧石の系	形状不明
	1279	B	区内	不明	I	C-e	D	両面	(13.4)	(18.0)	(6.0)	72.27	燧石の系	形状不明
	3	調査区内	長方形	I	C-d	B	両面	(20.1)	(19.0)	(8.1)	14100.0	燧石の系	下面の孔	
9	1256	B	区内	長方形	I	C-d	A	両面	32.8	21.4	11.0	7800	多孔質輝石燧石の 系燧石	364とほぼ同形 上面中央や中凹 む 下面に十字状の凹む
	1220	B	区内	長方形	I	C-d	D	(片面)	(21.5)	(15.5)	(6.0)	2790	多孔質燧石の 系燧石	断面三角形形状
	10	調査区内	不定形	I	C-d	A'	両面	21.8	20.1	4.8	3100	輝石燧石の系	平坦	
15	39	調査区内	三角形	I	C-d	A'	両面	37.0	32.7	10.9	18300	燧石の系	364とほぼ同形 上面ととも石材 表面薄く剥離 外形加工か	
	90	C	区内	三角形	I	C-d	C	(片面)	(22.3)	(13.2)	8.4	2800	燧石の系	表面破砕
10	1216	C	区内	三角形	I	C-d	A'	両面	25.5	20.7	6.0	4400	多孔質燧石の 系燧石	三角形(中) 凹孔は自然か
	56	C	区内	三角形	I	C-d	A	両面	20.0	16.4	6.0	2400	燧石の系	三角形(中)
	743	B	C-6	三角形	I	C-d	A	両面	15.9	13.0	4.3	1206.55	燧石の系	三角形(小)
	1270	B	区内	不明	I	C-d	D	片面	12.5	(9.0)	3.8	502.28	燧石の系	形状不明
	6'	調査区内	不明	I	C-d	D	片面	(14.6)	(11.0)	(6.5)	1409.21	燧石の系	形状不明 表面破砕	
	1245	B	区内	不明	I	C-d	E	両面	(8.3)	(5.5)	(2.8)	201.55	燧石の系	形状不明
	1225	B	区内	不明	I	C-d	E	両面	(12.3)	(9.5)	(6.5)	1039.57	燧石の系	平坦 表面凹凸あり
	1212	B	区内	不明	I	C-d	F	片面	(16.3)	(13.2)	(9.0)	2650	燧石の系	形状不明 凹あり 片面は自然
	913	A	C-8	長方形	I	C	B	両面	12.5	11.4	4.6	795.99	燧石の系	1/2程度欠
	92	A	区内	長方形	I	C	B	両面	(22.0)	(13.8)	6.5	2150	燧石の系	小型
	1217	C	区内	三角形	I	C	A	両面	38.5	22.8	9.5	101.6	燧石の系	三角形(大) 上面溝とし口か 下面中央凹む
	1257	B	区内	三角形	I	C	A	両面	31.0	24.7	9.9	101500	燧石の系	三角形(大) 凹 自然か不明
	1258	B	区内	三角形	I	C	A'	両面	(36.9)	22.2	7.5	9850	燧石の系	三角形(大)
	1221	B	区内	三角形	I	C	B	片面	(20.7)	(15.3)	(9.4)	3650	燧石の系	三角形(大) 破砕
	92	B	C-8	三角形	I	C-d	B	両面	(19.0)	14.6	4.9	2200	燧石の系	小型 1/2程度
11	81	B	不明	I	D-d	A	両面	26.8	23.7	5.5	4660	輝石燧石の系	SK-106付足 片側縁部・片側 面溝とし口状 部残状を意図か	
	920	B	C-8	長方形	II	D	D	片面	(9.7)	(5.1)	(4.3)	179.14	燧石の系	形状不明
	881	B	C-6	長方形	II	C-e	B	両面	20.1	(14.9)	8.8	2600	燧石の系	II級基本 凹あり
	736	B	C-6	長方形	II	C-e	A'	両面	25.5	13.5	5.2	2550	多孔質輝石燧石の 系燧石	中形 両端縁破りか 片面明確状 を意図か
	1230	B	区内	長方形	II	C-e	A	両面	25.5	13.6	5.1	2590	燧石の系	中形
	1266	B	区内	長方形	II	C-e	B	両面	(12.0)	(12.8)	(6.2)	1146.80	燧石の系	中 やや不整形
	1234	B	区内	長方形	II	C-e	A	両面	17.8	9.7	5.4	1435.40	輝石燧石の系	小 片面中央凹い凹み
	1235	B	区内	長方形	II	C-e	A	両面	15.7	9.3	5.2	958.53	燧石の系	小
13	71	調査区内	長方形	II	C-e	A	-	-	17.3	12.7	11.5	3600	輝石燧石の系	小型 凹1ヶ
	1288	B	区内	長方形	II	C-e	A	全面	23.5	13.9	10.7	4650	輝石燧石の系	中 ラジビール状
	73	調査区内	長方形	II	C-e	A	-	-	15.5	11.1	8.3	1605.40	燧石の系	小
	9	調査区内	長方形	II	C-e	A'	-	-	15.0	8.2	7.5	1433.04	燧石の系	小 やや不整形
	1265	B	区内	長方形	II	C-e	A	全面	14.7	8.5	7.1	1081.09	燧石の系	小 やや不整形
	1247	B	区内	不明	II	C-e	D	-	(3.2)	(6.2)	(4.7)	83.89	燧石の系	小片
	452	B	C-6	不明	II	C-e	B	両面	(5.0)	(9.0)	(4.9)	924.58	燧石の系	小片
	91	B	C-6	不明	II	C-e	B	両面	(5.1)	(14.5)	(7.5)	2500	燧石の系	小片
12	259	B	区内	長方形	II	C-e	B	両面	(17.1)	21.6	8.8	(4230.0)	燧石の系	小片
	585	B	C-4	長方形	II	C-d	D	-	(21.7)	(17.7)	(5.2)	2100	燧石の系	小片
	952	B	C-8	長方形	II	C-d	D	両面	(14.5)	(12.6)	(9.3)	1490	輝石燧石の系	小片
	19	調査区内	長方形	II	C-d	B	両面	(13.0)	18.5	(9.0)	2850	燧石の系	小片	
	1289	B	区内	長方形	II	C-d	D	-	(19.2)	(15.9)	(11.4)	4850	燧石の系	ドライト
	1121	C	区内	長方形	II	C-d	D	両面	(9.6)	(8.2)	(7.8)	652.63	輝石燧石の系	小片
	1242	B	区内	長方形	II	C-d	D	両面	(10.6)	(16.7)	(9.1)	1607.6	燧石の系	赤色変化 結核か
14	1219	B	区内	不定形	III	D-e	A'	片面	20.3	15.0	12.4	4000	輝石燧石の系	側面中央の凹みは自然か
	1227	B	区内	不明	I	A	E	片面	(10.1)	(4.4)	(3.5)	206.14	燧石の系	小片 外形加工あり
	1056	B	D-8	不明	I	A	F	片面	(11.3)	(8.9)	(4.5)	604.43	燧石の系	小片 外形加工あり
	4	調査区内	不明	I	d	F	片面	(8.3)	(7.3)	(4.5)	357.07	燧石の系	チャート 小片	
	1284	B	区内	不明	I	d	F	両面	(7.0)	(5.8)	(5.5)	232.65	燧石の系	小片
	125	A	区内	不明	I	d	F	片面	(13.6)	(12.1)	(8.6)	1225.19	燧石の系	小片
	39	調査区内	不明	I	d	F	片面	(7.8)	(6.4)	(5.3)	275.38	輝石燧石の系	小片	
	1000	B	D-8	不明	II	d	D	-	(4.9)	(4.3)	(2.7)	53.55	燧石の系	石皿片か
	137	C	C-4・5	不明	II	d	F	-	(10.5)	(7.5)	(1.6)	125.31	燧石の系	石皿片か
	199	C	区内	不明	II	d	D	-	-	-	-	-	燧石の系	石皿片か
	1155	C	区内	不明	II	d	E	(片面)	(8.0)	(7.1)	(2.9)	(130.5)	燧石の系	石皿片か
	10'	C	区内	不明	II	d	E	(片面)	(7.6)	(7.4)	(3.4)	(158.3)	燧石の系	石皿片か
	11'	C	区内	不明	II	d	E	(片面)	(8.3)	(5.5)	(3.9)	(101.7)	燧石の系	石皿片か
	67	A	区内	不明	I	d	F	破砕	(5.0)	(5.0)	(3.0)	(81.9)	燧石の系	石皿片か
	25	不明						片面	(5.7)	(3.1)	(1.9)	27.58	燧石の系	石皿片か
	12'	不明							(6.0)	(4.7)	(1.9)	32.91	燧石の系	石皿片か
	54	不明						片面	(7.9)	(4.3)	(2.4)	66.76	燧石の系	石皿片か
	24	調査区内	不明	II	C	B	両面	20.4	(14.3)	9.3	2950	多孔質輝石燧石の 系燧石	石皿片か	
	49	A	区内	不明	II	e	D	(片面)	(6.0)	(5.3)	(1.4)	51.04	燧石の系	石皿片か
	50	A	区内	不明	II	e	D	(片面)	(5.4)	(5.1)	(1.0)	27.81	燧石の系	石皿片か

探検 番号	通し 番号	出土位置 区 グリッド	形状 平面形 断面 形状加工	残存 部位	表面	最大長	最大幅	最大厚	重量	石材	特記	
	117	B 区内		A'	両面	37.5	22.4	9.2	8400		三角形 (A)	
	221	B 区内		F	片面	(10.1)	(7.4)	(6.4)	589.06		平坦 研磨面あり	
	670					(5.6)	(3.8)	(1.7)	29.56		石面片か	
	1130	C 区内	不明	B	d	F (片面)	(12.0)	(6.0)	(2.7)	219.78	安山の系 石面片か	
	1199	C 区内	不明	B	d	F (片面)	(4.9)	(2.8)	(1.1)	19.38	安山の系 石面片か	
	1228	B 区内		I	d	両面研砕	(10.0)	(8.5)	(8.5)	645.26	安山の系 石面片か	
	1282	B 区内	不明	B	c	D	片面	(11.0)	(8.5)	(3.7)	475.91	輝石安山岩 縁あり
	1228	B 区内		D		両面研砕	(10.0)	(8.5)	(8.5)	645.26		
	1282	B 区内	不明	B	c	D	片面	(11.0)	(8.5)	(3.7)	475.91	輝石安山岩 縁あり

表9 遺構外出土石器観察表

単位: cm, g

探検 番号	通し 番号	出土位置 区 グリッド	類	残存 部位	表面	最大長	最大幅	最大厚	重量	石材	特徴	
1	54	調査区内	A1 12ア	A	両面	5.9	4.9	2.2	84.7	輝石安山岩	大ききA1/7	
	566	B C-4	A1 12ア	A	片面	7.7	5.6	2.5	142.7	輝石安山岩	大ききA2/7	
	632	B C-5	A1 12ア	A	片面	7.6	7.0	3.3	211.5	多孔質輝石安山岩	大ききA3/7	
3	18	調査区内	A1 12ア	A	片面	9.0	7.3	4.6	367.4	輝石安山岩	大ききA4/7 凹孔片面明確・片面不明瞭	
	1025	B D-8	A1 12ア	A	片面	8.5	7.6	3.6	342.9	輝石安山岩	大ききA4/7 形状に丸み	
	990	B C-6	A1 22ア	A	両面	8.3	7.8	4.2	451.6	安山の系	大ききA4/7	
	746	B D-8	A1 22ア	A	両面	7.7	5.0	4.0	187.7	安山の系	大ききA4/7	
	1131	C 区内	A1 22ア	A	片面	8.8	5.8	3.8	252.5	輝石安山岩	大ききA4/7 両縁の劣化は顕著	
	34	調査区内	A1 12ア	A	両面	10.1	9.2	3.8	565.5	安山の系	大ききA5/7 凹孔両面不明瞭	
	16	調査区内	A1 22ア	A	両面	11.3	4.2	4.4	565.5	輝石安山岩	大ききA5/7	
4	1200	C 区内	A1 12ア	A	両面	10.6	4.4	4.5	584.2	安山の系	大ききA5/7 凹孔両面とも不明瞭	
	13	調査区内	A1 22ア	A	両面	10.0	7.7	3.0	347.8	燧石	大ききA5/7	
	1201	B 区内	A1 22ア	A	片面	10.6	7.6	3.4	376.4	輝石安山岩	大ききA5/7 被蝕か	
	1239	B 区内	A1 22ア	A	両面	10.9	7.8	4.5	449.9	安山の系	大ききA5/7	
	1024	B D-8	A1 22ア	A	片面	9.8	7.4	3.0	286.4	安山の系	大ききA5/7	
	28	調査区内	A1 22ア	A	両面	9.6	7.0	4.8	456.1	安山の系	大ききA5/7	
	1055	B C-8	A1 12ア	A	両面	12.7	6.7	3.4	433.2	輝石安山岩	大ききA6/7 凹孔両面	
	40	B 区内	A1 12ア	A	両面	11.7	6.9	4.4	432.2	輝石安山岩	大ききA6/7	
	41	B 区内	A1 12ア	A	両面	11.5	7.4	4.6	600.1	チャイナイト	大ききA6/7	
	1012	C D-12	A1 22ア	A	両面	12.4	7.7	4.4	567.5	安山の系	大ききA6/7	
	14	調査区内	A1 22ア	A	片面	10.9	6.1	3.1	305.1	安山の系	大ききA6/7	
	240	調査区内	A1 22ア	A	片面	10.4	6.1	3.5	308.9	安山の系	大ききA6/7 凹孔両面不明瞭	
	1234	B 区内	A1 22ア	A	片面	12.1	6.9	4.5	448.5	安山の系	大ききA6/7	
	1109	C 区内	A1 22ア	A	両面	10.6	6.0	4.7	361.1	安山の系	大ききA6/7	
	815	B C-7	A1 b 12ア	A	片面	11.1	7.6	4.8	547.0	輝石安山岩	大ききA6/7 両縁の磨耗は顕著か	
	914	B C-8	A1 b 12ア	A	片面	11.9	6.6	4.5	559.9	安山の系	大ききA6/7	
	347	調査区内	A1 b 12ア	A	片面	10.6	6.6	4.9	499.5	安山の系	大ききA6/7	
	15	調査区内	A1 b 12ア	A	片面	11.1	4.9	6.5	490.2	安山の系	大ききA6/7	
5	1110	C 区内	A1 12ア	A	両面	13.1	5.1	5.3	921.9	輝石安山岩	大ききA7/7 凹孔片面 両縁磨砕か	
	818	B C-7	A1 12ア	A	両面	13.6	8.1	5.5	882.8	輝石安山岩	大ききA7/7	
6	83	調査区内	A1 b 12ア	A	両面	12.7	8.2	6.4	1154.4	輝石安山岩	大ききA7/7 凹孔両面不明瞭	
	78	調査区内	A1 22ア	A	両面	13.5	8.0	4.9	813.0	安山の系	大ききA7/7 被蝕 表面スス	
	11	調査区内	A1 12ア	A	片面	11.4	8.6	5.4	803.4	安山の系	大ききA7/7	
	1054	B D-8	A1 12ア	A	両面	12.3	8.7	5.4	890.4	安山の系	大ききA7/7	
	258	B 区内	A1 b 12ア	A	両面	7.8	6.1	6.1	1044.1	安山の系	大ききA7/7 縁状 片面・片面凹孔	
	2	B C-7	A1 12ア	A	片面	12.7	8.0	4.0	664.6	安山の系	大ききA7/7	
	一	B 区内	A1 b 12ア	A	両面	7.0	8.0	4.5	767.8	安山の系	大ききA7/7 縁状 両縁両面縁の磨砕か	
	288	調査区内	A1 b 12ア	A	片面	15.0	8.2	4.6	515.8	輝石安山岩	大ききA7/7 表面明確による割傷か	
	31	調査区内	A1 b 12ア	A	片面	13.6	9.5	6.4	992.1	安山の系	大ききA7/7 丸み	
	21	調査区内	A1 b 12ア	A	片面	12.3	7.6	5.0	799.1	安山の系	大ききA7/7	
	705	B C-5	A1 b 12ア	A	片面	10.8	8.7	7.0	970.5	安山の系	大ききA7/7	
	91	調査区内	A1 b 12ア	A	片面	12.7	10.2	5.6	1041.1	輝石安山岩	大ききA7/7 丸み 凹孔両面	
	3	調査区内	A1 b 12ア	A	両面	11.3	9.1	5.3	772.5	安山の系	大ききA7/7 丸み	
	804	B C-6	A1 b 12ア	A	両面	7.7	6.1	4.5	382.5	ドレライト	磨砕 大きき不明 磨砕 両面凹孔	
	808	B C-6 (A)				7.9	(6.0)	2.6	(171.3)	チャイナイト	縁状磨砕 片面磨砕 大きき不明	
	558	B C-4	B1 a 22ア	A	両面	2.1	1.9	0.8	7.3	燧石	大ききB1/7	
	1102	調査区内	B1 a 22ア	A	両面	4.9	1.0	4.5	50.9	燧石	大ききB2/7	
	67	調査区内	B1 a 22ア	A'	片面	3.9	3.8	2.0	35.2	安山の系	大ききB2/7 片側縁部大きな欠け	
	1183	B 区内	B1 a 22ア	A	片面	3.7	2.2	109.0	32.3	安山の系	大ききB2/7	
	1031	B D-8	B1 a 22ア	A	片面	4.0	2.1	1.9	30.2	安山の系	大ききB2/7	
	108	調査区内	B1 a 22ア	A'	片面	3.9	3.9	2.0	33.9	安山の系	大ききB2/7	
	641	B C-5	B1 a 22ア	A	片面	5.7	5.2	3.5	118.6	輝石安山岩	大ききB3/7	
	1122	C 区内	B1 a 22ア	A'	片面	6.9	6.8	1.5	143.6	輝石安山岩	大ききB3/7 片面中央大きく凹む	
	1204	C 区内	B1 a 22ア	A'	両面	7.1	6.0	1.7	102.6	輝石安山岩	大ききB3/7	
	17	調査区内	B1 22ア	A	両面	7.0	6.5	3.7	241.0	輝石安山岩	大ききB4/7	
	295	調査区内	B1 22ア	A	両面	7.5	4.4	4.3	231.7	多孔質輝石安山岩	大ききB5/7	
	7	616	B C-5	B1 22ア	A	両面	9.8	9.1	5.6	759.0	輝石安山岩	大ききB6/7 切磨・研磨により形状加工か
	803	B C-6	B1 12ア	A	両面	9.5	8.8	4.6	479.3	輝石安山岩	大ききB6/7	
	8	1112	C 区内	B1 22ア	A	両面	10.0	9.7	5.1	727.9	輝石安山岩	大ききB6/7

第3章 確認された遺構と遺物

探検 番号	遺構 番号	地上位置 区	グリッド	期	発見 部位	面形	最大長	最大幅	最大厚	重量	石材	特徴	
1108	C	区内	B12②ア	A	南面	10.2	8.9	4.5	601.3		安山岩系	大きき66/7	
989	B	D-8	B12②ア	A	南面	10.2	9.5	5.2	770.6		安山岩系	大きき66/7	
79	調査区内		B12②ア	A	南面	104.0	9.4	4.4	632.3		安山岩系	大きき66/7	
1285	B	区内	B12②ア	A	南面	10.4	8.5	5.5	714.6		安山岩系	大きき66/7	
618	B		B12②ア	A	南面	13.9	7.1	4.9	767.4		安山岩系	大きき66/7	
1231	B	区内	B12②ア	A	南面	10.9	9.2	5.5	521.6		安山岩系	大きき66/7	
221	C	区内	B12②ア	A	南面	10.1	7.7	3.5	417.0		安山岩系	大きき66/7	
92	調査区内		B1a2②ア	A	片面	11.0	8.6	3.5	539.6		輝石安山岩	大きき66/7	
1232	B	区内	B1a2②ア	A	南面	9.2	7.7	3.7	288.5		安山岩系	大きき66/7	
1236	B	区内	B1a2②ア	A	南面	8.4	8.1	2.5	234.7		安山岩系	大きき66/7	
23	調査区内		B12②ア	A	片面	11.7	10.5	6.5	1024.3		輝石安山岩	大きき87/7	
9	991	B	D-8	B11②ア	A	南面	12.0	11.5	4.9	960.3		安山岩系	大きき87/7
415	調査区内		B1a2②ア	A	南面	14.3	12.2	3.0	693.7		輝石安山岩	大きき87/7	
559	B	C-4	C12②ア	A	片面	2.1	2.2	2.0	14.5		輝石安山岩	大ききC1/7	
5	B	C-8	C12②ア	A	片面	3.5	3.4	3.0	46.1		輝石安山岩	大ききC2/7	
926	B	C-8	C12②ア	A	片面	4.5	4.0	3.6	50.4		輝石安山岩	大ききC2/7	
1033	B	D-8	C12②ア	A	片面	4.2	3.5	3.0	55.1		輝石安山岩	大ききC2/7	
970	B	C-6	C12②ア	A	片面	4.0	3.6	2.6	34.1		安山岩系	大ききC2/7	
567	B	C-4	C12②ア	A	片面	4.3	3.3	4.3	68.0		安山岩系	大ききC2/7	
998	B	D-8	C12②ア	A	南面	4.6	3.5	3.4	69.8		安山岩系	大ききC2/7	
1029	B	D-8	C12②ア	A	片面	4.9	3.4	2.6	56.0		安山岩系	大ききC2/7	
990	B	C-8	C12②ア	C	南面	(4.3)	3.2	2.8	(56.0)		安山岩系	大ききC2/7	
10	628	B	C-5	C12①ア	A	片面	5.0	5.0	5.0	95.0		安山岩系	大ききC3/7
1013	調査区内		C12②ア	A	片面	4.9	4.7	3.5	109.2		砂岩	大ききC3/7	
958	C	C-8	C12②ア	A	片面	4.6	4.5	4.2	115.5		輝石安山岩	大ききC3/7	
921	B	C-8	C12②ア	A	南面	45.0	4.5	3.5	122.7		安山岩系	大ききC3/7	
1102	調査区内		C12②ア	A	片面	5.1	4.5	3.6	127.1		安山岩系	大ききC3/7	
76	調査区内		C12②ア	A	片面	6.2	5.3	4.8	221.4		輝石安山岩	大ききC4/7	
25	調査区内		C11①ア	A	片面	6.3	5.6	5.2	258.9		安山岩系	大ききC4/7 端部破打か	
704	B	C-5	C11①ア	A	片面	7.6	6.2	4.7	278.2		輝石安山岩	大ききC4/7 隅石片面	
241	調査区内		C12②ア	A	片面	6.2	6.1	4.4	196.3		安山岩系	大ききC4/7	
1246	B	区内	C12②ア	A	片面	6.7	6.0	5.3	279.8		安山岩系	大ききC4/7	
1244	B	区内	C12②ア	A	南面	6.7	5.7	4.7	250.8		安山岩系	大ききC4/7	
634	B	C-5	C12②ア	A	南面	7.3	5.2	5.5	269.6		安山岩系	大ききC4/7	
592	B	C-4	C12②ア	A	南面	7.5	6.1	4.3	240.0		安山岩系	大ききC4/7	
77	調査区内		C12②ア	A	南面	7.0	6.0	4.3	289.9		安山岩系	大ききC4/7	
1207	C	区内	C12②ア	A	全面	8.1	7.1	6.0	294.8		多孔質輝石安山岩	大ききC5/7	
1058	B	D-8	C12②ア	A	片面	8.8	8.1	8.2	412.4		安山岩系	大ききC5/7 底面平坦 磨損	
911	C	D-10	C12②ア	A	片面	7.7	7.1	5.4	294.1		輝石安山岩	大ききC5/7	
1057	B	D-8	C12②ア	A	片面	8.0	7.5	5.1	289.9		多孔質輝石安山岩	大ききC5/7	
1157	C	区内	C12②ア	A	片面	8.2	6.5	6.7	436.4		安山岩系	大ききC5/7	
27	調査区内		C12②ア	A	南面	7.1	5.6	5.1	259.5		安山岩系	大ききC5/7	
1113	C	区内	C12②ア	A	南面	7.9	7.2	4.5	376.8		安山岩系	大ききC5/7	
13	706	調査区内	C12②ア	A	南面	9.1	9.0	7.6	804.3		輝石安山岩	大ききC6/7	
294	調査区内		C12②ア	A	南面	9.6	8.0	5.9	633.8		輝石安山岩	大ききC6/7	
912	B	C-8	C12②ア	A	南面	9.6	7.9	7.3	688.1		安山岩系	大ききC6/7	
1059	B	D-8	C12②ア	A	南面	9.5	7.2	5.5	462.8		安山岩系	大ききC6/7	
1124	調査区内		D12②ア	A	片面	(6.8)	4.7	3.9	(115.4)		輝石安山岩	磨損 形状不明	
1063	B	D-8	D12②ア	B	片面	(6.2)	4.0	3.3	(103.8)		輝石安山岩	磨損 形状不明	
1177	B	区内	D12②ア	B	片面	6.4	6.3	3.5	306.1		安山岩系	磨損 形状不明	
643	B	C-5	D12②ア	A	全面	5.6	1.9	1.8	21.9		デブサイト	大きき1/4 小骨	
11	95	調査区内	D12②ア	A	南面	8.1	5.5	3.2	161.7		無灰質安山岩	大きき2/4 隅部破打か	
1222	C	区内	D12②ア	A	南面	13.2	7.0	4.6	676.0		安山岩系	大きき3/4	
587	B	C-4	D12②ア	A	南面	12.3	7.2	4.7	603.3		安山岩系	大きき3/4 断面三角形状 隅石片面不明瞭	
12	707	調査区内	D12②ア	A	南面	18.1	7.3	4.9	877.1		輝石安山岩	大きき4/4 下縁破打か 不明瞭	
1111	C	区内	D12②ア	A	片面	15.8	6.6	3.1	184.6		輝石安山岩	大きき4/4	
1240	B	区内	D12②ア	A	片面	17.1	8.5	5.5	1051.3		安山岩系	大きき4/4	
935	調査区内		D12②ア	B	片面	(15.2)	6.1	6.1	807.9		安山岩系	大きき4/4 磨損	
747	B	C-6	E12②ア	A	南面	8.3	4.2	165.4	165.2		輝石安山岩	大きき1/3 折形	
939	調査区内		E12②ア	C	片面	8.0	4.5	4.7	183.8		輝石安山岩	大きき1/3	
1223	B	区内	E12②ア	A	南面	10.3	5.3	5.0	405.3		安山岩系	大きき1/3 平坦でない一面は磨かたか	
264	B	区内	E12②ア	A	片面	7.5	7.3	4.3	335.6		安山岩系	大きき1/3 底面平坦	
242	調査区内		E12②ア	A	片面	7.5	4.3	4.9	216.9		安山岩系	大きき1/3	
172	調査区内		E12②ア	A	全面	7.1	4.6	4.2	108.6		安山岩系	大きき1/3	
280	B	区内	E12②ア	A	全面	9.0	7.1	2.8	225.2		安山岩系	大きき1/3 底面平坦	
36	調査区内		E12②ア	A	全面	11.5	5.4	9.2	274.7		ドレライト	大きき2/3	
14	1283	B	区内	E12②ア	A	全面	12.6	7.8	9.0	1084.1		ドレライト	大きき3/3
260	B	区内	E12②ア	A	全面	17.1	8.7	9.8	1156.6		安山岩系	大きき3/3 底面平坦	
1268	B	区内	E12②ア	A	全面	135.0	7.5	6.0	664.1		輝石安山岩	大きき3/3	
1237	B	区内	E12②ア	A	全面	16.0	6.4	4.2	502.8		安山岩系	大きき3/3	
26	調査区内		E12②ア	A	全面	13.9	5.2	6.6	694.0		デブサイト	大きき3/3 凹入部分磨かたか	
744	B	C-6	E12②ア	B	片面	(14.1)	8.4	7.7	1150.4		安山岩系	大きき3/3	
1250	B	区内	F12②ア	A	片面	4.8	4.3	1.7	65.2		閃緑岩質	大きき1/3	

探検 番号	通し 番号	出土位置 区 グリッド	階	残存 部位	構造	最大長	最大幅	最大厚	重量	石材	特徴
	279	調査区内	F B 2②A	B	全面	18.0	7.8	4.8	353.7	デライト	大きき2/3 底面平坦
15	817	B C-7	F 1 2②A	A	全面	9.8	8.1	4.1	502.6	輝石安山岩	大きき3/3
	1248	B 区内	G 1 2②A	A	片面	8.4	4.8	3.5	184.9	輝石安山岩	大きき1/3
	75	A 区内	G 1 2②A (A)	両面	(7.0)	2.2	2.2	91.4	輝石安山岩	大きき1/3 小片	
	278	調査区内	G B 2②A	A	両面	7.5	6.0	4.4	287.5	安山岩系	大きき2/3
	68	A 区内	G B 2②A	A	両面	9.2	3.0	2.9	117.7	安山岩系	大きき3/3
16	816	B C-7	G B 2②A	A	両面	10.5	5.0	4.6	331.1	輝石安山岩	大きき3/3
	1138	C 区内	G B 2②A	A	片面	10.5	6.1	5.50	419.9	安山岩系	大きき3/3
	1238	B 区内	G B 2②A	A	片面	11.0	5.8	2.6	249.5	安山岩系	大きき3/3
	293	調査区内	G B 2②A	A	片面	11.3	7.8	5.2	575.6	安山岩系	大きき3/3
	456	B 区内	H B 2②A	A	全面	9.0	5.0	2.6	137.9	安山岩系	平面釘形 断面三角形
	1090	B D-8	H B 2②A	A	全面	10.1	8.6	3.5	321.5	デライト	平面釘形であるがほぼ小楕円ナナ形
	42	調査区内	I	B	片面	(7.2)	7.1	3.1	20426.0	安山岩系	形状不明
	76	A 区内	I	C	片面	(5.9)	7.4	4.2	209.5	安山岩系	形状不明 端正な磨石の破片か
	819	B C-7	I	A	両面	11.4	9.5	3.5	583.0	輝石安山岩	形状不明
17	261	B 区内	I	A	全面	13.2	8.3	6.6	721.1	安山岩系	釘形か 側面平滑凸凹ともみえる
	14	A 区内	H	A	全面	12.1	8.3	4.9	580.8	安山岩系	不定形 断面扇形 二辺凸・二辺平坦

表10 遺構外出土石鏢観察表

単位: cm, g

探検 番号	通し 番号	出土位置 区 グリッド	平面形	厚さ	縦線け	長	幅	厚	重	石材	特徴
8	61	A 区内	A	Ⅱ	②(9)	10.5	7.0	2.7	220.94	多孔質輝石安山岩	右側縁部は縦線けか (特大)
9	8	C 区内	A	I	②(9)	10.7	7.9	1.9	213.63	安山岩系	石鏢か 片面石状磨削 縦線は打ち欠きか (特大)
10	1061	B D-8	A	I	—	10.3	8.8	1.9	222.09	頁岩	形状の似る鏢 扁平 打跡の平部にも似る
1	796	B C-6	A	I	②A	6.3	4.5	(1.3)	41.85	頁岩	右側部・裏面磨削 (大)
	668	調査区内	A	I	②A	7.1	6.3	(2.2)	94.39	石英質系	上端部大きく磨削 下縁部状 縦線けか 裏面磨削 (大)
	955	C D-10	A	—	—	6.3	4.0	1.8	63.60	ホルンフェルス系	形状のよく似る小鏢 扁平
10	929	調査区内	D	I	②(9)	5.3	5.2	1.0	34.73	ホルンフェルス系	上端部は打ち欠きか 未製品か (大) か
6	53	調査区内	A	Ⅱ	②A	5.1	3.9	2.0	59.33	輝石安山岩	(中)
2	175	B 区内	A	Ⅱ	②A	5.2	3.9	2.1	59.63	石英質系	石鏢か 上端部の打ち欠きは不明瞭 (中)
3	799	B C-6	B	I	②A	5.2	5.0	1.0	42.14	輝石安山岩	未製品か (中)
	111	調査区内	A	I	—	5.0	4.6	0.7	16.73	安山岩系	石鏢か 外縁に粗かな縦線 (中)
	931	B C-8	B	I	②(4)	4.3	1.5	26.89	安山岩系	片側端部大きく磨削・片側端部磨削 未製品か (中)	
	43	C D-9	A	I	②(4)	4.8	4.6	(1.1)	30.48	安山岩系	片側端部粗削目状。片側端部縦線し直線状 未製品か (中)
	1251	B 区内	A	Ⅱ	—	5.4	3.5	1.5	37.29	砂岩	形状の似る自然鏢 (中)
	799	B C-6	B	I	②A	5.0	4.8	1.3	42.29	輝石安山岩	端部の加工は殆ど全部を意識か 未製品か (中)
7	1176	B 区内	A	I	①エ	4.1	3.0	(0.9)	9.94	頁岩	平行する溝はより直し直しか 切削痕残か 裏面磨削 (小)
	1077	B Sz-35	A	I	②ウ	4.3	3.6	1.1	22.00	輝石安山岩	片側端部打ち欠きか 裏面一部磨削 未製品か (小)
	64	A 区内	B	Ⅱ	—	3.8	3.5	1.9	33.23	安山岩系	扁平 加工痕あり (小) 円形 厚みあり 側面に微少な凹み
	246	調査区内	A	—	—	4.5	3.2	1.2	23.08	頁岩系	扁平 加工痕あり (小)
	1018	C D-12	B	—	—	3.7	3.3	2.0	30.59	安山岩系	扁平 加工痕あり (小)
4	352	調査区内	C	Ⅱ	①ア	8.6	2.9	1.5	54.41	頁岩	断面三角形
5	262	調査区内	C	I	②A	8.5	3.7	0.9	75.61	頁岩	両端部は打ち欠きか 断面長方形

表11 遺構外出土砥石観察表

単位: cm, g

探検 番号	通し 番号	出土位置 区 グリッド	長	幅	厚	重	石材	特徴
93	A		20.3	17.8	13.1	5800.0	頁岩ヤケ	砥石か
	965	C D-10	(6.8)	(2.3)	(1.3)	(38.0)	頁岩	砥石か 小片 端部・一平ら部の一部のみ残
	44	調査区内	(10.9)	(5.9)	(3.9)	(235.7)	—	砥石か
	672	調査区内	(5.5)	(2.5)	(1.4)	(31.4)	頁岩ヤケ	砥石か 小片 一平ら部・両側面の一部のみ残 スス付着 被蝕か
	169	調査区内	8.0	3.3	(1.2)	(71.6)	頁岩	砥石か 小片 片面平坦・片面水平に磨削 平部スス付着
	396	調査区内	(5.7)	(1.8)	(1.1)	(19.4)	ホルンフェルス	砥石か 小片 残存する内部 (端部含む) 磨削
	550	B C-4	(8.2)	(2.1)	(2.0)	(35.7)	緑色片岩	砥石か 小片 残存する 面磨削

表12 遺構外出土石鏢観察表

単位: cm, g

探検 番号	通し 番号	出土位置 区 グリッド	長	幅	厚	重	石材	特徴
1	65	A 区内	(3.1)	3.7	2.8	(46.23)	ドレライト	下端のみ残存 小片 基部か 下面亀甲形
	591	B C-4	(3.0)	2.2	1.1	(13.24)	輝石安山岩	端部欠 小片 扁平 断面扇形形状 縦線磨削 やや緑色
	72	調査区内	(2.0)	(2.5)	(2.1)	(16.32)	ドレライト	下端の平部のみ残存 基部か 下面亀甲形

表 13 遺構外出土その他小確観表

単位: cm, g

通し 番号	出上位置	最大径	最大幅	最大厚	重量	石材	特徴
835	B C-7	4.2	3.2	1.5	47.3	安山岩系	板円形(楕円) 扁平 材質特性
198	調査区内	8	5.1	1.3	81.56	安山岩系	板円形(やや楕円) 扁平
435	C 区内	7.1	5.7	1.1	65.94	安山岩系	板円形(圓丸方形) 扁平 片割面僅かに結晶
1098	B D-8	8.2	5.2	1.7	81.52	凝灰岩	バナナ(中) 扁平 断面三角形
1127	C 区内	8.1	4.0	1.6	79.53	輝石斑岩	バナナ(中) 扁平 外側部直線の 平部スス付着
1224	B 区内	15.3	9.2	4.4	627.08	デイスイト質凝灰岩	バナナ(大) 厚み 片面平坦 平坦面側の外縁部よりに稜面
378	調査区内	6.3	4.9	2.0	86.54	安山岩系	バナナあるいは三角形形状(小) 扁平 僅かに結晶 両側直線的
4	B 区内	7.0	3.6	2.1	75.25	安山岩系	バナナあるいは三角形形状(小) 断面僅かに三角形形状 僅かに結晶
1252	B 区内	8.5	5.3	1.6	108.56	安山岩系	バナナあるいは三角形形状 扁平(中) 僅かに結晶する
186	調査区内	5.5	4.1	3.5	164.9	安山岩系	バナナあるいは棒状(中) 僅かに結晶
2	1062 B D-8	5.3	5.3	(0.8)	24.84	頁岩	三角形状 扁平 裏面結晶 磨滅
283	調査区内	4.2	3.0	1.5	28.52	安山岩系	三角形状 扁平 底辺平坦
280	調査区内	6.7	6.2	1.8	83.81	安山岩系	三角形状 扁平 凹凸あり
55	調査区内	4.6	4.8	0.9	28.66	重曹石ホルンフェルス	三角形状 扁平 底辺曲線
442	B 区内	(5.5)	(3.7)	(1.1)	23.58	安山岩系	二等辺三角形状 扁平 裏面結晶
3	962 B 区内	7.0	4.9	(1.5)	71.47	重曹石ホルンフェルス	磨滅型(中) 扁平 裏面結晶
1173	B 区内	8.2	4.2	2.4	149.04	安山岩系	磨滅型(中) 扁平 平面丸みあり
1274	B 区内	9.5	4.5	(2.4)	101.79	安山岩系	磨滅型(中) 断面三角形状 裏面平坦・表面山形
1275	B C-5	7.0	4.5	0.8	38.37	ホルンフェルスか	磨滅型(中) 扁平 形状に丸味
1126	B 区内	(6.0)	(6.7)	1.3	71.26	安山岩系	不定形(方形状) 扁平 上・下端面磨滅
58	A 区内	7.0	9.0	3.8	377.13	ドレライト	
1125	C 区内	5.3	5.1	2.2	87.54	鉄石質か	楕丸形状 赤色調 磨滅 3辺中央結晶
719	B C-5	4.7	2.8	1.5	23.41	鉄石質か	丸みのある三角形 赤色調
664	B C-5	3.2	2.2	1.1	10.09	鉄石質か	板円形 小型 赤色無
732	B C-5	2.3	1.1	1	3.88	鉄石質か	磨滅型 小型 赤色無

表 14 遺構外出土小確観表

単位: cm, g

通し 番号	出上位置	最大径	最大幅	重量	石材	特徴	
539	B B-4	(7.4)	(4.6)	(13.5)	(200.60)	重曹石ホルンフェルス	打製石片素材破片か
639	B C-5	(7.1)	(5.0)	(1.2)	(142.25)	重曹石ホルンフェルス	打製石片素材破片か
1136	C 区内	11.1	6.8	2.7	206.88	重曹石ホルンフェルス	打製石片素材破片か 打製石片断面形状に似る
187	調査区内	(10.9)	(6.7)	(2.5)	(197.13)	石英含有輝石斑岩	打製石片素材破片か
71	A 区内	(4.2)	(3.6)	(0.7)	(12.71)	ホルンフェルス系	打製石片素材破片か
638	B C-5	(9.4)	(6.7)	(2.1)	(99.50)	ホルンフェルス系	打製石片素材破片か
645	B C-5	(5.9)	(5.2)	(1.8)	(39.56)	ホルンフェルス系	打製石片素材破片か
997	B D-8	(7.7)	(4.3)	(1.5)	(36.71)	ホルンフェルス系	打製石片素材破片か
1034	B D-8	(4.3)	(2.3)	(1.7)	(17.32)	ホルンフェルス系	打製石片素材破片か
1060	B D-8	(10.3)	(6.7)	(1.5)	112.79	安山岩系か	打製石片素材破片か 打製石片断面形状に似る
235	B 区内	(4.8)	(7.5)	(2.3)	(85.44)	ホルンフェルス系	打製石片素材破片か 打製石片断面形状に似る
408	B 区内	(5.0)	(3.5)	(1.7)	(35.79)	ホルンフェルス系	打製石片素材破片か
36	A 区内	(4.5)	(3.2)	(1.8)	(35.49)	凝灰岩	三角形状 加工痕跡 石面の可能性あるか
633	B C-5	(6.7)	(3.5)	(1.3)	(33.81)	安山岩系か	磨石破片か
635	B C-5	(6.2)	(2.7)	(0.7)	(10.58)	安山岩系か	磨石破片か
646	B C-5	(8.4)	(4.9)	(2.4)	(85.80)	安山岩系か	磨石破片か
648	B C-5	(3.9)	(3.3)	(2.0)	(26.67)	安山岩系か	磨石破片か
660	B C-5	(3.8)	(2.7)	(1.9)	(13.45)	安山岩系か	磨石破片か
1324	B C-5	(4.4)	(3.8)	(1.6)	20.41	安山岩系か	磨石破片か
954	B C-8	(9.2)	(5.7)	(3.5)	194.61	安山岩系か	磨石破片か
956	B C-8	(5.8)	(5.7)	(1.1)	32.14	安山岩系か	磨石破片か
106	調査区内	(6.3)	(4.3)	(1.4)	37.04	安山岩系か	磨石破片か
291	調査区内	(7.7)	(5.1)	(1.0)	65.27	安山岩系か	磨石破片か、打製石片素材か 扁平
670	調査区内	(5.5)	(3.8)	(1.7)	(29.47)	安山岩系か	磨石破片か
1108	調査区内	(9.3)	(4.1)	(1.1)	38.98	安山岩系か	磨石破片か
1061	B D-8	10.5	9.0	1.1	227.07	頁岩	石鏃素材か
534	B B-4	(4.1)	(3.6)	(0.9)	(9.15)	頁岩	小片 扁平
62	A 区内	(3.7)	(2.3)	(0.8)	(13.39)	流紋岩質粘板凝灰岩か	小片 扁平
675	B C-5	(6.3)	(4.9)	(1.6)	(55.75)	流紋岩質粘板凝灰岩か	小片 扁平
176	調査区内	(3.8)	(3.0)	(1.9)	(15.11)	流紋岩質粘板凝灰岩か	小片 扁平
59	A 区内	5.5	4.0	2.4	54.76	砂岩	磨片 直線的な磨滅面を有する
58	A 区内	8.9	7.0	2.2	377.21	ドレライト	磨片 平面三角形状 断面長方形状
70	A 区内	2.8	2.4	1.2	9.28	デイスイト	小破片
55	A 区内	(5.7)	(4.3)	(1.6)	(30.68)	デイスイト	小破片 赤色変化
490	B B-3	3.4	2.2	1.2	9.35	安山岩	小破片
491	B B-3	(2.1)	(1.8)	(1.6)	(9.41)	輝化岩	小破片 緑色
536	B B-4	(5.2)	(3.2)	(2.1)	(26.16)	変質デイスイト	磨小片
537	B B-4	(4.0)	3.4	1.6	(27.47)	粘板凝灰岩	磨小片
1035	B B-4	(4.5)	(3.4)	(0.5)	5.26	デイスイト	磨小片
554	B C-4	(4.3)	(3.1)	(1.7)	(22.35)	流紋岩	磨小片
555	B C-4	(3.4)	(3.5)	(1.9)	(22.76)	デイスイト	磨小片

表 17 遺構外出土遺物出土数一覧表

区	グリッド 区画	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	#		
A	A 1																											
	A 2																											
	B 1																											
	B 2																											
	B 3																											
	B 4			1	2	4		4	1				6	1		1	2		1				13	1	2		177 202	
	B 5																										182 215	
	C 4			2		12		4	2					5	2			2	1	1			1	9	9	2	131 183	
	C 5			4		15		9	2				1	33	18		2	9		12	1	4	6	7	6		907 1036	
	C 6			3	1	2	2	1	2				1	1	5	3			7	1	5						263 320	
	C 7			2	2	7		4						12				3	6					7	9	6	3	194 255
	C 8			6	4	4	3	6	5				1	12	2			8	1	3	1	3	18	14	3	1	228 323	
	C 9																											
	D 7																	1										1
D 8		1	4	5	6		8	7				2	3	4	1		5		4	3	6	22	13	6		298 398		
D 9		2	1				2	1										1	1	1		3	4	1	1	86 103		
D 9		2	1				1	1										1	1	1				1		60 60		
D 10			2	4	2	13						5	3	1	1	3	12			3	1	5	1			192 248		
D 11				4	2	1							1				1	1			2	1				109 122		
D 12			1			2	1					1	2							1	1	1	1			54 64		
E 11																											4 4	
E 12													2					1									11 14	
E 13							3						8	4	1	1						3					68 88	
E 14																											30 30	
AK内				1					1				1				2						2				98 105	
BC内			1		1	2	4	6				4	5	3		2	6	1	5			15	8	7			274 344	
CK内				1	7		13	8				2	20	1	1	24	3	24	2	1	10	5	6				340 468	
調査区内			3		3	1	1	8				1	14	5	1		9	1	18	6		20	5	9			547 652	
計			1	30	21	72	8	67	59			1	18	129	49	3	13	97	11	75	19	19	150	93	57	6	4253 5251	

表 18 第85号住居跡石器・礫観察表

[単位: cm・g]

検出	通し番号	種類	分類・形状	長さ	幅	厚さ	重量	石材	特徴	出土位置
8	900	礫石器	Aa II 12ア	15.3	10.4	4.3	665.13	輝石安山岩	凹孔・磨滅表面。	Na8
9	898	礫石器	A III 12ア	13.8	9.8	4.8	932.91	輝石安山岩	凹孔・磨滅は表裏面。凹孔は自然のくぼみを利用。	Na9
896	礫石器	A III 22ア	13.9	9.5	5.3	1025.84	輝石安山岩	断面やや三角形状。裏面平坦。磨滅表面。	Na13	
902	礫石器	Aa III 22ア	15.4	9.5	5.5	1258.62		平面長方形。断面やや三角形状。裏面平坦であるが凸凹あり。凹孔状の部分あり。磨滅表面。	Na17	
901	礫石器	Ea 22ア	11.0	6.2	4.1	367.24		磨滅全面。	Na16	
904	礫石器	Ea	8.5	5.8	5.9	367.23	デイサイト	磨滅全面。	Na20	
903	礫石器	F II 22ア	5.9	5.3	5.1	182.24	デイサイト	磨滅全面。	Na19	
10	892	石籠	I AC	(24.6)	(18.5)	(8.2)	(3700.00)	多孔質輝石安山岩	頂上縁部斜平。落とし口か。裏面は平坦。奥縁を切削して加工。	Na10
11	893	石籠	I Aa	35.0	17.5	10.9	11650.00	輝石安山岩	表裏面ともに磨滅。表面は磨着であるが、特に中心部が顕著。図下縁左側は欠損するが落とし口か。	Na11
905	礫		4.9	1.8	0.7	9.44		小礫。扁平。	覆土	
906	小礫塊		3.9	2.8	0.5	6.40		小片。	覆土	
907	小礫塊		2.3	2.0	0.4	2.17		小片。	覆土	
895	礫塊		(15.7)	(8.0)	4.8	(907.93)	藍青石ホルンフェルス	表裏面平坦。石籠になるか。磨滅あり。	Na12	
897	礫塊		(10.2)	(12.0)	5.1	(782.66)		断面三角形状。磨滅あり。	Na14	
899	礫塊		(15.5)	12.6	4.5	(958.52)		不整な長円形状。端部欠損。扁平。磨滅あり。 石籠の可能性もあるか。	Na15	

表19 第111号住居跡石器・礫観察表

[単位: cm・g]

検出	通し番号	種類	分類・形状	長さ	幅	厚さ	重量	石材	特徴	出土位置
40	392	石鏃		(3.8)	(2.9)	(1.0)	(7.51)			覆土
41	390	打斧		(12.2)	(7.0)	(1.2)	(118.47)			覆土
	396	剥片		(3.3)	(2.7)	(1.0)	(7.81)		石鏃状。調整なし。未製品か。	覆土
425	丸石器	AII 1②		10.8	8.5	6.0	545.01		磨石凹孔。表面・中央部浅い痕打痕。左側面磨滅。表裏面土層部が細い押痕。	覆土
46	415	丸石器		11.3	(10.2)	6.2	1000.60			No46
42	426	丸石器		14.8	8.7	4.7	1079.87			覆土
44	407	丸石器		14.8	6.5	5.8	823.88			覆土
43	389	丸石器		5.1	4.9	3.5	120.29			覆土
413	丸石器	CII 2②ア		5.2	4.4	3.7	91.35		磨滅は全面。	No59
47	403	丸石器		9.4	9.3	8.4	1003.95			No47
418	丸石器	CI 2②ア		10.8	10.3	9.9	1434.47		403より一回り大きい。	No63
408	丸石器	FIII 2②ア		3.8	2.9	1.9	21.85		明確な研磨痕はないが全体的に磨滅する。	No54
49	421	丸石器	FI 2②①	5.5	3.7	3.2	76.03		全体に磨滅する。磨製石斧の形にも似るが、図上上部を握り込めと安定する。	覆土
420	石蓋状			45.1	27.8	9.5	14856.00		長円形で表面凸状。裏面平坦。表裏面ともに磨滅するが凸凹あり。	覆土
406	石鏃形			10.0	4.0	(1.0)	(27.16)		裏面磨滅。形状・大きさが石鏃に似る。	No53
410	小礫塊	-		(14.4)	(14.2)	(6.0)	(1783.82)		磨滅。破砕により形状・大きき不明。	No36
416	小礫塊	AIII		(15.1)	8.1	4.7	(687.78)		磨滅。破砕により片側磨滅欠。	No61
419	小礫塊	-		(10.8)	(9.0)	(6.5)	(901.78)		磨滅。破砕により形状・大きき不明。	No64
422	小礫塊	AIII		(10.6)	9.2	3.0	(503.51)		磨滅。片側端部に打痕。	No65
423	小礫塊	GIII		11.9	7.7	3.1	395.91		磨滅。上端平坦。	覆土
424	小礫塊	-		(9.8)	(7.3)	(3.0)	(203.07)		磨滅。破砕により形状・大きき不明。	覆土
411	礫塊			22.3	(12.3)	(8.4)	(2746.00)		自然破砕。	No57
412	礫塊			(13.6)	(12.8)	10.4	(1933.97)		磨滅。破砕により形状不明。	No58
417	礫			11.7	9.8	6.4	1092.31		鈍丸形状。	No62
1293	礫			3.9	2.3	2.1	16.01	ゲイサイト	小礫不定形。	石圍が表面
414	小礫塊			(5.0)	(4.8)	(3.7)	(108.23)		全面磨滅。	No60
48	386	小礫塊		4.7	4.7	3.6	(129.70)			覆土
1291	小礫塊			(8.9)	(5.7)	(2.0)	(79.50)			覆土
409	小礫塊			(10.7)	(5.1)	(2.4)	(124.37)		剥離面明瞭。剥片石器等の石材の可能性もある。	No55
427	小礫塊			11.3	5.3	2.2	157.24		磨製石斧に用いられる石材の小片か。	覆土
393				(6.3)	(4.5)	(2.8)	(55.90)		小片、磨石状か。	覆土
395				(5.3)	(3.7)	(1.0)	(12.62)		小片、磨石片か。スス付着	覆土
383				7.0	4.2	2.9	132.82		小片、磨石片か。	覆土
394				3.7	(2.9)	(2.0)	(26.31)		小片、赤色小礫か。	覆土

表20 第111号住居跡石田炉石器・礫観察表

[単位: cm・g]

検出	通し番号	種類	分類・形状	長さ	幅	厚さ	重量	石材	特徴	出土位置
45	1290	磨石	DuII 1②ア	15.9	6.7	3.7	559.79	ゲイサイト質火山凝灰岩	裏面の浅く小さいぼみは凹み。	覆土
52	1305	石皿	IIcok	50.2	30.1	7.1	29250.00	輝石ゲイサイト	表面わずかに凹凸。加工ありか。全面磨滅する。図上左側面は凹みとしての段地縁。縁は顕著。部分的に波状の痕跡が見られるが薄い。	S-1 4
1295	礫			15.5	8.8	5.4	806.04	流紋岩	長方形状で縦長に磨滅。上端部は赤・黒色変化。	S-2 3
1304	礫塊			(34.2)	19.2	(11.5)	(10646.00)	輝石ゲイサイト	S-3-4は接合する。S-3は半厚は欠欠。この破砕面はか内に向ける。	S-3 2
1303	礫塊			(34.2)	20.3	13.2	(12506.00)	輝石ゲイサイト	S-3-4もが内側上端部は接合により赤色変化が顕著である。S-3-4の破砕面に接合の痕跡はない。S-7-7は接合する。S-7にS-5の縦端部が繋がっていたと思われるが出土しない。S-7の破砕面には接合の痕跡なし。S-7-7は表面設置面を除き、接合により赤色変化。凹部は外側・上端部に顕著。	S-4 1
1299	礫塊			(30.5)	(17.3)	(11.1)	(74.20)		S-5-7接合する。S-7にS-5の縦端部が繋がっていたと思われるが出土しない。	S-5 8
51	1297	礫塊		30.4	24.2	7.5	(7695.00)	輝石安山岩	S-5-7接合する。S-7にS-5の縦端部が繋がっていたと思われるが出土しない。	S-6 8
1299				(34.4)	17.8	11.4	(7430.00)		S-5-7接合する。S-7にS-5の縦端部が繋がっていたと思われるが出土しない。	S-7 8
1298	小礫塊			(11.8)	(9.7)	(3.8)	(472.37)		5面が破砕面となる小礫塊。残存する1面は磨滅。石皿等の破砕片か。	S-8 7

検出	通し番号	種類	分類・形状	長さ	幅	厚さ	重量	石材	特徴	出土位置
	1291	石皿		(9.1)	(5.4)	(1.9)	(79.50)	ダイタイト	表裏とも凹孔あり。凹上表面と右側部は破砕後磨滅。形状加工の痕跡。表面右側中央に傾斜が見られるが、赤とし口状の加工痕跡。表裏面とも凹孔・磨滅あり。破砕の痕跡なし。	S-9 6
	1300	磨滅		46.0	(19.3)	12.0	(12800.00)		片角破砕、破砕面が凹内に向く。伊配埋時の土層破砕面は磨滅、やや赤色化するが、目立った被熱痕はない。	S-10 5
	1301	磨		15.2	9.8	5.7	1311.06		片角破砕部の被熱により赤色変化。	1300付近 5
	1296	磨		(15.3)	10.3	6.0	(1610.75)		伊配ではない。不定形、両側面上端部に打叩き形状加工か。全面磨滅。	S-2付近
	1294	磨		19.3	15.8	12.5	6680.00		伊配ではない。方形状。全面磨滅。	S-2付近
50	1302	磨		7.0	4.5	3.0	132.91	輝石安山岩	断面方形状であるが、磨石-II-2-②か。頂上部を磨り込むと安定する。下部に凹孔か。全面磨滅するが、表裏・左右に磨滅。	S-10付近

表 21 第154号住居跡石器・礫観察表

[単位: cm・g]

検出	通し番号	種類	分類・形状	長さ	幅	厚さ	重量	石材	特徴	出土位置
19	1203	礫石器	Aa I ②ア	12.2	8.7	3.4	492.54			N.19
20	1194	礫石器	Aa I ②ア	15.8	9.8	5.2	1016.16			N.20
21	1204	礫石器	Ab II ②ア	11.3	9.1	5.5	853.39			N.21
22	1205	礫石器	Ab II ②ア	11.2	6.0	6.1	569.81			礫土
	1199	礫石器		(6.1)	(4.0)	(1.9)	(47.89)		礫石器片角破砕部の小片か。	N.41
	1202	石皿	I Aa	(8.1)	(5.2)	(3.5)	(157.62)		小片。両端部の表面一部のみ残存。	礫土
23	1191	石皿	I Ab	(20.7)	(10.3)	(7.7)	(1419.90)			N.23
	1209	石皿	I Ad	17.0	14.2	3.4	1242.39			N.23
30	1189	石皿	II De	23.9	22.4	8.1	7620.00		全面磨滅するが、主磨面は凹状の表面か。	N.30
	1201	石皿	II Be	17.1	14.0	3.6	1242.26		三角形状の扁平礫。全面磨滅する。裏面の左右側部を打ち欠く。平坦を意識した加工か。	N.41
	1200	石皿	II Bd	17.3	11.1	6.5	1618.98		三角形状。磨滅石器の形状。表面は傾斜あり。裏面は平坦。全面磨滅するが、表面に磨滅。傾斜を利用して作業をしたか。	N.42
	1196	石皿	II Bd	(6.1)	(6.9)	(9.9)	(3.32)		小片。表裏面に磨面。上・下・左・右側面に破砕面であるが、片角側面は外形加工か。	N.38
32	1192	石皿		(33.5)	28.4	14.0	17300.00			N.32
27	1198	石皿		52.7	30.6	7.2	28350.00			N.27
1206	石皿	II d		(9.1)	(9.2)	(7.1)	(665.70)		小片。片面片側面の一部残。磨滅顯著。赤色変化。石材の可能性あるか。	N.45
29	1195	石皿	II Bd	26.6	(15.3)	11.2	(6.12)		端部破片。表裏ともに磨滅。表面端部一側面にかけて裏面端部に破砕あり。形状加工か。	N.29
1218	石皿か	II Ce		9.8	9.3	3.9	380.00		磨滅した小破片。表面自然の曲線。裏面破砕により断面半円状。全面磨滅顯著。	礫土
1215	礫石器か			6.8	3.2	3.5	99.15		平面釘状。全面磨滅。棒状部を磨り込むと安定する。	N.55
1217	磨			13.3	8.5	5.8	735.30		断面三角形状。全面磨滅するが石質か。	礫土
1208	小礫塊			(18.3)	(8.0)	(3.6)	(383.13)		縦方向半円状。三角形状。被熱により表面磨り込む赤色変化。	礫土
1210	小礫塊			(16.0)	(8.9)	(2.5)	(167.82)		残存部は磨滅。石質か。	礫土
1214	小礫塊			(7.8)	(5.5)	(4.0)	(152.50)		残存部は磨滅し平坦片が嵌合する。	N.54
1190	小礫塊			(8.4)	(5.1)	(3.7)	(224.60)		残存部は磨滅し平坦。	N.37
1213	小礫塊			(7.0)	6.1	(2.9)	(143.06)		端部小片。	礫土
1216	小礫塊			8.2	(3.3)	2.3	(98.90)		扁平小片。表裏面磨滅。	礫土
1207	小礫塊			(12.0)	(8.2)	(6.4)	(478.97)		脆質な石材。脱子の剥落が著しい。詳細不明。	礫土
1211	磨滅			(33.0)	(30.0)	(19.8)	(29250.00)		表・裏・片角側面が残存の塊。残存部は被熱による赤色変化がわずかに認められる。石材利用のため割られたか。	礫土
	礫石器	A I ①ア		(8.2)	(8.8)	(3.6)	(342.05)		1/2残存。表裏面磨滅。凹孔。	礫土
24	546	礫石器	Ab I ①ア	13.3	8.3	6.1	1013.65		磨滅表裏面。凹孔裏面。	礫土
25	557	礫石器	B I ①ア	9.6	9.2	3.3	542.90	輝石安山岩	磨滅表裏面。裏面に磨滅。凹孔表・裏・側面とも深い。	N.25
558	礫石器	Da III ①ア		21.2	6.2	5.4	611.36	輝石安山岩	磨滅表裏面。凹孔(1コ)のある裏面に顯著。バナナ形に近い形状か。	礫土
561	礫石器	E III ②ア		9.4	6.6	5.5	334.53		底面に磨滅及び赤色変化。	礫土
562	礫石器	H ②ア		9.4	6.9	3.6	333.29	ダイタイト	細い部分を磨り込むと安定する。磨滅は表裏面。	礫土

押出	通し番号	種類	分類・形状	長さ	幅	厚さ	重量	石材	特徴	出土位置
	550	礎石器	Fa層 22ア	8.3	7.1	3.1	218.42		磨滅は三角形の部分。	礎土
	550	その他 の小礎	B	(14.8)	(11.3)	(4.8)	(799.48)		扁平。	礎土
28	535	石皿	I Ac	(20.4)	(16.3)	(8.9)	(2840.00)	多孔質輝石安山岩	周縁部を切削して形状を加工か。	%28
33	542	石皿	I B d	37.4	32.2	8.7	13700.00	輝石安山岩	表面下部右側は落とし口状に傾斜する。 裏面の凹孔は浅い。	礎土
	536	石皿		(11.3)	(7.4)	(3.8)	(391.28)		小片。1面のみ残存。磨滅あり。	礎土
	555	石皿	I Ac	(14.4)	(11.2)	(4.9)	(799.67)		周縁部の残る小片。	礎土
	543	石皿	I Cd	(14.7)	(11.5)	9.0	1878.25		小片。3面残存。表裏面磨滅。	礎土
	556	石皿	II De	19.9	15.4	5.9	2056.00	輝石デイスait	完形。石皿が▽三角形。表裏面とも磨滅し 凹行。	礎土
34	564	石皿	II Be	(41.0)	(28.5)	(4.6)	16400.00	輝石安山岩	縦持形。側面に凹孔あり。残存する面は 磨滅。外周は切削して加工か。表裏面とも 非色変化したおり、伊材に利用か。	%34
26	545	砥石		11.0	7.6	2.6	211.21	砂岩	脆弱で壊れやすい。	%26
	549	砥石か		(13.1)	4.9	2.8	(214.03)	砂岩	小片のみ残存。磨滅顯著。瓦礫か。	礎土
	544	礎		10.9	8.4	5.0	534.20		不整形な円形礎石器。おにぎり形に似る。	礎土
	451	礎		2.9	2.8	1.3	11.43		小礎。不整形。	礎土
	548	礎小塊		(4.50)	(4.3)	(3.5)	(54.51)		小片。	礎土
	562	礎小塊		(7.9)	(7.1)	(3.3)	(189.76)		小片。	礎土
	563	礎小塊		(8.9)	(5.4)	(2.0)	(84.99)		663-537同一個体か。表裏面非色変化・スス 付着。焼熱により破砕か。	礎土
	537	礎小塊		(10.1)	(5.5)	(3.2)	(181.42)	黒雲母角閃石花崗岩	663-537同一個体か。表裏面非色変化・スス 付着。焼熱により破砕か。	礎土
	547	礎小塊		(11.3)	(10.1)	(2.3)	(176.87)		小片。	礎土
	549	礎小塊		(8.5)	7.9	2.8	(233.70)		表裏面残。非色変化・スス付着。焼熱により 破砕か。	礎土
	553	礎小塊		(13.2)	(9.4)	(4.8)	(603.28)	霞紋岩	1/2程度残か。非色変化・スス付着。焼熱 により破砕か。	礎土
	541	礎塊		(15.7)	(10.4)	(5.6)	(1064.31)		一面残。磨滅あり。非色変化か。	礎土
	554	礎塊		(19.0)	(10.5)	(6.0)	(1240.00)	輝石デイスait	554-550同類。表面のみ残存。非色変化顯 著。伊材か。	礎土
	559	礎塊		(19.2)	(12.3)	(6.1)	(1420.00)	輝石デイスait	554-550同類。表面のみ残存。非色変化顯 著。伊材か。	礎土
		礎塊		(21.6)	(13.4)	(10.5)	(3740.00)		表・側面残存。やや非色変化か。	礎土
	551	礎塊		(15.0)	(14.1)	12.8	(4580.00)		表・側面残存。非色変化。表裏面平 坦。伊材あるいは伊材互で使用か。	礎土

表 22 第180号遺構石器・礎観察表

[単位: cm・g]

押出	通し番号	種類	分類・形状	長さ	幅	厚さ	重量	石材	特徴	出土位置
	227	礎		27.5	18.2	8.8	5100.00		礎石器 (H) に似る。全面に磨滅。	礎土
	446	石皿	I Aa	(26.0)	(30.1)	(10.5)	7800.00	多孔質輝石安山岩	磨面、片面。	礎土

表 23 第4号土坑石器・礎観察表

[単位: cm・g]

押出	通し番号	種類	分類・形状	長さ	幅	厚さ	重量	石材	特徴	出土位置
	57	削片		(2.8)	(2.3)	(1.3)	(4.71)		石器製品か。	礎土
	58	削片		(1.90)	(1.3)	(0.3)	(1.80)		小破片。	礎土
	43	礎石器	Ab-II 22ア	9.2	6.8	4.9	374.29		全面磨滅。	礎土
36	11	礎石器	Ab-II 22ア	11.3	7.5	5.3	681.51	輝石安山岩	卵形。全面磨滅。裏面に顕著。	礎土
	3	礎石器	A-II 1Dア	(12.7)	9.5	4.3	(865.74)	輝石安山岩	片脚端部欠。凹孔は側面に1箇所。敲打は 端部に1箇所。全面磨滅。裏面に顕著で平 坦。非色変化か。右端小礎石か。	礎土
40	8	礎石器		15.7	9.6	4.0	936.20	安山岩	表あり。	礎土
38	13	礎石器		15.6	(7.7)	5.1	898.51	安山岩	表あり。	礎土
43	2	礎石器		16.1	13.4	7.4	2280.00	輝石安山岩	表あり。	礎土
32	26	礎石器		6.8	6.5	4.7	290.48		表あり。	礎土
33	10	礎石器		8.7	8.1	4.3	466.70	安山岩	表あり。	礎土
34	12	礎石器		9.7	8.4	4.0	420.47	輝石安山岩	表あり。	礎土
	4	礎石器	B-I 1Dア	10.0	9.7	4.8	(637.98)	砂岩	凹孔は片面に1箇所。敲打は両側部に1箇 所ずつ。上端に2箇所。下端に1箇所。大 きく欠損。	礎土
35	492	礎石器		10.3	9.9	5.5	785.96	輝石安山岩	表あり。	礎土
39	499	礎石器	A	15.2	6.1	4.6	688.04	輝石安山岩	表あり。	%39
41	7	礎石器	B-II 22ア	12.6	7.4	7.0	642.69	安山岩	全面磨滅。	礎土
507	礎石器	E-II 22ア		12.8	10.3	7.7	1246.96	輝石安山岩	断面有形状。全面磨滅。底面に顕著。底 面に付れ。	%507
41	礎石器	E-II 22ア		14.3	5.2	3.9	426.95		断面二等辺三角形。長い。全面磨滅。 底面に顕著。	礎土

第3章 確認された遺構と遺物

検体	通し番号	種類	分型・形状	長さ	幅	厚さ	重量	石材	特徴	出土位置
	24	礎石部	FⅡ 2型ア	7.9	5.9	3.8	219.74		全面磨滅、底面以外に磨滅。底面は凹凸。	礎土
	25	礎石部	FⅡ 2型ア	8.0	6.5	4.2	212.84		全面磨滅。	礎土
	510	礎石部	FaⅡ 2型ア	10.2	9.1	4.5	367.42	安山岩	F(おにぎり形)にしては扁平で平面形が大きい。全面磨滅。底面は凹凸。	床直
42	9	礎石部	FaⅡ 2型ア	13.5	12.6	4.3	839.82	石高含有輝石安山岩	510・9・106・499・6の6は通うがほぼ同形等に、9・499は石材も同一。	礎土
	506	礎石部	FaⅡ 2型ア	16.5	13.0	6.2	1774.44	輝石安山岩		Nc56
	511	礎石部	FaⅡ 2型ア	10.0	6.8	6.7	465.25			Nc86
	496	礎石部	FaⅡ 2型ア	10.4	8.5	5.6	363.32		不整形。敲打側面。指をかけるかと安定する。摩滅全面。巧みかス付着。	Nc51
37	6	礎石部	HⅡ 1型ア	12.7	6.6	3.5	436.93	安山岩	摩滅全面。表面に磨滅。上部を下に向けて右下の出っ張り部に指をかけるかと安定する。	礎土
	505	礎石部	HⅡ 2型ア	12.6	5.7	4.4	413.13		細い。全面磨滅。	Nc37
	5	礎石部	HⅡ 2型ア	11.2	9.5	3.6	360.84	輝石安山岩	扁平で磨製石片に近い。全面で磨滅。	礎土
	14	礎石部	HⅡ 2型ア	10.2	8.1	2.4	261.34		扁平で磨製石片に近い。全面で磨滅。	礎土
44	500	石皿		32.5	30.7	10.9	12300.00	多孔質輝石安山岩		Nc44
	15	礎		12.3	6(5)	6(6)	(586.44)		1/2欠。礎石部(長門形)に似る。	礎土
	19	礎		13.7	8.6	5.9	887.58	ダイライト	礎石部(山形)に似る。	礎土
	23	礎		5.7	4.5	3.9	101.03		礎石部(山形)に似る。	礎土
	488	礎		13.6	8.2	5.6	786.50	輝石安山岩	礎石部(山形)に似る。	Nc45
	503	礎		10.5	11.1	5.8	963.27	輝石安山岩	礎石部(おにぎり形)に似る。	Nc55
	501	礎		15.1	8.4	5.4	1016.70	輝石安山岩	礎石部(おにぎり形)に似る。	Nc54
	1	礎	(10.5)	7.2	3.0	(317.94)		礎石部(おにぎり形)に似る。	礎土	
	22	礎		9.0	5.6	2.9	229.87		礎石部(おにぎり形)に似る。	礎土
	42	礎		9.5	6.1	3.3	235.66		礎石部(おにぎり形)に似る。	礎土
	18	礎	(11.1)	6.7	2.5	(216.25)		バナナ形。	礎土	
	16	礎		11.1	7.0	4.3	386.58	頁岩	不定形。ややバナナ形。	礎土
	498	礎		25.6	18.1	6.4	4160.00	輝石安山岩	不定形(六形状)。一段低い磨滅面を持つ。石皿を意図か。	礎土
	39	礎		27.1	18.4	8.9	5560.00	輝石安山岩	平面。三角形形状。端部に磨滅のある磨削面。石皿の高を上げ口を意図か。	礎土
	497	礎		18.4	18.3	8.6	3580.00	火山礫凝灰岩	平面。三角形形状。一段の中央に欠けあり。石皿の高を上げ口を意図か。	礎土
	491	礎		28.1	19.2	15.3	12250.00	輝石安山岩	一部欠け。全面磨滅。丸味のある面にわずかに色調変化及びス付着。石材か。	Nc60
	32	小礎塊		3.8	2.6	1.4	17.75			礎土
	33	小礎塊		3.4	2.9	1.3	16.27			礎土
	35	小礎塊		2.2	1.9	(0.9)	(5.53)			礎土
	37	小礎塊		2.4	1.7	1.0	4.73			礎土
	490	礎塊	(20.4)	18.4	13.7	(5760.00)	石英閃緑岩	1/2程度残。磨滅。長門形か。	Nc47	
	494	礎塊	(15.7)	(13.3)	(8.7)	(2300.00)		1/3欠。一部ススか。石材か長門形か。	Nc48	
	495	礎塊	(14.2)	(9.1)	(6.4)	(805.96)		端部の欠け。不定形。	Nc50	
	502	礎塊	(12.0)	(6.4)	(5.5)	(547.79)		1/2程度残。長門形か。一部スス付着か。	Nc16	
	504	礎塊	(12.0)	(3.6)	(4.0)	(198.27)		小礎。	Nc56	
	21	礎塊	(10.0)	(11.6)	(3.8)	(285.90)		小礎。	礎土	
	17	礎塊	(8.5)	(6.3)	(2.5)	(133.73)		長門形。扁平。石餅に似る。	礎土	
	27	小礎塊	(8.6)	(5.2)	(3.0)	(141.42)		小破片。	礎土	
	28	小礎塊	(4.8)	(4.1)	(2.0)	(37.59)		小破片。	礎土	
	34	小礎塊	(3.7)	(3.1)	(0.7)	(8.63)		小破片。扁平。	礎土	
	36	小礎塊	(2.5)	(2.0)	(1.3)	(5.97)		小破片。	礎土	
	38	小礎塊	(3.2)	(2.2)	(0.8)	(6.01)		小破片。	礎土	
	46	小礎塊	(4.0)	(3.7)	(1.1)	(21.41)		小破片。	礎土	
	47	小礎塊	(2.5)	2.9	1.4	(11.72)		小破片。	礎土	
	49	小礎塊	(5.5)	(4.9)	(3.5)	(93.86)		小破片。	礎土	
	50	小礎塊	(5.8)	(4.0)	(2.5)	(52.65)		小破片。	礎土	
	51	小礎塊	(5.0)	(2.0)	(1.8)	(18.25)		小破片。	礎土	
	52	小礎塊	(3.5)	(2.8)	(1.3)	(17.38)		小破片。	礎土	
	53	小礎塊	(6.9)	(3.0)	(1.8)	(46.31)		小破片。	礎土	
	54	小礎塊	(5.2)	(3.1)	(1.5)	(23.02)		小破片。	礎土	
	55	小礎塊	(5.1)	(3.5)	(3.0)	(39.33)		小破片。	礎土	
	56	小礎塊	(4.4)	(2.9)	(2.5)	(24.79)		小破片。	礎土	
	29	小礎塊	(5.2)	(5.7)	(1.5)	(46.65)		小破片。磨石片か。	礎土	
	30	小礎塊	(6.7)	(4.7)	(3.0)	(87.78)		小破片。磨石片か。	礎土	
	512	小礎塊	(2.9)	12.7	(1.6)	(12.65)		小破片。磨石片か。	礎土	
	31	小礎塊	(4.2)	(2.8)	(2.3)	(28.99)		小破片。石皿片か。	礎土	

押戻	通し番号	種類	分類・形状	長さ	幅	厚さ	重量	石材	特徴	出土位置
	45	小礫塊		(6.8)	(4.8)	(2.6)	(65.03)		小礫片。石籠片か。	覆土
	48	小礫塊		(7.8)	(10.4)	(2.7)	(107.93)		小礫片。石籠片か。	覆土
	509	小礫塊		(9.4)	(4.8)	(2.2)	(84.82)		小礫片。打製石片材か。	床底
	40	小礫塊		(10.3)	(6.3)	(2.7)	(169.69)	頁岩	小礫片。打製石片材か。	覆土
	20	小礫塊		(7.6)	(6.5)	(4.9)	(255.73)		小礫片。礫石片か。	覆土

表 24 第5号土坑石器・礫観察表

【単位：cm・g】

押戻	通し番号	種類	分類・形状	長さ	幅	厚さ	重量	石材	特徴	出土位置
15	59	礫石器	A組 12ア	16.7	8.8	5.5	1221.66	黒雲母角閃石花崗岩	裏面に凹孔のくぼみ。自然か、磨滅全面。	覆土
	61	小礫塊		(7.3)	(6.2)	(1.6)	(96.41)		小片。磨石片か。	覆土
	70	小礫塊		(8.6)	(4.2)	(1.6)	(54.12)		小片。磨石片か。	覆土
	71	小礫塊		(2.5)	(2.7)	(1.5)	(9.99)		小片。磨石片か。	覆土
	60	小礫	F組 22ア	6.9	5.8	3.9	171.19		平面断面。有形状。	覆土
	69	小礫	F組 22ア	(4.5)	3.0	1.8	(23.41)		全面磨滅及び赤色変化。	覆土
	62	小礫	F組 22ア	2.7	2.4	2.4	25.35		全面磨滅。	覆土
	72	その他の小礫		6.0	3.1	0.8	23.99		平面三角形状。扁平。	覆土
	68	その他の小礫		(5.3)	(4.6)	(2.0)	(39.15)		平面長円形。石錐状。	覆土
	63	その他の小礫		4.0	2.6	1.7	24.66		自然石か。	覆土
	64	その他の小礫		2.7	(2.1)	1.6	(11.29)		自然石か。	覆土
	65	その他の小礫		(3.7)	(2.3)	(0.7)	(9.15)		自然石か。	覆土
	66	その他の小礫		(1.8)	1.7	0.6	(2.34)		自然石か。	覆土
	67	その他の小礫		(3.3)	2.7	1.7	(17.75)		自然石か。	覆土
	73	その他の小礫		2.1	1.8	1.1	4.74		自然石か。	覆土

表 25 第6号土坑石器・礫観察表

【単位：cm・g】

押戻	通し番号	種類	分類・形状	長さ	幅	厚さ	重量	石材	特徴	出土位置
14	87	剥片		(3.6)	(1.6)	(0.4)	(2.16)		小片	覆土
15	88	礫石器	A組 22ア	11.6	8.2	3.7	432.97	輝石安山岩	断面。不定形。表面とも周縁に赤色変化。磨滅全面。	覆土
	74	礫石器	E組 22ア	11.0	8.0	6.7	690.09	デライト	左側面の中央部にわずかな段差あり。段差の上端に磨滅顕著。	覆土
	76	礫		(8.0)	5.1	(3.9)	173.25		礫石部(伊対に寄り形)に似る。	覆土
	75	礫塊		(14.4)	(16.4)	6.9	(1796.37)	デライト	1/2程度残か。扁平。長方形状か。	3%16
	78	小礫塊		4.6	(3.9)	1.7	(28.61)		小片。扁平。長方形状か	覆土
	77	小礫塊		7.9	5.3	(1.9)	(87.58)		三角形状。裏面欠損。	覆土
	83	小礫塊		(3.0)	(2.6)	(1.0)	(10.27)		小片。礫石か。	覆土
	86	小礫塊		(5.7)	(2.8)	(1.3)	(19.90)		小片。	覆土
	79	小礫		5.0	3.2	1.2	22.91		自然石。	覆土
	80			2.6	2.1	0.7	4.96		自然石。	覆土
	81			(2.6)	2.8	1.0	(8.44)		自然石。	覆土
	82			2.6	2.0	1.6	6.97		自然石。	覆土
	84			3.8	2.0	1.2	10.00		自然石。	覆土
	85			2.1	2.0	1.6	7.21		自然石。	覆土
	86			(5.9)	(2.8)	(1.2)	(18.98)		自然石。	覆土

表 26 第7号土坑石器・礫観察表

【単位：cm・g】

押戻	通し番号	種類	分類・形状	長さ	幅	厚さ	重量	石材	特徴	出土位置
	89	礫石器	E組 22ア	11.7	7.4	5.2	553.47	デライト質凝灰岩	裏面は凹凸顕著。他面は磨滅。	床底
	90	小礫塊		(14.6)	(3.7)	(3.0)	(147.89)		乙面の一部が残。磨滅あり。	床底
	91	小礫塊		(5.9)	(3.0)	(1.0)	(12.48)		礫石あるいは石籠の小片か。被熱し。外側に赤色。黒色変化。	覆土
	92	小礫塊		3.5	3.0	1.5	19.91		小礫片。赤色変化。被熱か。	覆土

表 27 第8号土坑石器・礫観察表

検体	通し番号	種類	分類・形状	長さ	幅	厚さ	重量	石材	特徴	出土位置
20	95	礫石器	A目 1②ア	9.0	6.9	3.6	360.80	礫石(安山岩)	表面中央部にわずかにくぼみ、凹孔か、磨滅全面。特に裏面に磨滅。	樫土
21	104	礫石器	A目 1③ア	11.2	9.2	4.5	551.20	石(含有無礫石(安山岩))	磨滅全面。表面の下半に磨滅。	樫土
22	93	礫石器	A目 1②ア	9.9	6.8	5.3	464.11	礫石(安山岩)	多孔質の石材。裏面の傾斜面にあるくぼみは凹孔か。磨滅全面。裏面に磨滅。	樫土
23	99	礫石器	B目 2②ア	11.8	5.7	5.8	509.74	礫石(安山岩)	磨滅全面。裏面に磨滅。	樫土
24	115	礫石器	A目 2②ア	4.4	3.7	2.3	58.21	礫石(安山岩)	磨滅全面。下面中央部・右側部中央に欠け部あり。石割か。	樫土
96	礫石器	B5-I 2②ア	(9.8)	(5.3)	(4.7)	(252.23)		端部1/3残。全面磨滅。	N:25	
97	礫石器	A目 2②ア	(10.7)	8.7	3.9	(419.00)		上端部欠損及び赤色変色。砂材あるいは周口で使用か。表面平坦で被熱変色。	N:26	
102	礫石器	A目 2②ア	(11.1)	8.7	3.4	(479.65)		表面凹みあり。裏面平坦。磨滅全面。裏面に磨滅。	樫土	
103	礫石器	A目 2②ア	9.9	5.7	3.0	258.24		平面やバナナ状。片側端部欠損後磨滅。全面磨滅。	N:31	
105	礫石器	F目 2②ア	11.0	10.8	5.5	(476.96)	ゲイサイト	端部欠。磨滅全面。特に裏面に磨滅。	樫土	
94	石皿	led	(11.4)	(7.1)	(5.0)	(292.73)		表面側面残存が小片。側面に凹孔か。	樫土	
100	石皿	led	(30.0)	(17.5)	(12.2)	(7600.00)		磨面は磨滅磨面。	樫土	
132	石材か		(2.2)	(2.2)	(1.5)	(12.90)		削片か。	樫土	
143	石材か		(4.6)	(2.8)	(1.5)	(17.06)		削片か。	樫土	
144	石材か		(1.6)	(0.9)	(0.9)	(1.22)		削片か。	樫土	
101	石材か		(8.7)	(7.6)	(4.4)	(288.88)	藍青石ホルンフェルス	打穿石材か、長方形の1/2残。抉り部作らぬに成りか。	N:30	
125	小礫		3.1	2.3	1.5	14.28		平面円形状で、扁平。	樫土	
124	小礫		3.3	3.0	1.2	15.61		平面円形状で、扁平。	樫土	
121	小礫		3.6	2.7	1.6	25.35		平面円形状で、厚みあり。	樫土	
109	小礫		5.0	4.5	2.5	75.42		平面円形状で、厚みあり。	樫土	
128	小礫		3.6	3.3	2.5	32.95		平面三角形形状で、厚みあり。	樫土	
122	小礫		3.7	3.1	1.5	19.83		平面三角形形状で、扁平。	樫土	
129	小礫		(3.9)	(3.6)	(2.7)	(25.14)		平面三角形形状で、不整形で扁平。	樫土	
N:なし	小礫		3.5	3.1	2.2	25.30		断面三角形形状。平面磨製石片形状。	樫土	
119	小礫		4.5	2.2	1.7	21.11		断面三角形形状。平面磨製石片形状。	樫土	
123	小礫		3.8	2.3	1.9	23.72		断面三角形形状。平面磨製石片形状。	樫土	
116	小礫		4.6	3.0	2.2	35.34		断面三角形形状。平面磨製石片形状。	樫土	
14	小礫		(5.5)	3.4	2.3	(62.94)		断面三角形形状。平面磨製石片形状。	樫土	
108	小礫		(6.3)	5.0	3.1	(104.26)		断面三角形形状。平面磨製石片形状。厚みあり。	樫土	
107	小礫		(8.0)	5.8	3.0	(178.91)		断面三角形形状。平面磨製石片形状。	樫土	
112	小礫		7.9	3.6	1.9	(76.00)		断面三角形形状。平面バナナ形状。	樫土	
118	小礫		6.0	2.6	1.4	21.37		平面バナナ形状。扁平。	樫土	
117	小礫		4.0	3.7	1.3	24.85		平面形状。扁平。	樫土	
126	小礫		2.4	2.1	2.2	20.05		平面。断面。方形形状。	樫土	
133	小礫		2.8	2.2	1.4	8.31		不定形。小礫。	樫土	
134	小礫		3.7	2.1	1.5	15.69		不定形。小礫。	樫土	
136	小礫		(2.3)	2.1	1.3	(6.76)		不定形。小礫。	樫土	
137	小礫		(2.1)	1.8	1.5	(6.96)		不定形。小礫。	樫土	
139	小礫		3.0	1.5	1.2	5.01		不定形。小礫。	樫土	
140	小礫		1.8	(1.5)	1.2	(4.35)		不定形。小礫。	樫土	
127	小礫		(3.3)	2.5	1.9	(18.62)		不定形。小礫。	樫土	
86	礫		18.8	15.0	13.0	4600.00		平面方形形状。断面。三角形形状。礫石器(穿)に(ざり形)磨滅全面。	樫土	
138	小礫塊		(2.3)	(2.0)	(1.0)	(5.62)		小塊。	樫土	
135	小礫塊		(2.5)	(2.0)	(1.6)	(11.56)		小塊。	樫土	
142	小礫塊		(3.5)	(2.9)	(1.6)	(12.47)		小塊。	樫土	
131	小礫塊		(4.8)	(2.9)	(1.6)	(23.42)		小塊。	樫土	
141	小礫塊		4.3	(3.6)	(0.6)	(19.33)		小塊。扁平。	樫土	
130	小礫塊		(4.5)	(3.0)	(1.7)	(20.83)		小塊。磨石片か。	樫土	
114	小礫塊		(4.3)	(3.9)	(2.6)	(40.42)		小塊。	樫土	
113	小礫塊		(7.8)	(4.0)	(2.3)	(49.90)		小塊。砥石片か。	樫土	
110	小礫塊		(6.7)	(4.0)	(2.3)	(79.23)		小塊。石皿片か。	樫土	
106	礫塊		(10.7)	(4.8)	6.4	(365.06)		縦断面にスス付着。	樫土	

表 28 第 16 号土坑石器・礫観察表

検出	通し番号	種類	分類・形状	長さ	幅	厚さ	重量	石材	特徴	出土位置
										(単位: cm・g)
	96	礫石	AII 2②ア	7.9	7.4	4.3	301.36	多孔質輝石安山岩	磨面両面。凹は自然面か。	覆土
	171	礫石	AII 1②ア	4.7	3.5	2.7	52.79		小礫。裏面平坦で中央に凹孔。磨滅全面。	覆土
30	159	礫石	Aa I 1②ア	10.5	7.3	3.3	321.64	輝石安山岩	裏面平坦で、中央に2-3個の凹孔あり。磨滅全面。裏面に磨著。	%30
32	154	礫石	AII 2②ア	13.1	9.3	4.6	824.35	輝石安山岩	全面磨滅。表裏に磨著。	%32
	158	礫石	FII 2②ア	9.9	8.3	7.0	722.38	輝石安山岩	不定形。多孔質。磨滅全面。	%38
	174	礫石	FII 2①ア	7.7	5.6	4.5	165.51	多孔質輝石安山岩	凹孔側面。磨滅全面。紫色。	覆土
	152	礫石	HII 2②ア	10.3	7.5	4.3	410.89	輝石安山岩	磨滅全面。褐色。	%33
	179	礫石	HII 2②ア	11.3	7.5	3.5	387.30	輝石安山岩	磨滅全面。汚れか。	覆土
	155	礫石	HII 2②ア	9.5	7.8	6.0	552.39		磨滅全面。赤褐色。汚れか磨付か。	%34
	162	礫石	A7 2②ア	24.5	8.2	6.3	1778.40	安山岩	磨滅全面。片割側面にスス付着。伊材か。	覆土
	151	礫		8.5	6.4	3.3	222.25	ゼイサイト	礫石部(凹割石片状)に似る。赤色。磨滅全面。	覆土
31	150	礫		9.2	8.0	4.8	439.51	玄武岩質安山岩	平面。三角形状。厚みあり。表、側面に凹孔か。全面磨滅。礫石部か。上端に黒茶褐色の痕跡か。	覆土
	160	礫		8.5	4.4	2.8	150.43	輝石安山岩	小礫。断面三角形状。磨滅全面。	%40
	167	礫		9.6	5.4	1.7	127.94		小礫。扁平。平面。長円形。磨滅全面。石種としては大きい。	覆土
	234	礫		7.5	4.1	1.8	85.10		平面長方形。扁平。全面磨滅。	覆土
	235	礫		5.5	4.3	3.3	103.19		長円形。断面三角形状。厚みあり。全面磨滅。	覆土
	188	小礫		3.6	2.3	0.9	9.25	輝石安山岩	不定形。扁平	覆土
	192	小礫		3.3	2.3	0.8	10.25		不定形。扁平	覆土
	185	小礫		3.0	2.4	1.3	14.80		不定形。厚みあり。	覆土
	169	小礫		5.8	3.3	2.1	(35.81)		棒状。端部にスス。	覆土
	183	小礫塊	(7.8)	(3.2)	(1.7)	(45.06)		磨滅面残る。石晶片か。	覆土	
	236	小礫塊	(6.4)	(6.2)	(1.7)	(67.92)		磨滅面残る。石晶片か。	覆土	
	147	小礫塊	(3.9)	(1.9)	(1.6)	(10.97)		磨滅面残る。石晶片か。	覆土	
	166	小礫塊	(7.5)	(6.9)	(5.5)	(320.79)		磨滅面残る。石晶片か。	覆土	
	178	小礫塊	(9.0)	(5.5)	(1.0)	(87.25)		磨滅面残る。石晶片か。	覆土	
	189	小礫塊	(4.2)	(3.7)	(0.8)	(11.30)		磨滅面残る。石晶片か。	覆土	
	189	小礫塊	(6.0)	(3.8)	(3.4)	(102.34)	チャートか	3片接合。球状礫の1/2残か。割片石部の石材か。	覆土	
	193	小礫塊	(2.7)	(1.3)	(0.5)	(2.43)	チャートか	割片か。	覆土	
	186	小礫塊	(4.1)	(3.2)	(1.1)	(15.44)		小片。縦石片か。	覆土	
	176	小礫塊	(6.4)	4.8	4.0	(153.96)		棒状の端部残。磨滅。	覆土	
	181	小礫塊	(7.2)	(4.1)	(1.5)	(58.89)		円状1/2残か。扁平。	覆土	
	170	小礫塊	(6.0)	(4.8)	(1.5)	(39.37)		円状1/2残か。扁平。	覆土	
	182	小礫塊	(5.5)	(4.8)	(4.4)	(135.94)		磨滅する小片。	覆土	
	163	小礫塊	(13.0)	(8.1)	(4.5)	(476.50)	ゼイサイト	赤色。磨滅。	覆土	
	184	小礫塊	(3.3)	(3.0)	(0.5)	(9.78)		打穿等の石材か。	覆土	
	164	小礫塊	(10.7)	(7.8)	(5.5)	(450.92)		打穿等の石材か。	覆土	
	161	礫塊	16.4	12.3	4.4	1278.95	石英斑岩	扁平。片面平坦で磨滅。	覆土	
	157	礫塊	(11.0)	(10.3)	5.0	(571.63)		礫石部(凹割石片状)に似る。	%37	
	156	礫塊	(10.3)	(6.7)	5.2	(293.98)		磨滅。	%35	
	180	礫塊	(13.0)	(5.9)	(3.0)	(269.56)		被熱小汚れか。	覆土	
	175	礫塊	(7.0)	(5.4)	(3.5)	(146.17)		被熱小汚れか。	覆土	
	168	礫塊	5.8	4.0	1.8	47.97		被熱小汚れか。	覆土	
	172	礫塊	(9.3)	(8.0)	(5.5)	(451.07)		被熱。赤色変化。石量あるいは磨石片か。	覆土	
	153	礫塊	(8.2)	(5.5)	(3.1)	(174.06)		被熱。赤色変化。	%39	
	165	礫塊	(8.5)	(8.0)	5.3	(329.73)		被熱。赤色変化。	覆土	
	173	礫塊	(8.4)	(5.4)	(2.7)	(116.31)		被熱。赤色変化。	覆土	

表 29 第 17 号土坑石器・礫観察表

検出	通し番号	種類	分類・形状	長さ	幅	厚さ	重量	石材	特徴	出土位置
										(単位: cm・g)
2	394	石皿	IM	35.7	26.1	8.0	10850.00	輝石安山岩	裏面平坦で磨滅磨著。側面凹孔状のくぼみ。	%2
	59	礫石	HII 2②ア	11.5	8.9	(4.3)	(546.54)		石面に凹凸あり。磨滅全面。	%3

表30 第20号土坑石器・礫観察表

[単位: cm・g]

検出	通し番号	種類	分類・形状	長さ	幅	厚さ	重量	石材	特徴	出土位置
	8	礫石器	AaB 2②ア	11.5	7.3	2.2	263.37	輝石安山岩	磨減全面、表面に磨痕、断面やや弧状。	覆土
	9	礫石器	AB 1②ア	11.5	7.4	2.2	263.34	輝石安山岩	裏面の刃は浅い、磨減全面、特に裏面上半の側面にかけては磨痕。	覆土
	10	礫石器	AB 1②ア	12.4	6.4	4.3	514.72	輝石安山岩	やや特状、側面は凹孔か、裏面の凹状の浅いゆがれがある、磨減表裏に磨痕。	覆土
	11	石皿	Iab	19.8	14.7	6.0	2080.00	多孔質輝石安山岩	断面凹状、表面両縁は切削に加工し、中央部は磨減磨痕、裏面の凹孔は浅い。	覆土
	123	小礫		2.7	2.0	1.1	8.21		全面赤色変色磨痕。	覆土
	213	小礫		(3.9)	3.6	1.5	(27.80)		礫石器(凹孔に磨り形)に似る、磨減。	覆土
	199	小礫		9.0	5.7	2.5	199.38	玄武岩	長円形、小形の磨石、あるいは石鏝の可能性あり。	覆土
	204	小礫		11.2	4.1	3.2	173.10		不定形、礫石器(凹孔形)に似る、磨減。	覆土
	202	小礫		(10.5)	(6.9)	(4.0)	(347.64)		礫石器(打削)に似る。	覆土
	205	小礫塊		(5.1)	(2.5)	(2.3)	(47.35)		片面研削か。	覆土
	219	小礫塊		(4.6)	(2.4)	(1.1)	(14.84)		磨減、礫石器あるいは石皿片か。	覆土
	214	小礫塊		(5.5)	(4.0)	(1.8)	(32.99)		磨減、礫石器あるいは石皿片か。	覆土
	210	小礫塊		(11.0)	(5.5)	(3.8)	(208.07)		磨減した平砥面塊、磨石片あるいは石皿片か。	覆土
	205	小礫塊		(7.3)	(7.0)	3.7	(239.63)		裏面1/2欠、礫石器(凹孔形)か、磨減。	覆土
	201	小礫塊		(12.2)	(8.4)	(3.0)	(239.44)		磨減面残る。若干の赤色変色。	覆土
	208	小礫塊		(8.5)	(8.1)	(3.3)	(257.24)		打削刃部形、表面自然面多、裏面割削、製作途中に感ずか。	覆土
	209	小礫塊		(8.9)	(5.1)	(2.1)	(80.65)		打削石厚製作途中の破片か。	覆土
	207	小礫塊		(10.2)	(7.1)	(3.0)	(239.20)		打削石厚製作途中の破片か。	覆土
	212	小礫塊		(8.5)	(5.1)	(2.0)	(84.21)		磨減面残る。	覆土
	211	小礫塊		(9.0)	(5.5)	(3.0)	(276.50)		磨減面残る、不定形。	覆土
	206	小礫塊		(7.4)	(5.6)	(2.3)	(117.00)		磨減面残る。	覆土

表31 第45号土坑石器・礫観察表

[単位: cm・g]

検出	通し番号	種類	分類・形状	長さ	幅	厚さ	重量	石材	特徴	出土位置
	287	小礫		8.7	4.3	3.8	149.99		全面焼熱による赤色変色、礫石器(打削)に似る。	覆土
	288	小礫		3.2	3.4	(2.4)	26.43		全面焼熱による赤色変色、小礫。	覆土

表32 第50号土坑石器・礫観察表

[単位: cm・g]

検出	通し番号	種類	分類・形状	長さ	幅	厚さ	重量	石材	特徴	出土位置
	21	剥片		(3.8)	(2.1)	(1.0)	(9.01)	チャート	自然面残る。押圧割線なし、スレイバーを意図か。	覆土
		剥片		(2.8)	(1.9)	(0.6)	(2.59)		小片、自然面残る。	覆土
	31	小礫		(4.0)	(2.7)	(2.5)	14.96	デイサイト質緑閃石	白い軽い石。石材確定のみ。	覆土
	32	小礫		(3.6)	(2.2)	(1.9)	5.80	デイサイト質緑閃石	白い軽い石。石材確定のみ。	覆土
	28	小礫		2.5	1.8	(1.0)	6.15		不定形	覆土
	24	小礫		3.1	1.7	(2.2)	(13.47)		不定形	覆土
	29	小礫		4.2	1.7	1.2	(3.79)		不定形	覆土
	27	小礫		4.8	2.7	(2.0)	(28.90)		不定形	覆土
	30	小礫塊		(2.9)	(1.5)	(1.0)	(4.89)		微細片、破断面にスス付着。	覆土
	25	小礫塊		(5.5)	(3.0)	(1.8)	(27.50)		小片、磨石片か。	覆土
	26	小礫塊		(3.0)	(3.0)	(1.5)	(12.70)		小片、磨石片か。	覆土
	12	小礫塊		(4.5)	(2.3)	(1.2)	(8.83)		小片、磨石片か。	覆土
	20	剥片		(3.9)	(1.8)	(1.4)	(6.65)	チャート	自然面残る。押圧、割線なし、スレイバー、意図品か。	覆土

表33 第53号土坑石器・礫観察表

[単位: cm・g]

検出	通し番号	種類	分類・形状	長さ	幅	厚さ	重量	石材	特徴	出土位置
	54	小礫塊		(7.8)	(9.2)	(2.5)	(66.68)		磨石か、あるいは石皿片か、外面スス付着。	覆土

表34 第55号土坑石器・礫観察表

[単位: cm・g]

検出	通し番号	種類	分類・形状	長さ	幅	厚さ	重量	石材	特徴	出土位置
	9	礫石器	A1 1①ア	11.5	7.4	4.6	509.10	デイサイト	全面で磨減、表裏面凹孔、下面削打後、磨減、一部赤色変色。	覆土
	10	礫石器	A1 2②ア	11.8	6.9	4.4	520.18	輝石安山岩	全面磨減、凹孔表裏面、下面削打後、磨減。	覆土
	13	石皿片	I	(6.8)	(6.2)	(3.3)	(215.01)		小礫塊、一面のみ残。	覆土
	38	小礫塊		(3.2)	1.5	0.5	(3.24)		小片、磨減。	覆土
	43	小礫塊		(2.6)	(1.8)	(1.9)	(6.50)		小片、外面赤色変化か。	覆土
	46	礫塊		(14.2)	(9.2)	(4.4)	(420.46)		残存する二面は磨減、自然面か、石皿片か。	覆土

表35 第63号土坑石器・礫観察表

(単位: cm・g)

検出	通し番号	種類	分類・形状	長さ	幅	厚さ	重量	石材	特徴	出土位置
	54	小礫塊		(2.0)	(1.2)	(0.8)	(1.89)		礫薄片。	覆土
	53	小礫塊		(2.5)	(1.4)	(0.8)	(2.70)		礫薄片。	覆土
	51	小礫塊		(2.5)	(1.9)	(1.6)	(8.29)		礫薄片。	覆土
	50	小礫塊		(3.3)	(1.8)	(1.5)	(15.18)		礫薄片。	覆土
	52	小礫塊		(2.8)	(1.3)	(0.8)	(2.82)		礫薄片。残存する面はないが、石臍片あるいは磨石片。	覆土
	49	小礫塊		(5.4)	(2.3)	(1.5)	(21.02)		残存する面はないが、石臍片あるいは磨石片。	覆土
	48	小礫塊		(8.1)	(5.9)	(3.7)	(243.99)		残存する面はないが、石臍片あるいは磨石片。	覆土

表36 第71号土坑石器・礫観察表

(単位: cm・g)

検出	通し番号	種類	分類・形状	長さ	幅	厚さ	重量	石材	特徴	出土位置
	421	剥片		(3.0)	(1.8)	(0.9)	(4.58)	チャート	小片。	覆土
	410	礫石器	AaII 2②ア	12.5	8.1	3.6	601.40	輝石安山岩	全面磨滅。表裏面に顕著。	覆土
	412	礫石器	AbII 2②ア	12.2	9.0	6.5	1059.87	輝石安山岩	全面磨滅。表裏面に顕著。側面、上半研磨され平坦。	%9
	411	礫石器	CaIII 2①ア	9.5	9.3	6.3	790.60	ゲイサイト	不整形。裏面平坦。右側面突出する。表面磨滅。裏面の凹孔は自然か。	%11
	422	小礫塊		(4.3)	(1.9)	(0.5)	(2.58)	頁岩	礫薄片。全面非色変化。	覆土
	423	小礫塊		(3.8)	(1.7)	(0.4)	(1.98)	頁岩	礫薄片。全面非色変化。	覆土
	424	小礫塊		(2.3)	(1.5)	(0.5)	(1.19)	頁岩	礫薄片。全面非色変化。	覆土
	425	小礫塊		(2.3)	(1.2)	(0.8)	(0.97)	頁岩	礫薄片。全面非色変化。	覆土
	414	小礫塊		(8.2)	(6.5)	(3.2)	(118.99)		小片。磨滅面残存。石臍片か。	覆土
	420	小礫塊		(4.1)	(2.0)	(1.1)	(9.83)		小片。	覆土
	418	小礫塊		(3.4)	(2.2)	(1.9)	(11.01)		小片。	覆土
	415	小礫塊		(5.3)	(9.5)	(0.7)	(18.31)		裏面剥離。滑り。表面磨滅。	覆土
	413	小礫塊		(18.8)	(10.1)	8.4	(1958.83)		断面丸みのある三角形。表面磨滅欠。周辺に非色変化。	%12

表37 第73号土坑石器・礫観察表

(単位: cm・g)

検出	通し番号	種類	分類・形状	長さ	幅	厚さ	重量	石材	特徴	出土位置	
	30	1233	石臍	(3.1)	(1.6)	(0.3)	(1.41)	チャート	比較的細かな割離を施す。	覆土	
	31	1225	石臍	3.0	4.1	0.8	6.21	赤玉石	丸部詰め方向に作出	覆土	
		305	剥片	(3.8)	(3.9)	(2.0)	(29.40)		スクレイパー。本製品か。調整なし。	覆土	
		295	剥片	(4.7)	(2.0)	(0.8)	(7.29)		小片。	覆土	
		207	剥片	(1.9)	(1.4)	(0.2)	(0.60)		小片。	覆土	
		307	剥片	(1.5)	(1.6)	(0.4)	(1.01)		小片。	覆土	
		313	剥片	(3.3)	(2.3)	(1.5)	(11.90)		小片。	覆土	
		280	礫石器	FII 1②ア	(7.4)	(6.3)	(4.9)	(323.56)	輝石安山岩	磨滅全面。裏面を握り込むと安定する。	覆土
		292	石臍	IAb	(11.2)	(11.1)	(6.0)	(873.12)	輝石安山岩	表面。両縁がわずかに高い。裏面平坦1/4残。	覆土
		243	石臍	IRd	(16.5)	(17.3)	(7.6)	(3800.10)	砂岩	表面裏面平坦。非色変化か。両縁部分的に欠損。修形加工。一部欠失。	覆土
		277	石臍	IIDd	(14.0)	(12.7)	(6.7)	(1473.70)		表面磨滅。スス付着。小片。	覆土
		290	石臍	II	(15.5)	(14.2)	(4.9)	(730.23)		小片。磨滅。スス付着。	覆土
		264	石臍	IIDd	33.2	24.7	13.2	10090.00	輝石安山岩	断面三角形。表面凹孔多。裏面平坦凹孔あり。	覆土
		262	石臍	IIDd	41.8	27.2	16.4	23090.00	輝石安山岩	断面今や三角形。表裏とも磨滅。裏面凹孔あり。	覆土
		267	小礫	8.0	5.2	3.3	195.10		礫石器 (Ab2②ア) に似る。断面不定形。	覆土	
		286	小礫	8.8	7.0	2.8	249.73		平面。断面不定形。礫石器 (あるいはI釘形) に似る。	覆土	
		266	小礫	9.5	8.0	3.3	369.52		平面。円形の1/4形状。扁平。一面磨滅か。	覆土	
		244	小礫	15.3	9.3	4.8	1122.91		楕円形状。扁平。全面で磨滅。磨石の可能性あり。	覆土	
		265	小礫	9.0	4.7	3.8	240.58		礫石器 (E) に似る。全面磨滅。	覆土	
		1223	小礫	11.5	5.5	4.1	398.66	輝石安山岩	礫石器 (E) に似る。断面方形。磨滅あり。	覆土	
		308	小礫	11.9	5.3	4.7	358.35		不定形。礫石器 (E) に似る。表面磨滅。傾斜部スス付着。中央部の凹孔を握り込むと安定する。	覆土	
		246	小礫	12.2	6.7	4.3	419.65	ゲイサイト質凝灰岩	不定形。礫石器 (E) に似る。全面磨滅。	覆土	
		269	小礫	14.8	6.3	6.9	640.73		平面三角形。礫石器 (E) に似る。	覆土	
		274	礫	13.5	10.0	8.1	1257.80		礫石器 (E) に似る。全面磨滅。	覆土	
		268	礫	16.8	8.0	6.5	1752.93	石英珪岩	礫石器 (E) に似る。断面方形。全面磨滅。	覆土	
		271	小礫	6.1	5.7	(3.8)	138.21		不定形。礫石器 (F) に似る。	覆土	

第3章 確認された遺構と遺物

検体	通し番号	種類	分類・形状	長さ	幅	厚さ	重量	石材	特徴	出土位置
	270	礎		8.8	6.9	5.0	263.77		不定形、礫石器 (円) に似る。	礎土
	291	小礫		8.6	5.8	4.0	228.43		不定形、礫石器 (円) に似る。	礎土
	255	小礫		9.8	7.8	5.3	558.79		不定形、礫石器 (円) に似る。全面磨滅。	礎土
	278	小礫		11.5	10.8	5.5	919.37		礫石器 (円) に似る。	礎土
	258	礎		15.1	10.3	6.5	1240.93		不定形、礫石器 (円) に似る。裏面凸状。	礎土
	260	礎		21.3	11.8	9.3	1958.23		不定形、礫石器 (円) に似る。底面磨滅。	礎土
	298	小礫		8.8	4.7	3.3	180.95	流紋岩か	不定形、礫石器 (卵形) に似る。緑色。	礎土
	291	小礫		(7.3)	(6.9)	(1.3)	(75.17)		不定形、礫石器 (卵形) に似る。扁平、底面磨滅。	礎土
	302	小礫		14.7	7.7	(3.3)	(402.33)		不定形、礫石器 (卵形) に似る。表面、破砕後磨滅。扁平。	礎土
	261	礎		21.2	10.8	5.8	1594.31		平面菱形状、やや礫石器 (円) に似る。扁平、磨滅。	礎土
	291	小礫		14.8	6.8	2.8	382.08		不整な菱形、脆弱。	礎土
	254	小礫		6.2	3.0	2.0	57.25		ややバナナ形、扁平、磨滅。	礎土
	263	礎		36.9	24.5	12.9	14100.00		平面やや三角形状。表面、平坦面多く磨滅。中央部やや凹んで円れ。石重み大。	礎土
	250	礎		32.5	(17.3)	19.6	(7390.00)	砂岩		
	316	小礫塊		(7.7)	(4.3)	(2.0)	(63.23)		小片、元は丸味のある自然石か。	ビッド内
	245	小礫塊		(9.1)	(6.0)	(1.0)	(59.60)	無規晶質安山岩	小片、平坦面の一部残。磨滅。	礎土
	259	小礫塊		(10.7)	(8.8)	(3.0)	(342.04)		円形の自然石の一部か。扁平。	礎土
	282	小礫塊		(6.5)	(6.5)	(4.0)	(261.18)		礫石器 (A) の端部か。磨滅、円れ顕著。	礎土
	289	小礫塊		(5.5)	(6.0)	(2.5)	(102.28)		小片、不定形。扁平。	礎土
	256	小礫塊		(9.5)	(6.0)	(2.6)	(171.18)		小片、不定形。裏面割傷。扁平。	礎土
	294	小礫塊		(9.3)	7.0	3.3	(220.33)		不定形、礫石器 (卵形) の一部か。	礎土
	275	小礫塊		(14.8)	(8.0)	(4.5)	(467.78)		不定形、礫石器 (卵形) の一部か。	礎土
	283	礫塊		(15.5)	(9.0)	(6.5)	(920.73)		破片、残存面は磨滅。	礎土
		礫塊		9.3	4.7	3.5	240.7		破片、残存面は磨滅。割傷石器石材か。	礎土
		礫塊		9.2	6.3	1.0	59.50		脆弱、不定形。	礎土
	293	小礫		6.3	5.2	2.5	116.19		平面形状状。扁平。打穿石材か。	礎土
	317	小礫塊		(6.2)	(4.8)	(1.9)	(23.10)		小片、打穿石材か。	礎土
	248	礫塊		(17.0)	(11.8)	5.5	(1273.42)	藍青色ホルンフェルス	自然面、多。扁平。打穿石材か。	礎土
	284	礫塊		22.5	17.0	(6.2)	(2600.00)		自然面、多。扁平。打穿石材か。	礎土
	298	小礫塊		(6.2)	(6.3)	(2.5)	(88.88)		円形状の礫の一部か。破断面を含めて黄熱、赤色変化。	礎土
	249	小礫塊		(10.2)	(7.0)	(6.0)	(369.90)		小片。破断面を含めて黄熱、赤色変化。	礎土
	273	小礫塊		(10.4)	(8.0)	(5.0)	(537.84)		不定形。礫の端部。自然面の欠損。赤色変化。	礎土
	272	小礫塊		(4.5)	(6.0)	(4.7)	(148.87)		小片。自然面スス付着。	礎土
	276	小礫塊		(9.5)	(5.5)	(4.0)	(223.77)		小片。破断面までスス付着。	礎土
	397	礫塊		13.8	(8.1)	5.3	799.57		断面、スス付着。	礎土
	257	礫塊		(30.2)	(14.7)	(11.5)	(5080.00)		1/2程度残か。表裏面平坦。片面の破砕部迄にスス付着。石重顕著。石材に利用済み。	礎土

表 38 第74号土坑石器・礫観察表

検体	通し番号	種類	分類・形状	長さ	幅	厚さ	重量	石材	特徴	出土位置
12	459	石鏃		(2.1)	(0.8)	(0.6)	(0.99)		小片、表面細かな割傷。裏面広く浅い割傷も発生。	礎土
	409	刮片		(3.2)	(3.0)	(1.5)	(14.02)		小片。	礎土
13	401	礫石器	F目 2②ア	5.7	4.1	2.5	85.74	頁岩	全面磨滅。縦断面弧状で縁の位置が安定する。	礎土
	369	礫石器	F目 2②ア	8.2	7.1	4.8	373.46		底面不整。全面やや磨滅。円れ付着。	Na16
11	396	礫石器	H目	21.3	18.1	4.0	2480.00	礫石安山岩	表裏面平坦。磨滅。	Na11
	440	小礫		6.5	6.3	(1.8)	(80.79)		平面台形状で扁平。	Na17
	372	礎		(10.6)	10.2	(5.6)	(604.92)		平面不定形。断面、三角形で底面割傷後磨滅。	Na17
	395	礎		28.5	35.3	10.3	9700.00		平面三角形状。断面、長方形状。	Na14
	398	小礫塊		(10.0)	(5.3)	(4.1)	(156.27)		小片。磨滅する平坦面残。	礎土
	399	小礫塊		(7.5)	(6.3)	(2.1)	(96.66)		小片。磨滅する平坦面残。	礎土
	371	小礫塊		(104.3)	9.7	6.2	(1375.57)		棒状の礫の端部か。全面磨滅。表裏面赤色変化。スス付着。	Na18
	370	小礫塊		(18.7)	(15.9)	(12.6)	(5280.00)		長形の礫。1/2程度残か。磨滅。上面及び断面赤色変化及び割傷。割材か。	Na19
	368	小礫塊		(31.3)	(20.3)	(11.8)	(11650.00)		長形の礫。1/2程度残か。磨滅。上面及び断面赤色変化及び割傷。割材か。	Na15

表39 第75号土坑石器・礫観察表

(単位: cm・g)

棟頭	通し番号	種類	分類・形状	長さ	幅	厚さ	重量	石材	特徴	出土位置
33	351	礫石器	BII 2②ア	9.0	8.1	4.0	263.27	輝石安山岩	不整形、表面磨滅顯著。	No.33
32	337	礫石器	AII 2②ア	11.8	9.4	4.6	772.35	輝石安山岩	やや円形に近い、表面磨滅顯著。	覆土
36	376	礫石器	BII 1②ア	11.3	10.2	5.2	716.96	輝石安山岩	磨滅、表面に顕著。	覆土
35	344	礫石器	DuII 2②ア	(15.0)	7.1	3.9	671.31	輝石安山岩	不整形であるが表面の磨滅顯著。	No.38
38	345	石皿	IIDe	17.0	17.4	5.2	2350.00		磨石にしては大形のため石皿とした。円形で扁平。	3層以下
34	341	石皿	IIAd	(8.1)	(12.3)	(3.2)	(836.47)	輝石安山岩	表面磨滅、表面平坦、磨滅、不整形であるが石皿か、汚れ顯著。	No.34
40	353	石皿	IIDe	32.1	16.8	13.9	10950.00		断面平行四辺形状、不安定であるが、磨滅顯著のため石皿か。	No.40
37	338	石皿	IIDd	32.1	26.7	7.1	9600.00	輝石安山岩	下端及び、右側面破砕後磨滅、外形加工か、表面磨滅顯著、及び汚れ、右側面に磨石と見られる。	No.37
39	352	石皿	IIDd	(41.7)	29.9	11.2	15550.00	輝石安山岩	表面皿上下方向で凹状、表面右側部にかけて傾斜、厚としりか、裏面赤色変化あり。	No.39
41	373	礫		41.1	26.2	15.8	20150.00	ゲイサイト質火山礫凝灰岩 ゲイサイト質凝灰岩	出土線中最長径、磨滅するが不整形、石器類ではないと考えられる。	No.41
377	礫石器か	AaIII 2②ア	7.2	5.7	3.4	195.97		小型、断面三角形状、裏面磨滅。	覆土	
355	礫石器か	AaIII 2②ア	9.8	7.0	4.3	397.76		断面三角形状、全面磨滅。	No.69	
375	礫石器	AII 1②ア	12.2	8.4	5.3	796.38	輝石安山岩	定型的な磨石か、全面磨滅、裏面中央浅い凹孔1ヶ。	覆土	
358	礫石器	AII 2②ア	11.9	9.5	4.6	763.55		片側側面平坦、研削か、全面磨滅。	No.71	
362	礫石器	AIII 2②ア	13.3	7.3	3.7	554.48		やや不整形、表面磨滅に凸凹あり、全面磨滅。	No.74	
327	礫石器	B(1) 2②ア	9.0	6.8	3.7	296.98		端部破、定型的な磨石か。	No.70	
358	礫石器	FIII 2②ア	10.5	8.8	7.1	843.71		断面形状、全面磨滅。	No.45	
361	礫石器	FIII 2②ア	7.7	4.5	3.3	148.86		全面磨滅、底面スス付着。	No.72	
366	礫石器	FIII 2②ア	7.8	7.5	3.9	351.90		断面長方形状、扁平、底面磨滅。	No.78	
378	礫石器	FIII 2②ア	8.0	6.5	4.4	337.22		断面形状で底面は凹むが磨滅。	覆土	
348	礫石器	FIII 2②ア	7.3	7.2	5.2	318.84		一部破砕後、磨滅。	No.75	
346	礫石器	FIII 2②ア	8.7	7.8	5.8	499.33	輝石安山岩	汚れ、スス付着	No.64	
365	礫石器	IIII 2②ア	14.6	5.7	3.5	420.73		棒状、一部欠損。	No.77	
379	石皿	(I)	(7.1)	(2.1)	(4.4)	(124.36)		小片、磨滅した平坦面残る。	覆土	
325	石皿	IIDe	14.5	11.8	(4.5)	1137.72		裏面一部破砕、表面磨滅し平坦。	覆土	
330	石皿	IId	(17.3)	(14.5)	(6.5)	(2306.00)		破片、側面の一部欠、切刃後磨滅、外形加工か、表面磨滅平坦、一部スス付着。	No.47	
333	石皿	ICd	(16.7)	(15.5)	(8.3)	(2686.00)		破片、表面平坦、磨滅表面に顕著、裏面にスス付着。	No.49	
367	石皿	IIDd	(21.3)	14.4	6.2	(2620.00)	玄武岩質安山岩	礫石器(I)に似る。端部欠損、表面平坦、磨滅表面に顕著。	No.79	
344	礫		29.3	19.5	10.8	8000.00		礫石器(I)に似る。断面菱形状、全面磨滅、石皿の可能性あるか。	No.52	
329	礫		(18.2)	14.9	10.4	(3380.00)		礫石器(I)に似る。断面長方形状、全面磨滅、石皿の可能性あるか。	No.46	
340	小礫		11.2	9.0	3.2	391.37		平面菱形状、扁平、表面面赤色変化、スス付着。	覆土	
340	礫		(11.8)	8.8	4.0	479.11		平面三角形状、扁平、339、331に似る。	No.55	
339	礫		11.4	9.5	5.0	583.97		平面、断面三角形状、340、331に似る。	No.56	
331	礫		12.8	13.3	8.2	1674.53		平面、三角形状、厚みあるが340、339に似る。	No.50	
347	礫		(12.1)	10.8	(3.4)	573.13		不整形、扁平、全面磨滅。	No.63	
332	礫		18.2	11.8	6.6	1628.65		平面、断面三角形状、全面磨滅、部分的にスス付着。	No.51	
354	礫		27.3	16.7	8.5	4900.00	閃緑岩	全面研削、平面菱形状で断面三角形状。	覆土	
360	小礫塊		(11.5)	(6.9)	(3.3)	(177.61)		小片、断面を含み機軸による赤色変化。	No.73	
381	小礫塊		(5.6)	(4.2)	(3.1)	(51.30)		小片、若干の赤色変化。	覆土	
364	小礫塊		(17.2)	(9.8)	(3.3)	(581.78)	砂岩	小片、端部、断面を含み赤色変化。	No.76	
359	小礫塊		(10.8)	(8.8)	(7.8)	(998.50)		破砕部磨滅、色調変化。	No.62	
374	小礫塊		(10.4)	(7.7)	(7.0)	(687.95)		小片、平坦な磨滅面、赤色変化。	No.42	
335	礫塊		(17.5)	(14.3)	(12.3)	(3520.00)		1/2程度残小、全面磨滅、赤色変化。	No.53	
336	礫塊		(23.5)	(14.0)	(11.6)	(4530.00)		1/2程度残小、全面磨滅、赤色変化。	No.54	
342	礫塊		(16.2)	(14.7)	(12.6)	(4698.00)		1/2程度残小、全面磨滅、赤色変化。	覆土	
329	礫塊		28.2	13.8	8.3	5220.00		1/2程度残小、全面磨滅、研削か。	No.48	

第3章 確認された遺構と遺物

検出	通し番号	種類	分類・形状	長さ	幅	厚さ	重量	石材	特徴	出土位置
	350	小礫塊		9.2	(8.7)	(2.8)	(190.84)		スズ付着。	№65
	393	小礫塊		(8.7)	(6.3)	(2.0)	(168.35)		胎膜で破砕。	検認面
	343	小礫塊		(8.9)	(7.2)	(4.8)	(351.20)		小片。扁平小。	№58
	363	小礫塊		12.2	(10.7)	5.3	(630.37)		円形状で扁平。	№75
	349	小礫塊		12.8	(4.3)	(2.2)	(90.25)		小片。打穿石材か。	№66
	63	その他の礫		2.0	1.8	1.4	3.00		白色礫小片	覆土
	65	その他の礫		1.2	1.1	0.4	0.26		白色礫小片	覆土
	66	その他の礫		1.3	1.2	0.4	0.37		白色礫小片	覆土

表 40 第80号土坑石器・礫観察表

[単位: cm・g]

検出	通し番号	種類	分類・形状	長さ	幅	厚さ	重量	石材	特徴	出土位置
	433	剥片か		(3.7)	(2.8)	(1.9)	(105.01)	チャートか		覆土
20	426	礫石器	A I 2Dア	12.7	8.4	3.9	712.36		磨滅全面。表面の浅い凹みは凹孔か。	№20
	427	礫石器	H 2Dア	10.6	9.2	4.3	620.00		磨擦形に近い。裏面中央に凹孔1ヶ所か。全面磨滅。1/2程度残。	№22
19	428	石皿	H 4d	15.3	(10.7)	4.5	(777.96)	多孔質輝石安山岩	断面凹状。裏面から側面磨滅。側面は外形を加工か。全面色変化。	№19
21	431	小礫		3.7	3.6	1.3	20.96	流紋岩質凝灰岩	扁平三角形状。緑色玉?	覆土
	430	小礫		4.3	2.9	1.0	22.85		扁平長円形。裏面平坦。磨滅。	覆土
	432	小礫		4.3	2.3	1.9	19.22		礫石器(磨擦形、釘)に似る。磨滅。	覆土
	429	小礫塊		(9.4)	(5.8)	(1.8)	(94.40)		小片。石皿片か。	覆土

表 41 第82号土坑石器・礫観察表

[単位: cm・g]

検出	通し番号	種類	分類・形状	長さ	幅	厚さ	重量	石材	特徴	出土位置
1	434	礫石器	A B a 2Dア	13.3	7.5	2.8	448.68	輝石安山岩	全面磨滅。表面凹凸、顕著。扁平。	覆土

表 42 第99号土坑石器・礫観察表

[単位: cm・g]

検出	通し番号	種類	分類・形状	長さ	幅	厚さ	重量	石材	特徴	出土位置
	441	剥片		(3.5)	(3.0)	(0.8)	(7.90)	チャート	小片	覆土
	442	剥片		(3.8)	(2.4)	(0.5)	(4.00)	チャート	小片	覆土
	443	剥片		(2.8)	(1.3)	(1.2)	(1.99)	チャート	小片	覆土
25	448	礫石器	A I 1Dア	9.9	7.4	4.2	409.42		凹孔。表面に明瞭。裏面に浅い凹み。磨滅全面。	検認面
	451	礫石器	H 1Dア	14.7	13.9	4.5	1258.70		扁平。全面磨滅。	検認面
	1224	石皿	I 6a	(19.8)	(21.7)	(11.0)	(3000.00)	多孔質輝石安山岩	1/2残。表面。皿下縁は厚とし口か。裏面は平坦で凹孔多。	検認面
	449	小礫		10.0	5.7	(1.6)	119.79		バナナ形。扁平。	覆土
	456	小礫		8.5	5.3	1.0	78.42		礫石器(磨擦、釘形)。扁平。	覆土
	454	小礫		9.2	7.9	2.7	225.26		扁平台形状。扁平。	覆土
	467	小礫塊		(4.2)	(1.6)	(2.2)	(20.63)	デイサイト質凝灰岩	胎膜。	覆土
	455	小礫塊		(7.6)	(4.2)	(1.9)	(57.50)		磨滅面。残。	覆土
	450	小礫塊		(6.9)	6.3	2.8	(195.87)		1/2程度残か。細長い長円形か。全面磨滅。磨石片か。	覆土
	453	小礫塊		(14.0)	(13.0)	(3.4)	(312.72)		同一個体か。小片。赤色変化。	覆土
	452	小礫塊		(9.7)	(5.7)	(3.6)	(160.72)			覆土
	440	礫塊		(11.3)	(8.2)	(8.0)	(855.02)		平坦面を残す。小塊。	覆土
	439	礫塊		(30.3)	(15.3)	(10.3)	(4580.00)		扁平長方形断面。三角形状。底面は弧状に反る。	覆土

表 43 第105号土坑石器・礫観察表

[単位: cm・g]

検出	通し番号	種類	分類・形状	長さ	幅	厚さ	重量	石材	特徴	出土位置
	364	石皿	I 4a	37.8	26.0	7.7	9350.00	多孔質輝石安山岩	大きさ(大)基本のため遺構外に固	覆土
	73	礫		32.2	12.3	9.8	5090.00	デイサイト	平坦磨擦状。全面磨滅。	覆土
	71	礫塊		(22.0)	(16.5)	(8.2)	(4900.00)	玄武岩質安山岩	扁平小塊。磨滅した平坦面を残す。	№3
	72	礫		(21.8)	(16.5)	(11.0)	(4500.00)	凝灰岩質	不定形な礫石器(磨擦形)全面磨滅。	覆土

表 44 第106号土坑石器・礫観察表

[単位: cm・g]

検出	通し番号	種類	分類・形状	長さ	幅	厚さ	重量	石材	特徴	出土位置
	99	剥片		(3.5)	(2.8)	(1.0)	(7.28)		押し剥離は認められないが、石器未製品か。	覆土
	81	石皿	I 4d	26.8	23.7	5.5	4660.00	輝石安山岩	磨滅。両面。厚とし加工か。	覆土
22	97	礫石器	A I 1Dア	9.8	7.4	3.9	440.38	デイサイト質凝灰岩	全面磨滅。	覆土

検出	通し番号	種類	分類・形状	長さ	幅	厚さ	重量	石材	特徴	出土位置
	123	織石器	DII I①ア	10.8	3.8	2.9	176.64		やや弧状、全面磨滅。	覆土
	124	織石器	EII I①ア	7.3	3.8	3.8	106.50		小縦、全面赤色変化。	覆土
	122	織石器	EII I①ア	10.7	7.2	4.4	370.93		全面磨滅。	覆土
	119	織石器	FII I①ア	7.0	4.8	3.3	124.08		全面磨滅。	覆土
	102	小縦		4.2	3.8	1.0	24.52	流紋岩質流紋岩	楕丸形状、緑色、扁平。玉か。	覆土
	100	小縦		4.0	3.2	1.9	20.49		長円形、白色、扁平。	覆土
	98	縦		18.8	14.5	6.0	2249.00		長円形状、扁平、赤色変化及びスス付着。砂粒か。	%23
	74	縦		22.4	18.5	8.4	(3728.00)		不整な三角形状。断面平坦。部分的に焼熱。スス付着。	覆土
	87	縦		11.5	8.8	8.5	833.78	ドレライト	平面、断面菱形状。磨滅。	%24
	75	縦		16.2	11.0	7.8	1778.72		不整な磨片形。磨滅。	覆土
	79	縦		18.0	13.8	7.8	2650.00		不整な三角形状。磨滅。	覆土
	121	縦		20.8	17.0	9.0	3780.00		不整な菱形状。	覆土
	101	小縦塊	(4.3)	(4.0)	(2.0)	(33.03)			不整な自然石。破断部。	覆土
	77	縦		(8.5)	(6.3)	(5.0)	(303.50)		不整な自然石。破断部。	覆土
	118	小縦塊	(10.9)	(8.7)	(8.9)	(1032.51)		チャートか	自然面多く残る。立柱状。	覆土
	83	小縦塊	(13.2)	(7.4)	(4.4)	(561.31)		紫雲母角閃石花崗岩	平坦面を有する自然石。	覆土
	117	小縦塊	(7.3)	(6.2)	(5.0)	(197.43)			小塊、石肌の石材か。	覆土
	78	小縦塊		7.8	(9.2)	4.2	(186.96)		断面三角形状。磨滅。	覆土
	113	小縦塊		(7.2)	(4.6)	(1.7)	(86.44)		小塊、赤色変化。	覆土
	114	小縦塊		(5.5)	(4.6)	(1.4)	(39.40)		小塊、スス付着。	覆土
	120	小縦塊		(16.7)	(17.0)	(8.5)	(2630.00)		1/2程度残か。平坦面あり。石肌(10)片か。	覆土
	76	縦塊		(15.2)	(11.7)	(9.0)	(1443.64)		端部残。断面形状。磨滅。	覆土
	80	縦塊		(19.8)	(18.5)	(8.5)	(3950.00)		表裏側面の一部残。三面とも赤色変化顯著。	覆土
	84	縦塊		(3.7)	(2.0)	(1.3)	(16.61)		1/2程度残か。表面上半円形付着。	覆土

表 45 第108号土坑石器・礫観察表

[単位: cm・g]

検出	通し番号	種類	分類・形状	長さ	幅	厚さ	重量	石材	特徴	出土位置
	274	織石器	AIII I②ア	5.3	4.3	3.7	107.83	安山岩	小型、球形に近い。凹孔は自然面か。全面磨滅。	覆土
	273	縦塊		(9.5)	8.3	5.4	(418.49)	安山岩	1/2程度残か。縦断面は磨滅。平面、断面とも三角形状であるので、破断した状態で遺跡内に持ち込まれたか。	覆土

表 46 第121号土坑石器・礫観察表

[単位: cm・g]

検出	通し番号	種類	分類・形状	長さ	幅	厚さ	重量	石材	特徴	出土位置
	46	割片		(2.8)	(2.1)	(1.0)	3.50		小片。	覆土
	43	織石器	CII 2②ア	5.3	4.6	3.6	92.92	輝石安山岩	やや卵(おにぎり)状。	覆土
	42	小縦塊		(4.9)	7.0	3.2	(203.82)		1/2程度残か。長円形あるいは長方形状。今や扁平。	覆土
	44	小縦塊		(10.7)	(7.1)	(4.0)	(235.40)		平坦な破断面。残。砥石片か。	覆土

表 47 第123号土坑石器・礫観察表

[単位: cm・g]

検出	通し番号	種類	分類・形状	長さ	幅	厚さ	重量	石材	特徴	出土位置
	181	石鏡		(3.1)	(2.6)	(0.5)	(2.92)		成形のみ。木製品か。	覆土

表 48 第124号土坑石器・礫観察表

[単位: cm・g]

検出	通し番号	種類	分類・形状	長さ	幅	厚さ	重量	石材	特徴	出土位置
	515	磨石	EII 2②ア	8.6	7.0	4.3	318.02		磨面、全面。大きさ1/3。	覆土
	516	磨石	EII 2②ア	7.0	5.9	3.3	190.13		磨面全面。大きさ、底面破砕で1/3	覆土
	525	割片		(1.7)	(1.6)	(0.4)	(1.58)	チャート	小片。自然面残る。	覆土
	519	打片か	ホ	(10.8)	(8.5)	(2.4)	(250.76)	藍青石ホルンフェルス	片割り部残。表面自然面。裏面破砕。刃部等磨滅なし。試作段階で破砕か。	覆土
	527	織石器	HII 2②ア	5.1	5.1	3.5	107.74	輝石安山岩	上面形状。下面平坦。磨滅全面。上端磨打か。	覆土
	526	織石器か	HII 2②ア	7.6	6.9	4.5	341.08	ゼイサイト	今や織石器(II)に似る。表面三角錐状。全面磨滅。	覆土
	518	織石器	Ia I②ア	14.0	9.2	3.3	725.00	輝石安山岩	表面ススか。全面磨滅。	覆土
	540	織石器か	DIII I①ア	(14.3)	4.3	2.1	177.58	頁岩	表裏、左右側面とも平坦。側面の欠損は磨打か。砥石か。	覆土

第3章 確認された遺構と遺物

検出	通し番号	種類	分類・形状	長さ	幅	厚さ	重量	石材	特徴	出土位置
16	520	石皿	IaA	(23.0)	(26.5)	(8.4)	(5340.00)	多孔質輝石安山岩	1/2程度、表面の磨面を留めて周縁を縁高に作出する。 凹孔状の凹みは自然面か、裏面は磨減し平坦であるが自然面の丸縁を残す。	覆土
	529	小罐		3.6	3.7	2.0	37.10	輝石安山岩	磨石器 (F) に似る。全面磨減。	覆土

表 49 第 148 号土坑石器・磁観察表

[単位: cm・g]

検出	通し番号	種類	分類・形状	長さ	幅	厚さ	重量	石材	特徴	出土位置
	135	剥片		(4.0)	(2.7)	(1.0)	(8.32)	チャート	一部自然面を残す。	覆土
4	128	石皿	ICa	(27.8)	(19.2)	(7.8)	(4900.00)		1/2程度、扁平縁は厚とし口か、裏面平坦、中央部に凹孔。	覆土
5	127	石皿	IBb	(34.8)	(22.8)	(8.6)	(7940.00)		裏面縁部となつて縁跡を残し、磨面を作出か、裏面、上半部の縁跡で平坦面を作出か、裏右側の縁跡は外形加工か、磨面が施される。	覆土
	134	小罐		2.6	2.2	1.3	9.40	流紋岩	小罐、不整な長円形。	覆土
	133	小罐		9.8	7.1	3.5	(248.16)	流紋岩	磨石器 (F) に似る。	覆土
	132	小罐		11.7	5.7	2.9	205.75	流紋岩	平面三角形、やや扁平。	覆土
	129	小罐		16.4	10.2	7.2	1373.96		平面形、断面形、三角形の多面体、磨減。	覆土
	131	小罐塊		(11.1)	(6.3)	(4.0)	(281.16)	流紋岩	一部欠。	覆土
	130	小罐塊		(12.7)	(19.7)	(5.4)	(677.38)		端部残、全面磨減。一部剥落する部分を含めて若干の赤色変化。右皿片か。	覆土

表 50 第 151 号土坑石器・磁観察表

[単位: cm・g]

検出	通し番号	種類	分類・形状	長さ	幅	厚さ	重量	石材	特徴	出土位置
	157	剥片		(3.6)	(2.2)	(1.8)	(14.63)	チャート	全面割離	覆土
15	1323	石皿	IIb	29.6	22.6	7.2	6940.00	輝石安山岩	平面三角形、裏上側の縁部は厚とし口か、全面磨減。	覆土
	181	小罐		6.0	4.5	2.9	89.46	チャート	剥片石部、石材か、縁跡面なし。	覆土
14	182	小罐		(2.3)	(1.8)	(0.5)	(3.24)		打製石部、石材か。	覆土
	158	小罐		(2.9)	(1.9)	(2.1)	(15.22)	多孔質流紋岩	不整な球状。	覆土
	164	小罐		9.5	5.4	3.0	192.87	デイトライト	不整なバナナ形、全面汚れ。	覆土
	155	小罐		9.5	5.0	3.5	195.33		磨石器 (I 釘形) に似る。不整形。	覆土
-	-	小罐		(6.2)	(4.8)	2.1	(88.31)		一部欠。平面長円形、やや凹みがあるが石部残。	覆土
-	-	小罐		5.7	3.9	3.1	72.14		平面長円形、断面、三角形残。	覆土
	172	小罐塊		(5.7)	(3.2)	(3.3)	(71.36)	流紋岩	不整形、被熱による劣化、赤色変化顕著。	覆土
	179	小罐塊		(10.7)	(7.3)	(4.9)	(501.18)	ドレイト	研削面残る。右皿片か。	覆土
	156	小罐塊		(12.4)	(9.0)	(4.2)	(667.76)		1/3程度残るか、表面側面とも磨減。	覆土
	165	小罐塊		(6.2)	(5.3)	(1.4)	(39.38)	変質凝灰岩	裏面縁跡、平面円形、扁平。	覆土
	180	小罐塊		(5.7)	(4.0)	(1.5)	(25.58)		小片。右皿片か、他、2片出土。	覆土

表 51 第 153 号土坑石器・磁観察表

[単位: cm・g]

検出	通し番号	種類	分類・形状	長さ	幅	厚さ	重量	石材	特徴	出土位置
9	529	磨石器	Aa II 2②ア	9.1	7.6	2.6	226.93	頁岩	磨減全面、汚れ全面付着。	覆土
10	528	磨石器	A I 2②ア	(8.6)	(8.6)	(4.5)	(478.53)	輝石安山岩	1/2程度、全面磨減。	覆土
11	522	磨石器	Aa III 1②ア	12.7	7.6	8.1	870.85	輝石安山岩	凹孔表面、磨減全面、右側面に平坦面。	N11
12	526	磨石器	B III 2②ア	14.3	11.8	5.1	1114.11	デイトライト質凝灰岩	磨減表面に磨面。	覆土
13	520	石皿	IIb4	28.5	17.7	8.7	6020.00	輝石安山岩	裏面平坦、凹孔あり。表面の割離顕著。被熱劣化少。	N13
	524	罐		30.5	18.0	8.7	6800.00	閃緑紋岩	平面・断面、三角形残、磨減、片面汚れ。	覆土
58	小罐			3.0	2.4	2.0	19.13		長円形の丸い小罐。	覆土
533	小罐			4.8	4.2	1.3	30.97		長円形、石部残。自然石。扁平。緑色。	覆土
532	小罐			5.7	3.3	1.8	39.17		小罐、バナナ形。扁平。	覆土
531	小罐			7.3	4.2	3.0	107.16		平面、長方形、断面、三角形、不整形。	覆土
530	小罐塊			(6.9)	(4.6)	(2.1)	(67.12)		1/3程度残る。長円形、扁平。	覆土
527	小罐塊			(8.9)	(8.3)	(5.8)	(247.17)		平坦面、残。右皿片 (1 片) か。	覆土
425	小罐塊			(11.5)	(8.5)	(2.4)	(201.75)		磨減面残。右皿片 (1 片) か。	覆土
525	小罐塊			(12.1)	(11.8)	(6.3)	(934.85)	角閃石黒雲母花崗閃緑岩	被熱、劣化及び赤色変化。	覆土
426	小罐塊			(5.2)	(5.8)	(14.7)	(93.30)		被熱、劣化及び赤色変化。	覆土

表52 第178号土坑石器・礫観察表

[単位: cm・g]

検出	通し番号	種類	分類・形状	長さ	幅	厚さ	重量	石材	特徴	出土位置
1	228	石皿	IM	35.6	(31.8)	12.4	15550.00	輝石安山岩	表面平坦凹孔多。最左側の縁斜は落とし口か。側面に凹孔。	覆土

表53 第181号土坑石器・礫観察表

[単位: cm・g]

検出	通し番号	種類	分類・形状	長さ	幅	厚さ	重量	石材	特徴	出土位置
9	585	石皿	IM	(16.7)	(8.2)	(7.5)	(1316.66)	輝石安山岩	端部残。裏面。破砕により平坦。外形加工して磨削少。	覆土
10	583	石皿	IM	(31.0)	(24.2)	10.8	(1300.00)	輝石安山岩	右側面下平。左側面中央部欠失。外形加工か。表面中央ややくぼみ。磨滅。及び若干の赤色変化。	覆土
	584	小礫		(5.1)	4.0	1.5	38.42		平面長円形。断面三角形状。	覆土
	587	小礫		5.8	4.3	2.1	50.42		平面三角形状。	覆土
	581	小礫		7.1	4.3	3.0	119.80		礫石器(比山形)に似る。	覆土
	582	小礫		7.9	6.8	5.6	364.11		礫石器(比山形)に似る。	覆土

表54 第286号土坑石器・礫観察表

[単位: cm・g]

検出	通し番号	種類	分類・形状	長さ	幅	厚さ	重量	石材	特徴	出土位置
	169	礫石		9.0	3.3	(1.6)	71.67			覆土
	85	礫		17.1	16.2	7.5	2880.00		平面有形状。表面中央に凹孔1ヶ。裏面片側側面平坦。全面磨滅。石皿か。	第106 No.25
	84	礫		(19.8)	13.5	5.2	(1321.78)		輪郭な石質。礫石器(臼磨片)に似る。	第106 No.24
	82	礫塊		(14.1)	16.2	6.2	(1707.31)		破断面残か。表面。上平汚れ付着。	第106 No.27
	88	礫塊		(15.2)	9.5	9.2	10704.30		端部欠。断面三角形状。	第106 No.28

表55 第294号土坑石器・礫観察表

[単位: cm・g]

検出	通し番号	種類	分類・形状	長さ	幅	厚さ	重量	石材	特徴	出土位置
3	47	打片	A1 A	(12.3)	(6.8)	(3.2)	(273.36)		表面。新露後磨滅。裏面。自然面残す。挟り部を中心に磨削され。刃部の吐出はほとんど行われない。	No.3

表56 第18号土坑石器・礫観察表

[単位: cm・g]

検出	通し番号	種類	分類・形状	長さ	幅	厚さ	重量	石材	特徴	出土位置
2	327	石棒		(7.1)	2.4	1.9	(60.25)		赤色の痕跡か。	No.2
4	1328	小礫		3.4	3.4	2.8	26.40		赤色は塗布か。	No.4
3	1326	小礫		3.9	3.6	2.9	49.15		赤色は焼熱により付着か。	No.43
5	200	石皿	IC	(26.3)	23.6	7.4	6500.00	輝石安山岩	三角形状。下端破砕後磨滅。落とし口か。表面平坦であるがやや凹凸。裏面凸出するが磨滅。	No.5
	194	礫石器	1個 2②ア	13.6	11.1	7.6	1377.80	輝石安山岩	全面磨滅。底面凹状であるが。磨滅顕著。	No.6
		小礫塊		(4.9)	(3.8)	(1.0)	(23.35)		裏面平坦に破砕。磨滅。表面自然面。磨滅。	覆土

表57 第19号土坑石器・礫観察表

[単位: cm・g]

検出	通し番号	種類	分類・形状	長さ	幅	厚さ	重量	石材	特徴	出土位置
7	323	礫石器	A1 1②ア	12.4	6.8	3.9	387.08	多孔質輝石安山岩	表裏面に凹孔。凹孔周囲に磨滅顕著。表面右側部から側面にかけで磨削少。	覆土
	744	礫		(2.6)	(1.8)	(1.2)	(5.47)		小片。残存する端部に縁かけ部がなくぼみあり。	覆土

表58 第23号土坑石器・礫観察表

[単位: cm・g]

検出	通し番号	種類	分類・形状	長さ	幅	厚さ	重量	石材	特徴	出土位置
	230	礫石器	A1 2②ア	7.6	5.8	4.5	269.89	グライツ	平面やや三角形状。全面磨滅。	覆土
	233	小礫		(4.8)	3.5	2.0	(40.33)		礫石器(伊)に似る。全面磨滅。	覆土
	17	石器		16.1	7.6	6.1	976.75		平面。長方形状。上面を打ち欠き断面形状に付着か。全面磨滅。	覆土
	229	小礫塊		(6.8)	(7.6)	(6.1)	(485.67)	輝石安山岩	小片。石皿目地の破片か。	覆土
	232	小礫塊		(13.4)	(9.9)	5.1	(687.05)		長方形状の3/4塊。赤色変化し。数本の亀裂がある。磨滅少。	覆土

表 59 第 32 号土坑石器・礫観察表

[単位: cm・g]

検出	通し番号	種類	分類・形状	長さ	幅	厚さ	重量	石材	特徴	出土位置
	232	磨石	H型 2型ア	9.7	6.3	2.2	216.43		やや釘形状。	覆土

表 60 第 33 号土坑石器・礫観察表

[単位: cm・g]

検出	通し番号	種類	分類・形状	長さ	幅	厚さ	重量	石材	特徴	出土位置
		小礫		7.5	4.3	3.1	144.73	流紋岩か。	平面、断面、長方形。下面平坦。	覆土
		小礫塊		(7.5)	(7.3)	5.6	(307.82)		不定形。	覆土
	165	小礫塊		(7.6)	(7.5)	4.2	(294.20)	ホルンフェルスか。	不定形、1/2程度残。砥石面は垂直な切断面。	覆土
	1	石皿		37.8	26.1	9.9	14300.00	輝石安山岩	2つに砥石する平面。長方形。全面磨滅。上面磨善。上面下辺右半部縁斜あり。磨きしむか。	覆土

表 61 第 36 号土坑石器・礫観察表

[単位: cm・g]

検出	通し番号	種類	分類・形状	長さ	幅	厚さ	重量	石材	特徴	出土位置
	9	剥片		(2.7)	(1.9)	(0.9)	(3.58)	チャート	木の葉形の剥片。断面は大きく割離し平坦。表面割離はあるが、割離割離なし。	覆土
	10	小礫塊		(5.6)	(5.7)	(2.0)	(47.92)	ホルンフェルス	打穿石材か。	覆土
	17	小礫塊		(11.2)	(7.9)	(1.8)	(127.88)	藍青石ホルンフェルス	打穿石材か。	覆土
		小礫塊		(6.2)	(4.9)	(2.5)	(82.07)		小片。磨石片か。	覆土
		小礫塊		(5.2)	(3.9)	(2.0)	(35.34)		小片。磨石片か。	覆土
	14	小礫塊		(6.4)	(5.3)	(2.9)	(140.69)		小片。磨石片か。	覆土

表 62 第 47 号土坑石器・礫観察表

[単位: cm・g]

検出	通し番号	種類	分類・形状	長さ	幅	厚さ	重量	石材	特徴	出土位置	
	355	剥片		(2.5)	(1.7)	(0.2)	(1.12)	チャート	小片。	N.13	
	23	37	石皿	目付	(22.1)	(24.7)	(12.8)	(8650.00)	輝石安山岩	皿上端面及び、右端面は垂直気味におちる。外面加工なし。裏面破砕。僅かに残存面は平坦で磨滅。表面磨滅。石皿か。	N.23
	38	小礫		4.0	2.9	2.2	38.39		礫石器 (F) に似る。全面磨滅。	覆土	
	166	小礫		4.9	3.3	3.2	46.99		礫石器 (F) に似る。全面磨滅。赤色変化。	覆土	
	39	小礫		4.1	3.0	0.8	11.49		長円形。扁平。	覆土	
	40	小礫塊		(5.3)	(3.3)	(2.5)	(32.04)		小片。磨石片か。	覆土	
	1312	小礫塊		(7.6)	(5.0)	(2.1)	(87.39)		小片。磨石片か。	覆土	
	1313	小礫塊		(7.3)	(4.2)	(1.2)	(34.00)		磨理方向で破砕。	覆土	
	32	小礫塊		(6.2)	(4.5)	(3.2)	(96.76)		小片。	覆土	
	354	小礫塊		(4.0)	(3.7)	(1.4)	(13.67)		小片。	覆土	

表 63 第 51 号土坑石器・礫観察表

[単位: cm・g]

検出	通し番号	種類	分類・形状	長さ	幅	厚さ	重量	石材	特徴	出土位置
	33	剥片		(1.7)	(1.4)	(0.7)	(1.77)	黒曜石	小片。白濁面入。高麗山産か。	覆土
	79	剥片か		(1.9)	(1.4)	(0.8)	(2.43)	チャート	小片。	覆土
	34	小礫		3.4	2.5	1.5	15.72		焼熱により赤色変化。	覆土

表 64 第 52 号土坑石器・礫観察表

[単位: cm・g]

検出	通し番号	種類	分類・形状	長さ	幅	厚さ	重量	石材	特徴	出土位置
	35	小礫		(4.2)	(3.2)	1.9	(30.01)		礫石器 (F) に似る。稜状破砕断面。磨滅して塊状か。	覆土

表 65 第 87 号土坑石器・礫観察表

[単位: cm・g]

検出	通し番号	種類	分類・形状	長さ	幅	厚さ	重量	石材	特徴	出土位置
	70	小礫		9.9	9.4	3.6	491.68		平面台形状。扁平。折+割離。割離部分を除き赤色変化。磨滅。	覆土
	67	小礫塊		(9.0)	(4.2)	(2.8)	(70.91)		小片。残存する自然面。磨滅及びスス付善。	覆土
	69	小礫塊		(9.3)	(6.8)	(5.6)	(430.78)		断面三角形の稜状。礫の端部か。底面平坦。全面磨滅。	覆土

表66 第100号土坑石器・礫観察表

[単位: cm・g]

検出	通し番号	種類	分類・形状	長さ	幅	厚さ	重量	石材	特徴	出土位置
	513	礫		24.5	13.5	12.8	5540.90		平面長方形状、断面歯状、片側端部及び一側面被熱により赤色変化、砂付か。	%4
	514	礫		23.5	9.5	10.5	2480.00		平面、線長い三角形状、断面三角形状、底面ヌメか。	%5
	530	小礫塊		(6.8)	(6.3)	(2.1)	(98.46)		小片、残存する自然面磨滅、赤色変化か。	覆土

表67 第110号土坑石器・礫観察表

[単位: cm・g]

検出	通し番号	種類	分類・形状	長さ	幅	厚さ	重量	石材	特徴	出土位置
	414	剥片		(2.3)	(1.7)	(0.7)	(1.88)	チャート	菱形状の小片。石鏝、石鏝の未製品か。	覆土
I	191	打片	A1 ①I	(11.0)	8.0	(1.4)	(170.37)		成形調整の歩調、種ら、全体的に磨滅顕著。製品か未製品か不詳。	%1
	126			(15.4)	(13.8)	(7.1)	(1325.85)	安山岩	多孔質の自然磨片か、自然面磨滅。	覆土

表68 第112号土坑石器・礫観察表

[単位: cm・g]

検出	通し番号	種類	分類・形状	長さ	幅	厚さ	重量	石材	特徴	出土位置
	142	石鏝	I Ad	(18.3)	(4.3)	(3.8)	744.06	安山岩系		覆土
	144	剥片		(4.6)	(2.7)	(0.9)	(10.83)	チャート	表面、中心部右よりに浅、裏面平坦、刃部の調整なし。	覆土
9	148	礫石器	A1 2②ア	10.4	7.6	3.3	347.80		裏面平坦、全面磨滅。	覆土
	145	礫石器	(B) 1 2②ア	(9.8)	(7.3)	5.0	(491.06)	石英含有輝石安山岩	2/3残。表裏面磨滅。	覆土
	149	小礫		(6.1)	4.3	3.0	(108.61)		礫石器 (F) に似る。全体的に磨滅。	覆土
	146	小礫		6.5	5.9	3.4	137.82		礫石器 (F) に似る。全体的に磨滅。	覆土
	139	小礫		11.1	7.4	4.9	493.90	流紋岩か	礫石器 (G) に似る。全面的に磨滅。	覆土
	141	礫		13.6	8.2	6.4	838.56	石英斑岩	礫石器 (G) に似る。全面的に磨滅。	%12
	140	小礫塊		(12.7)	(8.1)	(2.4)	(206.64)		小片、残存する自然面磨滅。石量片か。	%11

表69 第128号土坑石器・礫観察表

[単位: cm・g]

検出	通し番号	種類	分類・形状	長さ	幅	厚さ	重量	石材	特徴	出土位置
I	541	石鏝	I Bc	(24.8)	24.7	9.1	6200.00	輝石安山岩	表面平坦であるが、右半部やや凹む、全面磨滅、鋭上下端欠損。	覆土
	542	小礫		7.4	6.9	3.4	242.67		礫石器 (F) に似る。裏面凹む。磨滅あり。	覆土
	547	小礫		11.8	6.7	5.5	500.29		礫石器 (F) に似る。二面で磨滅して平坦。	覆土
	545	礫		15.5	13.4	5.5	1282.51		礫石器 (F) に似る。底面磨滅して平坦。	覆土
	554	礫		11.9	8.2	4.0	532.88		礫石器 (G) に似る。長方形状。全体的に磨滅。	覆土
	555	礫		10.5	9.5	6.0	774.19		礫石器 (F) に似る。底面磨滅して、平坦。全体的に磨滅。	覆土
	551	礫		11.3	9.8	5.6	905.99		長方形状。左右側面平がかりとなる凹みあり。全面磨滅。	覆土
	548	礫		13.8	11.3	8.2	1728.80	無鋸晶質安山岩	立方形状。不整形磨滅。全体的にやや磨滅。左右側面に平がかりとなる凹みあり。	覆土
		礫		16.7	14.4	10.1	3200.00		礫石器 (F) に似る。全面磨滅。底面磨滅して平坦。	覆土
	553	礫		19.9	14.8	5.6	2640.00		平面三角形状。平坦。表裏面磨滅。石量の可能性あるか。	覆土
	549	小礫塊		(2.9)	(2.3)	(1.7)	(12.07)	流紋岩	小片。磨滅あり。	覆土
	552	礫塊		(11.1)	(8.9)	(3.8)	(412.00)		平面三角形状、扁平。不整形。残存する自然面は磨滅。	覆土
	550	礫塊		(11.8)	(9.7)	(7.7)	(930.05)	流紋岩	不整形。磨滅あり。	覆土
	544	礫塊		(17.0)	(16.4)	(7.5)	(2476.00)	火山礫凝灰岩	長方形の1/2程度残か。平坦な自然磨片か。	覆土
	546	礫塊		(16.4)	(13.8)	10.0	(2075.50)		礫石器 (F) に似る。頂部欠。底面磨滅して平坦。全面磨滅。	覆土

表70 第133号土坑石器・礫観察表

[単位: cm・g]

検出	通し番号	種類	分類・形状	長さ	幅	厚さ	重量	石材	特徴	出土位置
2	514	打片		(8.3)	(6.9)	(1.9)	(110.68)	砂岩	形状不明。未製品か。決り部を中心に割傷を加える。	%2
3	509	礫石器	AII 2①ア	11.9	8.2	4.2	632.26	輝石安山岩	側面片側が厚く、片側が薄い、厚みのある側面。中央縦打痕か。全面磨滅。	%3
	510	小礫		3.3	2.9	1.8	23.03	安山岩	礫石器 (F) に似る。全面磨滅。	%4
	518	礫		14.1	11.3	6.1	(118.19)		平面、有形状。断面三角形状。五面とも不整で凸凹あり。磨滅。	%12
	517	礫塊		(11.5)	(10.4)	(4.8)	(505.00)		不整形。平坦な磨滅面残る。	%11

第3章 確認された遺構と遺物

検出	通し番号	種類	分類・形状	長さ	幅	厚さ	重量	石材	特徴	出土位置
	571	礎		12.4	(7.1)	(2.8)	269.74		長円形か、磨滅面残る。	N5
	515	礎		(16.4)	(6.4)	(6.0)	(449.56)		残存する2面は平坦で磨滅する。	N9
	516	礎		(21.0)	(12.7)	(8.0)	(1856.43)		1/2程度残か、磨滅面残る。	N10
	512	礎		(18.9)	(15.4)	(8.4)	(1500.00)	ダイタイト	1/2程度残か、赤色変色と剥離を伴う。伊材料か。	N6
	513	礎		(21.4)	(8.0)	10.8	(2440.00)	輝石安山岩	やや歪形状。端部赤色変色。伊材料か。	N7

表 71 第135号土坑石器・礎観察表

[単位: cm・g]

検出	通し番号	種類	分類・形状	長さ	幅	厚さ	重量	石材	特徴	出土位置
	492	小礫		(7.6)	(6.1)	(4.5)	(237.53)		端部欠損。礫石器 (7) に似る。全面磨滅。	N10
	490	小礫		10.1	10.0	3.6	453.57		礫石器 (1) に似る。裏面不整。破砕あり。	N8
	494	小礫		(16.3)	(11.6)	(2.0)	(318.71)		平面富士山形。扁平、全面磨滅。打坪の石材か。	N11
	493	小礫		14.7	16.3	3.5	856.83		平面台形状。扁平、全面磨滅。	N12
	491	礫		(27.3)	21.2	15.0	(10450.00)		平面。断面、三角形状。ほぼ全面磨滅か。所々表面の剥離あり。伊材料か。	N9
	489	小礫塊		13.3	(13.0)	7.5	(1270.55)		平面台形状。端部及び表面赤色変色。伊材料か。	N7

表 72 第138号土坑石器・礎観察表

[単位: cm・g]

検出	通し番号	種類	分類・形状	長さ	幅	厚さ	重量	石材	特徴	出土位置
1	557	礫石器	AII 2Dア	11.3	7.3	4.3	531.26	輝石安山岩	右側面の浅い印みは敲打痕か、全面磨滅。断面やや三角形状。	N1
2	560	石皿	IB C-1	41.8	30.3	8.8	13550.00	多孔質輝石安山岩	表面両縁縁やかに傾斜。外形加工か。磨面平坦。右側面に凹孔列か。裏面左側面にかけて傾斜する。	N2
	564	小礫		5.6	3.6	2.5	64.89	ダイタイト	礫石器 (9) に似る。磨滅あり。汚れ付着。	礎土
3	556	小礫		11.6	5.3	3.3	321.18		塊状。片面平坦。磨滅あり。礫石器か。	N3
	563	小礫塊		(7.0)	(3.1)	(2.9)	(93.93)		小片。自然石か、磨滅。	礎土
	562	小礫塊		(7.3)	(4.5)	(2.8)	(88.22)		小片。ススは付着。	礎土
	565	小礫塊		(16.1)	(5.7)	(1.1)	(51.74)	砂岩	断面方向に破砕。	礎土
	566	小礫塊		(8.4)	(7.8)	(1.2)	(68.47)	砂岩	断面方向に破砕。	礎土
4	558	小礫塊		(12.4)	(8.7)	(4.0)	(457.77)		小片。残存する自然面平坦。石皿片か。	N4
5	559	小礫塊		(14.8)	(9.2)	(5.8)	(964.46)	黒青石ホルンフェルス	自然石か。	N5
	561	礫塊		(16.0)	(12.8)	7.6	(2140.00)	ダイタイト	長形塊。1/2程度残か。破断面も含め全面赤色変色。伊材料か。	礎土

表 73 第140号土坑石器・礎観察表

[単位: cm・g]

検出	通し番号	種類	分類・形状	長さ	幅	厚さ	重量	石材	特徴	出土位置
3	576	礫石器	AII 2Dア	9.6	9.4	5.1	6695.80	輝石安山岩	全面磨滅。裏面に顕著。	N3
4	577	石皿	IB C-1	(33.7)	(27.7)	10.3	(10000.00)	輝石安山岩	上端部破砕。左下部欠損。左側面から右側面へ傾斜。下縁は厚としりか。裏面平坦。	N4
	575	礫石器か		12.9	6.9	3.8	542.98		礫石器 (A) に似る。断面やや三角形状。裏面磨滅し平坦。	N5
	580	小礫塊		(7.3)	(2.5)	(1.9)	(27.63)		小片。残存する自然面は平坦。石皿片か。	礎土
	579	小礫塊		(7.2)	(6.3)	(3.8)	(164.57)		小片。円形状か。残存する自然面は平坦。磨石片か。	N7
	578	礫塊		(26.0)	(18.8)	(10.3)	(4980.00)		1/2程度残か。表面破砕。裏面磨滅顕著。石皿か。	N6

表 74 第152号土坑石器・礎観察表

[単位: cm・g]

検出	通し番号	種類	分類・形状	長さ	幅	厚さ	重量	石材	特徴	出土位置
1'	297	磨石	AII 2Dア	13.4	8.9	4.5	796.34		磨面片面。	礎土
	290	小礫塊		(5.3)	(5.4)	(1.6)	(34.00)	ダイタイト質礫岩	小片。大きく割断する。打坪材か。	礎土

表 75 第159号土坑石器・礎観察表

[単位: cm・g]

検出	通し番号	種類	分類・形状	長さ	幅	厚さ	重量	石材	特徴	出土位置
	298	割片		(2.8)	(2.6)	(1.0)	(6.87)	チャート	小片。	礎土

表76 第160号土坑石器・礫観察表

[単位: cm・g]

検出	通し番号	種類	分類・形状	長さ	幅	厚さ	重量	石材	特徴	出土位置
	216	剥片	(2.7)	(2.5)	(0.6)	(4.8)		チャート	小片。	覆土
		礫石器か		4.1	3.8	2.5	(27.40)		小片。残存する自然面磨滅。	覆土

表77 第161号土坑石器・礫観察表

[単位: cm・g]

検出	通し番号	種類	分類・形状	長さ	幅	厚さ	重量	石材	特徴	出土位置
10	190	礫石器		(14.7)	(8.5)	(4.0)	(539.49)	砂岩	脆弱で形状不明。図示した形状でも剥落した形状か、あるいはドーナツ形となるが。表面は人為的とみられる凹孔を有する。	%10
11	1329	石皿	I Aa	26.1	24.5	10.8	13950.00		表面、周縁内側をU字状に削りこぼめる。図下縁は落としか。	%11
	188	石皿	II B4	(16.2)	(15.5)	(11.5)	(3880.00)		外面加工により、長方形状を作出か。片面端部隆。表裏面凹孔あり。	覆土
12	187	礫		(32.1)	25.2	18.0	(13950.00)	石英含有輝石安山岩	平面、三角形状。底面平坦。片面に赤色変化あり。鮮やか。	%12
	191	小礫		3.9	3.8	1.2	20.54	流紋岩	平面、角張ったハート形状。下縁裏面に剥落。石鏝を差込か。	覆土
	189			11.8	9.2	5.0	683.98	黒雲母角閃石花崗岩	長門形。平坦。ややく礫石器(1)状。底面凹状に反る。全面磨滅。	覆土

表78 第162号土坑石器・礫観察表

[単位: cm・g]

検出	通し番号	種類	分類・形状	長さ	幅	厚さ	重量	石材	特徴	出土位置
2	193	小礫		6.2	4.4	1.6	50.93	頁岩	平面三角形状。扁平。表面周縁は剥離後磨滅か。石鏝等の木製品か。	覆土
3	194	小礫		5.8	4.5	1.8	38.07	輝石安山岩	長門形。扁平。全面磨滅。石鏝等への利用を要因か。	覆土
	195	小礫		8.8	2.8	2.3	71.21		礫石器(10)に似る。全面的に磨滅。	覆土

表79 第173号土坑石器・礫観察表

[単位: cm・g]

検出	通し番号	種類	分類・形状	長さ	幅	厚さ	重量	石材	特徴	出土位置
6	225	礫石器	I 1②ア	(6.1)	(5.8)	(3.3)	(169.38)	石英含有輝石安山岩	1/2残。形状不明。断面三角形状。底面凹孔あり。全面磨滅。	覆土
7	224	礫石器	A I 1②ア	10.8	8.3	4.3	594.91	玄武岩質安山岩	全面磨滅。凹孔。表裏面。	覆土
	226	小礫塊		(5.1)	(3.7)	(2.2)	(45.16)		小片。被熱により赤色変化。	覆土

表80 第183号土坑石器・礫観察表

[単位: cm・g]

検出	通し番号	種類	分類・形状	長さ	幅	厚さ	重量	石材	特徴	出土位置
1	388	礫石器	A II 2②ア	12.6	7.6	4.8	586.98	輝石安山岩	全面磨滅。	覆土

表81 第185号土坑石器・礫観察表

[単位: cm・g]

検出	通し番号	種類	分類・形状	長さ	幅	厚さ	重量	石材	特徴	出土位置
	590	礫石器か	F 2②ア	6.6	5.3	3.6	141.71	輝石安山岩	底面磨滅顕著で、直線的に平坦。切削後磨滅か。	覆土 第73_44
	589	礫石器か	B 2②ア	12.0	8.8	5.5	482.07		断面三角形状で底面磨滅して平坦。	覆土 第73_49

表82 第78号ビット石器・礫観察表

[単位: cm・g]

検出	通し番号	種類	分類・形状	長さ	幅	厚さ	重量	石材	特徴	出土位置
	880	剥片		(3.6)	(2.8)	(0.9)	(8.93)	チャート	小片。	覆土
	878	小礫塊		(3.0)	(1.2)	(1.2)	(4.92)		小片。自然面の残存しながら。赤色変化。	覆土

表83 第79号ビット石器・礫観察表

[単位: cm・g]

検出	通し番号	種類	分類・形状	長さ	幅	厚さ	重量	石材	特徴	出土位置
1	485	礫石器	Ah II 2①ア	6.2	5.5	4.2	175.42	輝石安山岩	側面は研磨か。上部端打痕か。全面で磨滅。	覆土
3	472	礫石器	A I 2②ア	11.5	8.2	4.5	629.42	輝石安山岩	表面や丸みあり。全面磨滅するが裏面に顕著。	覆土
2	473	礫石器	B I 2②ア	10.3	9.8	4.6	667.84	輝石安山岩	全面磨滅するが裏面に顕著。	覆土
5	483	礫石器	B I 1②ア	10.1	9.3	(5.2)	(544.82)		裏面約1/2剥落。脆弱。表面磨滅。中央部に凹孔。	覆土
6	477	礫石器	B I 2②ア	9.3	10.0	5.4	767.25	輝石安山岩	全面磨滅。表裏面とも顕著。	%6
4	487	礫石器か	I 2②ア	16.2	7.5	4.2	797.07	流紋岩	全面磨滅するが表裏面に顕著。	覆土

第3章 確認された遺構と遺物

検出	通し番号	種類	分類・形状	長さ	幅	厚さ	重量	石材	特徴	出土位置
7	475	石皿か	B04	12.8	13.3	3.7	1426.45	輝石安山岩	表面とも磨滅跡。側面、破砕後磨滅か。	覆土
	471	磨		(13.6)	7.9	4.6	(630.71)		礫石器(A)に似る。片側部欠。全面磨滅。	覆土
	481	磨		4.1	3.3	1.9	27.92		礫石器(F)に似る。底面以外磨滅。	覆土
	482	磨		5.5	4.6	2.5	71.95		礫石器(F)に似る。全面磨滅するが、底面同い。	覆土
	474	磨		7.1	4.2	3.1	115.29		礫石器(F)に似る。全面磨滅するが底面に磨滅。	№13
	478	磨		9.8	4.1	3.7	303.96		礫石器(H)に似る。全面磨滅。	覆土
	480	磨		10.8	10.8	5.5	810.84		礫石器(H)に似る。全面磨滅。	覆土
	479	磨		13.7	9.6	7.5	1351.40		礫石器(H)に似る。全面磨滅。	覆土
	469	磨		(13.1)	8.9	4.5	646.45		礫石器(1打形)に似る。端部欠損。全面磨滅するが薄い。	覆土
	470	小礫塊		(6.6)	(4.2)	(2.4)	(80.93)		小片。残存する自然面は磨滅。	覆土
	476	小礫塊		(12.9)	(8.2)	3.2	(425.69)		扁平。片面着色変化。	№12
	484	小礫塊		(12.4)	(6.9)	(2.2)	(165.87)	砂岩	扁平。底石か。熱熱による色変変化か。	覆土

表 84 第 89 号ビット石器・礫観察表

[単位: cm・g]

検出	通し番号	種類	分類・形状	長さ	幅	厚さ	重量	石材	特徴	出土位置
	879	小礫塊		(9.8)	(4.2)	(3.5)	(169.28)	ホルンフェルスか	小片。	覆土

表 85 第 94 号ビット石器・礫観察表

[単位: cm・g]

検出	通し番号	種類	分類・形状	長さ	幅	厚さ	重量	石材	特徴	出土位置
	490	剥片		(3.4)	(2.1)	(1.5)	(11.31)	チャート	小片。自然面残る。	覆土
	479	剥片		(3.5)	(2.8)	(0.8)	(7.78)	チャート	小片。自然面残る。	覆土

表 86 第 164 号ビット石器・礫観察表

[単位: cm・g]

検出	通し番号	種類	分類・形状	長さ	幅	厚さ	重量	石材	特徴	出土位置
	209	剥片		(3.6)	(2.1)	(1.0)	(5.32)	チャート	小片。	覆土
	299	小礫塊		(8.1)	(5.6)	(3.6)	(95.33)	安山岩	小片。わずかに残る自然面は磨滅。	№3

表 87 第 170 号ビット石器・礫観察表

[単位: cm・g]

検出	通し番号	種類	分類・形状	長さ	幅	厚さ	重量	石材	特徴	出土位置
	221	小礫		5.7	5.6	2.4	102.15		礫石器(F)に似る。底面平坦で磨滅。	覆土
	218	磨		12.3	8.9	4.6	424.05	輝石安山岩	礫石器(A)に似る。不整形。軽量。	覆土
	219	磨		17.1	9.2	8.2	1504.82		礫石器(F)に似る。部分的に着色変化か。	覆土
	223	磨		5.7	2.4	(1.5)	(28.52)		破砕後、磨滅か。残存する自然面は磨滅。	覆土
	217	小礫塊		(6.0)	(5.7)	(2.0)	150.28	ホルンフェルスか	小片。破砕面のみ残。	覆土
	222	小礫塊		(7.4)	(3.9)	(2.3)	(78.45)		小片。バナナ形か。着色変化か。	覆土
	220	小礫塊		(9.1)	(6.4)	(3.5)	(208.36)		小片。残存する自然面は着色変化。スス付着。	覆土

表 88 第 172 号ビット石器・礫観察表

[単位: cm・g]

検出	通し番号	種類	分類・形状	長さ	幅	厚さ	重量	石材	特徴	出土位置
	441	剥片		(6.2)	(4.4)	(1.0)	(32.12)	By(ter)	扇形に破砕。自然面残る。	覆土
	1309	磨		8.5	6.5	4.6	268.10		礫石器(F)に似た不整形。底面凹状に反る。	覆土
	1308	磨		12.1	7.6	4.6	405.73	輝石安山岩	礫石器(F)に似た不整形。底面凹状に反る。	覆土
	1307	磨		(11.4)	10.7	4.7	670.33	デイトライト質輝石岩	礫石器(I)に似る。底面凹状に反る。	覆土
	1310	磨		6.7	4.8	3.4	126.03		不整形。	覆土
	1311	小礫塊		5.5	(4.3)	(3.3)	(66.81)		小片。右直。あるいは礫石器の小片か。	覆土

表 89 第 163 号埋設土器石器・礫観察表

[単位: cm・g]

検出	通し番号	種類	分類・形状	長さ	幅	厚さ	重量	石材	特徴	出土位置
	200	剥片		(3.2)	(2.5)	(0.9)	(6.69)	チャート	扇形の薄片。自然面残る。	覆土
7	438	礫石器	№B 1(2)ア	11.2	10.5	5.1	843.73	多孔質輝石安山岩	側面に磨滅面あり。表面とも凹孔か。	№7
	440	小礫		(3.7)	5.7	1.9	(24.99)		礫石器(F)に似る。底面平坦で磨滅。	№9
	206	磨		8.3	7.8	3.9	338.39		礫石器(1打形)に似る。底面凹状に反る。全面磨滅。	覆土
	297	磨		25.5	20.0	11.0	8160.00		全面磨滅。礫石器か。	覆土
	208	小礫塊		(7.8)	(6.5)	(4.3)	(234.18)		小片。わずかに残存する。自然面は平坦。	覆土
	439	小礫塊		9.5	5.8	4.3	244.32		スス付着。	№8
	208	磨塊		(18.2)	16.1	8.0	(2080.00)		1/2程度残るか。着色変化あり。凹孔か。	№21 下部

表90 第1号溝状遺構石器・礫観察表

(単位: cm・g)

検出	通し番号	種類	分類・形状	長さ	幅	厚さ	重量	石材	特徴	出土位置
	765	剥片		(3.2)	(6.0)	(1.3)	(12.17)		楕形の小片。自然面を残す。	覆土
3	777	礫石器	A目 2②ア	6.7	4.8	4.3	171.72	輝石安山岩	断面球形に近い。全面磨滅。	覆土
	791	小礫		4.2	2.7	1.0	24.15		不整な長門形。扁平。	覆土
	781	小礫		4.1	3.3	1.2	22.61		長門形。扁平。	覆土
	767	小礫		(4.9)	(4.5)	(1.6)	(37.38)		裏面割面。長門形。	覆土
	778	小礫塊		(5.3)	3.2	1.8	(40.16)		楕圓形。平面磨滅。断面、三角形状。斜辺磨滅。	覆土
	796	小礫塊		(5.5)	(5.2)	(2.4)	(67.90)		小片。残存する自然面は磨滅し平坦。	覆土
	792	小礫塊		(6.3)	(5.9)	(0.8)	(29.47)		小片。残存する自然面は磨滅し平坦。礫石器か。	覆土
	758	小礫塊		(7.2)	(3.9)	(1.1)	(30.66)	ホルンフェルス	小片。	覆土
	769	小礫塊		(3.2)	(2.8)	(1.0)	(11.15)	ホルンフェルス	小片。	覆土
	807	小礫塊		(4.5)	(3.3)	(0.8)	(11.72)	ホルンフェルス	小片。	覆土
	766	小礫塊		(8.7)	(6.5)	(1.9)	(67.31)		小片。残存面。赤色変化。	覆土
	757	小礫塊		(5.7)	(6.0)	(1.8)	(63.81)		小片。残存面。赤色変化。	覆土

表91 第37号溝状遺構石器・礫観察表

(単位: cm・g)

検出	通し番号	種類	分類・形状	長さ	幅	厚さ	重量	石材	特徴	出土位置
	454	礫石	D目 2②ア	13.8	7.4	5.7	605.09	輝石安山岩	断面、片面。被熱による赤色変化。	ベルト中
	453	礫石	B目 2②ア	9.6	4.7	3.9	264.8			覆土
	324	剥片		(4.1)	(2.8)	(1.3)	(18.46)	チャート	小片。自然面残る。	覆土
	330	剥片		(3.3)	(3.5)	(0.7)	(6.20)	チャート	小片。薄い。	覆土
	331	剥片		(2.3)	(2.3)	(0.7)	(2.25)	頁岩	小片。自然面残る。	覆土
	345	剥片		(1.8)	(1.8)	(1.0)	(2.64)	赤玉石	小片。自然面残る。	覆土
	336	剥片		(4.0)	(2.7)	(1.3)	(12.23)	チャート	小片。自然面残る。	覆土
	328	剥片か		(3.1)	(2.3)	(1.0)	(1.87)		小片。自然面残る。	覆土
	342	小礫塊		(3.3)	2.5	1.6	(6.65)	チャート	小片。	覆土
	325	小礫塊		(5.8)	(5.0)	(2.1)	(49.62)		小片。残存する自然面。平坦。石蓋片か。	覆土
	253	小礫塊		(6.2)	(5.8)	(1.8)	(60.79)		小片。残存する自然面。平坦。石蓋片か。	覆土
	333	小礫塊		(12.1)	(4.2)	(3.7)	(164.55)		小片。残存する自然面。平坦。石蓋片か。自然面。縦断面。赤色変化。	覆土
	332	小礫塊		(10.5)	(6.3)	(4.9)	(228.40)		小片。残存する自然面は磨滅。	覆土

表92 第49号溝状遺構石器・礫観察表

(単位: cm・g)

検出	通し番号	種類	分類・形状	長さ	幅	厚さ	重量	石材	特徴	出土位置
	4	剥片		(2.8)	(1.2)	(0.5)	(1.95)	チャート	小片。自然面残る。	覆土
	3	剥片		(3.2)	(2.3)	(0.9)	(5.70)	頁岩	小片。自然面残る。	覆土
2	1	打穿	B目?	(11.0)	(6.3)	(2.2)	(130.79)		自然面(磨滅した破砕面)残る。調整も確ら。刃部も自然面残るが鋭利であり、このまま使用か。	覆土
3	2	礫石		(7.0)	(1.8)	(0.8)	(12.18)	粘土岩	断面の一部を押し破砕。平面断面不明。	覆土
	8	礫石		(6.3)	(5.3)	(2.8)	(84.70)		小片。縦断面は残存しないが、礫石か。	覆土
	7	小礫塊		(5.3)	(3.5)	(3.0)	(42.63)		小片。石蓋片か。	覆土
	5	小礫塊		(8.8)	(6.2)	(5.3)	(336.47)		破砕した自然石か。	覆土
	18	その他の礫		(3.1)	(2.4)	(0.5)	(4.29)	ホルンフェルス系	打穿石器原料破片か。	覆土

表93 第64号溝状遺構石器・礫観察表

(単位: cm・g)

検出	通し番号	種類	分類・形状	長さ	幅	厚さ	重量	石材	特徴	出土位置
	451	剥片		(5.0)	(4.6)	(3.5)	(83.11)		楕圓形で自然面が残る。母岩か。	覆土
	449	小礫塊		(10.0)	(10.4)	(2.7)	(471.33)		1/2程度破片。長門形状の扁平。左側端部に3ヶ所。上端部に1ヶ所割面あり。打穿等の作出の意図があったか。表面面磨滅。	覆土
	452	小礫塊		(9.6)	(7.7)	(4.8)	(242.97)		3ヶ所が接合。縦断面は自然色とみられるが赤色。	覆土
	450	小礫塊		(11.1)	(8.0)	(5.2)	(504.84)		縦石部(B)に似るが破砕。自然面磨滅。	覆土

表94 第83号溝状遺構石器・礫観察表

(単位: cm・g)

検出	通し番号	種類	分類・形状	長さ	幅	厚さ	重量	石材	特徴	出土位置
	439	礫石	D1 2②ア	4.1	3.8	3.1	63.30	輝石安山岩	断面片面。	覆土
	445	剥片		(2.4)	(2.3)	(0.4)	(2.60)		小片。自然面残る。	覆土
	447	その他の礫		(5.0)	(3.7)	(1.1)	(13.90)	安山岩系	礫石破砕片か。	覆土
	450	その他の礫		(2.4)	(2.1)	(0.8)	(4.71)	粘板岩	小片。	覆土
	449	その他の礫		(1.8)	(0.9)	(0.6)	(1.26)	礫石英か	小片。	覆土

表 95 第3号古墳石器・礫観察表

[単位: cm・g]

検出	通し番号	種類	分類・形状	長さ	幅	厚さ	重量	石材	特徴	出土位置
	614	剥片		(3.9)	(4.3)	(0.7)	(16.51)	チャート	小片。扁平、自然面残る。	覆土
	615	剥片		(4.7)	(3.0)	(1.2)	(15.90)	チャート	小片。スクレイパーあるいは基部のある石鏝を意図か、調整面残る。	覆土
	620	礫石器	ⅡB 2②ア	6.3	5.6	4.4	172.44		全面磨滅。	覆土
	661	礫石器	ⅡB 2②ア	(7.0)	4.3	4.7	(142.56)	頁岩か	破片、緻密な石質。全面磨滅。	覆土
30	664	礫石器	AⅠ 2②ア	10.2	7.3	5.0	557.19	輝石安山岩	全面磨滅。	覆土
31	593	礫石器	AⅡ 2②ア	10.8	7.2	5.0	628.03	輝石安山岩	長方形状、左右側面は研磨により作出か。全面磨滅顯著。	覆土
32	663	礫石器	AⅡ 2②ア	9.4	7.7	4.2	412.58	輝石安山岩	平面やや卵形、全面磨滅。	覆土
33	665	礫石器	AⅡ 2①ア	10.5	8.7	4.6	568.36	輝石安山岩	やや円形。下端、右側は敲打痕か。	覆土
34	591	礫石器	AⅡ 1ア	(14.1)	8.5	4.3	(815.51)	輝石安山岩	端部欠。表面面に浅い凹孔あり。	覆土
36	592	石皿か 礫石器か		14.2	12.8	3.5	811.10	石英含有輝石安山岩	円形。扁平。表面とも平坦で磨滅顯著。	覆土
35	636	石皿か 礫石器か		16.2	13.5	4.3	1501.75	輝石安山岩	やや三角形状。扁平。表面とも平坦。	覆土 №18 F
37	594	石皿か 礫石器か		18.1	10.7	5.5	1503.56	輝石安山岩	表面とも磨滅。表面縁やかに傾斜。	覆土
38	666	石皿	I Aa	(16.2)	(7.4)	(6.8)	(832.93)	輝石安山岩	上端は縁がなく傾斜する。薄とし口か。	覆土
40	617	石皿か	ⅡCd	25.8	20.3	7.8	5960.00	輝石安山岩	右側面は切削により外形加工か。表面左側部は縁やかに傾斜する。	覆土
	637	石皿か	ⅡCd	(11.6)	(10.8)	(7.3)	(1136.88)		破片、表面面平坦で磨滅。スス付着。	№47
	606	石皿片か		(7.8)	(3.0)	(1.7)	(40.00)		小片。	覆土
	608	石皿片か		(7.2)	(4.8)	(3.1)	(74.73)		小片。	覆土
	633	石皿片か		(10.1)	(5.2)	(4.0)	(138.59)		小片。破断面を含み赤色変化。	覆土 №17 F
	690	石皿片か		(7.0)	(5.1)	(3.7)	(121.90)		小片。	覆土
	597	石皿片か		(8.2)	(6.5)	(5.0)	(178.65)		小片。	覆土
		石皿片か		(6.5)	(2.9)	(2.8)	(76.53)		小片。	覆土
39	613	小礫		7.3	1.4	0.9	15.46		塊状。表面、側面、切削後研磨か。裏面自然面残る。	覆土
	618	小礫		(10.3)	7.3	(5.3)	(440.61)		礫石器⑩に似る。断面三角形状。	覆土
	660	小礫		13.7	5.2	3.4	291.22		礫石器⑩に似る。断面三角形状。	覆土
	602	小礫		6.7	5.8	3.2	156.91		礫石器⑩に似る。	覆土
	646	小礫		8.2	7.5	5.3	490.54		礫石器⑩に似る。	覆土 №19 F
	647	小礫		9.3	6.8	5.4	440.07		礫石器⑩に似る。	覆土 №19 F
	649	小礫		11.0	9.3	7.6	922.89		礫石器⑩に似る。赤色変化。	覆土 №19 F
	642	小礫		11.2	9.5	6.3	676.42		礫石器⑩に似る。赤色変化。	№53
	630	小礫		14.3	10.0	5.3	1082.32		礫石器⑩に似る。	覆土 №11 F
	631	礫		15.6	7.8	5.3	686.76		礫石器⑩(釘形)に似る。	覆土
	639	礫		13.2	10.3	8.3	992.69		礫石器⑩(釘形)に似る。厚みあり。	№49
	632	礫		9.4	8.6	5.5	652.43		平面台形状。断面方形状。	№44
	638	礫		14.2	12.8	9.2	2240.00		やや礫石器⑩に似る。	№48
	640	礫		(12.2)	(9.3)	(6.8)	(710.74)		やや礫石器⑩に似る。	№50
	894	礫		14.5	10.8	7.6	1600.53		礫石器⑩に似る。	覆土
	645	礫		21.3	18.2	9.9	4550.00		礫石器⑩に似る。	覆土 №19 F
	647	礫		18.2	10.7	8.3	1823.65		礫石器⑩に似る。赤色変化。	覆土
	656	礫		32.5	14.8	9.7	6900.00		長方形状。表面磨滅。端部に向け傾斜。裏面、表面鈍磨。石皿か。	覆土
	655	礫		32.5	(31.3)	(14.2)	(18900.00)		石皿に似る。	覆土
41	654	礫		(38.2)	(27.7)	17.7	21490.00		平面三角形状。上下面とも中央一段低く、平坦。全面磨滅するが、底面に顕著。石皿か。	覆土
	586	礫		(24.0)	16.7	7.7	(4340.00)	デイサイト	平面、三角形状。赤色変化顕著。石材か。	覆土
	653	礫		(48.8)	16.4	14.2	(17450.00)		塊状。平面台形状。赤色変化。S-1119石S-3.4に似る。2片が接合。	№51
	621	小礫塊		(9.0)	(7.3)	(5.3)	(374.31)		不整形	覆土
	622	小礫塊		(11.0)	(12.4)	(5.1)	(326.06)		不整形	覆土
	648	小礫塊		(9.4)	(8.3)	(4.5)	(600.46)		不整形	覆土 №19 F
	643	小礫塊		(10.8)	(6.4)	5.0	(383.46)		不整形。磨滅。	№54
	650	小礫塊		(13.2)	7.8	4.8	(574.92)		長円形状。磨滅。	覆土 №19 F
	662	小礫塊		(6.8)	(4.5)	(3.2)	(71.25)		小片。赤色変化。	覆土

詳細	通し番号	種類	分類・形状	長さ	幅	厚さ	重量	石材	特徴	出土位置
	619	小礫塊		(9.3)	(5.3)	4.7	(269.63)		小片、赤色変化。	層土
	635	小礫塊		(8.6)	5.4	4.3	(176.53)		小片、赤色変化。	層土 No18下
	658	小礫塊		(10.3)	7.8	5.0	(530.42)		小片、赤色変化。	層土
	896	小礫塊		(20.4)	(11.8)	(8.3)	(2032.96)		表面面、平坦で磨滅。石晶片か。	層土
	995	小礫塊		(18.5)	(15.6)	(5.5)	(1989.00)		表面面、平坦で磨滅。石晶片か。	層土
	634	礫塊		(23.4)	(17.4)	(15.8)	(6946.00)	蘆青石ホルンフェルス	自然面磨滅。砥石か。	No45
	616	礫塊		(27.0)	(12.0)	(10.3)	(6095.00)		赤色変化、割材か。	層土
	644	礫塊		(28.5)	(25.5)	(13.8)	(11106.00)	輝石安山岩	破断面のみ赤色変化、割材か。	層土
	641	小礫塊		(4.7)	(1.7)	(1.5)	(11.34)	ホルンフェルス	小片、打穿石材か。	層土
	641	小礫塊		(3.9)	(2.2)	(2.9)	(283.96)	ホルンフェルス	小片、打穿石材か。	No52
	629	小礫塊		(2.5)	(1.3)	(0.8)	(2.57)	ホルンフェルス	小片、打穿石材か。	層土
	629	小礫塊		5.9	4.5	1.8	77.82		石塊状。	層土
	612	小礫塊		12.7	(9.9)	(3.0)	(265.90)		砥石か。	層土

表 96 第26号古墳石器・礫観察表

[単位: cm・g]

詳細	通し番号	種類	分類・形状	長さ	幅	厚さ	重量	石材	特徴	出土位置
10	677	石塊		(3.7)	(2.5)	(0.5)	(4.82)	チャート	下端に自然面残る。未製品か。	層土
	732	割片		(2.7)	(2.0)	(0.8)	(3.81)	チャート	小片。	層土
	704	割片		(2.8)	(2.1)	(0.9)	(5.55)	チャート	小片、自然面多。	層土
	703	割片		1.6	1.3	0.6	1.54	チャート	小片。	層土
	698	割片		(2.3)	(2.2)	(0.6)	(3.60)	砂岩	小片。	層土
	691	割片		(2.8)	(1.9)	(1.5)	(11.79)	変質流紋岩	小片。	層土
11	679	礫石器	C1 2②ア	5.1	5.6	4.3	166.09	花崗斑岩	全面磨滅。裏面やや平坦。	層土
13	718	礫石器	A1 1②ア	(7.8)	7.1	4.0	(338.89)		1/2残。端部欠損。表面面凹孔あり。	No13
12	711	礫石器	B1 1②ア	10.6	9.0	5.1	763.93		表面左側部下平、欠損か。表面とも磨滅面多。	No12
14	723	礫石器	Ab1 2②ア	9.5	7.2	4.8	511.84	輝石安山岩	全面磨滅。断面三角形状、右側面に凹みあり。	層土
15	676	礫石器	A1 2②ア	12.8	9.0	5.3	822.55	輝石安山岩	下端部の凹みは、欠損部とみられる。	層土
16	675	礫石器	A1 1②ア	13.5	9.6	6.1	1036.45	輝石安山岩	表面中央部凹孔。下端左側部も凹孔か。	層土
17	734	石蓋	BCd	31.1	24.8	7.5	7880.00	輝石安山岩	表面面とも平坦で磨滅。表面に磨着。凹孔は意図的なものか不明。	層土
18	722	石蓋小	HCe	30.2	20.2	8.3	4869.00	雑質砂岩	表面平坦。裏面平坦。端部欠損。凹孔か。石質脆弱。	No18
20	717	石蓋小	1Bd	36.7	(32.3)	(18.2)	(23600.00)	輝石安山岩	表面平坦欠損。残存面は意図的に横割。中央部打定赤色変化か。下端は破断面、外角加工か。裏面平坦であるが、下平は意図的磨滅と推定。	No20
19	736	石蓋小	HCe	46.2	19.5	14.5	14309.00	輝石安山岩	表面、左側部下平、破断後磨滅。上半部意図的に横割。裏面平坦で磨滅。	層土
	724	石蓋小	HCe	(6.9)	(6.7)	(6.2)	(307.40)		小片。	層土
	709	石蓋小	HCe	(14.2)	(14.7)	(6.8)	(1116.33)		1/2程度残か。	層土
	674	小礫		6.5	5.8	2.9	1042.93		やや線石器(?)に似る。	層土
	673	小礫		10.3	5.8	2.1	132.46		ブームラン形。扁平。全面磨滅。	層土
	714	小礫		12.0	10.2	4.8	570.93		線石器(?)に似る。	No20
	716	小礫		11.8	8.5	5.3	830.96		変形状。裏面意図的に平坦。磨石か。	層土
21	241	礫		22.9	12.3	5.9	2074.92		平面、三角形状。扁平。端部に割製品片が行着し、周囲がサビ色に変色するが詳細不明。	No21
	721	礫		(16.5)	13.6	6.0	(2226.00)		平面、有形形磨滅。不整。扁平。	No27
	712	礫		30.0	20.9	11.7	16300.00		平面、三角形状。全面磨滅。	No29
	708	礫		33.8	18.9	8.6	6700.00		パナナ形。扁平。全面磨滅。	No25
	735	礫		29.5	32.8	12.8	17550.00			No24
	684	小礫		(4.4)	(3.7)	(1.9)	(28.60)		平面有形。全面磨滅。	層土
	681	小礫		(6.2)	(3.8)	(1.6)	(41.91)		小片、赤色変化。	層土
	729	小礫		(7.2)	(6.7)	(2.7)	(147.30)		小片、赤色変化。	層土
	719	小礫		(8.8)	(8.3)	(4.1)	(207.70)		小片。破断面まで赤色変化。	No22
	715	小礫		(12.0)	(8.3)	(8.3)	(844.96)		小片。破断面まで赤色変化。	No21
	720	小礫		(12.5)	6.3	4.7	(569.34)		石質脆弱。長方形か。片面赤色変化か。	No23
	713	礫塊		(25.4)	(15.5)	12.2	(5926.00)	輝石安山岩	S1-111.5-3.4に似る。1/2程度残か。赤色変化。割材か。	層土
	710	礫塊		16.2	(16.3)	(8.2)	(7416.00)		表面面とも平坦。	No28
	707	礫塊		(33.5)	(18.4)	(11.2)	(9156.00)	砂岩	表面面とも破断面であるが平坦。	No26
	891	割片		(3.3)	(3.7)	(1.3)	(7.29)	チャート	線状の小片。自然面残る。	S-81 (層土)
	890	割片		(3.5)	(3.2)	(1.3)	(16.50)	チャート	線状の小片。自然面残る。	S-81 (層土)
	889	小礫		4.2	3.7	1.9	32.49	変質流紋岩	不整形。	S-81 (層土)
	628	小礫		(5.3)	(2.4)	(2.4)	(24.61)		破断後磨滅。	S-81 (層土)
	885	礫塊		(10.4)	9.0	(4.9)	(596.11)		片面、破断するが線石器(?)に似る。磨滅。	S-81 (層土)
	886	礫塊		(8.5)	(7.4)	(1.5)	(85.49)		小片。自然面は赤色変化化する。	S-81 (層土)

表 97 第30号古墳石器・礫観察表

[単位: cm・g]

検出	通し番号	種類	分類・形状	長さ	幅	厚さ	重量	石材	特徴	出土位置
	198	剥片		(3.2)	(2.3)	(1.1)	(16.98)		小片。やや厚みあり。自然面残る。	覆土
	98	剥片		(4.1)	(2.5)	(1.1)	(14.11)		小片。やや厚みあり。自然面残る。	覆土
8	737	石皿	IIc4	(18.3)	(15.0)	(7.3)	2580.00	ドレライト	1/4程度残か。表裏面とも磨滅。特に表面は顕著で底磨滅。底磨滅部付近にスチ付着。(底磨滅にはなし) 石皿。石材か。	No8
	739	小礫		10.4	6.8	4.0	420.20		長方形状。凸凹あり。下端縁打か。	覆土
	750	小礫		(2.1)	(2.3)	1.9	(10.22)		端部を欠損するが、縁状で磨滅する。	覆土
	741	小礫		(3.7)	3.6	1.1	17.49		平面方形状。扁平。上下を揃にくくばみあり。	覆土
	740	小礫		9.2	6.6	3.0	156.42	ホルンフェルス	打穿。端部の形状か。上面自然面残る。裏面磨滅。打穿作製を意図か。	覆土
	754	小礫		(2.2)	(1.9)	(1.3)	(6.21)	赤玉石	自然石。	覆土
7	738	礫		32.6	16.4	9.7	6300.00	輝石安山岩	長円形状。波状の縁い凸凹あり。裏面スチ付着。	No7
	460	剥片		1.9	1.7	0.4	(1.08)		小片。	S-21(覆土)
	447	礫		15.8	(14.7)	5.6	(2092.68)		礫石(1)に似る。裏面平坦で磨滅。	S-21(覆土)

表 98 第31号古墳石器・礫観察表

[単位: cm・g]

検出	通し番号	種類	分類・形状	長さ	幅	厚さ	重量	石材	特徴	出土位置	
	3	249	礫石器	B目 2㉔ア	9.6	9.5	4.4	524.61		表面右下部。磨滅顕著。やや不整形。	S-35
	4	322	礫石器か	A目 2㉔ア	10.4	7.3	4.5	457.51		全面磨滅する。裏面平坦。	S-35
	5	350	礫石器か		11.8	13.7	4.0	650.54		平面ややバナナ形。裏面平坦。表面右半部底磨滅的。	S-35
	6	247	礫石器か		13.6	7.5	4.8	753.75		平面ややバナナ形。	S-35
	7	248	礫石器か		14.2	10.1	7.3	1331.57		平面ややバナナ形。厚みあり。全面磨滅。	S-35
	8	2	石皿か	IIb4	(28.7)	25.7	8.9	(9250.00)		下平欠。右側部。裏面の割縁は外形加工か。表面磨滅。	S-35
	251	小礫塊		(7.1)	(7.4)	(2.7)	(144.15)		小塊。破断面は赤色変化。	S-35	
	252	小礫塊		9.0	4.5	2.4	102.39		平面。三角形状。扁平。破断後磨滅。底面磨滅して平坦。	S-35	

表 99 第41号古墳石器・礫観察表

[単位: cm・g]

検出	通し番号	種類	分類・形状	長さ	幅	厚さ	重量	石材	特徴	出土位置
	386	礫		4.6	4.7	3.5	129.96	砂岩	小礫塊。図上は左上部のみ残存。裏面あるいは右側のような材質か。	覆土
	415	礫石	IIb目 1㉔ア	11.5	10.0	6.1	1002.05	輝石安山岩	右側部上半部のくぼみは凹孔か。	覆土
	426	礫石	IIb目 2㉔ア	15.1	8.9	4.7	1082.19	輝石安山岩	表面左右端部は切削したように底磨滅的に傾斜する。また磨滅も顕著であり、主たる研磨面と判断される。底磨滅的使用の可能性もあるか。	覆土
	407	礫石	IIb目 1㉔ア	14.8	6.5	5.8	824.94	輝石安山岩	全面磨滅による赤色変化か。裏面トーン部分は磨滅による黒色化(スチカ)。	覆土
	389	礫	IIb 1㉔ア	5.3	4.7	3.6	120.36	輝石安山岩	図上裏面上端部のくぼみは凹孔か。やや平坦面にある。磨滅は表面の中央部に認められる。	覆土
	403	礫石	CIカ 2㉔ア	9.5	8.5	8.7	1004.18	石英含有輝石安山岩	下端部はやや平坦で接地面を持つ。	覆土
	353	剥片		(1.7)	(1.3)	(0.4)	(1.04)	黒曜石	小片。自然面が残る。高麗山産か。	覆土
	352	剥片		(2.6)	(2.0)	(1.4)	(7.84)	チャート	小片。	覆土
	478	剥片		(2.5)	(2.1)	(0.8)	(3.40)	赤玉石	小片。	覆土
	477	剥片		(3.5)	(2.6)	(1.0)	(5.38)	黄変褐色砂岩	小片。	覆土
	366	剥片		(3.6)	(2.6)	(0.6)	(5.23)	建質頁岩	小片。	覆土
	304	剥片		(4.1)	(2.0)	(0.9)	(4.77)	建質頁岩	小片。	覆土
	362	剥片		(3.2)	(2.6)	(1.2)	(6.55)	頁岩か	小片。	覆土
24	365	打穿		(9.6)	(7.1)	(2.4)	(176.61)	黄青石ホルンフェルス	打穿塊。片側部自然面か。	覆土
25	302	礫石器	IIb目 1㉔ア	6.1	4.7	4.1	139.08	輝石安山岩	全面磨滅。凹孔の小さいくぼみあり。	覆土
26	476	礫石器	A目 1㉔ア	9.1	6.2	3.9	213.71	多孔質輝石安山岩	裏面磨滅。表面凹孔か。表面下半部磨滅か。	覆土
27	397	礫石器	A1 1㉔ア	10.2	7.9	4.7	441.08		全面磨滅。凹孔表裏面。	覆土
28	349	礫石器	A1 1㉔ア	12.4	8.7	4.7	655.51		全面磨滅。凹孔表裏面。	覆土
	383	礫石器	G 2㉔ア	11.6	5.2	3.3	303.54	輝石安山岩	磨滅全面。底面に磨滅。	覆土
	384	礫石器	I 2㉔ア	10.0	6.8	2.3	174.99	ドレライト	扁平。	覆土

採頭	通し番号	種類	分類・形状	長さ	幅	厚さ	重量	石材	特徴	出土位置
29	351	小礫塊		(5.5)	(2.9)	(1.4)	(33.27)	ドレライト	端部欠。扁平の棒状塊。裏面平坦。	覆土
30	300	石皿	ICd	(12.2)	(17.4)	(6.0)	1655.56	グライサイト質火山 礫状灰岩	1/2程度残か。裏面平坦。左側部赤色変 化及びスス付着。	覆土
32	400	石皿	ICd	(21.2)	(17.8)	7.3	4200.00	グライサイト	両縁部破砕か。表面平坦。	覆土
31	401	石皿	ICd	(21.3)	(23.3)	(7.9)	(4985.00)	輝石安山岩	1/2程度残か。裏面平坦。右側面一部直 線的な外形加工か。	№31
	464	小礫		4.7	4.0	2.5	62.15	頁岩	平面台形状で、凸凹顯著。	覆土
	402	礫		(9.7)	8.2	5.2	496.78	頁岩	平面、長円形で、凸凹あり。	覆土
33	348	礫		26.9	9.8	8.1	4400.00	石英含有輝石安山岩	石英含有輝石安山岩。線状の石の目が目立 つ。全面磨滅。裏面は破砕後、磨滅。	覆土
		小礫塊		(3.6)	(2.1)	(1.2)	(4.77)		小片。破砕面は鋭利。	覆土
	378	小礫塊		(4.0)	(3.9)	(1.3)	(14.10)	シルト岩	小片。	覆土
	374	小礫塊		(2.9)	(2.8)	(0.6)	(3.88)	凝結砂質凝結灰岩	小片。	覆土
	369	小礫塊		(4.8)	(3.9)	(0.8)	(17.22)	ホルンフェルス	小片。	覆土
	465	小礫塊		(4.8)	(3.3)	(0.8)	(14.54)	ホルンフェルスか	小片。	覆土
		小礫塊		(6.1)	(4.7)	(1.0)	(28.76)	ホルンフェルスか	小片。	覆土
	365	小礫塊		(6.3)	(4.1)	(1.8)	(44.61)	凝結岩	小片。破砕面を含み赤色変化か。	覆土
	367	小礫塊		(10.5)	(10.7)	(2.7)	(403.46)		裏面。破砕。表面平坦。石皿片か。	覆土
	451	小礫塊		(9.4)	(9.3)	(5.6)	(474.29)		小塊。自然面。赤色変化か。	覆土
	303	小礫塊		(6.4)	(7.4)	(1.9)	(91.13)		小片。裏面。破砕。残存面磨滅。	覆土
	462	小礫塊		(7.7)	(5.5)	(2.5)	(101.02)		小片。石皿あるいは礫石断面片か。	覆土
	471	小礫塊		(6.3)	(6.0)	(2.4)	86.64		小片。石皿あるいは礫石断面片か。	覆土
	301	小礫塊		(15.1)	(16.7)	(6.5)	(2260.00)		1/2程度残か。裏面平坦。石皿片か。	覆土
		小礫塊		(5.7)	(4.8)	(4.0)	(90.45)		自然面磨滅。側面破砕。石皿片か。	覆土
	523	礫塊		(18.5)	(16.4)	(12.9)	(3920.00)		小塊。2面のみ残。磨滅。	覆土
34	404	礫塊		(27.5)	21.6	12.8	(11100.00)	輝石グライサイト	平面。三角形。赤色変化。石材か。	№34
	405	礫塊		(16.4)	(12.3)	(7.0)	(2090.28)		小塊。長方形。破砕面も。赤色変 化。石材か。	№35

表 100 第184号土坑石器・礫観察表

[単位: cm・g]

採頭	通し番号	種類	分類・形状	長さ	幅	厚さ	重量	石材	特徴	出土位置
	363	石皿	ICd	(16.5)	(15.1)	(9.8)	(2320.00)		小塊。表面は平坦で直線的。裏面はスス 付着。	覆土
	362	石皿	ICe	(20.5)	(17.4)	10.7	(4290.00)		小塊。表裏面とも磨滅。	覆土

表 101 第30号古墳出土遺物観察表

[単位: cm・g]

番号 部種	寸法	特 徴	色調	粘土 構成	出土状況 残存状況
4 粗製土器	口: (11.4) 高: (5.1)	内: ヘラナデー口縁部ヨコナデ 磨滅 外: 体部ナデー口縁部ヨコナデか 磨滅 接合痕明瞭に残る。	内外: 7.51R/6	良	覆土
5 粗製土器	底: (5.4) 高: (3.9)	内: ナデーヘラナデ 磨滅 外: ナデーヘラナデか 磨滅 ところどころ指頭状の痕跡が残る。接合痕明瞭に残る。	内外: 7.51R/6	良	覆土
6 粗製土器	底: 5.8 高: (4.2)	内外: ヘラナデか 底面に白っぽいヘラナデリ。	内: 51R5/4 に近い赤褐色 外: 101R6/4 に近い黄褐色	良	覆土

表 102 第30号古墳埋葬施設 S-21 鉄鏝計測表

[単位: m・g]

採頭	部位	胴部			茎			重	特記	
		長	幅	厚	長	幅	厚			
1	胴部	1.4	1.1	0.2				1.17		
2	胴部	2.1	0.9	0.2				0.70		
3	胴部	1.7	0.9	0.2				0.95		
4	胴部	2.3	0.7	0.2				0.71		
5	頸部		左	7.3	0.6	0.4		36.83	2本分	
			右	7.5	0.6	0.4				
6	頸部		左	5.1	0.6	0.4		20.16	2本分	
			右	5.4	0.7	0.4				
7	頸部			6.0	0.6	0.4		25.94		
8	頸部			1.4	0.6	0.4		1.25		
9	茎部						5.4	0.6	0.4	7.72
10	茎先端						2.7	0.5	0.4	0.99
11	茎先端						3.4	0.5	0.4	1.19
12	茎先端						4.9	0.6	0.4	3.40

表 103 第31号古墳埋葬施設 S-35 鉄鏝計測表

[単位: cm・g]

検出	部位	鎌身部			頸部			茎			重	特記	
		長	幅	厚	長	幅	厚	長	幅	厚			
13-1	鎌身部～頸部	6.1	1.7	0.3	6.0	0.7	0.4					構状	
13-2	鎌身部～頸部	6.2	1.9	0.3	4.7	0.6	0.4					構状	
13-3	鎌身部～頸部	4.3	1.5	0.3		0.7	0.4				85.56	構状13-1と13-2に接まれた状態	
13-4	鎌身部～頸部				11.0	0.7	0.4				(6本分)	構状	
13-5	頸部				3.9	0.6	0.4					構状	
13-6	鎌身部か	3.2	1.7	0.4	1.6	0.7	0.4					構状	
14	鎌身部	5.7	1.7	0.2	6.0	0.8	0.4				8.19		
15	鎌身部	5.9	1.7	0.3	1.2	0.8	0.4				10.96		
16	鎌身部	5.3	1.8	0.3	1.5	0.8	0.4				9.58		
17	鎌身部	5.9	1.8	0.3	2.3	0.7	0.3				12.13		
18	鎌身部か	5.1	1.8	0.2							6.11		
19	鎌身部か	2.2	1.5	0.3							1.99		
20	鎌身部か	2.6	1.8	0.3							2.90		
21-1	頸部				4.2	0.8	0.3						
21-2	頸部				4.5	0.8	0.3					15.76	3本分
21-3	頸部				3.9	0.8	0.4						
22	頸部				4.1	0.7	0.4					4.45	
23	頸部				5.7	0.6	0.4					8.06	
24	頸部～茎				5.1	0.7	0.4	0.7	0.4	0.3	7.29	台形部か	
25	茎							3.3	0.5	0.3	1.26		
26	茎							2.8	0.4	0.3	1.45		
27	茎							2.8	0.4	0.3	2.12		
28	茎							1.6	0.3	0.3	0.83		
29	茎							3.4	0.5	0.3	4.71		
30	茎							6.6	0.6	0.4	4.30		
31	茎							3.9	0.6	0.4	1.58		
32	茎							2.9	0.5	0.3	1.08		

検出	部位	最大長	最大幅	最大厚	重	特記
10	刀装具	2.5	1.9	0.4	2.00	
11	刀装具	3.0	1.9	0.8	1.99	
12	刀装具	4.1	3.0	1.0	4.21	

表 104 湯津上小学校校内トレンチ石器・礫観察表

[単位: cm・g]

検出	遺し番号	種類	分類・形状	長さ	幅	厚さ	重量	石材	特徴	出土位置
	61	石鏝	1a	(20.0)	(12.0)	(6.8)	1896.84	安山岩系	磨面両面。硬質な石材の中央を包める	第1トレンチ
	64	剥片		(2.0)	(1.6)	(0.3)	(1.52)		小片。自然面残る。	第2トレンチ

第4章 湯津上小学校校地内確認調査

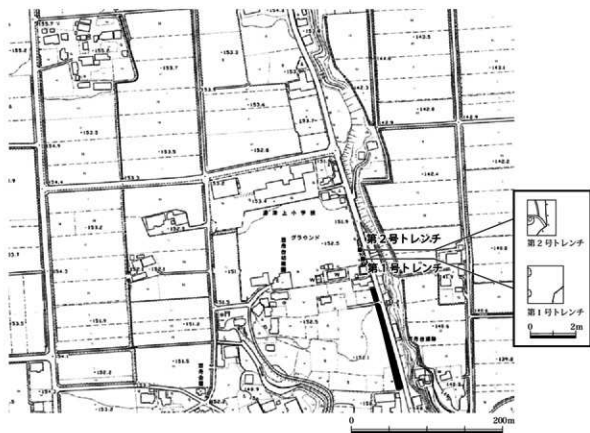
第1節 調査の概要

今回の国道294号拡幅工事は湯津上小学校東端部も対象となり、校庭の東端部が調査範囲となるが、児童の安全等への配慮、調査面積が狭小であることを鑑み、遺構・遺物の有無の把握を主眼に確認調査を行った。

調査対象区は幅約0～2.0m・長さ約50.0m・面積約50㎡であり、北側に向かって窄む形状にある。トレンチは作業上の安全、埋め戻し後の安全等を考慮し、1.5m四方前後のトレンチを南北方向に2カ所を設定し行った。トレンチ間は約4.7mの距離を置く。児童の安全を最優先し、速やかに調査を終了するため、トレンチ掘削から埋め戻しは1日間で行うこととし、重機による表土掘削後手作業による堆積土除去の過程で遺構・遺物の確認を行い、図化・遺物取り上げを行った。

トレンチは校地の東側を区画するフェンスに平行する形で任意に設定した。2カ所のトレンチの東壁はフェンス設置の際の掘削により攪乱土の堆積が著しいが、第1号トレンチにおいては攪乱土下より土坑状の掘り込み。第2号トレンチ内からは土坑状の掘り込みや縄文土器などが確認されている。遺構の詳細は明確にし得なかった。出土遺物は少量ではあるが縄文土器片、土製円盤などが確認された。何れも縄文時代中期末葉～後期初頭とみられ、今回の調査の成果に並行する時期といえる。湯津上村誌等で報告のある中期中葉～後葉の遺物が確認されなかった点、留意されようか。

遺構・遺物の確認状況からは小学校校地を画するフェンス際の部分については既に失われている遺構・遺物があるものと判断されるが、調査区内における遺構・遺物は良好に残存する可能性が高いと考えられる。



第202図 湯津上小学校校地内トレンチ配置図

第2節 トレンチ

第1号トレンチ (TR-1) (第203図 表104 図版一六)

位置 南側に位置する。**規模** 東西約1.6m×南北約1.6mのトレンチを設定し、まず深さ約1.1mまで掘削を行った。**覆土** 14層を確認した。1～11層は東壁、1～4・12～14層は西壁を確認した。1層は現表土、2層は攪乱土か。4層は粘性の強い黒色土で第2トレンチ2層同様、SZ-3・26・41周溝の確認面に堆積する粘性の強い黒色土に極めて似る。4層に似る7・10層は4層の乱れか。14層は6層に対応するか。12・13層のみ茶色の強い土層が堆積する。1～4層は北から南に傾斜して堆積するが、5・6層はほぼ水平に堆積する。1～4層は表土、5・6層は旧表土か。

遺構確認状況 南東隅部に掘り込みが確認された。11層が堆積する。上層に堆積層の乱れと考えられる土層の堆積が認められる。現表土より深さ1.2m付近まで掘り下げたが底面は確認し得なかった。詳細は不明である。西壁寄りに小穴状の掘り込み2基が確認された。何れも径約0.3m、深さ約0.2mほどとみられるが、詳細は不明である。

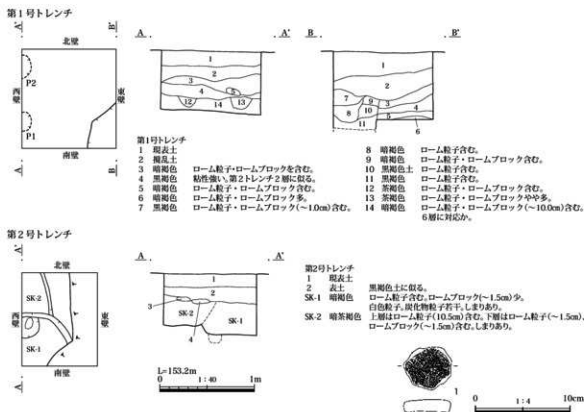
遺物出土状況 掘削の過程で3点が出土する。

出土遺物 何れも小片であり、図示し得なかったが、以下の遺物が出土する。

隆帯と沈線で作出される口縁部文様帯とみられる小片1片、加曾利EⅢ式か。地条線を施す器壁の厚い小片1片。鉄製釘1点が出土するが、第3章10節3に記載する。

第2号トレンチ (TR-2) (第203図 表104 図版一六)

位置 北側に位置する。**規模** 東西約1.2m×南北約1.5mのトレンチを設定し、まず深さ約0.7mまで掘削を行った。**覆土** 遺構確認面は現表土下0.4～0.5mとみられる。遺構確認面までの表土は2層であり、



第203図 第1号トレンチ・第2号トレンチ実測図・第2号トレンチ出土遺物実測図

上層は現表土、下層は粘性のある黒色土が堆積する。SZ-03・26・41 周溝の確認面に堆積する粘性の強い黒色土に極めて似る。

遺構確認状況 トレンチ西壁際に土坑状の掘り込みが2カ所確認された。便宜的に南側の掘り込みをSK-1、北側の掘り込みをSK-2とする。詳細な調査はなし得なかったが、SK-1は東西0.4m以上南北0.8m以上、遺構確認面からの深さ約0.5mを確認した。底面レベルは約151.99mである。底面にピット状の掘り込みが確認される。底面からの深さは約0.15mである。SK-2は東西・南北0.8m以上、遺構確認面からの深さ約0.5mを確認した。底面レベルは約152.145mである。SK-2がSK-1に後出すると判断される。東側の落ち込みは攪乱か。

遺物出土状況 トレンチ内より11点、SK-1内より5点が出土する。

出土遺物 1は土製円盤か。無文土器片である。周縁の研磨は観察されない。タテ約4.7cm・ヨコ約5.0cm・厚さ約1.0cm・重さ約34.7g。

この他、図示し得なかった出土遺物は以下のとおりである。

覆土中からは以下の遺物が出土した。帯状区画とみられる小片1片、沈線間が地縄文部より狭く、古手の可能性が残る。無文に帯状区画とみられる沈線を配する小片1片、後期初頭か。集合沈線とみられう小片1片、堀之内1式か。地縄文小片1片。トレンチ東側からは地縄文に半載竹管状工具による沈線を施す小片1片、堀之内1式か。磨滅片・微細片5片。

SK-01内からは降帯と沈線で作出する口縁部文様帯1片、単文の降帯は剥落する。加曾利EⅢ式か。無文の口縁端部に沈線が横巡する破片1片、後期初頭か。磨消縄文手法とみられる小片1片、加曾利E式後半～後期初頭か。微隆起線を配する小片1片、加曾利EⅣ式。微細片1片。

第5章 まとめ

第1節 調査の概要

1. 調査の概要

今回の調査は道路拡張工事に伴うものであり、調査区幅3.0～4.0m前後の中で全容を把握できた遺構は少ないが、縄文時代の住居跡は可能性のあるものを含め6軒、袋状土坑38基、土坑64基、ピット73基、埋設土器2基、溝状遺構5条、古墳5基分、性格不明遺構1基、自然地形2カ所を確認した。出土遺物は、縄文時代～中・近世に渡り、縄文土器、石器・礫、土師器、粗製土器、石製紡錘車、埴輪、鉄刀・鉄鏃・刀子・椀形鉄滓などの鉄製品、鉄刀に付随する木質部、陶磁器など、遺物収納箱（中）約150箱分である。

遺構・遺物の確認状況は、A区、B区南端・北端部、C区北端部以外に集中する傾向にあるが、調査以前の削平やS-84（礫層部）・S-222（自然の落ち込み）から推察される微地形に起因するものとみられ、本来の状況を示すものか判然としない。

以下、報告書作成の過程で留意された事例を踏まえ、時代ごとの概要を記す。

第2節 縄文時代

（1）遺物

①縄文土器

調査区内から約10200片の縄文土器片が出土する。小片であったり、磨滅や劣化のため時期が判別し得なかった土器片もあるが、前期～後期後葉にかけての土器片とみられる。しかし、何れも器形やモチーフの判別が困難な小片であり、詳細については明瞭さを欠く点は否めない。土器片の特徴から時期毎に分別を行ったが、前後する時期或いは特徴の似る時期の土器片を含む可能性は否めない。

出土土器の分別は以下のとおりである。分別の結果、最も出土個数の多かった時期は第20群堀之内1式を主体とする後期前葉である。次いで、第15群称名寺式や第12群称名寺式と並行する加曾利E式を主体とする後期初葉、第11群加曾利EⅣ式を主体とする中期末葉、第6群加曾利EⅢ式を主体とする加曾利E式後半、第1・2群加曾利EⅠ・Ⅱ式を主体とする加曾利E式前半である。また、個体数は少ないが、第1群前期、第23群加曾利B式の土器片の出土もあり、遺跡内における調査区域利用の推移を表すものと考えられる。特に、前期土器の確認はこれまで報告例がなく、晩期の可能性の残る第24群-1や第21群-45、弥生土器の可能性の残る第24群附加条縄文を施す小片などととも遺跡の性格を考慮する新たな資料といえよう。

遺構内から出土する土器をみると、加曾利E式期～後期前葉まで時期幅の大きい土器片が相対数で出土する。各遺構の事実記載は、遺物の出土状況や各土器片の時期を鑑み、各遺構の最終的な時期を提示した。

遺構外から出土する土器片の出土位置をみると、自然地形であるS-222・84、SI-111・154のあるC-5グリッドからの出土が多い（表17）。SI-111・154付近からは、中期末葉の加曾利EⅣ式を中心とする時期を主体に加曾利E式前半から後期前葉までの土器片が出土する。自然地形であるS-222・84付近については、各時期の出土がみられるが、後期前葉の土器片の出土が多い。A区やB区北部、C区南・北部の削平状況をみれば、一概には判断できないが、遺構利用の少ない自然地形（S-222・84）への堆積傾向は見て取れようか。S-222・84付近に明確な遺物包含層の形成は認められない。

出土する土器片には、関東地方を分布圏とする加曾利E式や称名寺式、堀之内式、中部山岳地帯を分布圏

とする曾利式、東北地方を分布圏とする大木式、信濃川中流域に出現した火炎土器などの特徴がみられ、品川台遺跡(第5図18)や三輪仲町遺跡(第5図64)などの本遺跡周辺の集落遺跡の特徴に通ずるものである。同時に、在地化傾向の薄い第16群三十桶葉式(SK-103・SZ-26など)の出土は留意されよう。

出土土器の分別は以下のとおりである。

第1群 前期

1類1種 関山式

1. 関山式 2. 関山2式

2種 黒浜式

3種 諸磯式

1. 諸磯b式

前期とみられる土器片を一括する。出土数は少ないが、これまで、本遺跡からの前期の土器片の出土は確認されておらず、留意されよう。

第2群 加曾利EⅠ式

1類 阿玉台式末葉～加曾利EⅠ式初頭の深鉢形土器及び小片

2類 所謂火炎土器系の深鉢形土器及び小片

3類 中空の突起が付される深鉢形土器及び突起破片

4類 口縁部文様帯小片

1種 細い隆帯を貼付して文様を作出する口縁部文様帯

2種 高い隆帯とこれに沿う沈線で作出する口縁部文様帯

3種 隆・沈線で文様を作出する口縁部文様帯

4種 沈線で文様を作出する口縁部文様帯

5類 頸部無文帯とみられる小片

6類 体部小片

1種 懸垂文

1 地縄文

2 地燃り糸文

7類 その他

8類 浅鉢形など深鉢形以外の器形

加曾利EⅠ式については、口縁部文様帯の横位に連続する文様構成、頸部の無文帯、磨消を伴わない体部懸垂文が判別できるものを分別した。大木B式や加曾利EⅡ式と混在する可能性は否めない。

第3群 加曾利EⅡ式

1類 口縁部文様帯小片

1種 隆・沈線で作出する口縁部文様帯

1 単位文

①明瞭な渦巻きが付される小片

②渦巻きに退化傾向がみられる小片

2 区画文

①単位文と区画文が分化する小片

2種 低い隆帯と沈線で作出する口縁部文様帯

1 単位文

①口縁部文様帯下に区画を持つが渦巻きに退化傾向がみられる小片

2類 体部小片

1種 懸垂文が垂下する小片

1 数条一組の懸垂文間に磨消を伴う小片

加曾利EⅡ式については、口縁部文様帯の単位文と区画文が横位に連続する文様構成、頸部無文帯の喪失、磨消を伴う懸垂文、磨消文が判別できるものを分別した。加曾利EⅠ・Ⅲ式と混在する可能性は否めない。

第4群 加曾利EⅠ～Ⅱ式（加曾利E式前半）

1類 口縁部文様帯小片

1種 隆・沈線で文作出する口縁部文様帯

1 単位文に明瞭な渦巻きが付される小片

2 区画文小片

3 隆・沈線のみ的小片

①口縁部

②体部

4 口縁部文様帯内の地文

①縄文

②条線

③刺突

3 横位に連続する区画文がみえる小片

2種 沈線で文様を作出する口縁部文様帯

3種 連弧文系とみられる小片

2類 体部小片

1種 沈線間の磨消が確認できない小片

1 地縄文

2 地燃り系文

3 波状懸垂文

2種 2条1組の沈線間に竹管状工具による刺突列を施す小片

3類 浅鉢形など深鉢形以外の器形

加曾利EⅠ～Ⅱ式については特に詳細な判別が困難な小片である。大木8b式と混在する可能性も考えられよう。

第5群 大木8b式とみられる小片

1類 口縁部文様帯小片

2類 口縁部文様帯下部とみられる小片

3類 体部小片

1種 地縄文

2種 地燃り系文

3種 地条線

大木8b式については文様構成の明確な破片はなく、明確な分別でないが、器面の状況や断片など特徴的な小片を含む。

第6群 加曾利EⅢ式

1類 口縁部文様帯小片

1種 口縁部文様帯

1 隆帯と沈線で作出される口縁部文様帯

①単位文に渦巻きが付される小片

②単位文に円文が付される小片

③単位文・区画文小片

2 断面三角形隆帯とこれにそう凹線で作出する口縁部文様帯

3 沈線で作出する口縁部文様帯

2種 体部小片

1 数条一組の沈線間に磨消を施す墨垂文が垂下する小片

2類 磨消縄文手法でモチーフを描く土器片

1種 上下2段の文様構成が確認できる土器片

1 上下2段の文様構成が確認できる土器片

①上下2段の文様構成が確認できる土器片

②中段部に隆帯を配する小片

2種 文様構成不明の小片

1 沈線で「U」字状、逆「U」字状や門状のモチーフを描く口縁部小片

①沈線で区画した縄文帯・無文帯で細目のモチーフを連ねるとみられる小片

②沈線間を磨り消し、大振りのモチーフを描くとみられる小片

2 モチーフ不詳

①口縁部下沈線横巡

②口縁部下凹線横巡

③凹線中にキザミを施す小片

3種 体部小片

4種 深鉢形以外の器形とみられる小片

1 沈線で逆「U」字状や門状のモチーフを描く口縁部小片

3類 胴部隆帯文系とみられる小片

5類 加曾利EⅢ式とみられる小片

1種 口縁部下に沈線或いは凹線が横巡する口縁部小片

1 平口縁

2 波状口縁

2種 口縁部文様帯であるか磨消縄文手法の口縁部であるか判別の困難な小片

3種 沈線或いは凹線でモチーフを描くとみられる体部小片

4種 その他の口縁部小片

加曾利 E III 式については、加曾利 E II 式の口縁部文様帯と混在するものや、懸垂文と磨消縄文手法が混在するもの、称名寺式の帯状区画と混在するもの、後期初頭の土器片と区別が困難であるものを含む。

第7群 加曾利 E II～III 式

1 類 口縁部文様帯小片

1 種 口縁部文様帯

1 単位文が円文化する小片

①隆・沈線

②沈線

2 加曾利 E I 式前半と区別される小片

①隆・沈線

②沈線

2 種 体部小片

1 沈線間に磨消を施す懸垂文が垂下する小片

2 沈線で区画された縄文部と無文部がみられる小片

加曾利 E II～III 式については特に判別が困難な小片である。沈線間に磨消を施す懸垂文が垂下するとみられる小片の中には磨消縄文手法でモチーフを描くものが混在する可能性がある。

第8群 大木 9 式系とみられる小片

大木 9 式とみえる小片については、加曾利 E III 式の範囲に含めるべきものもあろうが、特徴を明確にするため項目を設定した。

第9群 牛轡式とみられる小片

1 類 貼瘤状の突起を付す小片

小片のため不詳な点が多いが、可能性提示のため項目を設定した。加曾利 E III 式の突起と混在する可能性がある。

第10群 曾利式系とみられる小片

1 類 口縁部に沈線で条線やモチーフを描く小片

2 類 頸部一次区画隆帯に押捺を施す小片

3 類 体部に押捺を施す隆帯、及び、間隔を持った条線が垂下する小片

曾利式系については、押捺を施す隆帯の部分が欠失し条線の垂下のみみられる小片については綱取式・堀之内式などの後期前葉の土器片と混在する可能性がある。

第11群 加曾利 E IV 式

1 類 突起・把手

1 種 突起

1 円筒状突起

①微隆起線に連繋する渦巻きが明瞭

②微隆起線に連繋する渦巻きに退化傾向

2 半捻転状突起

3 口縁部下、或いは、体部モチーフを作出する微隆起線から連繋する突起

①単頭

- ②双頭
 - ③詳細不詳の小片
 - 4 微隆起線に連繋する舌状突起
 - 2種 橋状把手
 - 1 無文
 - 2 上面に微隆起線で「S」字状のモチーフ
 - 3 上面に縄文施文
 - 2類 上下2段の文様構成とみられる土器片
 - 1種 微隆起線区画
 - 2種 沈線区画
 - 3類 上下の区画なく1段の文様構成とみられる土器片
 - 1種 微隆起線区画
 - 2種 沈線区画
 - 4類 文様構成不明の小片
 - 1種 微隆起線でモチーフを描出する小片
 - 1 2本の平行する微隆起線でモチーフを描く土器片
 - 2 1本の微隆起線でモチーフを描くとみられる土器片
 - 3 微隆起線で区画された縄文部と無文部でモチーフを描く土器片
 - 4 文様構成不明の小片
 - 5 地を無文とする小片
 - ①「U」字状、逆「U」字状のモチーフとみられる土器片
 - ②懸垂文状に無文帯が垂下する土器片（1段構成のモチーフか）
 - ③モチーフ不明
 - 2種 沈線区画でモチーフを描出する土器片
 - 5類 微隆起線とこれにそう沈線を施す土器片
 - 1種 無文の口縁部下に微隆起線とこれにそう沈線が横巡する土器片
 - 2種 凹線内に竹管状工具で列点を施す土器片
 - 3種 詳細不明の小片
 - 6類 口唇部直下から縄文を施文する口縁部片
- 加曽利EⅣ式については、後出する称名寺式に平行する加曽利E式や称名寺式、後期初頭の土器片が混在する可能性は否めない。4類1種②については3類1種1段構成のモチーフを描く土器片に含まれる可能性が高いか。4類1種4③については地縄文に本数等が不明な微隆起線がみえる小片を主体とする。
- 第12群 称名寺式に平行する加曽利E式
- 1類 上下2段の文様構成とみられる土器片
 - 2類 文様構成不明の土器片
 - 1種 微隆起線区画でモチーフを描出する土器片
 - 1 口縁部下に微隆起線が横巡する土器片
 - ①無文の口縁部の幅が1.0cm前後

- ②無文の口縁部の幅が 2.0cm以上
- ③無文の口縁部に列点
- ④無文の口縁部に貫通孔を伴う

2 体部破片

- ①微隆起線で区画した縄文部と無文部で「U」字或いは「V」字のモチーフを描出
- ②2本一組の微隆起線で「U」字・逆「U」字状のモチーフを描出
- ③文様構成不詳の小片

3 小片

- ①モチーフ、微隆起線の本数等不明

称名寺式に平行する加曾利E式については、加曾利E式や後期初頭の土器片と混在する可能性がある。特に、加曾利EⅣ式の微隆起線の中にはナソリが不明瞭な部分もあり、第11群と混在する可能性は否めない。

2類1種1④については突起の基部である可能性が高い。

第13群 大木10式とみられる土器片

大木10式とみられる土器片はアルファベット文とみられる文様を念頭に設定したが、加曾利EⅢ・Ⅳ式と混在する可能性は否めない。

第14群 中期後半とみられる土器片

1類 突起・把手

1種 突起

- 1 円盤状突起か

2種 把手

- 1 橋状把手

2類 口縁部

1種 無文の口縁部下に地縄文を施す土器片

- 1 無文の口縁部下区画あり
- 2 無文の口縁部下区画なし
- 3 無文の口縁部下に列点のよう微隆起線状の隆帯

2種 無文の口縁部下に地条線を施す土器片

- 1 無文の口縁部下区画あり
- 2 無文の口縁部下区画なし

3類 体部

1種 低平な隆帯と沈線でモチーフ

2種 沈線で区画された縄文部と無文がられる土器片

3種 隆帯・微隆起線の区別の困難な土器片

中期後半の土器片については、小片のため詳細が判然としないものの中で、器面や胎土、文様描出方法などから中期後半の可能性のあるものを分別した。地縄文の施文方向が縦位のものを基本としたが、器形等から本群に含めたものもある。このため、時期の異なる土器片が混在する可能性は否めない。3類は基本的に詳細不明な小片をまとめるが、2種については懸垂文であるか磨消縄文手法であるか判別できない小片が主体となる。

第15群 称名寺式

1類 突起・把手

1種 突起

①円盤状突起

- 2類 口縁部に窓枠状の区画を施す小片
 3類 単位的なモチーフとみられる小片
 4類 垂下降帯で器面を分割する土器片
 5類 菱形状のモチーフを描出する土器片
 6類 縦位の文様構成とみられる土器片
 7類 文様構成は不明であるが帯状区画でモチーフを描出する土器片

1種 口縁部に縄文を施文する小片

2種 帯状等分割構成とみられる小片

3種 「J」字状のモチーフとみられる小片

4種 「X」字状のモチーフとみられる小片

5種 帯状区画とみられる詳細不明の小片

1 帯状区画内に縄文を施す小片

2 帯状区画内に条線を充填する小片

3 帯状区画内に短沈線を充填する小片

4 帯状区画内に刺突を充填する小片

①円形の刺突を充填

②キザミ状の刺突を充填

5 帯状区画内に刺突列を配する小片

6 帯状区画内に粗いナデを施す小片

7 区画線に沿って刺突を配する小片

8 区画内外を無文とする小片

9 帯状区画と判断される小片

8類 深鉢形以外の器形とみられる土器片

称名寺式については、磨消縄文手法と混在する可能性があり、第14・17・18群との判別が困難なものが少なくない。7類2種については「J」字状の剣先部で判断したものが多い。

第16群 三十稲葉式

第17群 中期末葉～後期初頭とみられる土器片

1類 突起・把手

1種 突起

1 舌状突起

2種 把手

1 橋状把手

2類 口縁部下に沈線が横巡する口縁部

1種 体部に磨消縄文手法或いは帯状区画でモチーフを描出するとみられる小片

2種 体部に地縄文を施す小片

3類 口縁部下に微隆起線が横巡する口縁部

1種 口縁部下に微隆起線が横巡する口縁部小片

1 体部に縄文を施す

2 体部に地条線を施す

2種 無文の口縁部に「C」字状の微隆起線が垂下する小片

4類 口縁部下に低平な幅のある隆帯を配する口縁部小片

5類 微隆起線でモチーフを描く体部小片

1種 微隆起線2本単位

2種 微隆起線1本

3種 微隆起線2本或いは1本（モチーフ近接か）

4種 本数不明

1 地縄文

2 無文

6類 低平な隆帯でモチーフを描く小片

7類 中期末葉～後期初頭とみられる小片

第17群については、第11・14・18群と混在する可能性は否めない。

6類については、第12群2類（第136図-8）の突起部分である可能性も考えられる。小片であり器形や文様施文方法を判別出来ず、本群とした。

第18群 後期初頭とみられる土器片

1類 突起

2類 深鉢形とみられる小片

1種 沈線でモチーフを描く小片

1 渦巻き状

2 同心円状

3 モチーフ不詳

2種 隆帯でモチーフを描く小片

3類 瓢形とみられる小片

4類 深鉢形以外の器形とみられる小片

第19群 網取式を含む後期前葉とみられる土器片

1類 無文の口縁部

1種 「ノ」字状の隆帯が垂下する小片

2種 無文の口縁部に隆帯が垂下する小片

3種 無文の口縁部に球状の突起を付す小片

2類 一次区画線

1種 一次区画線を沈線とする小片

2種 一次区画線を隆帯とする小片

3種 隆帯に盲孔列が付される小片

- 4種 高い隆帯に列状の盲孔が付される小片
 - 5種 沈線に短沈線が並ぶ小片
 - 3類 体部に櫛歯状工具で条線或いは集合沈線を施す小片
- 第20群 堀之内1式
- 1類 口縁部小片
 - 1種 平口縁
 - 2種 波状口縁
 - 1 波状口縁
 - 2 頂部に盲孔
 - ①円形状
 - ②刺形状
 - 3 頂部に「8」字状の盲孔
 - ①隆帯上に盲孔
 - ②盲孔
 - 4 貫通孔を有する小片
 - 2類 無文の口縁部下に一次区画線を配する小片
 - 1種 隆帯を配する小片
 - 1 隆帯に沈線の沿う小片
 - 2 鎖状の隆帯を配する小片
 - 2種 微隆起線状の隆線を配する小片
 - 3種 沈線を配する小片
 - 3類 無文の口縁部下に一次区画線を持たない小片
 - 4類 朝顔形とみられる小片
 - 1種 波状口縁部に盲孔が付される小片
 - 2種 波状口縁部に竹筥状工具の刺突が付される小片
 - 5類 体部のモチーフを一括する
 - 1種 単沈線で単位文的なモチーフを描く小片
 - 1 単位文
 - 2 単位文間にモチーフ
 - 3 小片
 - 2種 集合沈線で縦位のモチーフを描く小片
 - 1 集合沈線でモチーフ
 - 3種 地を無文とし単沈線で縦位のモチーフを描く小片
 - 1 単沈線でモチーフ
 - 4種 地を無文とし集合沈線でモチーフを描く小片
 - 1 集合沈線
 - 2 集合沈線間に集合沈線充填
 - 3 集合沈線で格子目状のモチーフ

※ 5 類共通

- ① 戴手状
- ② 波状沈線
- ③ 沈線垂下
- ④ 紡錘状・同心円状
- ⑤ 傘状
- ⑥ 曲線的
- ⑦ 不詳

6 類 堀之内 1 式とみられる土器片

1 種 口縁部片

2 体部片

1 体部

- ① 盲孔を起点に沈線でモチーフ
- ② 沈線間に刺突列
- ③ キザミを伴う隆帯垂下

堀之内 1 式は単沈線、集合沈線による縦位のモチーフを念頭に分別した。地縄文に沈線のみ見える小片で、器面、胎土から本群に含めたものもある。

第 21 群 堀之内 2 式

1 類 突起

1 種 球状の突起

2 類 口縁部小片

- 1 種 口唇部に沈線を配する小片
- 2 種 口縁部下に隆線が横巡する小片
 - 1 口縁端部下
 - 2 頸部一次区画線
 - 3 部位不明

3 種 口縁部下に隆線が垂下する小片

4 種 一次区画線とみられる小片

3 類 地縄文に沈線でモチーフを描く小片

4 類 地縄文に磨消縄文でモチーフを描く小片

5 類 無文に沈線区画でモチーフを描く小片

※ 3～5 共通

1 種 単位文的モチーフ

2 種 入れ子状のモチーフ

3 種 文様構成不詳

- ① 渦巻状
- ② 三角形状或いは菱形状
- ③ 幾何学的モチーフ

- ④モチーフ不詳
- ⑤沈線垂下
- 6類 無文に沈線でモチーフを描く小片
 - 1種 沈線でモチーフ
 - 2種 格子目状のモチーフ
- 7類 口縁部に紐線を配する小片
 - 1種 紐線横巡
 - 2種 横巡する紐線に貼付文
 - 1 円形の貼付文
 - 2 「8」字状の貼付文
 - 3 鎖状隆帯
 - 4 隆線垂下
 - 3種 紐線小片
- 8類 内面文様を有する小片
 - 1種 隆帯貼付
 - 2種 地縄文
 - 3種 無文
- 9類 無文に条線を施す小片
- 10類 無文の小片
- 11類 深鉢形以外の器形とみられり小片
 - 1種 注口土器とみられる小片
 - 2種 ミニチュア土器とみられる小片
 - 3種 詳細不明
- 第22群 堀之内式を含む後期前葉とみられる小片
 - 1類 口縁部小片
 - 2類 頸部小片
 - 3類 体部小片
 - 1種 地縄文に沈線で図形的なモチーフを描く小片
 - 2種 無文に沈線で図形的なモチーフを描く小片
 - 1 沈線を施す土器片
 - 2 隆帯を施す小片
 - 3 集合沈線を施す小片
 - ①沈線
 - ②櫛歯状工具
 - ③半載竹管状工具
 - 3種 地条線
 - 1 沈線垂下
 - 2 格子目

第22群3類3種2、格子目を描く小片の中に網目状ともみえる小片を含む（遺構外出土遺物第22群・20・21）。特に、20は晩期或いは弥生時代の可能性も残るが、調査区中20のみの出土であり、小片のため不詳な点が多いことから本群に含めた。

第23群 加曾利B式

第24群 時期不明の縄文土器小片

1類 口縁部小片

- 1種 口端部直下から地縄文
- 2種 無文の口縁部下から地縄文
 - 1 縦位の地縄文
 - 2 斜位の地縄文
 - 3 横位の地縄文
- 3種 無文の口縁部
 - 1 平口縁
 - 2 波状口縁
- 4種 無文の口縁部下に沈線が横巡る口縁部

2類 体部小片

- 1種 文様を有する小片
- 2種 地縄文
 - 1 単節
 - 2 撚糸
 - 3 付加条
 - 4 羽状
- 3種 無文
- 4種 地条線
 - 1 櫛歯状工具
 - 2 先端の細い工具
 - 3 沈線状

3類 底部小片

- 1種 底部小片
- 2種 底面に圧痕が残る小片

4類 深鉢形以外

②土製品

土製円盤、腕輪、種別の判別が困難な土製品が出土する。

土製円盤は総数32点が出土する。遺構内10点、遺構外22点である。何れも、土器体部を転用したものと判断でき、土器の丸みを残すものが多い。周縁は研磨が施されるものが多いが、正円となるものは少ない。

平面形の大きさから、径5.0cm前後（LL）・径4.0cm前後（L）・径3.5cm前後（M）・径3.0cm前後（S）の4区分が可能である。

厚さは概ね1.0cm前後である。最大厚である1.5cm厚のものはL大、最小厚である0.6cm厚のものはS大で

あるが、平面形の大小による大きな偏りはみられない。

重量は、大きさ同様、概ね4区分が可能である。30 g以上・20～30 g・10～20 g・10 g以下である。平面形LL大の中にも5.8 gと軽量のもの（遺構外出土3）が出土するが、大きさと重量とには大略的な相関関係があるものと判断される。

腕輪は可能性のあるものを含めて4片が出土する。SK-73・123、B区C-5グリッド、調査区内からの出土である。このうち、B区C-5グリッド出土の1片は、平行する横位の沈線を通し白色粘土とみられる塗布物の付着がみられる。他3片については、端部の形状、推定内周径などから腕輪の可能性を示した。2片は土坑内から小片での出土であり、遺構の在り方を考慮する上で留意されよう。環状土製品とした1片については、両側縁の厚さの違い、形状、内周径などから、貝輪型土製品の可能性を指摘しておきたい。

③石器・石製品・礫

調査区内からは、石鏃などの剥片石器、剥片、打製石斧、石皿、礫石器、砥石、石棒などが出土し、破砕片や未製品とみられる破片の出土が目立つ。礫については、出土した全てではなく、任意で取り上げを行った。縄文時代への帰属を判別するのは困難であるが、任意の取り上げであっても、礫石器と似た特徴がみられるものも多い。また、石器類の石材や形状の特徴が観察されるものが少なくない。明確な意図をもって遺跡内に持ち込まれた可能性を払拭できず、一括して記載する。併せて、時期不明の石器・石製品についても、便宜上、本項で記載する。

石器・礫の石材については耐草自然科学分析の報告がある。那珂川や帯川、蛇尾川、八溝山地とその周辺に分布する、遺跡近辺で入手可能と判断される石材や、遺跡から距離のある鬼怒川流域などで入手可能な石材、埼玉県長瀬や東北地方日本海側から移入されたと考えられる石材の出土が確認されている。遺構内出土の石器・礫の中で石材鑑定に付せなかったものについては、観察表中の石材項目を空欄とした。

以下、種別ごとに、その特徴を記載するとともに、細別を試みる。遺物事実記載及び観察表に記載する「形状」は以下を示す。

【剥片石器・剥片】

剥片石器は、石鏃・石匙・スクレイパー・剥片石器・未製品などが出土する。遺構外出土のもの出土位置は不詳である。剥片はB区C-5グリッドからの出土が多く、土器片の出土状況と相対する。剥片石器の石材はチャート、輝石安山岩、流紋岩、頁岩、珪質頁岩、董青石ホルンフェルス、玉髄、赤玉石が確認される。剥片はチャートを主体に剥片石器と同様の石材が確認される。珪質頁岩は肉眼鑑定によって、東北地方の日本海側に分布する地質に由来する良質な岩相が確認されており、遺跡内に母石として持ち込まれ、剥片化した可能性が考えられる。しかし、調査区内からは珪質頁岩製の剥片石器の確認はなく、遺跡内において自家消費したものか、他遺跡へ流通したものか、今後の調査を待ちたい。

【打製石斧】

打製石斧は完存するものは少なく、破砕した状態、或いは、小片での出土が目立つ。遺構外から出土した小片についても、後世の削平によって破片化したとは判断し難い。また、加工痕等は認められず表中に報告した礫の中には打製石斧の石材が含まれる可能性が考えられる。

類別は以下を基準に行う。

平面形状	A類	分銅形	1	括れ深い
			2	括れ浅い
			①	上・下の形状が同じ

② 上・下の形状が異なる

B類 撥形

C類 未製品等

刃部形状 I類 両刃 先端形状 a円 b直線 c尖頭 d斜 x類型化できない破損品

II類 片刃

残存部 イ 完存 ロ 片側刃部の半部欠損 ハ 片側刃部先端欠損 ニ 長軸半部欠損

ホ 片側刃部欠損 ヘ 片側刃部先端のみ残存 ト 片側刃部の半部のみ残存

チ 袂部のみ残存

【石皿】

外形加工や凹孔等のない自然礫の中で、顕著な研磨面、平坦面を持ち、石皿に汎用される石材の礫については観察を行い、遺構内・外の観察表中に記載する。また、小礫塊として報告するものの中にも、石皿片が含まれる可能性が考えられる。類別は平面形状や外形加工の観察から以下を基準に行う。大きさについては、平面形状の中で大（SK-105：364は基本的な大きさのため本項に記載）・中・小の類別が可能とみられる。1193（大：33.2cm）、7・57（中：25.0cm前後）、908（小：16.7cm）が基準となろうか。

また、上・下面の形状でa類とした周縁を高く作出する石皿などの中に、磨面中央部が縦方向に半載した胡桃状に盛り上がる石皿が確認される。SI-85出土：第15図-11・遺構外出土第195図-2・3・12 通し番号736・1233などである。出土状況や伴出遺物など判断としない点が多いが、石皿と胡桃の関連性から、日常具ではない可能性が考慮されよう。

類別は以下を基準に行う。

平面形状 長円形・長方形・円形・三角形・球状・不定形

磨面 I類 人為的に作出したと考えられる平坦な磨面

II類 自然礫の丸みを活かす磨面

形状加工 A類 外形加工あり

B類 自然礫を一部加工

C類 外形加工なし

D類 自然礫

磨面周縁及び磨り面加工 a 磨面周縁に縁高の加工を施す

b 磨面周縁を縁高に反らす加工を施す

c 磨面周縁に落とし口状の加工を施す

d 周縁加工は観察されないが磨面への加工を施す

e 周縁加工は観察されない また平坦な磨面が意図的な作出であるか判断困難

残存状況 A 完存 B 1/2 残存 C 3/4 残存 D 1/4 残存 E 両端部欠損 F 小片

【礫石器】

礫石器の中には、定型的な磨石や蔽石以外の形状のもので研磨などの痕跡が製作や使用に伴うものか等の判別は困難であるものの、形状の類型化が可能であるものも含む。類別の基準は以下のとおりである。長円形（A）・円形（B）・球形（C）の比較的整った形状のものは磨石と判断される。棒状（D）のものは厚みのあるもの（b）を主体に蔽石と判断されようか。また、山形（E）・おにぎり形（F・G）・磨石片斧形（I）は頂部を握り込んだ際の下面の平坦さから磨石的な機能が推定される。握り込み具合は指のかかる凹みや割

離に持ち手を合わせることで安定するものが多い。磨製石斧形 (I) の中には磨製石斧形のもの、第198図-17に示した釘形状のものがある。釘形状のものについては、小礫バナナ形に変わるか。大きさは各々数段階に類別が可能と判断できる。表中には「大きさ(小さい方から1)/段階数(例1/7)」で示す。A長円形、B円形・C球形は7段階に類別が可能である。長円形と円形・球形は長軸が対応するとみられる。A長円形1/7(通し番号54等)-B円形・C球形3/7、A長円形2/7(通し番号566等)-B円形・C球形4/7、A長円形3/7(通し番号632等)-B円形・C球形5/7である。D棒状の長さは4段階、E山形・Fおにぎり形・Gおにぎり形(長)は3段階に区分が可能である。

類別は以下を基準に行う。

平面形状	A 長円形	B 円形	C 球形	D 棒状	E 山形	F おにぎり形
	G おにぎり形(長)	H おにぎり形(扁平)	I 磨製石斧形	J 形状不明の破片		
形状	I 定型的な形状	II 定型的に近い形状	III Iを意識したと判断される形状			
厚み	a 扁平	b 扁平				
凹孔	1 あり	2 なし				
敲打痕	① あり	②なし				
磨滅	A あり	I なし				
残存状況	石皿と同じ					

【石鍾】

未製品や可能性のあるものを含め、総数で22点が出土する。何れも遺構外から出土する。形状や紐掛け部の作出方法から以下のとおり類別する。紐掛け部の作出が不明瞭で石鍾であるか判然としないものもあるが、紐掛け部の位置、大きさ、形状などから観察を行った。大きさは、棒状のものを除き、概ね、特大(10.0cm以上)・大(7.0cm以上)・中(5.0cm前後)・小(4.0cm前後)に4大別せようか。特大としたものは、出土数が少なく、更に類別が可能と判断される。表10は、便宜状、大きさの順に記載する。重量は平面形状に比例し重くなる傾向にあるが、重量による類別は現状では難しい。ただし、[20～29g]～[50～59g]を測るものが主体となる。利用される石材の偏重はみられない。紐掛け部位は、端部・側面、全周、十文字への作出は現状で認められない。

類別は以下を基準に行う。

平面形状	A 長円形	B 円形	C 棒状	D 不定形
厚さ	I 扁平	II 厚み		
紐掛け部	① 磨りきり	② 打ち欠き		
紐掛け部位	A 両端部	I 片側端部	ウ 端部・側面	E 全周
				オ 十文字
残存状況	石皿と同じ			

【石棒】

総数で4点が出土する。遺構内から1点(SK-18)、遺構外から3片である。遺構外から出土する3片については小片あり、種別の判別は難しい。SK-18出土の石棒は小型であり、縄文土器蓋と赤色小礫2ヶともに覆土下層から出土する。遺棄或いは埋納の可否は判然としない。

石材は三波川帯の緑色片岩と分析されている。調査区内にはSK-18石棒以外の出土はない。遺跡内への持ち込みが石材であったか、製品であったかは不詳である。

【砥石】

可能性のあるものが7点出土する。遺構内から3点（SK-286・SD-49）、遺構外から4点である。火熱に起因するとみられるススの付着が観察されるものもあるが詳細は不明である。

【その他の小礫】

石器としての使用痕は観察されないが、形状が類型化されるものや石器素材の可能性、色調が赤色であり、SK-18 同様の赤玉が想起されるものについて一括する。平面形状は長円形・円形状・バナナ形状・三角形・磨製石斧状など、厚さは扁平なもの・厚みのあるものに類別される。大きさは（大）・（中）・（小）に3大別されようか。長円形や円形状・扁平のものについては石鍾素材が考慮される。バナナ形状のものの中には外側部に段差をもつものがあり、編み物石の縄掛け部状の用途である可能性も考慮される。

【礫】

調査区内からは石器・石製品や類別可能な礫の他、自然礫や石器・石製品或いは自然礫の破砕片が出土する。この中には、被熱により赤色変化やススの付着の認められる礫・礫破片が多くみられる。炬材そのものや火熱による破砕礫など、火処関連する石材と判断される。また、明らかに未製品や石器破片とみられるものや、加工痕等は認められないものの形状や石材から石器素材が疑われるものも少なくない。これらの礫が遺構内から出土することについて、意図があるか否かを判じるには深慮を要する。

石材自体については、附章「岩石鑑定」に自然科学分析の詳細を記載する。全ての石器・礫について鑑定を行うことは叶わなかったが、石材を網羅すべく、似た特徴の石材の中から複数を選定し、鑑定に付した。

調査区内で出土する岩石は、安山岩・輝石安山岩・多孔質輝石安山岩・玄武岩・デイサイト・流紋岩・砂岩・黒雲母角閃石花崗岩・角閃石黒雲母花崗岩・石英閃緑岩・微閃緑岩、ひん岩・閃緑斑岩・花崗斑岩・石英斑岩・ドレライト・流紋岩質凝灰岩・溶結凝灰岩・火山礫凝灰岩・変質流紋岩（赤玉石）・トレモラ閃石岩・デイサイト質凝灰岩・凝灰岩質泥岩・泥岩・珪化木・頁岩・珪質頁岩・チャート・玉髄・脈石英・董青石ホルンフェルス・ホルンフェルス・粘板岩・緑色片岩などと判別される。

安山岩系や花崗岩系、ドレライトなどは那珂川流域及びその水系である箆川上流、砂岩・頁岩・チャートなどは八満山麓で採取可能な岩石であり、岩舟台遺跡集落構成員が持ち込んだ可能性が高いと判断されるが、近隣遺跡からの持ち込みも考慮の一端にあげておきたい。集落内に持ち込まれた岩石は集落内において、礫石器や剥片石器などに加工されたと判断できよう。遺跡内から石器類破片や剥片等が出土する背景には、遺跡周辺での容易な岩石採集に起因する日常使用具調達の実用性があると考えられる。

凝灰岩系や輝石安山岩、流紋岩、玉髄、赤玉石の採集地は鬼怒川流域とされる。本遺跡から鬼怒川流域までは最短距離にして直線約20.0km西方である。岩舟台遺跡集落構成員の持ち込みとともに関連集落からの岩石及び製品の持ち込みの可否を考慮すべきであろう。

特筆されるのは、トレモラ閃光岩・緑色片岩、良質な岩相の珪質頁岩である。トレモラ閃光岩は埼玉県長瀬など、緑色片岩は三波川帯、珪質頁岩は東北地方の日本海側に産出する。調査区内では、緑色片岩は石椀、珪質頁岩は剥片石器・剥片として出土する。トレモラ閃光岩は礫としての出土であるが、他遺跡においては磨製石斧の例があると聞く。これら、移入岩石とみられる石材が、素材として持ち込まれたか、製品として持ち込まれたかについては更に考慮する機会を待ちたい。

④遺物出土状況

遺物の出土状況については、現地調査時より、大小様々な礫が多く出土する点や、土器が小片で出土する点などから、その埋没状況について疑念の残るところであった。本報告においては、各遺構出土遺物の時代

幅や種別を明らかにし、遺構の埋没状況を明らかにすることを念頭に、古墳など時代の異なる遺構から出土する縄文時代の遺物についても、石鍬や土製円盤など種別ごとの事実記載ではなく、遺構ごとに事実記載を行った。遺構内出土遺物については、縄文土器の時期幅をもって小片での出土する点や、赤彩土器が小片で多くの遺構から出土する点、覆土中に大小様々な礫が出土する点など、袋状土坑、土坑、溝状遺構、古墳周溝など、時代差があると判断される遺構において共通する出土状況が看取される。また、土製円盤の多くが周縁研磨は施されるものの不整形である点、打製石斧や石皿の破片や未製品、石器・石製品等の材とみられる礫・礫塊などが出土する点などを鑑み、少なくとも、袋状土坑については、埋没時における不要品等の意図的な混入や、大礫をもって土量を補足する等の意識が存在した可能性が推測される。更に、腕輪小片（C区SK-123）や破砕した緑色の打製石斧（B区SK-294）、石棒・赤玉・石皿の伴出（SK-18）、縦方向に半載した胡桃状の磨面を持つ石皿（SI-85・遺構外）などから、埋納への意識の可否について考慮を要すると考えられる。

（2）遺構

今回の調査では住居跡、袋状土坑、土坑、ピット、埋設土器などを確認した。遺構の時期は、中期後葉加曾利E式～後期前葉堀之内式の範疇と考えられる。基本土層（第9図）によれば、P-219は基本土層14層を掘り込み、P-171・172は14層下面に掘り込まれる。遺物の出土がなく、明確な時期が不明である遺構については、縄文時代以降の可能性を含め、遺構の時期差が想定される。

住居跡は可能性のあるものも含め6軒が確認された。調査区幅や上面の削平などから全容を確認し得た住居跡はなく、総じて不詳な点が多い。SI-85のようにピットの配置での推定やS-180のように調査区壁際の礫から石囲戸と想定し住居跡としたものもあるが、判断し得ず、土坑として記載したSK-101・140のような遺構もある。

袋状土坑は38基、土坑は64基が確認された。表105のとおりである。分布状況を見ると概ね調査区全域に及ぶが、土器片の出土状況と同様に、礫層部であるS-84や自然の落ち込みであるS-222、B-C間のD-9グリッド付近、A区への分布は少ない。平面形は概ね円形状或いは楕円形状である。遺構上部は後世の削平により判然としませんが、底径は2.0m前後・1.0m前後の大小に区分される傾向がみられる。報文中に概要を記したが、土坑として事実記載を行った、底径2.0m前後の遺構については袋状土坑の可能性が残る。古墳時代の埋葬施設の可能性があるSK-131をはじめとする方形のSK-36・112・225・251・260・271・287には古墳時代以降の可能性があろう。

袋状土坑は、地山となるローム層或いは礫層を底面とする。底面レベルに差異はあるが、微地形に由来するものと判断される。遺構内には品川台遺跡（第5図18）で指摘されたような貯蔵を意図した砂層や可視できる種実等の出土は確認されなかった。

覆土の堆積状況からは、SK-05・71・73・74・75・106・151などのように埋め戻しや遺構上位が取り払われ埋没した状況が窺われる。また、覆土の堆積状況からは明瞭に判断し得なかったが、SK-73等の他にも、挟り込み部の堆積が壁面等の崩落層とは判断し難く、土坑の重複が示唆される遺構が複数ある。遺構の重複については、A区SK-50・SK-297のように加曾利E式期の土坑に後期前葉の土坑が重複したと判断される事例が確認されている。このような事例から、土坑の重複、覆土の堆積状況、時代を問わず出土土器片の時期幅が大きい点を考え併せ、本調査区の袋状土坑と土坑の在り方は、加曾利E式期～後期前葉まで土坑が重複した結果と捉えることができるものと考えられる。この場合、報文に記載した遺構の時期は最終的な遺構の時期を示したことになる。例に挙げるならば、SK-06の挟れ部に先行する時期の土器が残り、重複す

るSK-05との新旧関係が、出土遺物を総じてとSK-06が先行するにも関わらず、覆土の堆積状況はSK-05が先行するのはこのためと考えられる。また、遺構の底径が2.0m前後と1.0m前後に区分される傾向や先述の「④遺物出土状況」などを鑑み、中期後半の底径2.0m前後の土坑と後期初頭以降の底径1.0m前後の土坑が、時期による土坑の形状や大きさの差異は認められるものの、集落における同様の役割を担って重複した結果と推定しておきたい。

表 105 岩舟台遺跡土坑一覧表

区	遺構名	底径 東西×南北	深さ	底面レベル	重複遺構	出土遺物		特記
袋状土坑								
C	SK-04	1.6以上×1.94	0.9	149.64		加曾利式前半	→	後期初頭
C	SK-05	1.85	0.4	149.88	SK-6	加曾利式後半	→	後期初頭
C	SK-06	南北2.15	0.45	150.10	SK-5	陶山式→加曾利式中頃	→	後期初頭～前葉
C	SK-07	1.6×1.4	0.55	150.06	SK-6	加曾利式中頃		
C	SK-08	2.4以上×2.4	0.55	150.35		加曾利式中頃	→	後期初頭～前葉
C	SK-16	1.6×1.7	0.2	150.50		結構式→加曾利式中頃	→	後期前葉
C	SK-17	2.1	0.2	150.00		加曾利式中頃	→	後期初頭～前葉
C	SK-20	1.75×1.3	0.4	150.08		加曾利式中頃	→	後期初頭
B	SK-45	0.8以上×0.9	0.5	150.70		(加曾利式後半)	→	後期前葉 堀之内1式期か
A	SK-50	0.9×1.4	0.47	151.14	SK-274・297	(加曾利式中頃)	→	後期前葉
A	SK-53	1.0	0.3	151.10		中期末葉～後期初頭	→	後期前葉
B	SK-55	南北1.03	0.6	150.74	SK-200	加曾利式後半	→	後期初頭
B	SK-63	0.66×0.75	0.4	150.84	SK-294			堀之内2式期か
C	SK-71	1.6以上	0.9	150.00		加曾利式前半	→	後期初頭～前葉
C	SK-73	1.6×1.9	0.7	150.10		加曾利式後半	→	後期前葉
C	SK-74	1.75	0.6	150.25	SK-75	加曾利式後半	→	後期初頭
C	SK-75	1.8×2.4	0.65	150.05	SK-74	加曾利式後半	→	後期前葉 袋状土坑か
C	SK-80	0.9以上×1.0以上	0.6	150.12		陶山式→加曾利式後半		
C	SK-82	南北0.9	0.4	150.50				土層出土なし
C	SK-99	1.35	0.7	149.90		中期末葉～後期初頭	→	後期前葉 注11.器小片(加曾利B式か)
B	SK-103	1.4×1.2	0.25	150.12	SK-106	加曾利式後半	→	後期前葉 堀之内2式期か
B	SK-105	0.92	0.4	150.02	SK-103・286			後期初頭 出土遺物少
B	SK-106	2.2×2.08	0.35	150.07	SK-103・286			後期前葉 出土遺物少 加曾利式前半か
B	SK-108	0.93	0.45	150.40	SK-292	加曾利式前半	→	後期前葉
B	SK-121	—	0.38	151.30		中期末葉～後期初頭	→	後期前葉
C	SK-123	1.45	0.25	150.24		中期末葉～後期初頭	→	後期前葉 調査区外のため底径不明
C	SK-124	1.25	0.4	150.18		加曾利式後半	→	後期前葉 陶輪片出土
C	SK-125	—	—	150.00				後期初頭～前葉
B	SK-148	0.95	0.4	150.00	SK-149			土層出土なし
B	SK-151	1.65×1.45	0.7	150.81	SK-166	加曾利式後半～後期初頭	→	後期前葉
B	SK-153	1.2	0.7	150.40	SK-152			後期初頭
B	SK-156	1.6	0.2	150.10	SK-287			加曾利式後半
B	SK-166	1.0×1.1	0.4	150.10	SK-151			後期前葉 堀之内2式期か
B	SK-178	1.2	0.4	150.10				土層出土なし
C	SK-181	—	—	150.30				加曾利式後半
B	SK-227	1.35	0.1	150.33	SK-106			(後期か) 出土遺物なし
B	SK-280	2.4×2.4以上	0.45	150.20	SK-106・156	SK-36		土層出土なし
B	SK-294	0.5	0.3	151.06	SK-63			後期前葉以前
土坑								
C	SK-18	1.0	0.25	149.90				後期初頭 石種・赤玉・石皿出土
C	SK-19	1.0	0.23	150.24	SK-23・102			後期初頭～前葉
C	SK-23	0.4	0.2	150.33	SK-19			後期前葉
B	SK-32	1.24	0.4	150.20	SK-33			出土遺物なし
B	SK-33	0.86	0.2	150.20	SK-32			
B	SK-36	2.9×0.65	0.4	150.35	SK-286			縦長状 土層出土なし 古物時代か
B	SK-47	1.15×0.9	0.3	150.94		中期末葉	→	後期前葉
A	SK-51	1.0	0.2	151.32	SK-272	加曾利式後半	→	中期末葉
A	SK-52	0.9	0.15	151.40		加曾利式後半	→	中期末葉～後期初頭
A	SK-61	0.67以上×0.5以上	0.18	151.42	SK-275			出土遺物なし 縦長状
A	SK-62	—	0.18	151.11		後期初頭	→	後期前葉 平面形不詳
B	SK-87	—	0.1	151.20				中期末葉～後期初頭 平面形不詳
A	SK-96	0.56	0.03	151.35				加曾利式後半～後期初頭
C	SK-100	0.4×0.7	0.3	150.08		(埋戻し)		後期前葉
C	SK-101	0.37	0.5	150.35				
C	SK-102	—	0.13	150.70	SK-19			出土遺物なし
B	SK-110	0.65×0.48	1.2	150.30				土層出土なし 方形状
C	SK-112	1.3×0.85	0.85	150.25	SK-290	加曾利式後半～後期初頭		後期前葉 方形状
C	SK-128	—	0.5	150.01	SK-129			土層出土なし
C	SK-129	—	0.2	150.21	SK-128			土層出土なし

区	遺構名	底径 東西×南北	深さ	底面レベル	重層遺構	出土遺物		特記
C	SK-131	1.56×0.9	0.4	149.60				方形坑 出土遺物なし 古墳時代か
C	SK-133	1.55	0.55	150.10		加曽利式後半		平面不整形
C	SK-135	1.15	0.5	150.10		後期初頭	→	後期前葉
C	SK-137	1.1	0.2	150.20	SK-16			出土遺物なし
C	SK-138	0.4×0.8	0.3	150.40	SK-139			土器出土なし
C	SK-139	1.0以上×1.2以上	0.72	149.95	SK-138	中期末葉	→	後期初頭 平面形不詳
C	SK-140	1.5	0.3	150.45				中期末葉～後期初頭
B	SK-149	1.0×0.8	0.46	149.90	SK-148			(後期初頭以降)
B	SK-152	(2.0以上×1.5)	0.3	150.22		加曽利式後半～後期初頭	→	後期前葉 傾斜木か
B	SK-157	0.5×0.4	0.08	150.68				出土遺物なし
B	SK-159	0.55以上×0.4	0.26	150.62	SK-245			中期末葉～後期初頭
B	SK-160	0.65	0.9	149.32		中期末葉	→	後期前葉
B	SK-161	0.88×0.68	0.57	149.64		後期初頭	→	後期前葉
B	SK-162	0.73	0.5	149.71				(後期初頭)
B	SK-173	1.5	0.2	150.18		中期後半	→	後期前葉 出土遺物少 口土器小片 (堀之内2式か)
C	SK-183	0.9	0.2	150.10				土器出土なし
C	SK-185	—	0.5	150.30				土器出土なし
C	SK-186	—	0.25	150.55				出土遺物なし
C	SK-187	0.3	0.3	150.48				出土遺物なし
C	SK-213	0.42	0.3	150.20				出土遺物なし
C	SK-214	0.85	0.27	150.00				出土遺物なし
B	SK-225	0.28×4.5	0.36	150.39				方形坑 出土遺物なし
B	SK-230	0.78×1.0	0.12	150.39				出土遺物なし
C	SK-237	0.65	0.35	150.40				出土遺物なし
C	SK-238	—	0.25	150.60	SK-290			平面不整形 時期不明
B	SK-250	0.9以上×0.6	0.23	150.84	SK-251			平面不整形 出土遺物なし
B	SK-251	0.4	0.31	150.98	SK-250			方形坑か 出土遺物なし
B	SK-252	0.3	0.26	151.90	SK-153			出土遺物なし
B	SK-259	0.55×0.65	0.1	151.81				出土遺物なし
B	SK-260	1.15×0.67	0.8	151.90	SK-295			方形坑 出土遺物なし
A	SK-270	—	0.35	150.97				平面形不明 出土遺物なし
A	SK-271	東西0.25	0.2	151.12	SK-62			縦長坑 出土遺物なし
A	SK-272	0.57	0.08	151.44	SK-51			出土遺物なし
A	SK-273	1.0	0.2	151.40				出土遺物なし
A	SK-274	0.35	0.36	151.25	SK-50・297			出土遺物なし
A	SK-275	0.4	0.13	151.47	SK-61			平面形不明 出土遺物なし
C	SK-285	0.82×0.74	0.1	149.92				出土遺物なし
B	SK-287	1.9以上×0.8	0.7	149.95		中期末葉		後期前葉 方形坑 古墳時代の可能性あり
C	SK-288	0.2	0.28	149.48				出土遺物なし
B	SK-290	0.5以上×0.4	0.5	150.40	SK-112・238			方形坑 出土遺物なし
B	SK-292	0.85以上×0.65	0.1	150.78	SK-108			方形坑 出土遺物なし
B	SK-295	0.87	0.33	150.03	SK-55・260			土器出土なし
B	SK-296	0.64	0.38	150.84				出土遺物なし
A	SK-297	0.8	0.4	151.20	SK-50・274	(加曽利式の中頃)	→	後期前葉 SK-50として遺物取り上げ

(3) まとめ

今回の調査区では、これまでの発掘調査の成果から岩舟台遺跡の住居エリアから貯蔵エリアにあたるもの想定に違わず、石囲がや土坑群が確認された。しかし、先述のSK-05・73等の覆土の堆積状況や諸遺物の出土状況など、現地調査時からの疑念も少なくない。これらの疑念を払拭すべく自然科学分析を援用したが、以下、自然化学分析結果を併せ、現地調査、整理作業を通じて留意された点を記し、まとめとした。

石材鑑定から東北地方日本海側の地質に由来する珪質頁岩(剥片など)、荒川上流の三波川變成岩類に由来する緑色片岩(SK-18石棒)の移入が確認されたことは、土器の特徴から示唆される関東甲信越、東北地方及びこれらを繋ぐ地域などとの関連をより明確化するものといえよう。併せて、鬼怒川流域で採取可能な赤玉石や玉髓、八溝山地及び周辺地域で採取可能な頁岩などの出土から、近隣の他集落との関わり方も含め検討すべきと考えられる。

袋状土坑、土坑については、時期幅の大きい土器片の出土、埋め戻しや遺構上位が取り払われ埋没した可能性が窺える覆土の堆積状況、SK-50：SK-297の重複例にみえる時期差のある遺構の重複の可能性を鑑み、中期後葉～後期前葉まで遺跡内で同様の役割を担う土坑が重複する可能性を指摘した。今回の調査以前の調査成果からの想定であれば、貯蔵穴エリアが出土土器の主体となる時期である加曽利式E期～堀之内式

期まで継続して利用された結果と判断される。しかし、遺構内から出土する土器のうち完形に近いものは、SK-06-1、SK-74-10、SK-106-1・2など数点であり、大方が接合個体のない小片である。更に、土器片の内外にオコゲ状の付着物が顕著なものも少なくないが、SK-74-10内面のオコゲ状付着物の窒素・炭素安定同位体比質量分析（附章参照）からはドングリの煮炊き痕跡が示されており、完形＝貯蔵用とは一概に判断できない。また、SK-04・05・06・07・08・151の微細物分析からは、オニグルミ・クリなど可食植物の微細堅果が多数確認されているが、大半が食用にならない果皮の微細片であり、可食部を取り出した後の食物残渣の可能性、及び、埋設土器であるSK-179やSZ-31の埋葬施設であるS-35と同様の検出結果であることから、貯蔵穴に利用された可能性を積極的に支持するには至らないとの指摘がなされている。加えて、堅果類の出土の最も少ないSK-06覆土の炭素・リン酸・カルシウム分析からは、リン酸含量が低く貯蔵用として利用された可能性が窺えないとの指摘や、SK-151覆土の炭素・リン酸・カルシウム分析では腐食含量に対してリン酸含量が多いことから動物由来等の要因であるとの指摘もなされている。土層の堆積速度が速かった可能性が指摘された花粉分析の結果や、小片での土器の出土、破砕品・未製品の出土、拳大～人頭大を超える多量の礫の出土から、埋設時の土坑の用途は貯蔵穴ではなく、不要物の廃棄・遺棄に関わる土坑であり、埋没は人為を以て速やかに埋め戻された可能性を提示しておきたい。貯蔵穴であった土坑を廃棄・遺棄坑とした可能性も考えられるが、SK-74-10が重複前の加曽利EⅢ式期の土層とみられる19層以下の床面からの出土であることや、SK-06-5・6の深鉢形土器が口縁部付近のみが残存し極めて脆弱であること、リン酸・カルシウムの含量分析から墓塚の可能性が指摘されたSK-179の埋設土器（称名寺式に並行する加曽利EⅡ式）などから、本調査区が貯蔵穴エリアとして継続したとの断定にも深慮を要しよう。

また、後期以降を中心に、SK-18から基部を欠損した石棒・赤玉・石皿・蓋形とみられる小片が伴出することや、SK-63などの注口土器、SK-73・123からの腕輪片、赤彩土器の小片の出土も十分に留意されるべき点であろう。更に、磨製石斧や土偶の出土がない点、疑念が残る。磨製石斧については、磨製石斧への利用例のあるトシモラ閃光岩の出土があり、調査区外の遺跡地に存在する可能性は残る。磨製石斧や土偶をもたない集落であるのか、遺跡内における利用エリアに起因するものであるのか、今回調査区エリアの役割と併せ、今後の調査によってその性格が明らかとなることを待ちたい。

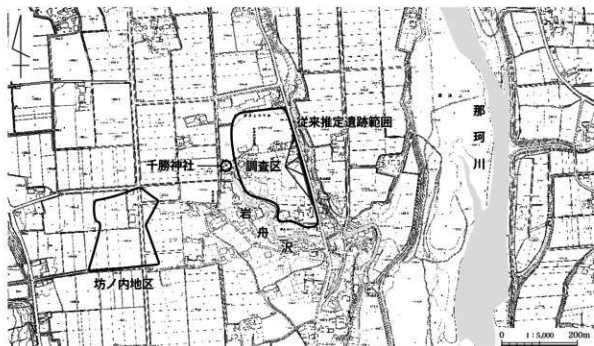
自然科学分析によって、調査区周辺の環境についても幾つかの指摘がなされている。

SK-74覆土及びSK-74-10の深鉢形土器内覆土の花粉・珪酸分析から、キク亜科の花粉が検出されており、遺構の埋没時期が花弁の開花する8～10月である可能性が示唆されている。花粉分析を行った遺構はSK-74のみであり、土坑に共通する特徴であるのか否かは明確にし得なかった。

調査区周辺の環境について、花粉分析からSK-74は乾燥或いは乾湿を繰り返す堆積状況であり、メダケ属（メダケ節やミヤコザサ節）などの竹笹類及びススキ属やチガヤ属などのイネ科本類が生育する比較的乾燥した環境で、部分的にヨシ属が生育するような湿潤な環境であると指摘されている。現在の調査区周辺や岩舟沢の護岸工事の状況からは窺い知ることができないが、岩舟沢周辺の環境が本調査区までおよび、ヨシ属や河畔林要素を持つオニグルミが生育していたと想定できるならば、遺構内に残渣として残るオニグルミが岩舟沢から本調査区周辺で採集したものである可能性も浮かび上がろう。また、クリの微生物も検出されているが、クリが二次林要素を持つことは広く知られており、クリ林、岩舟沢を包括する集落環境検討も俎上にのせられようか。

岩舟沢は、現在、湯津上小学校南西に位置する千勝神社付近で暗渠から地上に露出し、調査区南方を東流する。岩舟台遺跡の遺跡範囲は、岩舟沢北東岸の湯津上小学校から本調査区南側にかけて推定されている（第

204 図)。湯津上小学校校庭には、かつて、径 7.0 m 程の円形のソイルマークが確認できたとの地元住民の証言があるが、大田原市が実施した、配石遺構をはじめとする墓域群が確認された第一次調査区、住居跡が確認された岩舟沢に近い第二次調査区は、この推定範囲内に位置する。遺跡の推定範囲外となる、対岸の岩舟沢南西側には、東京国立博物館に所蔵されている硬玉性玉斧の採集地として有力視される坊ノ内地区（第 2 章第 3 節参照）があり、その北側には耕作地の隅部に人頭大の礫の集積がみられるエリアが広がっている。岩舟沢周辺を包括する遺跡環境の推定が可能であるならば、千勝神社を中心に広がる岩舟沢兩岸エリアを含む遺跡範囲の想定を一要素に、恵み豊かな那珂川の中流域に縄文時代中期～後期にかけて拠点的な集落として展開したと考えられる岩舟台遺跡が考慮される機会を望みたい。



第 204 図 岩舟台遺跡推定遺跡範囲図

第 3 節 古墳時代

1. まとめ

調査区内からは円墳 5 基分、埋葬施設の可能性のある土坑 9 基が確認された。また、現地調査によっては確認し得なかったが、今回の調査終了後に、A 区西側を対象に行われた大田原市教育委員会による発掘調査(第 3 次)から、A 区 SD-49 が円墳周溝である可能性が指摘されている。調査着手以前より、調査区内外に墳丘の確認はなく、岩舟台古墳群については、煙滅したものと認知されているが、地元の古老によれば、以前は大きな塚が目視できたとのことであり、近年の日本梨や畑地開削の際、墳丘は失われたものと考えられる。

古墳は SZ-03・26・30・31・41 が確認された。調査区幅が限定されていることや上面の削平により全容を確認し得た古墳はない。出土遺物も少なく、判然としないが、周溝の形状や調査区内から 5 世紀代とみられる鉄製轡の破片や埴輪片が出土することなどから、概ね 5 世紀代の円墳である可能性が考えられる。ただし、SZ-30 周溝からは 7 世紀代の特徴を有する粗製土器が出土する。周溝からは縄文土器片の出土が多く、周溝に伴出するものか、判然としない。

墳丘は、SZ-41 に盛土或いは旧表土の可能性のある第 9 図 15 層が堆積する。SZ-26 周溝付近、SZ-31 の埋

葬施設とみられる S-35 付近、SK-184 付近には粒径の大きいロームブロックを含む層が堆積する。盛土と考えられるが、周溝外へ堆積が続くことや部分的な堆積であることなどから、表土或いは填丘盛土が削平に際し再堆積したものと判断した。また、各古墳の周溝覆土上層には粘性のある黒色土の堆積が共通して確認される。SZ-41 周辺の表土 1 層（第 9 図 7 層）や調査区内の複数箇所においても特徴の似た黒色土が確認される。第 9 図 15 層などの堆積とあわせ、後世の削平に伴い填丘や旧表土が削平・整地された可能性を指摘しておきたい。

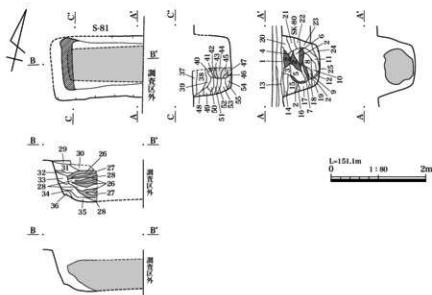
墳丘の構造については不詳な点が多いが、SZ-41 墳丘 1 層下のローム漸移層の堆積が薄いことから、ローム漸移層を墳丘基底層とすべく整地している可能性が考えられる。

SZ-03・26・41 には覆土の堆積状況から周溝内土坑が想定される。SZ-26：61～63 層については、現地調査時より、シャリ感のある質感が留意された。SZ-03・26 については、拳大から人頭大の礫の出土から、周溝内土坑への付設が考慮される。SZ-41 周溝内土坑については、古墳周溝埋没後に掘り込まれたとみられ、古墳との時期差が推定される。用途・古墳との関連は不詳であるが、箱状の堆積である 13 層を中心に、14～17 層を下部構築土、11・12 層を周囲の埋土、8～10 層を上面埋土と想定される。土坑を掘り込み、14～17 層で基底部を構築、13 層を据え、11・12 層、42・43 層で 13 層上面まで埋め戻し、8～10 層で被覆したと考えておきたい。

5 基分の古墳については周溝をもって確認したが、確認状況は良好でない。SZ-03・31 は部分的に、SZ-26・30・31 は半部ほどが確認された。SZ-31 の周溝北辺については明確ではない。遺構確認面で埴輪片が出土した SD-83 や周溝内から埴輪片が出土した SD-37 に可能性があるが、周溝の有無も含めて判断としない。

周溝の残状状況についても、上面の削平により良好ではないが、遺構確認面からの深さは 0.4 m～0.7 m、周溝底面の幅 1.0 m 前後 1.6 m 前後を確認した。周溝幅に比して深めに掘りこまれた印象が強い。SZ-41 周溝の底面は南東部が低く、小ピットが密集する。付随する施設等の可能性があるか。

埋葬施設は、SZ-26 埋葬施設とみられる S-81、SZ-30 埋葬施設とみられる S-21、SZ-31 埋葬施設とみられる S-35・95、古墳との関連の明確でない SK-184 を確認した他、埋葬施設の可能性の高い SK-36・112・



第 205 図 S-81 土層・埋葬部構成図

131・225・251・260・271・287を確認した。S-81、SK-184、SK-36・131はロームブロック充填層と黒色土層が交互に幅狭の横縞状に堆積する。掘乱穴と極めて似た堆積土であり、SK-131については土層の観察を逸している。

墳丘上での位置は、S-81はSZ-26のほぼ中央に位置するが、S-21、S-35・95は周溝寄りに位置する。主軸を描いて位置するS-35・95については、埋葬主体等諸条件は異なるが、大田原市蛭田富士山遺跡（第6図24）の埋葬施設と似た位置である点、留意される。S-21については、SZ-30の主たる埋葬施設が墳丘中央部に位置する可能性が高いと判断されるが、SZ-31については、S-35・95北側は砂礫層であるS-84であり、地形的な制約からS-35付近に主たる埋葬施設が置かれた可能性も残る。

SZ-41については、周溝内の中央部に円形の掘り込みが確認される。粒径の大きいロームブロックが層状に堆積するが、S-35・81、SK-184、SK-131などに比べ、ロームブロックが格段に大粒であること、形状、梨畑に利用される肥料穴の形状と一致することから、掘乱穴と判断した。なお、同様の形状の掘り込みがSZ-41北辺の北側に確認されている。

S-81・S-35、SK-184は横断面に木棺の痕跡とみられる円形の堆積が観察される。

S-35は棺体の痕跡が明瞭に観察される。特に棺蓋部とみられる黒色土層（16・18・66層）は粘性を伴って明瞭に分層される。S-81は粘性のある黒色土層（第205図SP-A・Bトーン部）が堆積するが、リン酸含量分析から植物体によって富化された可能性が指摘されており、棺蓋の痕跡層である可能性が高まったものと考えられる。

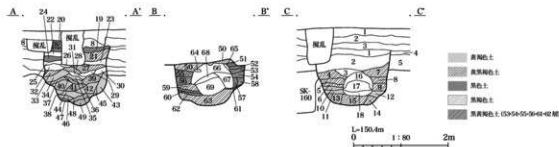
S-81の円形の堆積は、上面水平、底面は逆台形状に立ち上がる。縦断面は西端部にむかって、船の舳状に立ち上がることから、舟形木棺と推察される。土壌の中軸線上に位置し、船の舳状の西端部にむかって窄まる形状（第205図）にある。土壌自体は長方形であり、埋納部の形状を反映しないが、土壌底面の西壁際のロームが杖状に掘り残されており、埋納部西端部の舳状の立ち上がりが意識された可能性も考え得る。埋納部上面は水平とみられる（第205図）。

S-35は、現地調査時には割竹形木棺との認識があったが、縦断面の西端部は下部に突出部が観察される（第174図）。突出部が上部にあるS-81とは異なるが、舟形である可能性も否めない。

S-21・95については埋納部の堆積状況は明確ではないが、平面形の南端部・西端部が窄まる形状にあり、舟形の可能性が考えられる。S-95については、1・2層の堆積がS-35：17・18層の堆積に似ることから、S-35同様の埋納形態を考慮したい。

SK-184の平面形については調査区際にあり縦断面の観察はし得なかった。

報文に記載したとおり、S-81・S-35の堆積状況から特徴の異なる土層による閉塞順序を推定した。S-81については、土壌がさらに上位から掘り込まれたと判断されるが、閉塞順序①～⑤を想定した。埋納部の



第206図 S-35土層構成図

上下は最下層②・最上層⑤であり、ロームが多用される。特に、上面を覆う⑤は地山と見紛うロームの堆積であり、閉塞への強い意志と捉えられようか。しかし、埋葬施設中央部とみられるSP-C南側のみ、堆積層にロームが多用され、①の黄白色粘質土の敷設や②のロームの堆積がみられないなど、特徴を異にする。

埋葬施設からの出土遺物は、S-21から刀子とみられる鉄製品片、鉄鍔片、S-35から鉄刀、束状の鉄鍔、鉄鍔片が出土する以外は縄土土器片である。S-35出土の鉄刀は鞘や刀装具とみられる木質部や繊維片の付着が観察される。鞘木の内部まで茎元部が入り込む可能性があり、刀身に跳えられたものではない可能性も高い。鉄鍔は破片であり時期等の詳細は明瞭ではない。S-35出土の束状の鉄鍔に観察される革状の付着物は藪か。

S-35出土の鉄刀・鉄鍔については、報文中に記載したとおり、遺構底面付近15層(第173図)に相当する礫を多量に含む堆積層中から出土しており、想定される埋納部からの出土とはみられない。堆積土のリン酸含量分析によっても、埋納部直下土にリン酸含量が特に多く検出されており、遺体埋納の痕跡である可能性が指摘されている。堆積状況からは棺蓋部の明瞭な堆積に比べ棺身下部の堆積は底部18層の堆積と相まって判然としにくい。埋納部被覆後、早い段階で棺身下部が腐食等によって崩落した可能性に加え、当初より棺身が存在しなかった可能性も念頭に考慮すべきか。

また、微細物分析によれば、S-35・S-81から、稲の穎・胚乳・大麦の穎・胚乳・小麦の胚乳・麦類の胚乳・穂軸・粟の胚乳・ヒエ近似種の穎・胚乳・キビとみられるの胚乳の炭化種実が確認されている。調査区周辺での栽培であるか、持ち込まれたものであるか、判別できないものの、当時の利用植物質食糧と示唆され、埋葬品に由来する可能性が指摘されている。と、同時に、非可食部の穎(稗)が残る顆粒が検出されていることから、稗がついた生の段階で食用されずに火を受けた可能性も指摘されている。資料の蓄積、葬送儀礼の解明を待たねばならないが、一案として、生者と区別をなすため、別火に供された可能性をあげておく。

最後に、岩舟台古墳群の自然環境について、自然科学分析からの指摘を含め、留意された点をあげる。

A・B・C区の原地形の起伏については、基本土層から、B区北半部・C区は窪地であるB区南半部より小高い地形であるとの推定を試みた。墳丘は既にないが、古墳を高くみせる視覚効果から選地された可能性はあろうか。また、狭小な調査区にあってさえ、地形の変化が示唆されることから、古墳群は複雑な地形の元に展開されたといえよう。特に、B区SZ-31付近の地山面の起伏や砂礫層の露出面レベルの高い自然地形S-84付近については、古墳築造への利用・制約が窺われる。

堆積土の微細物分析からは、調査区南端のSZ-03周溝から河畔林要素のミズキ、SZ-26埋葬施設とみられるS-81から河畔林要素のキハダ、二次林要素のアカマツ、SZ-31埋葬施設とみられるS-35から山地落葉樹林内生育のアオハダが検出されている。那珂川や岩舟沢流域の森林に生育していたとみられ、縄文時代以降古墳時代に至るまで、岩舟沢の環境が本調査区周辺まで及んでいたものと考えられる。また、S-35からは中生植物のイネ科、湿性植物テンキ近似種も検出されている。本調査区周辺の草地への生育が指摘されており、やや湿った草地の存在が推測されている。岩舟沢の影響であるとともに、何らかの水利利用の可能性、或いは湿地が古墳築造への制約にならなかった可能性などが考えられる。

地形や自然環境なども踏まえ、岩舟台遺跡の今後の調査の一助になることを願う。

附章 自然科学分析

平成 26 年度 岩舟台遺跡発掘調査に係る自然科学分析業務

(株) 火山灰考古学研究所

- I. 岩舟台遺跡の土層とテフラ（テフラ分析）
- II. 岩舟台遺跡出土 SK-74 内土器における内面付着物の窒素・炭素安定同位体比質量分析
- III. 岩舟台遺跡における植物珪酸体分析
- IV. 岩舟台遺跡における花粉分析
- V. 岩舟台遺跡における種実同定

I. 岩舟台遺跡の土層とテフラ（テフラ分析）

1. はじめに

関東地方北部に位置する栃木県域とその周辺には、男体山をはじめとする日光火山群、那須、赤城、浅間、榛名など北関東地方とその周辺に分布する火山のほか、中部地方や中国地方さらには九州地方など遠方に位置する火山から噴出したテフラ（火山砕屑物、いわゆる火山灰）が数多く降灰している。とくに後期更新世以降に降灰したそれらの多くについては、層相や年代さらに岩石記載的な特徴がテフラ・カタログ（町田・新井、1992, 2003, 2011）などに収録されており、考古遺跡などで調査分析を行いテフラを検出することで、地形や地層の形成年代、さらには考古学的に遺物や遺構の年代などに関する研究を実施できるようになっている。

大田原市岩舟台遺跡の発掘調査でも、層位や年代が不明な土層や遺構が認められたことから、現地で地質調査を行って、土層やテフラの層序記載を行うとともに、高純度の試料採取を実施した。また、発掘調査担当者により採取された試料も合わせて、実験室内でテフラ分析（テフラ検出分析および火山ガラスの屈折率測定）を実施して、すでに年代が明らかにされている指標テフラの検出同定を実施することになった。

調査分析の対象は、現地調査の対象となった SK-74（袋状土坑）西壁、SZ-26（古墳周溝）東壁、S-35（SZ-31 埋葬施設）東壁、SD-37（古墳周溝）東壁、SD-37（古墳周溝）西壁で、さらに SK-151 から採取された土壌試料に関しても、分析を実施した。

2. 調査地点の土層層序

(1) SK-74（袋状土坑）西壁

調査区西壁における縄文時代と推定されている袋状土坑 SK-74 の覆土は、下位より完形の土器を含む黄色土粒子混じり黒灰褐色土（層厚 10cm）、黄色土ブロックを多く含む暗灰褐色土（層厚 11cm）、黄褐色土粒子を多く含む暗灰褐色土（層厚 8cm）、黄褐色土粒子混じり暗灰褐色土（層厚 7cm）、黄色土ブロック混じり暗灰褐色土（層厚 12cm）、炭化物混じりでやや暗い灰褐色土（層厚 9cm）、黄褐色土粒子混じり灰褐色土（層厚 8cm）、黄褐色土粒子混じり灰褐色土（層厚 8cm）、黒灰色土（層厚 6cm）、上半に白色細粒軽石を含むとくに暗い暗灰褐色土（層厚 18cm、軽石の最大径 4mm）からなる（図 1）。

(2) SZ-26（古墳周溝）東壁

調査区東壁における古墳周溝 SZ-26 の覆土は、下位より暗灰褐色土（層厚 11cm）、黄色土ブロック混じり

灰褐色土（層厚 6 cm）、黄色土ブロック混じり暗灰褐色土（層厚 5 cm）、炭化物混じりで黄色土粒子に富む灰褐色土（層厚 7 cm）、炭化物混じり暗灰褐色土（層厚 11 cm）、暗灰褐色土（層厚 22 cm）からなる（図 2）。その上位には周溝内土坑があり、その覆土は、下位より炭化物を多く含むとくに暗い暗灰褐色土（層厚 25 cm）、黒灰褐色土（層厚 8 cm）からなる。その上位には、さらに暗灰褐色土ブロック混じり灰褐色土（層厚 4 cm）、黄色土粒子を多く含む灰褐色土（層厚 8 cm）、灰褐色土（層厚 5 cm）があり、これらのうち下位の 2 層はいずれも硬くしまっている。その上位には、古墳墳丘部の盛土に由来する黄色砂質土ブロックに富む灰褐色土（層厚 11 cm）、白色細粒軽石混じり暗灰褐色表土（層厚 16 cm、軽石の最大径 3 mm）が認められる（図 2）。

（3）S-35（SZ-31 埋葬施設）東壁

調査区東壁における S-35 の覆土は、下位より垂円礫層（層厚 19 cm）、垂円礫混じりで黄色土ブロックを多く含む灰褐色土（層厚 24 cm）、垂円礫混じりで黄色土ブロックに富む暗灰褐色土（層厚 24 cm）、色調がとくに暗い暗灰褐色土（層厚 17 cm）が認められる（図 3）。これらの土層は、割竹型木棺に關係するものと推定されている。

これらの土層を埋めるかたちで、さらに下位より、黄色土ブロック混じりで垂円礫を多く含む灰褐色土（層厚 11 cm）、黄色土ブロック混じりで垂円礫に富む灰褐色土（層厚 8 cm）、垂円礫を多く含む暗灰褐色土（層厚 8 cm）、黄色土ブロック混じりで垂円礫を少し含む灰褐色土（層厚 10 cm）、垂円礫を少し含む灰褐色土（層厚 10 cm）、垂円礫混じり灰褐色土（層厚 10 cm）が堆積しており、さらに上位に垂円礫混じりでやや暗い灰褐色土（層厚 16 cm）、垂円礫混じり灰褐色土（層厚 31 cm）、炭化物混じりで垂円礫を少し含む灰褐色土（層厚 14 cm）、やや暗い灰褐色土（層厚 13 cm）、暗灰褐色土（層厚 15 cm）、とくに暗い暗灰褐色表土（層厚 18 cm）が認められる。

（4）SD-37（古墳周溝か）東壁

調査区東壁における SD-37 の覆土は、下位より黄褐色土ブロック混じり灰褐色土（層厚 10 cm）、暗灰褐色土（層厚 32 cm）、暗灰褐色土（層厚 7 cm）、黒褐色土（層厚 13 cm）、黄褐色土ブロック混じり黒灰褐色土（層厚 4 cm）、暗灰褐色土（層厚 20 cm）、やや暗い灰褐色土（層厚 16 cm）、とくに暗い暗灰褐色土（層厚 21 cm）、黒褐色表土（層厚 17 cm）からなる（図 4）。

（5）SD-37（古墳周溝か）西壁

調査区西壁における SD-37 の覆土は、下位より垂円礫混じりでやや暗い灰褐色土（層厚 5 cm）、黄褐色土ブロック混じり暗灰褐色土（層厚 12 cm）、暗灰褐色土（層厚 21 cm）からなる（図 5）。その上位には周溝内土坑があり、その覆土は下位より黄色土粒子を多く含む灰褐色土（層厚 18 cm）、暗灰褐色土（層厚 9 cm）、垂円礫や黄色土ブロックを含むとくに暗い暗灰褐色土（層厚 12 cm）、黄色土ブロックに富むやや灰色がかかった褐色土（層厚 5 cm）、暗灰褐色土（層厚 10 cm）、黄色度粒子混じり灰褐色土（層厚 16 cm）、暗灰褐色土（層厚 25 cm）、とくに暗い暗灰褐色土（層厚 20 cm）、白色細粒軽石混じりでとくに暗い灰褐色土（層厚 16 cm、軽石の最大径 3 mm）からなる。

3. テフラ検出分析

（1）分析試料と分析方法

SK-74（袋状土坑）西壁、SZ-26（古墳周溝）東壁、S-35（SZ-31 埋葬施設）東壁、SD-37（古墳周溝か）東壁、SD-37（古墳周溝か）西壁の 5 地点において、層界にかからないように基本的に 5 cm ごとに設定し、採取さ

れた試料のうちの 43 点、さらに SK-151 から発掘調査担当者により採取された土壌試料 1 点の、合計 44 試料について、含まれるテフラ粒子の量や特徴を定性的に把握するテフラ検出分析を行って、テフラの降灰層準とその特徴を明らかにした。テフラ検出分析の手順は次のとおりである。

- 1) 試料 8g を秤量。
- 2) 超音波洗浄装置により泥分を除去。
- 3) 恒温乾燥器により 80℃で恒温乾燥。
- 4) 実体顕微鏡下でテフラ粒子の特徴の概要を把握。

(2) 分析結果

テフラ検出分析の結果を表 1 に示す。比較的多くの試料において、4 種類の火山ガラスを検出できた。それらは、さほど発泡が良くない白色、灰白色、灰色のスポンジ状軽石型ガラスで、珪晶に斜方輝石および角閃石が認められるもの(タイプ 1)、無色透明の繊維束状軽石型ガラス(タイプ 2)、無色透明で平板状のいわゆるバブル型ガラス(タイプ 3)、無色透明や淡灰色の分厚い中間型ガラス(タイプ 4)である。ほかに、淡褐色のバブル型ガラス(タイプ 5)も検出されたが、その量がごくわずかである。また、磁鉄鉱など不透明鉱物以外の重鉱物としては、斜方輝石、単斜輝石、角閃石などが認められる。

1) SK-74 (袋状土坑) 西壁

SK-74 (袋状土坑) 西壁では、いずれからも火山ガラスが少量またはごく少量検出された。火山ガラスは、タイプ 1 をのぞくタイプ 2～4 の 3 種類で、特徴的な火山ガラスの顕著な濃集は認められない。磁鉄鉱など不透明鉱物をのぞく重鉱物としては、斜方輝石が多く、また少量の単斜輝石や角閃石、さらにごくわずかにカンラン石が認められた。重鉱物の組み合わせでも、さほど顕著な垂直的变化は認められない。

2) SZ-26 (古墳周溝) 東壁

SZ-26 (古墳周溝) 東壁でも火山ガラスを検出できたものの、その特徴や出現傾向は SK-74 (袋状土坑) 西壁と異なる。ここでは、試料 22 と試料 16 で比較的多くのスポンジ状軽石型ガラスを認めることができた。火山ガラスの色調は、前者で白色や灰白色、後者で白色、灰白色、灰色である。また、試料 22 から試料 16 にかけては、SK-74 (袋状土坑) 西壁の試料と比較すると、角閃石が多く認められる。

3) S-35 (SZ-31 埋葬施設) 東壁

S-35 (SZ-31 埋葬施設) 東壁では、試料によってタイプ 2 やタイプ 3 の火山ガラスをごく少量ながら検出できた。重鉱物としては、斜方輝石や単斜輝石のほか、ごく少量の角閃石や黒雲母を認めることができた。特徴的な火山ガラス重鉱物の濃集層準は認められない。

4) SD-37 (古墳周溝か) 東壁

SD-37 (古墳周溝か) 東壁では、下部の試料 24 や試料 18 でタイプ 2、試料 20 で灰白色のタイプ 1 の軽石型ガラスをごく少量認めることができた。重鉱物としては、斜方輝石のほかに単斜輝石や角閃石が認められるが、とくに試料 20 では、白色の軽石型ガラスが付着した角閃石を認めた。

5) SD-37 (古墳周溝か) 西壁

SD-37 (古墳周溝か) 西壁では、試料 12 でタイプ 2、試料 18 や試料 14 で白色や灰白色のタイプ 1 の軽石型ガラスをごく少量認めることができた。重鉱物としては、斜方輝石のほかに単斜輝石や角閃石が認められるが、とくに試料 18 や試料 14 では、白色の軽石型ガラスが付着した角閃石を認めることができた。

6) SK-151

白色粒子を含む覆土が認められた SK151 の試料 1 では、火山ガラスが認められないものの、白色の円磨を

受けた礫や風化物が認められた。これらの最大径は 5.1mm である。重鉱物としては、斜方輝石のほか、単斜輝石や角閃石が認められる。

4. 屈折率測定（火山ガラス）

（1）測定試料と測定方法

テフラ検出分析により特徴的な火山ガラスが検出された試料のうち、SK-74（袋状土坑）西壁の試料 20 と試料 12、SZ-26（古墳周溝）東壁の試料 22 と試料 16 の合計 4 試料に含まれる火山ガラスの屈折率測定を実施して、指標テフラとの同定精度の向上を図った。測定には、古澤地質社製温度変化型屈折率測定装置(MAIOT)を使用した。

測定対象は、SK-74（袋状土坑）西壁の試料 20 と試料 12 については、テフラ分析後に、分析篩による篩別で得られた 1/8-1/16mm 粒子中の火山ガラスである。また、SZ-26（古墳周溝）東壁の試料 22 と試料 16 については、>1/4mm 粒子中のスポンジ状軽石型ガラスを実体顕微鏡下でピッキングにより採取した後に、軽く粉砕したものである。

（2）測定結果

屈折率の測定結果を表 2 に示す。この表には、関東地方北西部の後期旧石器時代以降の代表的な指標テフラの火山ガラスの屈折率特性も示した。

SK-74（袋状土坑）西壁の試料 20 に含まれる火山ガラス（36 粒子）の屈折率 (n) は 1.501-1.506 で、modal range は、n:1.502-1.505 である。試料 12 に含まれる火山ガラス(40 粒子)の屈折率(n)は 1.500-1.503 である。一方、SZ-26（古墳周溝）東壁の試料 22 に含まれる火山ガラス（30 粒子）の屈折率 (n) は 1.499-1.507 で、modal range は、n:1.500-1.503 である。また、試料 16 に含まれる火山ガラス（30 粒子）の屈折率 (n) は、1.500-1.505 である。

5. 考察

（1）指標テフラとの同定

SZ-26（古墳周溝）東壁において、屈折率測定の対象にもなったタイプ 1 の、さほど発泡が良くない白色、灰白色、灰色のスポンジ状軽石型ガラスで、班品に斜方輝石および角閃石が認められるテフラ粒子は、その特徴や火山ガラスの屈折率特性から、6 世紀初頭に榛名火山から噴出した榛名二ツ岳渋川テフラ（Hr-FA、新井、1979、坂口、1986、早田、1989、町田・新井、1992 など）、あるいは 6 世紀中葉に榛名火山から噴出した榛名二ツ岳伊香保テフラ（Hr-FP、新井、1962、坂口、1986、早田、1989、町田・新井、1992 など）に由来すると思われる。いずれのテフラも、分布を考慮すると本遺跡周辺に降灰していると考えられる。

タイプ 1 の火山ガラスが比較的多く検出された SZ-26（古墳周溝）東壁の 2 層準のうち、下位の試料 22 付近には、Hr-FA の降灰層準があると推定される。一方、上位の試料 16 に関しては、上位の Hr-FP の降灰層準の可能性もある。ただ、最近 Hr-FA と Hr-FP との時間間隔が従来より長い可能性も考えられるようになってきたが、間がかなり空くことから、Hr-FP の降灰層準とするためには、今後の周辺での調査分析による層位のデータの収集が必要であろう。

タイプ 2 の火山ガラスは、その色調や形態、さらに SK-74（袋状土坑）西壁の試料 20 における火山ガラスの屈折率特性から、約 5,000 年前 *1 に奥会津地方の沼沢火山から噴出した沼沢湖テフラ（Nm-N、只見川第四紀研究グループ、1966a、1966b、町田・新井、1992、2003、2011 など）の可能性が指摘できる。こ

のテフラは、すでに福島県南部においては、縄文時代の指標テフラとして広く利用されている。ただし、屈折率特性だけを見ると、約 1.5 ～ 1.65 万年前に浅間火山から噴出した浅間板鼻黄色軽石 (As-YP, 新井, 1962, 町田・新井, 1992, 2003 など) とも似ていることから、信頼度が高い電子線マイクロアナライザ (EPMA) による火山ガラスの主成分分析を実施して、よりテフラ同定の確度を向上させると良い。また、タイプ 4 の中間型ガラスもこれらのテフラに由来する可能性が高い。

タイプ 3 の無色透明の、またタイプ 5 の淡褐色のバブル型ガラスに関しては、形態的特徴から、巨大噴火の産物と考えられる。色調から、前者は約 2.8 ～ 3 万年前に南九州の始良カルデラから噴出した始良 Tn 火山灰 (AT, 町田・新井, 1976, 町田・新井, 1992, 2003, 2011)、後者は約 7,300 年前に南九州の鬼界カルデラから噴出した鬼界アカホヤ火山灰 (K-Ah, 町田・新井, 1978, 町田・新井, 1992, 2003, 2011) に由来すると考えられる。ただし、いずれも検出量はごくわずかで、今回の分析対象遺構の基盤の堆積物中にその降灰層準はあると考えられる。

(2) 遺構と指標テフラとの層位関係

1) SK-74 (袋状土坑)

SK-74 (袋状土坑) では、濃集は認められないものの、覆土最下部から Nm-N に由来する可能性がある火山ガラスが検出された。このことから、遺構構築後に覆土の流失・除去がないかぎり、その層位はテフラ粒子の産状から、Nm-N より上位の可能性がある。実際、Nm-N は栃木県北部にも広く降灰していることから、前述のように、今後さらにテフラ同定確度が高められると良い。

2) SZ-26 (古墳周溝)

SZ-26 (古墳周溝) の層位は、覆土中に Hr-FA の降灰層準がある可能性が高いことから、Hr-FA より下位にあると考えられる。周溝内土坑に関しては、さほどテフラの降灰層準の認定確度は高くないものの、Hr-FA と Hr-FP の間に層位がある可能性がある。なお、Hr-FA と Hr-FP の間の遺構は、古墳を含めて、群馬県域の榛名火山東麓周辺を中心に多く検出されている。

3) S-35 (SZ-31 埋葬施設) 東壁

S-35 (SZ-31 埋葬施設) に関しては、特徴的なテフラ粒子が認められないことから、層位の認定は難しい。いずれにしても、古墳時代 6 世紀の榛名系テフラが明確に検出されないことは、Hr-FA より下位、あるいは Hr-FP の降灰年代である 6 世紀中葉よりかなり後の遺構の可能性もある。いずれかと言えば前者の可能性の方が高い。本遺跡周辺には、1108 (天仁元) 年に浅間火山から噴出した浅間 B テフラ (1108 年, 新井, 1979) や、1128 年に浅間火山から噴出したと考えられている浅間柏川テフラ (As-Kk, 早田, 1991, 1996) が降灰しているにもかかわらず、今回それらは検出されていない。このことから、遺構の性格から当然とは思われるが、S-35 (SZ-31 埋葬施設) は少なくとも As-Kk より下位にあると考えられる。

4) SD-37 (古墳周溝か)

東壁、西壁のいずれにおいても、覆土下部から採取された試料中に、Hr-FA または Hr-FP に由来する可能性が高いタイプ 1 の火山ガラスや火山ガラスが付着した角閃石が認められた。検出量が少なく、濃集の程度も低いことから、これらとの層位関係は明瞭ではないものの、仮に覆土下部に、より本遺跡降灰した確率が高い Hr-FA の降灰層準があるとすれば、SD-37 (古墳周溝) は Hr-FA より下位となる。

5) SK-151

SK-151 から採取された土壌試料には、白色の礫や風化物が検出されたものの、特徴的なテフラ粒子は検出されなかった。

6. まとめ

大田原市岩舟台遺跡において、地質調査を行って土層層序やテフラの産状の観察記載を行うとともに、高純度で採取した試料を対象にテフラ分析（テフラ検出分析・火山ガラスの屈折率測定）を実施した。その結果、榛名二ツ岳渋谷テフラ（Hr-FA, 6世紀初頭）あるいは榛名二ツ岳伊香保テフラ（Hr-FP, 6世紀中葉）のほか、沼沢湖テフラ（Nm-N, 約5,000年前*1）、始良Tn火山灰（AT, 約2.8～3万年前）や鬼界アカホヤ（K-Ah, 約7,300年前）などに由来する可能性が高いテフラ粒子を検出できた。そして、袋状土坑（SK-74）についてはNm-Nの上位、また古墳周溝（SZ-26）に関してはHr-FAより下位の可能性が高いことが明らかになった。

*1 放射性炭素（14C）年代。

文献

- 新井房夫（1962）関東盆地北西部地域の第四紀編年。群馬大学紀要自然科学編，10，p.1-79。
新井房夫（1979）関東地方北西部の縄文時代以降の示標テフラ層。考古学ジャーナル，no.53，p.41-52。
荒牧重雄（1968）浅間火山の地質。地団研専報，10，45p。
増原 敏（1993）温度変化型屈折率測定法。日本第四紀学会編「第四紀試料分析法2」。東京大学出版会，p.149-158。
町田 洋・新井房夫（1976）広域に分布する火山灰—始良Tn火山灰の発見とその意義。科学，46，p.339-347。
町田 洋・新井房夫（1978）南九州鬼界カルデラから噴出した広域テフラ—アカホヤ火山灰。第四紀研究，17，p.143-163。
町田 洋・新井房夫（1992）「火山灰アトラス」。東京大学出版会，276p。
町田 洋・新井房夫（2003）「新編火山灰アトラス」。東京大学出版会，336p。
町田 洋・新井房夫（2011）「新編火山灰アトラス（第2刷）」。東京大学出版会，336p。
町田 洋・新井房夫・小田静夫・遠藤邦彦・杉原重夫（1984）テフラと日本考古学—考古学研究に關係するテフラのカタログ。古文化財編集委員会編「古文化財に関する保存科学と人文・自然科学」，p.865-928。
坂口 一（1986）榛名二ツ岳起源FA・FP層下の土師器と須恵器。群馬県教育委員会編「荒砥北原遺跡・今井神社古墳群・荒砥青柳遺跡」，p.103-119。
早田 勉（1989）6世紀における榛名火山の2回の噴火とその災害。第四紀研究，27，p.297-312。
早田 勉（1991）浅間火山の生い立ち。佐久考古通信，No.53，p.2-7。
早田 勉（1996）関東地方～東北地方南部の示標テフラの諸特徴—とくに御岳第1テフラより上位のテフラ について—。名古屋大学加速器質量分析計業績報告書，7，p.256-267。
早田 勉（2014）渋川市有馬寺畑遺跡におけるテフラ分析。渋川市教育委員会編「有馬寺畑遺跡」，p.197-211。
只見川第四紀研究グループ（1966a）福島県野沢盆地の浮石質砂層の基底部より産出した木材の14C年代—日本の第四紀層の14C年代XXVI—。地球科学，82，p.8-9。
只見川第四紀研究グループ（1966b）只見川・阿賀野川流域の第四系の編年—とくに沼沢浮石層の層位的諸問題について。第四紀研究，8，p.76-79。

表 1 テフラ検出分析結果

地点名	試料	軽石・スコリア		火山ガラス		重鉱物
		量	色調 最大径	量	形態 色調	
SK-74 (袋状土坑) 西壁	2	*	pm (fb)	無色透明		opx>cpx, (am)
	5	(*)	pm (fb)	無色透明		opx>cpx, (am)
	6	*	bw, pm (fb)	無色透明		opx>cpx, (am)
	8	(*)	bw, pm (fb)	無色透明		opx>cpx, (am, bi)
	10	*	bw, pm (fb)	無色透明, 淡褐		opx>cpx, (am)
	12	*	bw, pm (fb)	無色透明		opx>cpx, (am, ol)
	14	(*)	bw, pm (fb)	無色透明		opx>cpx, (am)
	16	(*)	pm (fb)	無色透明		opx>cpx, am
	18	*	pm (fb), md	無色透明, 淡灰		opx>cpx, am
	20	*	pm (fb), md	無色透明, 淡灰		opx>cpx, am
SZ-26 (古墳周溝) 東壁	12	*	pm (sp)	白		opx>cpx, am
	16	**	pm (sp)	白, 灰白, 灰		opx, am, cpx
	18					opx, am, cpx
	20	*	pm (sp)	白, 灰白		opx, am, cpx
	22	**	pm (sp)	白, 灰白		opx, am, cpx
	24					opx, (cpx, am)
	26					opx>cpx, (am)
	28					opx>cpx, (am)
S-35 (SZ-31埋葬施設) 東壁	6					opx>cpx
	10	(*)	pm (sp)	無色透明		opx>cpx
	12					opx>cpx
	16					opx>cpx, (bi)
	22	(*)	pm (fb)	無色透明		opx>cpx, (am)
	24	(*)	pm (fb)	無色透明		opx, (cpx, am)
	26					opx>cpx
	28	(*)	bw	無色透明		opx, (cpx, am)
	30					opx>cpx, (am)
	34					opx>cpx, (am)
SD-37 (古墳周溝か) 東壁	14					opx>cpx
	16					opx>cpx, (am)
	18	(*)	pm (fb)	無色透明		opx>cpx, (am)
	20	(*)	pm (sp)	灰白		opx>cpx, (am)
	24	(*)	pm (fb)	無色透明		opx>cpx, am
	SD-37 (古墳周溝か) 西壁	12	(*)	pm (fb)	無色透明	
14		(*)	pm (sp)	灰白		opx>cpx, (am)
16						opx>cpx, (am)
18		(*)	pm (sp)	白		opx>cpx, (am)
22						opx>cpx, am
26						opx>cpx, am
28						opx>cpx, am
30						opx>cpx, am
SK-151	1					opx>cpx, (am)

****: とくに多い, ***: 多い, **: 中程度, *: 少ない, (*): とくに少ない。最大径の単位: mm。

bw: バブル型, md: 中間型, pm: 軽石型, sp: スポンジ状, fb: 繊維束状。

重鉱物(鉄鉱物以外)は, ol: カンラン石, opx: 斜方輝石, cpx: 単斜輝石, am: 角閃石, bi: 黒雲母, () : 量が少ないことを示す。

表2 屈折率測定結果

試料・テフラ	火山ガラス		文献
	屈折率 (n)	測定粒子数	
SK-74 (袋状土坑) 西壁・試料12	1.500-1.503	40	本報告
SK-74 (袋状土坑) 西壁・試料20	1.501-1.506 (1.502-1.505)	36	本報告
SZ-26 (古墳周溝) 東壁・試料16	1.500-1.505	30	本報告
SZ-26 (古墳周溝) 東壁・試料22	1.499-1.507 (1.500-1.503)	30	本報告
◀新木原域の代表的な標テフラ▶			
浅間A (As-A, 1783年)	1.507-1.512		1)
浅間B (As-B, 1108年)	1.524-1.532		1)
種名ニツ岳伊香保 (Hr-PP, 6世紀中葉)	1.501-1.504		1)
種名ニツ岳渋川 (Hr-FA, 6世紀初頭)	1.500-1.502 1.498-1.505		1) 3)
浅間C (As-C, 3世紀後半)	1.514-1.520		1)
浅間D軽石 (As-D, 約4,500年前 ¹⁾)	1.513-1.516		1)
沼沢湖 (Nm-L, 約5,000年前 ¹⁾)	1.500-1.505		1)
鬼降アカホヤ (K-Ah, 約7,300年前)	1.506-1.513		1)
浅間神社 (As-SL, 約1.0~1.1万年前 ¹⁾)	1.501-1.518		4)
男体七本桜・今市 (Ni-S・Ni-L, 約1.4~1.5万年前 ¹⁾)	Ni-S 1.500-1.503		1)
浅間御津 (As-K)	1.501-1.503		1)
浅間板鼻黄色 (As-YP, 約1.5~1.65万年前)	1.501-1.505		1)
浅間大窪沢2 (As-Ok2, 約1.6万年前 ¹⁾)	1.502-1.504		1)
浅間大窪沢1 (As-Ok1, 約1.7万年前 ¹⁾)	1.500-1.502		1)
浅間白糸 (As-Sr)	1.506-1.510		1)
浅間栴生 (As-Hg, 約1.9万年前 ¹⁾)	1.500-1.502		2)
浅間板鼻褐色 (群) (As-BP Group)	上部 1.515-1.520 中部 1.508-1.511 下部 1.505-1.515		1) 1) 1)
始良Tn (AT, 約2.8~3万年前)	1.499-1.500		1)
赤城御沼 (Ag-KP, 約4.5~5万年前)	1.504-1.508		1)

1) 町田・新井 (1992, 2003, 2011), 2) 早田 (1996), 3) 早田 (2014), 4) 早田 (未公表)。

本報告：温度一定型屈折率測定装置 (MAIOT), 3)；温度変化型屈折率測定法 (増原, 1993)。

そのほか：温度一定型屈折率測定法 (新井, 1972, 1993)。

*1：放射性炭素 (¹⁴C) 年代。

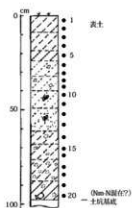


図1 SK-74(袋状土坑)
西壁の土層柱状図

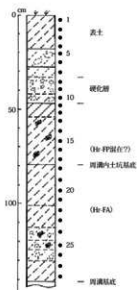


図2 SZ-26(古墳周溝)
東壁の土層柱状図

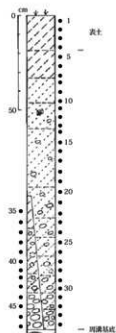


図3 S-35(SZ-31埋葬施設)
東壁の土層柱状図

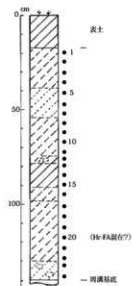


図4 SD-37(古墳周溝か)
東壁の土層柱状図

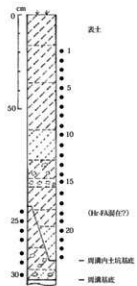


図5 SD-37(古墳周溝か)
西壁の土層柱状図



●:テフラ分析試料の層位。
数字:テフラ分析試料番号。

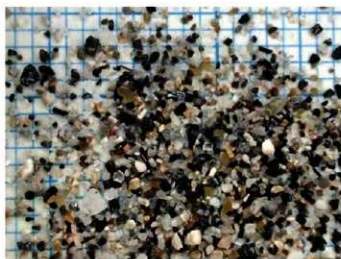


写真1 SZ-26 (古墳周溝) 東壁・試料16 (落射光下)
背景：1mmメッシュ。Hr-FAおよびHr-FPに由来する
可能性がある白色、灰白色、灰色の軽石型ガラスや
角閃石（扁平・黒色）などが含まれる。



写真2 SZ-26 (古墳周溝) 東壁・試料22 (落射光下)
背景：1mmメッシュ。Hr-FAに由来する可能性がある
白色や灰白色の軽石型ガラス、角閃石（扁平・黒色）
などが含まれる。

II. 岩舟台遺跡出土 SK-74 内土器における内面付着物の窒素・炭素安定同位体比($\delta^{15}N$ ・ $\delta^{13}C$)質量分析

(1) はじめに

大田原市岩舟台遺跡の発掘調査の際に出土した SK-74 内土器における内面付着物の正体を探るために、土坑覆土 2 試料、土器内土壌 2 試料、そして土器内面に付着した炭化物 2 試料の合計 6 試料を対象に、窒素・炭素安定同位体比質量分析による物質特性の検討を行った。

(2) 測定原理および方法

1) 測定原理

窒素・炭素安定同位体分析装置は、大きく分けて、元素分析計 (EA)、自動ガス調節装置 (ConFlo)、同位体質量分析装置 (IRMS) という 3 つの部分に分けられる。まず、元素分析計 (EA) で試料の導入、燃焼、ガスクロマトグラフィーによるガスの分離を行う。その後に、分離された CO₂ と N₂ ガスを自動ガス調節装置 (ConFlo) により、ガスの流量調整とレファレンスガスの導入などを行い、同位体質量分析装置 (IRMS) で各安定同位体比を測定する。

オートサンプラーより元素分析計 (EA) に投入されたサンプルは、1000～1050℃の酸化炉に超高純度の He キャリアガスと共に導入される。それと同時に、超高純度酸素ガスが導入され、サンプルを包んだスズカプセルの酸化熱によりサンプルは 1800℃に達し、瞬間的に燃焼されて、充填された酸化剤 (Cr₂O₃) によって、CO₂、NO_x、H₂O に変換される。次に、CO₂ と N₂ の混合ガスは GC カラムによって分離され、ガス自動調節装置 (ConFlo) で各ガスの流量を調整した後、同位体比質量分析装置 (IRMS) へと送られることにより、それぞれの同位体の質量数が測定される。同位体比質量分析システムによる測定結果 (同位体比) は、 δ 値 (大気中の N₂、矢石 (VPDB) からの偏差の 1000 分率、 $\delta^{15}N$ および $\delta^{13}C$ と表記される) として表される。

$$\delta(\%) = \left(\frac{R_{\text{Sample}}}{R_{\text{STD}}} - 1 \right) \times 1000$$

$R_{\text{STD}}(C)$: Vienna Pee Dee Belemnite

$R_{\text{STD}}(N)$: Air Nitrogen

2) サンプルの前処理および調整

分析対象となるサンプルを凍結乾燥機 (FRD-82M, Iwaki Glass co, LTD.) を用いて約一日 (約 24 時間) 凍結乾燥を行った。その後、凍結乾燥されたサンプルをメノウ製の乳鉢と乳棒を用いて磨り潰した後、スズカルセル (BN/164916, Thermo Scientific, K. K.) に適量を包み、窒素・炭素安定同位体比質量分析システム (EA-ConFlo IV-Delta advantage V, Thermo Scientific, K. K.) に投入した。

3) 国際標準スタンダード (STD)

本分析では、IAEA (International Atomic Energy Agency) で値付けられた国際標準スタンダード (窒素安定同位体: 3 本 (IAEA-N-1, IAEA-N-2, USGS 26), 炭素安定同位体: 3 本 (IAEA-LSVEC, IAEA-CH-6, NBS-18)) を用いて、Reference Gas とのずれの補正を行った。

(3) 分析結果

分析結果を表 1 および図 1 に示す。まず、土器内・外部の土壌における窒素安定同位体比 ($\delta^{15}N$) の値は、6.1～6.8 ‰程度であった。また、炭素安定同位体比 ($\delta^{13}C$) の値は、-22.8～-20.1 ‰程度であった。一方、土器内面付着物における窒素安定同位体比 ($\delta^{15}N$) の値は、2.6～3.0 ‰程度であった。また、炭素安定同位

体比 ($\delta^{13}\text{C}$) の値は、-27.2 ~ -27.1 ‰程度であった。

分析に用いるサンプルごとの同位体比のばらつきを減らすためには、3回以上の繰り返し分析が望ましいが、本分析は1回のみ（土器内面付着物は2回）の分析に留まった。

(4) 考察—まとめにかえて

土器内・外部の土壌と土器内面付着物における窒素・炭素安定同位体比は、それぞれ約3.5 ~ 3.8 ‰、4.4 ~ 7.0 ‰程度の差があった。以上のことから、土器内・外部の土壌と土器内面付着物は、異なる物質であることが示唆された。

つぎに、本分析で得られたSK-74内土器における内面付着物の窒素・炭素安定同位体比 ($\delta^{15}\text{N}$ ・ $\delta^{13}\text{C}$) 質量分析結果と過去の遺跡物の窒素・炭素安定同位体比の分析結果（國木・吉田, 2012）との比較を行った（図1, 図2）。本分析で得られた土器内面付着物の窒素・炭素安定同位体比 ($\delta^{15}\text{N}$ ・ $\delta^{13}\text{C}$) の値は、基本的にC3植物の値の範囲に位置しており、少なくともC4植物起源ではないことが示唆された。また、立正大学熊谷キャンパス内で採集されたトングリの窒素・炭素安定同位体比値と比較すると、窒素安定同位体比は、約1.4 ~ 1.8 ‰低く、炭素安定同位体比は同程度の値であった（表2）。

以上の結果から、SK-74内土器における内面付着物は、おもにトングリなどのC3植物を主体とするものである可能性が示唆される。しかしながら、窒素・炭素安定同位体比は、各種生物の代謝プロセスや各種物質との混合、および同位体比分別効果などが反映された結果値であることに注意する必要がある。そのため、より詳細な土器内面付着物の正体を明らかにするためには、今後、さらなる各種出土物など窒素・炭素安定同位体比値との比較やデータの蓄積、炭素安定同位体比の分析などが必要であると考えられる。

文献

國木田 大・吉田邦夫 (2012) 炭素・窒素同位体分析を用いたクッキー状炭化物の由来解明と年代測定。日本文化財科学会研究発表要旨集, no.29, p.164-165.

表 1 SK74内土器の内面付着物の窒素・炭素安定同位体比質量分析結果

試料	窒素・炭素安定同位体比	‰
土壌試料 1 (比較用)	$\delta^{15}\text{N}$	6.8
	$\delta^{13}\text{C}$	-20.1
土壌試料 2 (比較用)	$\delta^{15}\text{N}$	6.7
	$\delta^{13}\text{C}$	-20.7
土器内深度-17~18cm	$\delta^{15}\text{N}$	6.3
	$\delta^{13}\text{C}$	-22.8
土器内深度-27~28cm	$\delta^{15}\text{N}$	6.1
	$\delta^{13}\text{C}$	-22.0
土器内面付着物①	$\delta^{15}\text{N}$	2.6
	$\delta^{13}\text{C}$	-27.2
土器内面付着物②	$\delta^{15}\text{N}$	3.0
	$\delta^{13}\text{C}$	-27.1

表 2 立正大学熊谷キャンパス内採取ドングリにおける窒素・炭素安定同位体比質量分析結果
(李・岩崎, 未公表)

試料	窒素・炭素安定同位体比	‰
ドングリ	$\delta^{15}\text{N}$	1.2
	$\delta^{13}\text{C}$	-27.3

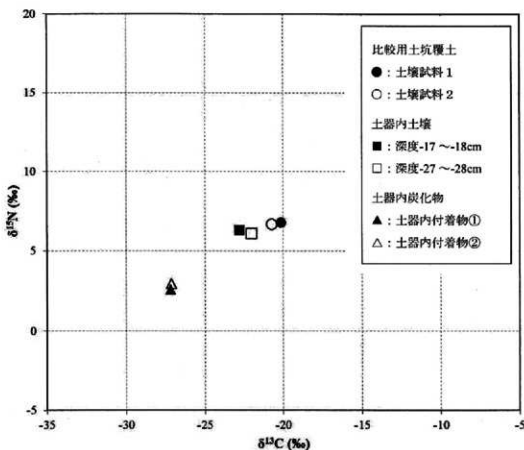


図 1 SK74内土器と比較用土壌試料の窒素・炭素安定同位体比質量分析結果

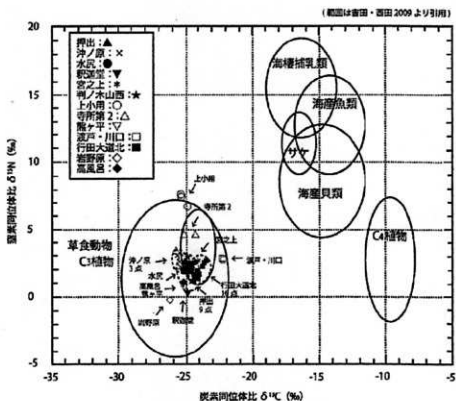


図2 過去の分析例による窒素・炭素安定同位体比の分析結果(国木田・吉田, 2012)

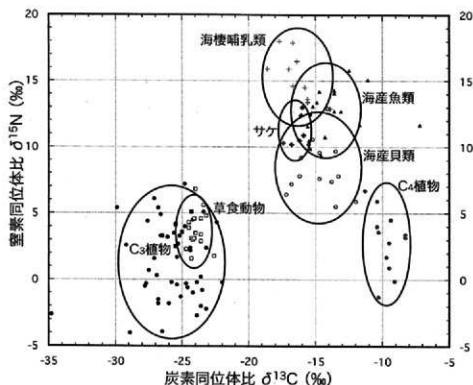


図3 日本列島の食料資源；炭素・窒素同位体比によるグループ分け(吉田, 2010)

文献：吉田邦夫 (2010) 食べたものを明らかにする。
阿部芳郎編著「考古学の挑戦—地中に聞ける歴史学」,岩波書店,p87-119.

Ⅲ. 岩舟台遺跡における植物珪酸体分析

1. はじめに

植物珪酸体は、植物の細胞内に珪酸（SiO₂）が蓄積したもので、植物が枯れたあともガラス質の微化石（プラント・オパール）となって土壤中に半永久的に残っている。植物珪酸体分析は、この微化石を遺跡土壌などから検出して同定・定量する方法であり、イネをはじめとするイネ科栽培植物の同定および古植生・古環境の推定などに応用されている（杉山, 2000）。

2. 試料

分析試料は、縄文時代中期とされる SK-74（袋状土坑）から採取された 2 点、および SK-74 内基底部から検出された土器内から採取された 2 点の計 4 点である。試料採取層位を分析結果図に示す。

3. 分析法

植物珪酸体の抽出と定量は、ガラスビーズ法（藤原, 1976）を用いて次の手順で行った。

- 1) 試料を 105℃で 24 時間乾燥（絶乾）。
- 2) 試料約 1g に対し直径約 40 μm のガラスビーズを約 0.02g 添加（0.1mg の精度で秤量）。
- 3) 電気炉灰化法（550℃・6 時間）による脱有機物処理。
- 4) 超音波水中照射（300W・42kHz・10 分間）による分散。
- 5) 沈底法による 20 μm 以下の微粒子除去。
- 6) 封入剤（オイキット）中に分散してプレパラート作成。
- 7) 検鏡・計数。

同定は、400 倍の偏光顕微鏡下で、おもにイネ科植物の機動細胞に由来する植物珪酸体を対象として行った。計数は、ガラスビーズ個数が 400 以上になるまで行った。これはほぼプレパラート 1 枚分の精査に相当する。試料 1g あたりのガラスビーズ個数に、計数された植物珪酸体とガラスビーズ個数の比率をかけて、試料 1g 中の植物珪酸体個数を求めた。

また、おもな分類群についてはこの値に試料の仮比重（1.0 と仮定）と各植物の換算係数（機動細胞珪酸体 1 個あたりの植物体乾重）をかけて、単位面積で層厚 1cm あたりの植物体生産量を算出した。これにより、各植物の繁茂状況や植物間の占有割合などを具体的にとらえることができる（杉山, 2000）。タケ亜科については、植物体生産量の推定値から各分類群の比率を求めた。

4. 分析結果

(1) 分類群

検出された植物珪酸体の分類群は次のとおりである。これらの分類群について定量を行い、その結果を表 1 および図 1 に示した。主要な分類群について顕微鏡写真を示す。なお、イネ科栽培植物（イネ、ムギ類、ヒエ、アワ、キビなど）由来する植物珪酸体は、いずれの試料からも検出されなかった。

〔イネ科〕

ヨシ属、キビ族型、ススキ属型（おもにススキ属）、ウシクサ族 A（チガヤ属など）、ウシクサ族 B（大型）、A タイプ（くさび型）

〔イネ科—タケ亜科〕

メダケ節型（メダケ属メダケ節・リュウキュウチク節、ヤダケ属）、ネザサ節型（おもにメダケ属ネザサ節）、チマキザサ節型（ササ属チマキザサ節・チシマザサ節など）、ミヤコザサ節型（ササ属ミヤコザサ節など）、未分類等

〔イネ科—その他〕

表皮毛起源、棒状珣酸体（おもに結合組織細胞由来）、未分類等

〔樹木〕

その他

（2）植物珣酸体の検出状況

1）SK-74（袋状土坑）

縄文時代中期とされる土坑の埋土底部（試料2）では、ヨシ属、ススキ属型、ウシクサ族A、メダケ節型、ネザサ節型、チマキザサ節型、ミヤコザサ節型、および樹木（その他）などが検出されたが、いずれも比較的少量である。埋土下部（試料1）では、ミヤコザサ節型が増加し、キビ族型が出現している。

2）SK-74 内土器

土器内土壌（試料-17～-18cm、試料-27～-28cm）では、ミヤコザサ節型が比較的多く検出され、ヨシ属、キビ族型、ススキ属型、ウシクサ族A、ネザサ節型、チマキザサ節型、および樹木（その他）なども認められた。

5. 考察

縄文時代中期とされるSK-74（袋状土坑）の埋土の堆積当初は、メダケ属（メダケ節やネザサ節）やササ属（チマキザサ節やミヤコザサ節）などの竹笹類、およびススキ属やチガヤ属などのイネ科草本類が生育する比較的乾燥した環境で、部分的にヨシ属が生育するような湿潤なところも見られたと考えられる。また、遺跡周辺には何らかの樹木が分布していたと推定される。

土器底部土壌試料（-27～-28cm）では、メダケ節型の植物珣酸体が検出されなかったものの、土器内の土壌についても、おおむね同様の状況であったと考えられる。今回の分析では、何らかの形で生活に利用された植物の検出が期待されたが、これを示唆するような明瞭な結果は得られなかった。

文献

- 杉山真二・藤原宏志（1986）機動細胞珣酸体の形態によるタケ亜科植物の同定—古環境推定の基礎資料として—。考古学と自然科学, no.19, p.69-84.
杉山真二（2000）植物珣酸体（プラント・オパール）。辻 誠一郎編「考古学と植物学」。同成社, p.189-213.
藤原宏志（1976）プラント・オパール分析法の基礎的研究（1）—数種イネ科植物の珣酸体標準と定量分析法—。考古学と自然科学, no.9, p.15-29.

表 1 岩舟台遺跡における植物珪酸体分析結果

分類群	学名	地点・試料		SK-74内土層	
		1	2	-17~18cm	-27~28cm
イネ科	Gramineae				
ヨシ属	<i>Phragmites</i>	7	7	7	6
ネビ属型	<i>Panicum</i> type	13		7	6
ススキ属型	<i>Miscanthus</i> type	13	21	14	13
ウシクサ属 A	<i>Andropogoneae</i> A type	47	55	54	78
ウシクサ属 B	<i>Andropogoneae</i> B type				6
Aタイプ(くさび型)	A type		7		
タケ亜科	Bambusoideae				
メダケ節型	<i>Pleioblastus</i> sect. <i>Nipponocalamus</i>	7	7	14	
ネザサ節型	<i>Pleioblastus</i> sect. <i>Nezasa</i>	47	14	14	32
チマキササ節型	<i>Sasa</i> sect. <i>Sasa</i> etc.	61	34	41	6
ミヤコササ節型	<i>Sasa</i> sect. <i>Crassinodi</i>	128	55	88	188
未分類等	Others	155	82	95	194
その他のイネ科	Others				
表皮毛起源	Husk hair origin	27	21	7	13
棒状珪酸体	Rod-shaped	134	109	34	130
未分類等	Others	215	253	211	259
樹木起源	Arboreal				
その他	Others	7	21	7	6
植物珪酸体総数	Total	860	684	592	940
おもな分類群の推定生産量 (単位: kg/n ² ・cm) : 試料の乾比重を1.0と仮定して算出					
ヨシ属	<i>Phragmites</i>	0.42	0.43	0.43	0.41
ススキ属型	<i>Miscanthus</i> type	0.17	0.25	0.17	0.16
メダケ節型	<i>Pleioblastus</i> sect. <i>Nipponocalamus</i>	0.08	0.08	0.16	
ネザサ節型	<i>Pleioblastus</i> sect. <i>Nezasa</i>	0.23	0.07	0.07	0.16
チマキササ節型	<i>Sasa</i> sect. <i>Sasa</i> etc.	0.45	0.26	0.31	0.05
ミヤコササ節型	<i>Sasa</i> sect. <i>Crassinodi</i>	0.38	0.16	0.27	0.56
タケ亜科の比率 (%)					
メダケ節型	<i>Pleioblastus</i> sect. <i>Nipponocalamus</i>	7	14	20	
ネザサ節型	<i>Pleioblastus</i> sect. <i>Nezasa</i>	20	12	8	20
チマキササ節型	<i>Sasa</i> sect. <i>Sasa</i> etc.	40	45	39	6
ミヤコササ節型	<i>Sasa</i> sect. <i>Crassinodi</i>	34	29	33	73
メダケ率	Medake ratio	27	26	28	20
検出密度 (単位: ×100個/g)					

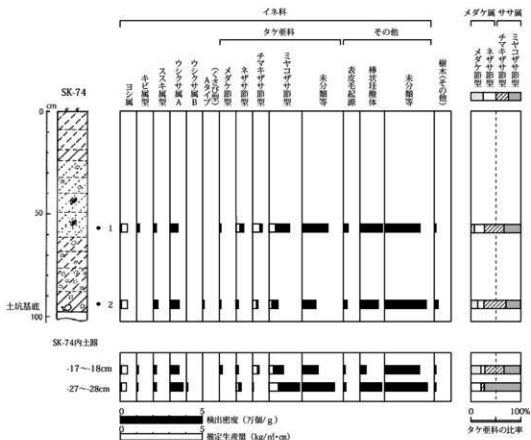
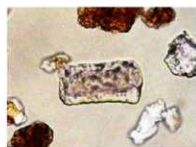


図 1 岩舟台遺跡における植物珪酸体分析結果

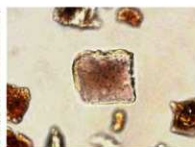
岩舟台遺跡の植物珪酸体（プラント・オパール）



キビ属型



ヨシ属



ススキ属型



ウシクサ属A



ウシクサ属B



メダケ節型



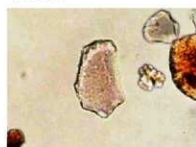
ネザサ節型



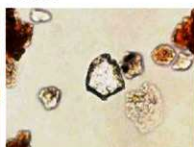
ネザサ節型



チマキザサ節型



チマキザサ節型



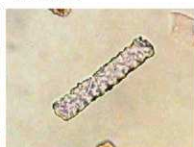
ミヤコザサ節型



イネ科Aタイプ



表皮毛起源



棒状珪酸体



樹木(その他)

50μm

IV. 岩舟台遺跡における花粉分析

1. はじめに

花粉分析は、一般に低湿地の堆積物を対象とした比較的広域な植生・環境の復原に応用されており、遺跡調査においては遺構内の堆積物などを対象とした局地的な植生の推定も試みられている。花粉などの有機質遺体は、水成堆積物では保存状況が良好であるが、乾燥的な環境下の堆積物では分解されて残存していない場合もある。

2. 試料

分析試料は、縄文時代中期とされる SK-74（袋状土坑）から採取された 2 点、および縄文時代中期の土器内から採取された 2 点の計 4 点である。試料採取層位を分析結果図に示す。

3. 方法

花粉の分離抽出は、中村（1967）の方法をもとに次の手順で行った。

- 1) 試料から 1 cm³ を秤量。
- 2) 0.5% リン酸三ナトリウム（12 水）溶液を加えて 15 分間湯煎。
- 3) 水洗処理の後、0.5mm の篩で礫などの大きな粒子を取り除き、沈澱法で砂粒を除去。
- 4) 25% フッ化水素酸溶液を加えて 30 分放置。
- 5) 水洗処理の後、氷酢酸によって脱水し、アセトリシス処理（無水酢酸 9：濃硫酸 1 のエルドマン氏液を加え 1 分間湯煎）を施す。
- 6) 再び氷酢酸を加えて水洗処理。
- 7) 沈渣に石炭酸フクシンを加えて染色し、グリセリンゼリーで封入してプレパラート作成。
- 8) 検鏡・計数。

検鏡は、生物顕微鏡によって 300～1000 倍で行った。花粉の同定は、島倉（1973）および中村（1980）をアトラスとして、所有の現生標本との対比で行った。結果は同定レベルによって、科、亜科、属、亜属、節および種の階級で分類し、複数の分類群にまたがるものはハイフン（-）で結んで示した。

4. 結果

(1) 分類群

検出された分類群は、樹木花粉 7、樹木花粉と草本花粉を含むもの 2、草本花粉 7、シダ植物胞子 1 形態の計 18 である。なお、寄生虫卵は認められなかった。分析結果を表 1 に示す。花粉数が 100 個以上計数された試料については花粉総数を基数とする花粉ダイアグラムを示しているが、いずれの試料も花粉数が 100 個未満であった。主要な分類群について顕微鏡写真を示す。出現した分類群は次のとおりである。

(樹木花粉)

スギ、イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科、クリ、ブナ属、コナラ属コナラ亜属、トチノキ、ブドウ属

(樹木花粉と草本花粉を含むもの)

マメ科、ウコギ科

〔草本花粉〕

イネ科、カヤツリグサ科、カラマツソウ属、セリ亜科、タンポポ科、キク亜科、ヨモギ属

〔シダ植物胞子〕

単条溝胞子

(2) 花粉群集の特徴

1) SK-74 (袋状土坑)

SK-74の埋土底部(試料2)では、草本花粉のイネ科、キク亜科、ヨモギ属、カラマツソウ属、カヤツリグサ科、樹木花粉のクリ、コナラ属コナラ亜属、ブドウ属、樹木・草本花粉のウコギ科、マメ科などが検出されたが、いずれも少量である。埋土下部(試料1)でも、おおむね同様の分類群が検出された。

2) SK-74 内土器

SK-74 基底部から検出された土器内土壌(試料-17~-18cm、試料-27~-28cm)では、草本花粉のキク亜科、樹木花粉のコナラ属コナラ亜属などが検出されたが、いずれも少量である。なお、試料-17~-18cmではキク亜科が特徴的に認められた。

5. 花粉分析から推定される植生と環境

縄文時代中期と推定されているSK-74(袋状土坑)の埋土では、花粉があまり検出されないことから植生や環境の詳細な推定は困難であるが、当時は周辺にクリ、コナラ属コナラ亜属、ブドウ属などの樹木、イネ科、カヤツリグサ科、カラマツソウ属、キク亜科、ヨモギ属などの草本類、およびマメ科などの植物が生育していたと考えられる。

花粉があまり検出されない原因としては、1)乾燥もしくは乾湿を繰り返す堆積環境下で花粉などの有機質遺体が分解されたこと、2)土層の堆積速度が速かったこと、3)水流や粒径による淘汰・選別を受けたことなどが考えられる。イネ科、キク亜科、ヨモギ属などは比較的乾燥したところに生育していることから、ここでは1)の要因が大きいと考えられる。

縄文時代中期とされる土器内の土壌では、キク亜科が特徴的に認められた。この種の花粉が検出された意味については、さらに検討が必要であるが、キク亜科の開花期は8月~10月で、土壌形成時の季節性を反映している可能性も考えられる。

文献

- 金原正明(1993)花粉分析法による古環境復原。木下正史編『新版古代の日本 第10巻 古代資料研究の方法』,角川書店, p.248-262。
鳥倉巳三郎(1973)日本植物の花粉形態。大阪市立自然科学博物館収蔵目録, 第5集, 60p。
中村純(1967)『花粉分析』, 古今書院, p.82-110。

表 1 岩舟台遺跡における花粉分析結果

学名	分類群	和名	SK-74		SK-74内土層		
			3	1	2	3	-17~-18cm
Arboreal pollen		樹木花粉					
<i>Cryptomeria japonica</i>		スギ		1			
Taxaceae-Cephalotaxaceae-Cupressaceae		イチイ科・イヌガヤ科・ヒノキ科		1			
<i>Cistaceae crenata</i>		クリ			3		
<i>Fagus</i>		ブナ属		1			
<i>Quercus</i> subgen. <i>Lepidobalanus</i>		コナラ属コナラ亜属		1	2	1	1
<i>Aesculus turbinata</i>		トチノキ		1			
<i>Vitis</i>		ブドウ属		1	2		
Arboreal・Nonarboreal pollen		樹木・草本花粉					
Leguminosae		マメ科		2	1		
Araliaceae		ウコギ科			2		
Nonarboreal pollen		草本花粉					
Gramineae		イネ科	3		6		1
Cyperaceae		カヤツリグサ科	3		1		
<i>Thalictrum</i>		カラマツソウ属	1	2		1	
Apioidae		セリ亜科			1		
Lactucoideae		タンポポ亜科		1			
Asteroidae		キク亜科	1	4		46	2
<i>Artemisia</i>		ヨモギ属	1	4			
Fern spore		シダ植物胞子					
Monolete type spore		単条溝胞子	1		3		1
Arboreal pollen		樹木花粉	6		7	1	1
Arboreal・Nonarboreal pollen		樹木・草本花粉	2		3		
Nonarboreal pollen		草本花粉	9		19	47	3
Total pollen		花粉総数	17		29	48	4
Pollen frequencies of 1cm ³		試料1cm ³ 中の花粉密度	1.1		1.7	2.9	2.8
			$\times 10^2$		$\times 10^2$	$\times 10^2$	$\times 10$
Unknown pollen		未同定花粉	2				
Fern spore		シダ植物胞子	1		3		1
Helminth eggs		寄生虫卵	(-)		(-)	(-)	(-)
Stone cell		石細胞	(-)		(-)	(-)	(-)
Digestion rimeins		明らかな消化残渣	(-)		(-)	(-)	(-)
Charcoal・woods fragments		微細炭化物・微細木片	(+)		(++)	(+)	(+)

岩舟台遺跡の花粉・胞子



1 スギ

2 イチイ科-イヌガヤ科
-ヒノキ科

3 クリ

4 コナラ属コナラ亜属

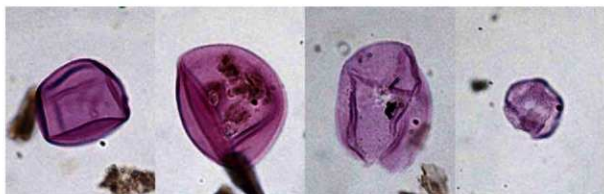


5 トチノキ

6 ブドウ属

7 マメ科

8 ウコギ科



9 イネ科

10 イネ属型

11 カヤツリガサ科

12 カラマツソウ属



13 タンポポ科

14 キク亜科

15 ヨモギ属

16 シダ植物単糸溝胞子

10μm

V. 岩舟台遺跡における種実同定

1. はじめに

植物の種子や果実には比較的強靱なものが多く、堆積物や遺構内などに残存している場合がある。堆積物や遺構埋土などから種実を検出し、その種類や構成を調べることで、過去の植生や植物利用の実態を明らかにすることができる。

2. 試料

分析試料は、縄文時代中期と推定されている SK-74（袋状土坑）の覆土最下部、および土器内（-25～-28cm）から採取された計 2 点である。

3. 方法

種実の抽出と同定を次の手順で実施した。

- 1) 覆土最下部の試料 200cm³、土器内（-25～-28cm）の試料 80cm³に試料に水を加えて泥化。
- 2) 攪拌した後、0.25mmの篩で水洗選別。
- 3) 双眼実体顕微鏡下で検鏡・計数。

同定は種実の形態的特徴および現生標本との対比で行い、結果は同定レベルによって科、属、種の階級で示す。

4. 結果

種実同定の結果、縄文時代中期と推定されている SK-74（袋状土坑）の覆土最下部、および土器内（-25～-28cm）から採取された試料では、炭化物の細片は認められるものの、種実類は検出されなかった。

文献

- 笠原安夫（1985）「日本雑草図説」，養賢堂，494p.
南木睦彦（1993）葉・果実・種子，日本第四紀学会編「第四紀試料分析法 2」，東京大学出版会，p.276- 283.

岩舟台遺跡の自然科学分析

パリオ・サーヴェイ株式会社

はじめに

岩舟台遺跡（栃木県大田原市湯津上に所在）は、那珂川と岩舟川により形成された扇状地に位置し、旧石器～平安時代の複合遺跡で、縄文時代大型環状集落、岩舟台古墳群などが確認されている。

今回の分析調査では、縄文時代中期の大型袋状土坑については可食植物の痕跡や貯蔵穴としての利用を視野に入れ、リン・炭素分析と微細物分析を、埋設土器・古墳については遺体埋納の痕跡を探るためにリン・カルシウム・炭素分析と微細物分析を実施する。

1. 試料

分析対象とした遺構は、縄文時代中期（加曾利E式期）とされる大型袋状土坑6基（C区SK-4、SK-5、SK-6、SK-7、SK-8、B区SK-151）、埋設土器1箇所（C区SK-179）と古墳時代中期とされる古墳3基（B区SZ-31埋葬施設S-35、C区SZ-26埋葬施設S-81、SZ-3周溝）である。

土壌試料の内訳は、SK-4が23点（西壁）、SK-5が8点（1～6・8・12層）、SK-6が11点（2～6・6・7～11層）、SK-7が14点（1～14層）、SK-8が14点（1～10層・攪乱土）、SK-151が12点（1層～12層）、埋設土器が4点（1層～3層）、S-35が11点（割竹形木棺（No.2）直下土・6・8～12・15～18）、S-81（古墳埋葬主体部）が27点（2層・2層-1～4・3層～24層）、SZ-3（古墳周溝）が22点（南壁②～⑩）の計146点である。

大型袋状土坑の分析試料は次の通りである。リン・炭素分析を実施する試料は、SK-4から12層・26層・35層の3点、SK-5から1・5・12層の3点、SK-6から4・8・9層の3点、SK-7から4・8・14層の3点、SK-8から1・6・2・9層の3点、SK-151から2層・6層・10層・12層の4点、計19点を対象とする。微細物分析は全6基82点を対象として、主に炭化種実の抽出同定を実施する。

埋設土器・古墳の分析試料は次の通りである。リン・カルシウム・炭素分析を実施する試料は、C区埋設土器から1層・2層・3層の3点、S-35から割竹形木棺（No.2）直下土・16層・10層・9層の4点、S-81から2層-2・5層・7層・10層・23層の5点、SZ-3から南壁④・⑦・⑩の3点、計15点を対象とする。また、SZ-3の南壁⑧の1点についてリン・炭素分析を実施する。微細物分析は、埋設土器全4点、古墳全3基60点の計64点を対象として、主に炭化種実の抽出同定および骨片の確認、抽出を実施する。

なお、今回の土壌理化学分析では、比較試料が選定されていないことから、天然賦存量との比較を行うこととする。一般的に腐植含量は、主に植生繁茂の指標として用いられ、その腐植の集積量は主に植物遺体供給量に規定される。気候的要因による植生の繁茂状態が、腐植含量に大きく影響を与えているとされる。そして、リン酸の多くが植物に由来することが知られている。

リンは生物にとって主要な構成元素であり、動植物中に普遍的に含まれる元素であるが、特に人や動物の骨や歯には多量に含まれている。生物体内に蓄積されたリンはやがて土壌中に還元され、土壌有機物や土壌中の鉄やアルミニウムと難溶性の化合物を形成することがある。特に活性アルミニウムの多い火山灰土では、非火山性の土壌や沖積低地堆積物などに比べればリン酸の固定力が高いため、火山灰土に立地した遺跡での生物起源残留物の痕跡確認にリン酸含量は有効なことがある。土壌中に普通に含まれるリン酸含量、いわゆる天然賦存量については、いくつかの報告事例があるが（Bowen,1983;Bolt・Bruggenwert,1980;川崎ほか,1991;

天野ほか,1991)、これらの事例から推定される天然賦存量の上限は約3.0mg/g程度である。また、人為的な影響(化学肥料の施用など)を受けた黒ボク土の既耕地では5.5mg/g(川崎ほか,1991)という報告例があり、当社におけるこれまでの分析調査事例では骨片などの痕跡が認められる土壌では6.0mg/gを超える場合が多い。一方、カルシウムの天然賦存量は普通1~50mg/g(藤貫,1979)といわれ、含量幅がリン酸よりも大きい傾向にある。これは、リン酸に比べると土壌中に固定され難い性質による。これら天然賦存量は、遺体の痕跡を明確に判断できる目安として重要ではあるが、天然賦存量以下だからといって遺体埋納を全て否定するものではない。遺体が土壌中で分解した後、その成分が時間経過とともに徐々に系外へと流亡し、その結果含量が天然賦存量の範囲となってしまうことも考えられるからである。

2. 分析方法

(1) 土壌理化学分析

有機炭素はチューリン法、リン酸含量は硝酸・過塩素酸分解-バナドモリブデン酸比色法、カルシウム含量は硝酸・過塩素酸分解-原子吸光法(土壌標準分析・測定法委員会,1986)に従った。以下に各項目の操作工程を示す。

試料を風乾後、土塊を軽く崩して2mmの篩で篩い分けける。この篩通過試料を風乾細土試料とし、分析に供する。また、風乾細土試料の一部を乳鉢で粉砕し、0.5mm篩を全通させ、粉砕土試料を作成する。風乾細土試料については、105℃で4時間乾燥し、分析試料水分を求める。

有機炭素は、粉砕土試料0.100~0.800gを100ml三角フラスコに正確に秤りとり、0.4Nクロム酸・硫酸混液10mlを正確に加え、約200℃の砂浴上で正確に5分間煮沸する。冷却後、0.2%フェニルアントラニル酸液を指示薬に0.2N硫酸第一鉄アンモニウム液で滴定する。滴定値および加熱減量法で求めた水分量から乾土あたりの有機炭素量(Org-C乾土%)を求める。これに1.724を乗じて腐植含量(%)を算出する。

リン酸およびカルシウム含量は、粉砕土試料1.00gをケルダール分解フラスコに秤量し、はじめに硝酸(HNO₃)約10mlを加えて加熱分解する。放冷後、過塩素酸(HClO₄)約10mlを加えて再び加熱分解を行う。分解終了後、水で100mlに定容し、ろ過する。ろ液の一定量を試験管に採取し、リン酸発色液を加えて分光光度計によりリン酸(P₂O₅)濃度を測定する。別にろ液の一定量を試験管に採取し、干渉抑制剤を加えた後に原子吸光光度計によりカルシウム(CaO)濃度を測定する。これら測定値と加熱減量法で求めた水分量から乾土あたりのリン酸含量(P₂O₅mg/g)とカルシウム含量(CaOmg/g)を求める。

(2) 微細物分析

土壌試料から炭化物を可能な限り壊さずに回収するために、以下の方法を実施する。

試料(40~1,000g)を常温乾燥後、肉眼観察で確認された炭化種実や骨片等の遺物を抽出する。乾燥後の試料を、水を満たした容器に投入し、容器を傾けて浮いた炭化物を粒径0.5mmの篩に回収する。容器内の残土に水を入れて軽く攪拌し、容器を傾けて炭化物を回収する作業を炭化物が浮かなくなるまで繰り返す(20回程度)。残土を粒径0.5mmの篩を通して水洗する。篩に回収された炭化物主体の試料と、0.5mm篩水洗後の残土(砂礫主体)を、それぞれ粒径4mm、2mm、1mmの篩を通し、粒径別に常温乾燥させる。

水洗乾燥後、粒径の大きな試料から順に双眼実体顕微鏡下で観察し、ピンセットを用いて、同定可能な炭化種実・葉、炭化材(主に径2mm以上)、土器片、貝類等の遺物を抽出する。抽出物は、個数または重量、一部は最大径を計測し、結果を一覧表で示す。分析残渣は、炭化物主体と砂礫主体、植物片主体に大まかに分け、粒径別の重量を計測し、結果を一覧表に併記する。分析後は、抽出物と分析残渣を容器に入れて保管する。

炭化種実・葉の同定は、現生標本および椿坂(1993)、石川(1994)、中山ほか(2010)、鈴木ほか(2012)等を参考に実施し、部位・状態別の個数を数えて、結果を一覧表と図、写真図版で示す。また、保存状態が良好な栽培種の炭化種実を対象として、長さ、幅、厚さ等をデジタルノギスで計測し、結果を一覧表で示す。分析後は、炭化種実・葉を分類群毎に容器に入れて保管する。

3. 結果

(1) 土壌理化学分析

炭素・リン酸・カルシウム分析結果を表1に、腐植含量とリン酸含量の相関を図1に示す。

<大型袋状土坑>

・SK-4

野外土性(ペドロジー学会編,1997)は12層・26層でSiL(シルト質壤土)、35層でLiC(軽植土)である。土色は10YR2/3黒褐～10YR3/3暗褐と同様であり、やや暗色な土壌である。腐植含量は1.74～4.62%と土色に相応せず、ばらつきがある。リン酸含量は1.70～4.24mg/gと腐植含量に比例する。上部に位置する10層において高いリン酸含量の保持がみられる。

・SK-5

野外土性は1層でLiC(軽植土)、5・12層でCL(埴壤土)である。土色は10YR2/2黒褐～10YR3/2黒褐とほぼ同様である。腐植含量は4.22～5.10%と多い。リン酸含量は2.73～3.62mg/gである。5層で3.0mg/gを超えるリン酸量を保持する。

・SK-6

野外土性は全試料でLiCである。土色は10YR3/2黒褐～10YR4/2灰黄褐と同様である。腐植含量は2.71～4.17%と上部ほど多い。リン酸含量は1.73～2.08mg/gである。分析結果からは、特に大きな特徴は認められない。

・SK-7

野外土性は8層でCL、4・14層はLiCである。土色は10YR3/3暗褐～10YR4/3にぶい黄褐である。腐植含量は2.34～3.24%と上部で多い。リン酸含量は1.77～2.54mg/gと上部で多い。分析結果からは、特に大きな特徴は認められない。

・SK-8

野外土性は9層でLiC、1・6-2層はCLである。土色は10YR3/2黒褐～10YR3/3暗褐である。腐植含量は3.09～3.40%と一定である。リン酸含量は1.77～2.22mg/gと上部で多い。分析結果からは、特に大きな特徴は認められない。

・SK-151

野外土性は全試料でLiCである。土色は10YR3/4暗褐～10YR4/3にぶい黄褐とほぼ同様である。腐植含量は1.50～2.03%と土色に相応し、リン酸含量は2.77～3.61mg/gと上部ほど多い傾向にある。

<SK-179(埋設土器)>

野外土性は全試料でLiCである。土色は10YR3/3暗褐～10YR4/4褐である。腐植含量は1.69～3.41%と3層で少ない。リン酸含量は1.53～3.00mg/gと腐植含量同様に3層で少ない。カルシウム含量は2.33～4.07mg/gと1層で多い。土器内(1層)と土器外(3層)では違いが大きい。

表1. 炭素・リン酸・カルシウム分析結果

試料名		土色	土性	有機炭素 C (%)	腐植 (%)	全リン酸 P ₂ O ₅ (mg/g)	全カルシウム CaO (mg/g)
SK-4	12層	10YR2/3 黒褐	SIL	2.68	4.62	4.24	
	26層	10YR3/3 暗褐	SIL	1.36	2.34	2.50	
	35層	10YR3/3 暗褐	LIC	1.01	1.74	1.70	
SK-5	1層	10YR2/3 黒褐	LIC	2.45	4.22	2.73	
	5層	10YR2/2 黒褐	CL	2.96	5.10	3.62	
	12層	10YR3/2 黒褐	CL	2.53	4.36	2.99	
SK-6	4層	10YR3/2 黒褐	LIC	2.42	4.17	2.08	
	8層	10YR3/2 黒褐	LIC	2.02	3.48	1.74	
	9層	10YR4/2 灰黄褐	LIC	1.57	2.71	1.73	
SK-7	4層	10YR3/3 暗褐	LIC	1.88	3.24	2.54	
	8層	10YR4/3 にぶい黄褐	CL	1.36	2.34	2.09	
	14層	10YR3/3 暗褐	LIC	1.43	2.47	1.77	
	1層	10YR3/3 暗褐	CL	1.97	3.40	2.22	
SK-8	6層-2	10YR3/2 黒褐	CL	1.79	3.09	1.77	
	9層	10YR3/2 黒褐	LIC	1.89	3.26	1.81	
	2層	10YR3/4 暗褐	LIC	1.18	2.03	3.61	
SK-151	6層	10YR4/3 にぶい黄褐	LIC	1.00	1.72	3.23	
	10層	10YR4/3 にぶい黄褐	LIC	0.87	1.50	3.06	
	12層	10YR4/3 にぶい黄褐	LIC	0.90	1.55	2.77	
	1層	10YR3/3 暗褐	LIC	1.98	3.41	3.00	4.07
埋設土器	2層	10YR4/3 にぶい黄褐	LIC	1.68	2.90	2.52	2.33
	3層	10YR4/4 褐	LIC	0.98	1.69	1.53	2.43
S-35	割竹形木棺(No.2)直下土	10YR3/4 暗褐	CL	1.03	1.78	6.60	3.96
	6層	10YR2/3 黒褐	SL	3.55	6.12	4.86	2.67
	10層	10YR4/3 にぶい黄褐	LIC	1.13	1.95	2.12	2.81
	9層	10YR3/2 黒褐	LIC	2.04	3.52	3.16	2.07
S-81	2層-2	10YR2/2 黒褐	LIC	4.04	6.96	3.82	1.82
	5層	10YR4/2 灰黄褐	LIC	1.94	3.34	2.41	2.40
	7層	10YR4/2 灰黄褐	LIC	1.81	3.12	2.29	2.42
	10層	10YR4/1 褐灰	LIC	2.48	4.28	3.85	3.20
	23層	10YR4/2 灰黄褐	LIC	1.44	2.48	2.32	2.76
SZ-3	南壁㊶	10YR2/1 黒	LIC	4.34	7.48	3.75	3.98
	南壁㊷	10YR3/2 黒褐	LIC	2.37	4.09	2.81	2.43
	南壁㊸	10YR3/1 黒褐	LIC	3.18	5.48	3.27	
	南壁㊹	10YR2/2 黒褐	LIC	3.78	6.52	3.80	2.73

備考

(1) 土性：土壤調査ハンドブック改訂版（ペドロジー学会編，1997）の野外土性による。

SIL・・・シルト質壤土（粘土0～15%、シルト45～100%、砂0～55%）

SL・・・砂壤土（粘土0～15%、シルト0～35%、砂65～85%）

CL・・・粘壤土（粘土15～25%、シルト20～45%、砂3～65%）

LIC・・・軽壤土（粘土25～45%、シルト0～45%、砂10～55%）

(2) 土色：マンセル表色系に準じた新版標準土色帖（農林省農林水産技術会議監修，1967）による。

<古墳>

・S-35

野外土性はNo.2直下土でCL、12層でSL(砂壤土)、10層・9層でLiCである。土色は10YR2/3黒褐～10YR4/3にぶい黄褐とばらついている。腐植含量は1.78～6.12%と12層で多く、9層においてもやや多い。リン酸含量は2.12～6.60mg/gと、10層を除いてリン酸が多い。カルシウム含量は2.07～3.96mg/gとリン酸含量ほど多い値ではない。リン酸含量が割竹形木棺(No.2)直下土で特徴的に多く、6層・9層においても多く保持されている。

・S-81

野外土性は全試料でLiCである。土色は2層-2で10YR2/2黒褐と暗色である他は、10YR4/1褐灰～10YR4/2灰黄褐とやや明るい土色である。腐植含量は暗色の2層-2試料で6.96%と多く、他の試料は2.48～4.28%と土色に相応する。リン酸含量は2.29～3.85mg/gと上部・下部において多い。カルシウム含量は1.82～3.20mg/gと下部でのみやや多い。

・SZ-3

野外土性は全試料でLiCである。土色は10YR2/1黒～10YR3/2黒褐と④・⑩で暗色味が強い。腐植含量は4.09～7.48%と、土色に相応し多い。リン酸含量は2.81～3.80mg/gと7層を除き多い。カルシウム含量は2.43～3.98mg/gと4層でやや多い。④・⑧・⑩でリン酸含量がやや保持されている。

(2) 微細物分析

微細遺物の出土状況を表2に、堆積物300gあたりに換算した炭化種実群組成を図2に示し、主な炭化種実の計測結果を表3に示して同定根拠とする。なお、炭化種実・葉各分類群の写真を図版1、2に示す。また、微細物分析・炭化種実同定の詳細な結果を付表に示す。

全146試料(49.6kg)を通じて、裸子植物1分類群(アカマツ)の炭化葉・短枝が13個と、被子植物13分類群(オニグルミ、クリ、キハダ、アオハダ、ミズキ、イネ、ヒエ近似種、キビ?、アワ、オオムギ、コムギ、イネ科、テンツキ近似種)の炭化種実が1,986個の、計1,999個が抽出・同定された。その他に、炭化材が12.4g(最大1.2cm;SK-8の攪乱土)、巻貝類が1個0.1g未満(径0.8mm;S-81の24層)、土器片が48個35.6g(最大3.1cm;S-81の15層)、土器片?が1個0.7g(SZ-3南壁4層)、岩片(剥片類?)が9個0.3g(最大1.2cm;SK-4の18層)検出された。骨片は検出されなかった。

分析残渣は、砂礫類(26.3kg)を主体とする他に、炭化物主体が22.5g、炭化していない植物片主体が11.1g確認された。なお、炭化していない植物片は、保存状態が極めて良好で、スギナ類の地下茎や、針葉樹のマツ属複維管束亜属の葉、ヒノキの枝条・種子、草本のホッソモ、イネ(穎)、メヒシバ類、イネ科、カヤツリグサ属・科、ギシギシ属、イヌタデ近似種、スベリヒユ、ザクロソウ、ナデシコ科、ヒユ属、カタバミ属、エノキグサ、アリノトウグサ、メハジキ属、ナス属、キク科の種実などが確認された。これらは混入の可能性が高いため、結果表の掲載にとどめて解析より除外している。

炭化種実・葉の保存状態は、発泡等変形や欠損、表面の泥の付着等により、極めて不良である。炭化種実群(葉含む)は、木本6分類群(高木になる常緑針葉樹のアカマツ、落葉広葉樹のオニグルミ、クリ、キハダ、アオハダ、ミズキ)1,894個、草本8分類群(イネ、ヒエ近似種、キビ?、アワ、オオムギ、コムギ、イネ科、テンツキ近似種)105個から成る。

栽培種は、穀類のイネの穎の破片が43個、胚乳が9個、オオムギの穎・胚乳が1個、胚乳が11個、コムギの胚乳が11個、ムギ類(オオムギまたはコムギ)の胚乳が12個、穂軸が2個、アワ(?含む)の胚乳が6個と、

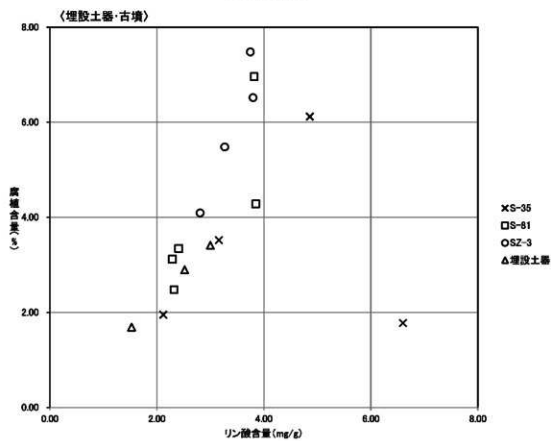
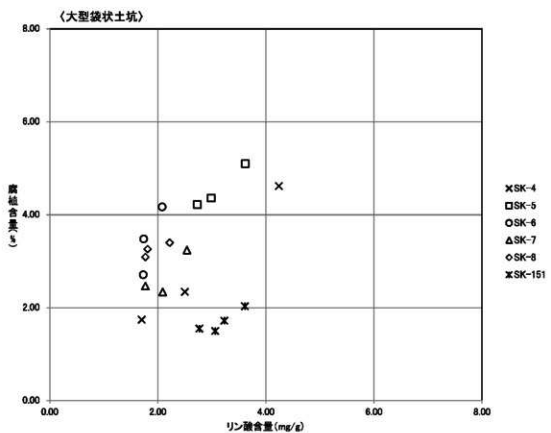


図 1. 灰組含量とリン酸含量の相関図

栽培種の可能性があるヒエ近似種の穎・胚乳が4個、胚乳が3個、キビ?の胚乳が1個の、計101個が確認された。

栽培種とその可能性を除いた分類群は、圧倒的な木本主体の組成を示す。木本は、二次林要素のクリ(?含む)の破片が最も多く、果皮が1018個、子葉が1個、果実が1個確認された。クリに次いで、河畔林要素のオニグルミ(?含む)の核の破片が857個、二次林要素のアカマツが13個、河畔林要素のミズキが2個、キハダが1個、山地の落葉樹林内に生育するアオハダが1個確認された。クリとオニグルミの微細堅果片(計1877個)が全体の94%を占める。草本は、明るく開けた草地に生育するイネ科が2個、やや湿った草地に生育するテンツキ近似種が2個(破片で接合し1個体となる)確認されるのみであった。以下に、遺構別出土状況等を述べる。

<大型袋状土坑>

・SK-4(1～23層;各300g)

炭化種実とは、イネの穎が3層と4層から33個と、オニグルミ(?含む)が全試料から167個、クリの果皮が3層を除く22試料から238個、子葉が4層から1個の、計439個が確認された。炭化材は、全試料から計3.8g確認され、12・16～18層でやや多い。土器片は7個3.5g(16層、12層、8層、7層、5層)、岩片(剥片類?)は2個0.2g(23層、5層)確認された。分析残渣は、炭化物主体が10.2g、砂礫主体が168.9gを量り、21層と17層で炭化物が、23層、21層、17層、12層で砂礫がやや多い。

・SK-5(①～⑧;各300g)

炭化種実とは、全試料からオニグルミが53個、クリが108個の、計161個が確認され、⑦、⑥、①でやや多い。炭化材は、全試料から計0.9g確認され、⑧～⑤、③でやや多い。土器片は5個9.2g(⑧、③)確認された。分析残渣は、炭化物主体が1.4g、砂礫主体が88.3gを量り、砂礫は⑦で多い。

・SK-6(①～⑤、⑤'、⑥～⑩;各300g)

炭化種実とは、⑤、⑤'、①からオニグルミが10個と、⑩、⑥、⑤'、①からクリが11個の、計21個が確認されるのみで、分析対象遺構中最も少ない。炭化材は全試料から計0.2g、土器片は⑥から1個0.3g確認された。分析残渣は、④、⑨を除く9試料から炭化物主体が0.9g、全試料から砂礫主体が44.9gを量り、砂礫は⑤、⑨でやや多い。

・SK-7(①～⑭;各300g)

炭化種実とは、イネの穎が⑥から1個、オニグルミが⑭を除く13試料から70個、クリの果皮が全試料から74個、クリ?の果実が⑥から1個の、計146個が確認され、⑥でやや多い。炭化材は、全試料から計0.9g確認され、⑥でやや多い。土器片は⑥から2個1.0g、岩片(剥片類?)は⑭から①個0.1g確認された。分析残渣は、炭化物主体が2.3g、砂礫主体が75.4gを量り、いずれも⑥でやや多い。

・SK-8(①～⑥、⑦-1、⑦-2、⑧、⑨、⑩-1、⑩-2、⑪、⑫;各400g)

炭化種実とは、④からイネの穎が4個、胚乳が1個(短粒極小型;佐藤,1988)と、オニグルミが全試料から127個、クリが⑩-2を除く13試料から112個、イネ科が⑦-2から1個の、計245個が確認され、②、①でやや多い。炭化材は、全試料から計1.4g確認され、②、①でやや多い。土器片は18個6.4g(②、④、⑦-1、⑦-2、⑧、⑪)確認され、②で多い。分析残渣は、炭化物主体が1.7g、砂礫主体が93.6gを量り、炭化物は②、①、砂礫は⑩-1で多い。

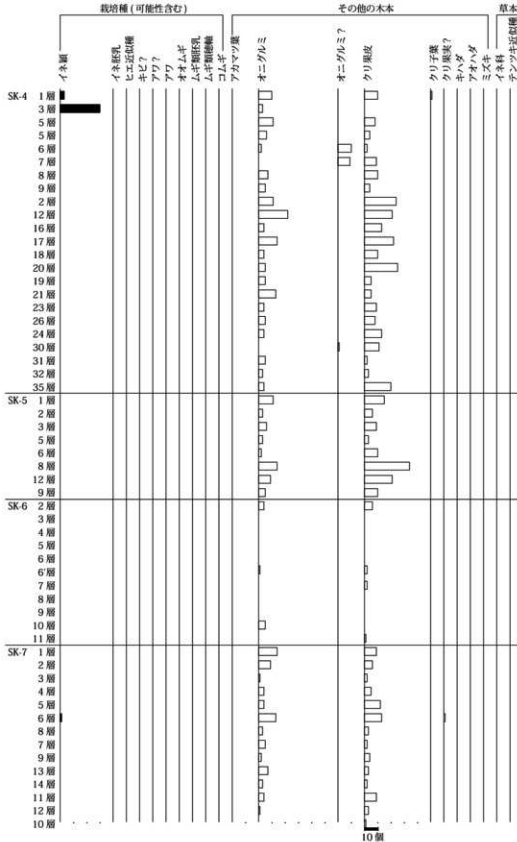
・SK-151(1層～12層;各300g)

表2. 微細遺物出土状況(1)

遺構	出土部位	炭化層表-裏面													その他の遺物(g)				分析残量(g)					
		ア カ ワ ツ 類	オ ニ グ ル ミ	ク リ 子 葉 度	タ リ 子 葉 度	キ ハ ダ	ア キ ハ ダ	ミ ズ キ	イ イ ネ 類	ヒ エ 近 似 類	ア ワ ?	ア ワ ?	オ キ ム ?	ム ギ 類	コ ム ?	イ ネ 科	オ シ キ 類	香 料 類		炭 化 材	土 器 片	土 器 片	削 片 類	炭 化 物 主 体
SK-4	48H	10	10	1				3										0.1				0.2	6.1	300
SK-4	58H	2						30										0.0				0.1	6.9	300
SK-4	58H	11	3															0.1	0.7	0.0	0.3	7.4	300	
SK-4	58H	6	4															0.0				0.1	4.8	300
SK-4	68H	2	10	2														0.1				0.2	4.6	300
SK-4	78H		6	10														0.1	0.1			0.1	8.3	300
SK-4	88H	7	10															0.1	1.6			0.3	6.0	300
SK-4	98H	3	4															0.2				0.2	5.7	300
SK-4	28H	11	24															0.1				0.3	6.2	300
SK-4	128H	22	23															0.3	1.0			0.8	13.1	300
SK-4	168H	4	13															0.3	0.1			0.7	7.4	300
SK-4	178H	14	22															0.4				1.6	16.1	300
SK-4	188H	4	10															0.4				0.6	7.8	300
SK-4	203H	5	20															0.1				0.4	5.9	300
SK-4	198H	3	13															0.1				0.4	5.7	300
SK-4	218H	13	9															0.2				1.0	17.1	300
SK-4	238H	4	9															0.3			0.1	0.6	12.4	300
SK-4	258H	5	8															0.1				0.3	6.6	300
SK-4	248H	4	13															0.1				0.2	4.5	300
SK-4	308H	4	13															0.1				0.4	6.6	300
SK-4	318H	3	2															0.1				0.3	5.4	300
SK-4	328H	3	3															0.1				0.1	2.5	300
SK-4	338H	4	20															0.0				0.2	3.8	300
SK-5	118	11	13															0.1	1.0			0.1	4.3	300
SK-5	28H	3	6															0.0				0.0	6.8	300
SK-5	38H	6	9															0.1	0.0			0.2	7.2	300
SK-5	58H	3	3															0.0				0.1	8.5	300
SK-5	68H	2	10															0.1				0.2	5.0	300
SK-5	88H	14	34															0.1				0.2	8.7	300
SK-5	128H	9	23															0.2				0.3	40.4	300
SK-5	48H	5	10															0.2	8.3			0.3	6.4	300
SK-6	28H	4	4															0.0				0.0	3.0	300
SK-6	38H	4	4															0.0				0.0	2.0	300
SK-6	48H																	0.0				0.0	4.8	300
SK-6	58H																	0.0				0.0	2.9	300
SK-6	64H																	0.0				0.0	9.3	300
SK-6	66H	1	2															0.0				0.0	1.3	300
SK-6	78H		2															0.0	0.3			0.1	3.2	300
SK-6	88H																	0.0				0.0	1.4	300
SK-6	98H																	0.0				0.0	7.7	300
SK-6	108H	5																0.0				0.0	6.9	300
SK-6	118H		1															0.0				0.1	2.6	300
SK-7	118	14	10															0.0				0.0	5.9	300
SK-7	28H	9	6															0.0				0.0	5.7	300
SK-7	38H	11	9															0.1				0.1	5.5	300
SK-7	48H	4	5															0.0				0.0	5.5	300
SK-7	58H	4	12															0.1				0.2	5.0	300
SK-7	68H	13	13					1										0.1	0.0			0.8	11.0	300
SK-7	88H	3	3															0.1				0.0	5.5	300
SK-7	78H	3	2															0.1				0.3	6.1	300
SK-7	98H	2	4															0.1				0.2	5.4	300
SK-7	138H	7	3															0.1			0.1	0.2	4.4	300
SK-7	148H		1															0.0				0.0	3.5	300
SK-7	118H	4	5															0.1				0.2	6.2	300
SK-7	128H	1	3															0.1				0.1	2.7	300
SK-7	108H																	0.0				0.1	4.6	300
SK-8	188カクラン	10	17															0.2				0.3	7.7	450
SK-8	288カクラン	33	20															0.4	3.1			0.5	9.4	450
SK-8	28H	6	4															0.1				0.1	6.0	450
SK-8	118H	7	3					4	1									0.0	0.8			0.1	8.7	450
SK-8	418H	11	11															0.0				0.1	3.8	450
SK-8	58H	8	6															0.0				0.0	3.9	450
SK-8	68H-1	2	6															0.0	0.2			0.1	5.3	450
SK-8	68H-2	7	4															0.1	0.2			0.1	7.7	450
SK-8	78H	3	4															0.0	0.1			0.0	2.5	450
SK-8	38H	5	3															0.1				0.2	5.3	450
SK-8	88H-1	11	3															0.0				0.0	16.7	450
SK-8	88H-2	1	3															0.1				0.0	6.6	450
SK-8	98H		3															0.0	0.0			0.1	7.3	450
SK-8	108H	5	6															0.1				0.2	2.6	450
SK-151	118	27	17															0.1				0.1	36.0	500
SK-151	28H	72	14															0.0				0.1	46.5	500
SK-151	38H	15	11															0.0				0.1	44.8	500

表2. 微細遺物出土状況(2)

遺構	出土期位	顕微鏡検定(個数)																その他の遺物(g)				分析残量(g)		分析量 g		
		ア オ ニ グ ル ミ ?	オ ニ グ ル ミ ?	ウ リ 子 果 皮 ?	ウ リ 果 実 ?	ウ リ ハ ダ ?	ア オ ハ ダ ?	ミ ズ キ ?	イ ネ 類 ?	イ ネ 類 ?	ヒ エ 近 似 類 ?	キ ビ ?	ア ワ ?	ア ワ ?	ム ギ 類 ?	ム ギ 類 ?	コ ム ギ ?	イ ネ 類 ?	チ ン ツ ホ 近 似 類 ?	骨 質 類 ?	土 器 片 ?	土 器 片 ?	土 器 片 ?		炭 化 物 主 体 ?	砂 ?
S8-151	6層	8	13																	0.2			0.2	167.1	500	
S8-151	6層	9	21																	0.0	0.3		0.5	46.6	500	
S8-151	6層	5	19																	0.1			0.3	40.1	500	
S8-151	7層	11	18																	0.1			0.3	35.5	500	
S8-151	9層	5	15																	0.2			0.5	35.7	500	
S8-151	11層	7	20																	0.1			0.1	63.0	500	
S8-151	11層	1	13																	0.0			0.2	91.7	500	
S8-151	8層	1	14																	0.0			0.0	40.1	500	
S8-151	12層	7	7																	0.0			0.1	38.6	500	
S8-179	1層	13	21																	0.2	0.0		0.2	14.9	1000	
S8-179	2層	3	12																	0.1	0.8		0.3	13.7	1000	
S8-179	3層	6	7																	0.0	0.4	0.0	0.0	1.5	300	
S8-179	4層	14	6																	0.0	0.2		0.3	10.4	1000	
S-35	No.2 直下土																			0.0			0.0	70.8	500	
S-35	基本層 6層	11	1						1	2	4		4	3	4	1	3	1		0.1			0.2	25	1000	
S-35	基本層 8層	4	11																	0.1			0.1	17.8	1000	
S-35	基本層 10層	2	2																	0.0			0.0	138.0	1000	
S-35	基本層 9層	3	4																	0.0			0.0	119.1	1000	
S-35	基本層 14層	3	3						2	1										0.0			0.0	262.3	500	
S-35	基本層 17層	1	3																	0.0			0.0	153.1	1000	
S-35	基本層 18層	4	2						2	2	1	1	7							0.2			0.0	30.8	1000	
S-35	基本層 12層	4	6									1								0.0			0.0	111.0	1000	
S-35	基本層 11層	4	5																	0.0			0.0	76.2	1000	
S-35	基本層 13層	5	9					1					3							0.1			0.1	7.7	1000	
S-81	2層	2	9	15					1	1				1	1					0.1		0.0	0.1	10.6	200	
S-81	2層-1	1	2	1									1							0.0			0.1	8.7	200	
S-81	2層-2	1	2										1							0.0		0.0	0.0	6.5	200	
S-81	2層-3	8	4							1	1									0.1		0.0	0.1	5.2	200	
S-81	2層-4	8	4					1		1	1									0.1		0.0	0.3	5.7	200	
S-81	3層	1	5																	0.0			0.0	8.0	200	
S-81	4層	4	2																	0.0			0.1	4.9	200	
S-81	5層	5	3											1						0.0		0.0	0.0	3.7	200	
S-81	6層	6	8																	0.1			0.2	4.1	200	
S-81	7層	7	11																	0.0			0.1	7.4	200	
S-81	8層	4	7																	0.1	2.9	0.0	0.0	3.2	200	
S-81	9層	4	6																	0.2		0.0	0.0	3.0	200	
S-81	11層	1	3																	0.0	2.9		0.0	6.7	200	
S-81	10層	3	15																	0.0			0.0	4.8	200	
S-81	12層	4	7																	0.1			0.0	2.5	200	
S-81	13層	2	7											2						0.1			0.1	5.9	200	
S-81	14層	6	5																	0.0			0.1	3.0	200	
S-81	15層	3	1																	0.0	6.3		0.0	1.0	200	
S-81	16層	6	12																	0.1	1.0		0.4	3.4	200	
S-81	17層	4	6																	0.0			0.0	2.3	200	
S-81	18層	3	4																	0.0			0.0	2.1	200	
S-81	19層	2	1																	0.0			0.0	1.6	200	
S-81	20層	7	10																	0.2			0.1	7.1	200	
S-81	21層	5	2																	0.3		0.0	0.1	4.0	200	
S-81	22層	5	10																	0.1			0.1	3.9	200	
S-81	23層	2	3																	0.1			0.0	2.7	200	
S-81	24層	8	2																	0.0	0.1		0.1	2.0	200	
S2-3	南壁2層	3																		0.0			0.1	2.8	60	
S2-3	南壁3層	0	1																	0.0			0.0	0.0	4.0	60
S2-3	南壁4層	2																		0.0	0.7		0.1	1.7	50	
S2-3	南壁5層	9																		0.0			0.1	1.4	100	
S2-3	南壁6層	2																		0.0			0.1	1.0	50	
S2-3	南壁7層	5	3																	0.0			0.0	4.9	100	
S2-3	南壁8層	2	3																	0.0			0.1	2.5	100	
S2-3	南壁9層	2																		0.0			0.0	3.3	100	
S2-3	南壁10層																			0.0			0.1	1.9	100	
S2-3	南壁11層	2	4																	0.0			0.0	2.1	100	
S2-3	南壁12層																			0.1			0.0	2.8	100	
S2-3	南壁13層	1	3																	0.1	0.8		0.0	1.6	100	
S2-3	南壁14層																			0.0			0.0	4.0	100	
S2-3	南壁15層	0	2																	0.0			0.0	4.5	100	
S2-3	南壁16層	4																		0.0			0.0	0.5	20	
S2-3	南壁17層	5	14																	0.1			0.1	3.3	100	
S2-3	南壁18層	3	3																	0.0	0.1		0.0	6.0	100	
S2-3	南壁19層	0	2																	0.1			0.1	2.1	100	
S2-3	南壁20層	5	4																	0.0			0.0	4.1	100	
S2-3	南壁21層	3	3																	0.0			0.0	2.5	100	
S2-3	南壁22層	17	15																	0.1			0.0	1.4	100	
S2-3	南壁23層	1	5																	0.0			0.0	3.2	100	



堆積物 300gあたりの個数で示す。●は1個未満を示す。

図2. 炭化種実群集(1)

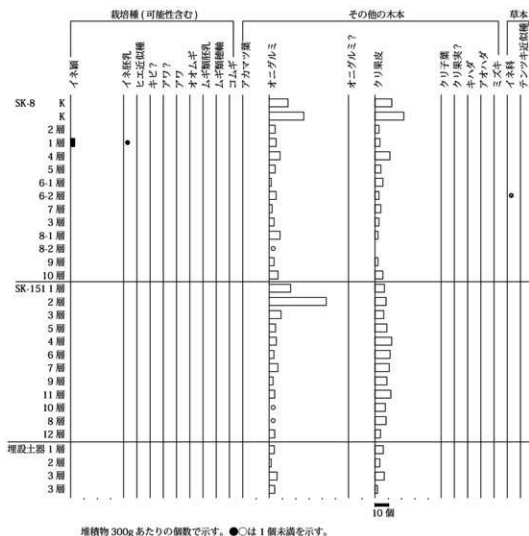


図2. 炭化種実群集 (2)

炭化種実は、全試料からオニグルミが169個、クリが179個の、計348個が確認され、2層、1層でオニグルミが多い。炭化材は、全試料から計0.9g確認され、9層、1層でやや多い。土器片は4層から2個0.3g確認された。分析残渣は、炭化物主体が2.5g、砂礫主体が687.0gを量り、炭化物は4～7・9層でやや多く、砂礫は2層で多い。

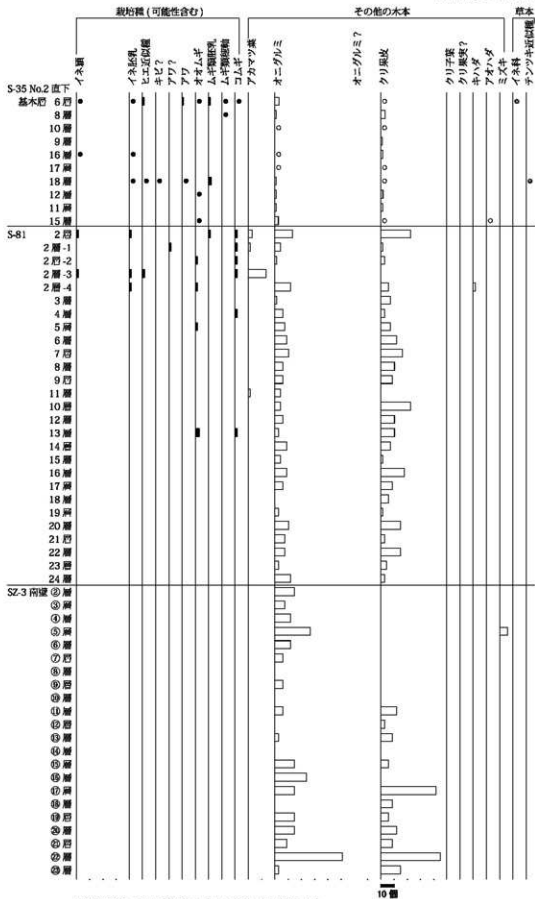
<埋設土器> (1層、2層、3層；各1,000g、3層；300g)

炭化種実、全試料からオニグルミが38個、クリが46個の、計84個が確認され、2層、1層でクリがやや多い。炭化材は、全試料から計0.3g確認され、2層、1層でわずかに多い。土器片は7個1.1g(4層、2層、1層)、岩片(剥片類?)は1個0.1g未満(3層)確認された。分析残渣は少量で、炭化物主体が0.8g、砂礫主体が40.5gを量るのみであった。

<古墳>

・S-35(割竹形木棺(No.2)直下土：500g、6・8～12・15～18層；各1,000g)

割竹形木棺(No.2)直下土からは、炭化種実が検出されず、炭化材と炭化物主体が各0.1g未満、砂礫主体5.9g確認されるのみであった。



堆積物 300gあたりの個数で示す。●○は1個未満を示す。

図2. 炭化種実群集(3)

基本層は、炭化種実は、栽培種のイネの穎が3個(16層、6層)、胚乳が5個(18層、16層、6層)、オオムギの胚乳が7個(15層、12層、6層)、コムギの胚乳が3個(6層)、ムギ類の胚乳が11個(18層、6層)、穂軸が2個(13層、12層)、アワの胚乳が5個(18層、12層)と、栽培の可能性のあるヒエ近似種の穎・胚乳が3個(8層、6層)、胚乳が3個(8層、6層)、キビ?の胚乳が1個(8層)の、計43個と、木本のオニグルミが42個(9層を除く9試料)、クリが43個(全試料)、アオハダが1個(15層)、草本のイネ科が1個(6層)、テンツキ近似種が2個(8層)の、合計132個が確認された。また、16層のイネの胚乳(炭化米)は、短粒極々小型(佐藤,1988)に分類された(表3)。

炭化材は、全試料から計0.8g確認され、18層、12層でわずかに多い。分析残渣は砂礫主体で11.8kgを量り、8~10・16・17層~13層で多い。炭化物主体は少なく、15層と17層から0.2g量るのみであった。

・S-81(2層、2層-1~4、3層~24層;各200g)

炭化種実は、栽培種のイネの穎が2個(2層-3、2層)、胚乳が3個(2層-4~3、2層)、オオムギの穎・胚乳が1個(2層-4)、胚乳が4個(13層、5層、2層-2)、コムギの胚乳が6個(13層、4層、2層-3~1層、2層)、ムギ類の胚乳が1個(2層)と、栽培の可能性のあるヒエ近似種の穎・胚乳が1個(2層-3)、アワ?の胚乳が1個(2-1層)の、計19個と、木本のアカマツの葉が13個(10層、2層-3、2層-1、2層)、オニグルミが112個(18層、2層-3を除く25試料)、クリが151個(11層、2層-3を除く25試料)、キハダが1個(2層-4)の、合計296個が確認された。

炭化材は、全試料から計2.7g確認され、5層で多い。土器片は4個13.1g(16層、15層、11層、8層)、岩片(剥片類?)は5個0.1g未満(21層、9層、8層、2層-2、2層)、巻貝類は1個0.1g未満(24層)確認された。分析残渣は、19層と3層を除く25試料から炭化物主体が2.3g、全試料から砂礫主体が124.7gを量り、砂礫が2層でやや多い。

・SZ-3(南壁2層~23層;40~100g)

炭化種実は、オニグルミが③、⑩、⑪、⑫を除く17試料から69個、クリが③~⑩、⑬、⑭~⑰から56個、ミズギが⑤から2個の、計127個が確認された。炭化材は全試料から計0.6g、土器片は③、⑫から2個0.7g、土器片?は④から1個0.7g確認された。分析残渣は、③と⑫を除く20試料から炭化物主体が0.8g、全試料から砂礫主体が60.2gを量る。

4. 考察

表3. 主な炭化種実の計測値

種名・部位	遺構	出土層位	図版番号	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	備考
イネ 胚乳	SK-8	1層	16	4.2	2.6	2.1	短粒極々小型
イネ 胚乳	S-35	16層	17	3.8	1.9	1.2	短粒極々小型
オオムギ 胚乳	S-35	6層	-	4.9	3.0	2.7	
オオムギ 胚乳	S-35	12層	18	5.4	3.6	2.8	
オオムギ 胚乳	S-81	2層-2	-	4.0 +	2.3	1.8	頂部僅かに欠損
オオムギ 胚乳	S-81	5層	-	4.0	3.0	2.2	
オオムギ類・胚乳	S-81	2層-4	19	3.6	1.8	1.1	
コムギ 胚乳	S-35	9層	22	3.4	2.8 +	2.7	側面窪む
コムギ 胚乳	S-81	2層-1	21	2.4	1.8	1.4	小型
コムギ 胚乳	S-81	4層	-	2.9	1.9	1.7	側面窪む
コムギ 胚乳	S-81	13層	-	3.6	2.8 +	2.2	側面窪む

(注)計測はデジタルノギスを使用し、欠損は残存値に「+」で示す。
 (注)炭化米の粒欠(長さ×幅、粒形(長さ/幅)は、佐藤(1988)の定義に従う。

(1) 大型袋状土坑について

今回分析対象とした大型袋状土坑の内、SK-6は、リン酸含量も低く、しかも堅果類の出土が最も少ない。したがって、この結果を見る限りでは、大型袋状土坑が貯蔵穴として利用された可能性は伺えない。その他の遺構の内、SK-151は、図1にも示したように腐植含量に対してリン酸含量が多いことから、動物由来等何らかの要因によりリン酸が付加されている可能性が高い。その他の遺構は、多くの試料から堅果片が検出されるものの、埋設土器や古墳3基の検出傾向とほぼ同様で、可食部や完形種実が殆ど確認されず、食料残渣の可能性が指摘される堅果片の出土状況なども考え合わせると、貯蔵穴に利用された可能性を積極的に支持するには至らない。なお、SK-4・SK-5ではリン酸の天然賦存量である3.0mg/gを超える試料がみられたものの、これは植物遺体によってリン酸が富化されたことが考えられる。

(2) C区埋設土器について

土器内外でリン酸・カルシウムの含量に大きな差異が認められた。すなわち、埋設土器の下位では、リン酸含量・カルシウム含量が伴って低いが、埋設土器内側の堆積物はリン酸含量・カルシウム含量とも高い。特に埋設土器内側のリン酸含量は、天然賦存量を超える値である。微細物分析で骨片は検出されなかったが、土器内に何らかの成分を富化させるものが混入した可能性が考えられ、遺体埋納施設等として利用されていた可能性がある。

(3) 古墳について

古墳として利用されたとされるS-35・S-81・SZ-3では、各遺構上部・下部においてリン酸の天然賦存量である3.0mg/gを超える保持をしている。しかし、図1にも示したようにS-35の割竹形木棺(No.2)直下土を除いて、腐植とリン酸の相関があり、S-81・SZ-3のリン酸は植物体によって富化されている可能性が高い。ただし、S-35の割竹形木棺(No.2)直下土では、リン酸含量が特徴的に多く、遺体埋納の痕跡である可能性が考えられる。なお、古墳周溝とされるSZ-3では、クリのみが上部より上位で検出されない傾向が得られ、周溝において何らかの意図的行為があったことも考えられ、平面的な分布なども今後検討していくことや遺物の出土状況にも注視していきたい。

(4) 植物利用

縄文時代中期(加曾利E式期)とされる大型袋状土坑6基(C区SK-4・SK-5・SK-6・SK-7・SK-8、B区SK-151)、埋設土器1箇所(C区SK-179)と、古墳時代中期とされる古墳3基(B区S-35、C区S-81・SZ-3)の全試料を対象とした微細物分析の結果、木本6分類群1,894個、草本8分類群105個の、計1,999個の炭化葉・種実が抽出同定された他に、炭化材12.4g、巻貝類1個0.1g未満、土器片48個、土器片?1個、岩片(剥片類)?9個0.3gが検出された。一方、骨片は検出されなかったため、遺体埋納に関する情報を得ることができなかった。

炭化種実のうち、栽培種は、主に古墳埋葬主体部とされるS-35とS-81の棺内より、イネの穎、胚乳、オオムギの穎・胚乳、胚乳、コムギの胚乳、ムギ類の胚乳、穂軸、アワの胚乳と、栽培種の可能性があるヒエ近似種の穎・胚乳、胚乳、キビ?の胚乳が確認された。これらの炭化穀類は、本遺跡近辺で栽培されていたか、持ち込まれたかは不明であるが、当時利用された植物質食糧と示唆され、埋葬品に由来する可能性も指摘される。また、非可食部の穎(稈)が残る穀粒も確認されることから、稈がついた生の段階で食用されずに火を受けたとみなされる。

なお、縄文時代中期とされるSK-4の3層、4層と、SK-7の6層、SK-8の1層で確認された栽培種のイネに関しては、いずれの試料も遺構上部の攪乱層と接している点を考慮すると、後代(おそらく古墳時代以降)に由来する可能性が高い。発掘調査所見と慎重に検討することが望まれる。

栽培種とその可能性を除いた分類群は、木本は、高木になる常緑針葉樹のアカマツと、落葉広葉樹のオニグルミ、クリ、キハダ、アオハダ、ミズキが確認され、オニグルミとクリの微細堅果片が全遺構の多くの試料から出土する特徴を示した(図2)。

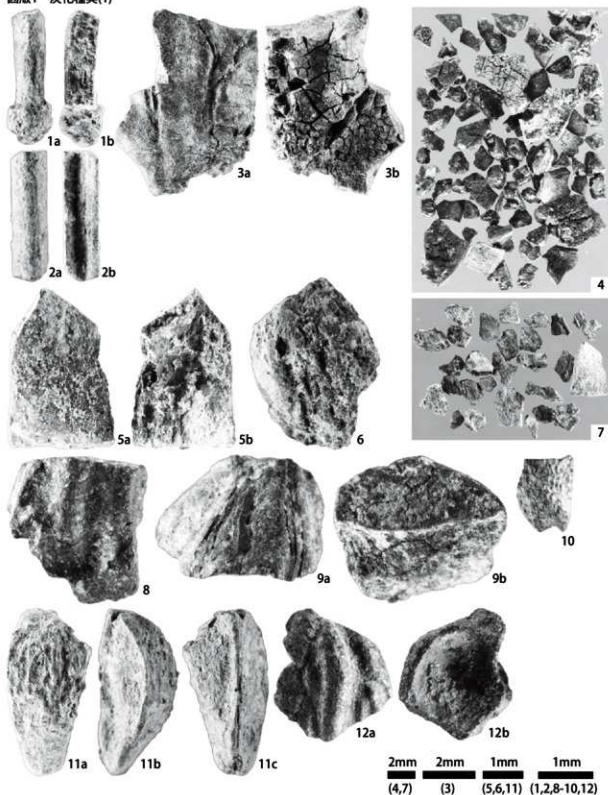
各遺構より確認された河畔林要素のオニグルミ、二次林要素のクリや、S-35 から確認された山地の落葉樹林内に生育するアオハダ、S-81 から確認された二次林要素のアカマツ、河畔林要素のキハダ、SZ-3 から確認された河畔林要素のミズキは、当時の本遺跡周辺の那珂川および岩舟川流域の森林に生育していたと考えられる。草本は、SK-8、S-35 から中生植物のイネ科と、S-35 から湿生植物のテンツキ近似種が確認された。調査区周辺の草地環境に生育していたと考えられ、やや湿った草地の存在も推測される。

堅果類のオニグルミとクリは、果実内部の子葉が食用可能である。当時の遺跡周辺の森林から持ち込まれ利用された植物質食料と示唆される。また、堅果類の出土部位は、大半が食用にならない果皮の微細片であることから、可食部を取り出した後の食料残滓の可能性が指摘される。

引用文献

- 天野洋司・太田 健・草場 敬・中井 信,1991,中部日本以北の土壌型別蓄積リンの形態別計量,農林水産省農林水産技術会議事務局編 土壌蓄積リンの再生循環利用技術の開発,28-36.
- Bolt,G.H.・Bruggenwert,M.G.M,1980,土壌の化学,岩田進午・三輪書太郎・井上隆弘・岡 捷行訳,学会出版センター,309p.
- Bowen,H.J.M,1983,環境無機化学・元素の循環と生化学,・浅見輝男・茅野充男訳,博友社,297p.
- 土壌標準分析・測定法委員会編,1986,土壌標準分析・測定法,博友社,354p.
- 藤貫 正,1979,カルシウム,地質調査所化学分析法,52,57-61.
- 石川茂雄,1994,原色日本植物種子写真図鑑,石川茂雄図鑑刊行委員会,328p.
- 川崎 弘・吉田 淳・井上恒久,1991,九州地域の土壌型別蓄積リンの形態別計量,農林水産省 農林水産技術会議事務局編 土壌蓄積リンの再生循環利用技術の開発,23-27.
- 中山至大・井之口希秀・南谷忠志,2010,日本植物種子図鑑(改訂版),東北大学出版会,678p.
- 農林省農林水産技術会議事務局監修,1967,新版標準土色帖.
- ペドロジー学会編,1997,土壌調査ハンドブック改訂版,博友社,169p.
- 佐藤敏也,1988,赤生のイネ,赤生文化の研究2 生業,金関 怨・佐原 真編,雄山閣,97-111.
- 鈴木甫夫・高橋 冬・安延尚文,2012,ネイチャーウォッチングガイドブック 草木の種子と果実—形態や大きさが一目でわかる植物の種子と果実632種—,誠文堂新光社,272p.
- 楢坂恭代,1993,アワ・ヒエ・キビの同定,吉崎昌一先生還暦記念論集「先史学と関連科学」,261-281.

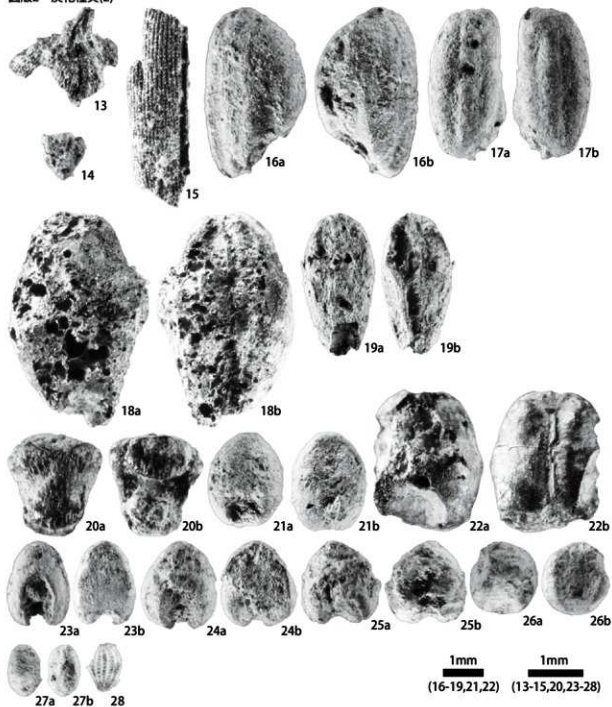
図版1 炭化種実(1)



1. アカマツ 短枝・葉 (S-81:2層-3)
3. オニグルミ 核 (SK-8:カクラン)
5. クリ 果皮 (SK-5:7層)
7. クリ 果皮 (SK-5:7層)
9. クリ? 果実 (SK-7:6層)
11. アオハダ 核 (S-35:15層)

2. アカマツ 葉 (S-81:2層-3)
4. オニグルミ 葉 (SK-151:2層)
6. クリ 果皮(着点) (SK-5:7層)
8. クリ 子葉 (SK-4:4層)
10. キハダ 種皮 (S-81:2層-4)
12. ミズキ 核 (SZ-3:⑤層)

図版2 炭化種実(2)



13. イネ 穎 (頂部) (S-35:6層)
 15. イネ 穎 (SK-4:3層)
 17. イネ 胚乳 (S-35:16層)
 19. オオムギ 穎・胚乳 (S-81:2層-4)
 21. コムギ 胚乳 (S-81:2層-1)
 23. ヒエ近似種 穎・胚乳 (S-35:6層)
 25. キビ? 胚乳 (S-35:18層)
 27. イネ科 胚乳 (S-35:6層)

14. イネ 穎 (基部) (SK-4:3層)
 16. イネ 胚乳 (SK-8:1層)
 18. オオムギ 胚乳 (S-35:12層)
 20. ムギ類 穂軸 (S-35:6層)
 22. コムギ 胚乳 (S-35:6層)
 24. ヒエ近似種 穎・胚乳 (S-81:2層-3)
 26. アワ 胚乳 (S-35:6層)
 28. テンツキ近似種 果実 (S-35:18層)

栃木県大田原市岩舟台遺跡出土石器・礫の岩石肉眼鑑定

バリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

本分析調査では栃木県大田原市に所在する岩舟台遺跡より出土した、縄文時代を中心とする石器・礫に使用されている岩石の組成を肉眼による鑑定で明らかにし、その産地を推定する。以下にその結果を報告する。

1. 試料

試料は岩舟台遺跡から出土した石器および礫である。器種別の鑑定点数は、磨石 183 点、礫 226 点、白い礫 83 点、石皿 92 点、石鏃 20 点、石錘 12 点、打製石斧 16 点、磨製石斧 2 点、砥石 6 点、石棒 4 点、剥片 69 点であり、計 713 点である。

2. 分析方法

当社技師二名が公益財団法人とちぎ未来づくり財団埋蔵文化財センターに赴き、岩石肉眼鑑定を行った。岩石肉眼鑑定は、野外用ルーペを用いて行い、石材表面の鉱物や組織を観察し、五十嵐(2006)の分類基準に基づき、肉眼で鑑定できる範囲の岩石名を付した。なお、正確な岩石名の決定には、岩石薄片作成観察や、蛍光 X 線分析、X 線回折分析などが併用されるが、今回は実施していないため、鑑定された岩石名は概査的な岩石名である点に留意されたい。また、試料の一部は、写真撮影を行い図版に示した。

3. 結果

表 1～11 に器種別の鑑定結果を、表 12～19 および図 1～8 に磨石、礫、白い礫、石皿、石鏃、石錘、打製石斧、剥片の石質組成を示した。

4. 考察

(1) 地質概略

遺跡が立地するのは、那珂川と澗川の合流部より北の低位段丘上に位置する。また、遺跡の立地する大田原市より西方には、八溝山地の南部から南西方向に流下する河川が発達する。

遺跡より出土する礫や石器に使われる岩石の由来となる地質は、上述の河川の流域に分布する地質と概ね整合すると考えられる。以下の地質背景は、20 万分の 1 地質図幅「白河」(久保ほか, 2007) および 20 万分の 1 地質図幅「日光」(山元ほか, 2000) に基づく。

那珂川には、上流域に、前期・中期中新世の流紋岩質火砕岩・溶岩、後期中新世のデイサイト・流紋岩質凝灰角礫岩・火山礫凝灰岩(大部分溶結)などが分布している。また、那珂川には第四紀に活動した那須火山の噴出物が分布している。那須火山の噴出物は、中期・後期更新世の、デイサイト・安山岩、玄武岩などである。

澗川は、栃木県塩原町付近に端を発し、新第三系の流紋岩質火砕岩・溶岩が広く分布する。デイサイト凝灰角礫岩・火山礫凝灰岩(大部分溶結)、礫、砂および泥などからなる白河火砕流堆積物が分布する。

一方、八溝産地の南部には、後期ジュラ紀の古期堆積岩類が分布する。古期堆積岩類は、砂岩を主体とし、頁岩およびチャートを伴う。古期堆積岩類を角閃石黒雲母花崗岩、角閃石黒雲母石英閃緑岩、トーナル岩、角閃石斑いり岩などが貫入している。古期堆積岩類と花崗岩質岩の接触部には、ホルンフェルスが生じている。

以上の地質背景をもとに、器種ごとに各岩石や鉱物について産出する地質について記述する。

(2) 器種別の石質組成

岩石肉眼鑑定の結果、各器種の石材には特徴的な組成が見られた。特に磨石、石皿は相似した組成を示し、安山岩類、玄武岩・安山岩・デイサイト（新第三紀）が優先する。また、打製石斧では燻青石ホルンフェルス・ホルンフェルスが圧倒的に優先する。石鏝、薄片ではチャートが多い傾向にある。以下に各器種に用いられている石材について述べる。

磨石には、安山岩類（第四紀）および、新第三紀の玄武岩・安山岩・デイサイトが多用されている。安山岩類は、捕獲岩を含有するものが一部に認められ、第四紀に活動した那須火山の噴出物と推測される。那須川流域において分布する礫と考えられる。新第三紀の玄武岩・安山岩・デイサイトは、変質を受けて緑色を帯びる基質を有する岩相を示す。那須川流域や蛇尾川上流域において分布する新第三紀の地質に由来すると考えられる。

礫には、新第三紀～第四紀の輝石安山岩・デイサイト、流紋岩、砂岩が多用されている。このほか、花崗岩類、斑岩類・ドレライト、凝灰岩類（奥日光）などが使用されている。安山岩類は、石英や捕獲岩を含有するものが一部に認められ、第四紀に活動した那須火山の噴出物と推測される。那須川流域において採取可能な礫とみられる。新第三紀の安山岩・デイサイトは、変質を受けて緑色を帯びる基質を有する岩相を示す。花崗岩類は、黒雲母角閃石花崗岩、角閃石黒雲母花崗閃緑岩、石英閃緑岩、微閃緑岩が、斑岩類は、ひん岩、閃緑斑岩、花崗斑岩、石英斑岩（捕獲岩含有）などが使用されている。八満山地に分布する白亜紀の花崗岩体や、那須川上流域に分布する新第三系の花崗閃緑岩～石英閃緑岩の岩体に由来すると考えられる。ドレライトは、各所の新第三系の地質に産することが知られているが、八満山地南部の那須川町に分布する斑れい岩体に伴って産するものと考えられる。凝灰岩類（奥日光）は、流紋岩質凝灰岩、溶結凝灰岩、火山礫凝灰岩などが使用されている。ソロバン玉型の石英片が全体に散在し、軽石の溶結部などが認められる岩相を呈する。鬼怒川上流域に分布する奥日光流紋岩類に由来する岩石であると考えられる。変質流紋岩（赤玉）やトレモラ閃石岩が僅かに使用されている（図版 1-1、1-2）。トレモラ閃石岩は、蛇紋岩地帯に産する岩石で、蛇紋岩は、埼玉県長瀬などの産地が知られており、このような遠方の産地との比較が重要であると考えられる。赤玉石は、鬼怒川水系の塩谷郡藤原町付近に産するものが知られており、玉髓と同様に鬼怒川流域において採取可能である。砂岩は八満山地の地質に由来するものが多く、まれに新第三紀の地質に由来するものが認められる。

白い礫には、デイサイト質凝灰岩および凝灰質泥岩が主体となっており、泥岩や珪化木が僅かに使用されている。デイサイト質凝灰岩は、白色で石英片などの鉱物片が散在する岩相を示し、白河火砕堆積物の構成部に由来するとみられる（図版 1-3）。泥岩は風化して白色を呈する。珪化木は、木片の組織が残存している（図版 1-4）。

石皿には、おもに輝石安山岩、多孔質輝石安山岩が使用されている。輝石安山岩は、新第三紀のものが認められる。那須川水系や那須川水系の上流域に分布する那須火山や新第三系の地質に由来すると考えられる。このほか、花崗岩類として石英閃緑岩、角閃石黒雲母花崗閃緑岩、微閃緑岩や、ドレライトが使用されている（図版 1-5、1-6）。磨石に使用されているものと同様の産地であるとみられる。石皿に僅かに使用されているデイサイトは、礫や磨石に使用されているものと同様の岩相を示す（図版 2-7）。

石鏝には、輝石安山岩、輝石安山岩（新第三紀）、流紋岩、頁岩、頁岩（新第三紀）、珪質頁岩、チャート、玉髓が主に使用されている。輝石安山岩や流紋岩は、鬼怒川流域の新第三系の地質に由来するものとみられる。頁岩およびチャートは、八満山地を構成する古期堆積岩類に由来すると考えられ、在地の石材であると考えられる。頁岩（新第三紀）は、八満山地に産するものとは岩相を異にしており、遠隔地からの移入石材である

可能性が示唆される。珪質頁岩は、良質な岩相を示し、東北地方の新第三系の地質に由来する、いわゆる硬質頁岩といわれる石材である(図版2-8)。玉髓は、一般に流紋岩の晶洞部などに産する鉱物で、鬼怒川流域に分布する流紋岩類に伴って産するものとみられる(図版2-9)。赤玉石は、鬼怒川水系の塩谷郡藤原町付近に産するものが知られており、玉髓と同様に鬼怒川流域において採取可能である。

石鏢には、輝石安山岩、輝石安山岩(新第三紀)、多孔質輝石安山岩、砂岩、頁岩が主に使用されている。輝石安山岩および多孔質輝石安山岩は、那珂川水系に位置する那須火山の火山噴出物が主体となっており、新第三紀の安山岩類は鬼怒川流域に分布する地質に由来するとみられる。砂岩、頁岩は、八溝山地を構成する地質に由来する。

打製石斧には、董青石ホルンフェルスやホルンフェルスが主に使用されている。董青石ホルンフェルスやホルンフェルスは、八溝山地に分布する花崗岩体の周縁部に分布する地質に由来すると考えられる。

磨製石斧には、粘板岩が使用されている。粘板岩は、八溝山地を構成する地質に由来すると考えられる。

砥石には、頁岩、粘板岩、砂岩が主に使用されている。頁岩、砂岩および粘板岩は、構成する粒子の淘汰が良好であり、八溝山地を構成する地質に由来する岩石から、意図的に選択したものと考えられる。

石棒には、デイサイト質凝灰岩、ドレライト、緑色片岩が使用されている。デイサイト質凝灰岩は、白い礫に使用されているものと同様の岩相を示す。ドレライトは、新第三紀の各所の地質に産する岩石で、八溝山地南部に分布する斑れい岩体に伴って産すると考えられる。緑色片岩は点紋が散在する岩相を示し、荒川上流域に分布する三波川変成岩類に由来すると推定され、移入石材とみられる(図版2-10)。

剥片には、チャートおよび泥質チャートが多用されている。このほかに、使用されている頁岩やホルンフェルスは、八溝山地の地質に由来する。変質流紋岩や赤玉石、玉髓、脈石英は、石鏢に使用されているものと同質であり、同様の産地が推定される。また、珪質頁岩は、良質な岩相を示しており、東北地方の日本海側に分布する地質に由来し、移入されたと考えられる。

引用文献

- 五十嵐俊雄,2006,考古資料の岩石学,パリオ・サーヴェイ株式会社,194p.
 久保和也・柳沢幸夫・山元孝広・中江 訓・高橋 浩・利光誠一・坂野靖行・宮地良典・高橋雅紀・大野哲二・駒澤正夫,2007,20万分の1地質図幅「白河」,産業技術総合研究所地質調査総合センター。
 山元孝広・滝沢文教・高橋 浩・久保和也・駒澤正夫・広島俊男・須藤定久,2000,20万分の1地質図幅「日光」,産業技術総合研究所地質調査総合センター

表1(1). 岩石肉眼鑑定結果 (磨石)

通し番号	出土位置	図版	番号	石材	備考	特記
2	CJISK-4	30	43	輝石安山岩		本文中は礫石として記載
3	CJISK-4			輝石安山岩	新第三紀 ヤケ	本文中は礫石として記載
4	CJISK-4			砂岩		本文中は礫石として記載
5	CJISK-4			輝石安山岩		本文中は礫石として記載
5'	BISK-8			輝石安山岩		
6	CJISK-4	29	37	安山岩		本文中は礫石として記載
7	CJISK-4	30	41	安山岩		本文中は礫石として記載
8	CJISK-4	30	40	安山岩		本文中は礫石として記載
9	CJISK-4	30	42	石英含有輝石安山岩	新第三紀	本文中は礫石として記載
10	CJISK-4	29	33	安山岩		本文中は礫石として記載
11	CJISK-4	29	36	輝石安山岩		本文中は礫石として記載
12	CJISK-4	29	34	輝石安山岩		本文中は礫石として記載
13	調査区内			凝灰質泥岩	新第三紀	
13	CJISK-4	29	38	安山岩	新第三紀	本文中は礫石として記載
16	調査区内			輝石安山岩		
17	調査区内			輝石安山岩		
18	調査区内			輝石安山岩		
23	調査区内			輝石安山岩		
26	調査区内			デイサイト	新第三紀	
36	調査区内			ピラレ		
40	BJSK-55	51	10	輝石安山岩	新第三紀	本文中は礫石として記載
41	BJSK-55	51	9	デイサイト	新第三紀	本文中は礫石として記載
43	AJSK-121	79	5	輝石安山岩	新第三紀	本文中は礫石として記載
54	調査区内	197	1	輝石安山岩		本文中は礫石として記載
59	CJISK-5	32	15	黒雲母角閃石花崗岩		本文中は礫石として記載
67	調査区内			安山岩	新第三紀	
75	CJISK-6			デイサイト	新第三紀	本文中は礫石として記載
75	AJSK			輝石安山岩		
76	調査区内			輝石安山岩		
83	調査区内	197	6	輝石安山岩		
88	CJISK-6	33	15	輝石安山岩	新第三紀	本文中は礫石として記載
89	CJISK-7			デイサイト質凝灰岩	新第三紀	本文中は礫石として記載
91	調査区内			輝石安山岩		
92	調査区内			輝石安山岩		
95	調査区内	198	11	黒雲母質安山岩	新第三紀	
95	CJISK-8	36	20	輝石安山岩		本文中は礫石として記載
96	CJISK-16			多孔質輝石安山岩		本文中は礫石として記載
97	BJSK-106	75	22	デイサイト質凝灰岩		本文中は礫石として記載
105	CJISK-8			デイサイト	新第三紀	本文中は礫石として記載
124	BISK-6			輝石デイサイト	新第三紀	
141	BJSK-112			石英斑岩		本文中は礫石として記載
145	BJSK-112			石英含有輝石安山岩	新第三紀	本文中は礫石として記載
154	CJISK-16	39	32	輝石安山岩	新第三紀	本文中は礫石として記載
159	CJISK-16	39	30	輝石安山岩		本文中は礫石として記載
160	CJISK-16			輝石安山岩	新第三紀	本文中は礫石として記載
17	CJISK-23			輝石安山岩		本文中は礫石として記載
174	CJISK-16			多孔質輝石安山岩		本文中は礫石として記載
179	CJISK-16			輝石安山岩	ヤケ	本文中は礫石として記載
194	CJISK-18			輝石安山岩		本文中は礫石として記載
196	CJISK-20	43	8	輝石安山岩		本文中は礫石として記載
197	CJISK-20	43	9	輝石安山岩		本文中は礫石として記載
198	CJISK-20	43	10	輝石安山岩		本文中は礫石として記載
199	CJISK-20			玄武岩	新第三紀	本文中は小礫石として記載
224	BJSK-173	128	7	玄武岩質安山岩	新第三紀	本文中は礫石として記載
225	BJSK-173	128	6	石英含有輝石安山岩	新第三紀	本文中は礫石として記載
230	CJISK-23			デイサイト	新第三紀	本文中は礫石として記載
250	BISZ-31			輝石安山岩	新第三紀	
258	BIS-42			輝石安山岩	捕獲岩含有	
279	調査区内			デイサイト	新第三紀	
280	CJISK-73	58	34	輝石安山岩		本文中は礫石として記載
288	調査区内			輝石安山岩		
288	調査区内			輝石安山岩	新第三紀	
292	BIS-180			輝石デイサイト		
294	調査区内			輝石安山岩		
295	調査区内			多孔質輝石安山岩		
297	BIS-163			輝石安山岩	新第三紀	
322	BISZ-31	176	4	砂岩		
323	CJISK-19			多孔質輝石安山岩		
337	CJISK-75	62	32	輝石安山岩		本文中は礫石として記載
344	CJISK-75	63	38	輝石安山岩	新第三紀	本文中は礫石として記載
346	CJISK-75			輝石安山岩		本文中は礫石として記載

表1(2). 岩石肉眼鑑定結果(磨石)

通し番号	出土位置	図版	番号	石材	備考	特記
348	B/KS2-41	179	33	石英含有輝石安山岩		本文中は礫として記載
351	C/KSK-75	62	33	輝石安山岩		本文中は礫石として記載
373	C/KSK-75	63	41	デイナイト付火山礫凝灰岩		本文中は礫として記載
375	C/KSK-75			輝石安山岩		本文中は礫石として記載
376	C/KSK-75	63	36	輝石安山岩		本文中は礫石として記載
377	C/KSK-75			デイナイト付凝灰岩	新第三紀	本文中は礫石として記載
383	B/KS2-41			輝石安山岩		本文中は礫石として記載
401	C/KSK-74	60	13	頁岩		本文中は礫石として記載
403	B/KS2-41			石英含有輝石安山岩	新第三紀	
407	B/KS2-41			輝石安山岩	新第三紀	ヤケ
410	C/KSK-71	55	9	輝石安山岩		本文中は礫石として記載
411	C/KSK-71	55	11	デイナイト	新第三紀	本文中は礫石として記載
412	C/KSK-71	55	10	輝石安山岩		本文中は礫石として記載
413	B/KS2-41			安山岩		
415	調査区内			輝石安山岩		
415	B/KS2-41			輝石安山岩		
418	B/KS2-41			輝石デイナイト	新第三紀	
426	B/KS2-41			輝石安山岩	新第三紀	
434	C/KSK-82	60	1	輝石安山岩		
438	B/KS-163	150	7	多孔質輝石安山岩		本文中は礫石として記載
439	B/KSD-83			輝石安山岩		
454	B/KSD-37			輝石安山岩		ヤケ
472	C/KP-79	144	3	輝石安山岩		本文中は礫石として記載
473	C/KP-79	144	2	輝石安山岩	新第三紀	本文中は礫石として記載
475	C/KP-79	144	7	輝石安山岩		本文中は石英として記載
476	B/KS2-41	179	36	多孔質輝石安山岩		本文中は礫石として記載
477	C/KP-79	144	6	輝石安山岩		本文中は礫石として記載
485	C/KP-79	144	1	輝石安山岩	新第三紀	本文中は礫石として記載
489	C/KSK-4			輝石安山岩	新第三紀	
492	C/KSK-4	29	35	輝石安山岩		本文中は礫石として記載
499	C/KSK-4	30	39	輝石安山岩		本文中は礫石として記載
503	C/KSK-4			デイナイト	新第三紀	
509	C/KSK-133	120	3	輝石安山岩		本文中は礫石として記載
510	C/KSK-4			安山岩	捕獲岩含有	本文中は礫石として記載
510	C/KSK-133			安山岩	新第三紀	本文中は小礫として記載
518	C/KSK-124	83	14	輝石安山岩		本文中は礫石として記載
526	C/KSK-124	83	13	デイナイト	新第三紀	本文中は礫石として記載
527	C/KSK-124	83	12	輝石安山岩		本文中は礫石として記載
529	C/KSK-124			輝石安山岩		本文中は小礫として記載
546	B/KS1-154	22	24	輝石安山岩		本文中は礫石として記載
557	C/KSK-138	120	1	輝石安山岩		本文中は礫石として記載
(557)	B/KS1-154	22	25	輝石安山岩	新第三紀	本文中は礫石として記載
558	B/KC-4			無歯晶質安山岩	新第三紀	
559	B/KC-4			輝石安山岩	新第三紀	
561	C/KSK-138			デイナイト	新第三紀	ヤケ
564	C/KSK-138			デイナイト	新第三紀	本文中は小礫として記載
566	B/KC-4			輝石安山岩		
574	C/KS2-12-13			輝石安山岩		
576	C/KSK-140	122	3	輝石安山岩		本文中は礫石として記載
588	C/KSK-183	129	1	輝石安山岩		本文中は礫石として記載
590	C/KSK-185			輝石安山岩	新第三紀	本文中は礫石として記載
591	C/KS2-3	164	34	輝石安山岩		本文中は礫石として記載
593	C/KS2-3	163	31	輝石安山岩		本文中は礫石として記載
594	C/KS2-3	164	37	輝石安山岩		本文中は石英として記載
616	B/KC-5			輝石安山岩		
632	B/KC-5			多孔質輝石安山岩		
641	B/KC-5			輝石安山岩		
643	B/KC-5			デイナイト	新第三紀	
663	C/KS2-3	163	32	輝石安山岩		本文中は礫石として記載
664	C/KS2-3	163	30	輝石安山岩		本文中は礫石として記載
665	C/KS2-3	163	33	輝石安山岩		本文中は礫石として記載
675	C/KS2-26	167	16	輝石安山岩	捕獲岩含有	本文中は礫石として記載
676	C/KS2-26	167	15	輝石安山岩		本文中は礫石として記載
679	C/KS2-26	167	11	花崗斑岩		本文中は礫石として記載
704	B/KC-5			輝石安山岩		
706	調査区内			輝石安山岩		ヤケ
707	調査区内			輝石安山岩		
723	C/KS2-26	167	14	輝石安山岩	新第三紀	本文中は礫石として記載
747	B/KC-6			輝石安山岩		
777	C/KSD-1	154	3	輝石安山岩		本文中は礫石として記載
803	B/KC-6			輝石安山岩		

表1(3). 岩石肉眼鑑定結果 (磨石)

通し番号	出土位置	国版	番号	石材	備考	特記
804	B/C-6			トリライト		
808	B/C-6			デイスライト	新第三紀	
815	B/C-7			輝石安山岩		
816	B/C-7			輝石安山岩		
817	B/C-7			輝石安山岩	新第三紀	
818	B/C-7			輝石安山岩		
819	B/C-7			輝石安山岩	捕獲岩含有	
896	C区SI-85			輝石安山岩		本文中は礫石として記載
898	C区SI-85	15	9	輝石安山岩	新第三紀	本文中は礫石として記載
903	C区SI-85			デイスライト	新第三紀	本文中は礫石として記載
911	C区D-10			輝石安山岩		
926	B/C-8			輝石安山岩		
929	調査区内			輝石安山岩	新第三紀	
958	C区C-8			輝石安山岩		
1013	調査区内			砂岩		
1025	B/D-8			輝石安山岩		
1033	B/D-8			輝石安山岩		
1055	B/C-8			輝石安山岩		
1057	B/D-8			多孔質輝石安山岩		
1058	B/D-8			輝石安山岩		
1063	B/D-8			輝石安山岩		
1192	調査区内			凝灰岩	新第三紀	
1110	C区	197	5	輝石安山岩		本文中は礫石として記載
1111	C区			輝石安山岩		
1112	C区			輝石安山岩		
1122	C区			輝石安山岩		
1124	調査区内			輝石安山岩		
1131	C区			輝石安山岩		
1194	B区SI-154	21	20	黒雲母角閃石花崗岩		本文中は礫石として記載
1200	C区	197	4	輝石安山岩		本文中は礫石として記載
1201	B区			輝石安山岩		
1203	B区SI-154	21	19	石英含有輝石安山岩		本文中は礫石として記載
1204	C区			輝石安山岩		
1204	B区SI-154	21	21	輝石安山岩		本文中は礫石として記載
1207	C区			多孔質輝石安山岩		
1248	B区			輝石安山岩	新第三紀	
1250	B区			閃緑斑岩		
1268	B区			輝石安山岩	捕獲岩含有	
1283	B区			トリライト		
1290	B区SI-111	19	45	デイスライト質火山凝灰岩		
-	B区SI-154			石英含有輝石安山岩		

表2(1). 岩石肉眼鑑定結果 (礫)

通し番号	出土位置	国	番号	石材	備考	特記
16	C区SK-4			頁岩		
19	C区SK-4			デイスライト	新第三紀	
24	調査区			デイスライト	新第三紀	
27	B区SK-47	103	23	輝石安山岩		本文中は石黒として記載
40	C区SK-4			頁岩		
55	A区			デイスライト	新第三紀	
59	A区			砂岩		
56	B区			流紋岩		
57	B区			流紋岩質凝灰岩		
85	調査区内			輝石安山岩		
59	B区			流紋岩質凝結凝灰岩		
65	湯津上小2Tro			輝石安山岩		
71	B区SK-105			玄武岩質安山岩		
72	B区SK-105			礫質砂岩		
73	B区SK-105			デイスライト	新第三紀	
74	C区SK-6			デイスライト	新第三紀	
76	B区C-6			火山凝灰岩	新第三紀	
77	B区C-6			珪化デイスライト		
80	B区C-6			石英斑岩	捕獲岩含有	
81	B区			閃緑斑岩		
82	B区			デイスライト質火山凝灰岩	新第三紀	
83	B区SK-106			黒雲母角閃石花崗岩	捕獲岩含有	
87	B区SK-106			トリライト		
89	B区			スコリア質安山岩		
93	C区SK-8	36	22	輝石安山岩		

表2(2). 岩石肉眼鑑定結果 (礫)

通し 番号	出土位置	図	番号	石材	備考	特記
98	B/KC-6			珪化流紋岩		
99	C/KSK-8	36	23	輝石安山岩	新第三紀	
100	B/KC-6			デイサイト	新第三紀	
101	B/KC-6			珪化流紋岩		
104	C/KSK-8	36	21	石英含有輝石安山岩		
115	C/KSK-8	36	24	輝石安山岩		
122	B/KC-6			デイサイト	新第三紀	
123	B/KC-6			輝石デイサイト		
130	C/KSK-16	39	31	玄武岩質安山岩	ヤケ	
151	C/KSK-16			デイサイト	新第三紀	
152	C/KSK-16			輝石安山岩	ヤケ	
158	B/KSK-151			多孔質流紋岩	黒	
161	C/KSK-16			石英斑岩		
162	C/KSK-16			安山岩	捕獲岩含有	
163	B/KD-9			流紋岩	新第三紀	
163	C/KSK-16			デイサイト	新第三紀 ヤケ	
164	B/KSK-151			デイサイト	新第三紀	
165	B/KSK-151			実質凝灰岩		
170	調査区内			トレキウ閃石岩		
172	B/KSK-151			流紋岩	新第三紀 ヤケ	
179	B/KSK-151			ドレライト		
181	B/KSK-151			チャート		
186	B/KSK-42			流紋岩		
187	B/KSK-161	128	12	石英含有輝石安山岩		
187	B/KSK-42			黒青石ホルンフェルス		
188	C/KSK-16			輝石安山岩	捕獲岩含有	
189	B/KSK-161			黒雲母角閃石花崗岩		
192	B/KSK-161			黒雲母角閃石花崗岩		
193	B/KSK-162	128	2	頁岩		
194	B/KSK-162	128	3	輝石安山岩	新第三紀	
227	B/KB-C-4			実質デイサイト		
230	B/KSK-224			黒色片岩	三波川?	
233	調査区内			デイサイト	新第三紀	
240	古墳			デイサイト	新第三紀	
245	調査区内			珪化岩		
245	C/KSK-73			無斑晶質安山岩		
246	C/KSK-73			デイサイト質凝灰岩	新第三紀	
247	B/KSZ-31	176	6	輝石安山岩		
247	C/KSK-73			緑岩	新第三紀	
248	B/KSZ-31	176	7	輝石安山岩	新第三紀	
248	C/KSK-73			黒青石ホルンフェルス		
249	B/KSZ-31	176	3	輝石デイサイト	新第三紀	
250	C/KSK-73			砂岩	ヤケ	
265	B/KS-42			砂岩		
268	C/KSK-73			石英斑岩		
273	B/KSK-108			安山岩	捕獲岩含有	
274	B/KSK-108	77	6	安山岩		
280	B/KSI-180			デイサイト	新第三紀	
289	B/KSI-180			砂岩		
291	B/KSI-180			砂岩	新第三紀	
293	調査区内			凝質砂岩		
298	B/KS-163			閃閃緑岩		
300	B/KSZ-41	179	30	デイサイト質火山凝灰岩		本文中は石重として記載
302	B/KSZ-41	179	25	輝石安山岩		
314	C/KSK-73			流紋岩		
326	B/KSD-37			チャート	赤色	
342	B/KSD-37			凝灰質泥岩		
345	B/KSD-37			赤玉石		
351	B/KSZ-41	179	29	ドレライト		
353	B/KSZ-41			黒曜石		本文中は削片として記載
354	C/KSK-75			閃緑斑岩		
362	B/KS-84			多孔質輝石安山岩		
364	C/KSK-75			砂岩		
368	B/KSZ-41			流紋岩	新第三紀	
374	B/KSZ-41			流紋岩質凝結凝灰岩	新第三紀	
378	B/KSZ-41			シルト岩		
384	B/KSZ-41			ドレライト		
386	B/KSZ-26			砂岩		
389	B/KSZ-41			輝石安山岩		本文中は削石として記載
397	C/KD-12			花崗斑岩		
402	B/KSZ-41			頁岩		

表2(3). 岩石肉眼鑑定結果 (礫)

通し番号	出土位置	国	番号	石材	備考	特徴
409	BISZ-41			頁岩		
411	BISZ-41			輝石アイサイト	新第三紀	
414	BISZ-41			砂岩	ヤケ	
416	BISZ-41			輝石安山岩		
417	BISZ-41			流紋岩質凝灰岩	古期	
419	BISZ-41			アイサイト質溶結凝灰岩		
427	BISZ-41			砂岩		
440	BISK-163			砂岩		
449	調査区内			粘板岩		
450	BISZ-83			粘板岩		
456	BISZ			流紋岩		本文中は磨石として記載
457	BISZ			実質流紋岩	赤玉	
464	AISZ-41			実質流紋岩		
467	CISK-99			アイサイト質凝灰岩	新第三紀	
481	D-4			チャート		
488	CISK-4			輝石安山岩	新第三紀	
490	BIB-3			安山岩		
490	CISK-4			石英閃緑岩		
491	CISK-4			輝石安山岩		
491	BIB-3			柱状岩		
493	CISK-4			輝石安山岩	新第三紀	
495	CISK-134			砂岩		
496	CIS-90			実質安山岩		
497	CISK-4			火山礫凝灰岩	古期	
501	CISK-4			輝石安山岩	新第三紀	
506	CISK-4			輝石安山岩	新第三紀	
512	CISK-133			アイサイト	新第三紀	
513	CISK-133			輝石安山岩	新第三紀	
518	CISK-125			実質凝灰岩		
520	BISK-153	90	13	輝石安山岩		
521	BIB-4			輝石安山岩		
522	BISK-153	90	11	輝石安山岩		
524	BISK-153			閃緑斑岩	新第三紀	本文中に石黒として記載
525	BISK-153			角閃石黒雲母花崗閃緑岩	ヤケ	
526	BISK-153	90	12	アイサイト質凝灰岩		
528	BISK-153	90	10	輝石安山岩		
529	BISK-153	90	9	頁岩		
534	BISK-153			流紋岩質溶結凝灰岩	新第三紀	
534	BIB-4			頁岩		
535	BISL-154	22	28	多孔質輝石安山岩		本文中に石黒として記載
536	BIB-4			実質アイサイト		
537	BISL-154			黒雲母角閃石花崗岩		
537	BIB-4			溶結凝灰岩	古期	
540	BISL-154			砂岩		
542	BISL-154	23	33	輝石安山岩	新第三紀	本文中に石黒として記載
544	CISK-128			火山礫凝灰岩	新第三紀	
545	BISL-154	22	26	砂岩	新第三紀	本文中に石黒として記載
548	CISK-128			無斑晶質安山岩	新第三紀	
552	BISL-154			アイサイト		
553	BISL-154			流紋岩	新第三紀 ヤケ	
554	BISL-154			輝石アイサイト	新第三紀 ヤケ	
554	BIC-4			流紋岩	新第三紀	
555	BIC-4			アイサイト	新第三紀	
556	BISL-154			輝石アイサイト	新第三紀	本文中に石黒として記載
556	BIC-4			花崗チャート		
558	BISL-154			輝石安山岩		
559	BISL-154			輝石アイサイト	新第三紀 ヤケ	
559	CISK-138	120	5	黒雲石ホルンフェルス		
561	BIC-4			チャート		
564	BISL-154	23	34	輝石安山岩		本文中に石黒として記載
565	CISK-138			砂岩	新第三紀	
566	CISK-138			砂岩	新第三紀	
569	BIC-4			流紋岩	新第三紀	
573	BIC			アイサイト	新第三紀	
584	BIC-4			アイサイト	新第三紀	
585	CISK-181	96	9	輝石安山岩	ヤケ	本文中に石黒として記載
586	CISZ-3			アイサイト	新第三紀	
626	BIC-5			頁岩		
628	CISZ-3			実質流紋岩		
634	CISZ-3			黒雲石ホルンフェルス		
639	BIC-5			粘板岩		

表2(4). 岩石肉眼鑑定結果 (礫)

通し番号	出土位置	図	番号	石材	備考	特徴
644	CISZ-3			輝石安山岩		
659	BIC-5			石英含有輝石安山岩	新第三紀	
683	CIE-13			チャート		
691	CISZ-26			実質流紋岩		本文中に削片として記載
698	CISZ-26			砂岩		本文中に削片として記載
703	CISZ-26			チャート		本文中に削片として記載
704	CISZ-26			チャート		本文中に削片として記載
705	CISZ-26			チャート		
706	CIE-13			頁岩		
707	CISZ-26			砂岩		
713	CISZ-26			輝石安山岩	ヤケ	
762	BIC-6			実質チャート		
806	BIC-6			砂岩	新第三紀	
835	BIC-7			ひん岩		
872	CISZ-30			ダイサイト	新第三紀	
882	CIS-6			ダイサイト	新第三紀	
883	CIS			頁岩		
889	CISZ-26			実質流紋岩		
903	BIC-7			砂岩		
904	CIS-85			ダイサイト	新第三紀	
919	BIC-8			粘板岩		
1014	CID-12			頁岩		
1028	BKD-8			流紋岩	新第三紀	
1037	BIC			流紋岩質凝灰岩	新第三紀	
1043	BIC			ドレライト		
1083	BKD-8			ダイサイト	新第三紀	
1087	BKD-8			泥質砂岩		
1090	BKD-8			ダイサイト	新第三紀	本文中は磨石として記載
1095	CIE-13			ダイサイト	新第三紀	
1096	CIE-13			ダイサイト	新第三紀 ヤケ	
1097	CIE-13			頁岩		
1114	CIE-13			実質流紋岩		
1144	CIS			チャート		
1202	BISI-154			多孔質輝石安山岩		本文中に石重として記載
1205	BISI-154	21	22	流紋岩		
1205	CIS			無塵晶質安山岩		
1206	CIS			輝石安山岩	新第三紀	
1208	BISI-154			石英含有輝石安山岩	新第三紀	
1209	BISI-154			ひん岩		本文中に石重として記載
1210	BISI-154			砂岩		
1212	BISI-154			砂岩		
1213	BISI-154			ダイサイト	新第三紀	
1214	BISI-154			ダイサイト	新第三紀	
1216	BISI-154			流紋岩	新第三紀	
1217	BISI-154			実質凝灰岩	新第三紀	
1260	BIC			輝石安山岩		
1263	BIC			溶結凝灰岩	古期	
1291	BISI-180			ダイサイト	新第三紀	
1293	BISI-180			ダイサイト	新第三紀	
1295	BISI-111	19	50	流紋岩		
1302	BISI-111			輝石安山岩		
1303	BISI-111			輝石ダイサイト	捕獲岩含有	
1304	BISI-111	20	52	輝石ダイサイト	新第三紀 ヤケ	本文中に石重として記載
1305	BISI-111			輝石ダイサイト	新第三紀	
1307	BKP-172			ダイサイト質凝灰岩		
1308	BKP-172			輝石安山岩		
1313	BISK-47			流紋岩		
1323	BISK-151	88	15	輝石安山岩		本文中に石重として記載
-	BISI-154			ドレライト		

表3(1). 岩石肉眼鑑定結果 (白い礫)

通し 番号	出土位置	国	番号	石材	備考	特記
8	BKSK-36			凝灰質泥岩	新第三紀	
22	AKSK-50			アイサ小質凝灰岩	白河	
31	BK			凝灰質泥岩	新第三紀	
36	BKSK-47			凝灰質泥岩	新第三紀	
44	BKSK-55			アイサ小質凝灰岩	白河	
45	BKSK-55			アイサ小質凝灰岩	白河	
55	BKSK-36			泥岩	新第三紀	
216	BKE-12			アイサ小質凝灰岩	白河	
266	BKSK-45			アイサ小質凝灰岩	白河	
266	BKSK-71			凝灰質泥岩	新第三紀	
269	BKSK-47			凝灰質泥岩	新第三紀	
290	BKSK-152			アイサ小質凝灰岩	白河	
321	CKSK-73			凝灰質泥岩	新第三紀	
322	CKSK-73			凝灰質泥岩	新第三紀	
323	CKSK-73			凝灰質泥岩	新第三紀	
324	CKSK-73			凝灰質泥岩	新第三紀	
329	BKSD-37			アイサ小質凝灰岩	白河	
375	調査区内			アイサ小質凝灰岩	白河	
385	BKSK-41			凝灰質泥岩	新第三紀	
391	BKSK-41			アイサ小質凝灰岩	白河	
413	BKSK-110			凝灰質泥岩	新第三紀	
421	AKS-180			凝灰質泥岩	新第三紀	
422	AKS-180			凝灰質泥岩	新第三紀	
423	AKSK-53			アイサ小質凝灰岩	白河	
438	CKE-12			アイサ小質凝灰岩	白河	
442	BKSD-83			アイサ小質凝灰岩	白河	
443	BKSD-83			凝灰質泥岩	新第三紀	
444	BKSD-83			凝灰質泥岩	新第三紀	
444	CKSK-99			アイサ小質凝灰岩	白河	
445	CKSK-99			凝灰質泥岩	新第三紀	
446	CK			アイサ小質凝灰岩	白河	
447	CKSK-99			凝灰質泥岩	新第三紀	
459	BKSD-64			凝灰質泥岩	新第三紀	
469	調査区内			凝灰質泥岩	新第三紀	
470	BKB-3			砂質凝灰岩	新第三紀	
474	AKSZ-41			泥岩	新第三紀	
475	AKSZ-41			アイサ小質凝灰岩	白河	
486	調査区内			アイサ小質凝灰岩	白河	
503	BKB-4			アイサ小質凝灰岩	白河	
521	CKSK-124			アイサ小質凝灰岩	白河	
522	CK			アイサ小質凝灰岩	白河	
523	調査区内			凝灰質泥岩	新第三紀	
524	調査区内			アイサ小質凝灰岩	白河	
538	BKB-4			アイサ小質凝灰岩	白河	
564	BKC-4			アイサ小質凝灰岩	白河	
588	BKC-4			砂質凝灰岩	新第三紀	
610	BKC-5			凝灰質泥岩	新第三紀	
611	BKC-5			アイサ小質凝灰岩	白河	
612	BKC-5			アイサ小質凝灰岩	白河	
613	BKC-5			アイサ小質凝灰岩	白河	
614	BKC-5			アイサ小質凝灰岩	白河	
615	BKC-5			アイサ小質凝灰岩	白河	
678	BKC-5			凝灰質泥岩	新第三紀	
679	調査区内			凝灰質泥岩	新第三紀	
692	BKC-5			アイサ小質凝灰岩	白河	
693	BKC-5			凝灰質泥岩	新第三紀	
694	BKC-5			凝灰質泥岩	新第三紀	
695	BKC-5			凝灰質泥岩	新第三紀	
749	BKC-6			アイサ小質凝灰岩	白河	
750	BKC-6			アイサ小質凝灰岩	白河	
751	BKC-6			アイサ小質凝灰岩	白河	
828	BKC-7			凝灰質泥岩	新第三紀	
829	BKC-7			アイサ小質凝灰岩	白河	
950	BKC-8			凝灰質泥岩	新第三紀	
951	調査区内			凝灰質泥岩	新第三紀	
1021	調査区内			アイサ小質凝灰岩	白河	
1023	調査区内			珪化木		
1069	BKD-8			アイサ小質凝灰岩	白河	
1070	調査区内			アイサ小質凝灰岩	白河	
1078	CKE-6			アイサ小質凝灰岩	白河	
1112	BKD-8			凝灰質泥岩	新第三紀	

表3(2). 岩石肉眼鑑定結果 (白い礫)

通し番号	出土位置	図	番号	石材	備考	特記
1113	B区			凝灰質泥岩	新第三紀	
1319	B区SK-47			凝灰質泥岩	新第三紀	
1320	B区SK-47			凝灰質泥岩	新第三紀	
1321	B区SK-47			凝灰質泥岩	新第三紀	
-	B区C-7			デイライト質凝灰岩	白河	
-	C区S-23周辺			凝灰質泥岩	新第三紀	
-	B区SK-47			凝灰質泥岩	新第三紀	
-	C区SK-6			凝灰質泥岩	新第三紀	
-	C区SK-36			凝灰質泥岩	新第三紀	
-	B区SK-166			デイライト質凝灰岩	白河	
-	B区SK-166			デイライト質凝灰岩	白河	
-	B区			デイライト質凝灰岩	白河	
-	B区			泥岩	新第三紀	

表4(1). 岩石肉眼鑑定結果 (石皿)

通し番号	出土位置	図	番号	石材	備考	特記
1	B区SK-33			輝石安山岩		
2	調査区内	195	8	火山礫凝灰岩	新第三紀	
4	調査区内			チャート		
10	調査区内			輝石安山岩		
24	調査区内			多孔質輝石安山岩		
30	調査区内			輝石安山岩	ヤケ	
39	C区SK-4			輝石安山岩	新第三紀	本文中は礫として記載
49	調査区内			輝石安山岩	新第三紀	
50	調査区内			輝石安山岩	新第三紀	
57	A区C			輝石安山岩	新第三紀	
71	調査区内	196	13	輝石安山岩		
72	調査区内			石英閃緑岩	ヤケ	
81	B区SK-106			輝石安山岩		
89	A区			角閃石黒雲母花崗閃緑岩		
120	B区C-6			輝石安山岩	新第三紀	
142	調査区内			凝灰砂岩		本文中は礫石として記載
158	C区SK-16			輝石安山岩		本文中は礫石として記載
190	B区SK-161	128	10	砂岩	新第三紀	本文中は礫石として記載
195	C区SK-20	43	11	多孔質輝石安山岩		本文中は礫石として記載
200	C区SK-18	99	15	輝石安山岩		本文中は礫として記載
218	B区SK-170			輝石安山岩		本文中は礫として記載
228	B区SK-178	94	1	輝石安山岩		本文中は礫として記載
229	C区SK-23			輝石安山岩		本文中は礫塊として記載
243	C区SK-73			砂岩	新第三紀 ヤケ	本文中は礫塊として記載
259	調査区内			輝石安山岩	新第三紀	
262	C区SK-73	58	35	輝石安山岩		
264	C区SK-73	58	32	輝石安山岩		
286	調査区内			ドレライト		
292	C区SK-73	58	33	輝石安山岩		
338	C区SK-75	63	37	輝石安山岩		
341	C区SK-75	63	34	輝石安山岩	新第三紀	本文中は礫塊として記載
345	C区SK-75	63	35	輝石安山岩		
352	C区SK-75	63	39	輝石安山岩		
364	B区SK-105			多孔質輝石安山岩		
367	C区SK-75			玄武岩質安山岩		
394	C区SK-17	40	2	輝石安山岩		
396	C区SK-74	60	11	輝石安山岩		
400	B区SK-41	179	32	デイライト		
401	B区SK-41	179	31	輝石安山岩		
404	B区SK-41	180	34	輝石安山岩	新第三紀	
412	B区SK-41			閃緑輝岩		
430	B区SK-41			輝石安山岩		
428	C区SK-80	65	19	多孔質輝石安山岩		
446	B区SK-180			多孔質輝石安山岩		
498	C区SK-4			輝石安山岩	新第三紀	本文中は礫として記載
500	C区SK-4	30	44	多孔質輝石安山岩		
520	C区SK-124	83	16	多孔質輝石安山岩		
541	C区SK-128	115	1	輝石安山岩		
560	C区SK-138	120	2	多孔質輝石安山岩		
577	C区SK-140	122	4	輝石安山岩		
583	C区SK-181	96	16	輝石安山岩		
592	C区SK-3	164	36	石英含有輝石安山岩		

表4(2). 岩石肉眼鑑定結果 (石皿)

通し番号	出土位置	国	番号	石材	備考	特記
617	CIXSZ-3	164	40	輝石安山岩		
636	CIXSZ-3	164	35	輝石安山岩	新第三紀	
666	CIXSZ-3	164	38	輝石安山岩		
717	CIXSZ-26	168	20	輝石安山岩	ヤケ	
722	CIXSZ-26	168	18	雑質砂岩		
734	CIXSZ-26	167	17	輝石安山岩		
736	BIXC-6			多孔質輝石安山岩		
736	CIXSZ-26	168	19	輝石安山岩		
737	CIXSZ-30	170	8	トアライト		
738	CIXSZ-30	170	7	輝石安山岩		
825	BIXC-7			頁岩		本文中は礫塊として記載
892	CIXSI-85	15	10	多孔質輝石安山岩		
893	CIXSI-85	15	11	輝石安山岩		
895	CIXSI-85			重曹石ホルンフェルス		本文中は礫石として記載
900	CIXSI-85	15	8	輝石安山岩		
908	調査区内			多孔質輝石安山岩		
949	BIXC-8			輝石安山岩	ヤケ	
952	BIXC-8			輝石安山岩		
1121	CIX			輝石安山岩		
1189	BIXSI-154	23	30	トアライト		
1191	BIXSI-154	22	23	多孔質輝石安山岩		
1192	BIXSI-154	23	32	閃緑斑岩	新第三紀	
1195	BIXSI-154	22	29	閃緑斑岩		
1196	BIXSI-154			玄武岩質安山岩	新第三紀	
1197	BIXC-5			石英含有輝石安山岩		
1198	BIXSI-154	22	27	石英含有輝石安山岩		
1216	CIX			多孔質安山岩		
1219	BIX			輝石安山岩	捕獲岩含有	
1220	BIX			多孔質安山岩		
1223	CIXSK-73			輝石安山岩	新第三紀	本文中は小礫として記載
1224	CIXSK-99			多孔質輝石安山岩		
1233	BIX			輝石安山岩		
1256	BIX			多孔質輝石安山岩		
1257	BIX			微閃緑岩		
1259	BIX	195	5	多孔質輝石安山岩		
1277	BIX			輝石安山岩		
1282	BIX			輝石安山岩		
1288	BIX			輝石安山岩		
1289	BIX			トアライト		
1297	BIXSI-111	19	51	輝石安山岩		本文中は礫塊として記載

表5. 岩石肉眼鑑定結果 (剥片石器)

通し番号	出土位置	国	番号	石材	備考	特記
3	AKSD-49			頁岩		本文中は剥片として記載
4	AKSD-49			チャート		本文中は剥片として記載
7	調査区内	194	3	チャート		本文中はスレイバーとして記載
37	AIXSK-53			頁岩	新第三紀	本文中はスレイバーとして記載
453	BIXSD-37			輝石安山岩	新第三紀	本文中は礫石として記載
479	CIXD-94			チャート		
502	BIXB-4			チャート		
533	BIXB-4			チャート		
591	BIXC-4			輝石安山岩	新第三紀	
1071	BIXD-8			珪質頁岩	頁岩	
1136	調査区内			重曹石ホルンフェルス		
1225	CIXSK-73	58	31	赤玉石		本文中は石匙として記載
1226	調査区内	194	5	玉髓		
1227	調査区内	194	4	チャート		本文中はスレイバーとして記載
1228	調査区内			流紋岩		
1233	CIXSK-73	58	30	チャート		
1175	調査区内	194	1	流紋岩		本文中は石匙として記載

表6. 岩石肉眼鑑定結果（石錘）

通し番号	出土位置	図	番号	石材	備考	特記
36	A区SK-53			輝石英		
53	調査区内	199	6	輝石安山岩		
61	A区	199	8	多孔質輝石安山岩		
175	調査区内	199	2	石英斑岩		
262	調査区内	199	5	頁岩		
352	調査区内	199	4	頁岩		
796	B区C-6	199	1	頁岩		
799	B区C-6	199	3	輝石安山岩	新第三紀	
1061	B区D-8			頁岩		
1077	B区SZ-31			輝石安山岩	新第三紀	
1176	B区	199	7	頁岩		
1251	B区			砂岩		

表7. 岩石肉眼鑑定結果（打製石斧）

通し番号	出土位置	図	番号	石材	備考	特記
78	A区			頁岩		
80	調査区内			黒青石ホルンフェルス		
88	A区C			ホルンフェルス		
501	B区D-4			黒青石ホルンフェルス		
948	B区C-8			黒青石ホルンフェルス		
47	B区SK-63			デイサイト質凝灰岩		
10	B区SK-96			ホルンフェルス		報文中は小礫地として記載
17	B区SK-96			黒青石ホルンフェルス		報文中は小礫地として記載
101	C区SK-8			黒青石ホルンフェルス		報文中は石材として記載
365	B区SZ-41	179	24	黒青石ホルンフェルス		
390	B区SZ-41			黒青石ホルンフェルス		
514	C区SK-133	120	2	砂岩		
519	C区SK-124			黒青石ホルンフェルス		
539	B区B-4			黒青石ホルンフェルス		報文中は礫として記載
752	B区C-6			シルト岩		
19'	B区SK-110	110	1	黒青石ホルンフェルス		

表8. 岩石肉眼鑑定結果（礫石）

通し番号	出土位置	図	番号	石材	備考	特記
2	A区SD-49	158	3	粘板岩		
484	C区P-79			砂岩	新第三紀	報文中は小礫地として記載
507	C区SK-4			輝石安山岩		報文中は礫石部として記載
540	C区SK-124	83	15	頁岩		報文中は礫石部として記載
672	調査区内			頁岩	ヤケ	
965	C区D-10			頁岩		

表9. 岩石肉眼鑑定結果（石棒）

通し番号	出土位置	図	番号	石材	時期	特記
31	A区SK-50			デイサイト質凝灰岩	新第三紀	報文中に小礫として記載
32	A区SK-50			デイサイト質凝灰岩	新第三紀	報文中に小礫として記載
65	A区			ドレライト		
1327	C区SK-18	99	2	緑色片岩	ヤケ	

表10. 岩石肉眼鑑定結果 (剥片)

剥片番号	出土位置	図	番号	石材	時期	特記
6	B区			黒石英		
9	B区SK-36			チャート		
45	調査区内			頁岩		
62	C区D-10			ホルンフェルス		
144	B区SK-112			チャート		
185	B区SK-42			チャート		
209	B区P-164			チャート		
239	B区SK-42			チャート		
304	B区SZ-41			圧質頁岩		
352	B区SZ-41			チャート		
366	B区SZ-41			圧質頁岩		
369	B区SZ-41			ホルンフェルス		備文中は小礫塊として記載
392	B区SZ-41			チャート		
396	B区SZ-41			チャート		
414	B区SK-110			チャート		
422	C区SK-71			頁岩		備文中は礫石器として記載
423	C区SK-71			頁岩		備文中は礫石器として記載
424	C区SK-71			頁岩		備文中は小礫塊として記載
425	C区SK-71			頁岩		備文中は小礫塊として記載
458	B区B-5			泥質チャート		
477	B区SZ-41			炭質泥炭岩		
478	B区SZ-41			赤玉石		
617	B区C-5			泥質チャート		
618	B区C-5			チャート		
619	B区C-5			泥質チャート		
620	B区C-5			泥質チャート		
621	B区C-5			泥質チャート		
622	B区C-5			玉髓		
623	B区C-5			泥質チャート		
624	B区C-5			チャート		
625	B区C-5			チャート		
627	B区C-5			赤玉石		
628	B区C-5			赤玉石		
629	B区C-5			玉髓		
669	C区SK-159			ホルンフェルス		
680	B区C-5			赤玉石		
681	B区C-5			黒石英		
682	B区			玉髓		
687	B区C-5			頁岩		
696	B区C-5			泥質チャート		
697	B区C-5			チャート		
698	B区C-5			チャート		
699	B区C-5			チャート		
700	B区C-5			チャート		
701	B区C-5			泥質チャート		
702	B区C-5			チャート		
703	B区C			赤玉石		
720	B区C-5			赤玉石		
753	B区C-6			チャート		
754	B区C-6			チャート		
755	B区C-6			チャート		
756	B区C-6			チャート		
757	B区C-6			頁岩		
758	B区C-6			頁岩		
759	B区C-6			頁岩		
760	B区C-6			頁岩		
761	B区C-6			チャート		
763	B区C-6			玉髓(炭紋岩質)		
764	B区C-6			チャート		
830	B区C-7			玉髓		
831	B区C-7			チャート		
832	B区C-7			チャート		
879	B区C-7			泥質チャート		
880	B区C-7			赤玉石		
1114	B区			チャート		
1115	B区			チャート		
1116	B区			玉髓		
1136	B区		8	頁岩		
1227	C区SK-33			チャート		

表11. 石質組成 (磨石)

石質	点数
黒雲母角閃石花崗岩	2
ドレナイト	3
閃緑斑岩	1
石英斑岩	1
花崗斑岩	1
玄武岩(新第三紀)	1
玄武岩質安山岩(新第三紀)	1
多孔質輝石安山岩	9
安山岩(新第三紀)	3
安山岩(捕獲岩含有)	1
安山岩	5
輝石安山岩(新第三紀)	22
輝石安山岩(捕獲岩含有)	3
輝石安山岩	91
石英含有輝石安山岩(新第三紀)	4
石英含有輝石安山岩	3
無磁晶質安山岩(新第三紀)	2
輝石アゼイ卜(新第三紀)	2
輝石アゼイ卜	1
ダイヤ卜(新第三紀)	14
ダイヤ卜質火山礫凝灰岩	2
ダイヤ卜質凝灰岩(新第三紀)	2
ダイヤ卜質凝灰岩	1
凝灰岩(新第三紀)	1
凝灰岩流紋岩(新第三紀)	1
砂岩	3
頁岩	1
合計	183

表13. 石材組成 (白い礫)

石質	点数
ダイヤ卜質凝灰岩(白濁)	40
砂質凝灰岩(新第三紀)	2
凝灰岩流紋岩(新第三紀)	3
流紋岩(新第三紀)	38
珪化木	1
合計	84

表14. 石質組成 (石皿)

石質	点数
石英閃緑岩	1
角閃石黒雲母花崗閃緑岩	1
無閃緑岩	1
ドレナイト	4
閃緑斑岩(新第三紀)	3
玄武岩質安山岩(新第三紀)	1
玄武岩質安山岩	1
輝石安山岩(新第三紀)	10
輝石安山岩(捕獲岩含有)	1
輝石安山岩	39
多孔質輝石安山岩	15
多孔質輝石安山岩	2
石英含有輝石安山岩	3
輝石アゼイ卜(新第三紀)	1
ダイヤ卜	1
火山礫凝灰岩(新第三紀)	1
凝灰岩	2
砂岩(新第三紀)	2
頁岩	1
チャート	1
蘆青石ホルンフェルス	1
合計	93

表12. 石質組成 (礫)

石質	点数
黒雲母角閃石花崗岩(捕獲岩含有)	1
黒雲母角閃石花崗岩	3
角閃石 黒雲母花崗閃緑岩	1
石英閃緑岩	1
無閃緑岩	1
ドレナイト	6
〇山岩	1
閃緑斑岩(新第三紀)	1
閃緑斑岩	2
花崗斑岩	1
石英斑岩(捕獲岩含有)	1
石英斑岩	2
玄武岩質安山岩	2
スコリア質安山岩	1
輝石安山岩(新第三紀)	10
輝石安山岩(捕獲岩含有)	1
輝石安山岩	24
石英含有輝石安山岩	4
安山岩(捕獲岩含有)	2
安山岩	1
多孔質輝石安山岩	3
無磁晶質安山岩(新第三紀)	1
無磁晶質安山岩	2
輝石アゼイ卜(新第三紀)	7
輝石アゼイ卜(捕獲岩含有)	1
輝石アゼイ卜	30
ダイヤ卜(新第三紀)	1
多孔隙流紋岩	1
流紋岩	15
燐礫石	1
ダイヤ卜質火山礫凝灰岩(新第三紀)	1
ダイヤ卜質火山礫凝灰岩	1
ダイヤ卜質凝灰岩	2
ダイヤ卜質凝灰岩(新第三紀)	2
ダイヤ卜質凝灰岩	1
流紋岩質凝灰岩(古期)	1
流紋岩質凝灰岩	1
流紋岩質凝結凝灰岩	2
節結凝灰岩(古期)	2
火山礫凝灰岩(新第三紀)	2
火山礫凝灰岩(古期)	1
凝灰質花崗岩	1
凝灰岩(新第三紀)	1
凝灰砂岩	2
砂岩	16
砂岩(新第三紀)	5
流紋砂岩	1
頁岩	13
シルト岩	1
珪質チャート	2
チャート	9
蘆青石ホルンフェルス	4
粘板岩	4
黒色片岩	1
トレマツ閃石岩	1
珪化アゼイ卜	1
珪化岩	2
珪化流紋岩	2
実質アゼイ卜	2
実質安山岩	1
実質凝灰岩(新第三紀)	1
実質凝灰岩	2
燐質流紋岩	5
赤玉石	3
合計	220

表15. 石材組成 (剥片石器)

石質	点数
輝石安山岩(新第三紀)	2
流紋岩	1
頁岩(新第三紀)	3
頁岩	1
珪質頁岩(良質)	1
チャート	7
蘆青石ホルンフェルス	1
玉髄	2
赤玉石	2
合計	20

表16. 石質組成 (石種)

石質	点数
石英斑岩	1
輝石安山岩	1
輝石安山岩(新第三紀)	2
多孔質輝石安山岩	1
砂岩	1
頁岩	5
黒石英	1
点数	12

表17. 石質組成 (打製石斧)

石質	点数
ダイヤ卜質凝灰岩	1
砂岩	1
頁岩	1
シルト岩	1
蘆青石ホルンフェルス	10
ホルンフェルス	2
合計	16

表18. 石質組成 (剥片)

石質	点数
頁岩	11
珪質頁岩	1
珪質頁岩(新第三紀)	1
流紋チャート	9
チャート	28
ホルンフェルス	3
燐質流紋岩	1
赤玉石	7
玉髄(流紋岩質)	1
玉髄	5
黒石英	2
合計	69

表19. 石質組成 (剥片)

石質	点数
頁岩	11
珪質頁岩	1
珪質頁岩(新第三紀)	1
流紋チャート	9
チャート	28
ホルンフェルス	3
燐質流紋岩	1
赤玉石	7
玉髄(流紋岩質)	1
玉髄	5
黒石英	2
合計	69

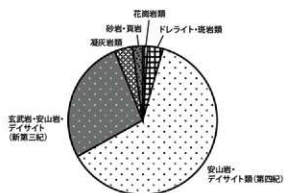


図1. 石材組成 (磨石)

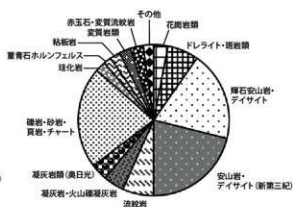


図2. 石材組成 (槌)

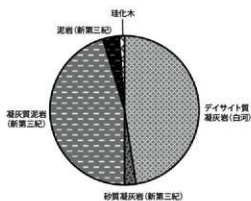


図3. 石材組成 (白砥)

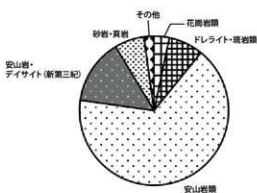


図4. 石材組成 (石皿)

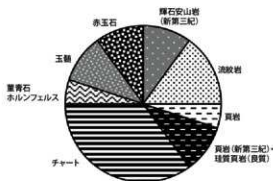


図5. 石材組成 (石鐵)

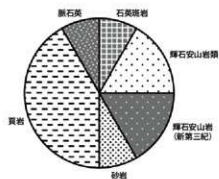


図6. 石材組成 (石種)

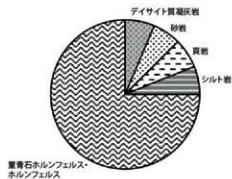


図7. 石材組成 (打斧)

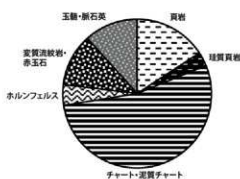
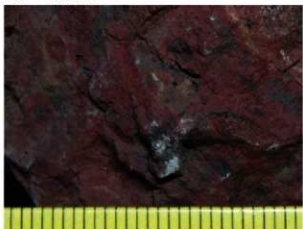


図8. 石材組成 (剃片)

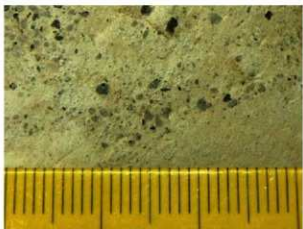
図版1 石材 (1)



1. 礫 1114 変質流紋岩 (赤玉)



2. 礫 170 トレモラ閃石岩



3. 白い礫 486 デイサイト質凝灰岩 (白河・更新世火砕流堆積物)



4. 白い礫 1023 珪化木



5. 石皿 89 角閃石黒雲母花崗閃緑岩



6. 石皿 737 ドレライト

図版2 石材 (2)



7. 石皿 400 デイサイト



8. 石皿 1071 珪質頁岩



9. 石皿 1226 玉髓



10. 石棒 1329 黒色片岩

写真図版



遺跡遠景 湯津上小学校・遺跡推定範囲を臨む（南東上空）



調査区全景（北上空から）



A区全景（西上空から）



B区全景（西上空から）



C区全景（西上空から）



A区発掘（北から）



B区発掘（北から）



C区発掘（南から）



SI-57 全景（南東から）



SI-85 全景（南東から）



SI-85 遺物出土状況（北西から）



SI-111・154 土層断面（西から）



SI-111 遺物出土状況（西から）



SI-111 石囲炉周辺遺物出土状況 (東から)



SI-111 石囲炉 (西から)



SI-111 石囲炉半載状況 (北から)



SI-111 石囲炉完掘 (北西から)



SK-04 全景 (東から)



SK-04 土層断面 (西から)



SK-04 遺物出土状況 (北西から)



SK-05 全景 (南から)



SK-06 全景 (北から)



SK-06 遺物出土状況 (北から)



SK-05・06 重複部遺物出土状況 (北西から)



SK-06 遺物出土状況 (北から)



SK-06・07 全景 (東から)



SK-08 全景 (南東から)



SK-08 遺物出土状況 (東から)



SK-08 遺物出土状況 (南から)



SK-08 遺物出土状況 (北東から)



SK-17 全景 (南から)



SK-17 遺物出土状況 (南西から)



SK-16 全景 (西から)



SK-16 遺物出土状況 (東から)



SK-16 遺物出土状況 (南西から)



SK-20 全景 (南東から)



SK-50 全景 (南東から)



SK-71 全景 (西から)



SK-71 遺物出土状況 (南東から)



SK-73・185 全景 (東から)



SK-73 遺物出土状況 (西から)



SK-74・75 全景 (東から)



SK-74・75 遺物出土状況 (北西から)



SK-74 遺物出土状況 (南から)



SK-75 土層断面 (南東から)



SK-80 遺物出土状況（東から）



SK-82 全景・S-179 確認状況（西から）



SK-99・133 全景（東から）



SK-105 土層断面（西から）



SK-103・106・156・227・286・SD-64 全景（北西から）



SK-106 遺物出土状況（南東から）



SK-121 挟り込み部（東から）



SK-151 全景（南西から）



SK-153 全景 (北西から)



SK-151 土層断面 (西から)



SK-153 土層断面 (北から)



SK-181・183・SZ-03 近景 (西から)



SK-181 遺物出土状況 (北から)



SK-63・294 遺物出土状況 (南西から)



SK-294 遺物出土状況 (西から)



SK-63 遺物出土状況 (東から)



SK-18 遺物出土状況 (東から)



SK-18 遺物出土状況 (北西から)



SK-19・102 遺物出土状況 (北東から)



SK-36 土層断面 (南から)



SK-47 遺物出土状況 (北東から)



SK-52 全景 (南から)



SK-87 遺物出土状況 (南東から)



SK-135 全景 (西から)



SK-131 全景 (東から)



SK-131 土層断面 (北西から)



SK-160 全景 (北から)



SK-161 全景 (南東から)



SK-161 土層断面 (南から)



SK-162 全景 (東から)



SD-49 全景 (西から)



SD-49 土層断面 (西から)



SD-01 全景 (北西から)



SD-64 全景 (西から)



SD-83 遺物出土状況 (西から)



SD-83 周辺埴輪片出土状況 (北西から)



S-163 遺物出土状況 (西から)



S-179 遺物出土状況 (南東から)



S-179 遺物出土状況 (北西から)



調査区内にて



SZ-03 近景 (西から)



SZ-03 遺物出土状況 (南東から)



SZ-03 挟り込み部 (南西から)



SZ-26 近景 (北西から)



SZ-26 推定形状 (北西から)



SZ-26 周溝北辺 (西から)



SZ-26 周溝南辺 (西から)



SZ-26 内 S-81 全景 (北東から)



SZ-26内 S-81 土層断面 (東から)



SZ-26内 S-81 土層断面 (南東から)



SZ-30 近景 (北西から)



SZ-30 推定形状 (北西から)



SZ-30内 S-21 近景 (北西から)



SZ-30内 SI-21 遺物出土状況 (南東から)



SZ-31・SK-32・33 土層断面 (北から)



SZ-31 土層断面 (東から)



SZ-31 内 S-35 全景 (西から)



SZ-31 内 S-35 東壁土層断面 (西から)



SZ-31 内 S-35 東壁土層断面 (西から)



SZ-31 内 S-35 西壁土層断面 (東から)



SZ-31 内 S-35 棺体確認状況 (西から)



SZ-31 内 S-35 棺体土層断面 (東から)



SZ-31 内 S-35 棺体土層断面 (南から)



SZ-31 内 S-35 鉄刀・鉄鏝出土状況 (西から)



SZ-31 内 S-35 鉄刀・鉄鏝出土状況（南から）



SZ-31 内 S-35 鉄刀・鉄鏝出土状況（南東から）



SZ-31 内 S-35 鉄刀出土状況（南東から）



SZ-31 内 S-35 鉄鏝出土状況（南西から）



SZ-31 内 S-95 全景（東から）



SZ-31 内 S-95 土層断面（東から）



SZ-31 内 S-35・95 全景（北西から）



SZ-41 近景（北西から）



SZ-41 周溝北辺 (西から)



SZ-41 周溝南辺 (西から)



SK-184 土層断面 (東から)



湯津上小第1号トレンチ (西から)



湯津上小第2トレンチ (南から)



湯津上小第2号トレンチ内 SK-1・2 (西から)



岩舟沢近景段丘崖部 (東から)



岩舟沢千勝神社付近 (南東から)



SI-111 出土遺物
No. 1



展開図



SI-111 出土遺物
No. 12



展開図



SK-6 出土遺物
No. 1



展開図



SK-6 出土遺物
No. 5



展開図



展開図



SK-74 出土遺物
No. 10



展開図



S-179 出土遺物
No. 1



SK-106 出土遺物
No. 1



展開図



SK-106 出土遺物
No. 2



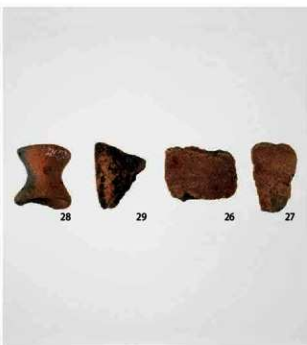
展開図







第 18 号土坑出土遺物



第 73 号土坑出土遺物



第 24 群 1

遺構外出土縄文土器



不明土製品



土製円盤



腕輪・環状土製品



打製石斧





石皿



碟石器

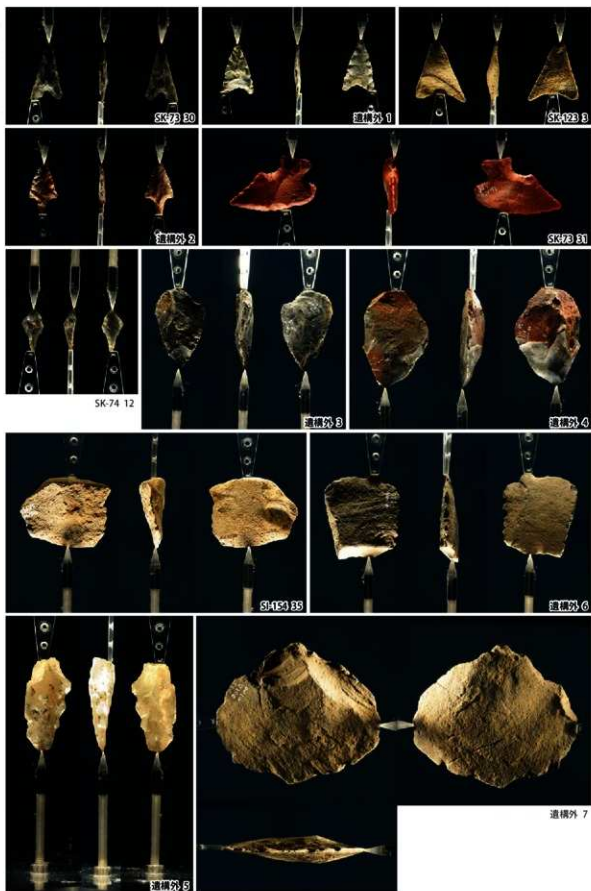


石錘



石棒

遺構外出土剥片



剥片石器・遺構外出土剥片



第 31 号古墳・埋葬施設 (S-35) 出土 鉄口・木質部・鉄鏃



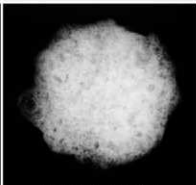
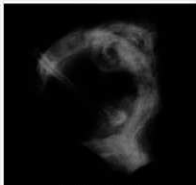
SZ-26 周溝部 21



第 26 号古墳周溝出土 鉄製品付着礫



遺構外出土 埴輪片



遺構外出土 石製紡錘車

遺構外出土 髷

遺構外出土 椀形鉄滓



現地調査参加者



整理・報告書作成作業参加者

報告書抄録

ふりがな	いわふねだいいせき
書名	岩舟台遺跡
副書名	快適で安全な道づくり事業費（補助）一般国道 294 号湯津上南工区に伴う発掘調査
巻次	
シリーズ名	栃木県埋蔵文化財調査報告
シリーズ番号	第 378 集
編著者名	篠原浩恵
編集機関	公益財団法人とちぎ未来づくり財団 埋蔵文化財センター
所在地	〒329-0418 栃木県下野市葉 474 番地 TEL 0285-44-8441
発行機関	栃木県教育委員会 公益財団法人とちぎ未来づくり財団
発行年月日	西暦 2016年3月28日（平成28年3月28日）

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コ ー ド 市町村	遺跡番号	北 緯 ° ' "	東 経 ° ' "	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
いわふねだいいせき 岩舟台遺跡	とちぎ県 大田原市 湯津上地内	田沼津上村 44	1155 旧 535 2763	36° 49' 29"	140° 7' 22"	20150801～ 20151130 20160601～ 20170330	1,230	道路整備事業

所収遺跡名	種 別	主な時代	主 な 遺 構	主 な 遺 物	特記事項	
岩舟台遺跡	集 落 跡 古 墳	縄 文 時 代 古 墳 時 代	住居跡 袋状土坑 土坑 小穴 埋設土器 溝状遺構 古墳・埋葬施設 性格不明遺構	6 38 64 73 2 5 6 1	縄文土器・石器・礫・ 粗製土器・石製紡錘車・ 円筒埴輪片・鉄刀・ 鉄鏃 等	縄文時代の 集落跡 古墳群

要 約	<p>岩舟台遺跡は那珂川の西岸に位置する。縄文時代の集落跡、岩舟台古墳群として大田原市指定の文化財となっている。今回の調査では袋状土坑を複数確認した。これまでの調査の成果から集落跡の土坑エリアに相当すると思われる。出土遺物は前期～後期後葉までの縄文土器、剥片石器、礫石器等が出土する。古墳は調査区面積から全容は確認し得なかったが、岩舟台古墳群を構成する未確認の古墳とみられる。埋葬主体は割竹形木棺或いは舟形木棺を確認した。このうちの1基からは鉄刀・束状の鉄鏃が出土した。</p>
-----	---

栃木県埋蔵文化財調査報告第 378 集

岩舟台遺跡

— 快速で安全な道づくり事業費(補助)— 一般国道 294 号湖津上南工区に伴う発掘調査—

発行 栃木県教育委員会

宇都宮市堀田 1-1-20

T E L 028 (623) 3425

公益財団法人とちぎ未来づくり財団

宇都宮市本町 1-8

T E L 028 (643) 1011

編集 公益財団法人とちぎ未来づくり財団

埋蔵文化財センター

下野市紫 474 番地

T E L 0285 (44) 8441

発行日 平成 28 年 3 月 28 日発行

印刷 株式会社 松井ビ・テ・オ印刷
